

奇譚クラブ

■ 新しい風俗文献誌 ■

1月号



'69
1

奇譚クラブ

昭和四十四年一月号

待望の特集遂に実現!

団鬼六作・長篇羞恥責小説

前篇続篇合併 花と蛇

好評のS文学集大成

絶世の美女財閥遠藤家の令夫人静子が悪鬼たちの手によって誘拐される冒頭のシーンから美貌の探偵助手京子が単身敵地にのり込んで捕獲されるに至る前篇(38年8月号より連載)の発端より暴力団の本拠に妙齡の花恥しき美女が次々と略取され、そこに展開される数々の汚辱と羞恥責の饗宴を団先生の流暢な筆で描き尽された続篇(39年11月号より41年12月号まで)に至るまで一挙に登載。堂々四百数十頁に亘るサディズム文学の傑作を贈ります。この一冊によって「花と蛇」の書き出しから全部通して読むことが出来ます。四十年に亘って本誌に連載しSファンの熱狂的な絶讃を浴びた小説「花と蛇」を是非お求め下さい。

団鬼六作「花と蛇」

収録内容見出し一覧

前篇

- 第一章 発端 (静子令夫人誘拐された令夫人送られた着衣)
- 第二章 陥穽 (二度の嫌がらせ)
- 第三章 美人探偵 (落花紛々)
- 第四章 浣腸図 (強制屈伏)
- 第五章 救援者 (羞恥地獄観)
- 第六章 救援の失敗 (逆転)

りもの

- 第七章 好餌 (京子の屈伏淫獣の餌)
- 第八章 悪魔の哄笑 (毒牙は迫る)
- 第九章 地下室 (悪鬼の饗宴)
- 第十章 翻弄 (屈辱と羞恥)
- 第十一章 蛇の執念 (裸踊り)

- 第十二章 姉妹危し (屈辱の狼ぐつわ)
- 第十三章 調教師 (遂に京子も)
- 第十四章 美津子受難 (二人の美女)
- 第十五章 結末 (美津子の屈伏)

- 第十六章 落花無残の修羅場
- 第十七章 淫らな美女の調教
- 第十八章 すすまじいシヨ
- 第十九章 汚水にまみれた宝
- 第二十章 華々しき美女の屈
- 第二十一章 対峙する美女と
- 第二十二章 あくどい陥穽
- 第二十三章 羞恥図絵の展開

- 第一章 密室の秘密シヨ
- 第二章 脱走の失敗 (美津子の脱走)
- 第三章 華やかな饗宴 (悪魔の二次会)
- 第四章 地獄屋敷へ新顔 (新たな獲物)
- 第五章 翻弄されるカップル (美少年と美少女)
- 第六章 一千万円の身代金 (正気づいた小夜子)
- 第七章 身代金奪取の失敗 (小夜子の受難)
- 第八章 涙の宣誓文 (美女と木馬)
- 第九章 恐怖の逆転劇 (悪魔の相談)

- 第十章 奇妙な三々九度 (鬼女の嬌声)
- 第十一章 飼育される白い動物 (美しき敗北者)
- 第十二章 悪魔と悪女の悪業 (恐ろしい仕事)
- 第十三章 屈辱の地獄図絵 (猫とねずみ)
- 第十四章 逃走の恐怖と失敗 (の結末)
- 第十五章 悪魔達の残忍な所業 (朝の酒)
- 第十六章 落花無残の修羅場 (白いコンビー)
- 第十七章 淫らな美女の調教 (嵐の後)
- 第十八章 すすまじいシヨ (の展開)
- 第十九章 汚水にまみれた宝 (石)
- 第二十章 華々しき美女の屈 (伏)
- 第二十一章 対峙する美女と (美女)
- 第二十二章 あくどい陥穽 (修羅図)
- 第二十三章 羞恥図絵の展開 (復讐の生贄)

直接お申込み乞う

定価五〇〇円

略号「花特」

限定版
写真集

△美しき縛しめ▽ 第七集

山原清子
妖艶緊縛

刺青の魅力を探ぐる 写真集

頒価一部 一〇〇〇円（〒共） 略号△美7▽

最近撮影の力作 未公開の秘蔵写真集

刺青の女王Ⅱ山原清子の魅力の隅から隅までを抉ぐり出し、その美しさを最高度に発揮した強烈な刺青女体緊縛フォト結集版（思わず息をのむ凄じポーズ満載）

限定版
写真集

△美しき縛しめ▽ 第八集

大塚啓子・鈴木晃子・山原清子

女斗と緊縛競艶写真特集

一部 一〇〇〇円 略号「美8」

「女性対女性」の激しい女斗美の躍動！

女性が女性を縛る緊縛プレイの写真化動きのある相互縛り場面の美しい展開◎フアンの要望に依えて特に作成した女性対女性の女斗美、女斗場面並に女性同志の緊縛場面を若々しい三人の女性によって力いっぱい演技してもらった躍動的フォト集。

限定版
写真集

△美しき縛しめ▽ 第九集

「女性刑罰拷問特集」△西洋篇▽

革具に拘束される女

媚態七十二葉

頒価一〇〇〇円（送共） 略号△美9▽

モデルⅡ清楚な美木乃々子Ⅱグラマーで美貌の大塚啓子真白で肉づきのよい女体が黒光りのする革具或は褐色の牛革具によって嚴重に縛しめられる、さまざまな姿態を七十二葉の華麗なフォトによってグラビア写真集として、ここに提供します。

△女性刑罰拷問特集▽（日本篇）「略号美5」は売切。本集も残部少し。すぐお申込みを。御申込先はいずれも大阪阿倍野局私書函第十四号箕田京二へー。

限定版グラビア印刷M結集アルバム

Mフォト・「女王様に飼育される日々」

頒価一部 一〇五〇円（送50円） 略号「M特」

◎全頁七十三葉のM傾向ばかりのグラビア写真

待望久しくして初めて刊行されたM派ばかりの限定版M写真集です。今までMモデル募集に応募してきたM男性モデルを網羅し、それらのM男性が色々の女王様に奉仕し飼育される生態のかずかずを豊富な写真資料によってマニアの

方に提供するグラビア写真集の結集版です。発刊以来数カ月、すでに残りが少なくなりました。売切れになりますと絶対に入手は出来ませんし再版はいたしません。未入手の方は、どうか今のうちに是非お申込み願います。

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Akatsukisyupan

Osaka Japan



定価三五〇円

1月号 ¥ 350

「最新版」 美貌女体緊縛写真コレクト集

X組百態 大手札型印画紙 (9×13 ㎝) 極鮮明焼付

各組 一組一枚 (送料共)

四組四枚 五〇〇円
十組十枚 一〇〇〇円
二十組二十枚 一八〇〇円
五十組五十枚 四〇〇〇円
百組百枚 七〇〇〇円

郵便番号 545-91

最近撮影の新しいモデルの緊縛写真の中で一粒選りの美しいものばかりを集めました。各組一枚です。お好きなものをお求め下さい。御注文の際の御指定はX組の何番とお書き願います。

☆ 正面強烈亀甲縛 (大島 照代)
1 美貌は鞭に泣く (関谷富佐子)
2 襲う影に慄く (佐々木真弓)
3 弾む裸身に縄目 (佐々木真弓)
4 柱縛りで鞭打ち (関谷富佐子)
5 縛られて困るわ (金原奈加子)
6 私を襲わないで (左近麻里子)
7 縛られて嬉しい (中河 恵子)
8 麗わしの縛女体 (中河 恵子)
9 蒲団の上に狂う (関谷富佐子)
10 豊満女体の縄目 (大島 照代)
11

12 二つ折りの裸身 (川越美佐子)
13 痛打に哭く美貌 (関谷富佐子)
14 長身の脚を伸す (佐々木真弓)
15 若肌は縄に美し (長井葉津子)
16 恥らいの女体美 (中河 恵子)
17 何故私を縛るの (金原奈加子)
18 感泣する胴縛り (ローズ秋山)
19 猿ぐつわの悦虐 (関谷富佐子)
20 荷造り縛りの女 (中河 恵子)
21 足指はくの字に (佐々木真弓)
22 麻縄の柔肌責め (金原奈加子)
23 美しき亀甲縛り (左近麻里子)
24 柱縛りの隙間見 (長井葉津子)
25 緊縛全裸の極美 (左近麻里子)
26 海老責めの苦悶 (佐々木真弓)
27 全裸の縄は輝く (佐々木真弓)
28 猿轡と縄に泣く (川越美佐子)
29 縄に喘いだ童顔 (長井葉津子)
30 出臍を晒す縛り (佐々木真弓)
31 後手吊りの全裸 (長井葉津子)
32 首膝縄にあえぐ (長井葉津子)
33 大の字で晒す裸 (関谷富佐子)
34 全裸緊縛の哀愁 (佐々木真弓)
35 高手小手の全裸 (佐々木真弓)
36 真迫の縛プレイ (ローズ秋山)
37 豊満な裸身縛り (左近麻里子)

38 竹棒責めに悩む (大島 照代)
39 亀甲縛りで寝る (左近麻里子)
40 縄目に喘ぐ表情 (中河 恵子)
41 開股縛りの正面 (中河 恵子)
42 猿轡に喘ぐ緊縛 (左近麻里子)
43 縛りの肌を見て (金原奈加子)
44 私は縛りが好き (金原奈加子)
45 強烈縛りを味う (金原奈加子)
46 麗身を横たえて (左近麻里子)
47 二つ折に弾む胸 (佐々木真弓)
48 柔肌に縄は激し (長井葉津子)
49 柔肌に痛む麻縄 (左近麻里子)
50 全裸の女体引廻 (中河 恵子)
51 開股縛りを諦観 (左近麻里子)
52 突き出した尻 (中河 恵子)
53 あどけなき緊縛 (金原奈加子)
54 首縄股間縛の女 (長井葉津子)
55 強烈後手で括る (佐々木真弓)
56 恥しい縛り初め (金原奈加子)
57 海老縛りで悶ゆ (関谷富佐子)
58 蹴られる緊縛女 (長井葉津子)
59 豆絞りの猿轡で (金原奈加子)
60 もう虐めないで (金原奈加子)
61 畳に転す股間縛 (金原奈加子)
62 女体は縄に映ゆ (左近麻里子)
63 全裸の縛を見て (長井葉津子)
64 答は柔肌を乱打 (関谷富佐子)
65 臀部に答は炸裂 (関谷富佐子)
66 この裸身を捧ぐ (佐々木真弓)
67 諦観の縛り表情 (長井葉津子)
68 足吊りで晒す肌 (長井葉津子)

69 美体は縄に映る (中河 恵子)
70 逞ましき臀部晒 (左近麻里子)
71 両手吊りに喘ぐ (長井葉津子)
72 左近麻里子の裸 (左近麻里子)
73 開股縛りの羞恥 (中河 恵子)
74 捧げられる女体 (中河 恵子)
75 鉄砲責めの女体 (左近麻里子)
76 麗わしの肌に縄 (佐々木真弓)
77 後手縛りの連続 (ローズ秋山)
78 開股の股間縛り (大島 照代)
79 強烈な縄目の女 (川越美佐子)
80 逆エビ責め地獄 (ローズ秋山)
81 豊麗な裸身の美 (関谷富佐子)
82 羞らいの流し目 (佐々木真弓)
83 肌に喰い込む縄 (長井葉津子)
84 胴締縛りと猿轡 (長井葉津子)
85 投げ出された裸 (金原奈加子)
86 正面の亀甲縛り (左近麻里子)
87 開股縛りの女体 (左近麻里子)
88 後手縛りの全裸 (中河 恵子)
89 柱に晒す強烈縛 (長井葉津子)
90 羞恥の脚挙げ姿 (佐々木真弓)
91 豊かな乳房誇示 (佐々木真弓)
92 美しい女の縛り (佐々木真弓)
93 股間縛りに羞う (長井葉津子)
94 ホステスの緊縛 (佐々木真弓)
95 椅子坐開股縛り (中河 恵子)
96 無防備な両手吊 (関谷富佐子)
97 息づまる猿轡 (川越美佐子)
98 人身御供の乙女 (長井葉津子)
99 両手吊で晒す肌 (金原奈加子)
100 爪先立つ強烈縛 (ローズ秋山)



奇譚クラブ 第三卷 第二号・通刊第二四八号

(昭和四十四年) 一月号 目次

〈本 文〉

本誌自粛の徹底……………	編集部……………	(6)
私の意見『SM談義』……………	岩下 久光……………	(10)
ヤセ犬の遠吠え「疑問」……………	系振 昇……………	(18)
連載小説 大噴火(4)……………	千葉 青鬼……………	(20)
ショート・ショートある夜の出来ごと……………	古賀 正道……………	(28)
珍書探訪「性語辞典について」……………	斎藤 夜居……………	(30)
告白 妄想と現実……………	星野 薫……………	(35)
連載時代伝奇小説 緋縮緬地獄(9)……………	白鳥 大蔵……………	(38)
私のプレイ「ハイレイン」……………	梅川 幸子……………	(48)
〈徳川女刑罰史〉を観て「辻村隆さまへ」……………	岡田 咲子……………	(50)
切腹研究夜話 愛と死の映像……………	中康 弘通……………	(55)
漫談千一夜物語「薔薇と蜜蜂」……………	田代 俊夫……………	(60)
原作「花と蛇」II調教会議……………	S・S・T……………	(68)
「徳川女刑罰史」に思う……………	千草 忠夫……………	(74)
緊縛美雑感 鼻へのプレイ……………	鈴木 三三……………	(79)

秋の夜の繰り言……………美津木 守

サロン楽我記(第五十五回)……………辻村 隆

私の妊娠時プレイ・フォト……………愛知 葉子

妊婦資料に関する苦言……………雨 漏 庵

私のカメラ・ハント「幻想の実現」……………天草 二郎

イメージ画「腰掛け」……………赤 ち ゃ ん

「血紅袋テスト?」……………新井 伸治

コント・テープの声……………桃井 賢三

美女バレードに思う……………呑 氣 放 亭

映画通信 最近の緊縛拷問シーン……………東 山 映 史

サロン展望台「色は匂えど」……………目 出 鯛 三

僕のイメージ画集「蛇」……………室 井 亜 砂 路

菱 縄 の こ と ……早 木 夢 二

編集部だより……………編 集 部

雑感「責め地獄」の波紋……………和 田 平 助

若い女性の服装に思う……………葛 西 六 郎

ショート落語「醜婦の友」……………エ ス ・ ケ イ

短歌「屈 服」……………高 村 初 子

私のお願……………城 山 ほ づ み

映画に想う「拷問」と「SM」……………橋 雅 美

私のイメージ画……………柿 淳 五 郎

「わがいとおしきペット」……………K ・ ハ ギ ノ

「柔と硬と鋭と痛」……………太 田 憲 子

わたし達の記録「当時の感激」……………江 川 乱 走

股 間 下 着 ……九 美 淳

SMマンガ「展覧会」……………大 川 恵 子

私のひとり思うこと……………小 妻 容 子

イメージ画「操り人形セット」……………小 妻 容 子

濡れにぞ濡れし「連投」……………芳 野 眉 美 ……(82)

私見 SMの一般化について……………葛 西 六 郎 ……(89)

SMカメラ・ハント△川口有里子の巻▽

『その悦虐が失神をよぶ』……………辻 村 隆 ……(90)

服装プレイを望む……………無 田 口 一 郎 ……(110)

告白「幻想の墓碑銘」……………武 内 隆 ……(112)

S・C・R・回答欄「性衝動過敏症」について……………弓 削 達 人 ……(118)

一読者よりの希望……………東 関 隠 士 ……(121)

告白の記 華麗な惑溺……………浅 羽 や す し ……(122)

映画化決定作 私本「伊藤晴雨物語」(後篇)……………団 鬼 六 ……(132)

馬化願望 女神アイリーンとR氏……………佐 野 寿 ……(162)

告白 私 の こ と ……藤 村 美 香 ……(169)

連載小説「花と蛇」(続編第四十九回)……………団 鬼 六 ……(172)

女武者決斗シリーズ 女鶴ヶ城……………川 上 米 子 ……(180)

あぶ・らぶす・こんと……………水 沢 登 ……(190)

ゴム衣のマソ娘「女の城」……………菅 原 敏 夫 ……(192)

贗作平家物語・第四回『入道逝去』……………黒 淵 嬰 一 ……(202)

読切りFストーリー「フルーツカクテル」……………香 川 泳 三 ……(212)

読 者 通 信 ……編 集 部 選 ……(252)

(扉カッ ト「美 犬」……………室 井 亜 砂 路)
(目次カッ ト「待 機」……………宇 都 宮 広)

〔最近版〕粒選り麗美女体緊縛力作写真

Z組百態 大手札型印画紙(9×13) 極鮮明焼付

各組 一組一枚(送料共)

四組四枚 五〇〇円
十組十枚 一〇〇〇円
二十組二十枚 一八〇〇円
五十組五十枚 四〇〇〇円
百組百枚 七〇〇〇円

(郵便番号 545-91)

大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号箕田京二宛お申込み下さい。

一枚一枚、いづれも一粒選りの素晴らしい緊縛フォトばかりを集めました。お好みのモデルの、好きなポーズをお選び下さい。

☆

1 鞭打条痕の臀部(関谷富佐子)
2 後手は高く縛る(佐々木真弓)
3 八の字の開股縛(左近麻里子)
4 狂う女体の表情(ローズ秋山)
5 縄に苦しむ長身(川越美佐子)
6 弄ばれる全裸縛(長井葉津子)
7 ゴム衣縛りの極(木村 洋子)
8 白肌輝く股間責(山原 清子)
9 全身縛りを吊る(大塚 啓子)
10 悦虐に悲泣する(関谷富佐子)
11 亀甲股間縛り晒(山原 清子)

12 開股強烈羞恥責(木村 洋子)
13 妊婦の太鼓腹縛(中河 恵子)
14 縛りの好きな顔(一宮百合子)
15 美貌の妊婦緊縛(中河 恵子)
16 縛りの全裸を見て(金原奈加子)
17 憂愁の佳人縛り(左近麻里子)
18 前面を晒す裸像(長井葉津子)
19 亀甲縛りの正面(左近麻里子)
20 後手縛を見せる(川越美佐子)
21 鞭は女体に炸裂(ローズ秋山)
22 逞ましき臀部晒(左近麻里子)
23 真白の柔肌責め(左近麻里子)
24 ムチ責めの果て(安井喜久子)
25 鉄砲逆海老縛り(関谷富佐子)
26 湯責めにあう女(山原 清子)
27 変型高手小手縛(川越美佐子)
28 洋子をいじめて(木村 洋子)
29 緊縛のホステス(佐々木真弓)
30 柔肌に喰込む縄(長井葉津子)
31 均斉のとれた体(佐々木真弓)
32 蠟涙責めの熱演(ローズ秋山)
33 脚吊りで責める(ローズ秋山)
34 片足吊りの狂態(大塚 啓子)
35 猿轡の開股縛り(木村 洋子)
36 股間縛の縄掛け(ローズ秋山)
37 妊婦仰臥猿轡責(中河 恵子)

38 二つ重ねの裸女(佐々木真弓)
39 縛られた洋裁生(長井葉津子)
40 椅子開股羞恥責(左近麻里子)
41 責め抜いた挙句(安井喜久子)
42 黒髪をいたぶる(大塚 啓子)
43 全裸の股間縛り(山原 清子)
44 黒総ゴム衣縛り(木村 洋子)
45 パンティを剥く(大塚 啓子)
46 緊縛に頬赤らむ(一宮百合子)
47 猿轡の妊婦縛り(中河 恵子)
48 全裸高手小手縛(長井葉津子)
49 黒髪をいたぶる(ローズ秋山)
50 後手の厳重縛り(左近麻里子)
51 麗わしの妊婦縛(中河 恵子)
52 炸裂する革ムチ(安井喜久子)
53 剥がされた布片(金原奈加子)
54 浴槽と荒縄の責(山原 清子)
55 髪吊りの操り責(ローズ秋山)
56 高手小手の裸女(左近麻里子)
57 海老縛りに泣く(関谷富佐子)
58 恐怖の滑車吊り(大塚 啓子)
59 悶える全身縛り(一宮百合子)
60 伸びやかな素足(一宮百合子)
61 卓上の人身御供(左近麻里子)
62 皮紐の柔肌責め(中河 恵子)
63 股間縛を羞らう(金原奈加子)
64 宙吊りにもがく(木村 洋子)
65 裸身を晒す表情(金原奈加子)
66 輝く全裸の悶え(関谷富佐子)
67 全裸をもがく女(ローズ秋山)
68 豊満な臀部晒し(佐々木真弓)

69 乳房強調縛猿轡(左近麻里子)
70 媚を撒く縛り女(佐々木真弓)
71 縄のブラジャー(左近麻里子)
72 逆手吊りの鞭打(関谷富佐子)
73 逆エビで責める(ローズ秋山)
74 美しき緊縛立像(関谷富佐子)
75 悶える緊縛全裸(金原奈加子)
76 鞭で責める女体(ローズ秋山)
77 両手吊りで晒す(金原奈加子)
78 豆絞りの猿轡縛(川越美佐子)
79 あどけなき表情(金原奈加子)
80 厳しい縄目の肌(金原奈加子)
81 白肌にむごき縄(左近麻里子)
82 両手大の字吊り(関谷富佐子)
83 首縄縛りの裸女(佐々木真弓)
84 美しき全裸肢体(佐々木真弓)
85 柱に繋がれた女(長井葉津子)
86 尻挙げ海老縛り(安井喜久子)
87 鑑賞用全裸緊縛(川越美佐子)
88 荒縄縛りの刺青(山原 清子)
89 股裂きで責める(ローズ秋山)
90 ドレイ洋子の姿(木村 洋子)
91 後手に縛上げる(ローズ秋山)
92 滑車吊りの裸女(大塚 啓子)
93 若々しき緊縛美(佐々木真弓)
94 S男がいたぶる(佐々木真弓)
95 強烈縛りに喘ぐ(山原 清子)
96 正面全裸柱晒し(長井葉津子)
97 開股縛りに羞う(左近麻里子)
98 白肌に喰込む縄(大塚 啓子)
99 尻立て股間縛り(木村 洋子)
100 悦虐に泣く美女(安井喜久子)

奇 譚 ク ラ ブ

昭和 44 年 1 月 号

(1969年・1月号<第23巻第1号・通刊第248号>)



本誌自粛の徹底

一、本誌は特殊な風俗文献を研究する平和で
 穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象
 として編集しておりますが、青少年の保護
 育成に関する条例には抵触しないよう、十
 分な配慮を今後更に徹底いたします。

一、本誌では従来巻頭を飾っておりましたグ
 ラビア写真並に口絵を全廃し、文中の挿絵
 の削減に努め、読む雑誌としての体裁を順
 次整えて参りましたが、更に挿入写真の減
 少及び見出し、キャッチフレーズの改訂な
 どによって煽情性を排除してゆきます。

一、本文の内容についても、刺戟の強いもの
 は極力掲載しないようにするのは勿論、掲
 載した文章は十二分に検討を加え、いやし
 くも青少年の健全なる育成に支障を与えな
 いよう努力いたします。尚、本誌の発行部
 数は最低限度にとどめ、その増大を企るた
 めの努力はいたしません。



私の意見

M S 談 義

岩 下 久 光

最近の奇クを見るにつけても、色々なことが目につくので、あえて重い筆を再び取った訳です。それだけに前回より更に手きびしく、気分を害されるようなことを言うことになりそうなので、お断りしておきます。

先ず、私が『奇クはSMとしては邪道だ』と言ったら、どうでしょう。おそらく読者の方々から『そんなバカなことがあるものか』と反論が殺到するでしょう。しかし私に言わせれば、かならずしも誤っていないと思うのです。では、なぜだという質問に答えるためには『SMとは何か』と言うことを考えなければなりません。

そこで、一つの問題を考えてみましょう。

『SMとは世間一般の倫理から見ても、本当に排斥されなければならないような背徳的で醜い不潔な感情なのではないでしょうか?』

それに対して編集者や読者は、どう答えるでしょうか。私の見るかぎりでは、どうも考へるともなしにそう考えているらしい。平たく言えば、SMとは要するに社会の必要悪だ。必要には違いないが、やはり悪だ。そういった潜在意識にとりつかれているといった感じを強く受けるのです。少くとも、そういった感情が心の一部にあることは否定できないのではないのでしょうか。私に言わせれば、

それこそSMの邪道の始まりなのです。SMというものは、元来は決して背徳的なものでも不潔なものでもないのです。世にSF、ミステリー、アクションなどという読物があります。これらは人間の中にある、科学的想像や推理、活劇などに対する性質を通して面白さ、美しさ、人間の正体などを追求しているのです。SMもそれと同じように、人間の加虐性、被虐性を通して前記のようなものを追求するものであれば、決して悪いものではないはずです。私の見る限りでは、SMの附属品がそれにとって代り、主客位置転倒してしまっているというのが、現在の状態に思える

のです。我々が普通、SMというと直ぐ浮かぶのは縛り、次に拷問ではないでしょうか。そのため最近ではSM縛り、とか、SM拷問などといったイメージが完成されてはいないでしょうか。しかしSMというものは、決してそんなものではないのです。サドの、『悪徳の栄え』を見ても、あれは善女を踏みつけ、悪女をのさばらせるといって、善良な者を虐げたがる人間の加虐性、逆に悪者に虐げられたがる被虐性を通して、表面は善人を装って悪を排撃しているように見せかけている人間たちに対する痛烈な風刺を行なっている訳けです。これこそサドの本領であり、加虐性を通して人間の美、楽しさ、主張を引きだすことであつたはずで、それが現在では、Sというのは、特に楽しさばかり追求して、ついに本末転倒し、元来S表現の一手段にすぎなかったはずの縛りが、逆にSの本体のごとく考えられ、更にセックスやヌードが加わりグロ化し、Sとは性的興奮を追求することだといわんばかりの風潮が起つてしまっているのです。

SMは決してグロテスクなものではありません。男性対女性ということにおいて関係はあつても、ヌードやセックスなどということ

とは直接の関係はないのです。縛りも拷問も単なるSM表現の手段にすぎず、決してそれ自体がSMではないのです。しかし現在のSMは、その真髄を忘れて邪道に走っているとはいえないでしょうか。

それでは？ と、おそらくこんな質問があるでしょう。

「グロもなく、ヌードもなく、セックスも責めも縛りもないSM読物なんか、あり得るのだろうか？」

私は、この問いに対して、はっきりと『あり得る』と答えることができます。では、どんなものかという点、意外に思うかもしれませんが、最近の映画を例にとると、

『暗くなるまで待って』(Wait until dark)という映画ですが、多分にSMの真髄をついているといえるものです。大の男三人が、盲の美女を虐げるといふ想定自体うまいと思うのですが、何といつても見せ場は、殺し屋とヒロインの盲の美女の一对一の対決の場である。この殺し屋先生、盲の女一匹と見て『ガソリンを撒いて火をつけるぞ』とおどかしたり、柔らかな絹のマフラーで『しめるぞ！』と、首をくすぐってヒロインの恐怖に脅える表情を楽しげに見物するなど、Sまるだしで

ある。しかし、余りいい気になつていて、盲の女のために、ガソリンはかけられるわ、現像液をぶっかけられるわで、ナイフもマッチも取られてしまったのだから、殺し屋の無念さ加減は、大変なものである。そのため、再度、逆転した時の嬉しそうな顔。おもむろにナイフもマッチも取り上げてステッキをヒロインの首に引っかけ、階段から引っぱり降ろす。ヒロインの恐怖の表情。この場面は最高の見せ場だ。「人形をあげますから、このまま帰って……殺さないで……」という必死の言葉に対して、殺し屋先生、すっかり上機嫌で「どうぞ、おとり下さいと言え」と、いたぶる。ヒロインの方は胸のはりさける思いで上を向いて、見えない目を閉じ歯を喰いしばって、辛うじて小声で「おとり下さい」と言う。ところが殺し屋先生、いい気になつて油断していたので再度逆転されてしまう。その無念の形相。重傷の身で「絶対、殺してやるんだ」とヒロインを追っかける。

この映画をみて、私は奇巧のSMは邪道だという考えを、ますます深くしたのです。たしかにこの映画には、縛りもヌードも出てこないし、オードリー・ヘッバーン（ヘップバーン）とは発言しない。HeppburnのPは無声音で

ある」という女優自体、およそセックスやヌードとは正反対の存在で、およそ奇クなどとも無縁の女優のように考え勝ちですが、これを見てみると、どうもその逆のように思えてくる。SMとセックスやヌードは、直接の関係はないということの裏づけのような気がするのです。考えてみると、ヘブーンは、前に『ジャレード』の中で、ウォルター・マクーにピストルをつきつけられた時、ジェームス・コパーンに、電話ボックスに閉じこめられて、マッチの火を押しつけられた時、ジョージ・ケネディに義手を振りあげられた時などの顔は正に最高。西洋人だけに表現がややオーバーではあるが、あの方がよっぽど奇クよりもSMの真髓をついた美だと思うのです。彼女こそ奇クとは違った意味における最大のSM女優ではないでしょうか。それでもわかるように、奇クはSMの概念を誤って、セックスやヌードにおぼれ、ついにはグロテスクな妊婦まで登場させるに及んでは、もうその裏にあるべき真のSMを忘れてしまっているのではないかと言いたいのです。

要するに私の言いたいことの第一は、奇クは真のSMを忘れて、邪道ともいうべきヌードやセックス、妊婦などに狂っているのでは

ないかということでした。最近の号を見ても、とうとう（正に）そこまで落ちたのかと、思うような話などが多すぎるのは、全く情けないことです。第二に、奇クは看板にいつわりがあると言ったら、どうでしょうか。そんなことはあるものかと、反論が続出するでしょう。しかし、これも私は誤っていないと思うのです。巻頭の断り書きには『風俗文献を研究する人を対象とする。読む雑誌である。刺激の強い物はさける』ということ載せていますが、これがそうでないことは、前記においても明らかです。し、読めばわかる通り、奇クに載っている物語や記事が、刺激の強いものでないなどと言えますか。私は、特に読む雑誌であると述べている点を取り上げてみたいのです。前の投書で散々言ったように、奇クに載っているものは『花と蛇』にしる、その他のものもすべて読物ではなくて、写真や画を文字に変えたというだけの誌上シヨイなのです。いくら経っても相変わらず見せ物から脱皮できず、純粋なSM文学はいったいつにならなかったら出てくるのでしょうか。

私は前に、こんなものを載せて見てはと、『女ターザン物、姫剣士物』などを例に挙げましたが、その後とり上げられた様子があり

ませんでした。その理由は大体、見当がつくのです。

「そんな題材は奇クに載せられるような物語にならないではないか」おそらく、こういうことだと思うのです。もし、その通りだったら、私は声を大にして『看板に偽りあり』と言わないわけにはいきません。

ここで奇クに載せるような物語というと、私は『花と蛇』のように、最初から最後まで縛られたり拷問されたり連続、これでもかわせたように続くという話だと思うのです。

しかしこれは、私が前に述べたように、写真を文字に変えたというだけの、全くの誌上ゲテモノ・シヨイにすぎません。これでは読む雑誌だの、文献の研究だの言った看板が、泣こうというものです。何度も言っているように、最初から最後まで、縛りや拷問の連続でなければSMでないなどと言うのは、全くの誤りです。縛りのないSM物語も作ろうと思えばできるのです。単なる表現の手段などよりもその裏にある美や精神の方が、どれほど大事か考えれば直ぐわかることです。『花と蛇』や今度掲載された『緋縮緬地獄』など、その骨組は悪人やゴロツキが美女を誘拐して

閉じこめ、縛って拷問して……ただそれだけの話の筋書きを、よくも長い間、飽きもせず繰り返しているものだ、思わずにはいられません。それに又、その内容たるや、全くひどいものです。『花と蛇』は、上流夫人と令嬢、グレン隊と貧しさからこの道に走ったという、説明つきのズベ公。この両者の対照は、美女と野獣という組み合わせを考えたのでしょうか、これが全くのカラ振り。だいた現在の日本のように、小市民や中産化の発達したところで、上下の角逐ということをスローガンにしている政治家ならとも角、SMの題材として果して適当かどうか。金持の夫人や令嬢と聞いて我々の頭に浮かぶイメージは、本当に青白い美しいおしとやかな……であるかどうか。これが映画のコレクター（白水社から訳がでている）のようにイギリスなら通用します。事実、コレクターはフレディという下の下の階級の者が、自分ではどうしても手の出ない上の階級の娘を熱愛するということがテーマとして生きていた。どんなに金ができても所詮コンプレックスを抜け出せないフレディと、気位が高いと思えるほどのミラレダの、フレディに対する自尊心の強さということが、実にうまく生かされていた。

『花と蛇』は、この点ですでにつまづいていた。静子夫人や小夜子などは、人気スターや歌手にした方が、読む者にはピンときただろう。また、ズベ公たちは歌手やスターのなりそこないや、ライバルにでもした方が生きてきたらと思う。SMの美や精神にうちぬかれていれば、縛りだの拷問は絶対に必要でないのです。こう考えてみれば誌上ショーならとも角、前に述べた題材でいくらかでも物語は書けるのです。例えば、『琴姫七変化』や『月姫峠』のような姫剣士の冒険物語など載せてみてはどうでしょうか。一つの話に一つ以上の割合いで縛りなどの受難場面を登場させ挿画（何も受難場面に限らない。ようするに話の進行を助けるもの）なども入れたら、立派に奇くに載せる物語が出来上ります。

これなど書くのがむずかしければ『琴姫七変化』の松山容子のイメージや設定、話の筋など、盗作にならない程度に借りてきて、改造すればいいはず。一話ごとに受難、捕獲場面や、それに至るまでの筋道、悪人側の設定など考えて作るべきですし、何よりも大事なのは、受難場面以外の所における姫剣士の男のM向きかと思われる潑刺とした活躍でしょう。悪人側としては、やくざや野盗団、陰謀大名や悪徳役人、邪教や南蛮人、海賊など。『霧姫様』では妖怪など実によく考えて作ったのを登場させていたし、捕獲場面などよく使われたのが落し穴（紐を引っばっているのではなく、土間や地面に掘った穴であったのが奇妙に魅力があった）である。受難場面では、縛られた上、すのこで巻かれて海に投げ込まれたところや、琴姫が後手に縛られたままでチャンバラをやる場面など、奇くも少しは見習っては？ と思うようなのがあった。また、捕獲場面ばかりではなく、脱出場面なども考えて工夫をこらすことは勿論のこと、このような話など下手にリアリスチックぶった話にしないで、姫シリーズのように元来、子供向きとも思えるが、大人が見ても非常に楽しめるような年少、年長者を問わず面白くてそれでいてよく工夫をこらした物語にすることです。女ターザン物など、姫物語のようにシリーズにしてもよいけれど、これなどむしろ、創元社から出ている、火星シリーズ、金星シリーズのようなスペース・オペラの手法をとり入れるとよいでしょう。現在のアフリカなどは話の舞台としては適当でないで、宇宙の想像の世界の中で、女ターザンが出てくるものと創造すればよい訳で、

スペース・オペラのように色々の怪物や不思議な国などを登場させ（これなど工夫をこらすと面白い悪役になる）その中における女ターザンの勇壮な冒険ドラマなど、工夫をこらした受難場面などを随所に折り込み、姫物語のように受難場面以外の所における潑刺とした活躍と合わせて書くと、よい物ができるはずです。

その他、時代劇では『女忍者くの一』など余り話題にならないけど、わざとってもらしく敵の手に捕えられ、拷問に屈したように見せかけて、ニセの情報を流すことを秘術としている忍者の話など参考にして、やはりシリーズ物にして一話一話、敵方の様子や拷問のやり方など特徴をいかせればよいのではないでしょうか。漫画『真田剣流』の桔梗の話など、忍者の武者修業的な話にして冒険物語など作ったら面白いでしょう。他に女海賊などは、洋の東西を問わずよいと思うが、たとえば海賊の女首領がSで……なんて話はよいでしょう。映画によく出てくる八幡船のように大洋を舞台にした壮大な冒険物など、どうでしょうか。

現代物では何といってもサーカス物です。しかしサーカスというと時代錯誤的に考えら

れ勝ちなので、やはり想像の中の世界にしてSM的な曲芸や魔術などを売物にしているサーカスの楽屋話的なものでも作るというのではないか。けれども、こういったものは直ぐ悪い親方が少女たちをいじめるという筋書きになるが、それがいけないと思います。

今までの説明でも述べたように、SM物語というのは女の方が潑刺としている人物像でなければ面白くないという法則がある。奇クなど女性側が、ただ責められてヒイヒイいつているだけで、およそ生々としたところが無い。これが話をつまらなくして、女性像を交ぜない薄ペラなものにしている原因で、著しく欠点として目立つ。こういうサーカス物に登場する少女たちは、強制されて芸をするのではなく、むしろそういった仕事を自分の天職と考えて芸に励むといったようなものにした方が面白いし、楽屋の泣き笑いや新しい出し物の研究や練習、内部の人間関係、外の人間との接触や交流などを描いたり、あるいは読者を客席に坐らせ、舞台裏はなしはどうなっているのか？ などと想像をめぐらせながらショーを見せるのもよいと思います。

この想定など、宝塚式にSM女優の養成学校などを創造してもよいし、娼家のようなM

女性を貸す店を創造して、そこにおける人間模様など描いたら面白いでしょう。これなど映画の『昼顔』のような設定を取り入れたらよい。もっと簡単にできるものとしては、江戸川乱歩の原作で最近、三島由紀夫の改作で上演されていた『黒とかげ』など、正に驚くべき傑作であるのに、全く問題にしないとは……。知っての通り、これは美人の女賊が宝石や美術品を盗みためて博物館を造り、更に飽き足らなくなつて、次には美しい人間を誘拐してきてオリに入れ鑑賞したり、水槽に入れてバタバタやるのを眺めたり、さんざん楽しんでから殺してしまう。そして特別な方法で、生きているままそっくりの複製にして、博物館に陳列するという話でした。

これなど手本にもっともよい話だと思う。盗作にならない程度に真似をして話をつくればいい。原本の中には随分、奇ク的な会話もでてくる。たとえば、黒とかげが宝石商の令嬢、早苗に向かって「お嬢さん、あんただけは本当に可哀そうだと思うんだけどね。日本一の宝石商の娘に生まれたのが不運だったと諦めな。その上、あんたは美しすぎたんだ。あたしはね、宝石も好きだけど、宝石なんかよりも、あんたのその美しい身体が欲しくな

ったのよ。決して諦めやしない……」

なんて言う場面がでてくる。奇クも、物語を作るとき、このようなものを考えてしかるべきです。ただいたずらに性的刺戟やヌードのショーと混同しないで、たとえば、『花と蛇』のように、社会からも下品で背徳的として攻撃されるようなものとは、キッパリ訣別しなければならぬ時にきています。

では、キャラクターやSMの服装についてもう一度、書かせていただきます。本年の六月号に、鈴木氏の緊縛美雑感がありました。これなど全く、奇クの読者のSM美に対する最大公約数的な意見ではないでしょうか。私も私なりのキャラクターやスタイルの分類を前に述べましたが、もう一度、補充させていただきます。

まずキャラクターの面では、前述の話のジャンルに照して考えるなら、姫物語の最大のタイプは、何といっても松山容子でしょう。

私はSMで一番の美人というのは、松山容子と土田早苗だと思います。特に時代劇など、

この二人のように顔が純日本的でキリリとしまつて、身体つきがピリツとした、どこことなくボーイッシュな感じの方が、SMには似合うのです。女ターザンでは、ジャングル・ガ

ールが最高でしょう。要するに、SMのキャラクターというものは、余りセックスを感じさせるような肉感的なのよりも、すんなりした清楚なのか、きりりとしてしまってボーイッシュな感じの方がよいということです。

スタイルについては前にも書きましたが、大別すれば現代物、特殊物、時代物になると思うのです。この中、時代物は高貴型、特殊型、野生型に更に分けられると思います。

先ず高貴型ですが、いわゆる姫物。典型は若衆侍のスタイルでしょう。この服装は映画テレビを通じて、奇妙なことに余りデブデブした感じでない美人であれば、どんな女優がやっても、よく似合うという法則がある。

次に特殊型、これは女忍者などがやる型で傑作はテレビ『風』の土田早苗が正に最高。その他に『風雲真田城』に出た加路昌美がある。『くの一』も一昔前の魅力ゼロの黒装束姿は影をひそめ、現在は黒タイツや網タイツをはくようになったらしい。(その頃、そんなものがあつたかなどとは野暮な話)

この黒タイツや網タイツ姿の女忍者の効用価値きわめて大で、殊に味のある服装であるが、面白いことにこのスタイルは、意外と似合う人と似合わない人との差が激しい欠点がある。

別にあつてはいるわけでもなく中肉中背の女優でも、このスタイルになると妙にデブデブした感じになってしまう。土田早苗のように、よほど肉がしまつて、全身すんなりしていなければならない。腰のあたりがふくらんでいたりすると、もうおしまいということになる。たとえば加路昌美など、このスタイルで失敗しているわけで、似合うタイプの女優は限定されます。

また、この型には女やくざがある。これもやはり、重要なのは足。つまり太腿むき出しで脚胖というこのスタイルは、前記の『くの一』のタイツと同じで、きわめて重要。

六月号では鈴木氏が、二の腕、太腿むき出しのミニ・スタイルがいいと言っておられましたが、私ももちろん、このミニ・スタイルは時代物の重要な型であると思っています。

しかし後述の土民、野盗型同様、ただむき出しというのは余りよくないと思うのです。つまり、タイツ、脚絆の類をはくことによつてはじめてこの型は、より一層、足のむき出しを表現し完成させるもので、もしただ、むきだしだけなら、何の変哲や表現のアクセントがなく、全裸などと変らないものになつてしまふ。それに『くの一』型は、どちらかとい

うと、はっきりと腕は手首まで袖のある方がよいのですし、野盗、土民型も手甲や腕ぶくろをつけた方が明らかに、いい場合が多いのです。それはともかく、この女やくざスタイルも、似合う似合わないの激しい差があるスタイルで、元来は女性のスタイルでないこともあって『くの一』同様、身体が引きしまつて、すんなりした人でないと、デブツと太った感じになり、見られたものではない。またこのスタイルでは、よほど顔が、キリツと引きしまり、かつボーイッシュでないといけない。このスタイルが似合うのは、松山容子のような、ごく限られた女優だけで、他の女優がやれば、目をそむけたくなるように思う。だから、お楽しみも相手のタイプを考えないと駄目である。しかし、もし似合ったら最高です。

次に土民、野盗型であるが、これは忍者の中にもこれに、属する者がある。前に書いた漫画『真田剣流』の桔梗などこの型で『くの一』には前述のようなタイツ姿の時代劇としては超近代的なものと、このように野性的なもの、はっきり二つにわけべきです。どっちにしても、一昔前の黒装束に比べると、はるかにSM的に美しい物です。その他に、

この型には、テレビの『真田幸村』の野川由美子がありますが、決定版は『隠し砦の三悪人』の上原美佐。正にこれは最高。さすがに巨匠の眼は高いと思ったものです。これらはいずれも服の下に表現のポイントがあり、すがミニ、または、超ミニスカート型か、上原美佐のようなショートパンツ型になっている。どちらかというとショートパンツ型の方がしまっていて活動的な感じでいいのですが……。上は上原美佐など、腕むき出しなのがcaえて引きたつけれど、前述のように何かつけた方が、いい場合もあり、一長一短。

なんとも言いますが、美の表現のポイントは脚絆であることは共通のところ、これがこの型の重要点。この型は、テレビで放送された映画『八幡船』や、裾の長い物としては『琴姫七変化』の中の大原女などあるのですが、この型は、よほど身体の肉づきがしまつていて顔もキリリとしていないと、妙にデブデブした感じになってしまう。テレビの『赤影』はじめ多くのものが余りスタイルほどこさない。鈴木氏が、いいと言っておられた『戦国無宿』も私から見ると、やはり太ってデブデブした感じになってしまっていた。それから重要なのは、このスタイルである。野

性的だから、顔は余り上品でなくていいと思うと大ちがい。特にこのスタイルであればあるほど、意外なことに高貴さがないと似合わない。その意味からいくと、高貴型よりよほど高貴さを強調しているといえる。もともと見る方も、高貴な姫君などが事情によってこういうスタイルをしているという想定だと思うから、よけいおもしろく見られるので、非常に重要。ふつうの女という想定では、つまりません。

時代物は大体、以上ですが、共通していえることは、時代型の場合、身体の肉づきがしまっていないといけない。現在の悪い例のように、栄養ばかりよくてブヨブヨしたようなのはダメということ。また、時代劇の場合、美しい娘というと、十代の年頃なので、娘というより少女という感じの人でないとダメである。それから話の中で、ある程度、服の着がえなど行なった方がいい。話の初めから終りまで、まるっきり同じというのは『隠し砦の三悪人』のような例はあるし、それも一つの味だけれど、技術的にうまくつくるのが難しい。挿画など入れるとしても、こういうことをよく考えた方がいい。

話のタネとしては『隠し砦の三悪人』のよ

うに、敗軍の姫が軍用金とともに、追いつ追われつをやりながら逃げる話など、前述の物語り同様にいいし、ギャグとしては最近の物として、やはり松山容子か、『海の次郎丸』の雪姫の役でやっていたように、追手に人質を押さえられて一人で名乗り出るといふよりも、突き出されて柱に縛りつけられる。しかし、これは実は計画で、突き出した者が救出をはかるといふ手法は、一見の価値があり、いずれも人物像は、余り年増やボリュームやセックス肥えを感じさせるものであってはいけません。

奇クの文中の話は、どれも美や精神的な味わいより、性的刺激を追っているようで、人物のイメージがどれも肥大的で不潔になってしまします。

次に特殊型。これは六月号で鈴木氏も言っておられた、土人娘だの支那服の女など、いわゆる外国の服を着た女が入りますが決定版は『女ターザン』で、しかしこれも、ボロの服や動物の毛皮ならいいかという大違い。前にも言ったことのあるように『ジャングルの女王』と、『ジャングル・ガール』を比べてもわかるように、女ターザンならばこそ、ちゃんとした服を着せないといけな

この『ジャングル・ガール』の服は最高である。布はビロードを思わせる感じの、なめらかなもので、やや厚手の、すそがミニ・スカート状になっているのに、ピラピラした感じがしないものもいい。大きなバックルのついたベルトをしめ、頭にはヘアバンド、腕は手首まで袖があるもの。この袖が、重要である。もし袖がなく腕が剥き出しだったら、多くの『ターザン』に出てくるジェーンのように、何の変哲もない、つまらないものになってしまう。腕が完全に包まれるのが、かえって引き立った。下は短長靴（皮の半長靴を、もう少し短くした感じで、短靴より少し長いもの）が、よく引き立たせていた。時代物でもそうで、足の完全露出は、およそ何の変哲もなく、つまらない。脚絆、タイツ、こんな靴などはいっていないと感じが出ない。『ジャングル・ガール』の場合、捕まって縛られる前が生々していて、木から木に飛び回ったり、崖から水に飛び込んだり、太股で人の首をしめたり、といったのが縛られた場面との対比によって一層引き立っていた。この型には前述のスペースオペラなどがあるが、顔なども、やはり感じのいい女性でないとダメである。ここでもセックス過剰型は嫌われると

いう法則がある。やはりセックスとSMは直接の関係はないのだから、余りセックス的な女性は適さず、可愛い人や品のある人がよい訳けです。また『女ターザン』など、捕まる直前までさっそうと活躍しているのではないと、おもしろくないということも知ってないといけません。

現代型。これは前にも言ったことのあるように、サーカスや魔術などの種々の曲芸服。バレエ、カンカン踊りやテニス、アイス・スケートの服などがあります。これらは、もう説明の要はないと思います。最後に、現代の服の場合、スカートはミニかロングかを説明すると、結果は要するに一長一短なのです。ロングは上品で静物的な感じなので、余り動きの少ない、きちんとした姿勢で縛られた場合などに適し、ミニは縛られてころがされ、裾が乱れてめくり上がっている、という場合などに、適しているのです。それを考えないで、ただミニがいいなどとは低俗な話。

次に縛り方、責め、捕獲などについて総括的に述べたいと思います。猿ぐつわについては、六月号で鈴木氏が述べておられるのに私も同感です。私は口のみを覆う型の方が好きです。縛りのロープは、太くも細くもなく、

中ぐらいのものがよい。『隠し砦の三悪人』は縄が細くてよくなかった。テレビなども一般に縛る時の縄が細いものが多い。色は余り白いのは、よくないという、これも法則がある。縛り方については私は鈴木氏とちがって柱や椅子に縛りつけられたのが、静物的で一つの型としてよいと思うのです。しかし何といても縛り方は、余り凝らないで普通に縛るとか、あるいは徹底的に嚴重に縛るとか、どちらかにした方がいいと思います。また、

ヤセ犬の遠吠え

疑問

私は、新参読者でヤジウマの名に恥じず、本当の意味の「S・M」がどういうものか知らないが、なほばなしい直接的感觉を伴うプレイのみを追うことが、S・Mのすべてではなからうことぐらいはわかる。大きな口はたたけないが、直接にセックス感覚のみを求めるから、悪書よばわりされるのではなからうかとも思う。

なるほどキレイな女性のキレイなヌードが縛られている姿は私にとっても魅力はある。出来得れば、デート相手に要求してみたい気もする。しかし本来、拘束を嫌うのが人間の

拘束具や拘束衣なども、よく考えて使うことが大切です。鉄仮面や鉄の長靴なども、使い方によってはよいものになるのです。時代劇などにも、拘束具を使ったらいいと思う。責めについては、前に述べたように、むしろ捕わるまでの、追いつ追われつのスリルや、捕えた喜び、捕まった無念さ、脱出までの苦悶や連行の状況、処分をきめるスリルなど、そのようなものに、重点をおいた方がいいのです。奇クは責めという直ぐ全裸、鞭打ち、

系振昇

否、生物全体の本能であろうと思うから、そんなことはもってのほか、と眼に角を立てる人が大多数であろうこともよくわかる。その裏の奥底から湧き上る複雑な心理が快感に結びつくのだろうと、私は、理解出来るつもりだが、理解出来ない、否、出来るのだが無理に否定(?)している人たちも、大多数の中にはまぎれ込んでいるのだろうと推測している。きっと、ナマナましいセックス直結を感じ、今尚、セックスを恥ずべきことと考えていられるか、もしくは、あるワクの中で、ある作法通りでのみ許されるべきものと、独り

浣腸、などに持っていくますが、これらは皆およそ嫌悪感や、不潔感をもよおすばかりです。どうか徒らに性的刺激ばかり追わないで真のSMを目ざして貰いたいと思います。

最後に一言。現在の奇クはSMの正道を外れているので、一刻も早く体質改善して、新しい研究や知識の吸収を積極的に行って、真のSM的美的感覚を養って下さい。

カット写真「三好サーカスナップ」

阿部能丸・提供

ぎめしている人達だろうと、思っているのだが、私の誤推だろうか。

それはそれで、今、書きたいことは、社会一般のことがらの中に、私の「受感性」をくすぐられる事が多いということだ。私だけの感覚かも知れないが、どうも直結でないものは、リクツはともかく、本誌ではS・Mとはいわないらしいこと疑問を持つ。

例を挙げよう。特殊な勉強好き以外、大ていの子供は学校は苦手が普通のようだ。親の涙を吞んで(?)の将来への布石が重石となつて、小さな胸を痛めての悲劇も少なくないのも事実であろう。私の近所のママは、今年二年生の子供を、バスと電車で約一時間近くかかる学校へ通わせている。苦心の越境入学らしい。頭の出来は知らないが、下校後も方

方の塾に行くそうだと。体は細く顔色も悪いところをみると「秀才」なのだろう。加えてボーズスカウトとかで、日曜毎に制服姿も勇ましく(?)出て行く。私の受感、その子を見送るママの、理智的な眼鏡を光らせて「シヤンとして行きなさい!」との声によって呼び起こされた。

もう一つ、今、テレビ放映中の漫画で好評の「巨人の星」というのがある。野球の鬼のような父親に、自分が果せなかった夢を引継がされた少年の、シゴキ抜かれる物語りである。わが仔を谷につき突き落とす獅子を例にとつての筋運びで、大人が見ても面白いのだが、父親の身代りにされて鍛えられる少年の苦闘は過酷である。大成するための厳しさを押し出しているのはわかるが、その目的の為に過酷なシゴキも残酷ではないのだといっているようにも受けとれる。これに関して私の受感の働いたのは、これが婦連の推せん番組だという報道が目についた時であった。

私の勤務先での恋愛ゴッコ(?)も少なくない。大胆な行動の数々を、噂話に聞くのは興味がある。私の課付のタイプピストが、可愛い眸をキラキラ光らせて残業を嫌っていた頃はそうでもなかったが、突然に休んだり、打ちしおれてミスを重ねるようになったのを見て、俄然、私の受感が刺戟された。

私も一下級サラリーマンであるが、会社に

限らず、雇傭関係や仕事全般にもいえる。

仕事だから仕方がない。仕事だから自分をそれに合わせる。仕事だから自分を一つの歯車にする……という事に疑問を持ったことのない人は少ないと思うが、こういうことは、すべて社会のルールとして普通のこと、否、義務であるとされている。またそれが必要だとはわかるが、この大目的のために派生する影響のもとに、個人々々が受ける束縛やら忍従は、「生活」という強力な餌と罰を背景に、おおいにかぶさっている。これをS・Mに結びつけたら叱られるかも知れないが、私としてはどうしても受感が働く時が多い。

としたら、見聞するものすべてがそうであるから、何も事改めて奇クを読んだり、こんなクラナイことを書くこともないといううな気にもなるが、三度の飯を食っていてもやはり、時にはオヤツが欲しくなるのも人間なればこそと理由づけしているが、正直いつて奇クに夢中にはなれないのだ。これは何も私だけのことではないかも知れない。オヤツとして読んでいる人が多いのでは(?)とも思うが、私が軽症というばかりでなく、受感を通り越して、あてがいの感と共に、余りお手軽なセックス追求が、感じられるからではないかとも思う。どうもうまく表現出来ないが、ビフテキはナイフとフォークで、握り寿司は指でつまんで、というわけで、ハシを使

いたい客にも、強引にその作法(?)通り実行させる店の感がないではない。とくに小説類の場合にそう思う。

物事すべて、批判や論評することは易く、創り出す困難さを知らない如くであるのが普通のようである。私の書いていることも同然であろうが、S・Mの定義(?)なり、行為(?)なりというものは、それぞれの自由な感覚によるのが、本当ではなからうかと思うだけに、感じを「与えられる」のではなく、「感じさせられる」方向のものを望みたいのである。

といって、ヌード写真を一枚眼前に突きつけられ、どう感じようとおまえの勝手。何か着せようが、そのまま縛ろうが、好きなように想像せよ。といわれればなんともお手上げにならざるを得ない。

莫然とした望みを並べてもしようがない。ここで一言お訊きたい。子供にせがまれて困る母親。もっと収入をと切実な内職に精出す主婦。その主婦から泣きつかれて尻を叩かれる亭主……等々の普遍的なことがら。直接的な感覚との繋りはなさそうだけれども私の受感性は刺戟されるのだが、この感覚が奇ク誌上のそれとは異質なものであることはわかるが、これらは果してS・M的な状況とはいえないのだろうか。私だけの感覚なのか。お教え戴きたいものだ。

サリンジ・ルーム

生気を喪った望月レイ子の逆吊りの身体は胴を締めつけていた革バンドが外されるや、ぐんにやりと床に落ちた。とはいえ、両足首をピンと引張った鎖があるので、剥き出しの下肢は惨めにも宙に浮いている。そして、二人の女兵士が、臍のあたりまでまくれあがったスカートのベルトに鎖を入れ、グイと引きおろすと、レイ子の上半身も、ブラジャーをのぞいて、まことに呆気なく抜きさられてしまふ。そのブラジャーすら三カ所を切り離さ

れてしまうと、乳房がこぼれるようにあらわになってゆく。今はもう彼女の皮膚を蔽うものとしては、無残に足首に喰い込んでいる足枷だけになってしまったのであった。

ダランとした手首に巾広のバンドエイドを巻きつけ、その上に時計バンドのような手錠がピッチリと装着される。更に壁際の天井から降りて来た別の鎖のペアに夫々結びつけられると、ブーンというモーターの音がしてレイ子の両手がパンザイをするように引きあげられ、グッタリした体が床上をすべった。足枷は一旦とり外され、もう一度壁際の床に取付けてあるいくつかの鎖に、ほぼ一米ほどの



第四回

前号までⅡ友明友之助は南アフリカのガボンで巨億の富を築きあげた成功者。秘密のヴェールに包まれている。その秘書星恵美子はエミーと呼ばれ、謎の原子力潜水艦ネプチューンの司令である。彼等は世界各地で若い美女たちを色々な手段で誘拐捕獲しているらしい。これを追う国際捜査官新津謙介は星を追ってイランの首都テヘランに降りた。そのころネプチューンはアラビア海の真只中に浮び上った。全裸の虜囚たちは日光浴のために司令塔に繋れるのだった。その中に、カンヌで捕えられた日本女優の望月レイ子がいる。言語に絶する屈辱の回想。

間隔をあけて、右足首、左足首と夫々固定された。したがって、手首を吊りあげた鎖が、もう伸ばせないだけレイ子の四肢を伸ばしきってしまうと、豊満な彼女は大の字なりに固定されてしまう。

そこで、胸の上辺りに気付けの注射針がさし込まれる。やがて、ピクピク全身を痙攣させながらレイ子は息を吹きかえした。悲痛な叫び声が彼女の口をついた。

「たすけて、ああ、たすけてえッ」

叫んだところで、どこに救いがあるうか。

「泣くなッ。口をとじて、前をしろ」

激しい怒声が飛んで、同時に、パシッとレイ子の頬が鳴った。おどろいて口をつぐんだ瞬間、フラッシュが次々ときらめいて、哀れなレイ子の姿を、フィルムにおさめる。

それから、三十分以上たってレイ子は、まだ大の字縛りから解放されなかった。その間、彼女の体は隅から隅まで、ネチネチと測定されていった。眼の大きさとか、鼻の高さなどはまだしものこと、日本人離れのした豊かな乳房に荒々しくノギスやコンパスがあてられたり、まだ埋れたままの可愛い頂点を無理矢理にゲージが締め付けてくると、その度

毎にレイ子は身を慄わして悲鳴をあげるのだった。

血液はもとより、涙、鼻汁、唾液、——ありとあらゆるものが標本として採取されたのはまだいい、彼女をして地獄の苦しみを覚えさせたものは、立ったままで容赦なく使用された胃カメラの刺戟だった。ガラス繊維のしなやかな管だとはいつても、彼女にはそれが自分の臓器をメチャメチャにしてしまう刑具のように思われたからであつた。そして、激しい嘔吐感と共に、それが引き抜かれる頃には、さすがに強気の望月レイ子も、完膚なく打ちくだかれ、抵抗する氣力をなくしてしまっていた。いや、抵抗しようにも精も根も尽き果ててしまったという方が適切だったのかも知れない。

それで、あえぎあえぎではあつたけれども高橋副長の訊問に、割合素直に答えていったものである。それは簡単な氏名、国籍、住所からはじまって、主な経歴、趣味嗜好などを含んでいた。一緒に、彼女の声が一切テープに入れられたことはいうまでもない。

そうして、一時間半にも及ぶ驚異的な一次検査が終了するとやっと足環が外され、レイ子はバンザイの姿勢でチェーンブロックの導

くまま室外に引摺られて行つた。

次室は部屋中が水洗い出来るようにタイル張りになっていた。心身ともにクタクタになっていたレイ子には氣がつかなかったけれども戸口にサリンジ・ルーム（洗滌室）という表札が掲げてあつた。

部屋の中央に立たされたレイ子は、高さ50センチばかりの二本の鉄杭に膝と足首を別々に結びつけられる。途端に、その鉄杭は強い力で左右に移動しはじめた。それと同時に、吊り上げられた手鎖が徐々にゆるめられる。膝から下は垂直のままだから、やがて彼女の下肢は相撲の土俵入にある姿のように、口の字型にならざるを得ないのだった。

ふたたび望月レイ子にとって、思い出すだけでも氣の遠くなるような恥辱の瞬間がやって来た。

彼女の前に車のついた高いパイプ柱が押し出されてきた。その上部に大きなイルリガトール（洗滌壺）がブラさがっていて、なみなみと入った透明な液体が揺れている。その下部から下ったゴム管の先には、いわずとしれた浣腸用の嘴管がついていたのである。前にしゃがみ込んでアマゾンの一人が、きわめて

事務的に嘴管の先端を持ってレイ子に近づける。アッ——と声をのむレイ子。

背筋を貫かれるようなおぞましき。グングン体内にしみ込んでくる冷い液体の圧迫に、彼女は思わず天井を向いて口を開いた。声にならない絶望感が突き上げて、その口から噴出して行くように思われた。熱い涙がとめどもなく流れて両耳をぬらした。

ほとんど五百リットルほどもあったであろうか、硝子壺の中の液体は、高低差によって完全にレイ子の体内に移動してしまったのである。イルリガツールによる浣腸は緩慢では

あるが効果はきわめて強い。やがて、レイ子の総身から冷汗が吹き出しはじめる。妊婦のようにふくれ上った腹が艶々と濡れた。つづいて来る爆発に備えるかのように、女兵士が「の」字型の下にポリバケツを置いた。いくら相手が、女であるからといって、何人かの前で、こんな不ざまな事を強いられるとは。レイ子の顔は苦渋にゆがんだ。今はもう外から加えられる苦しみではなかった。内部の爆発するような感量が、こらえようとすればするほど炸烈の時を早めるような気がした。

レイ子の目の前はまっくらになった。赤黒い渦がグルグルと舞って、ただ一カ所だけが切なく頼りなかった。

「何を、我慢してるの。サ、早く流しておしまいよ」

女兵の一人が、ツト指をのばしてみぞおちのあたりをつつついた。一寸した指のひと触れが、ハチ切れそうになってい

たレイ子のバランスをくずした。

レイ子は、まっくらな中で、自分の辛うじて保っている意思のコントロールが、ガタガタにくずれ去るのを感じて限りなくあせっていた。それはもはや全く無駄なあがきにすぎなかったのであるが。

——だめ。もうだめだわ。アア……。堤防はドツと決潰し去った。いまわしい洪水から逃れようと、必死になって積み上げて行った心の土嚢は、見るも無残につきくずされ押し流されて行った。

現金なもので、痺れるような全身の緊張がみるみるゆるんで、目の前があかるくなる。その目の前に、女兵士が透明なポリバケツのようなものをさしつけていた。その敗北のしるしを目端に入れたレイ子は、一瞬、表情をこわばらせたかと思うと、みるみる雪のように白い全身を真赤にして、この何とも言いようもない辱しめを身もだえして耐える風情だった。

「イニシアル・エクスクリータは資料として保存することになっているのよ」

嗤いながら言うのはエミー司令だった。彼女は、いつの間にかピストル型のプレッシャー・ワッシャーを握っていた。その先に50セ



ンチばかりの細長いアタッチメントと洗剤入がついている。

引金をしぼると、ブルブルという音がして泡立った水が激しく噴き出してきて、まっすぐレイ子にブッかって行った。水圧は強く、固定されたレイ子をガタガタとゆさぶった。ヒューッという悲鳴を気にもかけずに、頭の先から足の先まで、まんべんなく噴口が上下すると、やがてレイ子の全身は白い泡の中にスッポリと包み込まれてしまう。頃合いを見て噴口を変えると、今度は針のような水が束になって、洗剤の泡を洗い流して行く。刺すような痛みで、とても快いどころの話ではない。ノズルが口に押しこまれ息も出来ないままに内側まで洗い流されてしまう。水の刺戟は、レイ子の全身を赤く充血させてしまった。水責めが終わると、大型のドライヤーをつきつけられる。今度は熱風地獄に突き落とされたようなものだ。

「アッ、熱い、熱いッ」

といって泣きさけぶのに、容赦もなく皮膚のすぐ近くをドライヤーの筒口が這い廻って行く。

レイ子の皮膚が余すところなく乾ききった

ころ、兵士の一人が彼女の真下に、鏡面を水平にして上に向けた鏡台を置いた。

「下の鏡をごらん」

エミー司令がいった。しかし、犬のように舌先をのぞかせて、ゼイゼイ喘いでいるレイ子にはそんなことを聞く余裕がなかった。彼女の肉体と精神に加えられたパプニングな暴力は、大瀦にまきこまれた木の葉のように、レイ子を目茶苦茶に翻弄してしまったのである。精神安定剤の助けがなかったら、或いは発作的に発狂してしまったかもしれないほどの苛責だった。

髪の毛が掴まれて、嫌応なく頭がグイと下を向かされた。

「見ろといわれたのが、わからないの！」

今度は甲高い高橋淑恵の声だった。

涙にかすんだ眼にも、ボンヤリと鏡面に映ったものが何であるか明瞭だった。それが自分の肉体の一部であることは間違いなかったとしても、何か別の物体がそこに置かれているかのように思えた。そしてそのなじみのない奇妙な物には、鏡面だから逆に映っているけれども、F018という数字が読めた。

「F十八号、わかったね。それがおまえの肉体番号だ。死ぬまでとれないように、いれず

みにしてある」

エミー司令の声が、残酷な内容とは裏腹にひどくやさしくレイ子の耳に入った。さき程逆吊りでいじり廻されたついでに刺青されてしまったらしい。夢我夢中で苦しんでいたのに、ちっともわからなかった。涙線がふくれあがって、口惜し涙が、あふれてくる。それは、ポタリ、ポタリと鏡の上に落ちて、目を蔽いたくなるような映像をボカしてくれた。

「おとなしくすると約束するなら、手足は自由にしてあげるけれど、どうする？」

というエミー司令に、レイ子は、あわててうなずくのだった。実際、どんな犠牲をはらっても、一刻もはやくこの責め苦から助かりたいという希望しかなかったのである。それに、変則的な姿勢を長時間強要されてきた彼女は、どうにもならない程疲れ果てていた。それで手首、足首の鎖がほどかれると、恥も外聞もなく、ヘナヘナとくずおれてしまうのであった。

「バカッ。しっかりおし。サ、立つのよ。お立ちなさいッてば」

女兵士が二人、左右から脇をかかえて立ち上らせる。力なく揺れる細い首筋に、犬の首

輪が巻きつけられ、パチンと錠前でとめられる。その錠前にもF018という数字が刻印されていた。

そのまま、ひっぱりあげるようにサリンジルームから連れ出されると、床にプラスチック製の棺桶のようなものが置いてあった。その中へ拗り込まれ、蓋が施されるやいなや、容器ごと上へあがり、横へ移動してゆく。狭い通路を、移動する左右に二等寝台のような四段の空間があり、その各々に透明な落し戸がついている。したがって、その中のいくつかに、囚われの女が、裸のまま押し込められているのが見えた。これ又、棺桶のような空間で、腰をあげることはおろか、手足を十分伸ばすことも出来ない。ジッと四肢をちぢめて、ねころんでいるしかないのである。下側には布団こそ敷いてないが、軟い発泡ポリエステルのタイルが敷かれている。真中の部分に直径十五センチばかりの丸いクボミがあつて、そこへ上手に用便すれば、マットを汚すことがないようになっている。

レイ子を閉じ込めた動く棺桶は、そうした小房の一つに横づけになった。透明な蓋がスルスルと上に動いて、奥行き80センチ、高さ80センチ、間口1メートル60センチほどの明

るい空間があらわになった。同時に、棺桶の床がレイ子を寝かせたままその中に這入って行く、再び蓋が下って、彼女がもとに戻れないところまで閉ってから棺桶の方の床が元の位置に引込まれる。更に蓋が下ってピツタリ入口を閉ざしてしまうと、もうレイ子は自分の意思に関係なく、小さな房の一つに収容されてしまったことになる。すべてがオートメーションで作動するだけに、それだけ機械力の持つ圧迫感が非情にレイ子を絶望のどん底におとし入れる役割を演ずるのだった。

この小部屋、彼等はこれを「セル」と呼んでいたのであるが、全く密閉が可能になるように出来ていて、勿論換気も独立して行なう仕組みである。その他海水を利用した高压洗浄装置が備えてあり、それを作動させればセルの内部はそれこそ洗濯槽のようになって、海水は渦を巻いて回転し、中の囚人もろともひっくりかえし、とっくりかえして綺麗に洗ってしまう。排水は前述の通り床の中央にとりつけた小さな便器から出る。一旦、海水で洗ってから、少量の真水で、仕上げ洗いをし、熱乾風を送り込むとスグもとの乾燥状態になる。一方の壁に情報教育を行なうための有線テレビがあり、その上部に監視用の受像

機が装置してある。両者とも破壊出来ないように硬化ガラスで保護されている。セル内部の照明は四六時中昼間のように明るく、つまり七百ルクス以上に保たれる。

間口1メートル60センチ、天地80センチ、上下開閉式の扉は、頑丈な一枚硝子でマジックミラー、つまり外部からは丸見えなのに内側の囚人からは自らのみじめな姿を映す鏡面の効果しかあらわさない仕掛けになっているのである。

逃 亡

アラビア海中央部のはげしい陽光に肌を焦がしながら、わずかの間にあまりにも変わりはてた自分の境涯をそこはとなく思い泛べ、とりわけこの潜水艦の囚れびとになってからの汚辱に満ちた日々を回想していたレイ子は司令塔の最上部からハンディマイクを通じて怒鳴る高橋副長の甲高い声でフトわれにかえた。

「時間だ。艦内へ戻れ」

後手縛りに接続したロープが引っばられると、嫌も応もなく立上らなければならない。犬の首輪に施錠された番号札が悲しい金属音

を立てた。

レイ子は絶望的なまなざしをアラビア海の水面に向けた。遙か水平線まで木の葉一つ浮いていない。ただネットリした波のうねりが無限に続いているだけだった。

——逃げたい。

心の底から逃げたいと思った。しかし、このように繋がれていては不可能であろう。

裸女の群像は一人又一人とロープにひかれて暗い艦内に導かれて行った。二人ずつエレベーターに押し込まれて居住甲板に降りる。そこで順々に例の動く棺桶に乗せられて各自のセルに戻されるのである。

レイ子の順番がきて後手錠が解かれたとき一瞬係りの女兵士にスキが生じた。あとから思えば到底、逃げきることのあり得よう筈もなかったのに、彼女は一閃に逃げようと決心してしまった。

そして、ハジかれたように身をひるがえしてその女兵士をつき倒すと、とっさに、上へ昇ろうとしているエレベーターの中に、とびこんだのである。

司令塔で次の順番を待ち、エレベーターの扉口に並んでいた女囚たちが吃驚したように立ちすくんでいるのを、かきわけるようにし



てハッチの外へ躍り出す。

「何をする。まてえッ」

誰かがさけんだのを背後に聞いて、レイ子は必死に水面にダイビングをした。

大きく水しぶきをあげ、白い裸身が波間にかくれたかと思うと、五メートルばかり前方にポツカリ頭を出した。高校の頃水泳の選手をしたこともあるレイ子は、今でも泳ぎには自信があった。かなりのスピードで水をかく姿は正に美しい観物ではあったが、彼女にとっては何れどころの話ではなかった。前後の見境もなく海に逃れては見たものの果しない大海原の真只中である。泳ぎ疲れたらどういうことになるか。それより、あの巨大な潜水艦から逃げきることは全く不可能であろう。

レイ子は、たとえてみれば、広いサハリの原野で狩猟家達のジープに追いつめられた小さな羚羊のようなものだった。死にもの狂いで逃げたところで、つまるところは追い手を楽しませるだけで、結局は捕えられるか、心臓破裂で死んでしまいか、二つに一つの結末しかない。

「ボートをおろせ」

高い艦橋から高橋副長の声が響いた。

ボートハッチが開いてカッターが海面に浮かべられた。高橋副長をはじめ数名がそれに乗組むと、ゆっくりとしたエンジンの音を立て

ながら低速でレイ子の後を追った。

必死に泳いだ彼女は、すでに体力の限界に近づいていた。手足の動きも、次第に鈍くなり、ともすれば身体が浮き上がってくる。

だから、カッターが追いつくのは、頗る容易なことであつたし、又それが近づいても泳ぐピッチを止めようとする余力はレイ子に残っていなかったのである。そこでカッターが静かに平行してくると、無意識に手を差し上げて舷側を掴もうとする様子だった。その手首が鉤竿でピシャリと払われた。はずみをくって、レイ子の身体がググッと沈む。

鉤竿で叩いたのは高橋副長だった。鉤竿の反対側には丸いロープの輪が作ってあつた。彼女がそれを持ち直して構えたのと、レイ子が辛うじて体勢をとりなおし首を海面からつき出し、苦しげに呑み込んだ海水を吐き出したのと殆ど同時だった。パツと縄の輪がレイ子の頭を襲った。その首縄が締ると、彼女は長さ三メートルばかりの鉤竿の先に自らの首をつながれた形になった。

冷い微笑を口辺にした高橋副長が、グイッと竿をつき出すようにすると、レイ子の頭部はたちまち水中に押し込まれてしまう。水面を空しくかきまぜる手足が彼女の苦悶を象徴

するかのようになり、見えかくれした。

頃合いを見はからって竿をおさえた高橋副長の手がゆるめられると、水面には、ビショ濡れになったレイ子の頭がセリ上ってきて、アキレギレの悲鳴を水にさえぎられながら、アップアップともがくのであつた。そして、休む閑もなく又水中に突き込まれる。これでは如何に泳ぎの達人だったとしても参ってしまふ。何回も水中に潜らされているうちに、したたか海水を呑み込んでしまったレイ子は、もう溺死寸前の状態だった。空をつかんで、ともすれば深い海の中に沈んでしまおうとする。

「帆柱を立てなさい」

高橋副長が命令した。非常用の帆を張るための柱が立てられる。その先端に滑車があつて、それほど太くはないが、しかし丈夫なロープがぶらさがっていた。

高橋副長の持つ鉤竿に首を吊られたように支えられたレイ子は息もたえだえにカッターの舷側に浮かんでいた。別の竿で片脚をひっかけられても抵抗することすらできぬ。その右足首に帆綱の一端が結びつけられ、何人かの手で反対側が引かれると、レイ子は片足逆さのあられもない姿で吊り上げられてしまっ

た。

口鼻から激しく噴き出す海水に、のたうちまわって苦しむ。その顔はまだ水面スレスレにあった。従つて、船べりから上には、白い豊かな臀部が、空に躍る左足の動きにつれてプリプリ揺れていたに過ぎない。そしてそれは、カッターの吃水線のあたりで歯がみしながら苦悶しているレイ子の惨めな顔とは、およそ正反対の、むしろ滑稽な見せ物だった。

水滴をはじきかえすように脂のよく乗ったレイ子の臀は、シミ一つなかった。そのなめらかなタッチを楽しむように、平手でピシャピシャ叩いていた高橋副長は、面白い遊びでもしている口調で笑いながら、

「もういいでしょう。もう少し引きあげてごらん」

と部下に指図をした。滑車が鳴って、ボートがグラリと揺れたかと思うと、レイ子の頭が、二度三度船べりにぶつかりながら、ガクンガクンと船中に入ってきて、はずみでぐるぐる廻った。完全にグロッキーになってしまつてゐる。呑み込んだ多量の塩水も、ほとんど吐きつくしてしまったらしい。肩で息づくはげしい呼吸だけが、どうやら彼女が生きているということを証明するにすぎないような

状態であった。

兩足首を引き抜かれるかと思うばかりの痛みが、レイ子を再び地獄の世界に呼び返すことになった。何分たったのだろうか、彼女にはそれが数十分いや何時間にも感じられたことだが、気がつくとも依然として帆柱に右足をくくられて逆さまに揺れているのだった。

そして、高橋副長がその顔をのぞき込むようにしている。

「逃げようとしたって無駄なのに、何でこんなことをしたの」

もうどうにでもなれという棄てばちの気持ちになったレイ子は黙って答えない。全身の血液が頭に逆流してくるようだ。それより、自由にさせられている左足のやり場のない苦しみが新しく加わってきた。腿の関節が抜けそうに痛むのである。

「返事をしないのね。そう、いいわ。まだ反省が足りないようだから……」

高橋副長は不気味な微笑をうかべた。その指図で兵士たちが長さ一メートル程の重い鉄棒の両端をレイ子の両足首に結えつけた。そして首縄をつけたままの鉤竿を鉄パイプの中央部に十字になるように固定する。そこで、

ようやく逆吊りから降して貰った。ホッと息をつく間もなく、頭から固い浮輪が差し込まれ、肩から胴まで通すと、両足を開いているので、それ以上、下へは行かない。その上でもう一本、二メートルばかりの竿を持ってきて両手を横一文字に、手首と首輪と三カ所を縛りつけると、恰も天秤棒を背負ったような姿にされてしまった。

つまり、胴に通された浮輪は、上にも下にも抜けないわけである。さて、長いロープの先が浮輪の上縁から差込まれて、股下を潜らせて浮輪の後正面のあたりの縁にシッカリと結びつけられる。そして、このように大の字なりに磔にされたレイ子は二、三人に抱えられて無造作に再び海の中にドボンと抛り込まれてしまったのである。

すると足首を固定していた鉄棒が鍾りの役をして、彼女の身体は釣糸につながった浮子のように上半身を垂直に立てて、プカプカ波間に浮き上ってきた。勿論、大手をひろげて縛られているから浮輪からスッポ抜けて沈んでしまう心配はない。

「前進、微速」

高橋副長の命令で、カッターは徐々に動き出した。その途端である。

「アッ、痛ウ。ヒイッ」

今まで、何をされても音をあげなかったレイ子が、ありったけの声をふりしぼって叫んだものである。

カッターの動きにつれてレイ子の繋がれたロープがピーンと張りつめていた。そのロープに、彼女は跨っている恰好である。浮輪の抵抗と引っばられる速度の差がひどくなるにつれて、レイ子の上半身は臍のあたりまで水上に突き出してきた。

彼女を押し上げているのは一本の細いロープだけなのである。

牽引はコンスタントには出来ない。あるいは強く、あるいはゆるく、そのたび毎に押し上げる力が加わり、そのたび毎にレイ子は絶叫する。

いつの間にか、カッターは本艦に近づき、その周囲を廻りはじめた。この奇妙な引き廻しの一部始終は、艦内テレビを通じて哀れな女囚たちを収容するセルの一つ一つに映し出され、彼女達は逃亡の罰の怖しさと、自分たちの置かれている運命のきびしさに慄然とならざるを得なかったのである。

(未完)



ある夜の出来ごと

古賀正道

—— ショート・ショート ——

彼女は、今夜も、なかなか寝つかれなかった。今日もまた、なんということもなく過ぎた。明日もまた……その繰返しだろう。ただ生きているというだけで、何か、むなしいだ。何かみたされないのだ。

『あなた、いったい何が欲しいのよ。何が生きる欲びだと思ふの？ 恋人？ セックス？』

自分に問いかけてみる。

「そうかも知れないわね」

心のどこかで、答える。しかし……男にはなじめなかった。

『男のおもちゃになるのは、いや』

『結婚は？』

『自由を失うのはいや』

『そう言う信念で、あなたは今まで、恋人もつくらず、結婚話も断ってきたの』

『信念などと言うものが、あたしにあるのだろうか』

『それごらん。何とはなしに、ただおっくう

なだけだったんじゃないの』

『じゃ、あたしは、怠け者なの？ こんなに一生懸命で生きているのに？』

『そうかも知れないわ。いえきつとそうよ』

『じゃ、どうすればいいのよ』

独りで問答してみても始まらなかった。結論は出ないのだ。結局はわからないのだ。何とはなしに、ただずるずると、食べて寝てすごして来てしまったのだ。彼女はガツクリと肩を落した。

そのとき、押入れの戸が、すーっとかすかな音を立てて開いた。はっとして見ると、色眼鏡を掛けた男が、ドスを光らせて立っていた。男は

「さわぐな」

と、低く、落着いた声で言った。彼女は、ふるえ上がった。のどがからからになって、叫べと言われても、叫ぶことは出来そうもなかった。

「その紐で、足を縛りな」

彼女は、催眠術にかかったように、言われる通りにした。

「口にハンカチを入れて、その上から手拭で縛りな」

「そうそう、すなおで、いい子だ」

「手を後ろにまわしな」

男は、その手を、しっかりと縛り上げた。それから腰を下ろして、悠々とタバコを一服つけた。恐怖を浮かべる彼女の眼に煙りがしみた。

「美知代さん、俺はだいたい前からあんたが好きで、チャンスをねらっていたのだ。あんたの生活ぶりも、充分調べさせてもらった。今夜はゆっくりさせて貰おうと思って待っていたんだよ」

男は、美知代をじっとみつめながら、静かな落着いた声でそう言った。美知代は、何か不思議な欲びのまじった戦慄を感じた。その男に怖れを感じながら、逞しさ、男らしさを感じた。

「可愛いネグリジェだ」

男は、ゆっくりと楽しむように云いながら美知代を眺めた。

「縛ってあっては、普通に脱がすことは出来ないから、切らせてもらおうよ。切った分は、金を置いていくからな」

そう言って、ドスを持って近付いた。美知代の目に、チラと恐怖がはしった。

「怖がることはない」

男はそう言いながら、ネグリジェの衿許にドスを差し入れると、一文字に裾まで切り裂き、更に両袖を切り裂いた。白く、キメのこまかい肌あらわれた。美知代は、体がカーッとほてってきた。

「きれいな肌だ」

男はそう言いながら、ブラジャーをはずした。美知代の形のよい乳房があらわれた。続いてパンティにドスが近づけられた。美知代は、どきっとして身をふるわせた。

「パンティを切るだけだ。動くといけない」

男はそう言ってゆっくりと切り裂いた。裂けたところは腰の外側だった。恐怖と羞恥に慄える腰がのぞいた。反対側も同じように切り裂いた。そして、ただの布切れに変わったパンティは男の手に握まれた。

美知代は今、なぜか怖ろしさや恥かしさより、神に捧げられたいけにえのような気持だった。いや、それよりも、ぞくぞくするような戦慄、怖ろしいけれど欲びにしびれるような戦慄に溺れていった。男は身を起すすと、またタバコに火をつけた。

「美知代さん、怖いかな」

じっと美知代をみつめながら、やさしく言

った。美知代は、煙りの向うの男をチラッと見てかすかに首を横に振った。

「きれいな体だ」

男は、しみじみとそう言って、美知代の体を眺めた。そしてタバコを捨てると服を脱ぎ始めた。

美知代は縛られていることを忘れていた。

自分が襲われていることも男の暴力を怒る気持も不思議になかった。次はどうするのかとむしろ男の行動に期待した。

男は起き上ると大きく息を吐いた。やさしく肩をたたき、何本も紐を使って美知代の足をぐるぐるまきに縛った後、手のいましめの結び目をほどこいた。

「美知代さん、済まなかった。これで念願が果せたよ。足の紐は俺が出ていってから解きなさい。ここへ名刺を置いて行く。きみが、今夜のことを許せないと思うなら、警察に届けたまえ。警察がきみに代って、ボク、いや俺に復讐してくれるだろうよ。この名刺が他人のものがどうかはすぐわかることだ。ボクはきみの純潔と、ボク自身の将来とをハカリに掛けた上で、こんな冒険を敢行したんだから、ひっぱられても後悔したり、きみを恨んだりはいらない」

美知代は、意外な男の言葉にボカンとして見上げていた。

「しかし、もしきみが、警察の手を借りるのが嫌だと思えば、好きな復讐方法をとればよい。もし復讐でなく、何か話があるなら電話したまえ。そしてもし、もしもだよ。今夜の再現を望むなら、電話などせずに合図にしたら。あの窓にパンティ、シャツ、ハンカチの順に並べて干すのを合図にしよう。そしてボクは『暴漢の俺』になってまた忍び込んでくることにする。すべてはきみの考え次第さ」

男は、そういつてから

「これは、切り裂いた下着代だよ」

と言って、五千円札の上に名刺を重ねて置き、静かに出ていった。

美知代は、男が出ていってしまったとしても、じっとしていた。縛られたままの足の紐に手もかけず、他人ごとのように眺めたまま考えていた。

しばらく経って、思い出したように足の紐を解き、名刺をとってそのまま机のひき出しの一番奥へ仕舞いこんでしまった。ろくろく見もしなかった。

一週間程の後、男の指定した窓に美知代はていねいに、しわを伸ばしながら洗濯物を干し始めた。

性語辞典について

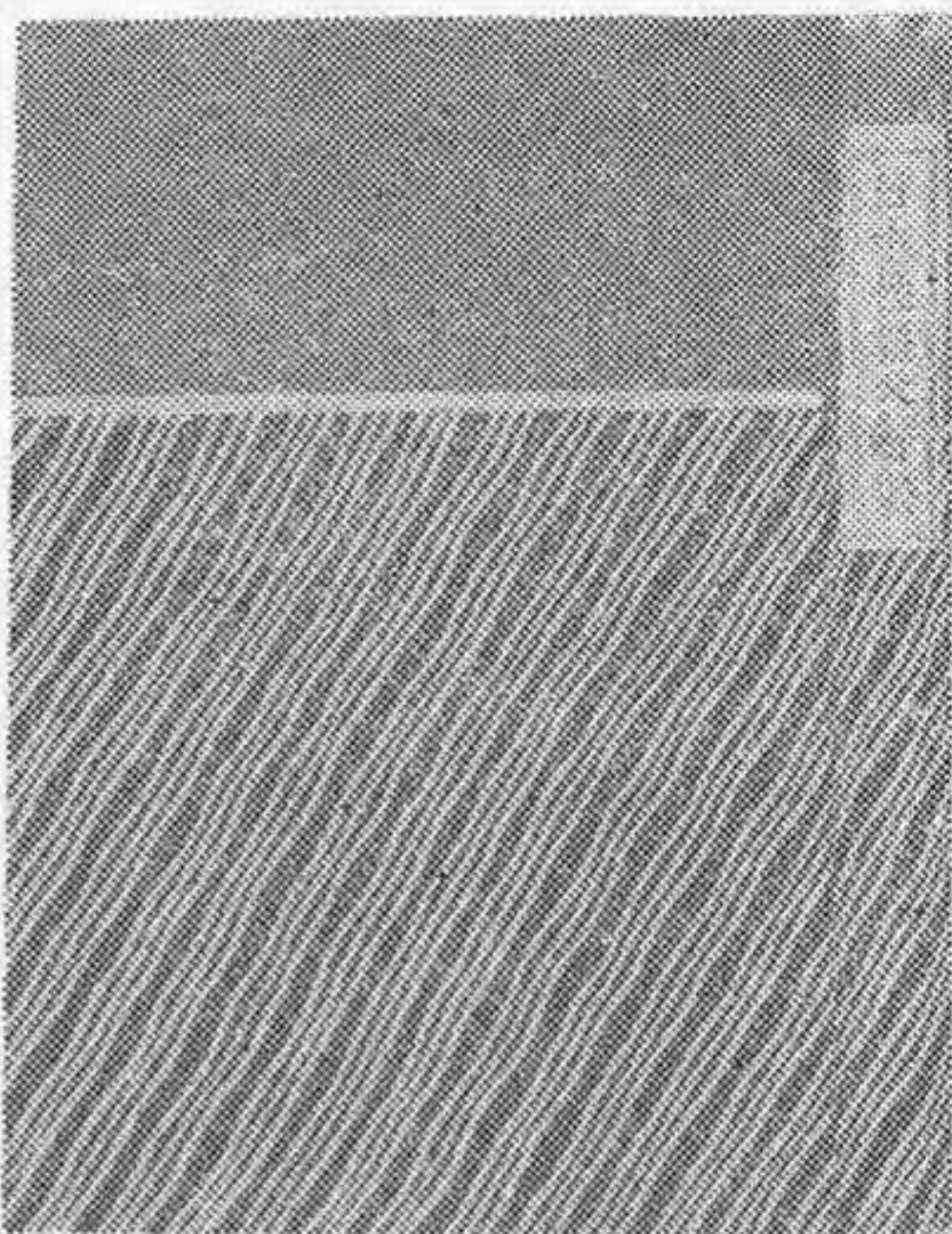
斎藤 夜居

「タブー」——イタリア映画マルチェリーニ監督——という映画はすでに本誌読者だったら、大半の方々は街の常設映画館のナイトシヨウなどでごらんになっていると思います。この映画は、世界の禁じられた風俗、歪んだセックス面など、見てはならぬ見せてはならぬタブーを追って、香港・印度・ビルマ・タイ・日本・北欧等の異習俗をカメラの眼で冷酷にキャッチした作品で、先ず始めの狂人を神聖視する印度の街道に横たわる裸女に強烈なるショックを感じるし、続いてサンピギの少年船員がいちどは必ず通過しなければならぬ被男色生活などと、実に生々しい場面があり全編必ずしも性の事柄のみを取材としてはいな

いが、展開されていく場面々々についての感動は、きたなくて血生ぐさくて、死の井戸・指つめ・牛糞燃料製造その他フィナーレの癪院などと残酷を裏返しした妙にねばねばするような肉慾的な感じである。所で、このタブーというのは、風俗語や性語にはありあまる程ある。日本には禁じられた言葉として、人口に膾炙^{かいしや}し女陰と性行為を現す諸氏ご存知の四字で現すいい言葉があるが、これを口に出したりするとロクデナシだとされているし、全国共通語で、しかも辞書に無いから不思議なことだ。性語も最近では、表現がずいぶん自由につかわれるようになったが、各家庭に於ける夫婦生活でも、この判り易いズバリ語が

どれだけ使用されているか、これはわからない。教養度が高い程つかい渋って、コトバと性愛生活の微妙な味わいが円滑にゆかないんじゃないかと思う。知識としての性用語は豊富だが、誰れでも知っている実用語がつかえないというのも不便である。また反対に、年中その一つ言葉でも倦きてしまうだろうし、禁じられた言葉ひとつだけで、生涯の性生活用語を間に合せてしまうというのも横着であるし、教養があまりにも、なさ過ぎることだ——。とにかく、性語は沢山知っていた方がいい。それから「性」に関する断片的な事柄に就いても数多く知ることは必要だ。その知的欲求をみたしてくれる書物としての「性風

「日本性語大辞典」 桃源堂主人



俗辞典」や「性風俗事典」についてちょっと触れてみたいと思う。性に関する通俗的な百科全書式のものには汗牛充棟であり、玉石混在であり、良書と然らざるものとの識別が困難であるばかりでなく、内容に至ってはどれもこれも同じようなものばかりで、売らん哉主義の露骨さばかり目立って真に性生活の伴侶とするに足る良書はすくない。初心者が一通りの知識として受入れる場合には、それでもよいとして、この種の辞(事)典式の類は十

冊も蒐めてみればすぐに分るところだが、同じ挿絵や図版、似たような焼直し記事、いつも何処かで聞いたような執筆者の解説で、全般に亘ってはいるが底が浅い。従ってこの章では余りありきたりのものや、書物として興味のうすいものは避ける。

○

『陰名考』この書に就て広田魔山人は次の如く説明している。

「性器の語源を古典によって究明したものである。其の始に、夢々世のざれ文と思う勿れと云い、其の跋文には、生

る麻羅毛のいと細やかに、流れる保豆祢のいと精しくとある通り、大真面な考証で、そこらによくあるセガレの得手吉、テレック作蔵など、興味本位の性語辞典とは、撰を異にしている一種の古語研究書である」と此の書を褒めている。魔山人は口うるさい艶本通で知られた考証家である。陰名考の著者・松岡調およびこの書の序文を書いた門人堀秀政に就いても記録している。また、陰名のうち最も問題の多いのは麻羅(まら)で

大勢は梵語説が有力だが、国学者や神道家はみな和語説を信じている。類聚名物考には和梵両語の暗号なりという中庸説もある由。左記の参考文献を掲げている。

麻羅本考 岡部東平 明治初期写本

氣象考 新居守村 明治十八年九月刊陰名考の姉妹篇ともいうべき内容。

古事記のミホトの研究 生田耕一 昭和六年五月。

古語の新研究 佐藤仁之助 昭和六年十一月刊麻羅は固有の国語説。

麻羅考 竹本抱久呂庵『ドルメン』(昭和9・7月号)

麻羅異考 学幽莊止水『ドルメン』(昭和9・10月号)

麻羅考に就て 南方熊楠『ドルメン』(昭和10・1月号) この稿は南方全集(昭和27・1乾元社)にも収められている。

麻羅には誰れでも苦勞させられるが、その語源追究ともなれば仲々の大事業だということとは、南方翁の考証を全集第三巻で繙けばよく判るし、ヒマにまかせて味読すれば麻羅通として立派に一本立ちできる。

『陰名考』の著者松岡調は多和神社詞官で、ちに琴平祢宣となった、神官で国文学者だっ

た。明治三十七年十二月に七十五才で歿したとの由。この書は私刊本で、今日では完本がなく、写本で伝えられて来た。昭和十年に無届出版の活版刷が出たが、これにより今までは流布されていた。現代の活字にない、俗字や作字が多く出てくるため、複刻がむづかしい書とされて来た。

然しながら、内容を読むためには『近世庶民文化』通刊七十七号（昭和37・6・15）に原典全文が掲出され、さきに記した広田魔山人の詳しい解題もあり、難字は孔版別刷を副えたので、全文を通読する便宜が与えられた。『陰名考』は麻羅、蕃登（ほと）、篇乃古（へのこ）、都毘（つび）、その他性器語の基本についての該博なる考証で性語研究資料として貴重な業績であったことをお知らせする。序文を草した堀秀成は、人間がにんげんの身体をかたちづくる為には、性器の交合によるのだが「なさけどころ」などと云って、かえって露骨な表現を避けるようにしている。けれどもそれがやがては人に成り出る始めなのだから、誠は真実尊い名称なのであります。という意味を述べている。仲々良い説だと思う。

活字版「桃源華洞」



『日本性語大辞典』 桃源堂主人編 昭和三年八月 文芸資料研究会編集部 定価五円

本文一五九頁 索引二三頁。奥付の著者は宮本良となっているが代理名儀人で編著者とは別人である。この書は性語辞典としてまとめられた最初のものである。また、発禁本としても著名書として知られて居り、戦前には定価の倍額でも入手できなかった。仲々に珍語も多いので、その一端を次に示してみよう。

あさまり 朝参り。昔下等の妓女の閨房

へ客の立去りたる後に青楼の若い者、性交の目的にて押入るをいふ。勤めのうさはらしに又脅迫的に行ふ者もありて一般に行はれしものの如く両者の間に内的関係（つまり恋愛）なきものはなかったといふ。

いんやけ 陰茎が性交の度を重ねるに従ひ、淫水の為次第に色黒くなり日焼けせし如くなること。俗語。

うはみづ 上水。先走りの淫水をいふ。

えてきち 得手吉。陰茎の一種

東京の俚語「えて」又は「えてもの」ともいふ。

おちゃわん お茶碗。無毛の女陰をいふ。

かいあわせ 貝合。女子同性愛。

かもじや 女の髪に入るかもじは死毛しにげにて作る故に女をさんざん玩弄して其の後捨てて顧みぬ不実男をかもじやと呼べり。仕

逃げ（死毛）の謎語なり。明治中頃行はれ今や廢語となれり。

きんぎょ 金魚。月経の隱語。金魚だおよしと鰻を入れさせず。

くさつび 臭気甚だしき女陰をいう。
けぶろ 毛風呂。女陰の一種。徳島の俗語。

又同地方では之を動詞に用いて性交のことを「けぶる」「けぶき」「けぶく」という。

ころぶ 転。情を通ず。又は淫売をなす。

俗語。さア事だ転んだ瘤が腹へ出来。

ざうもつ 雑物。女陰の内容物。

しうばん 週番。戦時花柳界における月経

の陰語。週番士官は赤纏をかけていた。

すそびんぼう 裾貧乏。好色淫奔なるをい

う。日夜の淫行に満足せず尚その不足を感

じつつある色餓鬼。

等々、語彙は約千百数語あって性語辞典と

しては初期の労作であった。編者桃源堂主人

は京都の薬種商で山本定一という人で、のち

に平井蒼太と共に特殊性研究雑誌『麻尼亞』

を昭和七年十二月より七冊発行した。軟派研

究家であった。ジレットタントの仕事ではあっ

たが、次に述べる『桃源華洞』などと同様に

世に隠れた、おもしろい業績をのこしたもの

だ。

○

『桃源華洞』については『日本

艶本大成』には次の如く解説

が出ている。

「本書は半紙・和綴・孔版刷

・約七〇〇頁、昭和九・十年

頃流布され、著者は、龍王山

人。何人の隠号か判明せず、

多くは、写本で伝えられてき

た。（別に戦後版の抄本活字

本がある）内容は、女性器の

研究で、プロローグ・名称・

形状・構造など十項目に分け

て解説し、古文獻・川柳・俗

謡などを引用している。なお

孔版偽版ものは二種類あるが、いずれも四
〇〇頁程度で、これには挿画・文章が多少
省略されている」

この書は女陰百科事典とも称すべき奇書と

して、珍書愛好家には広く知られて来たが、

謄写版原本はもとより少数作られただけであ

ろうし、その後の写本・孔版偽版ものの数も

限られ、名のみ知られて実物を読んだ人は少

なかった。所が、戦後になって軟派出版大流

行の波に乗じて、昭和二十七年に複製活字本

が出て、今日ではこの書によって普及されて

いる。

〔註〕活字版『桃源華洞』A5・和綴・二

六五頁、奇書刊行会

内容。プロローグ、名称について、形状に

ついて、構造について、異名と隠語、形容

と譬喩、品等について（人相との関係）

惜しむべきことには、この活字本では百五

九図以上ある挿画を全部省略してしまい、

「地名に現はれた女陰」及び「俗謡」の二

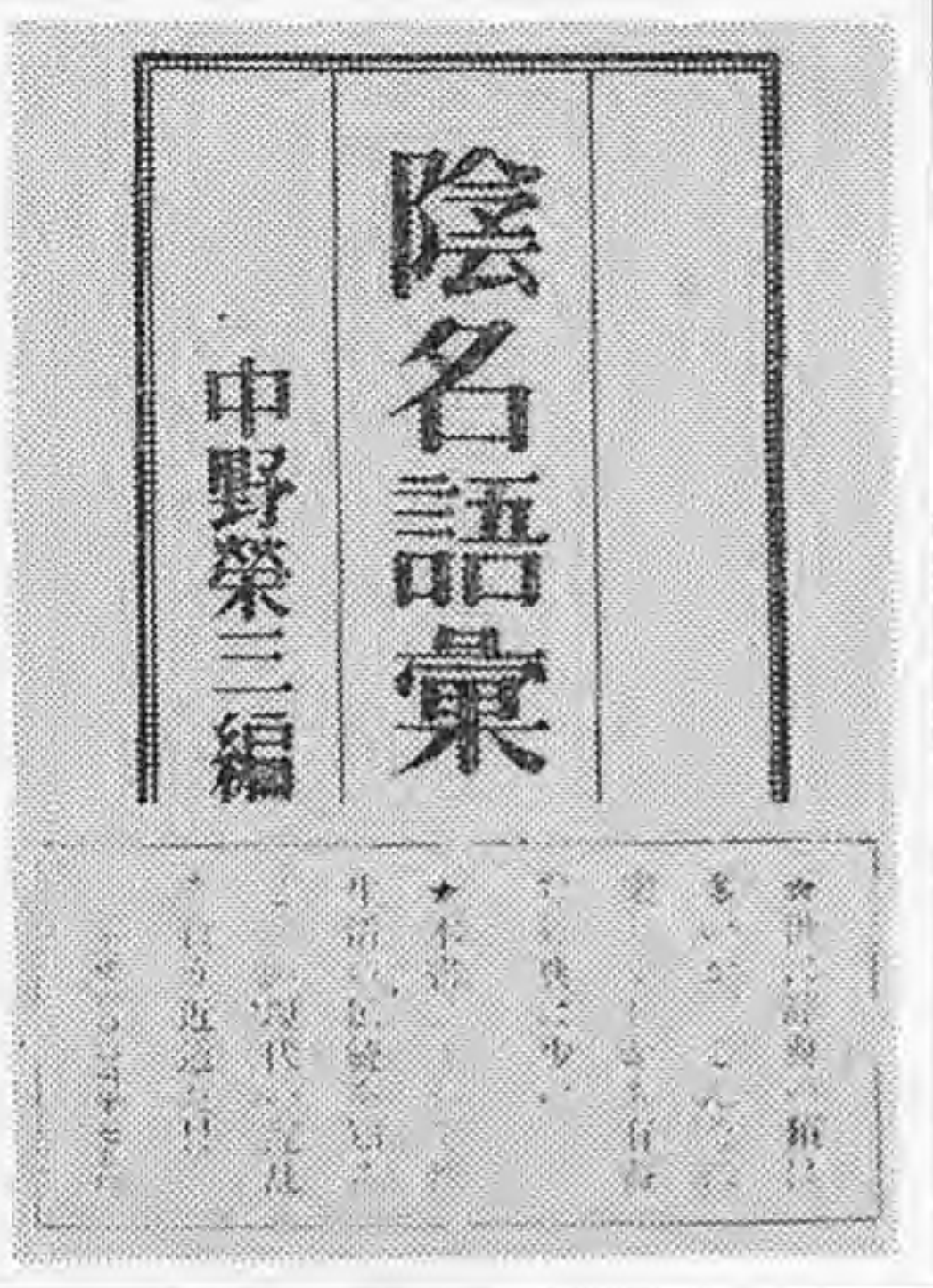
項目を削除してしまった。読物としてはこ

れを除くことは当を得たことかもしれない

が、文献という点でいくら軟派出版とは申

せ、刊行者は骨身を惜しみ過ぎる。従って

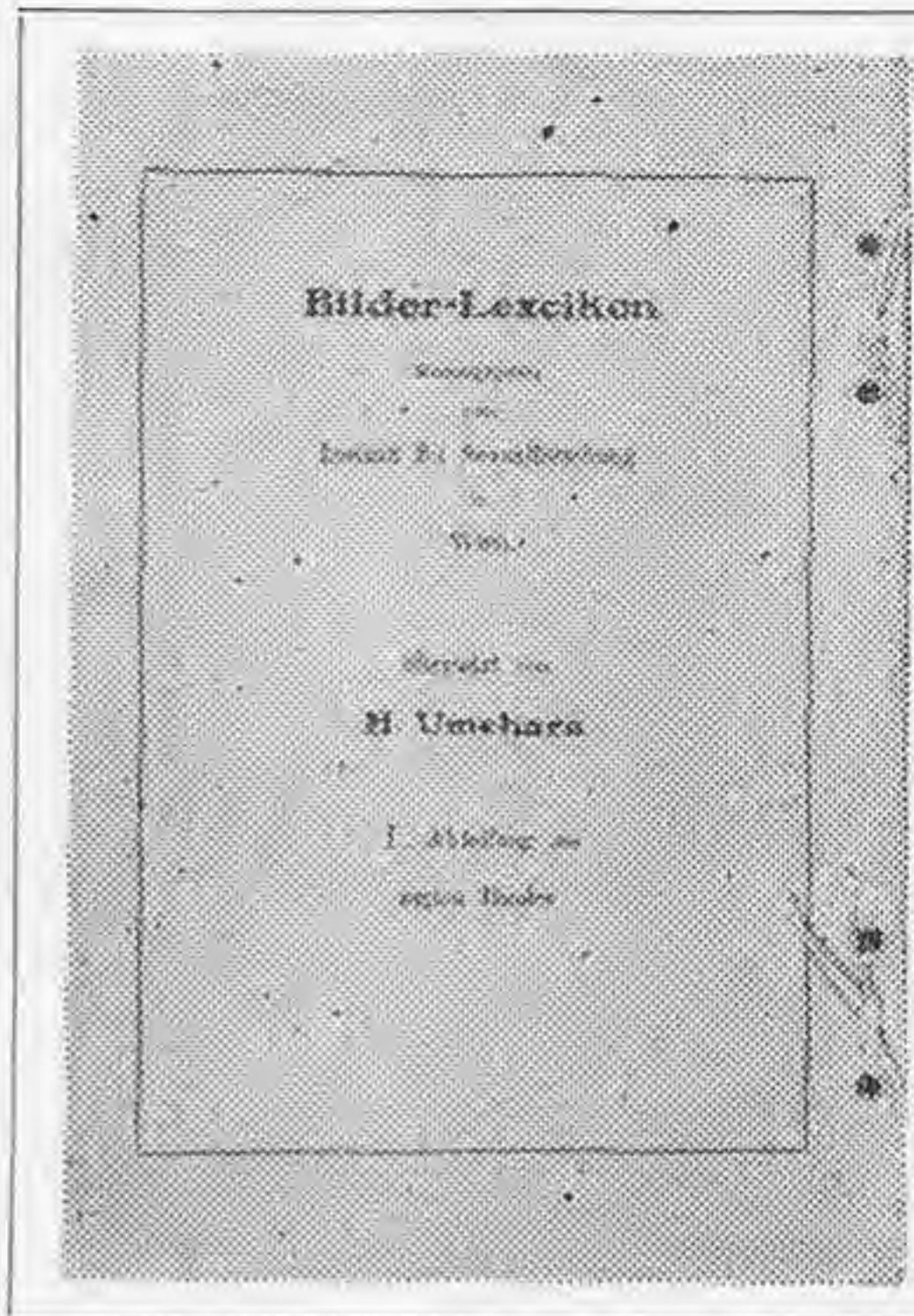
今日では桃源華洞の全貌をうかがうために



「陰名語彙」

中野榮三

梅原北明訳「ビルダー・レキシコン」



内容も豊富で、事柄の意味を分り易く記している。

『陰名語彙』中野栄三（昭和27・12紫書房三九九頁）。

『江戸秘語事典』中野栄三（昭和36・6雄山閣五八三頁）。

『性風俗事典』中野栄三（昭和38・8雄山閣四一一頁）。

性語および性風俗語を集大成した。ほかに中野栄三編著としては『遊女の生活』（昭和40・4）と『廓（くるわ）の生活』（昭和43・6）の二部作があり、遊里生活史をまとめた。またこの書には性風俗書誌も多く記載されていて良い参考になる。

○

『近世風俗語集成』花咲一男（昭和27年頃）

孔版本の未定稿ではあるが、この分野の真剣な研究は少いので貴重な参考資料とされている。又『いんすいごゐ』近世文芸に現れたる精液の名称について——、孔版五四頁の小冊子だが、近世文芸と云っても徳川期艶本類から引例して、次の性語彙を考証した。

飴。いも汁。うは水。おおみづ。おねば。きみづ。玉水。こころの水。さきばしりの淫水。した露。白い吐血。白き涙。白酒。白血。白泡。白みづ。精汁。たまり水。ためいん。ためため。腎水。ところてん。とろろじる。なさけの露。なさけの水。納豆汁。はしり淫。ひめのり。菩提水。松やに。水。水あめ。よがり水。

いずれも精液を意味する俗語であって、数は少いが研究方法としてはオリジナルである。この冊子には巻末に、

ひとごとひとつのくせはあるものを、われにはゆるせばまらのみち

という狂歌を載せているが、恐らくは当時の編者の所懐を詠んだものであろう。

次に有名な海外の性語大辞典としてよく知られている『ビルダー・レキシコン』については遂に我国では完訳が出なかった。梅原北明はこれを「絵画本位好色学的・性慾語百科大辞典」と称して企画を発表し予約を募ったが、五分冊のみ発行して、あとは未完結に終ってしまった。昭和四年十月のことで談奇館書局と云っていた頃であった。

は『稀書』第九冊の森山太郎紹介のこの削除の二項目、日本生活心理学会のリポート33にあるヨニ・シムボル研究の奇書、として紹介された解説図などと併せて見なければならぬ。

『日本性語大辞典』と『桃源華洞』共に著者は山本定一であった（坂本篤説、信用するに足る）。この人は戦後にはその業が振わずひとのみち教団に帰依したりしたが、その後のことは判っていない。

尚、戦後刊行の辞典・事典としては左記が



告

白

妄想と現実

星 野 薫

私の家の一軒おいた右隣りに、若いご夫婦が住んでおられます。そのお家にはボブという名の大きなシェパードが飼われています。朝夕の散歩で、奥さんがひっぱられて、うろたえる。たくましく、それでいてスマートなボブは、私にもよく慣れていて、手を差出すとペロペロと舐めにまいます。

私は、いつの頃からか、時としてとんでもない幻想になかなか寝つけない夜があるようになっていますが、色々な妄想が知らず知らずの間に湧いてきて、気づいては頬を赤らめてしまう事もしばしばです。現在、特にこの人、ということはありませんが、誘われれば

強いてお断りはしない程度にお付き合いしている男性は三、四人います。床の中で突然に起こってくる妄想の中には、この人たちが主に出てきますが、時には全然知らない男も交わることがありました。でもそれが近頃は余り出てこなくなりました。出る事は出るのですが、いわば脇役のようで、私を餌にかけたり、着ているものをはぎ取って縛り上げたりするだけになって、主役、つまり最後に私をめっちゃめっちゃにくれる主人公は、そのボブということになって来たのです。

ひとり描く幻想が、いつも縛られて弄ばれることになるのだから、私はマゾの素質がある

ることは間違いありませんが、知らぬうちにボブが幻想の中に出てきたときには、あとでわれながら異常だと思いました。

自分をだれかの手でめっちゃめっちゃにしたいという気持は、仲の良いお友達の中の一人から、冗談まじりで聞いたことかあって、その時には、私だけじゃないようなのに少し安心したいな、恥かしいみたいな気持ちになったことがあったのですが、犬にそんなにしてもらう妄想にとりつかれるなんて、どう考えても普通ではありません。

私は自分の気持が恐しくなって、精神病ではないかと思ったりしました。高校時代に読

んだ里見八犬伝を思い出しましたが、初めて読んだ時にも別に何もとりたてて魅かれた覚えもないし、とくべつ犬が好きというわけもないのに、こんな妄想をするのは、頭がへんになったのではと、とても心配しました。

深刻な気持になって、もうそんなことは考えまいと強く決心もしたのですが、フトしたことから発展する妄想の中に、ついボブが現れることになってしまい、打ち消そうとすればするほど、実感をもって襲いかかってくるようになるのでした。

私は近くの化粧品店にお勤めしてありますがお友達などの冗談では、ずいぶんろこつなこともいい合う時もあるのですが、さすがにボブのことはおくびにも出せません。でも日が経つに従って、たまらないようになって来しい気になることが度重なるようになって来て、妄想はだんだんに深まってしまったのです。いくらいらだっても、男お友達のだれかに……と考えるとつい決心がつかずに打ち消してしまえるのですが、ボブは畜生だから……と思うと、だから余計にそんなことは考えられない、という気持と、畜生だからこそ誰にも知られずに済むのでは、という気持とがいりまじって起こってくるのでした。

ずい分、悩みました。決心するまでは、あらゆることを想定して悩んだつもりでしたが決心がついて手筈を考えようとすると、悩んでいたつもりのことが、殆んどが手筈のことばかりだったことに気づいて苦笑しました。

そこへ、両親が郷里へ帰らねばならぬ事情が出来た幸い(?)が舞い込んで、私は内心踊り上りたい気になりました。普通なら心細く、お友達のだれかに泊って貰いたくなる留守番を、そうするからといって、一も二もなく引き受けたのでした。

絶好のチャンスです。もう、最初に感じていた不安だとか罪悪感なんか、どこかにフキ飛んでしまっていたのが不思議なほどです。私のこの体が、ボブのたくましい四ツ足に踏みしめられて腕にしているさまが頭の中に一杯ひろがって、その日のくるのが本当に待ち遠しく仕方がなくなりました。

其の日が来ました。留守になった家を一巡した私は、いよいよ決行にかかりました。

強いてさりげなく、頬のあからむのを無理に押えながら、ボブを借してくれるようにと頼みました。奥さんは何も聞きもしないで、こころよく鎖を手渡してくれました。とたんに私は全身がカーッと火照るのを覚えて、大

急ぎでボブと共に走り出しました。

公園まで出て一休み。改めて見るボブの堂々たる姿。……やはり止そうかな、とちょっと気遅れして思案していると、ボブが近づいて来て鼻を寄せてきました。何気なく、その頭をなげてやるとペロリとその手が舐められました。私のためらいは、その一舐めできれいに舐め取られたようでした。

「行こう、ボブ」

私は自分にいうようにして、まっすぐ家に駆けて帰ったのでした。

念を入れて戸締りをする、すぐにボブを浴室につれて行きました。きれいに手入れはされていますがたつぷりと石鹸をつけ、シャワーで洗い流してやったボブは、輝くようにキレイになりました。あのお家でもいつもシャワーを使っているのか、ボブは私が考えていた程はいやがりません。

閉めきった浴室で裸になることは、なにも恥かしいことはない筈なのに、その時の私は、それだけを着て入っていた下着を脱ぐだけのことが、大変に思い切りを必要としました。幻想の中では、だれかがむしり取ってくれるのですが、その暴漢は今現れてくれません。妄想の中のボブは、縛られて転がされ

た私のどこかに、破り残りの布切れでもあれば、すぐに噛みとってくれるのですが、今のボブはお行儀よく坐って、じっと私を見上げていだけなのです。私は思い切って脱ぎました。見上げるボブの不思議そうな眼が、居たたまれぬほどの羞恥を呼び起こさせます。と同時に、カーッと私の全身の血が湧き返えるように騒ぎ始めました。

後は、もう夢中でした。

ボブをつないであった鎖を、自分の手で胸へ這わせ、後へ廻した両手で握ってしぼり、タイルの上へ転ったのです。鎖の冷い感触とタイルの冷たさは感じましたが、却ってこころよいぐらいでした。

ゴロゴロ転って行った肌に、ボブのフサフサとした毛並が冷たく濡れたまま触れます。
「サア、やって頂戴、ボブ。いつものようにめっちゃめっちゃに……」

妄想の中では、ボブはいつもノドの奥で唸りながら、私の体に前肢をかけ、押えつけるようにして肌を舐め始め、だんだんと狂暴になつて所かまわず咬みついたり、大きな体全体で踏み廻ったり、冷めたい鼻面で押しまくったり、私の体の上で寝そべったり、それこそ狂ったようにいじめ抜いてくれるのです。

そして最後には、牝犬同様に扱って私を屈辱の泥沼にたたき込んで消えて行くのが、だいたい決ったコースです。

私は、ボブの毛並の先端でチクチクするのと、時々触れる鼻先の冷たさを肌に感じながら、そしてウーウッというような唸り声を耳にして、今か今かと来襲を待ちました。じつと眼を閉じて投げ出した裸身を固くして、胸の鎖りをさらに引き絞って……。

だがどうしたことでしょう。一向に、私の腕の辺りを押しつけているボブの前肢は動く気配がないのです。私はイライラしました。

「ボブ、どうしたの。はやく……」

催促のつもりで、更に体ごとボブを押してやりました。すると、どうでしょう。奇妙な声を一声出ただけで、ボブはトコトコと浴室の片隅へ行ってうずくまってしまったのでした。アラッと思った私は、思わず、縛られている積りの鎖を離して上体を起こします。ボブが寝そべって、前肢にのせていた顔を上げて私を見て、クーンクーンと鳴きました。とても襲いかかってくれる気配などみえません。私はガッカリしてしまいました。

「ボブには、こんなキレイな肌がわからないのかしら」

と、私は口惜しくなりました。

「やはり、男の人にすればよかった。あの人達なら、きっと喜んで襲ってくれただろう」

とその時には思いました。でもそれは、ボブに振られた(?)口惜しさを、知らず知らず自ら慰めていたのかも知れません。

なんともやり切れないような後悔めいた気持と、いらだたしさの入り混った複雑な気持ちで、思わず涙ぐんでしまったのですが、虚脱したような私を気付かしてくれたのは、ゾクッとするような寒さでした。

こうして、悩み抜いた上に考え抜いて、悲想な決心までして決行した私のプレイは、あつけなく失敗してしまいました。落着いて考えてみると、われながら何と愚かしいバカな女だと思えますが、恥かしながらあの時には本当に真剣でした。あの時のことを今思うとつくづく失敗でよかったと思いますし、男の人を選ばなかったこともよかったと思いますけれど、一面ではやはりまだ未練みたいなものもあるのです。

私のような女は、やはり妄想の中でひとり苦しんだり楽しんだりしているほうがいいのでしょうかね。お嫁に行くまでは……。

(カット・山崎岩尾画)

緋

ひ

縮

ぢり

緬

めん

地

じ

獄

ごく

(第九回)

白鳥大蔵

反逆の時

岩松の巨大な団子鼻のさきから、ポタポタと汗がしたたり、天井裏の埃だらけの板の上に落ちた。

汗が目のなかへ滲みこむ。太くてみじかい猪首からも、汗がふつふつと湧きだしているが、それをぬぐうこともしない。

汗にまみれ、埃だらけになりながらも、天井裏の節穴から、目を離さない岩松だ。

いや、離さないのではなくて、離せないのだ。

真下の部屋では、いまが最高潮だった。

お静はもう、声もだせずに、髪をざんばらに乱してのけぞっている。歯と歯を噛み合わせるキリキリという音だけが、お静のくやし最後の抵抗を示していた。

しかし、お静の抵抗も最後まで、すでにもう終っているのだった。ここまで追いつめられては、もう、のがれるすべのない大津屋の女房お静であった。

半分死んだようなお静のからだに、久六だけが、執念ぶかくまだ脂っこい攻撃をつづけているのだ。

獲物の咽喉に噛みついて血をすすった狼が

さらにその白い肉を食い散らかし、終りにこんどはゆっくりと骨をしゃぶりつくそうという、飽くことを知らない久六の欲望だった。

片腕を斬り落とされ、その傷口がまだ癒えきらない苦痛によるめきながらも、まだ敢闘をつづけているのだ。

その姿勢には、醜悪というよりも、一種の悲愴感がみなぎっていた。しかし、さすがに疲労が重いせいか、肩で荒い息をつき、あぶら汗を浮かべている。

ここまできると、被害者のお静よりも、むしろ、加害者である久六のほうが痛々しい感じであった。

——さすがは久六兄貴だ。女に対する執念も、ここまでくれば立派なもんだ。いや、おそれいったぜ。

岩松は、天井裏に這いつくばりながら感心した。

それにしても、久六にこれだけの情熱を持続させたお静の魅力も、またたいしたものといえるだろう。

——いい女だ。胴ぶるいのくるほど、いい女だ。あの肉づきがたまらねえ！

岩松は、腹の中で、なんどめかのうなり声をあげた。いつのまにか岩松もまた、お静の美しさ、色っぽさに魅惑されていたのだ。

おれも男に生まれたからには、生涯に一度ぐらい、あんな女を抱いてみてえ……という願望が、いつのまにか、ようし、おれもきつと、一度は抱いてやるぞっという決意に変化していた。

その決意は、たちまち現実の欲情となって岩松の人一倍頑丈な五体に、むくむくとふくれあがっていく。

いまのおれの実力だったら、やってやれねえことはねえ。

久六はあの通り、右腕を失った片輪者だ。寺尾半九郎などという強そうな用心棒をつ

れているが、あんな浪人者を護衛につけるということ自体が、つまりは落ち目になった証拠じゃねえか。

いま久六を殺っちまえば、立花屋一家の縄張りも、自然におれのものになる。

ここまで考えたとき、岩松の肌から、汗がひっこんだ。この大きな反逆を考えると、冷静にならざるを得ない。

久六の執念ぶかさは、いまのお静に対する復讐をみても、よくわかる。だから、やり損なったら、あとが大変だ。

絶対に失敗しないように、注意ぶかく、しかも大胆にことを運ばなければならぬ。やるか、やられるか、だ。

岩松は、額にふかい皺を寄せ、唇をへの字にむすんだ。赤黒い醜悪な顔が、うす暗い天井裏のあかりの中で、いっそう醜悪にゆがんだ。

下の座敷で、このときお静が、また悲鳴をあげはじめた。

「ひ、ひひひひ……」

という、語尾を細くひきずるような悲痛な声だ。同時に、畳の上をころがりまわる気配がする。久六の、なにかしきりにうめく声。

岩松は、あわててまた、天井板の節穴に目

をあてた。

血 かんざし

「久六さん、も、もう、ゆるして……」

あえぎあえぎ、お静の白い顔が久六に訴えている。裸のからだだが、波のように屈伸している。

うしろ手に縛られたまま、久六の牙に存分に食い荒された女体であった。汚辱にまみれたはずなのに、お静のからだは、いっそう美しく、油をぬったようにぬめぬめと光っていた。

「どうした、お静。こ、これからが本当の勝負だぜ」

久六の声も、疲労のためにかすれている。だが、左手のさきは、まだ執念ぶかくお静をさぐり、なでまわしている。

「負けた。あたしや、お前さんに負けたよ。もう駄目だ。あたしはもう、大津屋へはもどれない。……もうあきらめて、お前さんのものになるよ。強いねえ、お前さんてえ人は。……あたしやもう、負けたよ」

とぎれとぎれに、お静はいった。髪が乱れ落ちて、肩からふきでる汗にぬれ

ている。白い肩に、黒い髪の毛が貼りついて
いる光景は、それがうしろ手に縛りあげられ
ている女だけに、妖気のただようほどの凄艶
さだった。

「本當かい、お静。本當に、おれに参ったか
い」

ぺろりと上唇をなめながら、女の表情をう
かがうように、久六はいった。

「こんなからだになっちまったんだよ。申し
わけなくって、いまさら彦兵衛のところに帰
れやしないよ」

うしろ手に縛られている両手首を、こすり
合わせるようにして身を揉みながら、泣きそ
うな声で、お静はいった。目の奥には、涙が
キラリと光っている。

「そりゃまあ、そうだな。芸者のころとはち
がって、いまのおめえは、れっきとした廻米
問屋大津屋彦兵衛の女房だからなあ」

勝ち誇ったひびきが、久六の微笑の中にあ
った。

彦兵衛め、ざまアみやがれ。一度はてめえ
に横奪りされたお静だが、とうとうおれのも
のにしちまったぜ。

「あたしゃもともと、お前さんのものになる
運命だったのかねえ。芸者ふぜいが、堅儀の

店の内儀さんにおさまるなんてことは、しょ
せん、無理だったのかもしれない……」

沈んだ、あきらめの声音で、お静はひとり
ごとのようにつぶやいた。

「大津屋彦兵衛が堅儀だって?……ふん、笑
わせやがる。あいつは、抜け荷買いをやって
るんだぜ。堅儀どころか、御法の裏をゆく大
悪党だ。おめえをここにひっさらってきたの
は、おめえへの恨みを晴らすためもあるが、
おめえを人質にして、大津屋の抜け荷の秘密
をあばこうっていう、おれの魂胆もあるんだ
よ。どうだ、おどろいたか」

「……」

お静はだまった。抜け荷買いのことは、久
六にいわなれくとも、うすうすは感づいてい
る。

「おめえとお雪を人質におさえておけば、こ
っちの勝ち目は目にみえている。この立花屋久
六にみこまれちゃ、蛇ににらまれた蛙も同然
……大津屋も、もうおしまいだ。大津屋から
この久六さまに乗りかえようってのは、さす
がはお静、おめえは、りこうな女だよ」

久六は、自慢そうに、鼻のさきをうごめか
した。

「ねえ、久六さん、そうと話がきまったら、

とにかく縄を解いておくんなさいよ。こうき
つく縛られていちゃ、どうにもこうにもなり
やしない。痛くて痛くて……」

お静は、腰をひねるようにして身悶えた。

「そりゃまあ、解いてやらねえこともねえが
……いま言ったことは、嘘じゃあねえだろう
な?」

と、久六は用心ぶかい。

「なにが嘘なもんか。これだけからだを汚さ
れりゃあ、もう堅儀のお内儀とは、いやでも
お別れさ。いかにあたしが芸者あがりのあば
ずれでも、もう大津屋へは帰れやしないよ。
あたしゃもう、お前のいうとおりの女になる
よ」

さすがに、お静はしんみりした表情になっ
た。

「そうだろうなあ。おめえがこの座敷で、素
ッ裸にされて縛りあげられ、おれになにをさ
れたか、娘のお雪だって、生き証人になるか
らな。ふふふ……どうだ、お静、おれの怖し
さがわかったか」

「肌身にしてみてわかりました。ねえ、久六さ
ん。お願いだから、この縄を……」

お静は、不自由なからだを、ころがすよう
にして、久六の前に寄せてきた。

憎しみがすべて消え、いとしいものを見る目つきになって、久六はお静の裸身を改めて眺めた。

「ねえ、お願い……苦しくて、苦しくて死にそうなんです……」

やわらかい素肌に、寸分のゆるみもなく縄がくいこんでいるのだ。おまけに、汗のために縄がぬれて、いっそう強く噛みこんで両腕を背中に固定させている。

とくに、乳房の上下にまわされている数本の縄の固さは、お静の呼吸を寸断するほど強くしめつけている。

「こっちへ背中をむける。なるほど、お仙のやつ、器用に縛りやがったな」

久六は、あきれたようにいった。

手首のところから縄を解きはじめるのだが左手しかない久六には、なかなかうまくいかない。

「早くしておくれよ、久六さん。痛くて痛くて、手首がもぎれそうなんだよ」

お静は、泣き声をあげて、さいそくする。「そうだろうとも。指のさきが、白っぽくなってるぜ」

観念したお静が、お前のものになるといったとたん、久六の表情がゆるみ、声音がやさ

しくなった。この男、よっぱどお静に惚れているのだ。

久六は、左手を使って、やっとお静の縄を解いた。

雪のように白くて、むっちりやわらかいお静の肌に、縄目のあとがむごたらしい紫色の模様をみせてしみついている。

「ありがとう、久六さん、ご恩は一生忘れません」

お静は、ひと息つくと、乱れに乱れた髪の毛をかき撫でながらいった。

「縛られているおめえの姿は、ぞくぞくするほど色っぽくて天下一品だが、縄のないおめえもまた、オツなもんだなあ」

そんなことをいいながら、久六はまたにじり寄って、お静の乳房に左手をしつこくのばしてくる。

「いやですよ、久六さん。あたしゃなんだか急に恥ずかしくなってきましたよ。なにか、着るものをくださいな」

髪を撫であげているお静の右の手が、珊瑚玉のかんざしをつかんだ。

そのかんざしを抜いて逆手に握りなおすといきなり、久六の目の玉に、力いっぱい突き刺したのだ。

「うわッ！」

久六は、悲鳴をあげた。久六の右眼から、たちまち鮮血がほとばしった。

「ち、ちくしょう、や、やりやがったな！」

左右の目が、あふれでる血のために、視力を失った。激痛が走る。左手で、血のふきでる右眼をおさえた。その指のあいだから、血があふれでくる。

「ぎ、ざまアみやがれ。あたしが、お前みたいな男のいうままになってたまるかい！」

鉄火な芸者の口調になって、お静はのしった。お静の顔も、蒼白になっている。

血にぬれたかんざしをその場に投げすてると、お静はすっと立ちあがった。逃げるのだ。

身をひるがえすと、障子に手をかけた。

が、お静はそのままの形で、ハッと立ちすくんだ。

一糸まとわぬ裸身なのだ。いかに気丈なお静でも、素裸のまま外へとびだしていく勇氣はない。といって、縛られる前に剥ぎとられた自分の着物を、いま探がしている余裕はない。

障子に手をかけたまま、お静の足がためらった。

「ううう、だ、だましやがったな！」

久六は片眼をおさえ、腹這いになったままうめいている。刺されたのは右の目だけだがあふれでる血が左眼までふさいで、視界は完全にふさがれている。

激痛のために、人を呼ぶこともできず、お静を追うこともできない久六だった。

「く、くそ……お、お静……」

久六は、片眼をおさえたまま、畳の上をころがりまわってもがき苦しむ。血が、あたり一面にとび散る。

裸の身をためらって立ちすくんでいたお静は、思いきって障子をあげた。廊下伝いに、すぐ裏庭へぬけることができる。

とにかく、久六の手のとどかないところへ逃げなければならぬ。娘のお雪を助けるのは、それから後のことだ。

あわてたのは、天井裏にひそんでいた岩松だった。

事態は、意外な方向に発展してしまった。まさか、ここでお静の逆襲があるうとは、考えてもみなかった。

久六が目を突かれたのは、岩松にとって、もっけのさいわいと言えようが、お静に逃げられては困る。

岩松は、天井裏をネズミのように走った。

自分の居間の天井板の上へもどって、押入れから畳へとびおりる。同時に、さげんだ。

「野郎ども、出てこい、女が逃げた。逃がしちゃならねえ、女をつかまえるんだ。裏庭へまわれ、逃がすんじゃねえぞ！」

見世物師のただっぴろい家の中に、岩松の声が飛んだ。

打てばひびくように、あちこちの部屋から人相の悪い男たちが、バラバラッと廊下へとびだしてきた。

汚れた縄

廊下から裏庭の地面にとびおりて、十歩と走らないうちに、お静はとりおさえられてしまった。

「やつ、こいつはすげえッ、素ッ裸じゃねえか！」

「たまらねえや、この色の白いこと、やわらけえこと！」

「おい、おれにもさわらせろ！」

「てめえ、変なことするんじゃないぞ！」

った。

岩松が、廊下の向こう側からやってきた。

両手をねじあげられて観念しているお静をみると、にやりと笑って、

「おい、長襦袢ぐれえは着せてやれ」

顎をしゃくって、傲慢にいった。

長襦袢を着せろとは、慈悲のあるように聞こえるが、お静の白い素肌を、子分たちの目にみせるのが惜しかったのだ。

「お願いです、助けて。お金はいくらでもさしあげます。私を助けてください！」

きわどい所へのびてくる手を、腰をひねって避けながら、お静は岩松に哀願した。一難去ってまた一難とは、このことだ。

「だれか、長襦袢を持ってこい！」

岩松は、いらいらして怒鳴った。

子分の一人が、赤い長襦袢を持ってきて、お静の肩から、かぶせるようにして着せた。

「お静さん、といったな。裸で逃げだすなんて、度胸のいいお内儀さんだ」

長襦袢を肩から羽織って、お静はその場にうずくまった。もう逃げる意志も方法もなくなった。

男たちの卑しい遠慮のない視線が、じろじろと自分にそそがれて、さすがのお静も消え

いりたい気持ちになる。

「お金は、いくらでも、お望み通りさしあげます。どうか、家へ帰してください」

お静は、両膝を地面にそろえて哀願した。

「金なんか、欲しくねえ。こう見えても、金には不自由のねえ、ヤレツケの岩松だ。おれが欲しいのはな……」

岩松の目が、お静の胸のむっちり盛りあがったあたりへそそがれた。

「お前さんの、からださ」

お静は本能的に、ひとと両肩をすくめた。

ああ、この男も、あたしのからだを狙っているのか。お静は絶望した。

「野郎どもは、もう部屋へもどれ」

岩松は、あたりを見まわして命令した。

そして、お静の片腕をつかんで、自分の居間へ引き立てた。岩松の腕力は、おそろしく強かった。お静は、なんの抵抗もできずに、ずるずると引きずられた。

自分の居間へ、お静とともに閉じこもったとき、岩松の脳裡に、かんざしで目を突かれて苦悶している久六の姿が、チラリと浮かんだ。

本来ならば、すぐに医者と呼んで、手当てをしてやらなければならない。それが、弟分

としてのつとめだ。

しかし、見世物師岩松の心は、このとき、ひどく冷酷になっていた。

あのぶんなら、おそらく久六の右眼は、つぶれるだろう。

そう思うと、ゆえ知れぬ快感が、岩松の胸にうずいた。それは、お静の肉体を、思うままに踏みにじった久六に対する、嫉妬かも知れなかった。

あのまま死んでくれれば、一番手っとり早くていいのだが、そんなにこっちの思い通りには、いくめえ。

しかし、片腕、片目になってしまえば、いくら強欲で不死身の久六だって、もう一人前の働きはできねえ。放っておいても、たいした害にも毒にもなるめえ。

岩松は、そう計算した。

あとは、めかけのお仙と、用心棒の寺尾半九郎が残っているだけだ。

が、お仙は女だ。始末するのは、わけはねえ。あの二本差しにしたって、しょせんは、金で買われた用心棒である。金で始末のできないはずはねえ。

待てば海路の日和というが、とんでもねえ福の神が舞いこんできやがった、と岩松は舌

なめずりをした。

「あ、あたしを、どうしようというんです」座敷のまん中にひきすえられたお静が、長襦袢の襟を必死にかき合わせながらいった。

「そんなにびくびくすることはねえ。お前さんに、ききてえことがあるんだ」

岩松は、うしろ手で障子をしめながらいった。細い目をいっそう細めて、お静のからだの線を眺める。赤い長襦袢にかくされてはいるが、お静の肌の白さは、岩松のまぶたの裏に灼きついていく。

あの長襦袢を剥がす果報者は、こんどはおれだと思っている。

久六がこの女にあたえた通りの辱ずかしめを、いや、それ以上の屈辱と羞恥を、この女にほどこしてやろうと思っている。

「その前に、すまねえけどな、お前さんの手を、縛らせてもらいてえんだ」

押入れの中から、一束の縄を取りだしながら、岩松はいった。

これも、見世物道具の荷造りかなにかに使う縄なのだろう、黒く汚れていて、よく使いこんである細引きだった。

縄をみた瞬間、お静の顔色から、血の気が去った。

「縛らなくなつて、あ、あたしはもう、逃げやしません……」

お静は首を横にふり、声を咽喉につまらせながらいった。縄目のおそろしさを、思う存分、知らされたお静だった。

縄、という言葉がでただけで、お静の全身は嫌悪のために総毛だつた。

縛られて、そして肌身を汚され、なぶられ責められた数々の恐怖と苦痛は、まだ記憶に新しい。新しすぎる。縄は嫌いだ。縄はおそろしい。

なのに、この男も、私を縛るという。黒く汚れた縄を持って、私にせまってくる。

この男も、やっぱり気がいなんだ。

久六と同じ仲間の、気がいなんだ。お静は戦慄した。

「おれはな、本当は、お前さんを縛ったりなんか、したくねえ。……だけど、なあ、お静さん。その手を縛っておかねえと、おれもいつ、目玉をつぶされるか、わからねえからなあ……。おれは、片目になるなんて、まっぴら、ごめんだ」

「……」

お静は、絶句した。

この男は、あたしがかんざしで久六の目玉

を突いたことを、もう知っている。どこで見ていたのだろうか。

「いい突きっぷりだった。なかなか気丈なお内儀さんだ。感心したぜ。だが、こんどはおれの番だ。感心ばかりしちゃいられねえ。そこで、用心のために、そのすばしっこい手を縛らせてもらいてえのさ。……なあに、そんなに強くは縛らねえ。手を動かせねえ程度にかるく縛っておくだけだ」

岩松は、縄をしごきながらいった。

じりじりと、お静は後退した。

この男の身边には、久六よりも、もう一つ陰気な、暗い、冷酷な気配が、不気味にたちこめている。

「かんにんして、もう、縛るのだけはかんにんして！」

あとずさりしながら、お静は哀願した。

もう、たくさんだ。こんな、野卑でうす汚ないけどものの自由にされるのは、もうたくさんだ。

長襦袢の裾が乱れて、ねっとり白い腿の内側がみえた。岩松は、ごくりと生唾をのみこんだ。

「なに、そう嫌うことはねえじゃねえか。

おめえが久六に何をされたか、おれはちゃん

と知ってるんだぜ。久六にやらせて、おれにやらせねえなんて、そんな不公平なことってあるもんけえ。ええ、お静さん……」

「やめて、お願いです、そ、そばへ寄らないで！……」

「そばへ寄らなけりゃ縛れやしねえや。おれはおめえに、縛ってききてえことがあるんだよ」

岩松は、縄を握りしめて、ゆっくりとお静に襲いかかった。お静の背中中、もう壁だった。絶望のうめき声をあげて、お静は両眼をとじた。

「そうだよ、そういうふうにおとなしくすりや、痛い目をみずにすむんだ。ふふッ、やわらけえ腕をしてやがる」

わずかな抵抗ののち、お静の両手は、岩松の腕力によって、すぐに背中へねじあげられていた。

自分で、なさけないと思うほどのもろさだった。左右の手首が、たかだかと背中中重ねられた。前のめりになって、思わず、うッとうめいた。

背中中へねじあげられた両手首に、ざらざらした、つめたい縄がかかるのを、お静は絶望的な思いで感じた。

赤い長襦袢

さすがに男の力だった。

お仙の手で縛られたときよりも、数倍の苦痛が、お静の腕や胸もとにくいこんだ。

肉を裂いて、骨までとどくような、岩松の力まかせの縄だった。

お静の手首は、縄のために痛々しくねじれまがった。

「あ、痛ッ、つつつうッ……」

お静は、背中をまるめるようにして、うめいた。

縄は長襦袢の上から、ひしひしとかかってくる。直接、肌身に触れなかったのが、わずかに救いだった。

「さあ、こうしておけば、いくら気丈なお前さんでも、手出しはできねえ。おれも安心だってことよ。……ところで、ねえ、お静さん……いやさ、大津屋のお内儀さん。さっき、久六兄貴がお前さんに言っていたな。大津屋の秘密とか、抜け荷買いか……おれがききてえっていうのは、つまり、そのことなんだがな……」

お静を縛り終えた岩松は、ようやく本題に

入った。

さっき天井裏できいた久六の片言半句が、どうもこの男の心にひっかかっているのだ。

さすがに、金儲けにかけては、万事ソツのない見世物師の岩松だった。

そもそも、立花屋久六が片腕を切られたもののしい姿で、この家へころがりこんできたときから、こいつは裏になにかある、と睨んでいたヤレツケの岩松だ。

へたにきいても、したたかな久六のことである。どうせ、まともな返事をするわけはねえと思い、わざと知らん顔をしていた岩松だが……どうやら話は本筋に入ってきた。

久六は、大津屋の抜け荷の秘密をつかんでいるらしい。となると、相手は伊勢町の廻米問屋、千両分限とも万両分限とも噂されている大津屋彦兵衛、こいつはなるほど大物相手の仕事だ。

千両、二千両とまとまった儲けになる。うまくやれば、その仕事を、久六の手からそっくりこっちへ横取りできる。

そう考えた岩松だった。

「抜け荷だなんて、そ、そんな、私はなにも知りません！」

うしろ手に、完全に縛りあげられて、もう

一步も逃げられなくなったお静は、蒼白な顔を岩松にむけた。

「なんだと、知らねえ？……そうは言わせねえよ。旦那とは、同じ屋根の下に暮らしているんだろう。女房のおめえが、知らねえはずはねえやな」

「知らないものは、知りません」

得意の鉄火なタンカも、もうお静の口からとびださない。この岩松という男が、不気味でたまらないのだ。

久六の腹の中は、古い馴染みでもあるし、たいていは読めるお静だが、この岩松という男と向かいあうのは、初めてだ。

この赤黒い顔の、ひどく陰気な醜男が、なにを考えているのか、どんなに性悪な性格なのか、お静には全然、見当がつかない。

わかるのは、この男がけっして自分の味方ではない、ということだけである。

「そうかい、知らねえのかい。そうだろうなあ……。だいじな亭主の悪事の秘密を、そうあっさり、他人のおれにしゃべるはずはねえ。……だけど、なあ、おれも見世物師の岩松だ。ヤレツケの岩松と人に呼ばれている、タチのよくねえ男だ。自分でタチがよくねえって言うてるんだから、嘘じゃねえ。自慢に

やらねえが、腕には墨も入っている。おれはな、久六みてえに派手に脅さねえが、いつまでもじわじわと、お前が白状するまで、手を変え、品を変えてなぶってやるぜ。それでもいいのかい、ええ、お静さん」

「あ、あたしは本当に、な、なにも知らないんです……」

お静は、気の遠くなるような恐怖に襲われた。この男は、久六なんかより、もっともつと陰險な、蛇みたいな奴なんだ……。お静を責める口調も、早くなったり低くなったり、声が高くなったり、わざとゆっくりしゃべってみたり、乱暴になったり、ていねいになったり、さまざまに変化する。

「なあ、お静さん、お前さん、ヤレツケの見世物を知っていなさるか。ふふふ……女の お前さんじゃ、見たことはなからう。教えてやろうか。女に足をひらかせ、太鼓と三味線の雛子にのせて、客がタンポ槍で突くという見世物だ。客がどこを狙って突くか、大体見当はつくだろう。それがヤレツケソレツケの見世物だ。噂ぐらいは、きいたことがあるだろう……」

ぼそぼそとしゃべる岩松の醜惡な顔を見て、いるうちに、おそろしい予感に襲われ、お静

は目を閉じ、耳をふさぎたい衝動にかられ、こきざみに身をふるわせた。

目は閉じることができず、うしろ手に縛られている身では、耳をふさぐことなんてできない。

お静は、ヤレツケの見世物を知っていた。もと芸者だったお静は、見たことはないがその卑猥な内容を、客の口からきいて知っていた。

この岩松という男が、あのいやらしさで評判の見世物を興行している張本人なのか。

「ところがな、おれの考えたヤレツケはもうすこし、趣向が凝らしてあるんだ。若い女をうしろ手にして柱に縛りつけ、足首をべつべつに縛ってひらかせる。そこを客にタンポ槍で突かせるんだ。どうだ、おもしれえだろう。おかげで、おれの見世物は毎日押すな押すなの大入りつづきよ」

「な、なんという……」

「おめえが、亭主の抜け荷をどうしてもしゃべらねえというのなら、おめえを、その見世物につき出してやる。もっとも、その顔をむき出しにして客の前にさらしちゃ、うまくねえ。おめえだって恥ずかしいだろう。だから顔には、おかめの面をかぶせてやる。声をだ

せねえように、口にはさるぐつわを噛ませてな。どうだ、おめえのその真ッ白い肌なら、客が手をたたいてよろこぶぜ。こいつはまた木戸銭を値上げしなくちゃならねえかな。うふふ……」

気の遠くなるような岩松の言葉だった。脅しだけではない。この男だったら、それをやりかねないだろう。

おかめの面をかぶせられ、縛られ、さるぐつわを噛まされて、見世物に出される。それも、客にタンポ槍で突かせるという、ヤレツケの見世物に……。

お静の心の臓が、すうツと縮まり、つめたくなった。

「そうだ、お前さんだけじゃ、まだまだおもしろくねえ。趣向がたりねえ。お前の娘のお雪、それに、久六のめかけのお仙も仲間に入れ、三人ならべて縛りあげ、おかめの面をかぶせて、客の前にさらしてやろう。客はますます大よろこびだ。こいつあ、われながら、いい思いつきだぜ」

岩松は、お静の膝の上を撫でながら、小気味よさそうに笑った。自分の思いつきに酔っている顔だった。

「待てよ。いきなりお客さんの前に出して、

粗相があっちゃあならねえ。そうだ、見世物に出す前に、うちの土蔵の中で、三人揃えてけいこをやるう。けいこだ、けいこだ」

「お願いです、そんなことは、やめて！」

「やめてと言うなら、やめてもいい。そのかわり、大津屋彦兵衛の抜け荷の秘密を、ひとつしゃべってもらおうかい」

「抜け荷なんて、知りません……」

「ふん」

岩松はせせら笑って立ちあがると、お静の両膝をかくしている長襦袢の裾を、足の指を使って大きくまくりあげた。

まっ白な太腿が、あらわになる。

「あッ」

お静は本能的に前こごみになって、むきだされた太腿を、岩松の目からかくした。

ふん、強情な女だ。こいつは、ちょっとや

そつとでは口は割らねえな、と岩松は苦笑した。

そうだ、久六のめかけのお仙、あの女ならちよっと痛い目にあわせれば、すぐ白状するにちげえねえ。お仙の口からききだしたほうが早道だ、と岩松はそこに気がついた。

お静のからだを楽しみながら、同時にお仙を責めつけるのだ。

そうときまったら、仕事は早い方がいい。

「善はいそげって言うからな」

もう完全に、久六の敵にまわっている岩松だった。

お静、お雪、お仙の三人の女を土蔵の中へ引きずりこみ、ヤレツケのけいこをやりながら、抜け荷の秘密を吐かせるというこの名案に、岩松は有頂点になっている。

が、その前に、あの用心棒を始末しなければならぬ。

岩松は障子をあけて廊下へ出ると、子分の一人を呼んだ。

留吉という、すばしっこい男がすぐに飛んできた。

「お呼びで。親方」

「離れにいる用心棒へ、新しい酒を持っていってやれ」

「へい」

「酒の中に、南蛮渡りの眠り薬を混ぜておくんだ。わかったな」

「へい、わかりやした。あの浪人を眠らせるんですね」

「そうだ。殺しちゃいけないぞ。生かしておいて、あとでこっちの味方につける。いまは眠らせておくだけだ。いいか、気づかれねえ

ように、うまくやれ」

「かしこまりました」

「待て。ついでにな、立花屋の久六兄貴が、向こうの座敷で、目から血をふきだしてもがきまわっている。なに、この女にかんざしで突かれたんだ。その久六を、かまわねえから土蔵の中へ押しこめてしまえ。もうあの男はおれの親分でもなければ、兄貴分でもねえんだ」

「へい」

留吉はうなずくと、足音を殺して廊下を走っていった。岩松は、また部屋の中へもどり、お静のそばへ寄っていく。

「さあ、これで安心だ。これからゆっくりとお前さんを楽しみむことにするぜ。土蔵へ行く前に、まずここで、ちょっぴりおがませてもらおうかな」

岩松の手が、お静の膝の上へ、そろりとのびた。ひえッと、お静は身をすくませた。

「なあに、お前さんの裸をおがませてもらうのは、いまが初めてじゃねえのさ。実はね、さっき天井裏から、たっぷり見せてもらったのさ。だけどね、やっぱり女なんてものは、こうしてそばへ寄って、自分の手で、こうやって……」

「ひえッ、あ、ああ、そばへ寄らないで、そばへ寄らないで！」

「それだよ、その顔がたまらねえんだ。まったく、いい女だなあ。へへへ……まあ、いくらでも、こわがるがいい。おめえが考えているよりも、もっともってこわい男だということが、いまにわかってくるぜ。へへへ……」

岩松の両手が、わしづかみにお静の両肩を大きくつかんだ。

お静は、悲鳴をあげてのけぞった。長襦袢の襟もとが、ぐいと左右にはだけられた。

「ゆるして、ゆるしてえッ」

うわごとのように、お静はさけんでいた。

その唇に、岩松の唇がかぶさった。強引に抱きしめ、たっぷりと吸ってから、ようやく顔を離し、岩松はつぶやいた。

「やっぱり、この長襦袢は邪魔だな。面倒だ」

がいちど縄を解き、むき玉子にしてから、また縛ろうか」

「やめて……」

いくら哀願しても、ここでやめるはずのない岩松だった。

どす黒い絶望感に、お静の心身は奈落の底へ沈んでいった。

(つづく)

私の
プレイ

ハイレイン

梅川幸子



近頃、本誌にはゴムマニヤの方の告白などが少なく、私にはとても淋しい限りです。十一月号で弾六夫様の告白を拝見しまして、本当に渴きをいやす想いでございました。私も久しぶりに筆をとりたくなりました、また色々と書かせて頂きたいと思いますが、プレイの内容については、これまで何度も書いてきたのと余り変りばえがいたしませんので、今回は簡単にの

べさせて頂きます。

最近「ハイレイン」という商品名の婦人用ゴム製ブーツを手に入れました、もっぱら愛用していることをお知らせしましょう。このブーツは、普通のゴム製ブーツよりも、いく分、長目にできていて爪先もスッキリと細く、前かかとも高く、はくと膝下まで隠れ、非常にスマートにできていて、私には大変好みに合ったものです。同じ名前で、あちこちのメーカーからでていますが、アサヒゴムのハイレインが、いちばん長目にできていてスマートです。色は、赤、黒、白の三種類で、二二センチから二四・五センチまでのサイズが

揃っています。私はこの三色を各一足ずつ、いちばん大きな二四・五センチ（一〇・五文）を求めました。このハイレインをはき、色とりどりの婦人用ゴム引レインコートを着ると、とてもよく似合うように思えてうれしいのです。

私のプレイは、例によって素肌の上からゴム引レインコートをまとい、顔にはレインコートをしまっておくための同生地のを裏返しにして（ゴム部分を表に）あてがい、マスクをはめフードをかぶり、腰のベルトを結び、足にはハイレインをはきます。その上から男物の黒いゴム合羽（裏は、茶色の総ゴム製）を着てフードをかぶり、フードについているベルトをしめて顔をかくし、腰のベルトを結び、肩まで届く大きなゴム手袋を両手にはめます。そして更に、この上から男物の黒いゴムマントをすっぱりと羽織り、閉め切ったお部屋の中で鏡に自分の姿をうつしながら歩きまわったり、あるいはお風呂に入って、または雨の降りしづく深夜、戸外に出て田圃の方に歩いて行って、泥田の中や溜

池に首までつかって、私だけの秘密のプレイに恍惚となるのです。

同封しましたネガは、ゴム引マントにくるまった私自身を、セルフタイマーで写したものです。皆同じように見えますが、ネガ番号によって一応説明だけして置きましょう。

(4)は正面から見た姿です。長目のゴム製ブーツ（ハイレイン）が、ゴム引マントによくマッチして、とても似合うでしょう。

(5)は、そっと暗やみの戸外に出て降りしづく雨にうたれながら、誰かに見られてはいないかというスリルに、おののきながら歩きはじめたところです。

(9)は、だんだんと、早や足にかわり、雨の中を一目散に歩いているところ。

(12)は、雨は次第に激しくなり、風もでてきました。横なぐりの風でバタバタと、マントがまくれるので、中からしっかりとマントを体に巻きつけ、うつむき加減で雨に

うたれているところ。

(15)は、誰も見ていない深夜の雨の降りしづく、草の背高く生え茂った草むらに着いて、大きく足を開いて立ちほだかり、これからプレイに移るところ。

(13)は、次第に膝を曲げ、上体をかがめ、へなへなと草むらにしゃがみこみ、身も心も欲びに悶えていくところ。

(16)は、その後姿。ゴム引マントが雨にうたれ、異様に波うち起伏してやがて草むらにくずれて横たわっていきます。

(17)は正面から見たところ。ゴム引マントの中は汗とゴムの臭いにむせかえり、ゴムプレイの喜びに我れを忘れていくことでしょう……これが終ると、ジャブジャブと池の中へ入っていく、次のプレイに身悶えするのです。

○ ○

ゴムマニアの方々におねがいします。もっと告白なり、写真を発表して下さい。とくに男物ゴム合羽や、男物ゴムマントにくるまった女性が責められているポーズを希望いたします。





「徳川女刑罰史」を観て――

辻村隆さまへ

岡田咲子

辻村さま、東映映画「徳川女刑罰史」の封切り以来の大入大好評、本当におめでとうを申し上げます。

その道のベテランであるとは言いながら、さぞおつかれになったことでしょう。封切日にさっそく拝見致しました。

緊縛指導も暑い最中で、仲々大変なお仕事だったことと思います。でもそれだけに、映画は上手に出来ておりました。ともすれば、安易な見世物的なものになってしまうこの種の映画を、さすが新東宝で叩き上げられた石井輝男監督は、徳川時代の想像を絶する苛酷

な刑罰の様想を、テーマを外さず、堂々と正面から取組んで、照れずに折り目正しい、オムニバス映画に仕上げております。

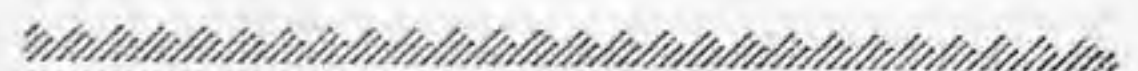
今だから申せますが、テレビの予告篇で貴方が、女優を縛っている姿を見て、またまた以前に各社で封切られた、〇〇拷問史、××刑罰史のような映画になるのではないか、と心配しておりました。と言うのは、私は前からこの種の作品に対して、大不満を持っておりました。

その原因の一つには、写し出される画面からは、嫌らしさときたならしきだけが表面に

出て、それは動く毒々しい、安物のペンキで画き上げた地獄絵の看板を見ている感じでした。形だけ女を縛り、吊り下げたり叩いたりして、泣き声を上げさせるだけの、平板な絵空事でしかない作品ばかりだったと言う事。

そこには、サジズム、マソヒズムの本当の耽美的要素もなければ、ただ一部の人の安価な昂奮だけをよび起こすものばかりであったことが、私をガッカリさせておりました。

これはなにも、小さな独立プロの作品だとか、製作に金がかけられないとか、俳優さんの演技が未熟だとか、日数が足らなかったな



どと言うことは問題にならないし、言い訳けにもなりません。

もちろん大会社である東映作品である「徳川女刑罰史」には、製作費にしても、セット配数にしても、小道具の責め具一つにしても他のプロダクションよりも何倍も金をかけていることは事実でしょう。画面にしても大会社なりに、ライトも多いだろうし、カラーにしても美しいし、その点にかけては確かにちがいはあります。

しかし、それだけぐらゐが群小プロとのちがいであって、その外にどんなハンディキャップがあったと言うのでしょうか。

私が今ここで申したいのは、映画の中から観客の心を打つ迫真力のことなのです。

一寸横道にそれますが、前に作られました映画の「花と蛇」と小説の「花と蛇」と、どちらが面白かったか。どちらが迫真的であったか。言うまでもなく、だれでも後者であるとおっしゃるでしょう。

私は映画と小説の対比論争をしようなどとは思っておりません。私が書きたいのは、何故「徳川女刑罰史」があれだけの迫力をもつて観客の胸を打ったのか、それだけを書きたかったのです。

私は映画を見終って友達と喫茶店で、話し合っている間に一致した結論が出ました。その結論とは何だと想われますか？ それは、映画史上始めて、緊縛指導と言う一ジャンルが出来たと言うことなのです。言いかえますと、緊縛監督がいなかったなら、この種の責め映画は出来ないと言うことです。「徳川女刑罰史」から、辻村隆を取り除いたならば、この映画もまた平々凡々な見世物的な空々しい作品になってしまっていたらうと信じております。

私は「徳川女刑罰史」の批評をする気など毛頭ありません。何故、辻村隆が緊縛指導をしたがために、この作品が私達の心を打つ映画になったのかを、書きたかったのです。

私も女優さんの名前は割合に知っている方だと思っておりますが、この映画に出演した女優さんは一、二人を除き、未だテレビにも出ていない新しい人達ばかりです。

玲宝役で活躍した加川雪絵さんは、あの人がまだ大映の演技研究生だった頃にお知り合いになったので、その演技の上達に驚きました。が、その他の方は知らない方ばかりの出演でした。まあスターのたまごという所でしょうか。

とすると出演者だけを見廻すと、ピンク映画の女優さんと、レベルは余り変りがありません。むしろピンク女優と言われている人にはもっと名の売れた女優さんもあります。東映も、この若いニューフェイスの女優さんたちに一体なにが、あの体当りの演技をするきっかけをあたえたのでしょうか。

テレビの「責め地獄」の時間に、この映画に出演した女優さんと藤本義一氏との座談会がありました。あの席上に一人、丸坊主の女優さんがいたのには、本当にびっくりしました。男でも嫌がる坊主頭に、役がらとは主え良くぞ女の生命とまで言われた髪の毛を、そりおとすこのファイトは、高く評価してあげても良いのではないのでしょうか。

あの時、司会者が、「こんな映画に出演して、皆さんは抵抗を感じませんでしたか？」とたずねると、みんな一様に「別に感じませんでした。でも本当に刑罰を受けているような気にはなりませんでしたわ。だって、あんなに縛られたり叩かれていた間に、だれだってそんな気持になるんじゃない？ でも一カット終ると監督さんが、苦しいだろうから縄を早く解いて上げなさい。と言って下さるのが涙が出る程うれしかった」と言っていました。こ

の辺にも、今度の映画の成功があるような気がするのです。これを逆に言えば、解かれた時、涙が出る程うれしくらい、彼女らは本当に縛られ、本心から助けを求めていることにもなりそうです。

映画でも、その気持は画面の上にはっきりにじみでておりました。

第一話——病気の兄と、畜生道に堕ちた娘が、その罪に問われて、海老責めの拷問に会う。双肌をぬがされて、後ろに廻された両手首は重ね合わされ、縄が十文字に手首にくい込んでいます。あぐら縛りにされた両足の太腿の間から、首へ廻った縄が、顔を両股へ入る程、強く引きしぼられている。その曲った背中に振りおろされる鞭。

悲鳴をあげて叩かれるたびに、もがく体に縄が強くくい込む。くい込む縄の痛さに芝居気ぬきで、もがきつづける娘の表情。あの苦しみの表情は絵空事で出来るものですか。

そして海中に立てられた十字架の逆水礫の刑に処せられる。海中に大きく股を開いて逆さに礫された娘の顔へ、海水はしぶきを上げて当る。そのたびに髪の毛が娘の顔にまといつく。いくら息を止めていても、長いカットの間には海水は、情ようしゃなく入るのだろ

う。眼を閉じ口を開けて、ぜいぜいと息する娘のアップ。これが人形でもなく、吹き替えの人でもなく、本人が本当に苦しんでいる表情なのですから全くおそれ入った次第です。

第二話——尼僧の話。本院より院主代理として来た玲宝と言う尼僧と他の尼僧とのレスボスシーン。半裸になった二人の尼僧がもつれあい、接吻する大寫し。

二人の接吻した唇の間から流れ出るよだれが頬を伝う。こんな情景は監督の注文で出来ない事。演技者がその気になってやらなければ出来ない演技以前のものであるのでしよう。そしてこの玲宝と言う尼僧が、男僧とちぎった若い尼僧を丸裸にして、どじょう責めに合わせる。両股に棒を通され縛られた若い尼僧は滑車で釜の中へ降ろされた所へ、頭の上から生きた、ぬるぬる動きまわるどじょうが、さる一杯あびせられる。下から火が燃えて湯は熱くなり、苦しうにどじょうは熱湯の中を動き廻り逃げ場を求める。尼僧の棒に縛りつけられた両足がもがく。もがくどじょうの中で悲鳴を上げる尼僧の頭を別の僧がおさえつける。若い尼僧の両足の縄が、肉にくい込んで、太腿がひょうたんの様にくびれている。

どじょうの次は、吊り下げられ、両足を大きく開かされての唐がらし責めである。悲鳴をあげてのけぞる尼僧を、更にしっかり捕えて、焼けただれた鉄棒をおしつける。絶叫する尼僧の顔へ、肉の焦げた煙が立ちのぼる。

この連続する責めに、彼女たちは女優として、責められる者、責める者の区別はなくなってしまう、ただなにかにとりつかれた人間が、本性を赤裸々にして狂い廻っているとした、表現の仕様がありません。悪く言うなら、本心のようにも見られる程の迫真の場面でした。

その後、尼僧たちは五人共、十字架にかけられ、左右から槍で胸をさしぬかれる。飛びちる血。吹き出る血。

二度三度つかれるたびに、吹き出す血が白衣を赤くそめて行く。口からあわをふいて、ガックリとなる尼僧。槍の仕かけと、血のりの仕かけが上手に出来ていて、槍でつかれた体はのけぞり、もたえる。

この五人を、柱に縛りつけて行く辻村さまも、さぞ御苦労なことだったと思います。今思うと、槍でつかれる女優さんの心境は、本当に自分たちの体に槍が突込まれ、本当に自分の血が流れ出して死んで行く、そんな気持

ちではなかったのでしょうか。

第三話——刺青師の話。自分が芸者の背中に入れた刺青を役人に嘲笑されて、長崎まで漂流船に乗って捕まった外人女の、種々な拷問場面を、拷問される女の姿を写しとるため役人と共に行き、そこで拷問される五人の外人女の表情を女の背中にほりつけて行くと言う話。

私はこれに出演した外人の演技はここには書かないことにします。あの人たちは素人のエキストラなのか、多少でも女優さんとしての経験を持った人たちなのか。私は見た所、エキストラで女優業の経験は持ち合わせていない人たちの様に思いましたが——。しかし

ここに見た責めの種類のなんと多いことか。水車に手足を縛られて、水の中へ顔をつけられる女。

首に重しをつけられて、尻を叩かれながら犬の様に、はい廻る女。

台上に両手両足を大きく開いて縛られ、背中に棒を差し込まれ、体を弓なりにそらして泣きわめく女。

正座させられた上へ、石を積み重ねられて行く女。

この様な数々の拷問が、刺青師の手で女の背中へほり込まれて行くカット・バックは、実に手ぎわ良く積重ねられておりました。要するに、この映画はタイトルバックの女を木

女性写真モデル募集

分譲写真撮影のため

奮て御応募下さい

○本誌では、代理部分譲品用の写真を撮影するため、女性モデルを募集しています。
○本誌愛読者の方でしたら、年令、遠近は問いません。分譲品用ですから誌上に発表いたしません。誌上発表可能でしたら尚結構です。又、助手介添え或はプレイのみ出演御希望の方は御照会下さい。
○出演又は参加御希望の方は、年令略歴記

載の上編集部宛お申込み下さい。報酬その他詳細につき、お返事いたします。

○応募されました方々の個人的な秘密は固く厳守いたしますから御安心下さい。尚お好みの傾向を附記下されば好都合です。

○本誌の内容充実のため、並に皆様の文献研究資料作成のため、奮って御応募御参加下さるよう、お待ちいたします。余暇を利用しての御参加も大いに歓迎いたします。
○特に妊婦資料の作成に御協力下さる婦人を求めています。撮影可能の方は、遠近に拘らず御一報下さるようお願いいたします。

△奇ク編集部△

に吊して斬る三段斬り。両足を引っ張って股ざきにする刑。火あぶりの刑。など、ありとあらゆる処刑から私刑まで並べた見世物映画でありながら、見世物的感じを観客にあたえなかった所に、石井監督の構成のうまさがあったのだと思いました。

昔から役者が、その役になり切れた時に、始めて真の芝居が出来ると言います。

またある人は、芝居はうその積み重ねであり、そのうそを如何にもうまく本當らしく見せるのが役者であるとも申します。

それは全くその通りなので、演技者が本當に斬られる訳けにも行きませんし、ちゃんまげを結うことも出来ません。芸は、まね事を如何に真実らしく見せるかにあるというこの論法から行けば、この映画の女優さんたちの演技は、本當に縛られ、本當に苦しみ、泣き叫んだのは邪道だと言えなくもありません。

ここで考えたいことは、どんな役でも与えられたら立派に演りこなせる演技力を持った女優さんが、今日日本に何人いるのでしょうか。まして、裸体になり、縛りつけられ、叩かれどじょうの中へつけられてまで、精神的にも生理的にも、がまん出来る女優さんが何人いるのでしょうか。私の知る限りにおいては多

少、名前の通った女優さんなら、この役は配役以前に断るでしょうし、万が一、演る決心をつけても、あの様な場面には必ず、ヌードモデルの吹き替えを要求すると思います。

そうなる、演技力のない女優さんは、ともにスターさんと、同じことを言っていては、何時までも日陰の大部屋女優で一生を送らねばなりません。またそうは言っても、若い女優さんに割り切れと言っても、そこは人間です。そう簡単には割り切れるものではないと思いますし、割り切って考えると言う方が無理だと思っています。

「徳川女刑罰史」の脚本を渡された時には、実の所は悩んだ女優さんもおられたのと違うのでしょうか。この役を聞いて抵抗をなにも感じない女優さんが本当にいたら、こんな女優さんは使用不能のレッテルをはられる女優さんか、余程どんな感な女の人でしょう。では演技力もなく、割り切れも出来ない女優さんから真の演技を引き出し、その人物になりきらしてあげるには、どうすれば良いのでしょうか。その雰囲気を持って行ってやる手段が必要になって来ます。

その役になり切らせるための導火線。この導火線の役目は果たしたのが、辻村隆緊縛監

督。その出現によって、この映画は、見事に成功したのです。その導火線を見つけ出した石井監督も、たいしたものだと敬服致しました。

邪道を立派に本道として、この、人の嫌がる役をやりこなした橘ますみ、賀川雪絵、尾花みき、白石奈美、三笠れい子。それからタイトルバックに出た、無名の女優さんたちに「その役になり切れれば演れるんだ」と言う自信を植えつけた、緊縛指導にあたられた辻村隆さんの功績は、永くみんなの心の中に残ると確信致します。この自信こそが、明日の大スターの道につながる大きな、かけ橋だと言えましょう。

辻村さま、貴方に東映は大きな謝礼を、おしみなく出さなければならぬ義務があります。貴方は、六人の新人スターをめたく誕生させ、世に送り出したのです。この人たちは、東映の宝になる人達なのですもの——。「裸の役は、ヌードの吹き替えで——」なんて、けちな根性はおすてなさい。またピンク女優と呼ばれる女優さんたちも、この東映「徳川女刑罰史」の女優さんに負けずに、恥じることなく堂々と、その役になり切って下さい。

辻村さま、どうかこの一篇だけでなく、日本映画に、新しいジャンルを引き出すためにも、これから、もっとどしどし映画界へ進出して下さい。

最後に、この映画を審査された映倫の方々にも、私は、心から謝意を表したいと思えます。

それにつけても、ある種の団体が、如何に愚昧な団体でありますことよ。もし映倫が、その団体の圧力に負けていたら、この新しいスターは誕生していなかったばかりでなく、一生下づみの女優さんで終る人が何人か増えていたことを、深く考えて頂きたいと思えます。あの方達のなさる仕事は外に山積されている筈なのです。

辻村さま、今回は今まで心に思っていたことを一度に、はき出したような、すがすがしい気持ちであります。どうか何時までも、この道の大家として、突き進んで頂きたい気持ちで一杯です。

蔭ながら今後ますますの御活躍をお祈り申上げております。

おつかれさまでございました。

——終——



切腹研究夜話

愛と死の映像 (四)

中 康 弘 通

先に「愛と死の映像」(二)本誌43年10月号、で書かれた映画「残酷女の秘絵図」での清水世津さん扮するショウの女が切腹を模するシーンは、その後、青山芳樹氏よりレポートを寄せられたので、氏のご厚意を得てその一端を写しておこう。史実、文芸、芸能と、その分野の如何にかかわらず、すべて散佚される資料を、こと「切腹」に関する限り、集録して、伝えようとするのが筆者の素志だからである。

この映画、製作は青年群像、配給は関東映配。能を模した劇中劇として、女面を付けた清水世津さんが、濃緑のうすもの姿で白一色

の舞台を背景に、鬼面、白晒腹巻、紅禪の男に鞭打されるショーを見せる。

男の手に喰る鞭が空を切るたびに女はのけぞり、その肌に赤黒い条痕が印される。あえぎ呻き転がり悶え——やがて今はこれまでと覚悟を定めた女は、白い舞台の中央にしずかに座を占める。端座して双腕を薄ものの袖口から懷ろへ差し入れ、グイと肌脱ぐと露わになった乳房がいさぎよい。

膝の前から拔身の短刀を右逆手に執り、左掌で押えた臍の左下方、あわれ腹切るか、女ながらも。と見るまに切先ピタリと肌に当てためらいもなく、グツと力を込める。

悲痛な呼吸と共に、白布に散る一条の鮮血

——、女は一気に臍下^{せいか}を右へ切り割く。ギリッギリッ、あふれる血汐が柔肌を伝う。

健気に切り終えた腹から刃を抜きとると、女は滴る血汐もものかわ、よろよると起ち上がった。果然と女腹切の凄烈を見守っていた男の胴へ、女の手の短刀がグサと刺さる。

ドツと男はその場に倒れ、刃を引き抜いてたたらを踏んだ女は、踏みとどまって今一度男のむくろをひと振り、男の腕を切り放して白い床^{ゆか}に投げつけ、血汐を走らす。

改めて坐り直し、崩れるように突っ伏した女は、這うように男の亡きがらににじり寄り折り重なって息絶える。ショーとはいえ、克明、かつ、壮絶な女の切腹シーンだったとい

う。

同じく、映画で注目すべきものに、東映の「怪猫呪いの沼」がある。これは切腹ではないが、老女と若い娘の自刃二態が、それぞれに描かれている。森田敬三氏と青山芳樹氏のレポートに拠って紹介しておこう。

まず老女は、暴君に許婚者を奪われようとする青年武士の母（吉川満子さん扮）。武士は母と許婚者ともども領外へ逃れようと決める。

「母上、仕度が出来ました」

声をかけて入った室で、覚悟の白無垢着けた母は、うつ伏しに倒れて苦しんでいる。驚いて抱き起こすと、早や母は左乳下ふかく、柄まで通れとばかり懐剣を突込んでしまっている。血汐に濡れた柄を握って苦悶しつつ、

「足手まといになるゆえに……」

と自害の決意を訴えて絶命するのである。

同じく暴君にへつらう悪家老は、酒席へ故意に自分の美しい妹（三島ゆり子さん扮）を侍らせる。果せるかな、明日は兄ともども登城せよ、とのご下命！ しかし諫臣を斬り俵

臣を重用する主君への嫌悪から彼女は、死の抗議を以って暴君に報いようと決心する。

その夜半、白装束に着がえた娘は、独りしづかに守り刀の鞘を払い、鋭い切先を一旦は白い咽喉もとに向けたが、思い直して両腕を伸ばし、呼吸を整えた。そして次の瞬間、刃先を豊かな胸に発止と叩きつける。ガッと刃が肋間を貫き柄の肌には打ち当る音までして、白刃はことごとく胸中に没す。

悲痛な呻きと共に、思わず腰をうかし膝がしらで立ち、柄を両手に握りしめたまま身をもんで。

「むッ……むむ、……」

と苦しむしばし、堪まらずドッと前に倒れても柄は離さず、全身を波打たせて悶え、ややあって固く膝を合わせたまま息絶える。是らの景もまた、女人の哀しみと清冽さを十二分に表現していよう。

しかし、映画は何んと言っても絵空ごとの世界として、いかなるリアリティも安心して見ていられる。ところが舞台での劇となるとリアルすぎて、かなり凄烈なものになる。

劇団「赤と黒」と言えばご記憶があるう。拙稿でも紹介した「恐怖の舞踏会」で、壮絶

な現代の娘の腹切りを志村曜子さんに演技させた劇団。それが分裂して新たに結成された「影」という劇団が、去る六月十一日から二十四日まで東京カジバシ座で旗あげ公演を行った。

その演目に、喜多川栄治氏企画、赤貝進介氏脚本、戸坂純氏演出の「姫拷問・切腹変」（全七景）がある。以下、是も青山芳樹氏のレポートでご紹介しよう。

幕末、北辺の小藩宇築藩に外艦来寇し、藩士北村甲斐の妻蒔絵（志村曜子さん扮）は異人接待に召し出され、艦長に犯されようとして抵抗、傷つけてしまう。蒔絵の侍女千鶴は矢継の似合う可憐な少女（辻愛子さん扮）。異人館へ従って行って通訳に犯される。芸妓照吉（麻木正美さん扮）は艦長の夜伽を命ぜられたが甲斐に救われ、恩返しに蒔絵を救おうとして捕えられる。町娘お花（千代のり子さん扮）は路上から連れ去られ艦長に犯される。

こうした経過でいよいよ第七景海浜の場、組んだ竹矢来の中で白一色の長い処刑台上、白装束で居並ぶ四人の女性は、後ろ手に縛られ死刑を待つばかりの身である。

まずお花は

「いやだ！ おら死ぬのはイヤだ！」

と泣きわめいたが非情の自刃に仆れる。

艦長は突然、

「わたし、まだ日本のハラキリ見たことありません！ だれかハラキリしてみせてくれませんか。それならほかの人、助けましょう」
 思いがけない要求に、さすが奉行も浚巡すると、蒔絵は、

「よろしうございます。わたくしがお眼にかけましょう」

と言い切る。千鶴も

「わたくしも」

と続く。照吉までが

「アタシだって首を斬られるよりや、自分で死んだ方がマシだよ」

と叫ぶ。蒔絵は、

「わたくしが切腹すれば、あなた方は助かるのですよ」

と諭すが、千鶴は

「いやでございます」

と泣きすがり、照吉も涙声で

「一度汚れたこの体、あたしも死ぬ」

と言いつのる。（このとき雷鳴電光）

「早く見せて下さい」

艦長の催促に、千鶴は蒔絵に目礼して中腰になり、白装束の袴に両手をかけ、グイと引あけ腹まで寛ろげる。さすがに震う手で中巻した短刀を逆手にとる。

左手を左腹部に当て、右手の切先を柔肌を押しつけると、しばし躊躇ったが「ウムツ」と一と声、巻きしめた晒の上から腹に突立てて苦しみ、わなわなと震う刃に両手をかけて、キリキリと右へ引廻し、左手で傷を抑えて刀を抜きとるより早く、「エイッ」片手なぐりに右首を後ろから前へ刎ね切って、頸動脈を断った少女は、崩れるようにうつぶし、静かに息絶える。（雷鳴、電光）

続いて照吉、おもむろに腰を上げ両手でグツと袴を開く。震える右手で中巻した短刀を逆手に執ると、そのまましずかに立ち上がって両脚を踏みしめた立ち腹である。左手を腹に当て、キツと艦長を睨み、

「よく見ておいで……これが日本の——」

言いつつ切先を腹に押しつけ、

「——女だよッ！」

叫ぶや否、「うむッ」と突き立てて苦痛をこらえ、震う刃をギリッギリと横へ——、「ああ……」喘いで中天を見つめ「——鶴松さん……」哀しく恋人の名を呼びながら掻き

切った腹から抜きとって刃を右の乳下へ「キエーツ」双手突きをくれ、よろめいて横ざまに崩れ——、仆れ伏す。（雷鳴、電光さらに烈しい）

いよいよ蒔絵。

「よくご検視下さいませ、異国の方……」

正面を切って語を継ぎ

「日本のハラキリ、男だけではありませぬ、愛する人のため、お国のためともなりましたならば、女でも——」

手早く帯を解きすて、手近の紐で膝をくくる。白装束の上衣を双肩ぬぎ刎ぬ、純白の長襦袢の胸もとに両手をかけて、唇かみしめたが、グツと寛ろげ、そのまま手をずらして鳩尾、次いで腹までかき広げた。

右手を伸ばし膝の前、脇差の刀身半ばに巻いた白紙の部分をシッカと握って、胸前に捧げ、左手を添えて右逆手に持ちかえ、切先を美しい素腹に向けて左手を腹に当て、凄艶の眼ざしを艦長に向けた。

「オオ……ノウ……」

雷鳴と電光のなか、艦長の阻止の叫びもものかわ、白装束を稲妻に映えさせて、左掌で再度まで大きく腹を撫してみせる蒔絵……。（このとき「アア、やめてエ！」と観客席の

中から一人の女性悲叫する)

「——このとおり」

言いざま右に構えていた脇差を叩きつけるように突き刺す。「ウッ」苦鳴を押えそのままグーッと袂り入れ、力を込めて一文字に腹かき切って行く。(雷鳴、電光)

臍下を割り「アア……」と、一つ喘いで、

「ウ、ウッ」ザックリ右の腹まで切り込む。

存分に切り終えて、さすがに左手をバツタリ前につき、痛苦にのめる上体を支えながら、

「見たか、けだものども」

はらわたを絞る叫びと共に眼をすえて

「神の怒りの恐ろしさ、いつかきっと思ひ知ろう」(雷鳴、電光)

そのまま宙をみつめ断末魔の声細く、

「——旦那さま」

ひとこと残しガックリ俯伏して絶命する。

(更に雷鳴)

このあと北村甲斐の斬り込みに逃散、急拠抜錨した外艦は、嵐に打たれ波間に没したというところで幕。

文字どおりの大拍手。カーテンコールに、今しがた掻き切ってみせたばかりの腹を納めて女優たちも、挨拶に顔を出した途端に声援

拍手の渦となったことを、青山氏のレポートは伝えている。

この劇の特長は、あたかも二十余年前の戦時、戦意昂揚劇を見るごとくになるところである。ただ一つ、当時なら「お国のために」と腹切る芝居はあっても、「愛する人のため」というセリフが先行し得たかどうか、ということと言える。反面、戦中派にはなつかしい芝居と言える。

以上、今回は主として青山氏、また森田氏のご提供で小文を草した次第である。

病弱の筆者が低血圧と不眠症で寝つけぬ夜など、時おり眼に触れた深夜劇場の映画で、記憶にあるものをついでに上げておこう。

新東宝もので特に記憶に残っているのは、題は忘れたが三原葉子さん扮する海女が妹役の三ツ矢歌子さん扮する可憐な海女を救うために丹波哲郎氏扮する旧知の悪漢と短刀で刺し違えて死んで行くシーンは、自刃ではないがスリリングで、しかも女の業の悲しみを感ぜさせた。万里昌代さんも、りりしく美しい海女に扮していたのが、なつかしまれる。もう一つ、題も女優さんのお名前も忘れた

が、風魔の女たちが徳川の世に反抗する、という設定で、うまく大奥に入り込みお局になりかけた女が、老女たちにいびられ耐えかねて、最古参の悪女をひと刺し、あわて騒ぐ女中たちを覚悟の眼で制し、血ぬった懐剣の切先を、立ったままゆっくり左乳下に当て、うむと一息、力を込めると見るまに頸を引いて苦痛をこらえ、体が半廻転したままドツと倒れ伏して果てて行く。その瞬間の表情は凄愴の美にあふれていた。

吉川英治氏原作「隠密七生記」も、かなり脚色されて映画化されているが、原作では主人公椿源太郎(大友柳太郎氏扮)：妹信乃が恋人で兄の同僚でもある相良三平を隠密と知り、自害して果てるのだが、映画では自害せず、スリのお駒(島崎雪子さん扮)：豊臣家再興派の姫君(安西郷子さん扮)などとからみながら、五人が江戸と尾張を結んで秘文書を奪い合う。しかし信乃は豊臣家再興派の首領に斬られ、ラストで姫君は椿らに取り押えられようとして、懐剣を袋から解いて出し自害しようとするところを、お駒に押しとどめられる。お駒は彼女の実姉だったのである。

昨年末、大映の「忠臣蔵」をYTVの放映で見た。仇討近くなった大石良雄（長谷川一夫さん扮）が揺泉院（山本富士子さん扮）を訪ね、「仕官の途が開けた故おいとま乞い」と言上する。顔色かえた揺泉院は「とのご切腹の折の遺志を忘れたか」と立腹するが、大石は旅日記を残して退出してしまう。

後日、お高祖頭巾に身をやつした、侍女の一人（氏名不詳）が日記を盗み出して逃げようとするが、見つかかり朋輩に取り囲まれ「や

や、そなたは……」と見露わされてしまう。床柱を背に右脇張って身がまえた彼女は、とり囲む人数を見て一瞬諦め、勢いよく我と左乳下へ刃先を突込む。左手で柄がしらを押え瞬間、静止。次いで横に倒れて絶命するのであるが、その優美な姿態は、配役を見落としたのが残念なくらいであった。因に旅日記は仇討連判状に他ならず、自害した女は上杉の間者だったのである。

こうした、忠義のために、（たとえそれが

社会正義からは外れていようと）謀者となり事ならず自刃する女を見たのは、その後も四月十日ATV放映の、松竹映画「快盗三人吉三」にもあった。

中村扇雀丈がお嬢吉三で大あばれするのだが、大奥の勢力争いもからんで、破戒僧が手なづけておいた女を腰元に仕立て、將軍家の若君暗殺に乗り込ませる見せ場がある。

彼女は庭遊びに紛れて毒入りの菓子を若君にすすめるが、忠義な老女（浪花千枝子さん扮）に見破られ、詮方なく懐剣で老女を刺しみずからも胸もと深く刺し貫いて、松の緑も鮮かな庭上に倒れ伏す。

張りのある眼が大きく、唇もとのあでやかな、頬の豊かな女優さんで、立ちながら俯向きざまに逆手の懐剣をそのまま胸に刺し、ガツクリと陥る姿は、悲痛な中にもさながら紅椿の散るかと思まがう、あでやかさをたたえていた。この女優さんも配役を見おとして残念なことをしたのである。

事実、映画の世界でなく過去の日本に、こうして哀愁の自刃をとげた美女が少なくなかったことを偲ばせ、悲愴美の世界を追究するとすれば道は無限に過去につながっているであらうことを、これらの映画は思わせた。

新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	三千元

☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもつて誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号に発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。

漫談——千一夜物語

薔薇と蜜蜂

(13)

第五章 いざない (三)

田代 俊 夫

42

さて、その翌日のこと、侍女ドロップは妹シロップと一緒に、所用のため王様の居間へ伺候いたしました。シロップというその妹なる娘は姉に似たオカメ・フェイスのオールドミスです。

王様のハ求婚作戦V果して効を奏したであらうかと、しずしずと入るべき王様の室内に闖入した両嬢、そこに異様な光景を発見して互いに顔を見合わせました。

乗馬服姿の王様サファイヤが裸のメロンを床の上に細敷き押さえこんでいるのです。あ

おむけになったメロンの胸に、どっしりと豊臀を据えて馬乗りに跨がり、両膝で両腕を踏み敷いて完全に制圧しています。

今日のサファイヤは男装の麗人ではなく、大胆にも正体もあからさまに、その豊かな黄金色の髪を肩にふり乱し、王様というより女王様といった方がふさわしい。さながらに、若い牡鹿を生捕った狩の女神ダイアナをしのばせる勇姿です。深紅色の豪華な絨毯とメロンの白い肌が夢幻的美感を構成し、赤いジャケットとクリーム色のチュロット、それに太い黒革の腰ベルトという出立ちの凛々しい乗馬服が、その場にマッチした色彩的調和を盛

上げています。

とまあ、ここまではよかったが、被征圧者メロンの腰にある白布はと見れば、何とそれは一枚のおしめカバーではありませんか。かくて、折角の妖美なるリクシズムも台なしとなりました。

「あら、お前達、丁度いいときに来たわ。少し手伝っておくれ」

何を手伝えというのか、サファイヤとメロンはその体勢のまま、上と下とで睨めっこしているのです。メロンが歯を食いしばって口惜しそうに白眼を剥けば、サファイヤまた、処置なしといった表情で、腕組みして睨みつ

ける。今や夫婦げんかのまっ最中であることは確からしい。

「昨夜の首尾はどうだったのでございます、王様」

「ああ、そのこと？ 今、話してあげるけどね——」

敵に新たなる援軍現われたりと覚知したメロン、急に元気を喪失して、うろたえ出しました。あられもない恰好で細君に押えこまれているのを、あかの他人に見られたのだから無理もない。かといって、むろんこの重圧を跳ね返すだけの力ありません。全く情けない思いのメロンです。

二人の侍女は、そんなメロンに同情する風もなく、その頭の両側にペタリと坐りこみ、しげしげとメロンの顔をのぞきこみました。「まあ、すごく可愛いいわねえ」

と素っ頓狂な声を出すのが本節初登場のシロップ。そのハスッパな声にメロンは、しゅんとなりました。

「オヤマア。わたしがかけてあげたパーマ、もう崩れてしまったわ」

と、これはドロップ。いささかの同情心も認められません。一瞬、憎悪の視線をそれに向けたメロンでしたが、

「わたしを恨まないで下さいね、王様の御命令だったんですもの」

その憎悪の眼差しを感じとったのか、ドロップはちゃっかり責任逃れをいたしました。そしてサファイヤに、

「メロンさんの女装ぶり、どうでした。私の全技術を傾注して、うんと念入りにお化粧してあげましたのよ」

と自分の手際を自讃します。

「まずまずってとこかな。でも、クリームがよく乗ってなかったわ」

サファイヤはそう適正な評価を下し、次いで昨夜の一部始終、つまり前節の出来事を、逐一、侍女達に話してきかせるのでした。

ドロップとシロップの両嬢、最初は、くすくす笑いながらも謹聴していましたが、話がストリップや、お馬ごっこの一件に及ぶと、身をのり出しての相槌ちも嬉しげに、それからリアルな説明をせがんではいけません。肩を抱き合い涙を流さんばかりにして、笑いころげました。

心理的拷問とは正にこのこと。メロンの心情や察して余りあるものがありました。けなげにも努めて、無表情無感動を装わんとするのですが、羞恥と屈辱に耳たぶまで朱に染

め、張り裂けんばかりの口惜しさに身悶えしているのです。

「——とまあ、そういう次第だけど、それからが大変でねえ」

「そりゃあもう、御立腹になるのも、もっともですわ」

「夫の体面を傷つけられたって、すごい剣幕なの。『結婚話』なんか、耳も傾けようともしないのよ」

サファイヤの説明によると、前節でメロンを中空にぶら下げてから、誠心誠意プロポーズをしたのだが、メロンは一層怒り狂うばかりで手のつけようがない。それで一晚その状態で放置して、気の静まったところで再考を求める他はないと判断したそうです。

その『結婚』というのは、要するにアラビア版取りかえばや物語であって、男王たるサファイヤが、その正体露見を防止するため、従来の夫メロンを自分の妃として娶るというマコトにふざけたお話なのであります。もっとも、この処置は単に外観を糊塗し臣民を欺く方便にすぎず、別段性転換手術を伴うわけではないのですが、とにかく今後のメロンの身辺に一大変事を惹き起こすことは明らかです。

女装愛好者でもないメロン君が、そのような処遇に甘んずるはずもなく、屈辱的求婚をにべなく拒絶するのは、当然といえるでしょう。しかし、いくらメロン君がいやだといっても、実力者にして意思強固なるサファイヤが、果して既定方針を撤回するかどうか、大いに疑問といわねばなりません。

「で、一晩ぶら下げておいた結果、どうなりまして？」

「全然だめよ。ものの道理が理解できないんだから、この子は」

サファイヤは、腹立たしそうな表情でそう言いました。

今朝方、日課である馬の遠乗りを済ませて寝室へ戻り、メロンを宙吊り状態から解放してやったのだが、相も変わらず、悪態をついて、こちらの善意に泥を塗る。あまつさえ、腕力もないのに掴みかかってくる始末。だから、やむを得ずこうして組み敷いてやったのだ、などとサファイヤは、事の一部始終を両嬢に説明するのです。メロンは口惜しそうに裸の脚を震わせています。

「でも、このおしめカバーは一体——」

「ああ、これ？ 実はね、ふふふ……」

サファイヤは、急におかしそうに笑い、

「この子ったら、お行儀悪く粗相しちゃったのよ。一晩、裸でぶら下げておいたから冷えたかもネ。まあ無理もないけど」

と、メロンの夜中の行状を暴露します。そして、そのお仕置の意味を兼ねて、実力者を使用しておむつを着用させたのだ。そう注釈を加えました。

「まあ、そうでしたの。やはり夜分は冷えますからねえ」

ドロップは、さも同情したように、おねしよ坊やの顔をのぞきこみます。

「うそだ！ デッチ上げだ！」

突然、無念を噛みしめての沈黙を破って、

メロンが絶叫しました。

「何言ってるの。ごらんなさい。証拠があるじゃないませんか、証拠が。上等の絨毯を台なしにして——」

サファイヤは語気鋭くそう決めつけ、メロンの鼻をぎゅっとつまむ。動かせぬ物証を顕示され、メロンはカッコン、冤罪説は不成立となりました。すると、今度はシロップが「でも、おむつだなんてねえ。赤ちゃんじゃあるまいし……」

「だって、本人がはかせてくれと要求するんだから、仕方ないわ」

メロンは泣き面に蜂というところ。実際は無理やり強制装着させられたに相違ないが、サファイヤは、そんなことを言っ、とぼけるのです。

メロンが依然、強情な態度を改めず、結婚申込みを承諾しないので、かような腹いせ的言論を示すものと推察される。

おしめカバー問答は、かくて落着し、事態は新局面へと発展します。

「ときにドロップや、結婚式の日どりのことだけどねえ……」

「手筈万端、もはやすべてととのえましたでございます。王様」

メロンの意向など問題ではない。予定通り式典準備にかかるまでだ。この点に関してはサファイヤと二人の侍女は完全に意見が一致しているようです。

「婚礼衣裳はまだじゃない？」

「四越デパートに誂えさせますが、寸法がわかりませんので……」

装身具は中丸百貨店に注文済みだ、のとことです。その手まわしのよさに、メロンは未来の夫となる細君の豊饒下で齒ぎしりしています。

「あまり期間もないようだし、今ここで寸法

を取っておこうかしら」

「それがよろしゅうございます。ついでお化粧の方も、その要領を——」

「そうね。じゃ、お前、御苦労だけど——」

サファイヤは招き寄せた侍女ドロップに、何やらヒソヒソと耳打ちをする。うなずいたドロップは部屋からおどりだすように出ていきました。

「この器量なら、わたしの妃として申し分ないと思うけど、どうかしら」

顔を必死に横へ伏せているメロンのあごに手をかけて、上を向かせたサファイヤが、シロップの意見を求めると、

「全くでございます。これほど美しいお姫様は滅多におられるものでございせん。それに、お身体つきやお肌の白さなど、まるで天女のようなあますわ」

と、シロップは適当にゴマをすり相槌を打ちました。

メロンには、そのやりとりがいやや応なしに耳へ入ってくるが、両手の自由が利かないので、耳を覆うことすらできません。

「ね、このホクロなんかどう思う？　かわいいでしょ？」

サファイヤはメロンの口許のほくろをつつ

いて自慢します。まるで人形なみの扱いに、一瞬、憎悪の視線で睨み上げたメロンでしたが、赤い舌をペロリと出されて、ギリギリ歯がみしました。

「真珠のような歯ならびですこと。——あら八重歯ですね」

シロップは無断でメロンの形のいい唇を下に開き、讃辞を呈します。

「そこが、すごく魅力的。それに、このツンと上を向いたお鼻もね」

メロンは激しく頭を振って、サファイヤの指につまみ上げられた鼻を振り放しました。度重なるいたぶりに白い肩がぶるぶると慄えています。これくらいは、まだ序の口なものでした。

サファイヤとシロップが、こうしてメロンの品定めをしていると、ドロップが部屋に戻ってきました。片手に化粧品セットの詰った小箱を持っています。それを受け取ったサファイヤ、中から各種化粧品を取り出し、床の上に並べました。

「さ、あなた、お化粧してあげますからね。そんなかわいお顔しないで下さいな。キレイにして差し上げるのですから……」

そう言って、裸のメロンを馬乗りに組み敷

いたまま乳液をとかし始める。ドロップとシロップが面白そうにその情景を眺めているのです。

「ヘアスタイルは、どのようにいたしましたしょう、王様」

「パーマより、短くカットした方がいいと思うの、この子は」

「ボーイッシュな魅力を発揮させるわけですね」

女三人寄ればかましいというが、メロンの迷惑などてんで無視して、好き勝手なことを言い合います。

乳液を顔にぬられ、ハサミで髪を刈られ出すと、あまりの人種蹂躪にメロンはたまらなくなつて、憤怒の唸り声を挙げ、無茶苦茶に頭を振りまわしました。すると、ドロップがメロンを組み敷いているサファイヤと向かい合うように坐り、メロンの頭を膝頭の間にかけ、ちりと挟みこんでしまったのです。

必死の抵抗も簡単に鎮圧され、メロンは無念そうに唇を噛みしめました。

「ねえ、この坊や、怒ると一層ハンサムに見えるわね」

「性的魅力満点ってとこかしら」

ドロップとシロップの両嬢は、浮き浮きし

た口調でそんなことを放言して、改めて念入りの美顔術にとりかかる。

頭にローションを吹きかけ、短くカット。ドロップが顔をパフではたいて頬紅をつけ、まゆずみを入れる。シロップが香水を出して耳や頸にふりかける。

「あらあら、鼻毛が見えてるわ。抜いとかなくちゃあ」

と、毛抜きを手にして、メロンの鼻をひねり上げる。抵抗の空しさを悟ったのか、メロンはもう、すっかり観念したようすで、侍女達のするがままになっています。

メロンを組敷いている王様のサファイヤはとみれば、口紅の棒を数本、手に持って思案顔です。そして、

「この子には、どの色が似合うかしらね」

と、侍女達の意見を求めました。

「赤になさいます。若々しい魅力を強調するには、それが最適でございます」

「でも、わたしならピンクにしたいわ。お肌の白さと一番よくマッチした色ですもの」

両人の美的感覚が一致しません。サファイヤは、しばらく考えて明るい赤のルージュを選び、お化粧の仕上げにかかりました。

「静かにしてなさい！ 齒に色がつくじやな

いの。——えーと、こんな感じかな。——さあ、これでいいわ」

丁寧に何回もルージュをひき、やっと満足したのか、ようやくにして美顔術は完了いたしました。二人の侍女は、きれいに化粧されたメロンに、うっとりとし入り、サファイヤもまた、腕組みしたまま溜息をついて眺めやる。面白くないのはメロンだけでしよう。

「ね、ちょっと笑ってごらん。せっかく、お化粧してあげたんだから」

口惜しそうにベソをかいているメロンの鼻を、サファイヤは軽くつつくのでした。

顔の手入れが終了すると、次は、待望の身体サイズ測定です。サファイヤは、化粧箱から手ごろな巻尺を二個、取り出しました。まず、分担を決める。

「ウエストから下は、お前達に任すわ。わたしは上半身を計るから」

そう言って巻尺をドロップに手渡す。尚、シロップは記帳役です。

メロンは、また思い出したように暴れ出しました。だが、いくらもがいても、サファイヤの豊臀は、微動だにするものではありません。

「首まわり〇〇センチ、肩巾は、えーと、△

△センチか……」

侍女の方は職務をサボっています。

「まあ、かわいいわね、このお臍」

「ビロードのような肌ざわりなこと」

鑑賞は測定に他ならず、とは両嬢の期せずして一致した見解とみえる。メロンは自由な両脚を、ばたばたやっています。

「何やってるの、お前達！」

「でも、お姫様がおとなしくなさらないもんですから、計りにくくて……」

職務怠慢を叱責されたドロップは、メロンのせいにして、巧みに責任を転化します。サファイヤは舌打ちして、

「かまわないから、両脚ごと押えつけておしまい」

王様の許可を得た二人、ではとばかり、メロンの両脚を、からめとりにかかる。

「あ、何、何するんだっ！」

メロンは狼狽して拒み、必死に両腿を密着させて防戦しようとしています。が所詮は、ごまめの歯ぎしり、二人の侍女は、メロンの脚を一本ずつ抱きかかえ、力まかせに左右へ引っ張りつけると、その膝の上に各自、跨がるように坐ってしまいました。

かくて大の字型、床上張りつけの完成。上

半身は最初から完全に押えこまれていますから、もうこれでメロンは身動き一つできなくなりました。

「意外と力あるのね、身体つきに似合わない」
「でも、この脚の線、とってもきれいだ。モデルにしたいくらいだわ」

メロンの抵抗に手を焼いたドロップが敵の善戦を讃えると、シロップはメロンのすべすべした、その脚線美を激賞しました。

「ねえ、王様。メロンさんにミニスカートをおはかせになったら？ 膝上30センチくらいののが、よくお似合いだと思いますけど」

「そうね、考えておくわ。……さてと、このバストをどうしたものかなあ——」

「バストをお入れになればよろしゅうございますわ」

女に化けるには、やはり相当のカムフラージュを必要とするようです。サファイヤと侍女達の心づかいに余程感激したのか、メロンの目尻から、ホロツと大粒のうれし涙が一滴流れ出しました。

それに気をよくして、ドロップも下半身のサイズ計測を開始します。ウエストを計り腿まわりを調べ、脚長及び足の文数を測定。メロンが、おしめカバーしか着用していないの

で、計測はきわめて容易です。

「どう。全部、終わった？」

「はい、あとはヒップだけですけど……」

そのヒップが大問題。おむつの上からでは正確性を期しえません。サファイヤは、その端正な横顔に、ふと複雑な困惑の表情を浮かべましたが、すぐメロンの方へ優しい慈しみの視線を投げかけ、

「どうなさいます、あなた」

「……………」

「わたしの妃になって下さるんなら、あとでわたしが計ってあげますけれど——」

求婚を承諾すれば、羞かしい目にあわせなという交換条件です。メロンは進退ここに極まりといった絶望的状况に追いこまれしました。サファイヤは、くすりと笑って、

「さ、早く決めて頂戴」

「いやだっ、絶対にいやだ！」

メロンは断末魔のような声を絞り出し、侍女と局外者の喜ぶ道を選択しました。

「そう？——じゃ、仕方ないわね」

サファイヤは白けた表情で後を振り返り、侍女達に目くばせ、ドロップとシロップは奇妙にも喜色満面の表情で、いそいそと取り外し作業にとりかかりました。

当然のこととはいえ、メロンは大恐慌。覚悟したはずなのに何を血迷ったのか、

「あ、ああ、い、いやだ、いやだあ——！」
と、取乱しています。

「うそ言いなさい！ たった今、自分で頼んでおきながら」

ぴしりと決めつけるサファイヤ。なるほど論理的にはそうなるでしょう。

両脚の自由を完全に奪ってあるから、コトは、きわめて簡単です。

——やがて、ドロップの含み笑いとシロップの忍び笑い。そして不気味な沈黙。羞恥と屈辱にメロンは全身火柱のように赤く燃え、耳たぶまで朱に染め、顔をそむけています。

二人の侍女は、そこでサファイヤに気づかれぬよう何やらひそひそ話……。

突然、メロンが狂ったように頭を振り出しました。自分の意思で動かせるのは、頭以外にありません。

事態の急変を悟り、頭を回らし二人の侍女に目をやったサファイヤ、思わずぶっと吹き出してしまいます。

「お前達、いい加減にきなさい！」

と、笑いをこらえて職務逸脱の侍女達を叱責しました。観賞会などを勝手にやられては

たまらない。サファイヤは、美しい眉をひそめ、臀下に呻吟するメロンを、苦々しげに見て、

「何です、あなた。人様の前で。そういう態度をおとりになるなんて、わたしの立場がないじゃありませんの！」

と、亭主の不心得をなじるのでした。

ようやく二人の侍女はおもむろに本来の業務に従事します。メロンはもはや抵抗する氣力を失ったのか、二人のなすがままに、身を委ねました。

「おどろきね。丸さといい、大きさといい若い娘そっくりよ」

「全くだこと。おヒップの方にはパットはいらないわ」

メロンの従順ぶりをいいことに、侍女達はしぶい顔つきのサファイヤを無視して勝手なことを言いあいます。批評の言葉も出尽したところで、ようやくヒップ測定も終了いたしました。

「他にお手伝いすること、ございませんかしら？ 王様」

「このままじゃあんまりだから、この子の下着を取って来ておくれ」

せめて腰のものだけはつけさせてやろう。

サファイヤは暖かい思いやりを示し、シロップにそう命じました。

「でも、男物の下着など、ここには——」

「馬鹿ね、この子はわたしの妃になるのよ」

サファイヤは言外の意味を悟らせるため軽くウィンク。それを了解したかシロップ、肩を大仰にすばめて室外に姿を消しました。メロンは、ますますみじめな思ひです。その顔を両手に挟みつけ上を向かせたサファイヤ、ひたと、その眼を見据えて、

「いい？ あなたがどんなにいやだといっても、必ずわたしの思いどおりにさせますからね。そのつもりでいなさい」

と、自分の意思の不变を再表明します。メロンは思わずカッとなり、突き上げる口惜しさを呑みこむようにして、

「い、いっとくけど、絶対、お前の言うことなんか——」

と声を震わせました。たとえ身は虜囚の恥辱を受けるとも、心までは売らないと、けなげな態度を示すのです。意地っ張りなところは感心だが、そのため次節で散々な目に合うのです。

「それにしても、お顔に似ず強情な方ですねえ、メロンさんって。頼もしいですわ」

ドロップがとぼけたような顔で、半分はメロンをかばい、半分はサファイヤに焚きつけました。

「ふん、きつとお前達の手前、虚勢を張ってるのよ、この子。今夜一晚かけて、じっくり口説き落してみせるわ。わたしの妃になるってことをね」

ドロップは、くすくす笑って、

「ただ、お妃におなり遊ばすだけでは——」

「そうそう。世継ぎのことがあるわね。それも承諾させましょう」

嫁して三年、子なきは去る。とは、さる国の格言だが、この国では二年である。二年以内に世継ぎの王子を生まないと、妃たるの地位を剝奪されるのだそうです。

「年令からいえば少し早いけど、親にならせた方がいいかな。自分の子供が生まれたら、多少は軽はずみな性格も直ると思うわ」

「そうなさいます、王様。メロンさんも、きつとお喜びになるでしょうから」

二人で物騒なことを話し合っていると、シロップが部屋へ帰ってきました。手にしたものはと眺めれば、色とりどりの女性用下着の数々。ただし、パンティばかりです。それをこれ見よがしに、メロンの頭元に並べる。

メロンの顔に再び血が上ります。そんなものをかされる、そう察知すると、全身の血が逆流する思いです。

「王様って、ずい分と下着にお凝り遊ばしますのね」

「そうでもないけど、この子がうるさいもんでね。毎日取り替えないと御機嫌が悪いの」

てれかくしを言ったサファイヤ、赤い舌をメロンに出して見せました。それから、色と柄の選定に移ります。侍女達は先程同様に、「絶対、白の無地よ。清楚なイメージにぴったりだから」

「悩殺カラーのおピンクはどうかしら」

「あら、これシックねえ。透ける黒地に紅薔薇の浮かし模様——」

などと各自勝手な意見を述べる。しゃべらせておくときりがないので、サファイヤが遮りました。

「これがいいわ。これをはかせてやって」

と、緑地にピンクの水玉模様の入ったパンティを侍女に手渡しました。

「まあ、斬新なデザインですこと」

「ふふ、この子の一番お気に入りなの」

ドロップとシロップは顔を見合わせて笑いメロン君愛用の品をはかせにかかりました。

口惜しさがぶり返してきたらしく、メロンは、また脚をばたつかせて暴れ出す。

「何です、あなた、身勝手な！ いつもは好き放題にしていたくせに！」

サファイヤは立腹した風を装ってメロンを叱責し、メロンの脚と格闘中の侍女に向い、

「前と後を反対にしなきゃあだめよ」

「？……あ、なるほど、そうか！」

懸命の防戦も空しく、メロンはついに強制着用させられてしまいました。

「少しダブつき気味ね」

「婚礼式までに、ピッタリしたのを誂えておくわ」

サファイヤと二人の侍女、そこで、どっとばかり笑い崩れました。メロンは散々です。

これ以上、組み敷いている必要もないからサファイヤは、ようやくメロンの身体を自由にさせてやりました。

豊臀の重圧から、やっと解放されたメロン長時間の押えこみに体力を消耗し尽したのかふらふらとその場にくずれるように膝をつくと両手で胸を抱くようにして、小さくちぢかんでしまうのでした。そのくせ眼だけはギラギラと憤怒に燃え、侍女達と共犯で自分に恥辱を与えたサファイヤを、時折り上目づかい

に睨みつけます。

サファイヤはくすりと笑って、メロンの傍へかがみこみました。組み敷いていた時の非情さとはガラリと変り、気味悪いぐらいに母性的です。優しく肩に手をかけ、

「とってもよく、お似合いよ」

メロンは憎悪の視線を向ける。

と、その瞬間、素早く両脚タックルをかけたサファイヤ、その肩にメロンを軽々とかつぎ上げました。メロンは無念そうな表情で身悶えています。

「お前達、御苦労さんだったわ。あとは、わたし一人でやるから、もう結構」

侍女達は何となく心残りのようすです。

「うまくいけば、よろしゅうございますけれどねえ」

「おまかせを。——明日また、お前達に報告することにするわ」

サファイヤは自信満々です。メロンは顔を真赤にして歯ぎしりしています。その水玉模様のパンティを、ぱんと軽く叩いたサファイヤが、あっさり言いました。

「さ、あなた。あちらへ参りましょうね」

|| 贗 作

「花と蛇」||



調 教 会 議

S · S · T

広大な邸にたそがれの気配が濃い。数日間もつづいた淫虐なショーは一段落をつけて、すっかり満足した客たちもあらかた帰り、邸の住人たちは一息入れようと期せずしてバーのしつらえてある、ホールに集まってきている。ぶあつい絨毯のしかれている豪華な広間

のソファや床に思い思いに陣どりながら、おしゃべりをはじめる。

ショーは大成功だった。五人の美女が演じた肉体の競演は、客たちだけではなく、主催した彼らにもこの世のものとも思えない歓楽の宴であった。拐わかされの女たちの、いか

にそう仕込まれたといっても軀を張っての熱演に、みんなほほ満足していた。何しろ、大切な客人の前での粗相は、とんでもない結果をまねきかねないからである。鬼源自身でさえ、女どもをあれだけ自由にあやつれるだろうとは予想していなかったのだ。

鬼源はニタニタ笑いながら言いだす。

「今だから言うが、あっしだって始めて静子をみたとき、こいつあだめだ、と思いましたぜ。何しろワシが拝んだこともない上玉だ。すれっからしの中年の淫売でも仕込むのはそれなりに大変なんです。もちろん簡単な芸なんです、たいていはまともに言いつけに従いやがらねえ。そいつらにも自尊心てえやつがあるんですな。だがね、静子を見てだめだと思う一方で、あっしやこの女を仕込めさえすりゃ、もうこの商売から足を洗ってもいいとさえ思いやしたね」

「じゃ、今はどうなの？ 今なら静子、どんなことでも這いつくばって言いつけ通りにするわよ」

と千代が角ばった顔をひきつらせて不服をいった。ショーの成功をみんなしてよろこんでいるようなのが不満なのだ。小さな目が静子への憎しみにもえている。

「あの女の調教はこれで一休みというの？」

もうおしまいというの？ とんでもない！

わたしは静子の上品ぶったきれいな顔や、ムチムチしたあの軀をみると、齒ぎしりしたくなるほど憎らしくなってくるのよ。もっともっと弄んでやりたくなる。腰の抜けたメス犬がうらやましくなるような目に合わせてやらなくては引き下がれないわ。この邸の中で放し飼いにして、どんな芸当だってできないとは言わせないようにしなくちゃ……」

「そういえば」

と田代が口をはさむ。千代夫人の尻馬にのったかたちで、

「女どもの調教は、近頃ちょっと型にはまってきたようだ。マンネリというのか、羞しめ方が足りんというのか。要するに、もっともっとけがらわしいことをさせにゃいかん。今のままじゃ、鬼源といっても大した仕事師じゃない、と思いたくなるようになるかも知れん」

朱美がケラケラ笑いながら、いいだす。

「あたいは小夜子や美津子、桂子などの仕込み方が足りないと思うわ。そうね、たとえば大切なお客が立関に来るとするでしょ。いらっしやいませ、てんで、裸の桂子がシキイに

三つ指をつく。応接へどうぞ、といって先に

立つ。あいつのお尻は大きいからいやでもお客はムラムラとくるわよ。お客は一息入れて風呂に案内される。そこにはヌードの美津子が縄をささげてタイルの隅にかしこまっているという寸法よ。夜には小夜子がお相手をおおせつかる。つまり、鎖つきの皮ベルトを腰に巻き、鎖の端をベッドの脚に打ちこんでおく。そうするとお客に死ぬような目にあわされたって逃げられっこないわ。小夜子には猿ぐつわをかけてあるから、すすり泣きなんかで客が気分をこわすなんてことはない、というのはどう？ いや、こんなのは大したことはないようね。京子には、客じゃなく、でっかい、いやらしい臭いのする牡犬をあてがってやる。ワンと吠えれば四つん這い、ワンワンで裏がえし——」

「犬がかい？」と義男の半畳。

「いいや、京子がよ。ばかね……アハハハ。」

どう鬼源先生、あまり面白くない？ じゃ、もっといいアイデアを出してちょうだい」

「照れくさいけれど僕も、いおう」

義男は指輪をいくつもはめた手を自慢そうにみせびらかしながらしゃべりだした。こんな低劣な男が、元の令嬢をさんざんに弄んだ

のだ。

「五人をならばせて鈴縄をかける、ついでに乳枷もととりつける。よいいドンで一斉にスタートだ。早いところゴールインした女にはごほうびをやる。いちばんおくれた奴は——」

「つまり、いつまでたっても駄目な女ね。どうなるの？」

「お仕置だ。例の塗りグスリを二瓶……ふたビンだぜ、全部使う。四つん這いにさせてあとの四人にぬりこめさせるんだ。全身くまなく充分にぬりこめる。とくに、ここと思うところには、たっぷりぬることも競争の一つに加えるんだ。それがすむと、お好みのスタイルに縛りあげる。後手にして、猿ぐつわも忘れちゃいけないな」

「それでどうなるの？ あたいゾクゾクしてきたわ」

「ただ一昼夜、転がしておくだけさ、結果はどうなるか知っての通りだ。モクモク身もだえするイモムシさ。たっぷりと精のつくホルモン焼きを餌にしてやればいいだろう。ピクピクしているイモムシのお化けみたいな女をあとの四人にみせしめのため羽毛でくすぐらせる。それを見物しながらの酒はうまいだろうなあ」

「そんなことをすると、気が狂っちゃうじゃないの？」

「ハハハハ何をいってるんだ。それぐらいのことに耐えられないで、森田組のスターが動まるか。たとえ狂っちゃってもせいぜい色きちがいだろう。絶世の色狂い美人なら、香港あたりの魔窟が、大よろこびで引きうけるぜ。むこうじゃ日本娘ならいくらでも欲しいといってるんだ。何しろ、あそこに集る連中は手に入れたムスメを人間扱いにしないんだな。だから補給がおいづかなくて困っている始末らしい」

つまるところ、五人の裸女たちにはこの邸の者を欲ばせ、滑稽がらせ、金もうけをさせる以外にどんな前途もないのである。商品として、絶好のオモチャとして加虐者たちは手の中にした美肉を絶対に逃がしたりはしない。

▲静子のまつ白く憎々しいまでにポツテリした双尻、脂ののった素晴らしい肌、駆けさせるユサユサゆれる乳房。そんな見事な軀をみると、千代ならずとも、羞悶の果てに這いまわらせずにはおれない不思議な嗜虐感にとらわれるのである。京子の肉体はまたちがった感じだ。ひきしまって腕をふせたような乳房で、スポーツできたえた腰はぐっと引きしま

り健康そのものの色艶をしている。尻をピンヤリとやる時のプリンとした手ごたえが悪魔たちを喜ばせる。涙にくれて、屈服してからが、眉をすぐに伏せて、従順に命令にしたがう。彼女を好む連中は、よくいたずらをしかけては、すすり泣かせて悦にいつているようだ。

すき透るような肌の美しさといえば、小夜子が抜群である。ヌード雑誌のグラビヤにかざれば、比べられるのはざらにないだろう。スラリとした脚だが充分に肉がのっており、裸身そのものに上品な香気があふれる。乳房は肩のすぐ下から盛上るような完全なかたちである。

小夜子とちがって、美津子の胸乳は円錐形で先がとがり、姉と同じようにツンと上を向いているのが非常に清潔な印象をあたえる。つぶらな瞳がまことに愛らしく、地獄のドロ沼にいろようにはみえない。豊かな髪は学生風に長く、イタズラをするときに引きよせるのに都合がよい。ちょっとした仕草でも可憐なので、チンピラどもにねらわれているようである。

同じように桂子もチンピラの好餌で、じつと暴行者に睨まれると、すくんでしまうのが

あわれだ。若い豊満な体をしており、ヒ弱そうなところはない。脂ののった肩の線、全体がまるくいかにも女性的なやさしさにおおわれてる。男の手に握られると、全身がすぐにピンクに染まりはじめる……

五人のハダカ麗人たちは、このようにそれぞれがった美しさをもっているが、調教に際してもそれぞれの反応を示す。使用方法はその白い肌のどこにも書いてはないが、いつまでもたっても飽きのこない無限の使いかたがある素晴らしいオモチャである。お遊びの相手をしなから、おまけに金もうけまでさせる。

美女の涙も肌も羞恥の心もいっさいが、その道具立てでしかないのだ。

苦汗をしたたらせ、羞恥に呻きながら、悲しいヒロインたちはすべてをなげだして加虐者に奉仕を強いられるが、与えられるものはズベ公たちのけたたましい嘲笑や、下等な男たちの淫らなからかいだけである。この稀に見る美女たちに、いったいどんな罪があるというのだ？ 罪？ —— そうだ、彼女らの罪は、あまりに恵まれた境遇に育ちすぎたことだ。そして、その肉体があまりにも豊かに美しく照り映えているからなのだ。その故にこそ、どんな罰もきびしすぎはしない。

——千代がしわがれ声で喋っている。

「こうして意見を出し合っていると、静子や京子からは、まだまだいろんなことが引きだせそうね。もっともっと徹底していじめてやろうよ。静子なんか、あんなゴリラ男相手のときだってイヤに上品ぶってたわよ。ほんとうの責めはこれから始まるんだってことをあの軀に思い知らせてやる！ それにしても鬼源さん、さっきから言うように、あなたのアイデア、近頃少しにぶったみたいね」

ここまで来て、今まで口々に喋りあっている連中の声を、だまって腕組みしながら目を閉じて聞いていた鬼源が、くわっと目を見開いた。

「そうまで言うなら、あっしにも言わせてもらいやすぜ」

ドスのきいた声である。スベ公たちは、自分たちの貧弱な胸をひと撫でされたように顔をみあわせる。

「あっしやね、女どもを仕込むのにつねに次の手を考えながらやってるつもりですぜ。はばかりながらプロのエロ事師にや、まだまだアイデアとやらはうなるほど持ちあわせがあるんですぜ。——ところで森田親分にも千代夫人にも、失礼だが一寸いわしておくんさ

い。ほかの皆さんも、自分の胸に手を当てて考えて下せえ……」

ドサ廻りの芝居がかった言い方だが、ホルの中は静かになる。

「あっしや、あのメス共を手荒く扱っていて、肝心のカラダや羞恥心を、根こそぎダメにしちまうような方法をとらねえことは、皆さんはよく知っていなさるはず。精のつく食いは物はたっぷり与えてあるし、入浴も日に何度もさせるなど、美容のほうにも気を配ってやす。結局そうして体力を回復させておいては、だんだんとのっぴきのならない状態に追いこんでゆく寸法です。——ところで皆さん方、それぞれ身に覚えがありますな？ 人が寝静まるところを見計らって、コッソリと好みの玉を自分の部屋に引きいれて、好きなようにしたってえことをさ」

△鬼源のこの発言は、「花と蛇」の物語は二重のストーリーが進行していることを意味するわけだ。つまり、活字にあらわれるはなばなしの責めのほかにもう一つ、活字にはとうていできない破廉恥なストーリーがすすみつつあるわけだ。誌上はいわば、スポットライトつきの公開の舞台であり、書かれない舞台裏の出来ごとは、読者の頭の中でも筆舌につ

くせぬシーンとなって展開しているのである。一人の美女にあたっているスポットの陰には、秘められたもう四通りの凌辱絵図がくりひろげられているわけである！

……広間では思い思いの姿勢でくつろぎながら、身におぼえのある下劣な男女たちは、しばらく声もださずに鬼源をみつめる。

「あっしやね、女たちを責めて一人一人からききだしたんです。はじめに桂子がゲロし、美津子、小夜子って順に吐いてきやしたね。それぞれ、よっぽどいい含められてるんだ、仲々口を割らねえ。京子と静子にやささか手をやきやした。もっともその途中で、あの女のことをよっぱどほめてやろうかと思つたほど口が固かつたけど、オレの手にかかっちゃあ結局はダメさね。軀にはひっ搔いたほどのキズもつけずに責めるのがあっしの自慢です。——といってあまりやると、女たちは皆フラフラになっちゃってますがね——いやこれは冗談」

皆は痛いところをつかれたかたちで、それでは、お前もかというようにバツの悪げな顔をみあわせる。

千代夫人を例にとってみると、上べでは捨太郎に静子をくれてやって清々したことにな

っているが、そんな位のことと元的主人に対する憎しみが癒やされるはずはない。捨太郎も責め道具の一つでしかない。そういえば千代夫人はこのところ入浴していないが、骨ばった妙な匂いのする彼女の体は汚れてもいない。香ぐわしいのは静子の舌と唇によって浄めさせているからである。陰火のようにもえる千代の目は、つねに牝獣に追い落されて奉仕する静子の肉体と、心にそそがれているのだ。

鬼源はうすよごれた腹巻きから、シワくちやの紙をとりだした。

「皆さんは互いに、誰も知らないだろう位に思っただけでやっていると、この書き付けをみるとすべて、見通しになる訳なんです。まあ、森田親分、田代さん、千代奥さま、それに兄貴分の方々には目をつぶりますが、もう少し手加減をしてもらわねえと。それにしても、葉桜団の嬢ちゃん方も達者なもんだが、下っ端たちまで、好きなことをしていくさって」

鬼源の書き付けは、正に百鬼夜行のおぞましさを連ねている。すでに知られるように、静子や京子などは亭主持ちということになっているのだが、それもあくまで全員が揃った

時のことだけで、舞台裏では考慮に入れられない。もしない。

「お呼ばれの多いのは断然静子、つづいて京子。小夜子もずいぶんふえてるようですね。色おんなの人気投票でさ。……しかし、まあ済んだことは仕方ねえ。いいことにしましうや。これからはすこしつつしんでもらうとして」

鬼源は未練もなく紙切れをちぎってクズカゴにすててしまった。

メモの内容はとうてい公開することはできないが、そのシーンを積み重ねてみると、男と女、女と女のあらゆる浅ましい一面がすべて網羅されてしまうことになる。

「なあんだ、そうだったの」

とすっかり白けた座で、千代が悪びれもしない平気な声でいいだした。

「ずい分、静子を可愛いがってやったけれども、そんな大切なことをかくして上品ぶってたなんて、ちっとも知らなかったわ。さっそく鬼源さんの言った通りかどうか、あいつのカラダにきいてみるわ。でも私は女だし、静子令夫人にお仕えしていたんだから、ごくインギンにお訊きするわ。いいでしょ？」

さすがの鬼源や、森田たちも、千代の財力

には一目も二目も置かざるをえない。

「千代夫人にはかなわないね。お手柔らかに願いますよ」

「後生だからガタガタにしたりしないで下さいね。まだまだこれから大いに羞かしがってもらわなくちゃならないんですから」

「静子の運命は、今や風前の灯といったところかな。アハハ……」

などと口々に言った。千代は立ちあがりながら、

「ご心配なさらないで。カスリ傷一つつけやしませんよ。でも、ちょっと深刻なお話だから、ため息や吸り泣きがきこえたって気にしないでね。もしかすると失神したりするかもしれないから、あとでお水を持って来てちょうだい。徹夜のお話なので、明日の朝、令夫人の足がふらつくことくらいは辛抱してね」

座のものは、今さらのように千代の憎しみの深さを知った。だれも千代と静子の一对一の場に居あわせたものはない。だが、葉桜団の悦子は今朝、漢方の生薬屋の者が、指くらの蛇や、ヒル、カエル、二十日鼠、昆虫などをバスケットに一杯入れて届けに来たのを受取っている。注文した千代のニタニタ笑い

S.C.R. (性問題相談室) 開設

担当……弓削性科学研究所長 医学博士 弓削達人先生

他人に打ちあけ難い悩みなどについて

編集部の長年の懸案であり、近時急速にその必要に迫られていました性問題相談室 (Sex Counselling Room 略称 S.C.R.) を開設致しました。

この欄は無料相談であり、結婚生活一般から夫婦問題、さらにホモ、フェチ、サド、マゾなど性的倒錯に関する悩みの打ちあけ、巾広いカウンセリングに応じます。また誌上公開をはばかれる方には、転送先を明記すれば仮名で解答して差支えないとの御好意あるお申出をいただいております。担当の医学博士、弓削達人先生については、公的な身分はさしひかえますが、某民間病院附属の性科学研究所々長であります。

○ 本誌の愛読者の方で、医学博士弓削達人先生に性問題に関しての解答をお求めの方は、御遠慮なくお便りをお寄せ下さい。

○ 個人の秘密については絶対御迷惑はお掛けいたしません故、御安心の上、何んなりとお尋ね下さい。

○ 誌上に掲載するものについてはすべて匿名とし、御希望によっては先生の御都合のつく限り、直接の解答も致して貰います。

○ 御相談についての診断及び回答についての費用は一切不要です。

○ 宛先は編集部気付、弓削達人先生として下さい。

御遠慮なく相談をお寄せ下さい

は、その内容物よりもっと気味の悪いもののように思えたものだ。果して何に使うのかよく分らない。「鳥の餌にしようと思ってね」と千代は言ったが……。鳥なんかいたろうか？ 悦子は、ゾツとした。銀子は別の機会に、妙な器具をみせられている。それも目的は知らされてはいないが、銀子には、だいたいの想像のつく、いろんなものがあつた。

千代は無作法なノビをした。

「じゃ、私はお先にしつれい」

彼女は、部屋を出て、いくつかの廊下を折れ、地下室に通じる階段をおりる。その足どりは、とびはねるように楽しそうである。いくつか並んでいる、とつっきの檻に静子が押しこめられている。

ひっそりと坐っていた静子は、足音でハツと後手に縛られた身をおこす。あでやかな眼差し、ノーブルな美貌は、陰鬱な地下室でもいささかも損われていない。かくしようのないまっ白い美肌を、さげすみきった目で見おろしながら、千代は舌打ちとともにいった。「さあ、静子、私の部屋へおいで。これからゆっくりと、訊きたいことが出来たから」



「徳川女刑罰史」に思う

千 草 忠 夫

—

待望の「徳川女刑罰史」を観た。そして、期待が大きすぎたせいか、いささかガッカリしている。併映の「不良番長」の方が一層印象に残ったのは皮肉であった。

ガッカリした理由は一にも二にもムードが全くないということに尽きる。責めに理解のない人が責め映画を作ってもダメだ、ということが、これでハッキリわかった。金をかけているか、いないかの問題ではない。

先に「縛り映画のことなど」でちょっと書

いたことなのだが、私の言う「ムード」について、これを機会に今一度少しくわしく書いてみたい。

五社はじめての本格的責め映画ということ、たしかに小プロダクションのものより金がかかっているようだが、おそらく小森白の「拷問刑罰史」などを念頭におき過ぎているせいなのだろう。あまりにも欲張り過ぎて、かえって印象を散漫にしまったようだ。刑罰の苛酷さを示すのに、なにも近親相姦や坊主と尼のからみ合い、尼僧同士の同性愛など必要としない筈である。

おそらく、徹頭徹尾エロものに仕立てようという、ピンク映画への対抗意識が（或は五社の面目が？）こんな結果を生んだのである。そのために、刑の重さを思う前に、あんなフシダラな事をやった奴らには極刑は当然だ——という感じを観客に与えてしまい、責めには絶対的に必要と思われる哀切感を稀薄にしまった。美しい女が無実の罪を叫びながら拷問に屈し、そして極刑に処せられて死んでゆく——というような、見る者をして胸つぶれるような感じを与えなければ、責め映画は落第である。

要するに、責め映画なんて裸の女を縛りあげて尻をパタパタやりさえすれば観客はよろこぶんだ——という見くびった考えが監督にあるいはシナリオライターにあって、カンジンの哀切なるムードの盛り上げをおさなりにしたためである。責めもドラマである。ドラマの中のドラマなのだ。基本的なドラマトウルギーは責めにだって適用される。それを無視したものなどナンセンスでしかない。

次に、少しくわしく内容を見てゆこう。

ファーストシーンの三段斬りと股裂きはなかなかいいムードを出していた。ことに女が木に吊られて斬られる寸前、うらめしげな眼をあげるクローズアップ（この映画で責められる者の表情のアップはこれひとつではなかったろうか？）長い髪を吹きなびかせながら首がころがる所、股裂きでいよいよ股を開かせられる際の身悶え等は、私の好むムードが横溢していた。

第一話は、三話の中で最もまともに見られたが、これはおそろくみづに扮する橘ますみが、他の女優にくらべて芝居のできる女優なので監督も安心してドラマを組めた為ではないかと思う（その代り裸は見られない）。しかし彼女のフェイスからするなら、あざとい

近親相姦などというものにしないで、無実の罪あたりを押しつけた方が、ムードを盛り込めたように思う。

江戸時代の裏店というのは狭くてきたならしい点では、我々の想像を絶したものだそうである。そんな所に貧乏人の子沢山が、親子兄弟重なるようにして暮らしていたのだから、近親相姦は、さほど珍しいことではなかったのだそうである。

ところが映画では我々の住む家と同程度の所に兄妹ふたりだから、近親相姦の必然性は極めて薄く、裏店に咲いた可憐な花ゆえの悲劇という哀感がとぼしいうらみがある。

この話だけヌードがなく、狒狒爺に犯されるシーンもお上品にすましたのは女優に遠慮したせいかも知れないが、召し捕られ縛りあげられた体を、人々の嘲罵をあびながら引かれてゆくシーンは是非、欲しかった。

第二話になると話は全くおさなりで、要は丸坊主の男と女、女と女のからみあいに対する興味をおおろうとしただけのもの。いくら男の首を抱えて自害したって、その必然性がないから、首の張子であることだけが眼についてブチこわしである。

妙心に対する責めにしても、女責めのスタ

イルを見せるだけで、それにともなう陰惨さにとぼしいので、いっこうに興がわかなかった。ついでながら、坊主頭の女は、やはり黒髪を振り乱した女の姿にはかなわないうように思う。責めにおいてはなおさらアクセントのつけようがなく興味索然、黒髪は女のいのちという感を妙な所で噛みしめたものである。

磔のシーンもまことにアッケラカンとしていて、血を見せることだけが残虐と考えているフシがあるのはなさけない。凄惨の美とはそんな安っぽいものではないのだ。

この磔で気になったのは、他の映画でも磔のシーンでよく指摘される、受刑者の二の腕を縛らないでひじを曲げた恰好が見られた点である。他の縛りシーンでは、さすがに辻村氏の指導になるだけあって、これまでのこの種映画には見られなかった緊縛感が横溢していて、この点だけはあぶなげなく見ておられたのに、磔にいたって二の腕ダラリを眼にしで、ガッカリしてしまった。

さて第三話になると、刺青の話はまあいいのだが、金髪女の責めが、どうもいただけない。

一話二話三話と話が進むにつれて、ムードなんかそっちのけで話は駆け足になり、その

足りない所を数でこなそうというのか、責めのオンパレード、悲鳴の交響楽となったが、観る者はアレヨアレヨと驚きあきれるばかりで、陰惨凄絶のカケラもないものになってしまっている。

ここにこの種映画におちいりやすい弊害が象徴的にあらわれている。それは、観客は責めの数と時間を多くすればするほどよろこぶものだという考えである。

責めの痛切さ、その悲惨な美しさを見る者の胸に刻み込むのは、量より、質なのだ。女はたったひとりでもいい、その責めの様相を——責める者と責められる者の熱っぽい心の交響を描きつくすことなのだ。

私がムードというのも、結局そこに帰着する。それは責めをクライマックスとし、そこに凝集する一篇の凄惨なドラマとなるのである。なくてはならない。時流に投じようとするだけの安易な気持ちでは、とうてい作れるものではない。

映画のストーリーが進むにつれて、私は次第に興味を失い、おしまいは、あきあきしてきた。併映の「不良番長」にあった、輪姦の短いが強烈な印象——それと等価のものを一時間半の責めの中から引き出すことは、遂

に不可能であった。

二

「徳川女刑罰史」を、サンザき下ろした後で、ふと心に浮かんだことがある。それは刺戟の持続性ということだった。

「不良番長」の輪姦シーンに、印象を受けた「刑罰史」のファーストシーンが良いと感じられたり、或はその時見た「般若のお百」の予告篇にチラリと現れた責めのシーンが心に残ったりするのは、それがほとんど前後の脈絡もなくチラリと現れたからではなかったろうか？ チラリズムはここでも通用するのではなからうか、ということである。

そう反省して見ると、もし、「刑罰史」の一シーンをチラリと見せられたらギョッとしてワクワクするに違いない、という気がしてきた。もっとも、このチラリズムの刺戟性と、私が前章で縷縷のべてきたドラマの盛りあがりによる感銘とは本質的に異なるものであることは強調しておかねばならない。

チラリズムの刺戟性は、多分「もっと見たい」という欲求を心にとどめる所から生ずるものだと思うが、そうだとすれば、ここに芸術の本質をなす「抑制」という問題が考えら

れなくてはならなくなってくる。「刑罰史」は欲張ったあまり、ユルフンになってしまっているのである。

刺戟についてもうひとつ大切な事は、それが時間の経過に従って鈍磨する、ということだ。「慣れ」である。だから、ジャーナリズムであれ映画であれ、読む者観る者の神経をたえず強く刺戟するために、次第に表現を露骨にしてゆくし、刺戟の方法を変えることに腐心している。近來の残酷ブームなどというのは、もはや平凡なセックスに飽きた神経を更に生き返らせる為に作り出されたといかないようがない。

我々奇クの読者にしても同じことで、たえず「モット、モット」と編集者に迫る。ところが現在の奇クでさえ、一般の人達（ことに醇風美俗の化身ともいうべき××婦人会の女史がた）には、眼の玉がデングリかえる程背徳的に見えるらしいのである。それもこれもみな刺戟の鈍磨性によるもので、「刑罰史」はこの点においても計算ちがいをおかしているといえる。

ところで、話を少し小説の方にまでのぼすと、すぐ頭に浮かぶのは評判の「花と蛇」のことである。正篇続篇あわせて連載およそ六

十余回、足かけ七年にわたる大長篇である。「抑制」とか「鈍磨」などクソクラエ、開けっぴろげのユルフンぶり、と言わねばならぬ。

さすがに最近はもう切りあげたら——の声を聞くようになったが、まだまだ人気はおとろえそうもない。(かく言う私も続けてほしい組なのだが)では、なぜ「花と蛇」が「刑罰史」におとらぬユルフンぶりを見せながらも、かくもおとらぬ人気を保っているのだろうか？

小説と映画における表現の限度の差、ということも考慮に入れなくてはならないが、第一の理由は「花と蛇」が連載ものだということだろう。ファンは一カ月の間待ちに待たされたあげく、ふるえる手に取って読む時間はおそらく十分前後、そして、また一カ月という長い焦れたい期間を過さねばならない。その感激の十分間のために、読者は同じシーン、同じ表現があってもお目に见ることになるのだ。全体を一気に通読すれば、おそらくアキアキしてくるんじゃないかという気がする。

この事は読者だけとは限らない。作者の団氏についても言えるだろう。氏はかつて「花

と蛇」の一回分を、或る気分の昂まりの頂点をなす時点で一気に書きあげる、と書いておられたが、そうでもしなければ、これ程のものを普通の神経の持ち主が継続して書くことは不可能だと思う。

この事について、私はかつて面白い経験をしたことがある。

ある好事家から私家版のS小説を書いてみないかとすすめられたのである。(この人はいろいろな人にこの種の原稿を依頼して、それを私蔵して楽しんでおられる。地下出版のたぐいではないので、念の為)かねがね、思うぞんぶん好きなシーンを書いてみたいと思っていた所なので、ふたつ返事で気軽に引き受けた。

公表されることはないのだから、ストーリーも登場人物の設定も、思い切り私の好みにあった背徳的なものにした。ストーリーと言ったが、実はストーリーなどはどうでもいいので、問題はいかに責めのシーンを細密に描くかということに尽きる。その意味では、私も、そこら辺のY本書きのねらう所となんら異ならなかった。

ところがである。勇躍してイザ筆を執り、書き進んで問題のシーンになると、ハタと筆

が動かなくなってしまったのだ。

問題は、どこまで書いてもキリがないということにあった。細かく書けば書くほど、描きたいと思うものは指の間から抜け落ちてゆくように、しまいにはむなしさだけが残り、いやになってくる。そうそうに描写を切りあげて何とか結末にまで持っていったが、この種の小説を書くのがいかに重労働であるかはじめて知り、あらためて団氏の情熱に深い敬意をおぼえたことであった。

「花と蛇」はほとんど、それを書く人の忍耐の限度まで描写されていると思う。あとは読者の想像力の仕事である。上品な表現を好みに応じてエゲツないものにあらため、伏字をおこし、それ以上の足りない描写は各自の脳裡にきざめばよろしい。

なにか話が妙な方向にそれてしまったが、要は抑制ということが、表現にとっては絶対に必要なことだということである。いや、抑制があってはじめて表現が可能といえる。

十一月号の「奇クサロン」で予世場良三氏がSM小説を書く際に起る疑問を提出しておられたけれど、私なりの意見を言わしてもらえたら、先ず書きたいものを(発表などということは考えずに)トコトンまで書いて見る

ことです。それが自慰的であろうと何であろうとかまわない。そして書いてしまってから読み返して見れば、それが小説として体をなす為には、何があまって何が欠けているかわかってくる筈です。そういう体験をへて、はじめて「花と蛇」のような極限的な小説を、あぶなげなく書くことができるようになるのだと思います。

三

「徳川女刑罰史」をサカナにして、いろんなおしゃべりをしてきたが、最後にもひとつだけ言いたいことがある。

この映画に、先に書いたような多大の期待を持つようになったのは、ひとえに十一月号に載った辻村氏のルポとスチールによる。氏一流の名文と、多彩なスチールにマンマと乗せられたといってもいい。

といっても、なにも辻村氏が誇大な表現をされたというのではない。氏は撮影の現場にあって、裸の美女たちに直接触れ、声を耳にされたのだから、ああ表現されるのは当然のことなのである。

ところがその熱気が、映画になるとサッパリピンとこないものになってしまうというの

は、結局監督氏の腕が悪いということになるのだろうが、私のひそかに見る所では、監督氏もはじめて経験する異様な熱気にアテられ巻きこまれてしまつて、「表現」を忘れてしまったようなフシがうかがえる。

これは何も映画に限らないので、撮影会などで、眼前の美女に眼がくらんでやたらと撮りまくったあげく、いざ出来あがったものを見ると、美女は写ってはいるが、あの日のカングキは全くうつされていない、ということがよくある。

人間の眼は主観的に対象をとらえ、カメラのレンズは客観的にとらえる。写真の客観性の中へ、いかにそれを撮った人の主観性を加えるか、ということ。言いかえれば、その場において自分の感動をさそった物を、物それだけではなしに、感動をも盛り込んで写すこと。それが、カメラマンの腕であり、それが「表現」ということなのである。

カメラのレンズはそれとらえた対象のすべてを平板にありのままにとらえる。人間の眼は選択する。自分の感動に不必要なものはない。この選択をカメラを通じて行なうことが「表現」とも言える。そこは当然抑制が行なわれなければならない。

「刑罰史」の拷問や、処刑のクライマックスで、バックを暗黒にしばって、前景の人物だけを浮かびあがらせたら、はるかに効果的だったんだが——と思うのも、ロケからくる背景の雑駁さ、セットの安っぽさを消して焦点を一つにしぼることになるからである。

この選択し表現することは、なにも写真だけに限らない。小説においては、それは文体によって行なわれる。写真は誰にでもとれるが、すぐれた写真はカメラの眼を自己のものとした者にしかうつせないのと同じく、文体のない文はただ言葉のられつにしか過ぎなくなる。文体によって小説家ははじめて自己を語ることができるのである。

「刑罰史」をケナす筆が、とんだ所にまで及んでしまったが、女を責めるシーンだけをフンダンに盛りこめば、観客はヨダレを流してよろこぶだろう——という甘い考えがどうも気になったので、つい、力んでしまったのである。

五社であれ小プロであれ、もっと今のべた意味での本格的な責め映画を作ってもらいたいものだ。

——緊縛美雑感——

鼻へのプレイ



——鈴木三三——

さきと同じ標題で映画、テレビの縛りシーンにつき私感を綴って以来、実際のプレイに触れたと思ったものの、縛りについては、多くの方々の投稿があるので、鼻へのプレイにつき私見を綴らせていただきます。

もちろん「鼻責め」に関しては従前からしばしば掲載されてきましたが、ぼくの好む鼻へのプレイは多少異なるムードのものと思いま

す。十月号に「私の『SM日記』」を書かれた小竹一浩氏は「女性特有の羞恥心を取り去ったら、何でプレイの楽しみがあらう」と述べておられますが、全く同感です。ぼくの鼻へのプレイも、この要素をベースとして行なうものです。苦痛を与えることを目的とした方法はとりません。

女性にとって鼻は、きわめて微妙な感情を

もった存在と言えます。美貌の誇りとしての存在であり、表面的であると同時に恥部的な存在でもあり、プレイの対象となる要素があると言えましょう。この要素を強くもった女性、このような要素の鋭敏な女性には、ただ単に鼻をつまんでも、媚態のいりまじった羞恥のポーズを無意識のうちにも示すものです。ぼくの鼻へのプレイはこの羞恥と媚態を展開させるところに成立します。したがって復讐者（加害者）が捕えた美女に、屈辱を与えるといったフィクションについてはこの文では触れず、あくまで遊戯としてのプレイの立場でのみ触れるつもりです。この点、物足りなさはあると思いますがよろしく。

たとえば、ぼくの場合、指で鼻の頭をつまむこと、酒のつまみと称して、箸で鼻をつまむことは、いわば愛情的行為ですが、状況を振り替えれば、これは捕われの美女にとって、きわめて屈辱的な行為であり、サディストチックな状況として成立するものです。ぼくもフィクションとしては、そのような状況には魅力を感じます。いや、むしろ苦痛を与える責めより好みます。

○ ○ ○

さて次に具体的にプレイについて述べます

が、ここでぼくが筆が立てば、会話を入れた状景描写をするところですが、そのような文章は苦手なので説明だけで御勘弁願います。

まずプレイの方法には、鼻に形の上で恥かしさを与える方法と鼻で恥かしい思いをさせる方法との二通りがあります。前者は、鼻を洗濯バサミで押える、鼻の頭を押し上げ鼻孔をひろげる、鼻孔に煙草を挿入する、鼻輪を下げる、鼻を縛り変形させる等々。後者は、鼻孔に挿入した煙草に火をつけさせる、鼻の頭で本の頁をめくらせたりスイッチを押させる。猿轡をかけ鼻孔でローソクの火を吹き消させる、鼻孔に細筆や鉛筆を挿入し何か書かせる、等々。といった事柄です。

どうもこう箇条書きにしたのでは、われながら感興が湧いてこない次第ですが、これらのことを、ひとつひとつ個別に行なうわけではないのはもちろんで、実際のプレイはこれらの方法を奇巧的ムードをつくり出しながら連繋的に行なうわけです。

実際にぼくが、鼻へのプレイを行なったのは、啓子と、洋子の二人の女性についてですが、二人の受け入れ方には異った性質があります。二人とも程度の点では、甲乙なしですが、洋子の場合には緊縛の上、鼻にまで恥辱を

加えられるとして受けとめているのに対し、啓子の方は縛りはアクセサリ的で、鼻へのプレイそれ自体として受けとめています。ですから、洋子の場合には殆んど緊縛を伴って行なうことになり、啓子の場合には縛りなしでのプレイとして行なわれることが多いのです。

鼻の頭でスイッチを押したり、鼻先で本の頁をめくらされたり（この場合、読んでいるのを一頁ずつめくらせる場合と、閉じた本のある頁を指定してめくらせる場合との二通りあります）する場合は、緊縛を伴った方が魅力的ポーズになりますので、啓子の場合も後手高手小手に縛り上げますが、洋子があくまで緊縛行為の延長として行なうのに対し、啓子は鼻へのプレイとして行ないます。洋子が鼻へのプレイも緊縛行為と同質にサディスティックに受け入れているのに対し、啓子は、鼻へのプレイをセクシアルに受け入れているらしく、啓子の方がより媚態的ポーズをとります。

この二人に共通なのは鼻孔への羞恥です。これは鼻孔へのプレイというより、猿轡をかけ鼻孔をのぞけたりゆがめられたりして、その鼻孔を鏡の前で見せつけられるとき、二人とも共通の——緊縛や鼻へのプレイとは異質

の——強い羞恥を示します。このことは鼻孔には女性の場合、きわめてセクシアルな感覚が秘められているからだと言えないでしょうか。これは総ての女性に言えるのではないかと思います。

○ ○ ○

次に私が行なったプレイのうち、多少「責め」的プレイの例を書きましょう。

(一) 後手高手小手に緊縛し、なわじりを鴨居に結び、足首を揃えて縛り、心持ち吊り気味に不安定な姿勢をとらせる。別のロープ（太さは鼻孔に挿し込める太さ）を鴨居に掛け渡し、上向けさせた鼻孔にロープの両端を押し込む。ロープの長さは顔を下に向ければ鼻孔からはずれるように調整し、鼻孔からロープをはずせぬよう立ちつけさせる。

(二) 鼻孔にハンカチ、スカーフなどの両はしを押し込み、垂れた布の中央に煙草、ライターなどを乗せる。その上で、四つん這いにさせて歩かせたり、前記(一)のような姿勢をとらせたりして、品物を落させぬようにする。

(三) 鼻孔に火のついた煙草を二本さし込み、猿轡をして、ぎりぎりまで忍耐させる。

ぼくとしては、この三通り程度が実際に行なった「責め」的プレイですが、フィクシヨ

ンにおいては、なお、さまざまな鼻への「責め」的方法があると思います。

また鼻へのプレイに限りませんが、自分が行なわれたプレイ、そのときの自分の姿を自らの口で述べさせることは、プレイへの飼育にとつては大切なことでもあると同時に、心理的にきわめてサディスチックな行為です。鼻へのプレイにおいては容貌に関することゆえ鏡の前でプレイを行なわされ、その恥辱に満ちた容姿について自ら述べさせられるということは一段と羞恥を湧きたたせます。

「啓子は、いま後手高手小手にくくり上げられて、鏡の前に坐らされています。お鼻の穴に二本、煙草を入れられています。とっても恥かしいのをがまんして、煙草が突き出ている、みっともないお鼻を鏡にうつされています」

「洋子は、後手にがんにがらめに縛られたうえ、鼻までロープで縛られ、お鼻が曲ってつぶれてしまっているの。でも、さっきみたいに、きびしい猿轡をかけられ、火のついた煙草を鼻にさされて責められるより、この方が好きです。お鼻がこんなにべしゃんこにみにくくても、洋子のこと嫌わないで下さい」

これは「責め」的ムードですが、媚態的ム

ードでは、次のようになるでしょう。

「啓子、言いつけ通りお鼻で電話帳めくったのですから、もう責めないで下さい。鼻の頭だって赤くなっちゃったわ。縛られたままでもいいから、お鼻を可愛がって」

「煙草一本だと、うまく火がつかないの。啓子、両手を縛られているので、片方のお鼻の穴、おさえて下さい。煙草を吸ったら、またお鼻を箸でつまんでね。啓子、お鼻に優しくいたずらされるの、ダーイスキ」

新婚のSM夫妻の状況のお粗末です。

○ ○ ○

縛りの場合は、不満足ながら映画、テレビで観られますが鼻へのプレイの場合は映画、テレビでは絶望的です。ピンク映画で稀に、縛られた上、鼻を指で押し上げられるシーンがあります。それ以上は困難でしょう。カットや写真でも、縛りのようにムードまで表現するのが、むづかしいと思います。

最近ある防臭剤の広告に、女性が鼻に洗濯バサミをはさんで顔をしかめている写真がありました。珍しい広告です。ただ慾を言えば、鼻の頭をはさむのは痛い。ためか、不恰好な顔になるためか、鼻筋の中ほどにはさんでいたことです。鼻をはさむ場合、やはり鼻孔

が押えられ、変形しなくては魅力が薄くなります。良いモデルだけに残念でした。

鼻の形といえば、鼻へのプレイに関心を持っているため、女性の好みもかなり鼻の形に左右されます。女優さんでいえば、水野久美のように、中高で肉の厚めの鼻が好きです。また、九重佑三子の上向いた可愛い鼻も良いものです。高田美和の勝気な感じの鼻もプレイの対象としての関心をひきます。鼻の魅力は鼻梁の形のみではなく、鼻孔の形の良さも条件になります。佐久間良子、星由里子、辰巳典子などは魅力があります。

さて、以上とりとめのない私見を述べてまいりましたが、同好の方も多いと思いますので、新しい魅力あるプレイへの投稿を期待します。また、これは本題からは離れますが、編集部へのお願いとして、誌上における同好者の意見の交換、座談会など企画していただきたく思います。議論ではなく、会話です。

このことは、どなたかの投稿にあったような、寄稿家の常連で誌面を固めるといった意図ではなく、文章にするほどのことではない事項、一寸した体験でも、座談では貴重な発言となることが多いと思うからです。

(カット写真・中宮栄氏提供)

濡れにぞ濡れし

連

投

芳野眉美



九月初旬、辻村さんから東映京都作品「徳川女刑罰史」のスティールが送られてきて、緊縛指導をしていると手紙にあった。

殺陣師はきいたことがあるけれど、緊縛指導なんて史上はじめてのことだろう。

九月二四日の11PMでは、サングラスの辻村さんは責めの研究家として紹介され、女優さんを縛っているフィルムも映されていた。

東映で映画化されるといって、伊藤晴雨画伯の自筆の絵を持参されてのテレビ出演は、さ

すがの辻村さんも胸がドキドキしたらしい。

が、映画で珠光院々主代玲宝の役をやった賀川雪絵をつかまえて、雪絵ちゃんなんてよんでいたところは、どうしてどうして堂に入っていたよ。

封切りを待って、浅草東映に観にいったけれど、満員で坐れず、映画は立ってみるものじゃないと思っているから、強引に席をみつめて割り込んだが、東映の企画は成功したようである。

十一月号の辻村さんの「緊急ルポ」や団生生の「鬼六談義」で、映画の楽屋話を知っているわけだから、楽しんで観ていられるわけである。

タイトルの三段斬りや股裂きの極刑は11PMでも紹介された。

印象に残ったのは、第一話では水磔、キリシタンの処刑に考案されたものと思うが、満潮を利用するこの極刑は、美しい夕日を背景にするだけに、より凄惨であった。

第二話では、どじょう責めのところで、妙心役の尾花ミキのツンパにどじょうが、四、五匹、入っていたと辻村さんの「ロケ日記」にあったのを読んでいたから、非常にリアルで痛快だった。この場面、快調。

唐辛子責めで思い出したのだが、浅草の穴場の飲み屋で、酒の肴にただ刺身をたべているのではつまらないから、むらさきを、ネ、女のあるところについて、つけてたべせろと、両足を持ち上げ、むらさきをたらしただではよかったが、ついでに山葵^{わさび}まで混ぜてしまった知人がいた。怒ったの怒らないの。知人は、がっちり賠償金をとられたね。

剃毛はカットされたところがあるが、こういう責めには、つきものだろう。これも浅草の穴場の飲み屋でぶつかった話だが、例の特技で火のついたタバコを吸いながら踊る女がいた。踊りながらチョコチョコそのタバコを客に吸わせるのだが、その趣味のない客は、顔をそむけて逃げてしまう。だんだんタバコが短くなって、なにやら焦げくさい臭いがしだしてから、はじめて女はタバコを消すのである。

その時は、タバコの火をつけずにくわえ、客の一人の顔の前に突き出した。
「火をつけてよ」

マッチをすってタバコに近づけたと思ったら、いたずらのその客が、タバコじゃないほうに火をつけてしまったのである。パツと燃えあがったね。

露出癖のある女だから、夏でも窓を閉めてしまう。暑いのと、燃えた臭いと煙においたてられて、全員が部屋から逃げだしてしまった。くさい、くさい。

女はあわてて消したけれど、別に怪我もなく、けろりとして酒を飲んでいた。

(前者の飲み屋は今でも営業しているが、後者の飲み屋はやめてしまった。従って、その名物女がどこにいるのか知らない)

「徳川女刑罰史」から、かなり脱線してしまっただ。

青坊主の尾花ミキは宙吊りにされて、まったく、さんざんな出演というわけであろう。

観客が爆笑したシーンが一つ。院主代瑤宝が、本寺の僧春海(林真一郎)の首を鉈で斬り落とすところである。サロメ風の演出をねらったものだろうが、勇み足だと思う。

第三話は、駿河責め、石抱き、笞打ち、水車責め等、責めのオンパレードで、目うつりして困った。水車責めが印象に残ったのは、顔が水中に没するからだろう。

但し、第三話は、刺青師彫丁になる小池朝雄と、残酷な刑罰に欲びを感じる奉行所与力南原一之進になる渡辺文雄の、二人の個性的な俳優の一騎打ちがみもので、全編をしめくくってあまりあるのは、石井輝男監督の腕のみせどころかもしれない。

町娘花になる三笠れい子のボディペインティングは、その刺青を描く人が11PMで実演している。キリシタン女の拷問をみながら刺青をするのは、芥川の「地獄変」を真似たのかしら。

団先生の企画とプロットで、晴雨物語が映画化されれば、再び辻村さんは緊縛指導として登場するだろうが、十一月号のカメラハントの後半「ハプニングなプレイ——N未亡人の巻」でもわかるように、辻村式緊縛法はなんとなく晴雨画伯の好みと似ているように思えてならないのである。

山本一章さんのカメラルポと比較してみるとわかるが、ルポの緊縛は丁寧で規則正しく優等生のようにおとなしい。従って綺麗である。プレイむきなのだろう。

ハントのほうは大膽な緊縛フォトをとりまくただけに、緊縛の構成種類は雑多で、八方破れでわがままである。正確なデッサンの

上に縛りや責めがおこなわれているのは書くまでもないが、晴雨式残酷美のほうに近いように思われる。従って、都会的な綺麗さを求めるのは筋違いだし、もしそうだったら辻村さんらしくない。

「徳川女刑罰史」より以上に「晴雨物語」のほうが適任だと考える所以である。

アングラ作家などと謙遜なさらないで、責めの研究者として、これから、どしどし活躍して下さい。

車は持っているが、金はガソリン代しか持っていないという若いのが、日曜ごとにハントして飲みにくる。ツケがきくから利用しているらしいが、そのあとのことのほうが興味がある。

男の話を聞いていると、車の中で、平気で裸になるような女の子がごろごろしているらしいから、ホテル代などは必要ないそうである。上野公園は本場だから、車をとめてカーセックスというわけになる。

ところで、カーセックスは法律上どういうことになっているのが、佐賀潜が丁寧に教えてくれている。

「公衆の目に触れるような場所で公衆にけん

悪の情を催させるような仕方であり、ももその他身体の一部をみだりに露出した者」は拘留又は科料となるのが軽犯罪法第一条二十号の規定だそうである。(プレイボーイ・ゲリラ版法律セミナー)

上野公園も、公衆の目に触れるような場所だから、お巡りさんにみつかれば、24日間の拘留に付されるわけである。従って、一カ月の給料はとんで、高いホテル代になる。

隅田公園を彼女と散歩して、ベンチに坐って月を見る、てな風流なことを俺がするはずはない。どうしても手が、彼女の着物の裾を狙うことになってしまいうし、彼女も別にとめようとしなから、皆さんが御経験のことを私もすることになる。

隅田公園はパトカーで巡回している。長く停まっている車には、近づいて注意をあたえる。軽犯罪法防止のためであろう。

そのパトカーが、ベンチに坐っている私たちのうしろに止って、動かない。動かなくても少しも困らない。別に注意するわけでもないし、背後からでは何をしているのかわからなかったのかもしれない。二人で坐っている間、パトカーはずっと止まっていた。まるで護衛されているようで、気持良くペッティン

グができた次第である。

秋だなあ。

カーセックスといえば、御主人が運転している車のうしろの席に、奥様と二人で乗っていたと思し召せ。

長距離ドライブで、早く行っても二時間ばかりかかる。二人でただ坐っていたってつまらないから、背広の上着(ズボンじゃないよ)を脱ぎなさいと奥様がおっしゃった。私は、とてもスナオだから、上着を脱ぐ。

「下におすわり」

座席からすべり落ちたが、きゅうくつで仕方がない。奥様が、ひょいと足を上げて私の顔をまたいだ。運転している御主人の頭を、奥様の足がつつく。

奥様は着物の下に下穿きなど穿くような無粋なおひとはない。だから好きさ。

「キスして」

奥様の蠱惑的な微笑に鳥肌が立つ。

「馬鹿、うしろを向くヤツがあるか」

御主人は足袋で頭をけられて、あわてて前を向いた。運転する人が、うしろを向いていては、あぶなくてしょうがない。

「気になるんなら、バックミラーで見ておいで」

御主人が、ひょいと手をのばして、バックミラーの位置をかえた。

「馬鹿は、すぐその気になる」

奥様の毒舌は、今にはじまったことではない。私が車に迎えられ、プレイがはじまると奥様は御主人に犬の名前をつけて呼んでいるのである。それを発表すると、当惑する人がいるから書かない。

トラックが車の背後についてはなれない。トラックの運転台は高いから、見下ろせるのかもしれない。奥様は平気で両足をあげ、乱れた裾を直そうともしない。

あわてたのは御主人で、横道をみつけてトラックをさけた。

再び国道に出る。白バイやパトカーに見つかったら、御主人の社会的地位が泣くというものだ、その危険があるから、奥様はスリルを感じているのかもしれない。

別のトラックが追い越しもせず車のあとにつく。また横道にそれる。

「しっかり運転おし」

車が国道のへこみにはいつてゆれると、奥様ののびきったあらわな足が、残酷にも御主人の首や肩までも蹴とばす。

「静かに運転しないと、Jが奉仕にくいじ

やないか」

Jとは私の名前の頭文字である。三原寛氏（彼は今、日本にいない。奥様と御一緒に三年ばかり日本を留守にするそうである）は、M小説の主人公に、俺の名前を使ういたずらをする。

車のスピードは、60になったり20になったり、止まっているんじゃないかと思ったり、御主人の一喜一憂が手に取るようにわかるのである。

二時間で来るところを、かなりの時間がかかり、ようやく目的地に着いたのだが、

「あら、もう着いたの。早すぎやしない」

と奥様にいわれたとき、さすがの御主人もがっくりきたらしく、しきりにブツブツとぼやいていた。

被害者は御主人ばかりではない。私の舌は荒れて、コーヒーが飲めなかったのである。

「このこのコーヒー、おいしいのよ」

奥様のいたずらっぽい目が、私を見るのである。

これは夏の思い出。奥様にあいたくなかったな、御主人には悪いけど。

男に対する莫然とした恐怖感。男くささや

粗野な態度に対する嫌悪感。乱暴な仕草（ペッティングやセックス）による抵抗感。男を見る目が肥えたことによる失望感。がつがつとすぐ肉体を求める男に対する絶望感。美人にありがちなナルシズム。自分の肉体に感じる劣等感。莫然とした倦怠感とニヒリズム。結婚に対する反発感。同性だと大胆になれる安心感や羞恥感。欲求不満の解消。妊娠と中絶の恐怖からの解放。ETC。

週刊誌や映画に、レスビアンが登場するのが当然となったこの頃である。レスビアンは隠花植物のように、ひっそりと咲くものだと考えられていたのは、すでに過去のものとなったのかもしれない。それだけ、現代のSEXは開放的なのだろう。背徳とか罪悪とかという文学的表現は、ロマンチストにまかせておけばいいらしい。

御主人と女中（お手伝いさんという言葉はいいにくいから好きではない）が関係があり奥様と女中がレスビアンだという、妙な三角関係の御夫婦を知っているが、御主人は、奥様と女中のレスビアンを見ているのが楽しいそうである。

女二人で同棲していて二人一緒にバーづとめをしている。一人は男装でバーテン、一人

は今流行のネオロマンチズムというのか、胸いっぱいフリルをつけた、半透明のブラウスなどを着てホステスをやる。が、すぐやめて店を転々とするのは、タチ（男役）がおネエ（女役）が客にもてるとヤキモチを焼くからである。

店が終ってアパートにかえり、男装の美女は派手なガウンを着こんで、二人お手々をつないで風呂に行く姿をよくみかける。

浅草にも男装のバーが国際劇場の側にあるが、女客の体臭と熱気でむんむんしていてちよっと近寄りがたい。

新宿に有名なのがあり、東雪枝さんもレスビアンらしく、紹介してもらおうと思ったが残念ながら目的を果していない。

そのレスビアン・バーに、誌友が女装した客に（新宿に女装愛好家の集るバーがある）連れられて行ってみたらしいが、男の客は、てんで相手にしてくれないそうである。女装したからといって、女に認めてくれないのかな。

レスビアンがガールハントしたら、ゲイボーイで、ゲイボーイのためにレスビアンは男と女の関係に目をつむり、ゲイボーイは純粋な女になるために努力して見事、真実のレス

ビアンを実現したという話を聞かされたが、まことにややこしくてよくわからない。

週刊誌にレスビアンのテクニクが繰り返して紹介されているが、そんなことウソよ、と新宿のレスビアンバーのバーテンを彼氏にしている、近所の料理屋の娘がいった。

二七、八になろうとする独身娘は、指を九本みせて、これだけしか男は知らないわ、と男の稚拙なテクニクを笑うのである。

「十人目を試してみたいとは思いませんか」「不潔」

一言のもとに、はねつけられた。

乳房と乳房が触れ合ったときの柔かさに包まれるような快感や、指をからみ合わせるときの興奮の昂まり、と週刊誌の記事をならべたら、馬鹿々々しいというような顔をした。

そんなことで、エクスタシーが呼べるのなら、こんな簡単なことはない。

「女性に坐ってもらうのが好きなんだよ」と話は露骨になり

「そうしたら彼女、とっても夢中になってしまった」

といったら、

「それ、わかるわ」

彼女は舌をだして丸めた。

レスビアンのテクニクも、その一語で読めた。その可愛い舌に食いつきたくなったね。九月十日の午前二時。

ここまで付き合ってたって、レスビアンの男嫌いときては、それまでよなんだなあ。

九月十一日。H氏が大阪の女性を連れて上京された。「濡れにぞ」は読んでいるから、彼女はみんな知っているよ、という。そう紹介されれば恐縮するほかはない。瘦身に、ミニスカートが短かすぎて気になる。

H氏を見たい？ という誌友が、女性二人を連れてみえていて、H氏の話に興味深く聞いて、しきりにうなずいていた。H氏は、その誌友の連れの、女性の手を握ったりして、よろしくやっている。その点、オープンである。

大阪のマンションに一人暮しと聞けば、東京をおっぱりだしてころがり込みたい気分だが、サディスチンの彼女におっぱりだされそうである。

大阪に滞在中、H氏は彼女のマンションで責められ、神酒を浴びせられているらしい。たべさせられもしたのじゃないかしら。

東京のトルコにつとめてみたいわというか

ら、近所のトルコを数軒見てまわり、顔見知りの旅館にお二人を案内して、H氏のすすめもあって、ちゃっかり泊ってしまった。

夜具は二つで、H氏が一つ、彼女が一つだが、H氏の布団に入ってもはじまらない。ホモじゃあるまいし。それだけは気持が悪い。従って、彼女の布団に入りたい。失礼。

「入ってきて、だめなのよ」

彼女はにんまりして意味深なことをいう。意志に反して、手が勝手に、活動しはじめたが、彼女のいった意味がのみこめた。

お客様だったのだ。

「残念でした」

「かわいそうだから、キスしてあげようか」

「有難う。その気持だけで満足です」

彼女は起きあがり、唇を寄せたかと思うと耳に舌を差し入れた。

こそばゆい。思わず身体をすくめると、容赦なく舌をまわしてくる。耳が、べとべとになった。

耳から首、首から胸をくすぐられ、H氏が寝られずこそそしているのもかまわず、とび上った。

「くすぐったい、俺は、笑い上戸なんだよ。助けてくれ」

叫べばこそ、彼女の舌は、いっこうにはなれない。女にこんなことをして喜こんだことはあるけれど、こうも積極的に攻撃されたことはない。

起きあがったH氏が、襖を開けてなにやら置いた。テーブルコーダーのマイクである。「そんなのおいたって駄目ですよ。俺の声しかはいらぬ。うそだと思ったら、もっと襖を開けて、じっくりと見て下さい。彼女の口は、ふさがっているから」

見てもいいから、とH氏にいつても、何をえんりよしたのかH氏は、とうとう境の襖を開けなかった。彼が、こんなに礼儀正しい紳士だとは思わなかった。

彼女の舌は疲れを知らないようであった。彼女は、Sではなく、Mではないのか。Mだから、MのH氏の性癖をよく理解出来るのかもしれないと思った。

やにわに両足を持ち上げられ、あれよあれよというまに事態はますます進展。

それならばとがぜん反撃に転じて、彼女を組み敷き、顔にどっかと坐った。

彼女がお客様でなかったら、違った結果がでたかもしれないが、彼女の顔に坐ったままで襖をあけた。

しかし精神安定剤を飲んでH氏は、すやすやとねむっていた。

拍子抜けして立ち上り、浴槽に身を横たえしばらくして部屋に戻ったとき、彼女も静かな寝息を立てていた。

翌十二日、彼女を東京駅におくって、H氏と二人、あけみ女王と約束したホテルに直行した。朝の十時である。私は二時間ほどしか寝ていない。

五月頃のことだったが、奇クにM小説を発表したところある恒川文彦さんに、あけみ女王を紹介したことがある。

その報告だが、恒川さんは女王から、しょっぱなにビンタをくらい、汚れた足の裏を舐めさせられ、べったりと口を足でふさがれ、足の指を口につつまれて責められたらしい。

あけみ女王は、まったく強烈で、鼻でも口でも平気で踏みつけ、口をあけさせて唾液を吐き、どろだらけの床でも、背広のまま寝かせて便器がわりにするのである。

恒川さんもそんな状態で、女王のカクテル（彼は、そういつている）を口一杯あふれさせたそうである。

まったく、あけみ女王に逢ってみるとわかるが、あとからあとからそそがれると、息が

切れて、それこそ死んでしまうかと思うほど口中はいつでも満たされているのである。

あげくには、あとしまつを強いられ、恒川さんもネをあげたもようであった。

そんな話をあけみ女王としているうちに、女王はトイレに立ったのである。何しろ起きたばかりで、朝の日課をまだしていなかったらしい。

「おいで」

とH氏をさしおいて私にいい、便器に寝るように命令するのである。

「たべさせてあげるよ」

「とんでもない」

ととびあがった。それはH氏の領分です。どうぞおかまいなく。

あけみ女王の、心地良い音が響き、

「こつちへおいで」

と、また御指名があった。

「四つ這いになって」

「――」

「便器に顔をおだし」

いきなり頭を踏みつけられて、便器に顔を押し込まれた。痛い。

「ほら、お前の好きなものがあるだろう。犬のように、びちゃびちゃと、おやり」

あけみ女王が水を流したので、息をつくひまもなく、今にも悶絶しそうであった。これも水責めの一種に違いない。

H氏がうやうやしく、全裸になって派手な夜具に横たわる、あけみ女王に近寄った。H氏の奉仕は拔群であるらしかった。

あけみ女王は男女の関係を決して許さず、H氏にさえ、奉仕しか認めないのである。お前たちは、わたしのを飲んだり喰べたりしていればいいよ。

あけみ女王の表情は、それは美しく、首は厚いマットレスからたれ、両手はシーツを握ってはなさず、すんなりとのびきった脚は、そのまま足の指先まで弓なりに、そりかえるのである。

日本の女性は、足の指を内側にそらすという俗説があるが、個人差があつてしかるべきで、あれは浮世絵をうのみにしたものでありウソだと思うが、いかがなものであろう。

「さわらないで」

あけみ女王は叫んでH氏を突き放した。

「お風呂の用意をして」
かしこまって浴槽に湯をためた。

「さわらないで」

同じ言葉が再びH氏に浴びせられた。

「ビール」

のどが乾いたのだろう。ビールとコップを持って女王の前に這いつくばった。

女王は、おいしそうに飲んだ。

「わたしにも下さい」

とH氏が哀願した。H氏は飲めない。

女王はペツと唾液をコップに吐き、ビールを少しみだし、更にタバコに火をつけたマッチをつつんで、H氏にわたした。

燃えかすのマッチの棒ごと、H氏は飲めないビールを飲み、もぐもぐと口を動かして、マッチ棒を吐きだした。

風呂の用意が出来、石けんの泡だらけのあけみ女王は、H氏を腰掛けがわりにして、全身を念入りに洗ったのである。

と、ここまで一息に書いたけれど、これを読んだあけみ女王とH氏は、ほとんどカットしてあるじゃないかと不満がるだろう。

そういわれても、とてもじゃないけど、書くことは出来ない。冰山の一角で、発表出来ないことが多いのは残念なことである。

浴室で、あけみ女王の神酒を拝受したのは勿論のことだが、拝受したのはそればかりではないのだ。

あけみ女王もレスビアンで、H氏の奥様と

レスビアンになり、そのあと始末をH氏にさせたら面白いだろうと、奥様を連れて上京するように、H氏宅まで長距離電話をする。

H氏の奥様は、私も一度お目にかかつてい

るけれど、グラマーな美しい方である。あけみ女王とのレスビアンが実現すれば、佳麗な絵物巻の世界が展開するのに違いない。

H氏をおしのけて、あと始末は、わたくし

SMの一般化について

葛西 六郎

十二月号に「SMは常道」という一文を拝見し、早速ペンをとった次第。最近SMの世界が一般の社会に進出していく感がある。私の敬愛する辻村先生は11PMに出演した由。それについて私は何んともなく気が引けるのである。

その一つはいうまでもなく、権力機関の圧力である。それだけでなく奇クに対する風当りは強いという。辻村先生個人はとも角、奇クに対する反動がより強まるのではないかという懸念は容易に想像される。私は奇クを愛し奇クの発展を願うものであるが、奇クの発展とは果して世間一般化することであるかどうか、即断は出来ない気がする。

もう一つは、SMが人間本来の欲求であるから常道である、という説にも疑問を感じる。確かに人間は程度の差はあれSM的要素は持っている。力を誇示したりいじめ

て見たいとか、逆に力強さにあこがれ、圧

倒されたいという気持はなるほど自然のものであろう。しかし世間一般からすれば、いじめるよりも可愛がり、圧倒するよりも保護するというのが常道なのである。その意味でSMはあくまで特異なものであり、所詮は社会の陰に咲く妖花である。その陰花植物が何も自分から強い光のあたる一般社会へ、のこのこ出かける、必要があるであらうか。私は団鬼六先生や辻村隆先生はあくまでこのSMという特異な世界の帝王として、泰然自若として奇クにのみ、腰を据えていて貰いたいのである。端的にいえば余り有名になっていただきたくないのである。それは両先生の健在を願うばかりでなく、SMの本質というものが一般社会的ではないからである。それ故にこそ、我々マニアは奇クを永遠の友とし、両先生のご苦勞に心から感謝するものです。

におまかせ下さい。女王さま。

あけみ女王とわかれてセクシー下着が飾つてあるスナック風な売店に寄り、H氏はマネキンの足だけを求め、ネットストッキングと透明のビキニ風パンティを彼女? に買い、お土産として、旅行カバンにしまった。

足だけの彼女に穿かせて、彼はいったい何をするつもりなのだろう。

空腹を感じて朝鮮料理にとびこみ、やっと食事にありつけたのは、午後の五時をまわっていた。ロースやらレバやら三人前と、どんぶりめし二杯を、またたく間にたいらげたH氏の食慾。呆然として見守るばかり。

めし食うことも忘れてSMプレイに興じることの出来るH氏は本当に幸福なおひとだ。

H氏と東京駅で別れて店に戻ったものの、二日連投がこたえてねむくて仕方がない。面倒だから店を閉めて寝てしまった。

H氏といい、クレイジイドクターといい、二人のスポンサーがついて、あけみ女王にせつせと拝謁できるのはうれしいが、女王の摩訶不思議な魔力に魅せられて、夜ごとうわごとをいいだしやしないかと、ただそればかりが心配なのである。

(カット・春川ナミオ)

S M カメラ・ハント

川口有里子の巻

その悦虐が失神をよぶ

辻村 隆

こと、S Mのカメラ・ハントに関する一件なら、大抵の仕事もおっぼり出して、多少の義理は欠いても、喜んで邁進する私のような人間にも、時偶どうしても抜き差しならない場合だってあるものだ。

始めて川口有里子を知った時が、恰度その最悪の状態のときであった。

姫路のU氏は、もう四、五年来の同好の仲間である。普段はお互いに無沙汰勝ちだが、一旦緩急あれば、忽ち電光石火、待てしほしもなくことを起こす。場合によってはいい時もあるが時には迷惑な時だってある。彼はそ

んなことなど一向構ってはいない。ハントの対象になるような娘がおれば、いつ何時連れていっても私が喜ぶと思っっているらしい。

八月上旬の、生憎と来客中の手の離せぬ多忙な折に、いきなり何の前触れもなく、ひょっこりとU氏が、一人の若い娘を伴ってクルマを乗りつけてきたのである。遠来の同好の彼をまさか放ってもおけず、来客に茶の間へ移ってもらって、しばらく待ってもらうことにして、渋々二人を応接間に通した。

「電話もなしに一体どうなったの突然——」
少し声も尖っていたに違いない。

「この娘、ハントにどうだ。いい子だろう、神戸から引張ってきたんだよ。どう、三時間ばかり撮らないか、私もつき合うよ」

専務取締役の部長という位置が言わせるのか彼の言葉はいつも横柄である。最初は大分心に引っ掛かったが、別段悪気でもないらしく、そんな言い方が彼の持味であると知ってからは、気にもしなくなったが、いつもこんな調子である。だから一匹狼の私も、その口調に合わせることにしている。

「いきなりそういわれたって無茶だよ。いくら好きな私にだって仕事があるんだ。本職じ

やないんだからそうも行かない。折角だけど今日は忙しいんだから勘弁してくれよ」

「えらく冷たいね、一体どうしたんだい。いつもの辻村君らしくないじゃないか。ええじゃないか、やろうよ、本人もその気になってるんだから」

「今、どうしても手の離せない客が来ているんでね、今日はダメなんだ。しかし、いずれ日を改めて近いうちに是非とりたいね」

私はチラリと傍らの娘に眼をやって、幾分の未練を覚えながら応える。

「随分、無理して連れてきたんだぜ、残念だなあ、何とかならんか」

多忙のU氏が寸暇を避いての協力は、確かに嬉しかった。さりとて、今すぐというわけにも行かない。

「一寸事前に連絡しておいてくれれば、何とかあったんだけどねえ。それで一体、どんな曰く因縁なの？」

「ウン、実は昨日神戸へ社用で出張してね、その時、訪れた会社の受付嬢なんだ。素直だし、調子のいい子なんで、かねて目っこを入れていたんだが、食事に誘ったら、退社後ついて来た。俺がこうこうだと、ハントのことを話したら興味を持ったらしくてね、案外あ



っさりと、ハナシに乗ってきたんだ。勿論ギヤラで割切ってもいるんだが、その夜可愛がってやったら、これがいけるんだね。かなりきつく縛ってプレイしたが、むしろ喜悅の表情を浮かべてその挙句——」

彼はそっと私の耳に口を寄せて、小声で囁

やいた。

「失神、失神するんだぜ。これは稀有の存在だよ。俺も過去、随分多くの女を縛っては来たが、失神したのは始めてだ。いけるぜ」

失神のくだりは聞こえなかったかも知れないが、緊縛のプレイや夜に関して、彼は堂々と娘の前で喋っている。それを又、娘は微笑みを泛べながら、やや頬を赤らめて、きいていたのであった。

「それでセックスも？」

「いや、その方はやらなかった。あんたと同様、Sのプレイで充分だからね。しかし据膳のようだったね。むしろ、俺がその俤ねてしまったので不思議そうにしていたよ。何もなかったといっても、他人なら信じないけど、あんたなら判ってもらえるだろう」

「緊縛のプレイによるセックスの昇華——」。

私の口癖のやつだね。しかし、失神とは面白い。私も先日、九カ月の妊婦（木戸悦子）の人とプレイした時、一寸そんなシーンに出くわしたが、過去に余り経験がないよ。急速にやりたくなってきた」

と、そこまで小声でいって、私の言葉は普段にかえる。

「いや、残念ながら今はどうしても手が抜け

ない。こんなことは滅多にないのだが、仕事がいっどきに重なってね。でもまあ折角来られたのだから、ここでせめてポートレイトぐらい撮らしといてもらうよ、記念にね」

私は早々に一眼レフをとり出してくる。撮り残しのフィルムが、未だ七、八枚は残っている筈であった。ストロボを装填すると、彼女と彼女（紹介されて、川口有里子。二十一才のオフィスレディと知った）の二人を並べて二枚とり、代って私と彼女と並んだところを一枚撮ってもらう。

そこでU氏は、あっさりいつてのけた。

「ユリちゃん、上着とブラジャーをとれよ。」

その促じゃつまらないから、上半身だけ後手に簡単に縛ってやろう。辻村君、縄を一本もってきてくれ給え。どうだ、それくらいいいだろう」

確かに、それくらいいいことだ。しかし応接間の扉一つ隔てて、来客が待ち、夏休中で子供も居るので、私はハラハラする。ところが、言われた川口有里子はいとも簡単にうなずくと、サッサとノースリーブの服を腰までずり下げ、シュミーズを外し、ブラジャーもとって、上半身を惜しみなく曝したではないか。どういう神経なのだろうか、私は半

ばあつけにとられて彼女を見ていた。形のよい、乳首の小さい豊かなオッパイが、恥ずかしげもなく私の眼前にあった。まるでU氏の言いなりである。余程うまく飼育してあるに違いなかった。

U氏はスックと立上ると彼女の後に廻り、むき出しの上半身に手早く縄をかけ、後手は簡単に一巻きして縛った。川口有里子は、眉と眉との間隔のやや開いた細眼勝ちの、阿弥陀如来のような、福やかな顔を微かに赤らめた。直視する私に、眼を伏せたが、軽いえくぼを浮かべて、ヒソと笑っているようであった。こぼれる真白い歯並びが、こよなく美しい。若々しさが体中に漲ぎっていて、肌のきめこまかく白くぬめぬめと光っていた。

残る数枚のフィルムで、正面、左右、背後と撮ると、忽ちあっけなく終った。この撮っている間、来客を待たせた尽である。応接間の扉を何気なく開かれたらどうなるだろう。そんな危惧もチラッと走ったが、兎も角チョンの間の早業で、一応彼女の上半身を縛ったポーズをカメラに納めた。

「是非近々機会をつくってほしいね。とても素直な可愛い子だ」

「だろう。しかし俺もそうそう連れ出す暇が

ない。じかに交渉しておけよ。その方が手取り早いだろう」

U氏は期待外れながらも、案外恬淡に言ってくれた。今日一日会社から雲隠れして、若い娘帯同で、車を飛ばして連れてきたのに、こんな結果に終わったのが、稍々不満に違いなかった。彼は私のハントのスポンサーになって、私のやり口を傍観しながら、内心Sの性向を充分に満足させたかったのだろう。

有里子は自分で縄をとり、身繕いをしていた。私は直接、彼女へ声をかける。

「有里子さん、いつか近々電話するかも知れないけど、構わない？」

「ええ、結構ですわ。数日前にお電話いただきましたら都合つくと思います」

「部長さんから聞いているだろうけれど、プレイといって、縛ったりするフォト撮るんだけど、いい？」

「ハイ、部長さんから大体のことを聞いております。構いませんわ」

川口有里子の返事は、むしろ事務口調じみるぐらいにハキハキしていた。

傍らからU氏が、冷かし半分に、云わずもがなのことを口走る。それは私に対する軽いジェラシーであったかも知れない。

「おい、ユリ子。この人の縛るのは、俺のようにはゆるくはないんだぞ。物凄くきついからその時になって泣いても知らないぞ。それに真ッ裸なんだぞ、いいな」

「部長さんよりきつい人なんていませんわ。私、今でも体のあちこちが痛いんですよ」

「一体どんなことをやったの？」と私。

「ウン、何しろ昨夜は急の思いつきだから、縄の準備がなかったもんでね。ホテルに備付けの浴衣式ガウンの腰紐二本を使って、鴨居から片足吊りをしてやったんだ。十四、五分ぐらいは、もったかな」

「どうせ叩いたのだろう？」

「ああ、尻が真赤に腫れ上がるぐらいバンドでぶちのめしてやった。俺のは調子が出てくると力が入ると見えるね。ヒイヒイ泣き喚いていたが、それからアレさ」

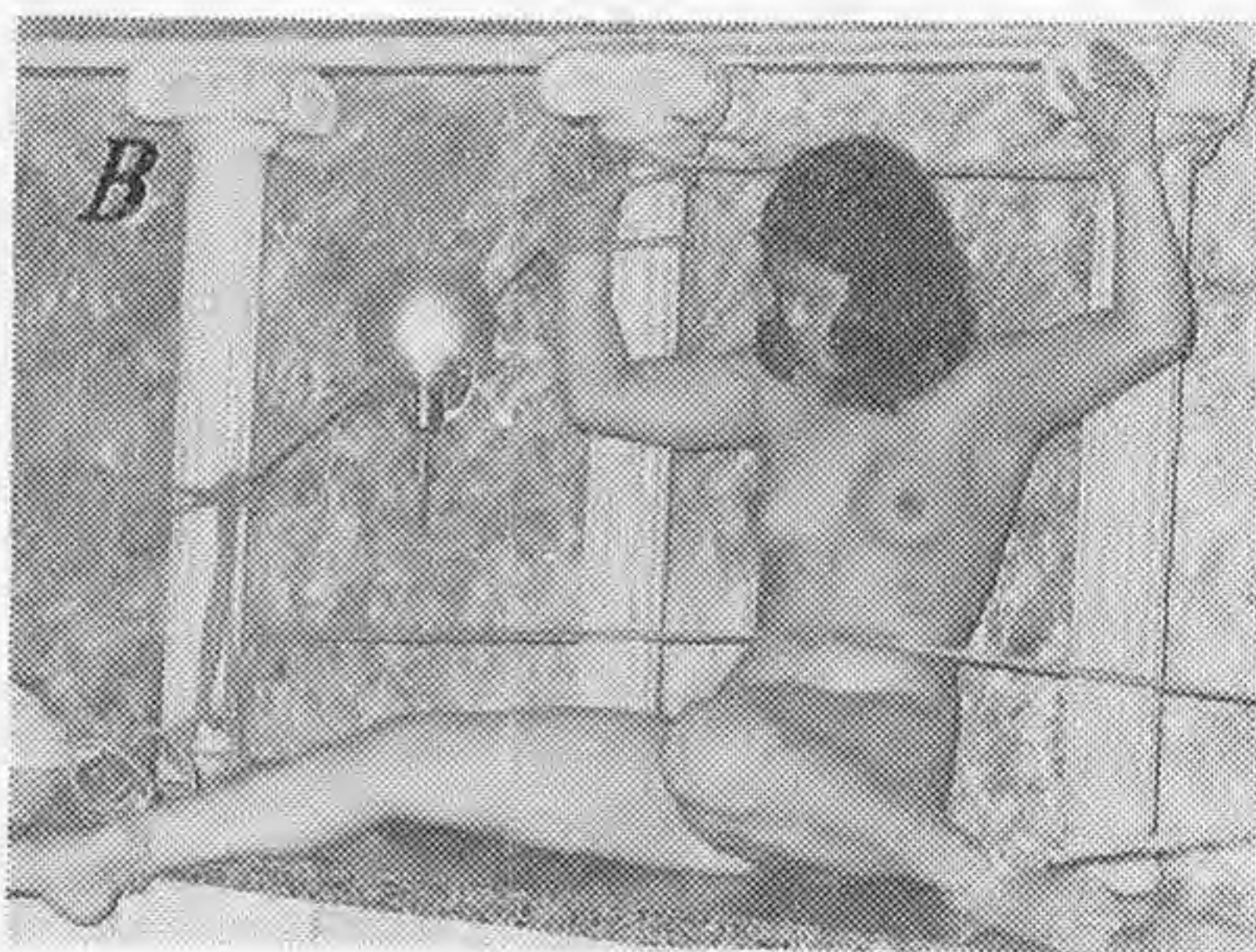
アレとは失神を指すのであろう。

「彼女、始めての経験なんだろう」

「ウン、本人は生れて始めてだといったるがネ。それにしちゃ、随分M気旺盛だよ。そうだなユリ子。始めてなんだろ、あんなこと」

U氏は言葉半ばで川口有里子に問いかけている。

「当り前ですわ。本当に苦しくて死にそうだ



ったですわ」

「嘘つけ、喜こんでいたくせに——」

「知りません——」

「きつと、虐められたくてウズウズしてるんだよ。君はそんな性分なんだよ。だから今も辻村君にあっさりO・Kしたじゃないか」

「それは……」

「弁解は無用。いいんだ、いいんだよ、それで。だから連れてきた甲斐もあったというもんだよ。辻村君、いいぐあいに仕込んでやって呉れ給えよ、ね」

彼は、阿弥陀如来嬢の頬っぺたを軽く抓って、いきなり唇をよせると、チュッと頬のあたりにキッスした。あえて避けようとせず、彼女はU氏にされるが俚になっていた。秘かに胚胎していた被虐性が、彼の荒治療で、急にめざめてきたようであった。

一時間ばかりして、U氏は川口有里子をつれて帰っていった。彼女の住所、連絡の電話番号をきいたことは勿論である。彼女は私や部長から受ける被虐的なプレイを一向、苦にしている様子もなかった。いや、むしろ帰りに、

「お電話、お待ちしておりますわ」

と口早に言って、ペコリと頭を下げて玄関を出ていったのが、強く印象的であった。しびれをきらせて待ち兼ねているであろう来客の存在も、今の私の脳裡にはなく、川口有里子とのプレイの再会のこと、頭は一杯であった。

この時の、応接間のフोट一枚、十月号の『楽我記』にのせたのであるが、あの日の顛

末は、よってくだんの如しであった。

× × ×

いつもの私の悪い癖で、手が空いたら、すぐにでも電話しようと思っっているうち、思いがけない緊縛指導という大役の依頼をうけてしまった。既に御存知の『徳川女刑罰史』である。毎日、東映京都の太秦撮影所と我が家を往復するうち、いつしか暑い夏も過ぎ、朝夕めっきり涼しくなり出していた。九月十九日、トップシーンのタイトルバック、三段斬り、火灸、牛裂きのロケと、木馬責めの夜間撮影（これは余り凄惨なのか、残念乍らカットされていた）を最後にクランクアップし、引続いて、よみうりテレビの11PMに引っ張り出されたりして、やっと自分の体になったのは十月の声をきいてからであった。

溜っていた私の仕事の方も一段落し、その頃になって川口有里子の存在を、脳裡に蘇えらせたのである。11PMが縁となって数年振りに再会した梨花悠起子。たびたびプレイを要請してくる谷山久美子。東映の撮影所での見学者の女性の中で、辻村隆という人間を知り、撮影待ちの合間に声をかけられた、奇クファンの若い娘、K子。その他、数人の女性から、電話や手紙で関心をよせられていた。

誘えばいずれも触れなば落ちん女性達であった。謂わば、私のカメラ・ハントの材料は、

この処至って豊富な状態であったのである。川口有里子のことに思い当たったのは、あの日以来、絶えて連絡がないだけに、この際電話でもしておかないと、その儘、彼女との縁が切れてしまいそうに思えたからであった。

電話が彼女の勤める会社につながる。電話交換のない彼女の会社では、受付にいる川口有里子が、大抵は電話をとることをあの日聞いていたから、会社名を告げる澄んだハキハキした声は、紛れもなく彼女であらねばならなかった。

「川口さん？」

「ハイ私ですが、誰方さまでしょうか？」

「辻村ですよ。御気嫌さん……。N光学のU部長と一緒に、夏のある日、突然に私の家に来られたでしょう」

一瞬、電話の彼方が固唾をのんで静まり返っていた。

「思い出した？」

「忘れはしませんわ。あれ以来何とも仰有ってこれませんので、もう私など御縁がないのかと思っていました……」

「すぐ連絡するつもりだったのに、映画の仕

事を手伝いまして、それで暇がなかったのですよ」

「存じておりますわ。一昨日、早速見て参りました。それからテレビに出られたのも拝見しましたわ」

「どうして知ってるの？」

「部長さんから御電話いただきました。新聞のテレビ番組欄にも、お名前チャンとのっていましたもの」

「照れ臭いね——」

「サンングラスかけて、いやにすましていらっやいましたわネ。でも女優さん等とお仕事なさって、随分愉しかったのでしよう」

軽い羨望を含んだ声が伝わって来た。

「まあネ。それでその方も一段落したし、私の仕事も大体片附いたので、早速会ってみたくなったですよ。御都合はいかが」

「一寸お待ち下さいね。スケジュールみえますから……」

やや間をおいて、

「十日の体育の日ならいいんですけど……」

「ああ、祝祭日ですね、いいでしょう。何なら神戸まで出掛けて行きましょうか」

「いいえ構いませんわ、私の方から御指定の場所へまいりますから……」



地元の神戸で、私と二人いる処を、何かの拍子に誰かに見られても困るのである。私はそこで時間や待合場所など精しく打ち合せた。彼女は余り会社へ気兼ねしないのか、よく喋べった。その事をきくと、恰度ランチタイムで、オフィスには、気のおけない年輩の

係長一人しか居ないという返事で、私のかけた電話の時間帯も好都合だった訳である。気兼ねがいらないから、交渉はいともスムーズである。まるで私とのプレイを、あの日以来ずっと心待ちにしていたかの様に、彼女の声は次第に弾んできた。それにしても二カ月近くも、ウンともスンとも言わなかったにもかかわらずこの快諾は、久方振りの一対一のプレイに逸る私の心を、一入疼かせ始めた。

「覚悟はいいね」

抑揚するように小声で最後にいうと、

「ええ、そのつもりですわ。あの凄い映画みて、辻村さんを見直しましたもの」

電話口でクククと笑っている。彼女に電話したタイミングは確かによかった。それは、彼女の失神を呼ぶ嬌笑のように、快く私の耳朶を撃った。

× × ×

約束の日、私は近頃キタでデートの場合よく利用する、ホテル阪神の、ロビーの喫茶室で彼女を待っていた。午前十一時に会う約束になっている。この界隈に車を乗入れるのは苦手なので、大国町の地下鉄入口附近のモータープールに車を預け、カメラや縄類一切も車の中へ置いてきて、手ぶらの身軽な姿で、

一人コーヒを啜っている。この附近の梅田界隈で食事をすませ、行先はデラックスなモーターの堺羽衣のH御苑に心をきめていた。大国町まで地下鉄で行き、そこから走るつもりであった。木戸悦子の妊婦プレイもここで撮ったが、一、二階とつづく豪華さと、勝手のよさが、私を再びここへ魅きつけた理由でもあった。

川口有里子の、あの特徴のある阿弥陀如来の女人像に似たふくよかな顔が数分後、喫茶に入ってきた。逸早く私を認める。手招きすると、いそいそと満面に笑みをたたえて、急ぎ足に近づいてきた。真赤なセーターに青のタイトスカート、白いブーツといういでたちで、まるでフランスの国旗のような若やいだ服装である。

「コンチワあ」

と、すがすがしい元気な声で、可愛いく叫んだ。

「祭日だったから、電車混雑して、大変だったでしょう。兎も角、少し早いけどメシを喰いに行きましょう」

すぐ立上ると、するりと腕を組んでくる彼女のなすが俤にして、ビルから地下に潜ると堂島地下センターに向って歩いた。こうして

若い娘と腕を組んで歩く私を、三人の子供達が見たらどう思うだろうか、微笑がにじみ上る。その危険は十分にあったのだ。高校三年の男の子が、大の水前寺清子ファンで、姉二人と共に、今日午前十一時より始まる、朝日フェスティバルホールの労音主催の「水前寺清子艶歌をうたう」を見に来ているのであった。

最近出来たこの地下街は、梅田の地下に較べて明るく清潔であった。なじみは薄い、二度許り入ったことのあるレストランへ。

何でも好きなのを注文していいよといったら、この娘は遠慮もなく、ヘレ肉のステーキを注文した。二人前で税金を含むと、三千円は軽くオーバーするだろう。まあいいや、O・Lの彼女にとっては、滅多にない、楽しい一日の食事なのだろうから――。

川口有里子の食慾は旺盛であった。さして広くもないレストランなので、ゆっくりと喋ってくつろぐ時間もない。よくはやるのか次々と客が立てこんでくる。

地下鉄で大国町へ――。そして私の車に二人きりになった時、始めてプレイタイムになったのである。

「どこへいらっしゃるの？」

「堺の浜寺辺りのモーテルだよ。時間いいんでしよう」

「ええ、夜九時までには帰れたら……」

「家はどこなの？」

「湊川の近くの。神戸、御存知？」

「ああ、少しはネ。ところで先日、私の家に来た時、部長あの日が始めてのようにいつたけど、そうじゃないんだろ？ これは私の直感だけれど……」

「どうして？」

「プレイに対して、飼育されていると見たんだ。でないと、始めてで、ああ女性の前でズケズケとはいえないよ、彼も」

「怖いね、辻村さんたら……。白状しますけど、本当は辻村さんの仰有る通りよ」

「だろう。彼は私の前で、さもない恰好をしたかったのだよ。いつ頃から？」

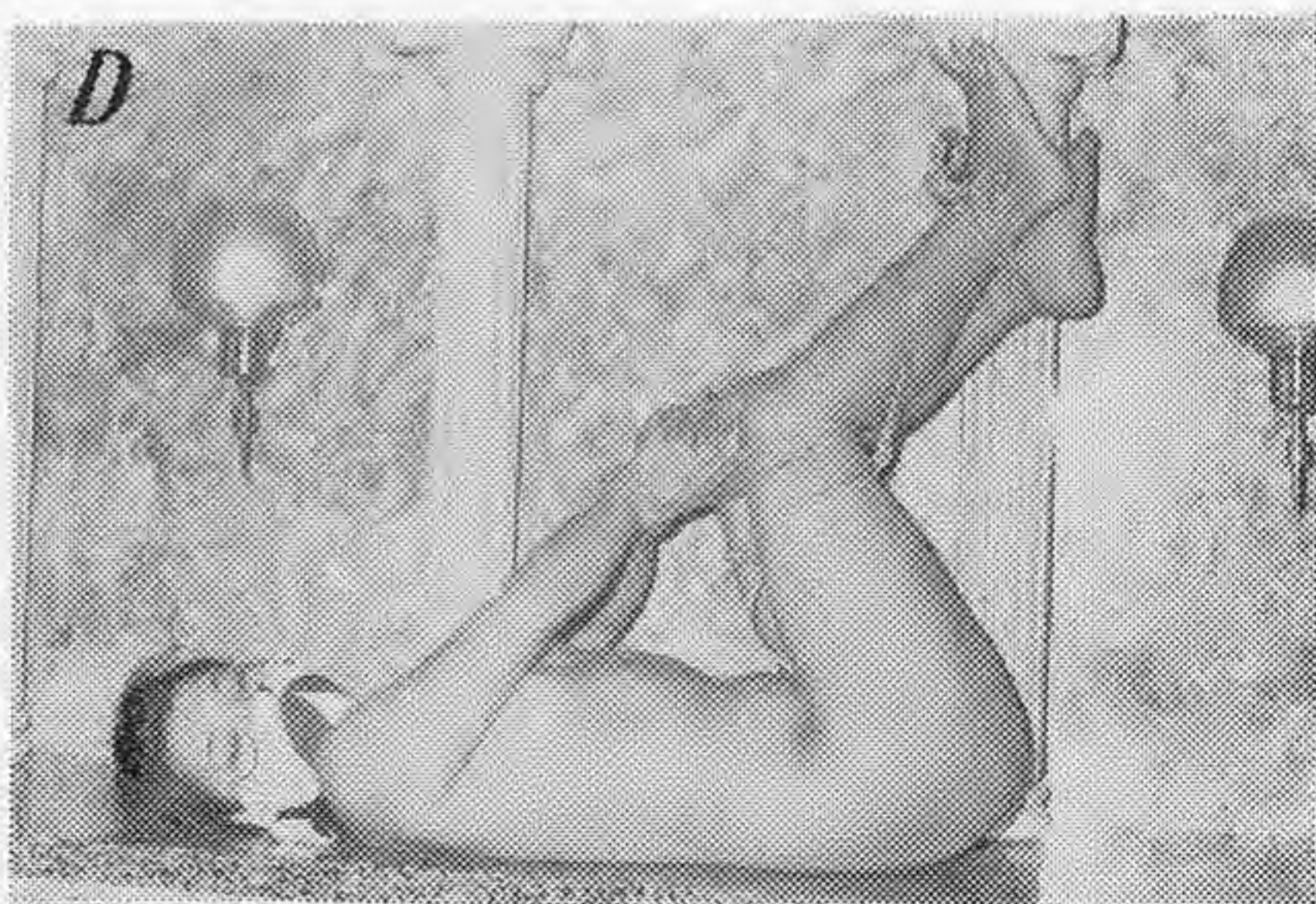
「去年の十二月から」

「それじゃ、五回や六回じゃない。もっとだろ」

「月に二度ぐらい」

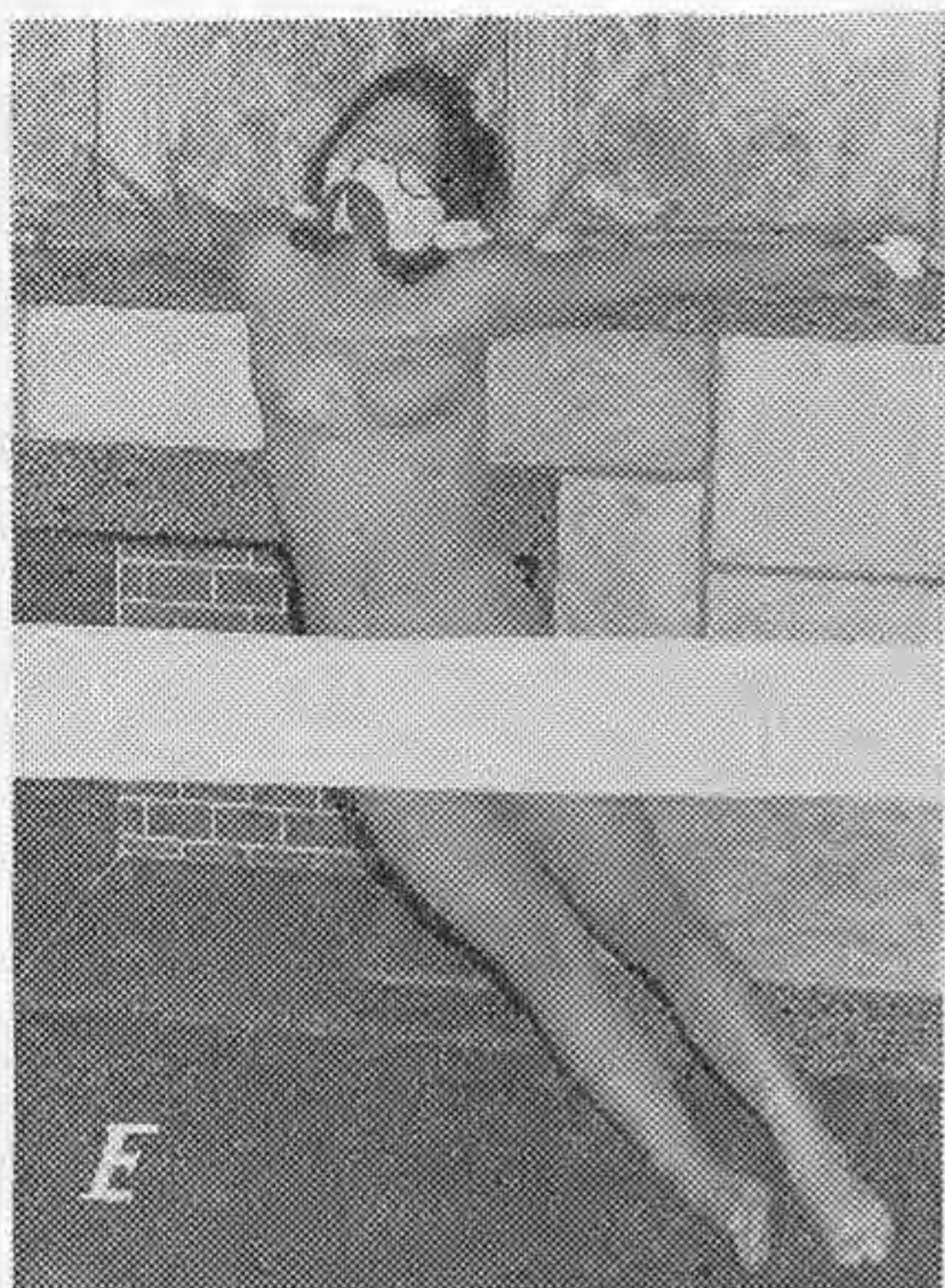
「そうだろうと思った。あんた自身、あんなどぎつい話をしていて平気にいるんだから、これは始めてじゃないと、すぐ分ったよ」

「御免なさい、ウソいったりして……。でも



部長さんが、そういえと仰有ったんだもの」「いいんだよ、そんなこと。反ってプレイし易くて、私もラクだ」

やはり私の直感は当たっていた。あの夏の暑い日、私の応接間で、あのやりとりは、始めてプレイした女性の態度ではなかったから



だ。川口有里子は、過去十カ月間に亘って強烈なSの部長から、十分な飼育をうけていたに違いなかった。だからこそ失神というような、異常事態もプレイの最中に伴ったのであろう。グループサウンズのオックスという連中の女性的青年、赤松愛が舞台上で失神し、それが演技とも知らずに、つられて、熱狂する若い娘が失神する、失神ばやりの近頃である。プレイの頂点で、川口有里子が失神したとて、それはむしろ被虐の極致の陶醉の真の姿かも知れなかった。

目指すH御苑はもう近かった。祭日のせい

か、いつもは混雑する国道も、今日は珍しく往きかう車が少なかった。

× × ×

湯上りの軀をほてらせて、川口有里子は、浴衣一枚裸身に纏ったのみで、階段を昇ってきた。腰紐もせず、軽く両手で、はだける前を押えていた。階下にバス・トイレ。階上は洋間と、奥まったダブルベッドの部屋、それを囲繞するギリシャ風の柱、装飾灯、マントルピース、壁間にはレザーを張って防音地帯を構成していた。木戸悦子の時と、部屋こそ違え、慥らえはすべて同一の豪華さである。

既に被虐的に仕込まれ、彼女自身も又その被虐に耽溺し、願望する娘であったから、冗長な無駄なプレイは一切抜きであった。

「始めようか」

私のその一言で、領ずくと彼女は浴衣をサッと脱いだ。小さい盲腸の傷痕はあったが裸身は若さをたたえ、仄んのと桃色に染まって、鮮烈なピチピチした女体が、惜しげもなくそこに曝け出されてい

た。乳房は円く、乳首は桜んぼのように赤く色づき、乳暈は、処女の色彩を浮き彫りしていた。崩れていない女体に、私は部長のプレイ専科を確認した思いであった。決して、抜群の美女とはいわないが、あどけなさの残った、おっとりとした丸顔の容貌は、如何にもOLタイプの女性にふさわしい、どこにでも見掛けるような顔立ちであったのである。この女性のどこに被虐願望が秘められているのであろうか、それがむしろ奇異にすら感じる平凡さであった。

第一の緊縛の場所を選んだのは、つくりつけのマントルピースの台上であった。人工石材の冷たい台上に、いわれる俚に、彼女は無雑作にぼんとはずみをつけて上る。全裸に全然羞恥を覚えないしぐさであった。両脚を揃えてブラブラさせ乍ら、無言で私の緊縛を待っているようであった。始めてのプレイで最初から、こうも手間のかからない女性は最近珍しい。これも部長の薫陶のたまものであるうか。

長い太いロープをとり出して、両手を挙げさせると、二本の支柱に縛って行く。薄ら笑いで彼女は、私の縛るのをみつめていた。簡単な縛り方であるが、先ずここで一発、二発

ストロボの閃光を走らせる。無雑作に脚を投げ出して、露出を避けて、横坐りにさせて、両脚を揃えさせてこのポーズにねらいをつける（A）

「平凡でしょう、こんなポーズ？」

ポツリと有里子は、私になじるようにいった。その気になっている彼女は、いつときも早く悦虐に燃えたがっているようであった。

「ああ、大したポーズじゃないね。手始めだからネ。これからさ」

何を小癪など、フト小娘に挑撥されている自分に気負い立ちかけたが、プレイのルールを私は私なりに追ってゆく腹をきめた。A級



のSプレイの部長なら、こんなまどろこしい縛りをやらす、恐らくいきなり強烈な緊縛へと走っていたに違いなかった。それに馴らされた彼女が、悪名高き辻村隆の緊縛というイメージで期待に胸を弾ませていたにもかかわらず、こうした緊縛ともいえぬ縛り方から始めたので、一寸期待を裏切られたという気持ちが、こんな発言になったのかも知れない。

しかし、フォトを伴わない、純粹のプレイに終始するのと、カメラ・ハントの違いはここにあるのかも知れなかった。カメラで女体をハントする場合、どうしても間の抜けたフォトのポーズの時間があり、緊縛の様相も多種に亘らざるを得ないのだ。

純粹のプレイなら、あるひとつの、強烈な緊縛を行ない、その緊縛をずっと続行し、維持して、ひたすらに女体に苦痛と悦楽を与え、陶酔の極致へ誘導してゆけば、SMのプレイとして、すべてはこと足りるのである。ハントの場合そうはいかない。あらゆる角度から、種々の緊縛を、プレ

イを従として、次々変化させてゆかねばならないのだから、判っきりいって、フォトが主か、プレイが主かによって、おのずからかわってくる筈である。私が、カメラのハントから、自己を見失ったプレイに移行した場合、すべてを忘却して熱中した時は、いつもその模様をフォトで発表出来ないというジレンマがついて廻っている。

川口有里子の場合、いずれ一度や二度は失神させる気でいても、出来得れば、なるべく種々の緊縛を試みたかったのである。

その心、知るや知らずや、当の彼女は両手をかかげた俛、依然として軽い放心状態で、そのポーズを続けていた。

細手のダンダラ縄をとり出して、第二次の工作にかかる。左右に大きく両脚を上げようというのだ。私の作業は早い。両脚を引っ張るようにして開かせると、彼女は力を抜いていとも素直に大きく開股した。神秘の奥がベールを脱ぐ。すべての行為に抵抗がない。被虐を願う彼女にとって、こんなことは、ほんの序幕にも等しい構図のようであった。女体をすべて曝け出した羞恥のポーズに、カメラを構える私を、有里子はまじまじと見つめていた。撮ったものは所詮秘蔵版である。準備

してきたローソクに火を点ずると、私はカメラをおいて近付き、女体にかなり近い距離から、ポタポタと数滴をたらした。熱蠟のあつさに、この時始めて、ウウツと呻いて、有里子は、身をよじった。まざまざと悦虐の歓喜が、しかめた眼尻をよぎった。

「熱い？」

「ああ、でも……」

洩れる声は言葉にならない。突如として、キリキリと、激しい歯ぎしりの音が、私の耳朶をうった。熱苦にかみしめる皓齒が、悦虐を求めて尚もキリキリと鳴りつづけた。

吹き消して、蠟塊をとりのぞき、台上にこぼれた蠟涙をこそぎとると、私は少し足縄をゆるめた。左脚を折らしてその部分を隠してとるより仕方のない、あからさまな肢態であったからだ(B)

眼をつむった俛、川口有里子は何か呟いているようであった。陶酔の悦楽が、じわじわと浮かび上っている。私は、いきなりちっぽけな乳首をキュッとひねり上げる。アウウとうめいて、その声は高まり、それが、

「いじめて……もっと、いじめて……」

と、きれぎれに呟いていることを、私は、はつきりと聞いた。早くもエクスタシーに近

い様相が彼女の顔面をおおいつつあった。そうなりたがっている彼女とは反対に、私は珍しく、反って冷静になっていった。最初の縛りで、そうあっさり失神されては、これからの私のプレイが生きてこないからであった。酔い痴れたような彼女を正気に戻すために、私はそそくさと、この簡単な縄を一分足らずで解いていった。

ホーツと深く吐息して、彼女はうつろな瞳で私をみつめた。間髪を入れず、すぐさま次の段階の緊縛にかかる。台上にうつぶせに寝かせると、後手に両手を縛り、支柱にかけて高く引き絞る。ついで交叉した両手を通して両脚首を上げさせて縛り合わす。ベタリと伸びていた彼女も、私の声で胸をそらせ、ぐいと上半身を持ち上げてこちらを見た(C)押しつぶされた胸の膨らみが、体を落とした勢いで、ぐっと脇腹に、はみ出る。

「鞭打ちされた？」

「ええ、いつも……」

顔を伏せた俛くぐもり声で返事がかえる。別の、だんだら縄を折り曲げて短く持ち、ピシリと、盛り上った双丘をうつ。吊り上った両手脚がピクリと動き、臀部がくねる。パシリ、パシリ、パシリ——。静かな部屋の空気が

を破って、縄で鞭打つ音のみが、乾いた響きを立てていた。徐々に力がこもる。それにつれて、やがてくぐもった呻きが洩れ、ハアハアという激しい息づかいが嘆声にかわり、静寂を裂いて、その呻き声は大きく嬌声に交っていった。まぎれもなく川口有里子は、双丘を打つ縄鞭に、快楽を覚えていたのである。

ここという処で、私は再び中絶する。縄をくと手荒く仰向かせ、両手を前で揃えて縛ると、両脚を高々と掲げさせ、膝元に両手をつないで、やはり一本の縄で、脚首まで縛っていった。薄汚れた靴下を脱ぐと、口をこじあけさせて、二枚の靴下をぐいぐい押し込み、その上から日本手拭で猿轡をはめる。支柱に体を繋いでいないので、若しゆらりと体が揺れて横倒しになったら、その俛、一メートル以上もある床下へ転落する恐れがあった。快楽を継続したい想念からか、彼女は、眼をとじて、私の鞭を神妙に待っているようであった。(D)

彼女の神妙な期待に反して、私はこの双丘に鞭を振わなかった。その代り、平手でパシリ、パシリと五、六度、大きな音を部屋中に撒きちらして、叩いてやったのである。くつきりと私の掌の跡が、臀部を桃色に彩ってい

る。挟んである携帯用のパイプレーターが、ビーンと音を立てて、音はすれども姿の見えぬ有様で、彼女の肉体の一部で響いていた。彼女は何か必死に訴えようとして首を振っていた。その時、私は見た。台上をヒタヒタと濡らしてゆく、鮮血のしたたりを――。

× × ×

ショックによる突然変異ということもあるものを、私は直接この眼で確かめた。十日も早い生理の来潮であった。血痕のこびりつく下半身を、流石にはじらい気に押えるようにして、川口有里子は、階下へ駆けるようにして降りていった。拭い易い台上でよかったのだ。若し床下のジュータンの上であったなら

正しく始末に困るところであった。

タンポンの準備もなく、ティッシュを急場凌ぎに使って、彼女はやや白けた顔で上ってきた。これからという時になって、折角盛り上って来たプレイの想念に、さっと一掬の冷水をかけられた気持で、

「どうする？」

彼女は頬を染めてうつむいていたが、「こんな状態でも差支えなかったら、わたし構わないけど……」

洗って来た下半身が、未だ濡れそぼれている。むしろ血を見て、女の被虐の慾求は、かえって拍車をかけられて昂まっているのではなからうか――。それをまざまざと現わすよ

うに、言い終って川口有里子の眼元は、パツと紅をさしたように染まって、瞳はうるんでいた。

「その気なら私は構わないよ、やろう。洩れないだろうね」

「大丈夫と思うけど、何度でもおトイレへ行きますわ」



これは又何と、Mに徹した悲愴ともいえる言葉であろうか。過去数々のハント女性の中で、約束の日が折悪しく生理に当り、それを承知で撮った時もあるが、覚悟の上だから、女性の方にもその準備はあった。川口有里子の場合には思いもかけぬハプニングな出来事であったのだ。被虐と数々の受縛を覚悟の上で私と会った彼女であったが、その緊張感と、ショックが、彼女の生理まで狂わせたというのであろうか。しかも尚彼女は、この機会を自分に与えられた悦虐にむせぶ絶好の機会と見て、あえて中止しようとはいわなかったのである。

この小妖精のような、いじらしくも可愛い新鮮な女体を、私はこの刹那むしように虐めたくなった。より強烈な、変った刺激を求めようとする、激しい嗜虐の想念が、ほむらとなって、体の隅々までめらめらと燃え上ってきたのである。

プレイの発想を待つかのように、マントルピースの前で、胸のふくらみを抱え込んで、じっと立ちつくしている彼女に近づくと、私はその両手を邪怪に開いた。握っていた太縄を手首に巻きつけて素早く縛ると、支柱に通し、両手を大きく拡げた恰好に縛り、胸にか

けて、かなり強く引き絞った。背がのけぞるくらいにぐっと縛り終ると、又しても、薄汚れして唾液でウッスラしめった靴下を口の中に押し込んで、その上から手拭で猿轡をかませる。直立している彼女は、この緊縛をさして苦痛にも感じないのか、私がきおい立っている割には案外平然としていた。しかし、そうは問屋がおろさない。本格的な苦悶のプレイはこれからなのである。私の両手は、彼女の左右の足首を握ったとみるや、いきなりぐいと横ざまに引っ張った。呀っと声の挙った瞬間、既に肢体が斜めに流れて全身のバランスが崩れ、ぐっと胸繩が上半身をしめつける。踵に力を入れて、態勢を立て直そうと踏張るが、そうはさせじと、再び私は両足を引っ張る。左足でかろうじて踏んばってはいるものの、既にバランスのくずれた体は元に戻らない。不自然に歪曲したポーズで、上体はじりじりと下り、胸をしめつける繩は、腋下に深く喰い込んでいた。くぐもり声で洩れていた呻きが静まり、有里子の顔に歓喜に似た陶醉が浮かんできた。二つ折れにした縄鞭でピシリと腰の辺りを叩きのめすと、ピクリと支えの脚がケイレンして、陶醉のかげらいは、いよいよ濃厚さをましてきつつあった。知らず

や、それが失神の前兆であったことを――。

(E) 私は強烈にしまる胸繩のために、心臓の鼓動に支障の来たすことを懼れて、その時あわてて体を元に戻してやり直立させてやったのであった。有里子は未だ瞳を閉じた俛であつた。

「どうした、胸が苦しいの？」

否と、彼女がかぶりを振る。依然として、眼を閉じたままで――。それが失神を呼ぶ寸前の表情であつたことに、迂かつにも私はその時、気付かずにはいたのであつた。

縄を解くのは簡単であつた。一分もかからない。深い吐息が洩れて、フトいらだたしい表情が彼女の顔をよぎった。悦楽の佳境に、正に没入しようとして中断された、そのはかせなかったやるせなさ、ありありと泛かんでいたのに私は気付かなかった。又しても細く一筋、赤いしたたりが太腿に伝い始めた。ティッシュでそれを拭いてやり、やれやれ厄介なことになったと思ひ乍ら、私は辺りを物色して、次の責場所を求める。

「あの柱に縛ってやろうか？」

「お好きなように。でも……」

「でも、なんだい」

「いいわ、別に何でもないのよ」

フト言いかけて口をつぐんだが、それは恐らく、プレイの中断をなじろうとする言葉ではなかったであろうか。はしたないと口に出せなかった彼女の心情を私はその「でも……」から察知した。よし、さらば徹底的に、音をあげるまで続けてやろう。

縄目の跡もあざやかな彼女の手をとって、寢室との境目の、太いギリシャ風の柱の前まで引っ張ってきて、そこへ立たせる。三面鏡の、円型の腰掛台を持ち出してくると足許に置き、その上に昇らせて、両手を高々と挙げさせる。柱の上部の、彫刻したあたりまで両手が伸びる。飾りつけの柵によじ上ると、先ず両手を縛り合わせ、ぐるぐる巻いて柱を通して胸のふくらみから腰へ。ウエストが深々とくびれる程に引絞って太縄を止める。くつきりと臍の上で、ウエストはくぼみをつくっていた。(F) 別の縄で足首を縛ると吊り下げ、棒でとめて体を巻き、太腿から足首へと柱を廻してしめつけてゆく。緊縛は終わった。果してこの程度の縛り方で、宙に体が保てるかどうか疑問であつたが、とも角、逸る心はいきなり三面鏡の円型腰掛けをポンと蹴って外す。拍子にズルッと軀全体がずり下る。柱に宙縛りされた俛彼女は、この時既に失神状

態にあったのであった。眉をよせかたく眼をとじた俛、キリキリ歯ぎしりしていたが、それは陶酔の極致のエクスタシーの表情その俛であった。被虐願望の自己催眠なのであるか。しかし私は未だその時には失神に気付いてはいなかったのである。バンドをズボンから引抜き、下着だけになった私は、このかなり幅広い、新品の硬いバンドで、力任せに、発止と腹部を叩いたのであるが、悲鳴も絶叫もなく、この痛烈な革鞭打ちに、呻き声ひとつ立てなかったのである。ありありと鞭の、みみず腫れが走る。夢中で二度、三度叩きのめして、私は愕然とした。この反応のなさはどうであろうか。冷めたい恐怖心がサッと走る。俄破とバンドを捨てて、彼女の体をその俛抱くようにして、私は乳房の辺りに耳を押しあてた。激しい鼓動のうねり、そのくせ、うっすらと口を開き、形よい前歯を覗かせた俛、川口有里子は宙に浮いたその姿勢で、微動だにしなかったのである（G）。後頭部がカーッとなる思いで、私は無我夢中でカメラをとり終ると縄を解き出した。一分が数十分にも感じる長さであった。魂を宙天に飛ばして、生なき人形の如く、ゆらりと彼女は私にもたれかかり、そのままヘナヘナと床下に転

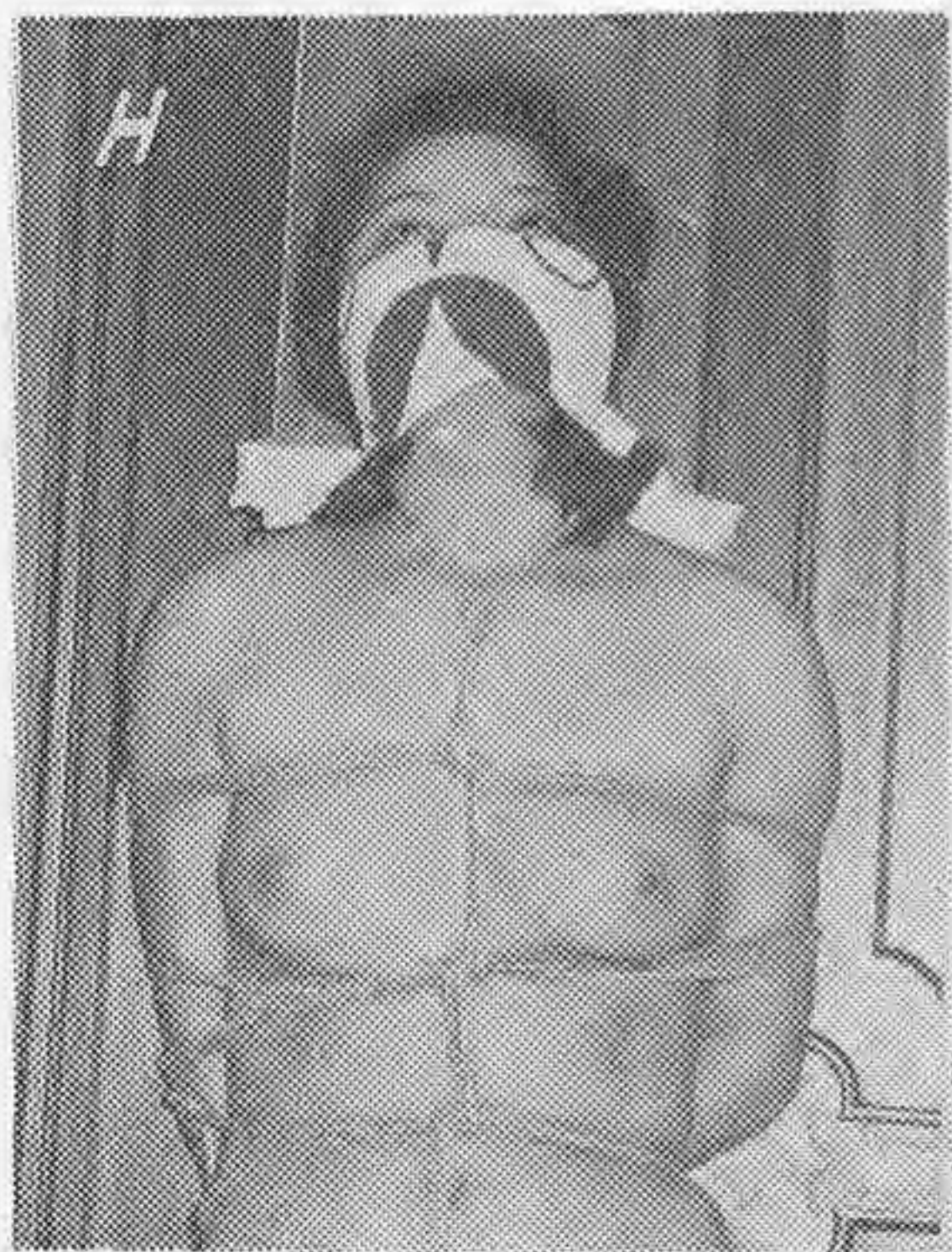
がってしまった。太腿にスーッと二筋三筋、赤く血の流れが延びている。

「おい、しっかりしろ」

パチパチを左右の頬っぺたを叩くと、ウーッと唸って彼女は眼を開いた。フーッと溜息が洩れて、スローモーションカメラでうつしたように彼女は、ゆるゆると体を動かした。

「大丈夫か？」

恐らく私の形相は交っていたに違いない。返事はかえらず、ゆっくりとひとつ、彼女はうなずいた。まざまざと目前で見た、これが失神というものであろうか。私はその時、か



つて四年前、昭和四十年一月号で発表した、M七〇生の「鼻責めの記」で書いた、彼の始末の強烈な緊縛の折、恰度今と同様の状態になったことを、ゆくりなくも憶い出したのである。どんな表現で書いたかは一寸思い出せないが、まるで符牒を合わせたかのように同一の失神状態であった事を私は思い出し、被虐を求める極致が失神を呼ぶことを、この時、判っきりと知ったのであった。

とあれ、U部長のいうように、正しく川口有里子は緊縛過程に於て失神したのである。

床に横たわる彼女の裸身の上へ、折重なるようにして私は、かなり力をこめて肌を抱きしめた。

「どうなったの？」

「すーっと気が遠くなって……」

「失神したんだね」

「ええ、胸が苦しくなって、足を吊られている頃までは記憶していたんです。御免なさい……すぐ気分よくなるわ。だから、やめないでね」

やめないでくれと川口有里子は、判っきりいった。その言葉は、失神こそ陶酔の極致を歴々

と物語っている、何よりの証拠であった。

「驚いたよ、よくこんな状態になるの？」

抱かれた後、遠慮がちに彼女は両手を私の首に廻してきた。

「こんなときだけ……」

「部長とのプレイの時もなるんだね」

「ええ、激しいときに」

「一休みしながら、ききたいな」

私は彼女から体を離すと、汚染をおそれダブルベッドの真白いシートと敷布団をまくり上げ、剥き出しのマットレスに、有里子の体を抱き上げて寝かせた。

「喋べっても大丈夫？」

「大分戻ったわ、辻村さんをびっくりさせたけど、怒らないでね」

「怒るもんか、貴重な体験をしたよ」

「本当に怒らない？ それならキッスして」

眼を閉じて唇をさし出す。失神にかこつけて、甘えようとしている彼女の魂胆が可愛らしく、心憎かった。フレンチキス数分——。熱い唇を離すと、顔をよせ、その頬がカッカと、ほてっているのを知った。

「どんなこと聞きたいの？」

男心をくすぐるような媚態が、そこにある声であった。

「何度ぐらい失神した？」

「数え切れないわ」

「フーン、みかけによらない大した悪女だ。始めて失神した時は、どんな状態の時だったの？」

「部長さんに始めて縛られてローソクを体にポタポタおとされた時。アツーいと思った瞬間、フーッと気が遠くなっちゃった。気がついたらベッドにねかされて、心配そうに覗きこんでいたわ」

「失神からさめた時の気持は？」

「何だか体中がとろけてしまいそうな、ひどい疲労感なの。あれをエクスタシーっていうんですってね、部長さんから教えてもらったわ。それを感じた時、もう自分がわからなくなってしまうの」

「彼とセックスの体験あったんだろ」

「ええ、彼気が向いたら偶にはね。でもそれだけに終始する時より、すぐく虐められた時の方が感じる人が多いの。けれど、セックスを伴って虐められた方が、より最高かも知れないわ」

「たしか二十一才だろう。それにしては恐れ入ったね」

「こうして虐められたら、誰だってそうした

気分になるんじゃないの？」

「そうでもないよ。M的な感覚ゼロの女性なら苦痛のみだし、被虐願望の女性にしても、すべてがすべてそうなるとは限らない。失神に近い状態になることはあっても、あんたのような、完全失神の姿を見たのは始めてだ。貴重な人だよ、有里ちゃんは……」

この年令で、まるで被虐の悦楽と、セックスの歓喜を知りつくしているような口吻に私は唯々驚き、恐れ入るのみであった。いやむしろ、たしなみ深い女性や、プレイを罪悪と考えている人達にくらべて、天衣無縫に悦虐に失神する彼女は正直であったのかも知れない。

「初めての体験は？」

「セックスの方？」

「うん」

「十七才の冬——。神経大の学生と初めて。半年ぐらいつづいて、彼を振っちゃった」
「搔痒なんてしてないね、君の体付では」
「不思議に出来ないのよ。私の体おかしいのかしら。結婚したら一度お医者様にみてもらうつもりよ」

「こんなSMのプレイの経験は？」

「それはさっきいったでしょう、部長さんと



「らそうなんでも当然と思うんだけど」
「好きなんだよ。それを求めているんだよ」

「だから、辻村さんから電話いただいた時、その瞬間、もうフツと気が遠くなりそうだったわ。声をきいて、ああ、辻村さんに縛られるんだなあ、と考えただけで、胸がドキドキしてきたのよ、あの時——」

被虐の悦楽が失神をよぶ——。これは又なんとMに徹した素晴らしい娘であることよ。

パツと彼女は突然起き上ると、裸身をひるがえして、音を立てて階段をかけ降りていった。再び厄介な始末に走ったのであろう。

× × ×

冷蔵庫からビールをとり出して、喉の渇きをうるおしていると、

「わたしのもんでいいかしら」

眩しい裸身を、ありの俤にさらして、川口有里子はテーブルを挟んで私の前に坐った。

「のめるの？」

「少しなら……のんだ方が反っていいの」
なみなみと注いでやると、ぐーっと一息に

あふって、口辺の泡を拭いた。

美女の緊縛をビールの肴にして、グビグビやるのも乙なものだ。そんな気になって、腰をあげると、彼女に近よる。

直立させて、首縄から始まって足首まで、細いんだら紐で、素早く縛り上げて行く。

彼女の頬は心なしか桃色に染まり、吐く息は乱れて、微かにビールの匂いが、漂っていた。嗜虐の血が、いよいよかき立てられてくる。台上の隅に、赤く染まったティッシュの塊が、始末もせずその俤に置き捨てられていくのに眼をつけると、私は矢庭にその塊をとり上げて、手を赤く汚して、俄破と彼女の口の中に押し込んだ。

「あッ、いや、いや、アウウ……」

不意をつかれて、必死で吐き出そうとするのを、尚も押し込んで、その上から、手拭の猿轡をきつくしめる。川口有里子は、激しく縛られた姿でイヤイヤをしていた。(H)

「いやもくそもあるか——」

私のSは、血をみて疼き、燃えたぎっていた。直立する彼女のうしろへ廻るや、革バンドで激しく臀部へ一撃をくらわせた。勢いによりめいて、中心を失った彼女は、前のめりになると、ドスンと音を立てて転がった。く

去年の冬からよ。あの人のテクニックうまいわ。最初すごく痛くてつらかったのに、それがいつの間にか心地よくなってきているの。私って変かしら」
「その挙句が失神」
「グループサウンズで興奮して、失神する子もあるんですよ。まして、こんなことされた

ぐもりの呻きがジュータンの床から洩れた。

横倒しになった筈、彼女は芋虫のようにヒクヒクと蠢めいている。その裸身の背へ、腰へ、双丘へ、容赦ない私のバンドはうなりを立てて無惨に飛び交うた。身悶えは激しく、軋々し反そくする。後手に縛られた両手の指先が空を掴んで伸縮した。バンドを投げ捨てると、上半身を抱えて、ずるずると引きずりマントルピースの中へ背を凭しかける。歪んだ首を立て直そうとして、頭を持ち上げた途端、彼女は猿轡の奥で大きく絶叫し、開いた両眉を精一杯しかめて泣きべそをかいた。どうしたのかと駈けより、頭的位置を直してやると、猿轡の中で何か訴えている。髪に手をやって撫でるとうっすらと血が私の指先を染めた。その私の手をさえぎったもの、それが絶叫の原因であったのか。化粧板で隠れているが、彼女の髪すれすれに、ズラリと十本近い釘の先端が、一列に並んで突き出ていたのであった。マントルピースの台に打った長い釘の先が、こんな処で、伏兵になっていようとは、私も気付かなかった。その一本が、頭に突き刺さったに違いなかった。両足を引張って全身を少しずらせて練瓦づくりの壁面に凭せかけ、安定させるとカメラに走る。頭

の痛さも被虐に通じるのか、有里子は次第に表情を戻していった。(I)

更にもう一本のビールを半分近くもあけるまで、有里子は神妙に身じろぎもせず、私の眼前でじっとそのポーズをとり続けていた。うっすらと血がにじみ出し、炉底を濡らし始めていた。ホテル備え付けのティッシュも、もう残ってはいない。私は、机上の有里子のハンドバッグを無断で開く。折りたたんだ、一束のちり紙の数枚をとると近づいてそこを拭う。そして腿から臀部の方へとふきとると頭を釘先で突き刺さぬよう、じわじわとそこから彼女をとり出した。触れた双丘は吃驚するほど冷たくなっている。

黙々と縄をとくと、有里子はしきりに髪の間へ手をやって突きささった個所をなでていた。べっとり唾液を一杯に吸ったティッシュが、桃色の塊となって吐き出された。唇がうすく血に染んでいる。とけそうになったティッシュを台面上におき、

「バスで洗ってやろうか、

縛ったままで」

そういうと、

「どちらでも……それより口の中がヘンに生ぐさくて、いやだわ」

と眉をしかめて、唾を吐き出そうにした。

一本の縄を濡らす覚悟で、首縄から菱形に二の腕にかけ、両手を後に縛って腰で結ぶ。縛った姿で階段を一人で降りて行く。うしろからトイレに捨てるべく紙塊を片手の掌一杯にのせ、タオルを右手に握って、彼女のあとを追っていった。

バスの入口で、彼女は縛られた姿で私を待っていた。このポーズをカメラに納めていな



いと気がつき、再びかけ上ってカメラを握ると駆け降りて、彼女を階段の踊り場に坐らせて一発、二発ストロボを光らせる。(J)

湯は既にぬるかった。カラン一杯に熱湯の栓をひねって彼女も私もザブザブと数杯、湯をかぶる。しゃがもうともせず、彼女はじつと私のなすが俚に立ちつくしていた。

汚れたその辺りに数杯、湯をかけ私はゴシゴシ洗ってやる。その行為だけで、微かな悦楽に似た溜息が洩れた。既に一度失神し、それからというものの、潑刺とした態度はすっかり影を潜めてしまい、まるで魂の抜けた人形のように、何をされても易々として、唯もう私のなすが俚になっている彼女であった。被虐の中にドッポリとつかりきってしまった、喋ることすら物憂げに、うるんだ瞳には、只管に被虐の悦楽のみを追求しようとする、すべてを投げ出した、若い女の赤裸々な姿のみが、そこにあった。それはSMのプレイという麻薬に酔い痴れて、みずから耽溺し、悦虐の快楽を呼ぶ深い淵へ沈んでゆこうとする、失神寸前の、女の性を剥き出しにした姿に外ならなかった。

抱きかかえるようにして、狭い浴槽に二人でつかると、大量の湯が、ザザッと激しく溢

れ、湯桶がプカプカと浮いて漂った。冷水のカランをひねり、口で水を受けさせると、彼女は、むせるようにして、幾度もそれを湯船すれすれに外へ吐き出した。こうして二人で湯につかっている間にも、この湯の中に、何千分の一かの血液が混っていったかも知れなかった。抱きしめてそっとすべらせてゆく私の手の感触だけで、有里子は喘いでいた。手を離して、その喘ぐ唇を合わせて片手でつまみ上げ、一方の手で鼻をつまんで鼻孔を圧すると、悶えて、ぐぐぐとはげしいケイレンが電流のように裸身をつらぬいて、じかに触れる私の体を震わせていった。

「どうだ、辻村隆のドレイになるか？」

「なる」

一言、ハアと大きく喘いで、こだまのように答えがcaえる。

「もっと虐めてほしいか？」

「いじめて、もっと、もっと……」

反射的に答えるその声は切なげに、すすり泣くようにかすれていた。被虐の絶頂に身を委ねようとして、その都度、はぐらかされるカメラを伴うSMのプレイに、じれにじれているように、私には思えた。今、川口有里子は、思い切り燃えようとしているのだ。U氏によって、培われたM性のみではなく、彼女自身、いつしか無意識のうちに被虐の極致を求めている自分の姿をそこに見出したに違いなかった。早くから胚胎し、



K

U氏によって、開花したMの想念が、私という人間を知って、この刹那にすべてを燃焼しつくそうとしているのだ。ゆぶねから引摺り出すようにして、タイルの上に坐らせると、彼女の全身に泡を立て始める。ぬれそびれた縄は、一入強く裸身にひしと喰い込んで、泡に白くかくれていっ

た。

シャボンにまみれた彼女をうつぶせにする
と、腰をかかえて膝を立てさせる。

ぬめつく手で、盛り上った双丘の泡立った
あたりを、平手で力任せに叩きつける。バシ
ツと泡がとびちって細かいシャボン玉が二つ
三つふわっと浮き上る。尚もバシリバシリと
激しく打ちつづける。ガクリと膝をすべらせ
女体はタイルに長く伸び、ヒイヒイとすすり
泣く声が、急に高まりのけぞったと見るや、
肩の力がスツと落ちて、彼女は首を落してペ
タリと頬をタイルにつけて、歎歎はハタと止
まった。再び襲った失神を、私はまざまざと
眼前に見た。私の掌はかなりの平手打でしび
れていた。濡れたタオルをゆるく絞って、バ
シリと臀部をうったが、反応はない。ぐった
りとした尻、微かなあえぎが、肩を震わせて
いた。水を汲むと、二杯、三杯、裸身にそそ
ぐ。泡が流れて、桃色に染った肌がうごめき
始め、大きな吐息が洩れた。かたく締った縄
をようやくにして解く。悦虐による失神の実
体をまのあたりに見て、私の情念は音を立て
てゆらいだ。均衡が崩れて、ハントを逸脱し
たプレイの真髄へ私は今、没入しようとして
いた。

× × ×

もうかなり長く、再度失神した川口有里子
はダブルベッドで眠るかのように横たわって
いる。その臀部に、肩に、私の齒型が深々と
紫痕を残している筈であった。

彼女のエクスタシーは、余りにも早く、飽
気なく押し寄せ、そして引潮の如く退いてい
った。触れなば落ちん状態であったのが、幸
か不幸か、私を冷静に逸早く戻らせたのであ
る。その余烬がメラメラと再び私の嗜虐の想
念に火をつけ、はかしきれなかった情慾が渦
を巻いていた。こうなったら、徹底的にやっ
てやろう。もう、一度も二度も失神させてや
って、あの女体がボロボロになるまでしゃぶ
りつくしてやろう——。そんな血走った心が
ひたぶるに私を、はやり立たせた。

「どう、起きないか」

ベッドのそばで声をかける。物懶げに瞼を
開き、私を凝視した有里子は、

「すごく疲れたわ。もう少し寝かせて……お
願い」

と、くると背を向ける。独りで楽しんで
いやがる。そんな気にとらわれて、ふと不気
嫌になると、

「じゃあ、いいよ。ゆっくり寝ていたらいい

よ。私は先に帰るからね」

と、そそくさと片付け始めた。思えば、相
手の女心など構わない一方的な思いやりのな
い態度であったのだが、もう既に延々四時間
近くになるホテルでの滞在が、かなり私の心
を焦立たせもしていたのだった。ベッドに横
たわる彼女をソファに凭れて傍観しながら三
十分近くも心の鎮まるのを待っていた私でも
あったからであった。私の言葉に、ピョコン
と彼女はバネ仕掛けのように起き上った。

「怒ったの、御免ね——我尽いて」

「いや、いいんだ。疲れているんだろう」

「怒っちゃいや。もっといじめて、でないと
わたし……」

裸身を擦りよせ、浴衣の私の首ったまに縋
りついて頬をよせてくる。ジーンとくる、い
じらしい言動であった。

「辻村さんの考えてること、何だっていい。

やって頂戴。ね、ね、お願い」

こうまで云われると、私も引っ込みがつか
なくなる。照れた笑いを浮かべて川口有里子
のつめたい体をぐいと抱きしめると頬ずりし
て、囁やくようにいった。それは欺瞞めいた
甘いプレイボーイ式の言葉であったかも知れ
ない。

「本当は私だって疲れているんだよ。でもこの僕じゃ、何だか帰れそうにもない気持なんだ。分るだろ？」

「分るわ。私一人いい気になって、辻村さんにちっとも満足させていないんですもの。ベッドで縛って……好きなようにしていいわ」

「いや、もうその気持はない。何かあんたに無茶苦茶してみたいんだ。歓喜の声をきくより、苦悶の絶叫をききたい、そんな思いなんだよ。あんたは、強く虐め始めたら、すぐ失神してしまう。そして自分ひとりでエクスタシーの世界へ入っていつてしまう。今迄にやったようなプレイ程度なら、過去のハントの



女性是谁も失神などしない。苦悶と疼痛に呻き喚く。ヒイヒイ叫んでいる。それだけに私は、やり切れない思いなんだ。判っきりいつて、余りにも簡単に失神してしまうだろ。それが物足りないのかも知れない」

彼女は私の胸に顔を埋めて、迷懷をきいていた。そっと眼を私に向けると、羞じらいを浮かべて、

「私ってダメね。どうしてかしら……我慢出来ないタチなのね。本当はもっともっと虐めて欲しいと思っているのよ。そのくせ、心の方が先走って、ああ、今すぐく虐められてるんだなあと考えただけで、もうクラクラッとして、何が何だか分からなくなってしまふの」

「そうさ、被虐の観念の先走りなんだよ。謂わば一種の精神的な、オナニーなんだね。オナニーって知ってるだろ、意味？」

「自分で愉しむことでしょ」

「経験ある？」

「そんなこと聞かれたっていえやしないわ。でも辻村

さんから電話あった夜、どんなに強く縛られて虐められるのだろうと、あれやこれや想像していたら、スーッと気の遠くなる思いになって、声を出していた。いやッ、こんなこといわせて、恥ずかしい……」

「じゃあ、これを最後に、ひとつ本式の強烈な縛りをしてやろう。その縛った姿で、階段へ逆さに転がしてやる」

言い終ると、私は早くも仕舞いかけた縄をとり上げていた。後頭部で両足を組ませると短いダンダラ縄で、堅く縛った。別の縄で、胸から腹、そして腰へと、しめつけるようにし乍ら掛け廻してゆき、汚れるのを承知で深々と股に喰い込ませると、両手を縛った縄の余りと股縄を背で縛り合わせる。更にその上から太い縄を肘から腕にかけて引きしぼり、細縄を通して左脚首まで巻きつけていった。プツンと乳房が突き出し股縄は陥没して喰い込んでいた。(K・L)。かなり強烈な縛りに、既に有里子の眼はうるみ、息づかいは激しくなりつつあった。

「失神しちゃ駄目だぞ」

パンパンと頬に平手打ちをくわせると、ハッと思をのんで、瞳を伏せる。激しく叱咤しないと、この娘はすぐにも又失神状態に入り

そうであった。

階段に通じる扉を開くと、よろめく女体をささえるようにして数歩あるかせ、そっと坐らせる。右脚首に巻いて止めた太縄の端を、しっかり階段の手摺りの枠に縛りつける。左脚はその尽だ。今、私は一本の脚首のみで、彼女の全裸の体を階段へ吊り下げようと、必死の力を振りしぼっていた。うつろな眼で、有里子はこれから起こる事態を恐怖の色もなく、ただ私のなすがままに見守っていた。階段を二段ばかり降りて、背後から体を抱きかかえると、あとは一気呵成にのけぞらせて、ズルズルと頭を下にして階段に垂らした。上から下から、私のカメラは、この情景をさまざまにとらえる。

「く、くるしい、背中が痛いッ」

叫んでいる間は失神していない。有里子は片足吊りのこの逆さの体を、足首一本で支えて、激しく苦悶の声をほとばしらせていた。

カメラをそそくさと置くと、私は、ローソクに点火し、階段の上部に立って、さんさんと蠟滴を雨とそそぎかけた。乳房に腹にそして、開ききったあたりへ、蠟涙は一条の熱い糸となって落下していった。

絶叫がハタととまったとき、私は三度失神

した、川口有里子の、悦虐の陶醉に没入しきった、Mの極限の凄烈なポーズに、喰い入るように入入った。蠟涙をこぼす手をとめ、嗜虐に酔った様に立ちつくしていた。

満身に力を籠めてやっとの事で抱き起こし階上に寝転ばせた時には、私の気力はもう精一杯費い果して、息もたえだえに疲労しきっていた。川口有里子の失神は未ださめない。二の腕から手首にかけて、既に肌は紫色に交っていた。最後の気力をふりしぼって、やっとなと解き終った時、思わずヘタヘタとその場に倒れ、私は有里子と並んで、階段の上り口で伸びていた。

三度に亘る失神状態で、流石に疲労困憊したのか、彼女の眼に、うす黒いくまがうつすらと浮かんでいた。

やおら、よろめいて立上った私は、もはやポリウムのある彼女の体を抱える気力もなく、両脚を握ってズルズルと部屋の中へ引きずり込んでいた。

平手打ちでやっとなと我に還った彼女は、のうのうと手をのばすと、私の顔を両手で挟み込んだ。ジュータンの床に長く伸びた女体に、吸い込まれるように、引きつけられた私の体が重なっていた。

× × ×

長い長いホテルの時間が過ぎて、今、私達は、暮れなずむ浜添いの国道を、一路大阪へと引返していた。精も魂も費い果したという放心の表情が、有里子の顔をうつろにしていた。恐らく私とても、それに似た顔付に違いなかったであろう。ものを言うことすら、うとましい様な空白の雰囲気、狭い車内に立ち籠めている。

「今頃になって、腰骨がすごく痛いわ。階段の角が当たったのかしらネ。あーあ、疲れた」
独り言を言うようにして、軽く欠伸を噛み殺すと、

「辻村さん、黄昏刻だから、しっかり運転してね」

と、いとも現実的なことを言った。

「プレイも、もう懲りただろう」

正面を向き乍ら、声をかけると、

「そうね。でもやはり、プレイ、プラス、セックスの方が最高だと思うわ。その点、辻村さんは矢張り紳士的なのね」

「とんでもない、紳士だなんて。いつも淫獣なんだけど、その気でいても、いざとなればダメだっていうだけのことさ。トシのせいかも知れないがね」

「あらッ、部長さんもいい年よ。でもいろいろと満足させてくれるわ」

「となると、私より部長の方が一枚上だよ」

「かも知れないわ。でもいい経験したわ」

「いい経験ネ」

この娘は、今日のプレイを、いい経験といひ切っている。この割り切った観念はどこから生れるのだろうか。時代のギャップを私はひしひしと感じた。それでいて、この娘は、ヌケヌケと若い男と恋愛し、結婚してゆくかも知れない。これが現代のオフィスレディの

すべての実体だとは思いたくなかった。しかし、大都会の谷間に息づく、若い世代の女性の中に、川口有里子のような被虐を求める女性がいけないとは、これは誰も断言できないことであった。

にうつろな佗しい秋の風がよぎり、体の中をむなしさが吹き抜けて行く思いにかられた。それは何も、川口有里子という、二十一才で被虐に埋没した女性の出現のせいではなかった。丸四年間、飽きもせず殆んどかかすことなく続けてきた、カメラ・ハントに対する重荷が、フト私をそんな心にかり立てたのかも知れなかった。

流れの停滞が続くネオンの街。車の浪に揉まれてノロノロと、私はキタを目指して走っていた。

七つボタンは桜にイカリ……

服装プレイを望む

無田口一郎

「服に気をつかう奴にロクな奴は居ない」なんてよく昔の人は言った。ある意味では、私もそう思う。だがしかし、服装に気をつかう者が全てロクな者でないとは断言出来ないだろう。

り、服装（服の形、及び時代と服装）によって、人間の気持がどのように変化していくかという問題についてである。

○

「服装は、その人を知らしめ、服装はその人の心を表わす。」ある古人が言ったそう。

服装というのは、なかなかハバの広い用語で、下着も服ならズボンも服の部に入る。

ここで私がいいたいのは下着に関してであ

昔（日本の場合）武士は切腹時には白装束で臨んだと聞く。これは正に服装によって自からの決意を示すと共に、自己の精神に決意のゆるがぬことを示した好例だろう。

又こうしたものもある。

若い血潮の予科練の

精神的にまだ発育途上にある少年達に、祖国のためとして死を覚悟させたのは、民族主義でもなければ、軍人精神などでもなく七つボタンの海軍服で有り、真ッ白な訓練服だったといえると思う。この一見暴論に思える私の論だが、諸氏の中でかつて軍隊に関係していた人があったら思い出してもらいたい。私の論が、決して暴論でないことが理解していただろう。

ここには二つの例しか示し難いのだが、人間の精神は、時として服装に左右（又は服装に感じいるとでもいった方がいいかも知れない）されるものであり、服装によって、人はある決意を強制させられるともいえよう。

○

——服装の歴史は、言語の歴史や、社交の礼儀作法の歴史とまるで同じ移り変わりを示している。——中略——服装は時代によって変化する。ある時代では、首から足の先まで僧衣で包むことが、すべての女に対する風紀の義務となり、——中略——時代は生きた姿を思い切り大胆に見せるために、コルセットやスカートまですてさせた。——（光文社版、「風俗の歴史1」、副題（ルネサンスの肉体観）エドアルト・フックス著——安田徳太郎訳）

ドイツが生んだ風俗研究家フックスが著書の一部分で服装についてこうのべている。人は服装や色によって、自己の気持を相手方に伝えるものなのだ。しかし服装道徳（このようなものが存在するかどうか知らないが）は時代と共に変化するし、又、人の手によって意識的に変化していくものなのだ。

今、私の手元に十ページばかりの下着のカタログ（おもに女性用。男子用もあるにはある）がある。それを見ることにしよう。

フリルオーバービキニニ透明ナイロン局部

穴あきフリル付（女性パンティ）

ゴムセパレーツII柔肌のタッチブラ、ビキ

ニ（生ゴム製。ブラジャー、及びビキニ・パンティ）

エキサイトスリッパIIナイロントリコット

生地。バスト・ウェスト段しぼりのセクシャルスリッパ（スリッパ）

まだ他にもあるが、大同小異なのでこれぐらいいしておく。ここに紹介した下着は、下着という実用性よりも、宣伝文からも察せられるように、全然別の目的のものである。

文字というものが、読む人間に無限の世界をあたえてくれるように、服装も、その目的によって変化させれば、人の本質をも変化させる力をもっているものなのだ。

私なども十四、五の頃、相撲だとか野球に夢中になったものだが、マワシ（フンドシ）を腰にするとき、非常に気を使ったものだ。

私自身のスタイルを生かすためにどの辺りにマワシをつければスタイルが生きるか、又どの辺りにまけば相手にマワシを取られずに済むか、いろいろ考えたものである。野球のユニホームとて同じである。ズボンの高さ、上衣の胸まわり、これらは服装によって、又は下着によって自己をいかに生かすか、又精神的に、自己の心境をいかにひとつの目的に集中さし得るか、という問題に解答をあたえてくれるものなのである。

——服装は、装飾的な形の目的を別として、主として肉体のエロチックな刺激作用をつよめるのに役立つという理由からも、やはりエロチックな問題である。——中略——男女の求愛に役立つし、女にとってはいちばん大切

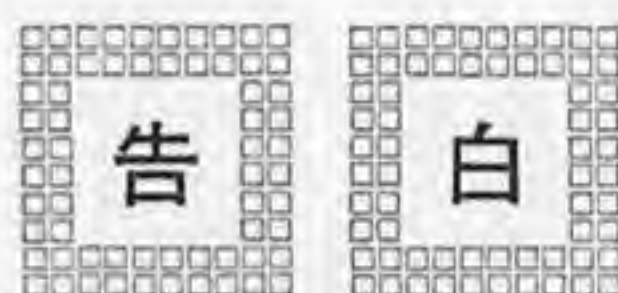
な求愛の手段でもあるのだ。——中略——エロチックなあらゆる美しさ、つまり乳房や尻の大きさ腰のふくらみ、腿の美しい曲線をはっきり目立たせる。——中略——尻を大きくするため、枕スカートが現われた。女達はそのときには重さ二十五ポンドにもたつする幅のひろい枕、俗にいう「シユペック（脂身）」をまきつけて、——中略——乳房の見せびらかしは、コルセットによっておこなわれ、それで十分でないときは、コルセットの代りにつめ綿を、用いた。（ルネサンス時代）——（風俗の歴史より）

つまり服装によるプレイも可能だし、大きな役割を果すだろうから利用したいということだ。S（サド）もM（マゾ）もそしてその他のセックスマニアも、つまるところ、理性と呼ぶ得体の知れぬものから発せられる羞恥心が、服装を大胆にもし、憶病にもするのだと思う。

つまり、結論はこうなのである。

「時と場所によって服装を（あるいは下着）変化させ得る人は、常に幸せであり、充実した人生を送ることが出来る」

直情的なSMなどは、いつしかアキがくるものだ。しかし服装に変化もたせたSMプレイは長生きをするし、真のマニアといえるのではなからうか。



幻想の墓碑銘

— 或いは母性憧憬の軌跡 —

武内 隆

私がこの世に生を享けてから、はや二十年

余の歳月が過ぎ去った。後を振り返るには余りに若い私ではあるが、今の私を存在の内奥から動かしている暗い衝動の根源について考える時、私の想念が現在を離れて、遠く過去の世界へと遡るのを禁じることが出来ない。そうした時、私の過去は時間の洗浄を受けて臃な影として私の脳裡に蘇って来、殆んどそれは幻想であるかのような印象をもたらす。甘美な、又神秘的でさえある過去は、それ故に幻想として時間の流れに溶解してしまうかも知れない。二十才になった今、社会的責任を持った存在として確固たる歩みを始めるために、それらの幻想群に出来れば一つの明確な意味付けを行ないたいという衝動を私は押さえることが出来ない。私は出来る限り正確に私の過去を、特にその幼児期の記憶を辿っ

てみたいと思う。

私の過去は、特に数奇なものではないし、読者には退屈を与える結果になるかも知れない。しかし、私はそういった危惧を敢えて踏み越えて書きたいし、私の生が如何に卑小であらうとも、そこに一つの真実を、又、ただどしくも生きてきた者の姿を認めて貰えれば、私にとってこれに過ぎることはないのである。

＊

私は京都府の北端にあるM市で生まれた。そして、そこで、小学校三年までを過ごしたが、この間の生活を私は一種の寂寞感なしに思い出すことは出来ない。そこに於て既に私の精神（こう呼べるとすれば）は、果てしなく揺曳し彷徨を開始していた。というのは、私は三才の時に、母親を失ったのである。私

が三つの時、父と母は離別し、私は父の方に引き取られ、そして父の伯父に当る七十才の老人の許に預けられた。父は、京都で仕事をし、年に一度二度程訪ねて来、又私が学校に行くようになってからは、夏休み毎に私が京都へ行くという習慣になっていた。老人夫婦は非常に仲が悪く、二人は家計を別々にしていた。こんな訳で私の幼児期の家庭環境は余り芳しいものではなかったと云える。そうした境遇にあって私は、常に何かを求めている子供であった。今から思えば、それは今日に至る母性憧憬の前奏曲であったと云えよう。私は、自分の倒錯した性衝動の萌芽をその頃、つまり保育所に通っていた頃から小学校に行き始めた頃にかけて、見出すのである。その萌芽を具体的に云えば、記憶にある限りでは次の三つの体験の中に認められる。

その一つは、薄暗く締め切った一室で私は蒲団を下にして横になっている。ズボンは膝の下までずり下げられ下腹部が剥き出しにされている。私の手は時々そこに伸び、半ば恍惚となって、体の奥深くからの不可思議な快感に身を委ねている。私の幼い頭脳は臍氣ながら、そうした自分の姿態を誰かに見て欲しいと念じ、又、誰かに見られているのだと自分に云い聞かせていた。そうすることによって、より強烈な快感を惹き起こそうとして。

二つ目のものは、私が全裸でベッド（老人の妻は助産婦をしていて、自宅の診察室にはベッドがあった）から半身を乗り出し、仰向けに寝ているというものである。その際の手は必ずダランと垂れ下がっていなければならなかった。つまり、私は自分の死んだ姿を想定し、死んだ振りをしていたのである。そうすることによって、云い知れぬ恍惚を感じていた。その場合にも、他者の目の想定は不可欠の要素であった。

以上挙げた二つの体験に比して、次に挙げる三つ目の体験に於て、私の倒錯衝動はより完全な形を取っていると云える。

その頃、近所の遊び仲間の間には、戦争ごっこが流行っていた。それは二組に分かれて夫々に陣地を持ち、互いに攻め合って陣地を奪い合うというもので、陣地となった木や電信柱には、捕虜になった者が縄で縛りつけら

れるのである。もう読者にはお分りだと思いが、私はその捕虜となって木に縛りつけられたいという、止み難い衝動を感じていた。しかし、私は虚弱な子供だったので、大抵はその遊びには加わらず、又加わっても敵と渡り合うのがこわかったし、木に縛られること自体にも、羞恥と恐怖のようなものを抱いて逃げ廻ってばかりいたので、一度も縛られることはなかった。そして仲間が木に縛られて恥ずかしげな様子をしているのを見ては、切ないほどの衝動を感じていた。又、田舎町のことで子供達も粗野なものが多く、縛られた子供のズボンをずり下ろし、下半身を剥き出しにして喜ぶものもいたので、私にとって縛られたという衝動は益々止み難いものであった。

この体験につけて、思い出すのは、小学校五、六年の頃に学校の図書館で、人目を避けるようにして見入っていた一枚の画である。

西洋美術全集の内の一冊に収載されていたその画というのは、云うまでもなく一般に倒錯者を等しく魅了するといわれる「聖セバスチヤンの殉教」図である。作者が誰であったかは記憶に明らかではないが、下腹部にほんの僅かの布をまとっただけの半裸の姿で、両手を頭上に組み合わされて縛られ、その首筋と脇下と横腹に合計三本の矢を射られて晒されている、美女とも見紛うセバスチヤンの姿態

を、羞恥と恍惚で私は何度となく時を忘れて見入っていたものである。その画には、宗教的法悦が殆んど性的陶醉と同じ次元で表現されており、私にとってこれ以上にエロティックな感銘を与えるものはなかったのである。

私が後年、この画の与える感銘が、被虐的倒錯者に、共通したものであることを知ったのは、三島由紀夫氏の著作になる「仮面の告白」の中の一場面からである。この作品の主人公の体験が、戦争ごっこをして死んだ真似をするところや、演戯癖や豪奢な女性の着物に対する執着等、私の性向と共通していることは私にとって非常に興味深い。この点で三島氏の作品から、三島氏の文学的傾向乃至心情を抽出し考察することは、私自身を知る大きな手がかりにもなり、三島氏の著作は私の愛読書の一つである。

話を元に戻すが、この三つ目の体験が、私の倒錯性の本来のものを語っており、その他のものはその変形であると言えよう。一つ目のものは、露出症的傾向とマゾヒスティックな衝動を未分化の形で表わしており、二つ目のものは、被虐衝動の最終的表現である死の衝動を、願望の形で殆んど純粋に表わしている。

このような幼児体験は、結局、母の喪失から芽生えた母性憧憬の反動であると私は見ている。母を何者かの手によって強圧的に奪い

去られたという、一種の被害者的な意識（その頃の私には当然のことでもあろうが、母の不在について何らの理由も知らされてはいなかった）から、自分ではどうしようもない境遇に沈み込んでしまい、そこで歪んだ被害的性衝動が培われたものであると、私は自分なりに解釈している。その期間が小学校中期頃まで比較的長く続いたので、私の倒錯性は固定してしまい、私はその領域から脱け出すことが出来なくなってしまうのではあるまいか。以来、母性憧憬は、私の倒錯衝動の根底を流れる甘美な主調者である。

少し脇道に外れるようであるが、私の性的幻想の世界に通じるものとして、又読者との共通の場を持つ為にも、私の読書傾向について書きたい。

私は現在、大学に籍を置いて文学を学んでいるものであるが、そこでの研究対象乃至読書対象は、浪漫派文学であって、それには、所謂デカダンスの傾向を持ったものが含まれる。例えば、日本文学の領域では、その底に脈々と母性憧憬の情が流れる泉鏡花の作品であり、又少し下っては、閃くような、又流れるような透徹した抒情性を持つ川端文学である。特に川端康成の「浅草紅団」（新潮文庫所収）に書かれた当時の浅草界隈の、一種倒錯した雰囲気や珍奇な見世物小屋から流れ出る陰惨な、そして淫靡な空気は私を陶醉させ

たし、又主人公とも云うべき弓子のスラリとよく発達して美少年とも見紛うイメージは、浅草の倒錯的雰囲気と一体となって私の憧憬の対象ともなった。その他、谷崎潤一郎の初期の短編群も、その浪漫性、怪奇性、倒錯性によって私の耽読を経たものである。

少年時代から耽読していたものには、江戸川乱歩の小説がある。この作家によって私の怪奇趣味、倒錯性は育てられたと言ってもよい。少年期の私は乱歩小説によって読書の喜びを知ったのであるが、私は近年、久しく眠っていた乱歩文学に対する郷愁を、奇ク誌によって呼び醒まされたのである。

私は環境等の影響もあって、奇クの忠実な読者ではないのであるが、ひと頃、夜乃探郎氏の文章やイラストが誌上を賑わせたことがあった。（買収求めた奇クは、すぐ又売り払われる運命にあるので、私が読んだ氏の文章等が、何時頃発表されたものか判然としないのは甚だ恐縮であるが、氏が奇ク誌上に於て健在であられるなら非常に嬉しいことである）私は氏の、特に挿絵の独特なイメージによって乱歩文学への郷愁を呼び起こされ、乱歩の世界をまの当りに見るような気がして、妖しく胸が震えたものである。

さて、再び私の性遍歴について書き進めることにしよう。その後、小学校四年生になって、私は父のいる京都に移ってきた。父が再

婚したためである。私は気が弱く引込み思案だったので仲々友達も出来なかったが、一人特別に気の合う友達がいた。そして、この友人と私は、一種の暗黙の内にちよつとした倒錯的な遊びをしたことがある。それはM市での戦争ごっここの影響を引いているもので、ある雪降りの休日、私とその友人は他に行く所もなかったのだ、人気のない小学校の校庭に行き、隅にあるベンチ式のブランコに乗っていた。その内、どちらから云い出したのかは思い出せないが、互いに相手を縛る真似をし始めた。一人が加害者となってもう一人の服を剥ぐ真似をし、架空のロープをもって縛るのである。二人は互いに、お前は俺の虜だと言いつつ。私は人気のない所で二人切りで秘密の遊びをしていると感じ、下半身の痺れるような戦慄が倍加するのを覚えた。

この友人が、どのようなつもりでこの遊びをしていたのか、又この友人に自分と同じような傾向があったのかは、今となっては知る術もないが、この友人が又偶然の機会に、私の性的偏向に一大衝撃をもたらすキッカケを作ることになる。

それは確か、中学二年生の夏のことであった。それまで、私は自分のような奇妙な性癖を持っているのは自分一人だけだと、少年らしい考えを持っていた。しかし、その夏を期して、私の性的幻想の世界に他人の存在がド

カドカと入って来たのである。これは私にとって、非常なショックであった。私は自分の一種奇怪な性癖によってもたらされる快楽は自分一人が独占し得るのであって、云わばその目的に限って云えば、世界中の女は全部自分のものにできるといような錯覚を、暗々の内に持っていたのである。その顛末というのはこうである。

ある夏の日差しが強く照りつける一日、私はその友人と町を歩いていたら、と一軒の貸本屋の前を二人が通りかかった時、友人は一人の年上の中学生に呼び止められ、私と一緒に店の中に引き入れられた。その男は私の友人の知り合いらしく、友人にいいものを見せてやるからと言って机の中から大事そうに一冊のエロ本を取り出して、私達二人に見ろ、と言った。私は内心非常に好奇心を覚えたが、又一方では後めたさと羞恥心を感じて尻込みした。しかし、その中学生の権幕は、見なければ今にも殴りかねない様子だったので、私は友人と一緒にその本を覗き込んだ。始めの方は何ということもない普通のヌード写真であつたが、終りに近い、或るページを見た途端、私は全身の血が逆流するのを覚えたのである。そこには一人の全裸の女が逆エビの形に、全身をグルグル巻きに縛られ、ベッドの上に俯伏せに寝かされている写真があつた。私はその時、以前から探し求めていたそのも

のが目前に示されたことを、全身の震えと戦慄と共に了解した。そして、自分と同じ嗜好を持った人間が他にもいることを、自分が恰も侵されるかの如くに理解し、同時に女を自由に出来る男に対して非常な嫉妬を感じた。

その日以来、私の性的幻想の世界は一変した。それまでは、ただ漠然と、全裸に剥かれて縛られたいとか、磔にされて晒されたいとかいような衝動を感じるだけだったのが、成熟した女という存在が、確固とした姿を、私の幻想界にとり始め、以後、私の性的幻想は、女を緊縛し凌辱することに費されるようになった。いわば、それまで内攻していた自虐衝動が、女という外的存在に転嫁されたのである。

ここに至って私は、初めて現在の性衝動の原型を完成した形で見るのである。私は、以上の過程でお分りのように、マゾヒストでもあり又サディストでもある。しかし今では、マゾヒストである私は、サディストである私に、全くと云っていい程吸収されてしまっていると言えらる。というのは、女を責める時、私の全ての衝動は、対象となった女に感情移入することと充たされるのである。以前の私の自虐衝動は、女性化願望を潜在的に内包していたと云えるだろう。幼い頃の被害者意識が、母性憧憬を基盤にして自虐衝動を培い、性に確固として目覚めた時、自虐衝動が女性

化願望を基調として異性加虐に転化したのである。

本誌六月号で、夢野洋氏は被虐願望について同性を加虐者として語られたが、それは私の女性化願望を更に一步押し進めたもので、興味深いものである。しかし、私の被虐願望は夢野氏のものとは大きく違って、異性から虐待されることで充たされるのではない。むしろ不特定多数者から羞められることを意味するのである。私は女王様にかしずくといった屈辱的なことは好まない。それよりも非常に女性的な羞恥責めを好むのであり、それが同性からの加虐という方向に行かず、例えば磔のような、又晒し責めのような、集団からの虐待の方向に行くのである。不特定多数者といったが、複数の女性といった方がいかにも知れない。私にはホモに対する生理的な嫌悪がある。又羞恥というものは、異性の前でこそより強く意識されるものだから。

かくして私の性的幻想は、女性加虐の様々ないメージで埋められる。そして又、そのイメージは自虐のイメージと完全に重なり合っていると言えらる。例えば、私には剃毛に対する大きな執着心がある。私は完全に剃毛された女性に非常な魅力を感じる。一つの羞恥責めであり、又少女愛の変形でもあろうか。そして私の自虐衝動は、自分自身を剃ることに駆りたて、ほんの上部を残して殆んど全部を

剃ってしまったこともある。そんな姿の俣で銭湯に行くことは恥ずかしくもあり、又一人きりで夢想する時よりも、大きな快感があったが、完全に剃毛することは私には出来なかった。

その他、私の女性化願望を表わしているものに、パンティに対する執着がある。私はそれを穿いて何気なく街を歩くことに、大きな愉悦を感じる。又、女性のパンティを穿かせられた姿で縛られ、羞しめられたと思う。そのパンティは、フリルや刺繍の入ったビキニパンティのようなものではなくて、純白の綿のパンティでなければならぬ。私は綿のパンティの持つ、ふっくらとした温かみに、こよなく女性的なものをを感じる。そのパンティが、つい今さっきまで女性の下腹部を覆っていたもので、女の肌の温りや、あの鼻に纏いつくような匂いの残っているものであれば云うことはない。女性のパンティに対する執着は私に於てはパンティフェティシズムを表わしていると同時に、女の匂いに対する一種のフェティシズムを表現している。私は女の穿いたパンティの匂いを嗅ぐだけで酔い痴れてしまう。しかし、使用後のものと云ってもメンスや排泄物などで汚くよごされたものではなく、ほんのりとした匂いを留めているものを好むのである。

私は一年程前、若松孝二の「胎児が密猟す

る時」という映画を観たが、女主人公の穿いていた何の飾りもついていない白のビキニパンティのイメージが、暫くは私を悩ましたものである。私は純粋に尿と粘液の匂いだけ嗅げるものなら、私の顔を女性の座蒲団代りにしてみたいとも思う。

又、私は性転換手術を無理矢理、受けさせて完全な女にされ、そして羞しめを受けたいと夢想することがある。ここには私の女性化願望が生のままに在る。去勢されること自体にも、被虐的な衝動をそえられるのであるが、こうした夢想が、私にとって窮極的な願望を表わしている。完全な女性となって、完全に自由を剥奪された一個の女奴隷の如く様々な拷問を受ける、ということを考えてだけで、私の体は、被虐の喜びに沸き立ってしまう。

剃毛の他に、私の自虐体験には空気浣腸がある。私は、女性の腹部のふくよかな曲線と感触に限りない愛着を感じるものであって、その柔らかいふくらみを強制的に何かによってより大きくすることに、嗜虐的な快感を感じる。パンパンに腹部を脹ませられて身動きも出来なくなった女への嗜好は、そのまま私の妊婦への嗜好に通じるものである。グロテスクなまでに脹らんだ腹部と、真黒になって堅くしこった乳首は、自然のなせる最大のサディズムである。私はそのように極端な女性の

動物的姿態をこよなく好む。このような私の嗜好を満足させるべく、私は空気入れを使つて、自分の腹部に空気を注入したのである。自転車の空気入れの先をそのまま使う訳にはいかず、たまたまあったラジオ部品であるビニールチューブを使用することで、その難は解決された。空気を入れるごとに、私の腹部には重い圧迫感が強まり、下腹は段々と膨脹していった。そして、遂にパンパンに張り切った腹部は美しい弧を描き、私はそれを恍惚となつて撫で廻したのである。

さて、これまで私は自分の倒錯性を自虐体験として、又性的幻想として語ってきたが、現実的に女性を緊縛したことはというと、一度だけであるが経験している。その女性は私の恋人であったが、全くのノーマルな女性だったので、縛り終えた時には涙を目に浮かべてさえた。縛るだけという約束だったので、私は徹底的な緊縛を思い立った。先ず両手を後手に縛り、その縄で続いて乳房を強調して胸部を締めつけた。続いて腰をくびれるほどに締めつけ、最後に両足裏を向い合わせて折り曲げ、足首と大腿部を一緒にして縛った。生まれて初めての女体緊縛だったので、その間中、私の体は小刻みに震え、全身に油汗が流れた。私の頭は充血した血によってガンガンと鳴っていた。フラフラする体で私は女体に近づいた。一瞬、私は頭がクラクラするの

を覚えた。完全に女体は固定されていた。そして、全く無防備なその姿は無機的な機械のような印象を与えた。微動だにしない物質と化したとさえ思える緊縛女体を前にして、私は今にも昏倒しそうな体を危く支えていた。しかし、彼女の表情に目を向けると、それまで私の体を熱く燃え上がらせていた嗜虐の

感情が萎んでいくのを感じたのである。彼女は頑くなに目を閉じており、徹底して無言であり、その表情は嫌悪の外、何ものも表わしてはいなかった。私は機先を制せられたような気がし、又彼女に対する思いやりも作用して、醒めた気持ちになっていった。本来のサディズムに思いやりのある筈はないので、彼女

〔実話〕と〔体験〕懸賞原稿募集

▽題名と内容▽

- 一、私はこのような変わった体験をした。
- 一、私はこのような、不思議なことを見聞した。或は自分で経験した。
- 一、私はこのような奇妙な探訪をした。
- 一、私はこんな珍奇な研究をしている。
- 一、私はこのような怪奇な経験をした。
- 一、私は人間の靈魂の存在を信じている。
- 一、妖怪変化が私を苦しめている。
- 一、私の見聞した怪奇談或は珍妙な実話。
- 一、私はこんな犯罪を犯した。
- 一、私はこのような変った蒐集をしている。
- 一、私の趣向は、こんなに変わっている。

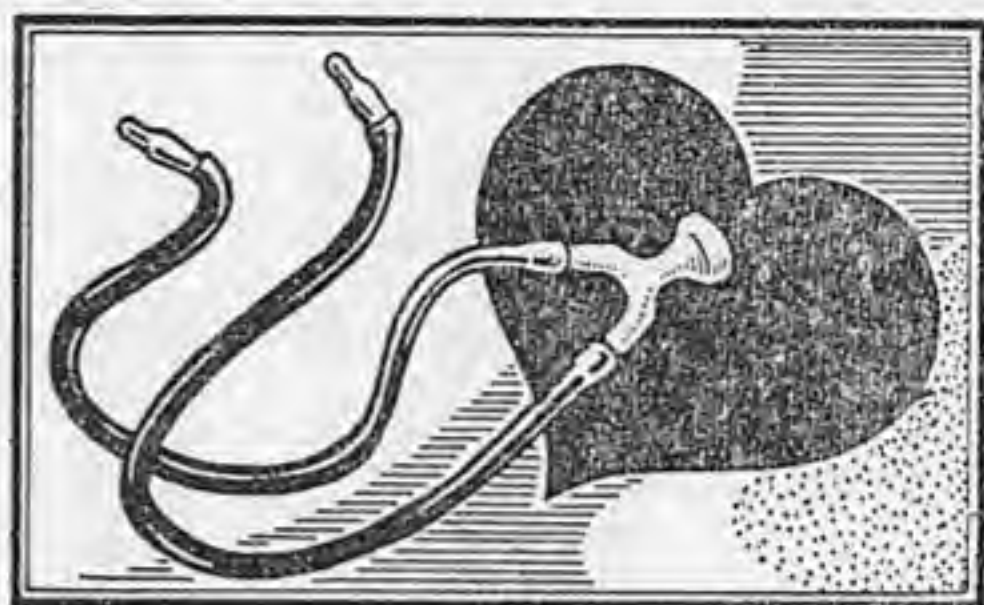
▽規定と賞金△

- 一、右に掲げたような△題名と内容▽の原稿を書いてみようと思われる方は、原稿用紙三十枚乃至百枚ぐらいの範囲内でまとめて投稿下されるようお願いいたします。

- 一、写真或は絵画などの資料がありましたら原稿に添付下されれば幸いです。若し原稿を書くことが不得手の際は、素材、資料の提供にても結構ですから、その旨御連絡下さい。
- 一、本規定により応募下さった投稿者の方々全部の方に対して、採否に拘らず編集部作成の女体緊縛フォト（或はMフォト）を折返えし贈呈いたします。贈呈枚数は原稿の枚数に応じて加減いたします。
- 一、誌上に掲載しました原稿につきましては一篇につき五千円以上三万円までの賞金を掲載と同時に贈呈いたします。資料のみ提供の場合も以上に準じて賞金を呈します。
- 一、締切りは毎月十五日。応募作品には、必ず△実話と体験▽懸賞応募と附記又は添記して下さい。原則として『応募原稿』の返却の求めには応じかねます。景品或は賞金を贈呈する関係上、連絡先は必ず明記下さるようお願いいたします。

との間にSMプレイは、不可能であるとその時、感じたのである。又、本来のサディズムは対象の肉体の物質化、即ち殺人という所まで行くものである、という前提に立ては、我々の行なう如何なる情況に於ける如何なるプレイであっても、結局、空虚な絵空事ではない、ということになる。その点、私は、本誌六月号掲載の田中八郎氏の意見に同感である。サディストとマゾヒストの一对によって表わされる式は、絶対者を押し戴いた宗教的儀式的執行者としてのサディストと、その宗教的儀式的のために奉げられた生贄としてのマゾヒストという図式を表象しており、およそ個々としての男女間に於ける愛情等の問題とは、相容れないものである。宗教的儀式に於て、愛、即ち連続性が出現するのは生贄の死を契機にしているとは、フランスの哲学者であり、文学者であり、エロティシズム研究者であるG・バタイユが述べていることであるが、サディズムの本質をそう規定した時、夫婦プレイなどというものは、なれ合いの似而非サディズムでしかないのである。

ここまで書き進めてきた私は、これからどのように私の湧きあがる嗜虐の衝動を発散させていけばいいのか。私は道端で快楽を拾って来る訳にはいかない。私はそれを奇巧誌の幻想や告白の世界に、又広く文学の世界に求める外はないのだろう。



|| S・C・R 〓性問題相談室〓 回答欄 ||

「性衝動過敏症」について

医学博士 弓 削 達 人

〓質問要旨〓 (27才、男性、独身、会社員)

私は、ホモ、マゾ、しかも露出症という、二重、三重の変態者です。でも今回相談したいのはそのことでなく、もう一つ困ったことがあるのです。前者のは自分の意志で他人には隠せますが、このことは隠せないのです。それは寝ていて自分で知らない間にオナニーをするというくせです。高校の時、寝ていてパツと目がさめた時、盛んにオナニーをしていて、しかも目がさめたらすぐに射精してました。

それから四年程前、A市の友人A君の家に遊びに行ったとき、友人の部屋で寝ました。

その部屋はAと、B市の人Bさんと二人で借りているのです。

夜明けの六時頃目がさめました。まだ早いで目をつむっていると、友人Aと同室のBさんが小声で話をしていました。僕が夜中にオナニーをやっていた。とてもすごかったが知っていたかと、BさんがAにきいているのです。僕はその時は全然知りませんでした。

その後、会社に就職して、当宿があります(当宿は二人でやります)が、僕が当宿の時はオナニーをするといううわさが会社にあるのです。僕は全然知らないので、恐しくて仕

方がありません。

僕の下宿で一人で寝るとき、きちんとパンティーやステテコをはいて寝ても、朝起きてみると、全部脱いで全裸で寝ていたりすることもありますので、やはり夜中に、眠っているいろいろなするのだと思います。

以前から、その目的でなくても、何となくラジオを聞きながらでもペニスをいじったりしていましたので、くせがついてしまったのだと思います。寝ていて知らない間に、いろいろするのは恐ろしいので、二カ月位前、ある精神病院に行き、相談しましたが、寝ている間にオナニーすることはちょ

って考えられないけれど、人が話しているのを何でもかでも、その事に結びつけて考えるのじゃないかなと言いながらそれ以上は聞いてくれずに、薬だけは呉れました。僕のことをわかってくれません。

露出症ではあっても、会社の人などに知られるのはまずいですし、いやです。僕のペニスは大きく、特に亀頭部は非常に大きく、亀頭部だけで、4・8センチあります。亀頭部は性感の強い所だそうですが、その関係で精力が強く、そんなことをするんでしょうか。（毎日オナニーはやっています）どうしたらよくなるでしょうか。

○

「伝言板」○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則として取り扱いは致しておりません故御了承下さい。

○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。

○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下されば、電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

△回答▽

夜間、就寝中、知らぬ間にオナニーしてしまうとは困ったことですね。殊に会社で二人組みの宿直があるというのでは、大人の夜尿と同じに、或いはそれ以上にお困りのことと思います。

ところで、この症例について考えるときにあなたのいう、ホモ、マゾ、露出症というものがどういうものであるか全然わからないので、ちょっと回答に困るわけです。しかしあなたの場合、実は、そういったことを分析し解釈する前に、もっと外の面から考えてみる必要があるように思われます。

それを順を追って書いて行き、最後に一つの指示を致します。

(1) 某精神病院に行つて「眠っている間にオナニーすることはちょっと考えられない」といわれたことのことですが、これは決して、無責任な回答ではないと思います。それは確かに「ちょっと考えられない」ことだからです。しかし全然ないことではなく、現にあなたがこのように訴えておられるのですから、それについて、考えなければならぬわけですね。

(2) またその病院で「人が話しをしているこ

とを何でもかでも、そのことに結びつけて考えるのじゃないかな」といわれたことも、もっともだと思います。私も一応はそうように考えるでしょう。というのは、次のようなことがあるからです。

(3) 即ち、ある種の精神障害にかかる——殊に精神分裂病の場合に——自分の周囲に起ることを、すべて自分の気にしていることに結びつけて——即ち関係づけて思いこんでしまふのです。たとえば分裂病の初期の患者では「自分が色気が多すぎる」ということを気にしている場合には、人が立ち話しをしていると、その話しの内容が「あの人は色気が多いのですヨ」とヒソヒソ話しをしているように思えてくるのです。これを関係妄想といいます。その病院の先生は、恐らくそのことを疑われたのだと思いますが、初診時の判断としては、精神科医として当然抱くべき疑問であると言えます。

(4) また精神分裂病の患者は、自分では実際にはオナニーをしていないのに「私はオナニーしました」「私は夜になると精液をとられます」「ペニスにさわられます」「ペニスが小さくなります」「ペニスが消失して、男性から女性に変わってしまいました」といったよ

うな、奇妙な訴えをすることが非常に多いのです。従って先生が、あなたが「オナニーをするのです」と、主張しても、「ホントにしているのかな？」と疑問を持たれたとしても決して、誤診したと言えないと思います。

即ち、この(3)(4)の場合は、あなたは精神分裂病をうたがわれたわけです。

(5) しかしながらあなたは現実に高校の時、夢中にオナニーし、射精してしまったという経験などがあるのですから、以上の疑いはないものとしてよいと思います。

(6) しかしまた「会社の人がウワサをしている」ということについては、すなおに「そうですか」とは言えない要素も含んでいるのです。というのは、次のようなことになるのです。あなたは実際に、宿直の時以外に夢中オナニーを実際にしたのです。そのために実は宿直の夜には高度の緊張のためにオナニーはしていないにもかかわらず、「たかも知れない」との不安から他の人が「した、した」と噂をしていると思いきみ始めているのかも知れないのです。

こういうことは実にしばしばあることで、易感性関係妄想といえます。

しかし、これもあなたの手紙のニューアン

スからは否定してよいと思います。それでは「ちょっと考えられない」このことは、一体なになのでしょう。

(7) まず考えられることは次のことです。

即ち、あなたが生来極めて性欲の強い人であるということ（一日一回のオナニーというのは、すくなくとも平均より多すぎるように思います）。そしてあなたの性器は、刺戟に対して極度に敏感なのではないかと思えます。（亀頭部が4・8センチとは、平均より随分大きいようです）。更にあなたの性器部分は、過敏症を獲得しているのではないかと思うのです（露出症の人は、性器部分が過敏だといいます）

以上のことのために、普通以上に強い性衝動を有しているのではと思えるあなたは、睡眠中に生じた生理的現象から性的興奮が生じセキズイレベルの反射的なオナニーが始まるのではないかと考えるのです。

(8) しかし一番考えられることは、なにかの原因で生じた朦朧状態のために、無意識の中にオナニーをしてしまうということです。では何が朦朧状態の原因かということは、身体を精密に診察してみなければわかりません。そのためには脳波検査も有力な手がかりとな

ると思います。

(9) そのためには、面倒でも、そしていやな気分でも、もう一度精神科へ行行って診察してもらってください。

それでないと、27才というところそろ結婚の問題もありますから、このようなことは早目に決着をきめておくことが大切でしょう。

内科などの診察は、ハッキリ言って無駄です。しかも、このようなことを専門に勉強している先生でないと、診察を受けに行っても骨折損になっってしまうことも多いので、気を付けて下さい。

それで私は次の事をおすすめます。

(10) A、現在あなたはQ市に住んでおられるので一変幸いだと思いますが、

久留米大学医学部精神科教室の秋本辰雄助教授に診察して戴きなさい。（先生は私のことをよく知っておられます）

B、住所、久留米市旭町96、久留米大学医学部精神科 電話09422、3、2171 内線、精神科助教授室

C、診察日は毎週火曜。一応、手紙を出すか、電話で都合を聞いてからの方がよい。

——以上——

一読者よりの希望

東 関 隠 士

奇クを愛読している人がどのくらいいるかは知らないが、誌面を華々しく飾っている斯道の権威や、熱烈な探求者の方々よりも、物云わず独り本誌に親しんでいる人の数が遥かに多いことは想像できる。私も後者の一人で、十数年の購読歴はあるが、文字通り十年一日ひっそりと本誌を楽しんでいる。私は、元来奇クの小説（文学的な価値の如何よりも内容を問題としている）と口絵がもっとも好きで、かつての「蜘蛛と蝶々」・「壊滅の前夜」に熱狂し、喜多玲子・滝レイ子・四馬孝氏等の描く責絵に魅せられた。写真は総体的にはあまり惹かれるものがなかった。と云うのは写真にはどうしてもわざとらしさがあって、迫力に欠ける点があり、それに正直に云ってモデルの責められる容貌に美を感じさせるものが少なかった。私は責められる女性が美人であり、責められる姿態に美がなければ魅力を感じない。

さて、「花と蛇」について今さら述べるのは、さんざん熱心な諸氏により、遥か以前に論じ尽されたことだけにいささか気がひけるが、十一月号を読んで少々気になることがあ

り、また同号の読者通信の中にマンネリを指摘されたものが数篇あったので、沈香も焚かず何とやらでじっとしていた私も思い切って投書する気になったわけである。最近の作者団鬼六氏は身辺多忙でなかなかこの作品に身を打込む暇がないらしい。あるいはこの長篇を書き続けることに少々うんできたらしいと想像できるような気配が最近の作品の中に感じられる。私はここで読者の我儘かも知れないが、団氏に余計な仕事を整理して、この作品にもっと身を入れてほしいと強く願っている。これは私を含めて私の知っている限りの奇ク愛読者の多くは、この小説を読まんがために購入しているからである。私自身も写真も絵も痕跡を止どめるばかりといえる現在の奇クにあつては「花と蛇」がなくなれば購読する気持も大半失われるような予感もするくらいである、作者がこの作品を万一にも中途で投げ出さずに、ますます発展させてほしいと希望している。必要であれば作者の周囲に取材スタッフを揃えたり、読者よりアイデアを募ったりすることも奇ク編集部としても考えてよいと思う。

「花と蛇」の魅力についてはいろいろいわれているが、私流にいうと、第一にヒロインが絶世の美女であり、上流階級に苦勞なく育ったエリートであり、いかに責められてもその環境に順応し切れず、いつまでも羞恥心を失わないので、そこに責められる女性の美しさ、いつまでも保たれ、新鮮な情緒があることである。第二に責め方のあくどさである。これがますます第一の美しさを引き立たす役目を果たしており、あくどさが増すほど効果が大きくなっていることである。この二つがある限り、この小説はいよいよ人を惹きつけたとえ、ストーリーの展開や描写に多少無理な箇所があつても（無い方が無論よいが）読者に充分な満足感を与えるものである。もう一つ現状では無理な注文かも知れないが、この小説に挿絵がほしい。それも喜多玲子氏のような女の表情、姿態を美しく描く人にもう一度出馬して頂きたい。もし喜多氏が駄目であれば、責められる美しい女性を描く沖涉二氏・江馬美久氏など他誌に活躍した人の起用や、才能のある新人発掘に編集部で努力してほしい。もし挿絵を入れることが不可能であれば、挿絵のみを別冊として限定版で発行してもらいたい。駄文を長々と綴って申しわけないが、以上いささか希望を述べてみた。作者団氏のますますの御健筆を祈り、奇ク編集部の御尽力をお願いする次第である。

告白の記

華麗な惑溺

浅羽 やすし

四十三年七月二十六日は暑い日だった。

あなたは、新聞広告で知ったモデルの募集に応募のため、東京千代田区Nビル内、ふえみな化粧品会社へおいでになり、ここで奇怪な、おとこに出会われたのである。

おりからの、学校の夏休み中に、「二十才前後。週三回出社。衣服、クツ、化粧品支給。撮影のため、グアム島、または香港出張のチャンスあり。一年契約。固定給三万五千円」

の好条件が、時機を得たためであろうか、

この日、募集元のふえみな社には、三十名ばかり入社志望の女性が殺到したことは、あなたも、ごぞんじであろう。

あなたは、ややおくれておいでになったため、順番が仲々まわって来ず、四十分ほどふえみな社のせまい応接室に、とじこめられたのだった。

冷房のない応接室は暑かった。あなたは、順番を待つあいだに、ちょうど十二時になり会社から出された、サンドイッチを召し上がり、コーラをおのみにになった。そしてあなた

は、そわそわと立ち上がられ、会社の社員に「トイレ、どちらでしょうか？」と、低声でたずねられた。

トイレは、一階の北側とおしえられ、あなたは、そっと席をお立ちになり、トイレの重い鉄扉を開かれた、と想像される。

そのとき、三つ並んだ個室の、向って左端のドアからでたロマンスグレイの、四十才前後、でっぷり太った、ちよっとくずれた感じの、中年紳士？ にお気づきにならなかったであろうか。



——その中年男は、私なのだ。

実は私は、あなたが応募された、ふえみな社と、トイレをへだてて事務所を持つ、宣伝企画屋「Rコンサルティング」の、これでも社長なのです。

あなたは、かなりあわてて、私を押しつけるように、まっしぐらに、まん中のドアを排して、中へ入られた。

私が、手をあらうふりして、わざとノロノロと、カガミの前に立ち、そう、十五分もねばったであろうか。

あなたは、やっとドアをあけて、お出ましになり、手を洗うのもそこそこに、カガミにその美しい顔をうつし、かみをなでるしぐさとともに、あわただしくトイレをお出になり、そのあいだに番が来てはたいへんとも思われたのか、急ぎ足に、ふえみな社の応接室へおもどりになられた。

そのあと、私が、どんな行動をとったか、あなたは、もちろん知るわけがない。

あなたと入れかわりに、私は、ためらわずまん中のドアを押して、中へはいった。

高台に立つ、このマンションは、水圧がひくく、トイレを使用したあとは、よほどじゅうぶんにハンドルを押しこまないと、ろくに

水が流れず、したがって、汚物も落し紙も、流れないことは、このマンションの住人ならみな知ってることなのです。

しかし、外来者のあなたが、これをごんじないのは、無理のないことだ。

案のじよう、いま私の目の下に、ああ、あなたの賜り物は、流れ切れず、落し口に、ひっかかり、水に浮いていた——。

私の胸には、早鐘のような動悸があり、眼下にめく数秒。

まだ、完全な原形を保ち、それはユラユラと、水中にうかんでいた。

モヤモヤと綿のようにみえるのは、一と息に溶けてしまった、トイレトペーパーのかすであろう。

奇蹟的に、まだ型態をのこしたそれは、いまにも水槽のむこうに流れそうにしながら、しかし、水がとまったので、それもならず、ゆっくり回転しながら、いつまでも、せまい落し口にうかんでいた。

水に浮いているあなたのそれは、かなりのポリウムだった。

健康色にかがやく、めったに見ることすら許されぬ聖なるそれは、いま、のばせば、手の届くところに浮いている。

取るべきか、取らざるべきか、しばし私は迷った。

なんだか、たいへんな不倫をおかしているようでもあり、いまかりに万一、手を触れば自身をけがすようで、私はそのものを凝視しながらも、手を出しかねた。

そのときだ。

また足おとがきこえて、誰かが入ってくるようす。

こんなところに、長くいたら怪しまれる。

それに私は、募集元のふえみな社の社長から依頼されて、あなたがたの面接をやる義務があったのだ。

とっさに、私は決心した。

トイレなどに、あまり長くいるのは、禁物だ。どこで、誰が、私の妖しい行為を、かいまみているか、わからないもの。

ひろいあげた宝物を、大切にハンカチにくるみ、スラックスのポケットに入れて、何くわぬ顔で、私はそこを出た。

応接室をのぞく。

あなたは、新刊の女性週刊誌をひろげて、眼をはしらせるが、なにか落着かないようすだった。

短大卒。二十一才。前歴、出版会社、事務

員。家族、母一人。

サツと目を通した、あなたの履歴書はこんな内容で埋められている。

美しく、達筆なペン字だった。

あなたは、面接のため、私の前のイスにおすわりになった。

悪びれない態度。彫りのふかい顔立ち。

ふえみな化粧品モデルとして、イメージは、ピツタリ。社長、専務、工場長、宣伝部長、そして私。この五人の審査員は一致。文句なく、あなたを採用ときめた。

(あなたの秘密のものは、いまボクのこのポケットに入ってるんですよ。美しい健康色とすばらしいポリウム。きっとあなたの消化器は、健康そのものなんでしょうね)

その場で採用を申し渡され、さすがに、うれしくて、パツとさくらいろにそめたあなたのゆたかな頬を、美しい! とたたえながらボクは心のなかで、そうつぶやいた。

×

審査慰労のため招かれた銀座ソニービル? レストラン、マキシム・ド・パリの席。しかし、せっかくのワインも、料理もその味さえわからぬ私だった。

私は、用事をこしらえて、席を立つ。そし

てトイレのドアを排した。

ソニービルのトイレは、清潔そのもので静か。

人影は、まったくない。

トイレのドアのロックをおろせば、あとは私だけの天地。

洋式便器のひんやりするタッチも、こころよかった。

おもむろに、私は腰のポケットから、あなたの聖なる、賜り物のハンカチ包みを取りだす。

ふしぎなことに、いったんは水のなかに取りおとされたにもかかわらず、それは、やや固練りの気味。そのタッチは、そう、羊かんか、手のなかで溶けかかったチョコレートを思わせ、まだ完全な原形を保っていた。

不潔感、まったくなかった。

においもなかった。

私は、たましいをうばわれた思いで……そっと舌を出した――。

すばらしくも感激的な一瞬が火の玉のように、からだじゅうを走り抜けた。

そして逆に、このうえなく不味な「悪食」の実感が私をおそい、そしてしぼりつけた。

のみくだそうと焦った。

だがピーナツ二つぶんぐらいのそれが、仲々のどを通らないのだった。

粘土の舌ざわり。舌を刺す刺戟が、口中をあばれまわる。

口のなかは、のどは、灼けつくようであった。私は物の怪にとりつかれたように放心した。ようやくの思いだった。

わがKK誌の29年11月号二三二ページに、「飲義先生の回答」という相談欄があったことを、ふるい読者なら、ご記憶の筈だ。

その一節に、与えられた美酒をたのしむ主人公が、

当然の発展の結果として、妻のお下がり……から頂いたことがあります……と、

二回ほど、いま私がやった行為と同じシーンを演じた人の記録が、採録されている。でも、神の美酒におぼれ込んだ、この筆者も、さすがに、その味だけには、まいってしまい、実際に「直接拝受は、二回か。あとは食べさせる、食べさせられるという空想をたのしんだ」と、実行には二の足ふんだことを告白している。

ついでにいうと、この相談者、あと始末も命ぜられており、これには、ガーゼを用いる

間接方式で、そのガーゼを独特の方法で、清めるやりかたを述べていたが、実感のこもった、すばらしい文章であった。

——さて、私は、ユメからさめたように、あたりを見まわす。そしてむやみにうるたえて立ち上がる。

口のなかには、まだ、その強烈な味覚が吹きあれている。すごく苦い。

まだ手元には、かなりの分量の得がたくして、とり扱いにこまるやっかいな賜り物がのこっている。

それを、おいが洩れないように、包みなおして私は、あてもなくソニービルを出た。

うがいをするべきか、しないほうがよいかとの重大なことにまよいつつ、銀座四丁目の方へ、あるきだす。

しばらくゆくと、ゆきつけの、ビル階下のニュートキーヨービヤホール。

ここへ、飛び込んだ。やはり、一おう、うがいだけはしておこう。

私は、ひそやかな行為に、一応のピリオドを打つため、洗面所へゆく。

口中から、はきだした水には、ちゃんと特有の痕跡が認められた。それを、じっとながめつくした。

冷えたジョッキのビールが、快く口中を洗ってくれる。

しかし、さきほど思い知ったあの、みにくい味、醜怪な味覚は、まだ、完全に舌端にのこっている。

そして、その底には、これも時々味わう神のあたえ給うた、れいの美酒と、同じ味が感ぜられた。

かるい嘔吐感がある。

ビールは、その異物を完全に胃ぶくろのおくまで送り込み、その成分は血液にまざって私の体内のすみずみまで、めぐっているようだ。

私は、なにか、とんでもない愚行を行なってしまったときの、あの複雑なきもちで、ニュートキーヨーをフラフラした足どりで出たのだった。

銀座の歩道があるきながら、奇妙な罪悪感と、思いきって日頃の願望を果した満足感とに私は酔った。

だが、待てよ。と私の一方の良識が、反省を求めはじめている。

たしかに、おまえはあの美女のものと信じればこそ、ためらいもなくすまじきことを

した。

だが、ほんとうに彼女のものであるとは、絶対に断定できないではないか……

私がいいる前に、他の第三者が入り、落としていったものかもしれぬ。

九九%彼女のものとは思えても、あくまでそれは一〇〇%ではないのだ。

——のこる一%には、他の人間のだ、という可能性があるのでないか。

万一、それが、考えるだけでも、胸くそのわるくなる、男性のそれだったら………ということもあり得る状況なのだ。

そうだとすると、私はなおさらのこと、とりかえしのつかない、とんでもない不潔を冒したことになる。とまどう。

私は、ギョツとなって道ばたに立ちどまりとまどった。

まだ、のこりの、半分以上は、私の腰のポケットに入っているのだ。

すてようか。

それが彼女のものだとしても、もうこんな下劣な望みを起こすまい。

白人の女性が二人。観光客でもあろうか8ミリのレンズを私に向けた。

私の行動が、不審とうつつたのか。ボック

スの警官が、こちらをじいっと、みつめていようだ。

だが、もうその一半は、確実にすでにいまから一時間半まえに、私の食道を通りすぎ、胃のなかに納まってしまったのだ。

すでに、私のからだの内部に完全に溶解し吸収され、同化している筈だ！

いまさらどんなにさわいだとて、どうなるものでない。

うたがいは、うたがいを生む。

あのビルには、常時二〇人の住人がおり、出入りする者は、別に同数はいる筈だ。

建物の構造上、その大部分の人は、彼女が使ったと同じトイレを、同じ目的で使用するのだ！

わるいことに、住人は八〇％が、男性なのだ。

常時使用する女性は、四人にすぎぬ。

万が一、それが、彼女のものでなく、他の人間であったとしても、せめて女人のそれであつたら、まだ救いはある。

いかなる条件下にあらうとも、男性のそれなどは、思うだけで身ぶるいがする。ヘドが出る。

考えているうちに、にわかに嘔吐がこみあ

げ、それをおさえようとして、私は必死だった。

やはり確認しないで愚行を冒したのは、軽卒だった。

うたがえばキリがないし、信じればこれもまた、キリがない。

しかし、よいではないか。せっかくのチャンスを生かすためには、あのばあい、あの方法によるいがい、完全に私のものとすることは不可能だったのだ。

あるとき、たしかに彼女が使用し、ろくに水も流さずに出ていった。

とすれば、やはり、彼女のものとは推定してよろしいのでは、なからうか。

私は推理作家のように、何回もあのとときの情景を、くり返し頭のなかで反すうした。再現し、安心しては、また不安になった。そして正当化して自分をなぐさめた。

けっして、荒々しい男性のそれではなく、ましてや六十才すぎた、老醜をムキだしにした管理人のものなんかじゃない。

と、わが胸にいいきかせた。

くり返し、頭のなかにえがいた、あのとときの情景から推せば、それは、彼女のものでない、という証拠はないのだ。

この結論に、私はやっと満足した。満足したら、嘔吐感がおさまったのは、まったく、ふしぎだった。

以前、私は、ある職業の女性のそれを、ほんのちよっぴりだったが、ためさせてもらったことがある。

そのときの状況でいえば、その女性の所産であることはうたがう余地がなく、しかも密室で、一対一で、手中におさめたのだから、これは出所に、一点の疑問の余地がない。私は、わが目にまさまざと、そのときの情景をみたのだから。

あまりの羞恥に、相手の女人が席を外したあと、私はおそるおそる、その味にふれた。

しかし、そのとたん、猛烈な不潔感と自己嫌悪におちいり、それこそ、マツチ棒の頭大のかたまりをにくにくしげに睨みすえたことであつた。

そのあと、二、三日間は不潔感と嘔吐感とにさいなまれて、めしもなくに食えないほどだった。

相手が、納得して、手わたししてくれてさえ、かほどまでに不潔感のあるものを、こともあらうに、不浄な水のなかからとりだすというのは、われながら狂気の沙汰、というし

かないのではないか。

ああ、オレというおところは、なんという、あさましい性癖を、もってうまれてしまったのだろう。

私は、警官のうたがわしそうな視線をさけつつ、灼けつくす午後のペーブルメントに立ちつくして、思案にふけるのだった。横断歩道のシグナルがグリーンになるのも気がつかなかった。

では、残りの処分をどうしようか。私は、またポケットをさぐる。

いつまでクヨクヨしてもどうなるものでもない。いいではないか。彼女のものだ。と、うたがわず、かたく信ずることだよ。

信ずることは、信仰なんだ。

ソニービルでの、私のひそやかな行動の直後からあと、あの美女は私の心の内部では、完全に神さまであつた――。

神さまのご命令は絶対だ。そむくことはできない。

あのばあい、不幸にして彼女のものではなかったとしても、私は彼女のものと思えばこそ、舌にのせたのだ。だからこそ、ふくざつても感激にふるえることもできたのだ。

いいかえれば、神さまの命令に従ったまで

のことなんだ。

誰のものであると、そんなことは問題じゃない。

美しき女神のものと信じこみ、その物すごい強烈な味覚を忘れないことだ。

捨てようと思えば、いつでも捨てられる。のこりは、取引銀行の地下の専用ロッカーに、一応あずけよう。

ここなら、臭いが洩れる心配もなく、最も安全な、この世で私と銀行の係りの人しか知ってない絶好のかくし場所なんだ。

わが美しき女神は、仕事にも慣れて、時々私のオフィスにも、うつくしい顔をみせる。

カメラの前に立つようになって、ますますその表情が生々とし、肌も輝くばかりの美しさだった。

彼女のCMフィルムは、ちかく全国ネットで、ブラウン管にうつしだされようとしている。

あるいは、ニューフェイスとしてスクリーンにデビューする日のくることも、ユメではないようだ。

このアルバイトに味をしめた彼女は、もう一、二社、スポンサーをもちたがっている。

「センス、紹介して」

と甘えるのが、かわいらしい。

――きみは、このボクが、きみのつくったばかりの、新鮮な分身を吸収したのみか、残余を銀行のロッカーに秘蔵して、時々会いにゆき、日一日と水分が失せ、乾いてゆくのを見守ってることは知るまい。

天をおそれぬ、わが所業を、万一きみに告白したら、それでもまだきみは「センス」とむすめが父親に甘えるような親しさをみせてくれるだろうか。

きょうも、お茶にさそった近所の喫茶店Sの片すみで、明るい笑顔の彼女と私は向きあっている。

はじめていただいたギャラで、記念にタイタックを買ったから、胸に飾ってほしいと、デパートの包装紙にくるんだ小箱をとりだすのだった。私に恩を感じているのだ。

感心なことに、彼女はやせうで母を養なっている。楽でなさそうな暮らしのなかから、面接のときに世話をかけた社長以下に、ささやかながら心のこもったプレゼントを用意してるのだ。そんな、むすめなのだ。

そのやさしい女性を、私は裏切り、あさましい行為にふけてしまった。

私の大切なとくい先のR食品が、近くハイティーンむけのニュースタイルのチョコレートを売りだす。

ポスターのモデルさがしを、たのまれた私は、一も二もなく、彼女を推せんした。

すでに内部では採用を内定し、あとはアメリカから近く帰る社長のOKをとればよいことにまで、こぎつけている。

当然のことながら、そのギャラは、ふえみな化粧品を、かなり上まわる好条件にまで、彼女のために、私はねばったのだった。

このホット・ニュースを、いつおしえて喜ばせてやろうか。ついこのあいだ、八丈島へロケに行った、そのときの、たのしかった思い出を話す彼女の、うつくしいくちびるを見つめながら思案する私だった。

ところで、なぜ私は、あんなものにわれをわすれるのだろうか。

あこがれて、考えている時とは大ちがい、ひどくけがわらしく、のどにさからい、のみくだすとたんに、ゲツと、もどしそうになった。なんともいぬ醜悪そのものの味！

それは、そうだろう。

人間のたべるべきでないもの。不潔感をと

もなう、ひどいもの。大腸菌もいっぱいであつたろうし、万一、赤痢、チフス菌でも存在していたら、それはストレートに、私に伝染し、たちまちのうちに私を倒すかもしれなかった。

私は思う。過去十幾年、KK誌を読んでいるが、その間、神の美酒を拝受するというシンは、しばしば登場した。しかし、こちらのほうまで進展する場面はかぞえるほどと記憶する。

それは、当然のことといえるであろう。なぜならば、神の酒の、ロマンティックな情感とはことかわり、こちらのほうは、食べ物というべく、あまりに無残で、不そんて手におえるものでないからだ。

いちじ、私は、これを奴隷の常食とし、神の酒をお茶がわりに、それ以外の食物はいっさいとることを許されず、ひたすらに、これを食べ、それを吞んで、いのちを永らえることを夢想した。

これこそは、被虐の極致！ はたしてこれで生命が幾日もちたえられるかわからぬにせよ、当然そこには無理矢理、口のなかにおとされるケースも出てくるであろう。

眼から、ハナから、口から、耳から、黄色

い火花を散らして、あまりの悪食にさいなまれ、のたうちながら、しかしとだえれば空腹にたえかねて、二度三度、給食されることを哀願する。そんなシーンに、妖しく胸おどらせた夜もあった。

水のような下痢のそれを、ムチの追い打ちをうけて、苦しみのたうちながら——というような夢想をいつぞやの本誌に紹介したことがある。

われらがアイドル、芳野眉美は、ペアの相手の一方から、無理に口中に落下され、どうしてもみくだせないのを、こんどは、もう一方が水洗よろしく、みずからの美酒で、どのおくに、流し込ませる、すごいシーンをえがいている。

しかし、現実はどうであろう。眼くらめく不潔感と、不倫の念が先に立つて、私にはどうしても全量拝受など思いもよらぬことなのだ。

あるいは根源から、直接に落とされたら、とも思うけれど、そうなれば話は別かもしれない。

今昔物語で、平中は、ぼんのうの鬼追いがたく、せめて、それを呑み、かつ、くらい、そこに、心に思いえがくよき人の、からだか

ら出るものが、やはり凡人と同じ、汚れ切った味とわかったとき、おのれの、よこしまな恋を断ちきれることができるかもしれぬ。と思いついて、果敢にそれを実行した。

この着想は、非凡である。

私には、こんな空想もある。

ボーイとして、白人女性のとまるホテルに住み込む。私の任務は、その処理係り。

しかし、器物をつかうことは許されず、わが身を投げだしての、ひたすらな奉仕のあけくれ。

したがって、いやでも新鮮なそれを、口にせねばならぬ。

この極端な夢想に、私の胸は、ふるえるのだった。

ナイフとフォークを使う手法は、同じく、芳野眉美が、本誌9月号に軽妙に描いた通りだし、それに止まらず「あと始末」にまで言及している。

私の考えをいえば、全量拝受よりも、そのあと始末のほうが、よりロマンティックなムードが高いと思う。

あと始末は、強制ないし、相手の承諾が必要だし、直接相手にふれるのだから、不潔感、よりリアルに生きてくるであろう――。

前出KK誌、29年11月号、二三四ページでは、全量を手のなかに落とされ、それを、さらに相手から、やさしく、

「全部、食べておしまい」

と強いられながら、しかし、それだけではどうしてもできず、チョップリだけ食べる主人公が登場している。

現実とは、そうしたもので、あるらしい。

――眼のまえで、いきいきと、ひとみを輝かし、たのしかったロケの思い出を、語りつくすこの美女を、心のそこから、すばらしいと思う。

しかし平中ではないが、あの、グロテスクな形状と色を、まざまざと目前に見た私は、いかに相手が素晴しかろうとも、しかし、だからといって、さもうまそうに平然とムシャムシャというわけにはまいりかねることを、残念ながら告白せねばならぬ。

結論を、いおう。

このことは最高の被虐にはつなげようけれど、現実には、仲々そう簡単にゆきかねるものだ。津川博氏の体験談は、私にはまさに驚異だ。

相手の食べたものを、その下のコースに陣どって受けるのは、観念的には楽しい奉仕だ

が、しかし、いうべくして行ないがたいものだ。

ただし、直接拝受となれば、おのずから話は別である。

そのなかに、果して、残りかすに混ざって栄養分が存在するか、しないか、そんなことは、医家に任せるしかない。吾々門外漢の、議論のそとの問題だ。

さもあらばあれ、私に、与えてくれた相手の美女は、私の眼前で、何も知らずに談笑をたのしんでいる。

この真相を、今、彼女に告白したらどんな表情をするだろうか。

おそらく、羞恥に頬を染め、いたたまれずに席を立ち、永遠に私のまえから離れてゆくであろう。

心からの軽べつと、憎しみの念をその、すずしいひとみにこめて――。

これは、いいかえれば、私が彼女に、虐待を与えたことになるかもしれぬ。

誰だって、秘密を知られるのは、たえがたい恥辱なのだ。

しかし私は、それを敢えてやった。

あの機会をのがしたら、仲々めぐりあえない

いチャンスだったからだ。

そして、いま目前に、何もしらぬ当の本人は、ほほえんで、心からの信頼を私によせている――。

それが、美味である筈がない。よい香りを放つわけがない。

ただ、観念のうでで美しい、とみずからにいいきかせ、よい香り、とおのれを酔わせようと努力したのみなのだ。

しかし、いちどは充分に味わいつくして永遠に、その酷烈な味覚を、胸のおく底にきざみ込んでおきたかった。

かなりの勇気と、決心を要求される行為だが、しかし私はやったのだ。

七月二十六日をさかいとして、私の人生観は変化し、女性を見る眼は変わるであろう。

――皮肉にも、このとき彼女は、ツと席を立ち、私に目でわらいかけながらトイレへ行った。

時間を計れば、美酒のほうだけでなく、七月二十六日、私が、はじめて彼女と出会ったあのときと同じ目的で、ドアを排したのだということは、明白だった。

やがて彼女は席へ、もどってきた。

さっぱりした表情だった。

矢もたてもたまらず、私はいれ代りに、ドアを排した。

水はまだ流れつづけ、当然のことながら、そこには紙の一片すら残ってなかった。

ただかすかに、記憶の底にのこる、あの香りだけがただよい、それを胸いっぱい吸いこむと、あの日の、ソニービルでの妖しい行為の思い出がまざまざとよみがえり、生つばが湧いた。

席にもどると、何もしらぬ美女は、このごろおぼえた、細まきのタバコをくゆらせていた。

相かわらず、あたりの人目を惹かずにはおかぬ美しさだった。私の胸に、ふたたび、猛烈な嗜食の欲望が湧いたのは、ふしぎなことであった。

七月二十六日、勇をこして決行したそのあとの、あらしが吹きぬけたような嫌悪感は失せ、いままた私は、眼前ではほえむ本人のを口にしたい望みをおさえかねた。

.....

その後、R食品とのモデル契約を代行し、正式調印までとりつけながら、わざとそのニュースをおさえ、しかし卑怯にも（ボクが押せばOKは、とれそうだ）と恩をきせ、もう

一と押しに交換条件をつけて、ついに強引にブランドーグラスに満たしていただいた美酒を、美しいマユをひそめてみつめる彼女の眼前でグイとやって、自棄的な「いじめかた」を、二度も三度もくり返したことを併せて告白しておこう。

しかし、その願いを聞いた彼女は、格別いやがりもせず、むしろ、おもしろそうに、ほほえみながら、手わたしてくれたのだった。もしも、

（こんどは、チョコレートだぜ）

と、押したら、果していかなる表情を示すであろうか。おこり、なげき、悲しみ、ほんとうに、私から離れるであろうか。

それとも平然と、ブランドーを注いでくれた時のように、案外おもしろそうに承知してくれるだろうか。

その彼女から電話で、P食品契約の記念にこんどはライターをあげたいので、夕方何うとやってよこした。

チャンスだ。

まさしくこの美女のものだと確認できるのが、私の念願である。ご本人から、すばらしい方法で拝受するのは、いまをのがしたら、仲々ありつけられないであろう。

東映映画化決定作品

私本

伊藤晴雨物語

(後篇)

これは小説である

団 鬼 六

文枝は、再び、姉の菊枝と折合いが悪くなった。旅役者との駈落ちに失敗し、悄然として戻って来た妹を最初は泣いて興奮しながら喜こんだ菊枝であったが、やはり、亭主と妹との間を疑惑の眼で見ると、妹の身を思う感情にもひびが入り、油断も隙もあったものじゃないという、とげとげしい気分になってくる。それに晴雨が外出する時など、文枝は、まるで自分が女房気取りで、一寸、帯の形がおかしいとか、襟が乱れているとか、姉の前もはばからず世話をやいたりし、それが菊枝にしては、段々、鼻につき出したのだ。自分の小遣いぐらいは自分で稼ぐと、文枝が最近流行のカフェーへ務めに出た事はいとしても、すると晴雨は、文枝の帰りがおそいとそわそわし始め、布団に入っても中々寝つかれず、やがてたまりかねたように身体を起こすと、「一寸、そこまで迎えに行ってくる」と立関へ出て下駄をひっかける。晴雨は晴雨で、そんな調子であったから、菊枝は疑い深い妄想に日夜、胸をしめつけられるようになり「たった二人の姉妹やないか、これからは仲良くして行こう」と泣いていったあの時の興奮も色褪せて、妹とは、いわゆる嫉視反目の状態になった。

そんな状態の時、菊枝は妊娠したのである。それと同時に、文枝は、再び、晴雨のもとから、わずかばかりの身の廻りの荷物と一緒に姿を消してしまった。姉の菊枝が妊娠した事によって、女としての敗北を知ったというような逃亡のしかたであった。文枝がカフェーに出入りしていた客の一人と逐電したという事がわかったのは、文枝が姿を消して三日後カフェで文枝とは仲がよかったという和子という女給が晴雨の家にきて知らしたからであったが、その客というのは、実は自分の情夫なのだと和子はいうのである。男は、清元

師匠、延寿太夫の門下生で、将来を嘱望されている三味線ひきだということで、それなら、前の駈落ちの時よりは分ましな男を文枝はつかんだことになる、と晴雨は腹立たしきとは別にそんなことをぼんやり思ったが、自分の情夫を文枝に奪われた和子は、段々と青白い表情を硬張らせていきながら、文枝の逃亡先を知っているのなら教えてくれ、と興奮して晴雨と菊枝につめ寄るのであった。「文枝さんのような人と一緒にいれば、あの人の才能は駄目になってしまいます」と最初は、文枝と親友だったといったくせに、段々と薄情な云い方になり、女の友情の頼りなさを和子はむき出しにするのだったが、晴雨もムカムカ腹が立って来て、「あんたと一緒にいたって、その男は駄目になるだろう。五十歩百歩じゃねえか。顔でも洗って出直してこい」と、これもまた薄情な云い方して、和子を追い出してしまった。

文枝に再び去られたということで、心の心棒がぼっきり折れたように晴雨は元気がなくなった。もうこれで文枝は二度と家へ戻ることはないだろう。晴雨は、そのことにしばらくは悶々とし、妻が妊娠したことに何の感興も示さなかった。とにかく、容貌にしても肉体にしても妹の文枝は姉の菊枝より優れていた。詮じつめれば、ただそれだけの単純な理由で、晴雨は文枝を恋慕してきたようなものであったが、この上等のモデルに去られたことによって、再び高まってきた制作意欲に水をぶっかけられた思いになったのである。

そんな家庭的なトラブルとは別に、晴雨の名は日増しに高まってきた。責め絵画家などという呼び方は、軽蔑を含めた揶揄ともとれないことはないが、世間的に晴雨の名が売れ出したことは事実である。そのきっかけは例の下高井戸における雪中の裸女吊り責め

であった。あの時、立合った演劇月報の編集長大森が、責めを美術化しようとする男、という題で、わずかばかりの記事にしたことから、幾つかの新聞社、雑誌社などがその取材に晴雨の家へ押し付けて来たのだ。自分の妻と妻の妹を雪中、裸にして縛り、木に吊り上げて責めるなどということは、見方によれば完全な猟奇事件で、取材に来たジャーナリスト連も、そうした好奇心から押し付けて来たものに違いなかった。大森は、最初、苦悶する女体に一種の恍惚美を発見した伊藤晴雨を雑誌に書いたつもりであったが、それが何か感違いされた感じで、どうしたものか、と晴雨から相談を持ちこまれたとき、大森は、責任を感じて、酸っぱい表情になった。「奴等がこういう風な記事として扱うか知らないが、君の名が世間に響き渡る機会じゃないか。まず名を売ることだ」俗悪な精神に徹するのはこのときだ、という大森の意見に従って、晴雨は、取材に来た新聞雑誌記者連中にサービス精神をかなり発揮し、求めに応じて、自分の生立ち、また、こうした女体虐待に興味を抱く、その真因となつたものらしい事項をあげたりした。少年時代、継母に折檻されたということ、また、貧しかった青春期に好意を寄せた女からすぐなくされたこと、そうした事柄が女性に対する一種の憎悪感となり、とりわけ、きらびやかに着飾った美女を見るとその仮面性を剥ぎとってやりたい衝動から泥水に落とすこみ、責めさいなんでやりたいという欲求が起こるが、それは裏を返せば美しい女体に対する憧憬からであり、いわば愛情の変形というものの、愛憎二つならず、自分が女体を緊縛し、折檻を加えようとする気持には、こうした微妙な心理が働いている——と自分でもはっきり要領を得ないことを、質問責めにしてくる記者達に語り、また、苦痛を噛みしめる女性の容

貌には、いうにいわれぬ色香が滲み、これが自分はたまらなく好きだ、と無残絵を描くことになった動機も、語ったのである。記者達は、口を揃えて、下高井戸で撮影した問題の写真を見せてくれ、という。単に裸女雪中の吊り責めというだけの写真なら、見せてもかまわないが、何しろ、モデルが現在の自分の女房故、と晴雨は、さすがにそれだけは拒絶したが、たった一人、講談読物社の記者、大月には、三日の約束で、その秘蔵写真を、こっそり手渡したのである。というのは、当時、講談読物で怪奇探偵小説を連載している新進作家の江川乱三が、大月の話によると、彼の書く小説と同じく本人も、アブノーマルな世界を積極的に探求したがる癖があり、参考のために晴雨の撮った雪責めの写真が見たい、と洩らしたそうで、晴雨も江川乱三の小説を秘かに愛読しているだけに、また、この道を好む者、という親近感もあって大月に数枚の写真を託したのであったが、この大月という男、実にだらしない男で、鬼の首でもとったよう誇らしげに仲間の記者に見せている内、それが何時の間にか複写され講談読物社以外の雑誌社が一せいに写真入りで、晴雨の記事を取上げるといっておかしな事態を招いてしまった。この写真を雑誌に使うってもらっては困る、と大月に念を押してあったので、晴雨から写真を苦心して入手した講談読物だけ写真が出なかったということになる。晴雨は啞然としてしまったが、自分が記者に頼んだことからとんだ迷惑をかけて申し訳ない、と江川乱三からの詫状が来て、講談読物社の社長からも、そのお詫びのためといっては何だが、江川乱三の小説挿画をお願い致したくと連絡があり、その挿画料が常識を破った一枚五円という高額で、しかし晴雨は、それよりも、江川乱三の怪奇小説の挿画を描けるのが楽しく、大月の失策を

笑顔で許した。晴雨の雪中裸女責めの写真を掲載した雑誌は大当りで、とりわけ、大きくこの記事を取上げたサンデー日本は、即日、全部売切れるという有様だった。変態画家、丸裸にした妻を雪中に拷問す、といったような猟奇的な見出しで、晴雨が、集った記者達に、訥弁ながらも必死に説明した女体の無残美についての意見などは全く無視されている感があったが、とにかく、女体を折檻した記事がこれ程、評判になったということで晴雨は驚いたのである。物見高い日本人の弥次馬根生かと思っていたがそうとばかりはいえなかった。訪問客が後を断たなくなったのである。自分は貴下と同一の趣味を有しておる者だが、一度、御高説に接したく参上した、という具合に、供の者に手みやげ品を山のように持たせて訪れる商家の若旦那風な男もいたし、人力車で乗りつけて来る、山高帽にカイゼル髭の政治家風の男もいた。わざわざ、訪ねて来る位の人物だから、その道におけるかなりの研究家であったが、不思議と人品骨柄いやしからざる人々ばかりであった。晴雨は長年探し続けていた腹違いの兄弟に出くわしたように感激した。やはり、女体の無残図を好むのは自分一人ではなかったのだ。変態画家というレッテルをはられ、長年、世間の圧迫に耐えて来たその孤独感から解放された悦びさえ感じ、晴雨は訪れる人達を鄭重に歓迎した。

責めの研究などといったのは、大袈裟だが、女の責め場を単に性欲の対象物として悦ぶ者と、先天的にこれに執着する者との両分し、晴雨は、後者の方を研究されている人、という云い方をした。晴雨は、その両方を兼ねている部類に入るわけだが、前者の、つまり、性欲の玩具として責めを考えるだけの人間には、次第に敬遠主義をとるようになり、自分のグループに、入れようとしなかった。それ

伊藤晴雨遺作集 =その6=



程、晴雨の家には、その道を好む人の訪問が多かったのである。後者の、つまり、先天的に女体の責め場を好む連中は、春画マニヤが古今東西の春画を蒐集したがるように責め絵の蒐集にも食欲で、また自分のそうしたものに執着する性情を人に語って何らはばからない陽性な所があった。そうした、いわゆる研究家が晴雨の周りに十数人は集まったであろうか。彼等の中には、晴雨自身が何とか手に入れたものだと考えていた珍品を所蔵している者もかなりいた。わざわざ越後から、晴雨を訪ねてやって来た布村虎五郎という米問屋は、振驚亭の崇拜者であって、彼の作品をかなり所蔵している。振驚亭というのは、天保時代の作家で、彼の作品のほとんどは残酷な場面に満ちていて、とりわけ、女の責め場には、手の込んだ方法を考えていた。代表作「二人新兵衛」などでは、六地藏の首を切り落し、その跡へ少年少女の首を切って乗せるというような無残な挿絵もあり、マニヤ以外の者なら正視するに耐えない代物だが、こうした珍品を始め、名古屋の洋画家、逸見松湖の筆による長崎の犬姦事件の絵巻物——この犬姦事件というのは、明治初年、国際問題にもなった事件で、白痴の女を縛って責め折檻をし、遂には洋犬をけしかけて白痴女を犯させ、これを大勢の者が見物したという人道を無視した残酷な事件だったが、これを扱った五間以上に及ぶ極彩色の絵巻物で、好事家の垂涎する珍品であった。こうしたものを金に糸目をつけず探し廻るだけが趣味というだけではなく、布村の性的な趣向は、臨月に近い妊婦と性行為を行なうことにある、という。一体、そりやどというわけだと晴雨が聞くと、ぴったり合わせた腹と腹、そこに女の腹の子供がピクピク動き出すのを感じると、たまらない位の快感を覚えるというのだ。また横浜から来た瀬川柳吉と

いう香具屋は、芳年の無残絵を集めている男だが、責められる女に猿轡をかませることによって、すさまじい色気を引出すことが出来ること云い、女房との性行為にも、緊縛に加えて猿轡を用いることにしているが、おかしいことに、不美人の女房に猿轡をはめると、それがまた、ぞっとするくらいに美しく見えてくる、と云うのであった。晴雨にしてみれば、腹の大きい女との性行為、猿轡をはめた女との性行為、そうしたものには全く興味はなかったけれど、一口にこの道を愛好する者といっても、その趣向がかなり複雑に分かれていっていることを知った。そして、世の中に、性的変人が如何に多いかという事も知って驚いたのだが、晴雨を変態性欲画家と雑誌で知って、方々から舞いこんで来た手紙の中にも、一種の身上相談のような調子で、自分はこれこれの性癖に悩まされているが、先生の御意見を承りたい、とさすがの晴雨も小首をかしげたくなるような珍無類な相談を書きつづてくるのがあった。女の糞が食いたくてたまらぬというのやら、女の小水が飲みたくてたまらぬというのやら、道を歩く女の髪を切り取りたい。物干に乾された湯文字を盗み集めて、もう二十年。出臍の女を探し廻ってる。などと、数えればきりがなく、それ等は、精励な市井人として暮している反面、自分は性的には実に孤独であるということを書いたがっているようであった。

そんな風に千客万来の日々で、弟子にしてくれ、と訪ねて来る男も何人かいたが、その中で、極彩色十数枚の自作の絵を持ち、弟子を志願して来た二十五、六の男がいた。広岡和助といい、陶器会社で陶器画工をしていた男で、その絵は、水車の責めあり、牛裂きの責めあり、蠟燭責めあり、画品は卑しいが迫力に満ちたものであっ

た。「どうして、こんな絵を描くんだ」と聞くと、少年の頃から好きだった、と彼は答え、以前、給料日には、真先に長者町や初音町の淫売宿へ行き、寝なくてもいいから、縛らせてくれ、と淫売婦に頼み、泊り分だけの金を支払って、縛った淫売婦の写生をしていたという。それが自分の唯一の楽しみだという和助の顔を見つめていた晴雨は、ふと自分の二十代の事を思い起こし、この男を弟子にして住み込ませることにした。最近、自宅附近の商家に強盗が入ったこともあり用心に書生を一人くらい雇う必要もあったのだが、自分も弟子一人を持ったという気分が楽しかった。とかく世間より白眼勝ちで見られていたこの変態画家の家に変態画家志望の弟子が転がりこんで来たということは、ふと復讐にも似た感懐となり、世間に対して、豪語したいような気分にもなった。

籍は、演劇月報社にあったが、毎夕新聞、都新聞、やまと新聞、などで晴雨は劇評欄を担当し、なお、講談読物、講談世界、文芸毎日などでは、小説挿画、それに加えて新派、歌舞伎の絵看板、新国劇の舞台装置と仕事は実に多忙を極め、月の収入も相当なものになった。

そんな或日、晴雨は、演劇月報社編集長の太森に誘われて、浅草オペラを見に出かけた。太森は、浅草オペラが好きで、気持のいらしたとき、やり切れないときは、必ず誰かを誘って、オペラへ行くようであった。晴雨は、オペラは苦手で、この低俗な唄入り洋風喜劇のどこがいいのか、さっぱりわからず、これにペラゴロなどという熱狂的な常連ファンが連日押しかけているが、何かそうした連中を時代が生んだ不思議な種族のように思っていた。むしろ、活

動写真の方が愉快であった。花のパーリーかロンドンか、月が鳴いたか、ほととぎす、とわけのわからぬことを弁士がしゃべり、いきなりピーと笛を吹くと、画面は冒頭から活劇場面、楽士連がそのどたばたに合わせて天国と地獄の賑やかな音楽を演奏し始める、という西洋ものも悪くはないが、やはり、好きなのは大きな目玉で売り出している尾上松之助、これを封切館で見ると、何人かの弁士を揃えて男女から子役まで役の分担をさせ、歌舞伎芝居さながらに伴奏も芝居同様の下座を使っている。しかし、大森は、陳腐で子供騙しだと活動写真は見たがらなかった。それに、活動写真は伝統のある歌舞伎と違い、すぐに内容がその筋の眼できびしく検閲され、風紀を乱す治安を乱す、という名目ですぐに上映禁止処分を喰っていた。

フランスの活劇映画「ジゴマ」が内務省より上映中止令を喰ったのも、悪人を英雄化し過ぎ、治安を乱すおそれありという、実に他愛のない理由によるもので、晴雨の期待する女の責め場が活動写真に登場することは、よほど時代が変らぬ限り、望むべくもなかった。

それはともかく、大森が珍しく、浅草オペラへ晴雨を誘ったということは、久しぶりに二人で話したい、という意味で、オペラを見終ってから、二人は、浅草観音劇場裏にある大衆的な酒場へ入った。晴雨の月々の収入は、大森のそれとはもう桁違いで、それでもなお演劇月報社には籍があり、晴雨は、大森にふと申訳ないといったうしろめたさのようなものを感じていた。晴雨の絵は、新聞雑誌の挿画、また劇場の舞台装置へと、かなり売れ出して来たが、大森の小説は一向に売れない。そんな所に気兼ねもあった。だが、大森は、そんなことにひがみっぽくこだわるような男ではなかった。むしろ、晴雨を世間に押し出したのは彼だといえる。世間に名を売る

ためには、まず、有名人と交際を持つことだと、演劇月報社と深いつながりを持つ市村羽左衛門の師匠に晴雨を推薦したのも彼であつたし、旧友の沢田正二郎を晴雨に紹介し、新国劇の舞台幕面を晴雨に担当させたのも彼であつた。

「少しは落着いたかね」と、大森は、晴雨に酒をすすめて微笑したが、文枝に去られた心の空白も、こう仕事に忙がしいと何時しか埋まっただろう、という意味であつた。やはり大森だけには、胸に鬱積したものを何でもいいたくってしまう晴雨である。やはり、文枝に去られた事で、こうも胸苦しくなるといふことは、自分は妻より妻の妹を愛していたというより、少くとも妻には愛情が持てないということがはつきりし、この際、しばらく妻と別居し、よく考えてみようと思うのだが、妻が身重になつてるだけにそれも出来ず、と晴雨がこぼすと、大森は笑いながら「いやだ、いやだと畑の芋はかぶりふりふり子が出来た」と流行の俗謡をうたつて「君なんかまだましな方だよ。俺なんか女房の腹に、また西川の子供が出来たらしい」と、さもつまらなそうに大きな欠伸をするのだった。

男と女の愛情なんていうものは、信用するに足らぬものだ。と西川も俺も思っていたが、西川の心理状態に最近、微妙な変化が現れて来た。と大森はいうのだった。西川は、猿丸卯兵衛の家を出て、大森に譲った玉江と再びよりを戻す気になつて来たという。それは、よくよくの決心で、西川が経営している演劇月報社は、彼の妻の父、つまり、猿丸卯兵衛の資金によって設立されたものであるから、西川が妻と離別することによって、会社は猿丸卯兵衛の手に彼の娘と一緒に引き取られることになってしまうだろう。西川が猿丸家より飛び出すのなら、演劇月報社からも飛び出なくてはならなくなる。

猿丸卯兵衛はそうした点、物質の原則を重んずる実業家だから情容赦する筈はなく、それだけですめばましな方で、可愛い娘の肉と心を蹂躪した憎い奴、と誇大に騒ぎ立て、あらゆる方法で西川を迫害し続け、社会的に葬るための手段を講ずるかも知れなかった。しかし、西川の決心は、玉江の腹に二度目の子供が出来てから強固なものとなって猿丸家における屈辱的な生活からはっきり訣別し、財産や地位などの未練もさりと捨て、玉江との愛情生活に人間的な幸せを見出そうという素朴な気持になっているという。と、そんな事をまるで人事みたいに大森は話すのだが、そして、俺も奴のそうした考えには賛成してやるつもりだ。などともいうのだが、すると現在の自分の女房は、西川に返還しなくてはならず、しかし、それは実にあっさりしたもので、「奴が頭を下げて頼んで来たんだからな、嫌とはいえないじゃないか」と、大して、心の抵抗も起こらないようであった。自分の女房に西川の子供が出来たとはっきり断言出来るのは、自分には子種がないからだ、と大森はいい、自分の性的欠陥を始めて晴雨に語ったのだが、そのくせ大森は、以前、晴雨が包茎短小に悩んでいるとこぼした時、いい医者を紹介してやるからと、二の足踏む晴雨を引っ張るようにして、包茎手術を受けさせたことがあり、普段は、鈍重で何でも面倒くさがるくせに、ふと思いつくと大森は執拗な位に人の世話をやく癖もあった。

俺としては、西川を強請りつづけていくより気持の解決方法はないけれど、会社を追ひ出された彼を強請りつづけるのは仲々骨の折れる仕事だと大森は苦笑し「こういうわけで、演劇月報社の命運もあとわずかだと見ていてくれ」と、大森は、それを晴雨に知らせたかったのだという。演劇月報社を手離した西川は、小さな出版社を

作り、最初から出直す胆でいるが、その折には、君もいろいろ協力してほしい、と大森は晴雨の肩をたたくのだった。ということは、西川が現在の会社を放棄し、別の事業を起した時、大森もまた会社をやめ、西川のあとについて、彼と運命を共にする気でいるわけなのだ。

何々食堂とか何々酒場とかいう田舎出の給仕女が盛んに大声で道行く人を呼びこむ浅草繁華街の店を飲み歩いた大森と晴雨は、久しぶりに大酔し、「このまま帰って寝るなんてつまらん。どうだ、吉原へ付き合わんかね」と大森は突然いい出したが、次に笑って、今夜は女房が西川と逢引きする日だ。だから俺は家へ帰れない、と云うのである。

紅鶴楼という大森が懇意にしている遊廓へあがったが、ここは客のふところ具合で等級をつけるらしく、ヤリテ婆、牛太郎などに晴雨が一元ずつチップをはずむと、出された浴衣の柄が普通客とは違って、それが一等客のめじるしになっているらしく、顔見世にヤリテ婆が、部屋へ連れて来た娼妓も割と上等ぞろいだったが、その途中、晴雨は、一寸、御免と手洗に立ち、そのとき朱塗り廊下を客を送って出て来た娼妓を見たとき思わず、あっと声が出た。もう何年前になるだろうか、博徒達に寄ってたかって鬨りものにされ、どこかの宿場女郎にたたき売られたお浜であった。やくざ連に私刑された彼女を見て、あのとき発作的に制作意欲をかきたてられ、腰元、竹尾の責め場を描いて、呉服屋の木村に渡したが、自分をあんな必死の思いで仕事させたお浜はやっぱり東京にいたのである。たまらない懐しさで、あの時、自分がやくざ連にけしかけてお浜を吊り責めにかけてさせた事など忘れ、「お浜さんじゃないか」と呼びかけた

が、お浜は晴雨を思い出せず、奇妙な顔をするだけだった。

今夜の敵方^{あいかた}には、ぜひあの娼妓を、と部屋に戻った晴雨は早速ヤリテ婆に頼むと、あの女郎は、けれど二等客専門なんですよ、と泊り客より時間客をとりたがる彼女の気尽を話し、嫌な顔を見せるのだった。とにかくあれが気に入ったんだ、時間でもかまわない、と晴雨は、簡単に事情を大森に話し、彼と別れて別の部屋へ入った。

もう何年になるかねえ、とお浜と二人きりになったとき晴雨は、桶屋の二階の一件を話し出した。お浜は、ああ、旦那はあの時の、と、ようやく納得したよううなずき、さぞや君は僕を恨んだことだろうな、と晴雨があらためて謝ると、ええ、そりゃもう、不倶戴天の仇だと思っていますわ、と紙煙草に火をつけて、微笑するのだった。当時のことは、今の自分には、もう何の関係もないこと、としているようで、晴雨はほっとした思いになり、あれからの経緯^{いきさつ}を聞くと、あの四人の遊び人達に千住の遊廓へ売りとばされた、と彼女は語り、そのあとのことは、私の自尊心を傷つけることばかりだから、あまりお聞きにならないで、と如何にも職業的な媚態を作ってそらせるのだった。給仕女が注文した酒を部屋の中へ運んでくるとお浜は、さ、お熱いうちにどうぞ、と晴雨に身をすり寄せ、銚子を手に取り上げる。二等客専門の女郎らしく、首筋には安白粉を塗りたくり、口には毒々しいばかりの紅、長襦袢の襟元をわざとはだけさせているところなど、こういう職業の泥に完全にまみれてしまっている感であったが、強いて媚びを売ろうとしない勝気なところがあり、そこだけが何年か前の彼女の面影を彷彿させていた。仙造とかいうあんたの亭主はどうした、と晴雨が聞くと、風の便りじゃ、上州あたりで喧嘩し、殺されちゃったということですよ、と、盃を口

に運ぶお浜の横顔には、流転の生活をつづけて来た疲労と虚しさかふと漂っていた。世の中に盲滅法に盾ついて、遂に敗北したというような諦感と頹廢の入り混ったその翳のあるお浜の表情と、黒髪の長いおくれ毛を眼にした晴雨は、哀れという気持とは別に、生酸っぱい快さのようなものを痛く胸に感じ出し、これこそ、遊女、浦里のモデルとして、ぴったриではないかと、にわかに責め画の制作意欲が首をもたげ出し、彼の眼は、異様な光りを帯び出した。あの時も、この女に刺戟され一気に竹尾の責め画に取組んだが、これ程、制作意欲をかきたてる女は珍しい。晴雨は、唾を呑みこみながらそう思った。

「君をモデルにして、また絵を描かせてくれないか」晴雨が切り出すと、お浜は、え、と顔を上げ、「私をモデルに絵をかくって、どういうことですか」と不審な顔つきになる。「遊女がヤリテ婆に折檻されている絵を描いてみたいんだ。モデル料は、充分に出す。ぜひ、頼むよ」と晴雨は必死の思いになった。「私は、別にかまわないんですけど——」しかし、自分は札つき故、この紅鶴楼より無断外出は許されない。ここへ来て絵をかい下さるなら。そういう条件でお浜は承諾した。札つきというのは、前借しておりながら、逃亡をはかった、という前歴があり、遊廓の見廻り役から監視の眼を向けられているということだった。「ああ、いいとも、明日から絵の道具を持ってここへ通うことにしよう」実際、晴雨は時間をかけて、お浜をモデルに遊女の責め場を描いてみたかった。モデルが実際の遊女で、画室が遊廓の一部屋というのは、この仕事のためには最高の条件のように思える。いわば、相手は売りもの買ひものの遊女であり、制作中発作的に欲望が起こっても、何ら気兼ねはいらな

伊藤晴雨遺作集 =その7=



いということもある。

その翌日から、晴雨は紅鶴楼へ画材をたずさえて通うようになった。最初は長襦袢一枚のまま柱を背に坐らせて緊縛し、襟元、裾前をだけさせ、黒髪を晴雨好みにおどろに乱れさせたもの。次の日は、お浜を全裸にして縛った。いくら娼妓でも、丸裸にむかれた身を雁字搦目に縛られれば、すねたり、怒ったり、また、多額なチップを要求したりするものだが、お浜は、何ら抵抗は示さず、これが数年前、暴力使行者の四人のやくざに、死物狂いで抵抗した女なのか、と晴雨は不思議な気もし、彼女の協力を心から有難く思うのだったが「絵をかくという客は、なかったけれど、こんな風に縛りたがる客は随分といううだわ。だからもう、私、慣れっこになっちゃまった」と、お浜はいう。三、四人に一人は、娼妓をこんな風に縛り、それを前技行為に結びつけるという事は、晴雨にとっては興味のある話であった。また、柱にきびしく縛りつけられたお浜は、筆を動かす晴雨に向かい、こんなこともいった。「旦那みたいに、こういう絵を描いている専門家がいの御存知？ 私ね、雑誌で読んだの。伊藤晴雨といってね、その人は、奥さんを雪の中で縛って責めたのですって。ひどいことする人もあるじゃありませんか」

お浜の体は、餅肌で、艶とねばりがあり、柱に縛られ、立膝している内腿には、血管が青く浮かび出て、それは地図のように美しく見えた。俺の探している理想に近い女だ、と晴雨は、仕事をつづけるうちに次第にお浜に魅せられていった。口は飾りけがなく、葉すっぱな所があったが、お浜は情の細やかな所があった。仙造という博徒の情婦になって苦労し、結果、こういう苦界に身を沈めることになったというのも、一旦、惚れこんだなら、たとえ相手が与太者

であれ、とことんまで尽すという彼女の性質の故だろう。こういうどん底に落ちこんで、淋しげな虚しさを、ふと横顔に見せるときはあったが、陰気ではなかった。他の娼妓達のように客相手の長々しい身上話などは嫌いで、客を床の上で悦ばせるのが、娼妓の仕事だと、大胆な肢態も平気でとり、かき立てられれば布団を蹴って、泣いたり、わめいたりする。絵の仕事が終ったあとは、お浜は緊縛されたままの姿で、烈しく泣きつつ、日頃の娼妓ぶりを発揮しようとするのだった。肉欲の奥から湧いて出た晴雨のお浜に対する情は日に濃くなり、身受けして、はつきり自分の女にしようと決意したときには、海老^{エビ}縛り、菱型縛り、棒縛り、立縛り、と色々実験的な縛り画十数枚が完成した。

お浜には内緒で、紅鶴楼の主人に相談を持ちかけ、お浜の前借百二十円を懐に、何日かおいて晴雨は再び吉原へ出かけたが、晴雨の顔を見るや主人は青ざめた顔をひきつらせて真に申し訳ないことが出来まして、と、立関の上り框へべたりと腰を落としてしまうのだった。晴雨がお浜を身受けする話は、この主人より直接にお浜へ話させたわけだが、その話をした次の日、お浜はここから逃走したと主人は晴雨に告げるのである。お浜には男がいたらしい、と主人はいい、傍にいたヤリテ婆は、さも口惜しげに口を歪めながら、そいつは、仙造というならず者で、顔中傷だらけ、しかも、片手を喧嘩で切り落されている片輪者で、あれだけの器量をした女が、どうしてあんな不具のならず者の喰いものになっているのか、わけがわからぬ、と愚痴るのだった。晴雨も、べたりと主人の横へ腰を落した。仙造は喧嘩で死んだとお浜はいったが、それは嘘で、お浜は女郎をしながら情夫をずっと養っていたのだらう。情夫のいるのを女郎が

客に隠すのは当然のことだが、お浜も晴雨に、それだけはやはりいえなかったようである。何々組の若い衆達にあのふざけた女郎の行方を今、探索させている、という紅鶴楼の主人とヤリテに、晴雨は懐に用意して来た金を預けた。お浜が見つければ仙造という男と晴雨と一緒にしてやってくれ、と晴雨は眼をしょぼつかせながら腰を上げる。そ、そんな馬鹿な、と主人とヤリテは顔を見合わせ、悄然と去りかける晴雨の袖を押さえたが、いいんだ、いいんだ、そうしてやってくれ、と晴雨は半分ベソをかきそうな顔して外へ出た。来たときから怪しい空模様だったが、急にバラバラ雨が降り出した。紅鶴楼の牛太郎が追って来て、旦那、どうぞ傘をお持ちになって、と晴雨に番傘を渡し、また、お近い内にどうぞ、と裾からげして走って戻る。傘を開けて、泥濘^{ぬかるみ}の道を歩くと、下駄に石がつまってガラガラ軋んだ。それは今の気持のぎこちなさにふさわしく、晴雨は舌打ちして石を抜き取り、力一杯、遠くへ投げつけた。

晴雨は、外泊が多くなった。愛着を覚えたものは皆自分より遠ざかっていく。お里にしても、文枝にしても、娼妓のお浜でさえそうであった。こうしたみじめな満たされない気持は、何か愛というものが芽生えぬいつわりの人生に現在甘んじているという不快感、それに附随して、現実にならずさわっている舞台関係、雑誌関係の忙しい仕事、何か偽物をもっともらしい顔つきして、演じているような、やり切れぬ嫌悪感を伴ってくる。自分は、女の責め面を描く以外、何の能力もないのだ、と口の中でくり返しながら、発作的に生活圏内から離れ、絵道具を懐に、色街から色街へと渡り歩き出したのだ。自分の手のとどかぬ所へ去ったお里、文枝、お浜の幻影を求

めるようにして、あちこちの娼妓を口説いて廻り、彼女達をモデルに絵をかくのだったが、肉体と神経をすり減らして、やっと形をなすものは気に入らない絵と不快な気分だけであった。

我、愛すもの、皆我より去る、そんなことを情なく意識しながら茫漠とした気持で紅樓の街をさまよい、無精鬚をのばしたぼんとした顔で五日ぶりに晴雨は家へ戻った。玄関に飛び出て来た弟子の和助は、「一体、どこへ行ってたのですか、先生」と怒った顔つきをした。新聞や雑誌の記者が仕事の打ち合せで何度も家へ来たという。その応待に実に苦勞したという和助の愚痴をフンフンと聞きながら、晴雨は画室へ入ったが「奥さんは越後の布村さんと今、老松座の芝居を見に行きました」と、和助も画室へついて来て、報告するのだった。布村は、二日前に越後から来て、昨夜はここへ泊った、と和助は晴雨の顔色を見ながらいう。先生が留守中のこと故、どうかと思ったのですが、と和助は、モジモジするのだ。布村が上京したとき晴雨はいつも自宅に泊めることにしていたから、その習慣に従っただけのことだが、やはり、主人が不在中故、和助は気づまりな思ひになったらしい。「そうか、布村さんが戻って来れば、牛鍋でもしよう」という晴雨のこだわらぬ表情を見て、和助は、ほっとしたように部屋を出て行ったが、そのあと晴雨は、肘枕して畳に寝そべりながら、妊娠八カ月の女房を連れて芝居見物に出かけるなど、布村もおかしな男だと思ひ、ふと眉が曇った。布村は、妊婦に欲情をそえられるという変わった性情の持主なのだ。まさか、とは思ふものの、布村が女房を連れ、芝居見物に出かけたというのも、疑えば奇妙な話だし、それに老松座で今、上演されているのは、鬼婆が逆さ吊りにした妊婦の腹を出刃庖丁で立ち割るという安達ヶ原

であった。名もない劇団が興業しているのだが、血ノリを使ったりして、グロテスクに演じ、かなりの大入りらしく、布村は、これを晴雨と一緒に見るのが第一の目的で上京して来たのだ。晴雨自身、この芝居は好きで、安達ヶ原の場面は講談雑誌、探偵雑誌の口絵などによく描いていた。臨月に近い妻を連れ出し、安達ヶ原を恍惚とした気分になって、見ている布村に腹が立つ。知能の低い菊枝だから、芝居を見て興奮した布村に、何だかんだとうまくいい寄られれば、彼の奇妙な欲望を満足させるようなことにもなりかねない、と本質的な愛情はもてなくなっている菊枝だが、やはり酸っぱい嫉妬は起るのだ。晴雨は、ふと、あることに思いついて、ニヤリと口元を歪めた。

その夜、布村は和助に起こされた。これから先生は仕事にかかるのだが、少し手伝ってもらえまいか、と和助はいう。夕方、牛鍋を晴雨夫妻、それに弟子の和助とつき合ったとき、やはり布村が見た老松座の安達ヶ原が話題になり、すると晴雨が、あんたが越後へ帰るまで、一つ僕が、あんたのために安達ヶ原を絵に描いてあげよ、と上機嫌でいったが、その仕事を晴雨がこれから始めるらしいのだ。といっても、もう夜中の二時に近かった。一体、何を手伝えばいいんで、と、布村は寝呆け眼をこすりながら、和助に案内されて二階へ上り、画室の襖を開けたが、途端にギョツとした。部屋の電気は消され、数本の蠟燭が立てられる中に、その光波にぼんやり浮かび上って見えたのは、天井の梁から逆さ吊りにされ、ゆらゆらロープの音を軋ませて揺れている妊娠八カ月の菊枝であった。湯文字一枚の丸裸を雁字搦目に緊縛され、おどろに乱れた髪は、床の上をすっている。髪を口に咥え、眼をつり上げた菊枝は、白粉のはげ

落ちた顔にカッと血の色を浮かべ、量感を持った腹部の筋肉は、伸びきったゴムのようにピンと張り、凄惨であった。すぐその近くで、庖丁を研石で研いでいるのは晴雨であり、これも蠟燭の炎にメラメラ浮き立って、カッと眼を見開いて吊られた菊枝を見上げた横顔は、さながら鬼婆のような凄まじさだった。「見ておれよ」と鬼に変じた晴雨は、布村の方を一瞥すると庖丁を逆手に立ち上った。布村は背中に冷水を浴びせられたように、ぞっとし、後退する。晴雨は、苦悶の形相物凄く菊枝を小気味良さそうに眺め、鬼女が足拍子を踏むかのように一步身をひくと、大きく庖丁を上へ振り上げた。「先生、気が狂ったんですか」と、布村は、思わず大声を上げたが、そのとき落花微塵に晴雨は庖丁を菊枝の腹へ打ちおろしたのである。ギャーという菊枝の悲鳴。さっと鮮血が飛び散り、肉塊とも腸ともつかぬものを晴雨が片手で血ノリと一緒に引きずり出した。その一瞬、布村の顔から血の気は引き、激烈なショックに打ちのめされたように彼はその場へ釘づけになってしまったが、そのとき、ボンと鈍い音がして、写真機のフラッシュが煙を吐く。写真屋の青木が、部屋の隅に隠れて機械を操作していたのだ。それを合図にしたように晴雨と和助がかけ寄って菊枝の肩に手をかけ、梁につないだロープを青木がゆるめて、徐々に菊枝の体を垂平に横へ倒していく。「奥さん大丈夫ですか」と和助と青木がようやく床へ降ろした。菊枝の縄を解きながら聞くと、「とても息が苦しかったわ。途中で気が遠くなりかけた」と、案外、元気でいい、「そやけど、お腹の子、大丈夫やろか」電気がつけば、布村の眼に、腹たち割られて飛び散った鮮血は、泥絵具、腸は真綿を赤く塗ったものであることがわかり、畳には新聞紙が敷きつめてあって布村を驚かすための狂言

だったのだ。脂汗を手拭で拭う布村を見て、晴雨も青木も声を立てて笑い合った。「最初、妊婦の逆さ吊りを写真にしてくれ、と先生にいわれたとき、僕は反対したんですよ」と青木は写真機をしましながら布村にいう。「奥さんは、丈夫だからいいとしても、お腹の子に万一のことがあっちゃあね。こんなことが、産婆の耳にでも入っちゃ一大事です。だが、この先生、いい出したら聞かねえんだ」まあ、そういうな、と笑いながら、晴雨は棚の上から一升瓶を取りおろすのだが彼の表情からは、先程までの鬼のような形相は嘘みたいに消えて「どうも、皆んな、お疲れさま。さ、一杯やってくれ」とえびす顔だった。「一度、どうしても妊婦の逆さ吊りを実験してみたかったのだ。丁度、マニヤの布村君が来たので、こいつはいい機会だと思ってね」晴雨は今日の実験で、妊婦吊りとは別に、も一つ、別の実験を兼ねることが出来た、と上機嫌であった。というのは、妊婦を責めることに異常な執心を持ち、芝居安達ヶ原の三段目、鬼婆の場面はとくに好きだという布村もそれが芝居や演技でなく、実際に女の腹を立ち裂くという場面に遭遇すれば、やはり、慄然とし、恐怖のあまり口もきけなくなるという事実であった。これが最初から妥協したものだとかわかっていれば、布村も晴雨に協力して妊婦を吊り、折檻することに色々意見を出したかも知れない。残酷趣味というものは、実際は、空想の域から脱することはないと晴雨は知覚したのである。実際に女体を縛って、それに折檻を加えた、その情景に憧れのようなものを抱く人間は多いということにはわかったが、それ等は、探偵小説マニヤが犯罪に興味を持つのと同様、あくまでも趣味であって、実生活において、自己の変態性をいびつな形でむき出しにするということは、まずあり得ないと晴雨は

伊藤晴雨遺作集 =その8=



わかったような気になった。いふなれば、自己のサジステイックな性癖を楽しむことの出来るサジスト、そうしたものである。自己の魂に内蔵している変態性を趣味として、楽しめる変態性欲者に俺は貢献する変態画家だと晴雨は自分を定義づけてみた。残酷を単に趣味として有する者を変態性欲者と一般に片づけることが出来るだろうか、その種の人間は、むしろ、普通一般の社会人よりも、性に趣向を持つだけ、人間味のある人間といえるのではないかと、晴雨は飛躍して考えてみるのである。少くとも自分は、その種の人々を慰めるために役立つ人間だ、と晴雨は、正直そう思ったのだ。

妊婦、逆さ吊りの実験が終わったあと、酒を飲みながら、晴雨は議論でも持ちかけるように、そうしたことをしゃべり出したが、布村も和助も、それには全く同意し、和助は、「先生は、趣味を持つ人々が、横道へ脱線することのないよう警戒する意味で、責め画を描かれている、そんな風に考えるときがあります」というのであった。

それから、二カ月経ち、菊枝は無事、子供を生んだ。女の児だった。半分は人の女房を無断で外へ連れ出した布村をおどかしてやるつもりで、逆さ吊りの実験をしたのだが、さすがに、その翌日から、胎内の子供に支障が生じたのではないかと気がかりで、何かにつけて菊枝の体に気を配るようにしたが、生まれて来た子供は、まるまる太って、五体健全、晴雨は、ほっとした。これで、常子に妹が出来たのだ。葉子と名づけた。葉子が生まれてから、晴雨の菊枝に対する感情にわずかずつではあるが変化が生じた。これまでは、いささか知能が低い、一寸人前には出せぬ非常識な女、という不快さと、モデル以外には何をさせても駄目という苦々しさから、本質

的には到底愛す事の出来なかった菊枝であったが、菊枝が一児の母親となると、よくこれまで辛抱して、無事子供を生んでくれた、という気持ちから、晴雨は一種の諦めのようなものを持ったのである。

俺はこういう女房に満足すべきなのだ、という自虐的な快感も生じて来たのだ。これまで惚れた女に背負い投げを喰わされ続けた酸っぱい気持ちもあって、自己の運命を知ったように淋しい落着きを得たのである。そう思うと、妙に頬骨の出っ張った菊枝の頬も、勿論最良眼ではあるが、桜色に脂がのって、ふと色っぽく感じられ、子供一人生んでも、乳房にたるみが出てこないのが頼もしくもなり、また、辛い、苦しい責め絵のモデルに苦情一ついうでなく、縄を出せば、反射神経を働かす如く両手をうしろに廻して、協力してくれた菊枝が可愛い女に思われる。いい方はおかしいが、晴雨が若い頃から妻となるべき女に求めていた条件は、性欲の相手になる他、画作のモデルを引受ける、ということであつたから、教育もなく自尊心も持たわさず、亭主の友人の見守る中でも何ら抵抗を感じることなく裸体になり得る菊枝は、晴雨にとっては、一番ふさわしい女房といえるのかも知れない。

そういえば、女性は便宜的に考えればいいものだ、と晴雨に教示した西川と大森の心境にも変化が生じて、二人は、人間的に、一つの境地に向かい出した感があつた。西川は、はっきりと妻のみどりと訣別し、演劇月報社を放棄したのだ。会社は、そのまま、青雲出版に合併され、社長は西川より猿丸卯兵衛に受け継がれ、十数人の社員は、そのまま仕事をつづけることになったが、勿論、編集長の大森は、西川と共に会社を飛び出し、晴雨も、これを機会に独立の形をとった。大森は西川に、妻を返還した。大森のことだから、再

び何かの条件を西川に提出したことだろうが、会社を放棄し、失業者となった西川に、何を要求したことやら、思えば心細い話であつた。しかし、それで、西川は、何年かぶりかで以前の女と世帯を持つことが出来たわけで、四谷の化粧品店の二階を間借りし、親子三人、平和な水いらすの生活を送っている、と大森は時々晴雨の所へ一升瓶を持って夜中に訪れ、西川の消息を聞かしたのである。

「結局、俺は三年もの間、西川の女房の生活と性欲の面倒を見てきたようなもので、何をしとるのか、さっぱりわからん」と、大森は自嘲的に笑い、晴雨も世の中に、これほど間の抜けた話はない、と思わず、つられて笑つたが、神田三崎町の倉庫を改造した事務所を借り、西川が青柳出版という出版会社を持つことになったのは、それから一年ばかり経つた頃であつた。

その第一回目の出版に君の画集を予定したと、大森が西川の使者として、正式に交渉するため、また、晴雨の所へ姿を見せたのである。「僕の画集だって？」ふと信じられない面持で、晴雨が大森の顔を見ると、「そうさ。君の得意とする責め画のことだよ」と大森はうなずき「今まで君がコツコツ描き溜めた作品の集大成といったものを出版したいんだ。力一杯仕事してくれないか」晴雨は、満面に喜色を浮かべ、急にそわそわ、立ったり坐ったりした。しかし、裸体美術問題が新聞の社会面を賑わせている現在、やはり裸女を扱う自分のそうした画集など風俗紊乱のかどで忽ち官憲の手の及ぶ所になりはしないかと、晴雨は心配するのだったが、そんなこと一々心配しとりゃ今時、何も出来ないよ、と大森は笑い、「これは勝負だよ、勝負事のない人生なんて、つまらないものじゃないか、君」と、自信ありげな微笑を口元に浮かべるのだった。君の芸術を理解

し、支持する人間は一体、この世にどれ位いるものか、これは君にとっても、大いに興味のあることだと思ふし、西川も僕も、この企画は、必ず成功すると確信を持ってるんだ、と大森は、青柳出版の運命をこの第一回出版の晴雨画集に賭ける気なのだ、と気魄の満ちた表情になるのであった。「よし、わかった」と晴雨は、大森のふと真剣になった眼の色を見て、胸がうずき、大きく息を吸った。これ程、やり甲斐のある仕事の注文を受けたのは始めてだと、さっと立ち上った晴雨は両手を上げて「萬歳」と叫び、仕事にかかる前の前景気をつけようと、まだこれから仕事があるという大森をつかまえて離さず、吉原へ誘ったのである。

明るいうちは、新聞雑誌の挿画、舞台の幕画、などの仕事にかかり、夜になれば、晴雨は画室に閉じこもり、面会謝絶、一意専心、責め画に取り組んだ。しがな街の看板かきをやっていた頃から秘かにかき溜めていた責め画を整理し、それに手を加え、晴雨は生まれて始めて、仕事らしい仕事にかかることが出来た悦びに胸が慄える思いだった。画作三昧とでもいった恍惚とした気分になりつつ、俺の芸術が遂に世に出る時が来たんだぞ、精魂こめてこの仕事と取り組め、と自分に呼びかけつつ、晴雨は堅く筆を握りしめるのだった。

二カ月たち、晴雨が神田の青柳出版を訪れると、ガランとした殺風景な事務所には、たった一人の女事務員が、パチパチ算盤をはじいていて、ああ、先生いらっしゃいまし、とあわてて立ち上ると、西川社長と大森さんは今、取次店の方へ廻っておられます、と答えた。奥のコンクリートの壁に添って、製本されたばかりの晴雨の画

集がうず高くつまれてある。ここにあるのは三千部。明日残りの五千部が製本されてくる事になってます、という事務員の言葉を満足げに聞きながら、晴雨は積まれてある中から一冊を抜き出した。伊藤晴雨著、美女責め画三十六景。それは、大森より刷り上り見本として、十冊ばかり以前に晴雨は受け取っていて、呉服屋の木村や越後の米問屋布村などマニヤの友人達にサインし、すでに送っていたけれど、いくら眺めても処女出版というものはいい気分のものであった。いい気分といえば、晴雨はそのうちの二冊を自分をもと働いた日報新聞の田所と三宅当てに送っていた。お前の描いている絵は、人を不快な気分にするだけのものだときめつけた彼等に対する当てこすり、こうした絵でも愛好する者は、ごまんとおり、この通り、出版さえ出来るものだということを誇示したかったのだ。仕返しが出来たようないい気分であった。しかし、あとでこれがとんでもない結果を生む原因になるとは、この時の晴雨は夢にも思わなかった。

事務員に、出されたお茶をすすりながら、くりかえし、くりかえし、画集に眼を通していた時、「よう先生、いらっしゃい」と、大森が西川と一緒に戻って来た。西川は、大島紘の着流し、大森は職工の着る菜っ葉服を着て、追い込みの仕事のため、徹夜でもしたのか二人とも腫れぼったい眼をしていたが、表情は生き生きとしていた。「取次店の方は、見本を見て、これなら一万はかるくはけるといって大鼓判を押したよ。何しろ、今の大家は刺戟に飢えているからね」大森がそういって、持前の豪放な笑いをすると、西川も「これが成功すれば、続いて二弾三弾と伊藤晴雨の責め画を発表していくつもりですからね。一つがんばって下さいよ、先生」と、顔をほ

ころばせ、女事務員に、「この先生はお茶じゃ駄目だよ、酒屋へ行って一升買って来なさい」と金を渡し、古物の机や椅子をくっつけて、酒席を作り出すのだ。女装すれば、水もしたたる美女に変貌する西川も、今は、この仕事一つにこれからの運命も賭けて、もう呑気に女装どころではないのだろう。何としても、この仕事をやりとげるぞ、といったような男性的な、ひたむきな気概が全身にこもっていた。

その次の日は、新国劇の舞台装置の打合わせで晴雨は、明治座の楽屋へ行き、新作月形半平太の舞台画について、沢田正二郎の意向を聞き、裏方達と念入りに打合わせを行った。今回の新国劇の仕事は、晴雨にとっても重大であった。久方ぶりに関西より出て来た新国劇は、東京における旗上げ公演の失敗を挽回すべく、座員一同気魄に満ちている。行友李風という座付作者を得てから新国劇は当たりを取るようになり、行友作の月形半平太、国定忠治、いずれも関西では大成功をおさめたのだ。その狂言をたずさえて、新国劇は、いわば捲土重来のための東京公演となったのであり、座員から裏方に至るまで、皆、なみなみなぬ気概がこもっている。そんな空気に捲きこまれ、晴雨も、大いに力を入れて、早速、その日から、芝居のはねたあと、舞台の上で装置の画作にかかった。初日まで、あとなぞか故、仕事は徹夜となり、翌朝、晴雨は、疲労し切った表情で、一旦、家へ戻ったが、玄関に出迎えた菊枝が、さっきより、浜本義雄というお客が来て、もう二時間もあんたを待っていると告げる。浜本義雄というのは、晴雨が仕事をしている「講談世界」に、時折、探偵小説を発表している男で、一度か二度、顔をつき合っていた事があった。

「よう、いらっしゃい」と、浜本が待っている奥の居間へ晴雨が微笑を浮かべて入って行くと、浜本の方はニコリともせず、「早速で恐縮だが、貴方にぜひ御紹介したい人がいる。僕と一緒に来て下さいませんか」と、いうや、もう立ち上がるのだった。こっちは徹夜で疲れているのに何を突然、と不快な気分になったが何か大事な事柄らしく、晴雨は一まず顔だけ洗って、浜本について表へ出たが、浜本は近くの車屋へ行き、人力車二つを注文して、「東京地方裁判所へ頼む」

裁判所など一体どういうわけなのだ、と晴雨は妙に無気味な気分になって浜本に聞いたが、それには答えず、彼は、先に車に乗りこむのだった。

連れて行かれた所は、東京地方裁判所の、検事室であった。その時、晴雨は、ふっと気がついたのだが、浜本は探偵小説を書いてはいるが、彼の本職も裁判所の検事なのである。浜本は、その検事室で、吉川という同僚の検事に「じゃ、一つ、よろしく頼む」と晴雨の身柄を引き渡した形で、さっさとその場から引揚げていく。晴雨はうろたえた。「浜本さん」と心細さに大声を出し、彼を呼び止めようとすると、吉川検事は、「君に用があるのは僕だ」と叱りつけるようにいい、「さ、その椅子に坐って」と、ギョロリと大きな眼を向いた。

「君が伊藤晴雨なんだね」検事は、机の引出しを開け、新聞誌にくるまれてあった一冊の本を取り出したが、その瞬間、晴雨の体は小刻みに慄えた。三日前に、製本されたばかりの晴雨の画集、「美女責め画三十六景」が眼の前の検事の手に乗っている。やはり、猥褻文書としてひっかった、とそう感じた途端、晴雨は眼まいが起こ

って椅子から転げ落ちそうになった。夢も希望もガラガラと音を立てて崩れ落ちた感であった。

「何だねこりゃ、ええ、君」と、検事は、ペラペラ頁をめくりながら、陰険な眼つきを晴雨に向け、「猥褻文書の疑いで今朝方、全部を押収したよ。青柳出版の西川と大森は逃亡したが、まさか君がかくまっているんじゃないだろうね」検事は、鉛筆で机をトントンたたき出す。逃亡？ 晴雨は、眼をパチパチさせた。吉川検事の話によると、今朝、係官が青柳出版を急襲し、取次店へ配達直前のこの変態画集八千部を押収した、という事である。丁度、西川と大森が出社して来た時で、二人は係官に令状を見せられて真っ青になり、ぼやぼやせず、貴様達も手伝わんか、と係官にどなられて、警視庁に運ぶため、山と積まれた画集に縄がけする仕事を手伝ったが、途中、一寸席を外したまま、二人とも戻って来なくなったというのであった。

「二人とも、自宅の方へは戻っとらんし、君の所へ逃げこんだのじゃないかと思うんだがね」と、検事は、煙草の煙を晴雨の顔に吐きかけるようにしている。自分は舞台装置の仕事で楽屋に泊りこみ、今朝、戻って来たばかり。この事件は今、始めて知ったのだと晴雨が正直に答えると、「よし、わかった」検事は、ついと席を立てて部屋を出て行ったが、すぐに二人の刑事を連れて戻って来た。「さ行こうか」刑事は、晴雨の肩を軽くたたいた。「一寸、質問したいんですが」おろおろしながら立ち上がった晴雨は、気弱に眼をしばたいて吉川検事を見た。「まだ書店にも出廻らない内にどうしてこれが押収されてしまったんです」吉川検事は、皮肉な微笑を口元に浮かべて、「天網恢々疎にして漏らさず、だよ。心がけが悪いから

密告なんぞされるんだ」刑事二人も笑った。「誰が、誰が密告したんですか」晴雨は、興奮した口調になったが、「そんな事はいえんよ。さ、来るんだ」刑事は、両方から晴雨の手を取った。

刑事二人に連行され、晴雨は虚脱した表情で廊下を歩く。表へ出ると囚人用の車が止まっていた。誰が浜本に密告したか、晴雨は囚人車に揺られながら、考えつづけたが、急に顔に血がのぼった。浜本は、最近、日報新聞に海外の探偵小説を紹介し、その批評を書いている。とすれば、日報の編集長田所と彼の腹心の三宅へ送った画集——なるほど、これなら辻褄が合う、と晴雨は、ぐったり体から力が抜けた。これ見よがしに彼等へ送った画集が災いの原因となつたのだ。癪にさわった彼等が、作家であり検事である浜本に猥褻文書として密告したのに違いなかった。

晴雨は一旦、日比谷警察署に連れて行かれそこで長時間にわたる取調べを受けた。徹夜の疲労と神経の混乱から、晴雨は、係官の審問に満足な答弁が出来ず、面倒くさくなって来て、もうその辺で勘弁してくれ、などといい、係官の心証を悪くした。拘留十日を宣告され、再び刑事に連行され、今度は警視庁へ送られた。

生まれて初めての留置所入りだった。牢舎は三方板で囲まれ一方には、いかめしい鉄の格子が、はめられてある。五燭の鈍い電球が房と房との間を照らし、空気さえ不潔に濁って感じられる陰気な房の中で、五人の同監者と晴雨は、せんべい布団にくるまり、憂鬱な一夜を過ごしたのだ。金にも仕事にも恵まれ市井人として満たされた生活を送っていた自分が実に些細な事から、こういう不快な留置所暮らし——現実の薄い垂れ幕をひよいと掬めくれば、正に紙一重に、こうした奈落の世界があるのだという一種の皮肉な感慨に晴雨

伊藤晴雨遺作集 =その9=



は浸るのだった。

小さな灯り^{あか}取りの天井窓から、朝の空気が入る頃、起床！ といふ係官の号令、同監の者達と夜具をたたんで房の隅へ積み上げると間もなく菜っ葉の味噌汁と沢庵だけの朝飯が運ばれて来る。この食事は八銭で業者が請負っているが、実は六銭でおろし差額二銭が役人のリベートになっている、という囚人達の話聞くのも晴雨にとっては興味が持てた。

翌一日は、取り調べ中という事で家族達との面会を許されなかったが、二日目になって、晴雨は、葉山という検閲係長の前に呼び出された。「君は、新国劇の舞台装置を引き受けているそうじゃないか」と係長は、晴雨に椅子をすすめて云い、「その仕事の途中で留置所へ入って来るなんていかにじゃないか、君」と、云ってから、机の上の手紙を開けて、「君が仕事をしないと新国劇の幕があかんと沢正が手紙で文句をいって来たんだ」新国劇から使いの者が座長の手紙を持って、ついさっきやって来たといふ係長はいい、それには、本人の拘留は別問題として、この舞台装置だけはどうか伊藤晴雨に仕事をさせてくれ、という意味の事が書かれてあった。といっても君を表へ出すわけにはいかんから、今日からここで仕事をしろ、と係長は弱り切った顔つきでいい、材料や筆、道具など取り揃える事を許可した。一旦、仕事を任したなれば相手が留置所へ入っても追って来て、仕事を完成させようとする座長の心意気に晴雨は胸が痺れ、彼の手紙に向かって深く頭を下げ、早速、面会に来た弟子の和助を走らせて、仕事の道具を留置所へ運ばせた。その日から、晴雨は検閲係長の部屋で仕事を始めた。葉山というこの係長も余程、芝居の好きな男らしく、晴雨の仕事を監視する名目で横に付き添った

まま、菊五郎がどうか吉右衛門がどうか、うるさく晴雨に話しかけ、しまいには、意見対立、口論になったりしたが、手のすいてる時は、絵の具をとかしたりして晴雨の仕事に協力する程、気のいい係官であった。

十日間の拘留満期となって、晴雨は迎えに来た菊枝と和助、それに呉服屋の木村、写真店の青木達と家へ帰ったが、晴雨が拘留されている間、この事件は、かなり大きく新聞にとり上げられていたようで、しかし、それは芸術を理解せぬ検事局が無法にも画家に弾圧を加えた、といった晴雨に対する同情から発したものではなく、拘留されている画家に舞台装置をさせたという当局の緩慢さを非難したものであった。囚人の個人的な仕事に看守が手を貸すなど前代末聞、と日報新聞などはとりわけ大きくこれを記事にしたが、猿丸卯兵衛の傘下に入った演劇月報も、囚人に舞台の仕事を発注した新国劇を非常識だと非難し、正に四面楚歌におかれた自分を晴雨は情なく意識するのだったが、この世論に油を注がれた形で検事局は再び動き出したのである。

西川と大森が苦心して、ようやく出版にまで漕ぎつけてくれた自分の画集を、今一步の所で自分の迂濶さから、それを落下微塵に崩壊せしめ、また、自分に思いやりをしめてくれた新国劇に対しても、結果、大変な迷惑をかけてしまう事になった、そうした申訳なさで晴雨は心痩せる思いだったが、そこへだしぬけに検事局から再度の召喚であった。

虎の門の裁判所で検事拘留十日を再びいい渡され、今度は巢鴨の刑務所へ送られた。この時、晴雨は始めて手錠をはめられた。腰縄を打たれ、編笠をかぶせられ、大勢の囚人と一緒に鉄扉のついた囚

人自動車に乗ったが、一体、自分が何をやらかしてこんな目に合うのか、さっぱりわからなかった。西川や大森、新国劇の座長に対する申訳なさから、自ら進んでこうした罰を受けていると思えば少しは心も落着いたが、申訳ないといえば、留置所内で仕事をさせてくれた人のいい検閲係長の葉山も、この事件の責任をとらされて免官になったという。——我れの愛せし女、皆、我れより去り——晴雨は、囚人自動車の中で体を揺られながら口の中でいった。——我れに優しき人々、皆、憂き目に合う——。雑房の中では囚人達は退屈まぎれに自己紹介を兼ねて自分がここへ入って来た理由を語り合うものだが、その順番が廻って来た時、晴雨は、「俺は自分を生かそうとしたために、このざまになった。やりきれねえ話だよ」といった。

そのやり切れねえ事がまた一つ、十日間の拘留を解かれて娑婆へ出た晴雨を待っていた。刑務所から出て来る晴雨を表に迎えに来ていたのは、この時、呉服屋の木村一人で、彼は円タクを拾って晴雨をそのまま、「夜桜でも見に行こうよ、先生」と、飛鳥山へ連れて行った。もう四月の中旬も過ぎ、桜を見るには季節外れの感があつたが、半ば散りかけた夜桜も風情があり、晴雨は、木村の好意に感謝した。ゆるやかな夜風に当てられて、はらはらと散りこぼれる夜桜を見ながら、桜の簪をさした美人芸者が客と連れ添い、そぞろ歩きを楽しんでいる、そんなしっとり濡れたような光景を眺める晴雨は、これもこの世ならあれもこの世か、と今までの不快な留置場生活振り返り、涙が出そうになった。

「先生、腹を立てちゃいけないよ、いいね」と、木村は、茶屋の掛椅子に坐って、銚子を二本ばかり空にした頃、晴雨の内弟子の和助

が菊枝と関係が生じた事を告げた。晴雨は、散る桜を寂しげに見つめたまま、虚脱したように眼をしばただけであった。「和助が奥さんと一緒に三日ばかり前、私の所へ来てね。自分達からは、どうしても切り出し憎いんで、私から先生にいつてくれと、頼むんですよ」どうする？ と問いかけるように木村は晴雨の横顔を見たが、出来たものは仕様がねえや、と晴雨は自嘲的に小さく笑うだけだった。刑務所に入って、人間が出来たというわけでもないだろうが、晴雨は妻と弟子との姦通を知らされても、忿怒を超越した冷淡な表情を見せ、木村は何かほっとした思いになった。

いわば快心の作といえる女体緊縛の画集を出した事から、晴雨が二度にわたる留置場入り、こうした事が影響し、和助の心をぐらかせたようである。自分の前途に希望が持てなくなったのだ。如何に好きな道とはいえ、社会より罰せられるような仕事をつづける勇氣は、若い和助にはなかった。社会が親切に与えてくれた仕事を忠実にやっていればいいものを、くだらないものなんか手を出してといった菊枝の愚痴。それに前後合わせて二十日にもなる主人の不在。不安と淋しさにぼつねんとする妻と弟子が、そこでありきたりの関係に陥ったというのも、さほど不自然な事ではない。

晴雨は家を出る事になった菊枝と和助を駅まで送って行った。駈落ちする二人に晴雨は貯金のほとんどを餞別として持たせてやったのである。

「先生、僕は、何と云っていいやら——」と、駅へ向かう途中、和助は涙まじりに、そればかりくり返し、晴雨はその度、「云えないなら何もいうな」と叱った。

「責め画は俺一代で終りだ。これからお前達何をして暮していくのか知らないが、俺みたいな馬鹿な真似をするんじゃないぞ」

菊枝との間に出来た子供、葉子は、晴雨が引き取った。お里との間に出来た常子は七つ、菊枝の間に出来た葉子が三つ、この姉と妹の手を引いて晴雨は離縁した女房を駅まで見送ったのだ。「かんにんしてや、お母ちゃんを」と菊枝は涙を流して、常子と葉子に頼ずりし駅の中へ和助と一緒にかけこんで行った。

菊枝と暮した期間は七年、最初は、どうにも愛情といったものを持ってなかった菊枝に、自分に統制がとれるようになった故か、ようやく妻としての感覚を持った時、こうして別れねばならぬ運命が訪れたのである。人間が人間を果して本当に愛し続ける事が出来るものなのか、こいが俺にはわからない、といった大森の言葉が、ふと淋しく思い出されてくる。大森といえば、一体、どこへ雲隠れしてしまったのやら、あれからもう三カ月もたつのに彼と西川の行方はわからないのだ。

おみねという六十三になる老婆を雇って、子供二人の面倒を見させ、晴雨は心機一転したよう世相を戯画化した東京風俗絵双紙をまる三カ月、半分は謹慎の意味で、家に籠りっぱなしで描き上げ、あちこちの出版社へ持ちこんだ。しかし、どこの出版社もそれを取り上げようとはしなかった。世間を騒がした危険分子として、出版界は晴雨を敬遠し始めたようである。挿画の注文も、晴雨が刑務所より出て来てからは、ばったりと途断えた。

「このままじゃ生活の設計が立たんじゃないですか、そいつを自費出版してみちゃどうです。資金は私が何とかしましょう」と呉服屋の木村は心配して晴雨に持ちかけた。そんな木村の友誼を晴雨は素

直に感謝したが、大森と組んで美女責め画三十六景の出版を企画した時のような張り切った気分にはどうしてもなれない。うちつづく不幸に気持ちがいじけてしまったのかも知れない、と見てとった木村は「どうです。青木でも誘って、カフェーあたりに縛りモデルでも探しに行きませんか」と話を女責めの方に切りかえてみる。仲間うちで、こっそり楽しむだけなら、何も世間に気兼ねする事はあるまい。すると晴雨の表情に気が蘇った。「上野の木の実というカフェーに、なかなかいい女給が揃ってるそうだ」と、晴雨は、もう調子づくのであった。

カフェー「木の実」に、いい女が揃っていると、晴雨に教えたのは、彼の家に住み込みで働いているおみねであった。六十三才のおみねは安達ヶ原の鬼婆のモデルにするのがびったりと思われるぐらい、肌は乾いて頬骨はとがり眼はつり上がって、歯は曲り、子供が虫を起こすのではないかと最初、雇い入れるのに躊躇したぐらいの婆だったが、それでもなかなか愛嬌があつてよく働き、しかし、昔は、松島で女郎をした女であつた。荒稼ぎを強いられている内、怪奇な容貌になったと本人はいつてるのだが、晴雨の家に住み込みになる二、三カ月前までは、新宿のカフェー何軒かの女給の夜食を作る仕事をしていて、男好きのする女給が揃っていたのは「木の実」だと晴雨に教えたのである。

青木を呼び寄せ、木村をスポンサーとして早速、カフェー「木の実」に遊びに出かけた晴雨は、孤独と不安の破れかぶれな気分から飲み騒いでいる内、君代という女給と、ねんごろになった。最初の妻、お里の面影を彼女はどことなく持っていて、晴雨は、そこにひきつけられていったのかも知れなかったが、君代は水商売の女にあ

りがちな打算やかけひきはなく、世間に白眼視され、母親の違った子供二人を抱えて生活と戦っている晴雨に女心を刺戟され、何かと世話をやくようになったのだ。「木の実」へ通う事になって、一カ月ぐらいに晴雨は君代と肉体の關係を持った。浮わついたものではなく、本気であつた。二人がそんな間柄になると、最初は皆んなで縛りモデルを物色に行つたのに、自分だけでもていい氣になつてるのは一寸虫が良すぎると、木村と青木は笑つたが、君代は、思いやりもあり、しっかりした所もある女に思えるから、思い切つて一緒になつてはどうか、と二人も晴雨にすすめるのだ。淋しさを癒やすにも、荒んだ方向を切りかえるにも、妻帯する事が今の晴雨にとつては一番の良薬だと木村は晴雨のために、そう思つたのである。

ところが或る夜、晴雨が君代を始めて自分の家に連れて来ると、「あ、お母さん」と、君代はおみねを見て、びっくりした顔になつた。おみねもびっくりしたが、晴雨もびっくりした。女給達の夜食を運んでいたカフェー「木の実」は、割に粒揃いの女が揃っていると、おみねは晴雨に教えたが、しかし、そこに自分の娘が働いているとは教えていなかった。

晴雨が、君代と世帯を持つという事になると今まで、おい、おみね、と呼びつけにしていたお手伝いの婆に、お母さんと呼ばねばならなくなったが、おみねと君代は、どういうわけか、実の親娘であるのに仇同志みたに仲が悪かつた。君代が晴雨の家に移つて来てからというものは、ほんの些細な事からすぐに口論を始め、おみねが台所で泣いてると、君代は二階の階段で泣いていたりし、晴雨は酸っぱい表情で喧嘩の仲裁を毎日くり返さねばならなかったが、自分の母親は元、松島の女郎であつた事、自分の父親は今もって誰だ

伊藤晴雨遺作集 =その10=



かわからない事、そうした不幸を君代は憤懣の形にして母親に当たり散らすという風に晴雨には感じられた。それが子供の頃からの習慣になっていたのだろう。おみねも、娘の母親としては完全に失格であった。晴雨の晩酌に娘の止めるのも聞かず割りこんで来て、酔っぱらって奇妙な猥歌を唄い出すのはまだいいとしても、「わたしや松島の女郎でいた頃——」と、娘夫婦のいる前で、「忙がしい時は、まわしでよく客をとったものだ」などと、女郎時代の話を得々として語り出し、そこでまた娘と大喧嘩になる。

君代が晴雨の所へ来て、三カ月ばかりたった頃、娘の云い草がいよいよ腹にすえかねたといった調子で、おみねは身の囲り品を風呂敷にくるんで憤然と家を出て行った。たしかに娘に追い出されたといった恰好だが、それで晴雨は実際の所、ほっとした思いになったのである。

君代は、家から母親の姿が消えると、今までの埋め合わせをつけるかのよう献身的に晴雨に尽すようになった。自分の生い立ちのうしろめたさを必死になって晴雨に詫びるような風にもそれは受け取られる。先妻の子供二人の面倒をよく見たし、よく小まめに働き、しかも、これは晴雨にとって、最も重要な事であったが、彼女は責め画のモデルも悦んで引き受けるのであった。いつかは江戸刑罰史に出てくる処刑図を、それを自分好みにすべて女囚に置きかえて描いてみたいと思っていた晴雨は白木の柱で磔台を作り、逆さ磔というどぎついポーズを君代に要求してみたが、彼女は嫌な顔はしなかった。そんな残酷画のモデルを演じ、晴雨に飼育されていく内、君代も例外ではなく、責められる事にふと悦びを感じる女に変貌し始めたようである。

番町皿屋敷のお菊を、君代をモデルにして描いてくれぬかと、呉服屋の木村がわざわざ小僧にお菊の衣裳など持たせて、手紙で注文を出して来た時、晴雨は木村をその仕事場へ招待しようと君代に相談した。木村は、晴雨の生活費の事を考え、時折、画料を先渡しで責め画の注文を出してくれるのだ。その友情にこたえるため、庭で実際に井戸吊りの場面を演じ、木村を悦ばせてやろうという晴雨の思いつきにも君代は同意した。——それは、月のきれいな夜であった。庭といっても二十坪ばかりの荒れた土地で、そこにある古井戸にお菊に扮した君代を吊り上げ、左右に燭台を置き、少し離れた所にゴザをひいて、晴雨と木村は、二人だけの酒宴をはった。酒の肴は、眼の前の井戸に吊られている番町皿屋敷のお菊である。あられもなく華美な長襦袢の襟元、裾前をだけさせ、おどろに乱れた黒髪をぐったりと肩元まで垂れ下げて、荒縄できびしく縛られた身を宙に吊られているお菊に、粘っこい月の光波が蒼白く降りかかり、それは夢幻的な一幅の錦絵のようであった。晴雨と木村は互に甘く胸を刺戟されながら、飽かずに井戸に吊られた美女を眺め、それから燐光のような月の光を照り返させている夜露を帯びた瓦屋根、小庭の隅の菊の鉢、厠の窓の竹格子などを見廻しながら、ここだけは我々の世界だといった幸福感を持った。生きてる事の楽しさといったものを、しみじみ感じとったのである。

あの事件以来、新聞雑誌関係よりのまともな仕事はばったり途絶えてしまったが、うまく出来たもので、あちこちのマニヤからコレクション用の責め画の注文がかなり舞いこむようになった。久方ぶりに越後から布村が上京して来、晴雨は彼の注文を受けて、美女、木馬責めの絵を描いて渡したが、越後へ帰る彼を上野まで送って行

った帰り、晴雨は、ふっと疲れを覚え、フラフラ飲屋横町へ入って行った。安酒で自分を元気づけようと、赤い提灯に縄のれんの店を二軒ばかり飲み歩き、いい気分になって表へ出た時「ねえ、あなた一寸、私の所お寄りにならない」と、しねしね顔を動かしながら近寄って来たのは、鼻の頭の白粉が剥げ落ちているおかまであった。

「悪いけど俺はおかまは苦手だ」晴雨が歩きかけると、そのおかまはしつこくつきまとって、遊んでくれなくなっていたいいから一杯飲んで行ってくれ、と頼むのである。自分達の仲間が経営している店があるというのだ。「よし、酒なら飲んでやる」と晴雨は、おかまに案内され、すぐ近くの薄汚い飲屋に入った。四坪ぐらいの店にぎっしり客がつめこんで、酒の匂い、煙草の煙、笑声、どなり声、おかま達の奇妙な嬌声などで、むっとする異様な熱気を充満させていたが、晴雨が戸口で戸惑っているのを見た一人のおかまが、あら、席は空いてるわよ、こっちへどうぞ。とびっくりするような強い力で晴雨の腕をつかみ、その途端、あっと声を上げた。晴雨も、尻もちをつかんばかりに驚いた。そのおかまは大森だった。まるで帽子をあみだにひっかぶったような投げやりなかつらのかぶりかたをし、小さすぎて、まるで丈の合っていない古物の黄八丈の裾から毛むじやらの脛をのぞかせているこの珍妙な薄汚ないおかまは、それでもこの店の経営者なのか、他のおかま達から、お姐さんと呼ばれている。「ああ、伊藤君、久しぶりじゃないか」と、大森は啞然として棒立ちになってしまった晴雨にようやく声をかけ、ニヤリと笑い、「ここじゃ話も出来んから二階へ上らんかね」客とくっついて酒を飲んでいたおかま達が、「あら、お姐さんの知り合いなの」と頓狂な声を上げたが、大森は「そんな事どうだっていいわよ。さ、唄を

うたおう」おかまと客達は立ち上ったり、抱き合ったりして、最近流行している流浪の旅を唄い出した。へ流れ流れて落ちゆく先は、北はシベリヤ南はジャバよ、いずこの土地を墓所と定めん、いずこの土地の土と終らん……。大森も大口を開けて唄いながら客達に酒を注いで廻り、晴雨の手をそっと引っぱるようにして二階へ上った。

店の二階は、食べかけの井茶碗や煙草の吸殻の一杯つまったコーヒ―茶碗などが転がって、夜具もひきっぱなしの乱雑な四帖半だ。「汚ないがここで一杯やろうじゃないか」と大森は押入れの中から一升瓶を取り出し、かつらを取って、ひよいと壁にひっかけると、夜具を足で蹴とばして、あぐらを組んだ。

「何から話していいかわからんが、この店を西川と始めてもう二年になるかな。おかまの元締めみたいなのをやってるんだよ」と、大森は特徴のある高笑いを久しぶりに晴雨に見せて、「この女将は西川なんだがね。奴、とうとう胸を病んで、十日ばかり前に入院しちまったんだ。悪業の報いだよ」とまた笑い、「とにかく奴の入院費を稼ぎ出さなきゃならないんでね。正に孤軍奮闘、いや、俺も苦勞がたえないよ。近頃じゃ俺の方が逆に西川に強いられているよなもんだ」

西川の入院した病院は郊外にあり、西川の妻も子供を連れ、こっそり見舞いに行つてると大森はいう。まだ西川と大森は、その筋から追われている身なのだ。「俺達がつかまれば君が喰らいこんだように十日や二十日じゃすまないからな」案の定、猿丸卯兵衛が娘を西川に踏みにじられた口惜しさから、この折とばかりに新聞御用承り所をやっていた頃の西川と大森のペテン行為を知り合いの検事に持ちこんだらしいというのだ。

「君も大変な目に合ったな。ま、生きてる内には色々な事があるものだよ」と大森は、晴雨からあの事件以後の事情を聞いて励ますような調子でいう。自分の迂濶さからああいう事態を招いたのだと晴雨が謝ると、「いや、あの絵を春画同様に見なす官憲の非常識さが原因だ。ただ儲けようと思っただけなら、こっちはそのものずばりの春画を発刊してらあね。全く嫌な時代だよ」と、大森は晴雨の非は咎めようとせず、しかし、菊枝が晴雨の弟子の和助と家を出た事を聞くと、馬鹿な奴だ、仲人してやった俺の立場がないじゃないか、と淋しげな顔になるのだった。ふっと思いついたように大森は、顔を上げた。「ま、そんな事はどうだっていい。一つ、これを見てくれ」と大森は急に生き生きした表情になって、棚の上から一枚の新聞を取り出した。

「俺の書いた戯曲が、新聞の懸賞に当選したんだよ」と聞いた晴雨は、「ほう」と眼を輝かせ、大森が手渡した新聞をむさぼるように読み出したが、ええ？　といった顔になった。入選作品の「吊り責め」という題にもびっくりしたが、その作者は江原順三郎になっている。江原順三郎というのは晴雨もよく知っている男で、演劇月報社のかつて編集長であった大森の下で働いていた若い男であった。文学青年で大森に可愛がられていた朴訥な社員である。「俺は逃亡者だ。新聞社に送った俺の作品が万一当選でもして顔を出さねばならぬ場合、困るじゃないか。それで奴の名を使った」と大森は、その事は、あらかじめ江原にも諒解をとってあったという。この隠れ家も江原だけにはこっそり教えてあったのだが、入選の知らせを受けると江原は真っ青になって、ここへ飛んで来、一体、僕はどうしたらいいのです、と慄えるので、馬鹿、俺はお前に道を聞いてやっ

たんだぞ。これからは調子にのって、しっかり自分で書け。とどな
ってやったと大森は面白そうに晴雨に話して聞かせるのであった。
それにしても、この吊り責めという題名には恐れ入ったと晴雨が
苦笑すると大森も笑って「何を云ってるんだ。この芝居のモデルは
君なんだぜ」晴雨は眼をパチパチさせて、呆れたように大森の顔を
見た。

戯曲「吊り責め」は東都劇場で上演された。かつて新聞紙上を賑
わせた変態画家、伊藤晴雨をモデルにしたもので、舞台では実際に
女優の吊り責めが行なわれる、という広告が評判になり、またこの
舞台で、歌舞伎俳優の市川京之助と映画俳優の水島町子が初顔合わ
せ、という事も人気を呼び、初日から劇場は大入り満員であった。

芝居の筋は割と単純で、最愛の妻を先輩に当る男に奪われた画家
が、人間不信の念に陥り、女性を敵視する歪んだ性情の持主となっ
て、二度目にもらった妻を虐待し、お前も何時かは俺を裏切る気で
いるのだろう、と新妻を雪中に松の木に吊り上げ、その苦悶の表情
を絵に写しとる、といったものであった。これで有名になってしま
ったのは表向き原作者の江原であったが、おかしな事に、劇場から
第二作目の依頼があって、大森に励まされつつ半分やけくそになっ
て書いた人情廻り灯籠という戯曲が森本座で上演され、これがまた
好評を呼んだのである。

晴雨の名も、「吊り責め」が東都劇場で上演されてから、ぶり返
したように再び有名になった。しかし、マスコミは歪んだ形で晴雨
を取り上げたようである。一言でもいいから、舞台に立って何か観
客に挨拶してみてくれ、と劇場側から使いがやって来たので出かけ

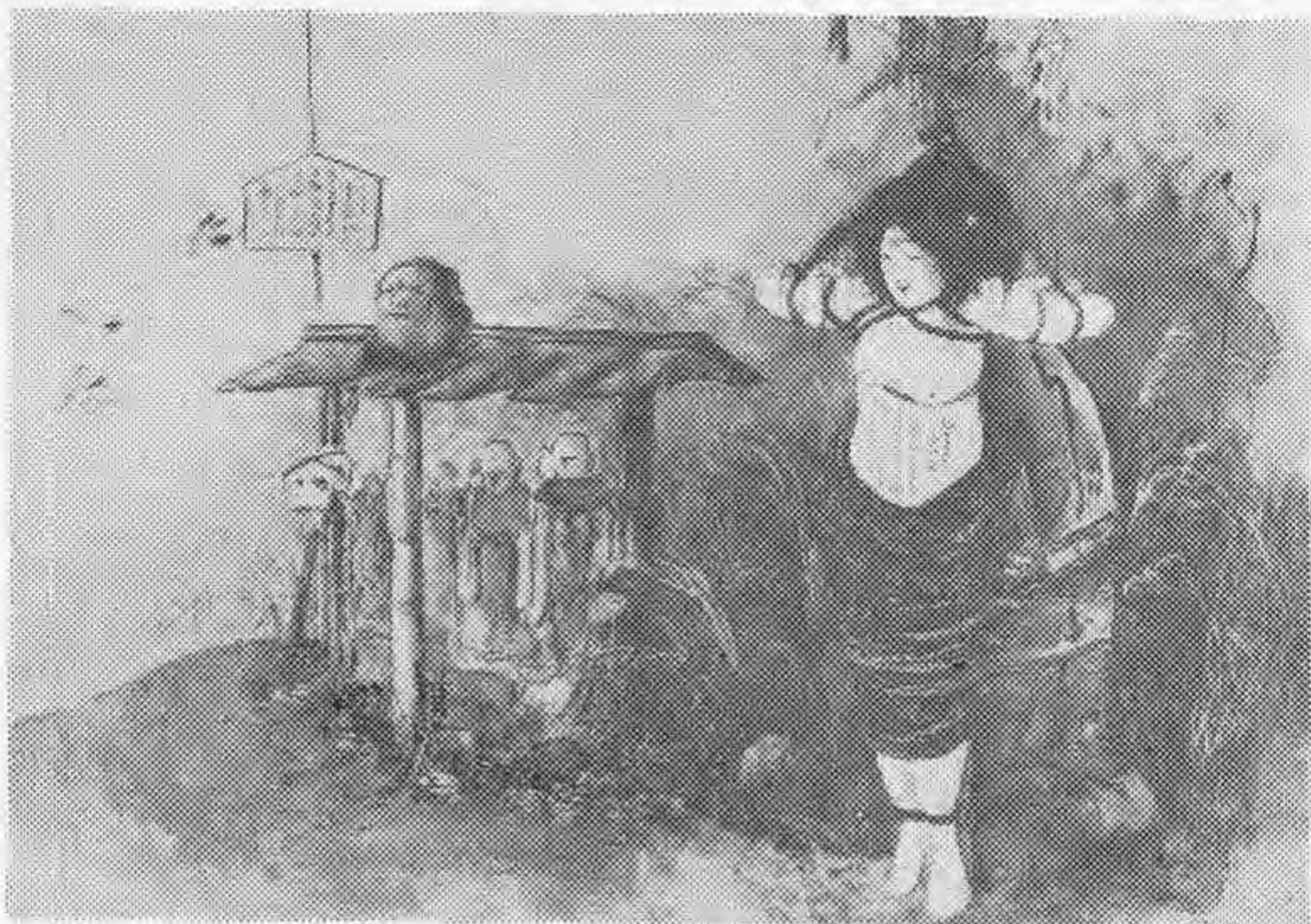
ると本日、問題の変態性欲画家、夜の部に、舞台挨拶あり、と看
板が出されて、まるで見世物であった。しかし晴雨は、これは大森
の成功作であり、江原を世に押し出す契機となった、めでたい芝居
だと考え、自尊心など投げ捨てて舞台に立ったのである。

東都劇場の興業が終わって間もない頃、映画界より演劇界に転向
し、自分の一座を持った女優の五月信江が、この「吊り責め」の上
演権を与えてくれないかと、何時の間にか新進劇作家となっていま
った江原に相談を持ちかけて来た。東都劇場の大ヒットに驚き、ぜ
ひともこれを五月信江一座で全国的にカッと思いついたの
だ。そして、舞台装置は晴雨先生に一任すると共に舞台の緊縛指導
に当って頂き、本格的な吊り責めを舞台で演じてみたいという熱の
入れ方であった。

自分達の一存ではいかぬ事なので、しばらく考えさせてくれ、と
女座長に告げ、江原と晴雨は、上野のおかま酒場へあたふたと走っ
た。雨戸を閉め切った陰気な二階の四帖半で吊り責めの原作者は、
風邪をこじらせ、せんべい布団にくるまって不景気な顔して寝てい
たが、江原の話を聞くと、「何を云ってるんだ。ありゃ君の作品な
んだぜ。俺に一々こだわる事はないじゃないか」と、無精髭をひっ
ぱりながら云い、しかし、俺は、五月信江の大ファンなんだ、とニ
ヤリとして、机の抽出しから彼女のブロマイドを出して江原と晴雨
に照れ臭そうに見せるのだった。女優のブロマイドをこっそり温め
ているなど、大森のどこにそんな純な所があったのかと晴雨は不可
解な気持になった。

江原は、自分がこうして劇作家としてのスタートが切れたとい
うのも、大森さんのおかげだ、としみじみした口調で云った。それに

伊藤晴雨遺作集 =その11=



ひきかえ、作品が世に認められながら、こんな陰気な部屋のせんべい布団の中で放屁ばかりくり返している哀れな大森の姿に、ふと鼻をつまらせる江原であったが、「僕は君のポンプに誘い水してやっただけさ」と大森は気弱に笑い、「しかし」と云った。

「大衆というものを馬鹿にしちゃ駄目だぜ。一部の者しか理解出来ぬバタ臭い新劇なんか凝るのは考えものだ。沢田正二郎だって始めは坪内先生について文芸協会で勉強した男だ。しかし、演劇に必要なものは娯楽性だと覺って、新国劇を結成し成功した。彼の精神は立派なものだと思うな。俺は極端かも知れんが、興業的に成功するものが演劇の本質だと思うね」布団に顎を埋めながらそう云った大森は、晴雨の方を見てニヤリと笑った。「あの画集は残念だったな。興業的には絶対ヒットだったのに」気弱に笑う大森は途中で激しく咳きこんで苦しそうに夜具の中で体を曲げた。西川の胸の病気に感染しているのではないかと晴雨と江原は心配そうに顔を見合わせた。もし、そうだとすれば、一人の仲間に対し、これほど付合いのよさを発揮した男はないだろう。

その年の十二月、五月信江一座は有本座で江原順三郎作の「吊り責め」を興業した。舞台装置は晴雨が担当したが、雪中吊り責めの場面は晴雨自身が演出し、これが人気を呼んで初日から超満員の盛況であった。

その初日の三日ばかり前、晴雨は五月信江一座の招待券を持ち、病気見舞を兼ねて大森の所へ出かけたが、どういわけか店の表戸は板を重ねて釘打ちされていた。晴雨が戸をたたいたり、裏へ廻ったり、うろうろしていると、隣の焼酎屋の親父が寝呆け眼で顔を出し、その店は四、五日前から閉め切ったままだと教えてくれる。お

かま達の悪質な売春行為にかねがね眼を光らせていた刑事連が突如店を急襲し、彼等を検挙していったというのだ。晴雨は仰天した。この二階で寝こんでいた、ずぼらそうな病人もしょっぱかれて行ったのかと聞くと、さあ、そこまではわからんが、と焼酎屋の親父は地面に唾を吐き、店の中へ首をひっこめた。その話を聞いた江原も青ざめて警察に顔のきく男に頼み、こっそり調べさせてみると、手入れによって挙げられたのは売春常習のおかま三人だけで、あの店の責任者になっている大森は、手入れのあった日、どさくさにまぎれて二階の窓から逃亡したという事がわかった。

この寒空に、着のみ着のままの姿で一体どこへ逃亡したのか——晴雨と江原は、有本座の楽屋で初日の大成功の祝盃を座員達と傾けつつ、しかし、一向に気持はずまなかった。寒鳥の身はむしろる行方かな、という誰かの句を江原が、ぽつり口にした。

ところが、千秋楽の日、大森は忽然と有本座の前に姿を見せたのである。それは、夜の部が始まった頃で、大森は変装したつもりなのか大きなマスクと黒眼鏡で顔を隠し、古物のレインコートを頭にかぶり、風をはらんで降りかかる小雪をさけていた。劇場は満員札止めであった。大森はしばらく五月信江の看板を眺め、やがて満足げにうなずくと同時に激しく咳きこんで踵を返し、月山公園の方へフラフラ歩き出した。ベンチに坐った大森はとんだり刎ねたり、くるくる舞ったりして降りかかる小雪を眼を細めて面白そうに見つめた。熱病に冒された彼の脳裡に様々な思い出が幻想的に浮かび上がって来た。伊藤晴雨が雪責めの実験をした日も、夜からこんな雪が降って来たつけ——小雪は次第に大雪となって、大森の体にも心にもしんと降りそそいだ。彼は深い静かなねむりの中へ引きこま

れて行った。

十五日間の興業も成功裡のうちに無事千秋楽を終え、晴雨と江原は、座員達と徹夜で飲み騒ぎ、暁の冷たい空気を浴びて、歌を唄いながら、再び、有本座に戻って来た時、月山公園の人だかりを見つけた。

大森はベンチの上で半分、雪に埋もれたまま、凍死体となっていた。検屍に立合っている係官が死体の所持品を探り出すと、出て来たものは五月信江のプロマイド、それと二十五銭入った紙袋だけだった。晴雨と江原は、眼がつるし上がって、ものが云えず、へなへなと雪の中にうずくまってしまった。係官が大森の死体を担架に乗せる時でも、二人は体が凍えてもう腰が立たず、凍りついたように自分達の膝元ばかり見ていた。

大森の死——それは晴雨にとって、大変なショックであった。再び、暗い運命的なものを背負いこんだように晴雨は仕事もせず終日画室に閉じこもる日が多くなった。人の死んだ事ぐらい何も気にする事ないじゃないかと大森が例の特徴のある笑い声をたてながら、どこからともなく現われるような気がしてならなかった。衝気満々としていながら、何ら人生に得る事なく、これも一つの人生だといわんばかりに、自分の処女作が上演されている有本座の前で昇天した大森を考えると涙が出て仕様がなかった。自分を俗悪主義者だとしていながら、ルンペンみたいにベンチの上で凍死するとは何という男だと腹も立った。

もう何も手がつかず、虚脱したような顔つきで晴雨は画室に閉じ籠り、冷酒ばかり飲んでいたが、君代に相談を受けたのだろう、或

日、木村がやって来た。そんなに腐ってばかりいたって仕様がな
じゃありませんか。どうです、大森さんの書いた吊り責めの狂言を
持って、地方巡業と洒落こんでみませんか」

スランプを脱却するためと現在の寂寥を癒やすため、責め芝居を
組んでしばらく地方巡業をしてはどうかと木村は晴雨に云い、そう
すれば地方にいる責めのマニヤは大喜びだ、とも云って、その資金
は一切自分が出させてもらうと木村は積極的だった。それは巡業と
いうより大森をしのぶための巡礼だと晴雨は考え、木村の好意を深
く感謝して、「やってみますよ、木村さん。よろしくお願い致しま
す」と深く頭を下げたのである。

地方廻りの一座を組むという事は簡単であった。歌舞伎畠、新劇
畠の落伍者は掃いて捨てるばかりあっちこちに群がっているし、
役者の掃き溜め集会所といわれている浅草田原町の居酒屋「河童」
や「鉄砲」に行けば、その場でテストして、いくらでも人数を揃え
る事が出来た。地方で御難に会って、ひよろひよろ東京へ舞い戻っ
たどさ廻り劇団がスポンサーの現われるのを待ちつつ集団でおみく
じ売りしているのもあった。こうした地方廻りの一座は、水草を追
って砂漠を歩くキャラバンみたいなもので、鍋、釜、布団、それに
芝居の背景、小道具などを大八車に積みこみ、町から町、村から村
へと終生移動の旅を続けていく。集合離散は常の事、楽屋を住家と
心得、蓄財の精神もなく、一家を構える気概もなく、飢えて死なな
い程度の給金だけに甘んじて、好きな芝居を続けている無気力な、
まるでジプシーに似た不思議な種族である。

そんな連中をかき集めて、狭国劇という、劇団を作った晴雨は、
「吊り責め」の他、「番町皿屋敷」「明烏」それに江原が狭国劇誕

生のお祝いとして書いてくれた「甲州騒動」というやはり責め場を
一杯に盛りこんだ狂言を揃え、郊外の芝居小屋を皮切りに地方巡業
へ出発したのである。半年の予定を立て、関西方面に向かい出発し
た晴雨を君代は木村や青木と一緒に途中まで見送った。「二カ月ぐ
らいもすりゃ先生、また絵がかきたくなって帰って来ますよ。今は
このまま旅に行かせてあげた方がいい」と木村は、淋しげな顔して
晴雨を見送る君代を慰めた。

三文役者ばかり使った芝居は地方で興業してもこうも当るものか
と晴雨は改めて驚愕したのだが、晴雨の事を新聞などで知っている
地方の熱心な責めのマニヤは、連日、晴雨を楽屋へ訪問するのだっ
た。不思議とそんなマニヤの中には地方の有力者が一人や二人混っ
ているもので、お菊の責め場には本職の井戸職人に依頼して井戸側
を作らせたり、浦里の責め場には、これも本職の植木屋に頼んで根
つきの松を運ばせたり、屋台や背景にまで気を使い、銀襖まで作ら
せるといった援助をしてくれる。それで彼等が得るものは、お礼と
して晴雨がかいた責め画一枚ぐらいなものだが、念願のものを入手
出来た悦びに、また一座の者達へ祝儀を出すのだ。それに晴雨が芝
居一座を組んで地方廻りをしている事を知った東京のマニヤ連は、
恐らく東京じゃ芝居に出来ない凄いのを地方でやってるに違いな
いと、汽車に乗って一座を追って来たりした。

色々な劇団の間を転々と移って仕事したがこれ程大入りを続ける
一座に加わったのは始めてだと、役者連中は口を揃えて云い、晴雨
も楽しい気分旅を続けて行ったが、二カ月ぐらゐ経った頃、木村

から旅先の宿へ電報がとどいた——奥さんの様子がおかしい、すぐ帰れ——晴雨は、何か予感的中した思いでギョツとなった。ここ何日か君代の夢を見て、何か彼女の身に異変が生じたのではないかと内心がかりだったのである。電報だけでは、はっきりした事がわからず、晴雨は一まず、一座を離れて帰京する事にした。

「驚いちゃ駄目だよ、先生」と、晴雨を駅まで出迎えに来ていた木村は、菊枝が姦通した時と同じような云い方をして晴雨を気味悪がらせた。「奥さん、気がおかしくなったんですよ」と木村に云われても、晴雨は最初、どういう意味なのか、さっぱりわからない。

人力車を呼んで木村と一緒に駒込の家へ帰ると、君代は奥の六帖で敷かれた夜具の上にきちんと正座し、その横で彼女の母親のおみねが不安そうに眼をしょぼつかせていた。子供二人は木村の計らいで、子供好きな彼の女房があずかって面倒を見ているという。そうした木村の好意に晴雨は何度も礼をいいながら、怖る怖る君代の傍へ坐り、「どうした」と小さく声をかけたが、君代は焦点の定まらぬ眼をチラと晴雨の方へ向け、すぐにまた視線を膝の前に置かれた紙に向ける。何をしているのかとよく見ると、君代は、仕事をする晴雨を真似て、絵をかいているつもりらしい。ハイ、と君代は手を出し、おみねは涙ぐみながら一本一本筆を狂った君代に渡しているのだ。それで君代は、紙の上へ支離滅裂の線を描き、墨の切れた筆をポイというしろへほり投げ、また、ハイ、と云っておみねへ手を出し、新しい筆の催促をするのだった。

駅からここへ来る途中で木村は晴雨に、知り合いの医者に君代を診察させた所、脳梅毒から来た発狂らしい、といったそうである。そんな馬鹿な、と晴雨は吐き出すように云ったものの、彼女の母親

が元、松島の女郎だった事を考え合わせると医者の云った事も冗談とは思われない。病菌が君代の体内に流れこみ、長い期間潜伏していたのではないかと想像出来る。君代の過去の事を晴雨ははっきりとは知らなかった。しかし、君代の発狂した原因が事実梅毒であるならば、その責任は君代にあるのではなく母親にある——と晴雨は思ったのである。

ところが——発狂した娘の側に坐って、しきりにすすり上げていた母親は、急に晴雨の方へキツと向き直った。「娘をこんな気狂いにしてしまったのはあんたじゃ」と開き直り、蛇のように冷酷な眼つきで晴雨を睨むのである。普段は冗談口をたたき、愛想よく振舞う老婆だが、長年女郎をしていた女の通有性というのだろうか、こうして威丈高になると無気味な妖気を全身に漲らせるのだ。

馬鹿な事いうもんじゃないよ、おみねさん。と木村が顔をしかめてたしなめたが、「二階にあるあの恐い絵は何じゃ。みんな娘を写生したもんじゃないか。あんな目に合わされて気が狂わん方がどうかしとる」と、晴雨に喰ってかかるのである。それは誤解だと云っても聞かず、つまり、梅毒とか性病とかを男二人が口にするので元女郎である自分の故にされるのを恐れて先手に逆ねじを喰わして来た感であった。「私じゃその筋に訴えて、娘の恨みは晴らさせてやるからね」と捨科白し、おみねは、わっと泣きながら表へ飛び出して行った。たえずいがみ合っていた母娘であったが、発狂した娘を前に見ては、母親もまた狂ったように取り乱すのである。

おみねが飛び出して行ったあと、晴雨と木村は、相変わらず紙に線をひき、ポンと筆を投げ捨てる君代を見て溜息をついた。やはり病院に入れなければ、と木村が云った。脳病院と聞くと晴雨は苦し

げに眼を閉ざし、やがて真っ赤になった眼をあけると、「そりゃあんまり可哀そう過ぎる」と涙声になって云い、発狂したものに自宅療法など馬鹿げてるだろうが、努力すれば正気に戻らない事はないと思う、と晴雨は哀願的な眼差しを木村に向けるのだった。

狂った妻と晴雨の二人だけの生活が続いた。放心した表情で壁を見つめていたり、縁先を見つめていて突然笑いだしたり、そんな君代を晴雨はあやすようにしながら画室へ連れて行き、絵を描いてやったり、唄をうたってやったり、そして、君代をモデルにして描いた責め画を一枚一枚見せたりして、それが記憶を呼び戻し、何とか正気づいてくれぬものかと神にでも祈りたい気持だった。しかし、病状はよくなるばかりか、やがて君代は、泣きながら頭痛を訴え、次に下腹が痛い、のたうち廻るようになった。捨ててはおけぬので、晴雨は君代をリヤカーに乗せ、近くの病院へ運んだが、君代の体をくわしく診察した医者は、頭痛がするというのはやはり脳梅から来たもので、下腹が痛むというのは子宮癌だとはっきり云った。そして、入院しても、直るかどうか、と何だか煮え切らない事を云うのだが、それは手おくれという意味らしい。

薬でもつかみたい気持で、近くの祈禱師にも来てもらったが、もとより屁の突っぱりにもならず、やがて、君代の病状は最悪の状態になった。激痛が起こらない時は狂い笑い、激痛が起こった時は狂い泣き、正にそれは地獄図のような光景であった。自分に家庭的な安らぎを与えてくれる妻——と思ったのも束の間、それが脳梅毒で発狂し、子宮癌の苦しみに眼前でのたうち廻っている。晴雨はふと自分も妻と一緒に、このまま狂い出すのではないかとさえ感じた。

君代がいよいよ駄目だとわかった時、晴雨は、涎を流して獣のよ

うにうめき続ける君代を背負い、二階の画室へ入った。

「お前をモデルにした最後の責め画をかかせてくれ、な、君代」晴雨は泣きながら云い、ロープを取り出した。

君代は、乱れ髪を嵐のように揺さぶり、長襦袢をズタズタに引き裂きながら、床の上に七転八倒している。脂汗を流し、我が手で自分の首を絞めながら、獣めいた咆哮をくり返しているのだ。そうした君代の修羅図に晴雨は残酷の極致を見たのだろう。のたうち廻る君代を押さえつけ、キリキリロープで縛り上げると縄尻を天井の梁にひっかけ、更に無残な心を自分に煽りたてつつ晴雨は力一杯ロープを引いた。異様なうめき声を発しつつ君代は足を激しくばたかせてギリギリ上へ吊り上げられていく。晴雨はその残酷図絵の全くの虜となった。全身に揉みぬくような嗜虐の快感がこみ上がり、地獄の鬼と相搏つ気で、紙と筆を取り上げた。

丁度、その時、おみねが刑事二人を連れて二階へかけ上がって来たのだが、この異様な光景を目撃した途端、彼女も刑事も電気に感電したように、その場に棒立ちになってしまった。

天井に吊った狂妻を写生しつづける晴雨の形相は、人間のそれではなく正に一匹の鬼であった。毀誉に煩わされる心もなく、利害もなければ愛憎もなく、ただ責めの法悦に浸る一匹の鬼である。

「寄るな、仕事の邪魔をすると許さんぞ」部屋へ踏みこもうとする刑事に責めの鬼と化した晴雨は一喝し、天井に揺れる狂妻と同じく彼も発狂したのか無気味な笑い声を立てた。そして、再び、妖気をはらんで、いらいらと燃える眼を紙にもどし、一気に筆を動かしていくのである。

馬化願望の夢

女神アイリーンとR氏



寿 野 佐

ストレスの多い現代生活をする我々は、時として息づまる現実社会から逃避して、何か自分にマッチした甘美な夢とか、普段とても出来そうにない願望を白昼夢の如く追い求め

ないでしょうか。一体何パーセントの人が現実的に満足し切っているかを思う時、それは意外に少ないと云えましょう。

たとえ今、彼が一会社員であれ、或いは工

場労働者であれ、学者であれ、めいめいが多少の不満と日々斗い、又、若し彼がそれに耐えられない時は、厭世的になったり、現実逃避をしたり、夢を追ったりするかも知れません。仮りに今、彼があるかなりの社会的地位のある中流階級以上の男であり、強烈なS的願望があったとしても、そう容易には実現は出来ないかも知れませんし、ましてM性の男のそれは、それ以上に願望到達のチャンスは少ないに違いありません。といえますのは多くのその方の論文にある様に、S性の男性が相手の女性を緊縛や笞打ちする様に簡単にはM性男性の願望達成はうまく行かず、第一、真の意味での女王様とかサジスチンは、本当は居らず、男が女を金でもって女王にしたてて、自分のM的願望を満足するようにさせると云った複雑な現象のケースが多いからでしょう。

その意味からも私にはマゾヒズムの方が、より異端性の濃厚なもの様に思われます。特に被乗馬願望とか馬化願望に、その典型を見出します。前置きはこの位で、私の日頃の白昼夢を述べることをお許し下さい。

ここでは、主人公をRと云う28才の男子とします。

R氏は東京生れで、学生時代をずっと東京で育ちまして、中学二年の時に何か自分のM的なものをすでに自覚し、戦後ある天然色の西部劇「ならず者」を見て以来、ずっと女性乗馬崇拜者になったと云う事です。なんでもその時の主演女優は、ブルネットのジェーン・ラッセルとかで、そのグラマーぶりを利用して、むやみやたらとM男性を驚がく圧倒する演技を披ろうし、当時としては、とてもセンセシヨナルなものでした。

R氏を特に刺激したのは、ジェーンが西部の納屋で、あらくれ男と上を下への格闘をして男を組み伏せた時の、紅色の下着がグラマーな太腿部にからみついていたシーンとか、彼女が半裸で、空腹のあまり鶏をしめ殺すシヨッキングなシーンや、女上位の象徴を連想せしめるような荒野でのギャロップシーン、及び浅瀬で渴いた悪漢を後手にしぼり上げ、彼女がウイスキーの角びんで男の頭をしたたかなぐりつけて水面下に倒し、すかさず馬乗りに跨って水中に顔をおさえつけ、窒息させようとしている何十秒かのシーン等々が、ぐいとはかりR氏を圧倒したのです。

その「ならず者」が、彼には病み付きの最初のものとなり、たくましい妖艶な女騎手の

出てきそうなフィルム、特に西部劇は必ず見に行くのでした。

さてR氏が高校一年の秋の事です、午前の授業が終った頃、彼はなんの通告もなしに早退けして居なくなりました。後でわかったのですが、Rはそれからの時間を、洋画「緑園の天使」をひっそりと見ていたのでした。普段はとてもまじめな生徒で、成績も進学クラス、10番位でしたし、体が生来ややひ弱な感じをうけますが、これといって難点のない生徒でしたのに……。

さてその洋画は、未だ若いエリザベステラ主演のもので、英国の片田舎での美しい農園で乗馬を熱愛する一少女を描いたもので、夢に迄見た自分専用の愛馬を入手し、それをグランドナシヨナル（英国最大の競馬）での競走馬にしたてておくべく、毎日エリザベスが熱烈な調教をする光景が、文字通り緑園の天使が馬を駆るシーンの連続で、Rをエクスタシーで充満させたのです。特にRを興奮させたのは、その英国少女が女人禁制のグランドナシヨナルに、断髪し男装をして出場し、ついに奇跡的に一着になります。愛馬はゴールイン直後に、エリザベスに乗り潰されてしまいました。落馬して気絶した彼女は医務室で介

抱され、その時、其の一着の騎手が女であることがばれてしまい無念にも入賞取り消しになると云う物語でした。Rも他日、授業をさぼったことがばれて担任の先生からきついおしかりを受けましたが、この「緑園の天使」の彼に与えた影響は絶大でした。

それからしばらく、いやかなり長い間、授業中の彼の脳裡にはエリザベスの扮する女流騎手の、あたかも馬の蹄のギャロップ時の音が未だ残ってるかの如く、悩まし気な気分が、為放心し勝ちになり、それが原因でRの学業成績も次第に低下して教師や父兄を心配させたのでした。それに加えて、当時は朝鮮戦争の最中で、たいした面白い雑誌はありませんでしたが「スクリーン」と云う、主として米国の女優の私生活もふんだんに取扱った写真入りのものは彼を少なからず刺激し、かすかではありましたが女性乗馬のフォトをその中からみつめて、大切に切り取って保存していた様です。朝夕Rはそれをこっそり出しては観賞し熱いキッスをし陶醉するくせがつきました。

さて更に数年経て日大芸術部を中退した氏は、今、どう人生の指針をかえたかアメリカの諸州を転々としているのです。もともと移

り気で、一つの事に辛抱出来ぬ彼であるとは云え、またずい分、思い切った方向転換をしたものだと言いました。二年三カ月ぶりで私によこしたアメリカからの手紙の内容は大体以下の通りです。

『……かつて僕は、将来映画監督になるのを夢みて日大に入学したが、自分の才能に見切りをつけたので日本を飛び出してしまった。今ミネアポリスの郊外のYWCA附属の乗馬クラブで、アルバイトのつもりで馬丁をやっている。未だ出来てから三年にもならないモダンな厩舎には、四十頭程のクラブの馬がお



り、ここに乗りにくる人は女子高校生やカレッジの若い美しい学生が多く、時にはBGも来る。僕はもう狭い退屈な日本は住み飽きた。バイトのつもりで、ニューヨークタイムズの広告を頼って、今の馬丁の仕事を世話してもらい、小遣い銭かせぎのつもりで働き始めたが、まんざら悪い所じゃないし、君も知ってる通り僕の性にも合致しているから、当分こういった仕事をやめるつもりは更々ない。ここミネソタ州は、ドイツや北欧系の美人が多く、見るもの聞くものすべてがめずらしく、特にきりっと引きしまった長靴スタイル

の長身の生娘を、毎日ただで眺めることが出来るだけでも幸福だ。体格が、殊に良いんだね、驚いたよ。

この馬場からYWCAの寄宿舎と赤い屋根のチャーチの塔が見え、日曜毎にロマンチックな鐘の音が出る。そのまわりは小森があり、更に

向うは広い麦畑と原野が一面にひろがっていて、空気は甘く澄んで左方には湖水が広がっている別天地だ。昔は厩舎の仕事は重労働だったが今は大半機械化され、朝早くおきて百姓がトラクターで運ぶ麦わらをもらい、馬のわらを新しいのととりかえて敷いてやり、小便可さい古いわらを外にはこび出してから飼料や燕麦を与えてやればいいのだ。週五日制だが、時には日曜にも女子大生達が大勢乗りにくるので、てんでこ舞いさせられる。

彼女達の乗る時に手伝ったり、鞍のひもの長さを調節したり、更に長靴を鹿皮で拭くような時には、何とも云えないスリルとエクスタシーを感じるし、こう近くでアマゾンに奉仕していると、その見事な血の通ったりしい体格に屈服するかのような、胸さわぎを禁じ得ない。

馬に跨ったままのアマゾンの長靴をみながく時、そこはかとなく上品な香水のにおいと馬体の臭いを吸収した女体のかおりが、いいようにもなく混然とただよってきて、くるおしいほどの気分にはさせられるのだ。この間、思わず長靴に抱きついて接吻してしまったら、アマゾンはにっこりと微笑してくれた。とてもたまらないようないい気分だった。心臓は高

鳴り、僕は美人騎手の長靴をかかえこむ様に一層力を入れて磨く。

彼女はアイリーンと云って、大手石油会社の重役秘書で、パートタイムとして働いても充分すぎる程収入があるためだろうが、しばしばこの馬場に通ってくるのだ。21才の彼女は、独立した小ぎれいなマンションの一角に住み未婚である。僕はいつのまにかアイリーンにほれ始め、彼女の身の周りを世話する下男としてしばらく奉仕させてもらう願望が許可された時は、天国へ行った程幸福に満たされる思いであった。

実は、このころよい返事は、ある日曜の午後、彼女が馬に乗って野外騎乗の際に森迄お伴した時にはじめて貰ったのだ。しかし、その条件は、あくまでも彼女の目下の者として、いつも僕が彼女の命令に喜々として服従しなくてはならない。

早速僕は厩舎の主人にしばらくの休務を申し出た。女中の様に住み込みでアイリーンの所で起居するためだ。

早朝に起きて、彼女の朝食とコーヒーを用意する。彼女が眼覚めると足に接吻して、朝の御挨拶をし、足のつめにマニキュアを塗り、コールドクリームで全身マッサージをする。

る。足の裏迄よくもみほぐさなくてはならない。

彼女は寝台に寝そべり、気持良さそうにマッサージを受けつつも、左手には細目の乗馬鞭をもって、少しでもサービスに手落ちがあるとピシッとするどく咎を鳴らす。新しく買った筈で、彼女はそのしない具合を試すごとく、僕に別に落度がないのに打たれることも時々あるが、奴隷の如き自分には反抗は厳禁である。それが済むと、彼女は大理石の豪華なテーブルで朝食を摂る。その間に僕はアイリーンの寝室の掃除整頓で、シーツを取り換え、床をふき、そして昨日彼女が使った長靴を、鏡の如く黒光りするまでビロードの布で磨かなくてはならない。シーツや下着類は殆んど毎日取換えなくてはならず、ただちに洗濯機にズロース類をつっこみボタンを押す。

その間に大急ぎでアイリーンのコーヒーのおかわりをサービスし、新聞を渡す。

その忙がしい事、目がまわる程である。

それから彼女が、いつでもすぐに着れる様に、二、三着のワンピースとか乗馬用背広及びズボンを、ブラシを掛けてアイロンできちんと折目をつける。彼女が出勤の際はガレージ迄お伴して、スポーツカーをざっと羽根で

拭き、足にキスをして見送る。全くアイリーンの女房役である。

又、彼女の部屋にもどって床拭きにかかった時、朝日そうけて三四本の細いものが床とベッドにあった。それはアイリーンの長髪とも思える。すばやく拾い、ガラスびんに大事に保存した。捨てるには女王のものです惜しいからである。休む間もなくトイレットとバスルームの清掃で、白磁のすべての陶器を真白になる迄毎日磨く。床や壁のトルコ青のタイルをテカテカに拭く。特に日毎、女王が使用される便器を清掃する時の気持といたらない。念入りに、きれいにしなくては彼女は不気嫌になるに違いない。バスタオルも新品と交換するが、洗濯器につっこむ前に、女王の体臭を吸収したタオルを何度も嗅いでうっとりとする。ストッキングやブラジャー、ズロースについても同様であり、これらに熱烈にキスしてから洗うことにしている。

食卓の後かたづけをしてから、彼女の食べのこしのビフと、飲みさしで残ってるコーヒーを飲む。コップには口紅がついて悩ましい限りである。奴隷の身分には、いつも女王様のお残りを拝受する事で我まんしなくてはならない。その後、やっと皿洗いである。



息つくひまなく、次は書斎の整理である。

アルバムが二十冊ほどあるので、ちょっと失礼して眺める。コダックのカラー写真が、ぎっしりつまって居り、ちょっとのぞいた所では、水泳、テニス、乗馬等の彼女と、彼女の友人達の、胸をときめかさずにはおられない魅力あふれるフォトがぎっしりつまっているではないか。

特にコダックカラーの、非常に鮮明なアイリーンの馬上でのジャンプ姿（キャビネ大）は、あらゆるマゾヒストの崇拜の対象たり得

るものであろう。思わず僕はむさぼる様にペーじをめくって陶酔の花園に浸りきっていった。

本棚を布で拭き、彼女の読んだ婦人雑誌類が乱雑になっていたのできちんと並べる。灰皿を空にしワイングラスをかたづける。彼女は若いのに酒もタバコも強く、ウイスキーも

ストレートでも参らないそう。僕はアルコールは全然だめなのに。

その後ただちに自転車に乗り、セルフサービスのレストランでアイリーンの注文通りの買物をすませ、ついで酒屋で彼女の好物のワインとカクテル用の洋酒を買い、帰りに花屋で彼女の部屋を飾るバラ、カーネーションを求める時の嬉しさ。まことに生きることの楽しさとは、このようなことではないかと、心の底から……」

と云う、長い長い手紙を私によこしたので

した。私も彼と中学高校時代、同級でしたので、つくづく人間の性格、特にSM的傾向は少しもかわらぬものだと感じ、又、一応その夢を実現してアメリカに滞在してるR氏をうらやましく思いました。

今でも時々彼の撮ったと思われる、アメリカの乗馬婦人の眼も覚めるようなカラー写真を送ってくれては、私をいとも悩まし気な気持ちにさせるのです。

R氏はつまり、私が夢にいだいてる事柄を殆んど完全に現在実現しつつあるのです。当然私も、いささかねたましく思ったのであります。

ところがそれから半年も経たぬ或る秋の事です。私は又一通の手紙を彼からもらいました。内容は告白めいたものですが、いつもの通り書き出すと長々と書くくせのある彼です。から全文はとでも紹介できません。大要を述べればおよそ次の様になるかと思われれます。

『……いつもの通り洗濯が済んで乾いたアイリーンの下着をタンスにしまおうとした時に僕の頭に浮かんだのは、一体彼女は何枚のズロースを持っているかと云う事だった。調べてみると十一枚確かにあったのでびっくりした。純白のものあり複雑華れいな花模様あり

で様々だった。翌日彼女が脱ぎ捨てたばかりのもの一枚を、こっそり自分のポケットにねじ込んで終日それを拝んでは楽しんだ。その香りは何者にも比類なく芳香を放ち続ける。

今自分の手にしてるズロースが、アイリーンのはいて乗馬をしたものであると思うと、戦りつを感じる程うっとりとする。ショックで目まいさえもよおす。彼女は十枚以上もそれらを持ってるので、一枚ぐらいいは無くなっても気が付かないだろうと油断していたのがいけなかった。

その晩、豪華な夕食をアイリーンが済ませ後かたづけを僕がして、台所でお残りを喰べ飲み残りのスープを飲んでいる時であった。いつもより一層かん高いアイリーンの声が私を呼んだ。僕は皿洗いの中で、彼女の寝室へ走って行く。アイリーンは腰に手をあてて家来の私を見下して云った。「おかしいわ。私のズロース全部で一ダースあったのが一枚無いの。お前ひょっとすると、かくしてるんじゃない? 正直に白状したら罰しないから云いなさい。しかし、うそをつくといひどいわよ」と。けれど僕は口ごもりながら固く知らないませんと云いはった。ところがアイリーンは僕のポケットが異常にふくらんでいるの

には早くから気付いていたらしく、ひざまずいて僕を、長い白い足でたたかけりつけて床にひっくりかえし、ポケットからズロースを抜き取ってしまったではないか。

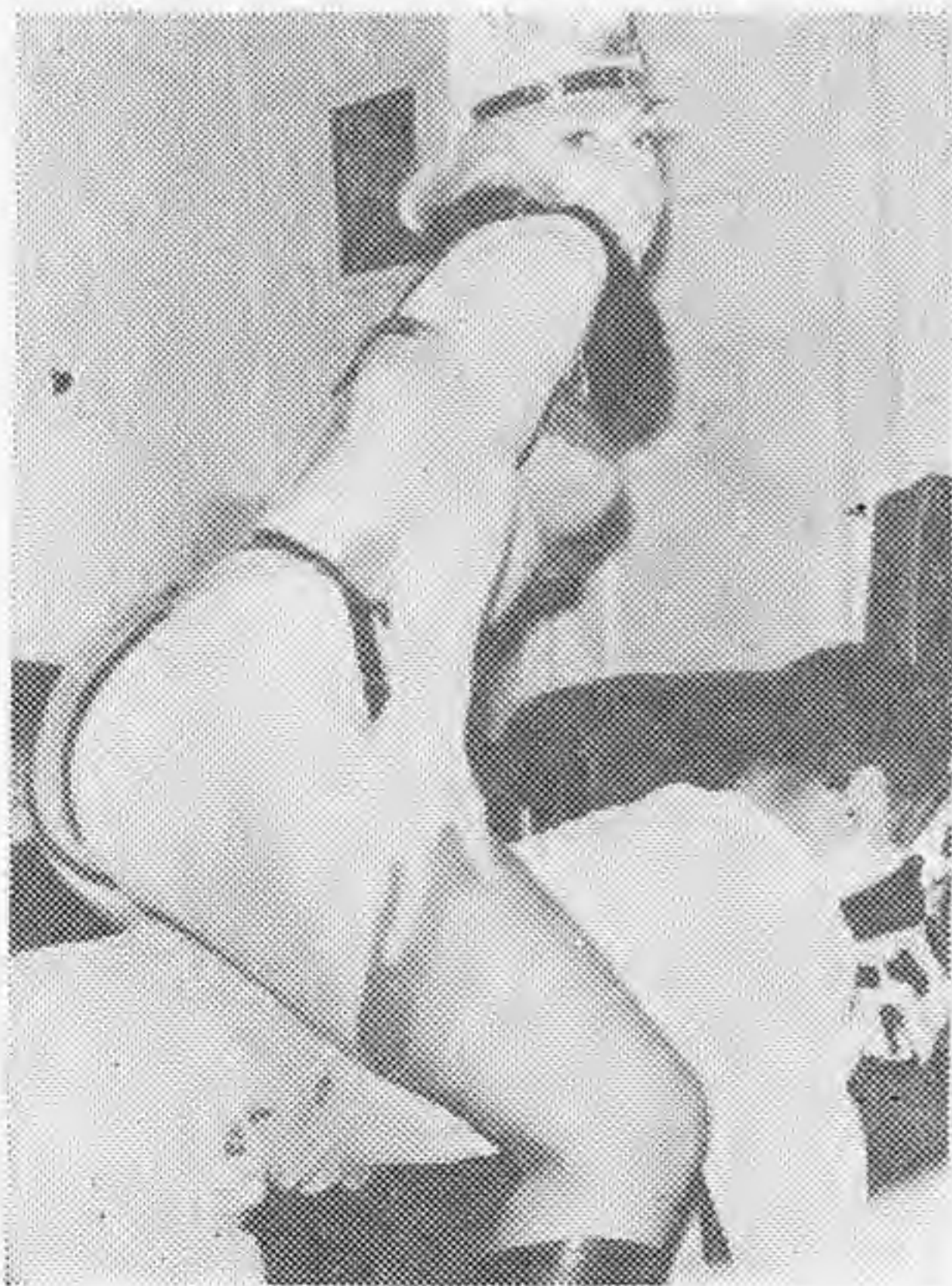
彼女は僕に、パンツ一枚で四つんばいになる様命じて、洋服ダンスから皮革製の笞を取りだし、自分もブラジャーと赤橙色のミニズロース一枚の姿に長靴をはいて、僕の方へやってくる。絶体絶命と思うその瞬間、笞がまるでヘビの様に、ピシャッ、ピシャッと僕の背中や胴にからみつき、アイリーンのば声が

飛ぶや否や、四つんばいの僕の背にどしりと馬乗りになり、背骨も折れよとばかりに圧しながら鞭で尻をうちすえて前進を命じた。長靴は左右から僕がうめく程に強く挟みつけてくる。

部屋を五、六回、女王をのせて歩きまわるぐらゐなら案外に苦痛でもないが、何しろ僕より体重も体力もはるかに勝る女王であるので、適当な所

で許してもらわなければとても体がつ笞はない。人間馬の僕の呼吸と心臓は段々早くなり、口にはベルトをくつわの代りにかまされているので、ヨダレがベルトをつたって床にずくになって落ちる。進行がゆるむと女王の長靴が左右から圧縮し、歩行をいやがうえにも促がすと同時に、人間馬の尻は女王の非情な笞あとの為きりきりと痛む。

こうなっては本物の馬よりも一層不利であり、まして乗り手に反抗したり振り落すことは至難であり、そんな事をしようとすれば、



ますます激しく乗り潰されてしまうことは明瞭である。女王はしばらく馬を止めるが依然として跨ったままである。女王は、答あとして汗がしみて痛がるのを認めながらもまだ人間馬を許そうとはしない。彼女は僕を騎乗のまま室内くまなく乗り廻わしてから、やおらサイドテーブルの所迄行き、停止を命じてソーダ水を飲んで居たが馬にはくれなかった。

僕が重さに耐えかねて悲鳴をしばしば出すと、彼女は「なによ、未だ20分も乗らないうちでネを上げるの！ 私の馬を見てごらん。昨日なんか二時間以上もわたしに虐められて拍車を入れられ続けたのに、何一つ文句を云わないわ。それなのに何よあんたは。弱虫、私に同情させようとするの？ そうは行かないわよ。さあお歩き！」と答で乱打する。馬の僕の気も察せずに、騎乗のアイリーンは氣持よさそうにずしんと重く深くまたがり、眼を細めて、ある時はテンポを上げ、或る時はゆっくりと乗り続けるのであった。

わずか一枚のズロースの為に、こんなひどい調教をされるとは思わなかったので、女王の懲戒は特に僕に有効に利いたのである。ひ弱な僕の背骨が、女王の重みで明らかにしな

自由をうばわれ運命を女王にまかすよりしかたがない。汗が眼に流れ込み前方がよく見え、眼をつぶった瞬間に疲労で衰弱した体はソファアの角にどしんとぶつかった。その瞬間に女王の叱声が聞えたようではあるが、急に何が何んだかわからなくなった。……』と云った、まことにショッキングなレターだったのです。

いかにその方のマニアであり、M性のR氏もこうなっては少々気の毒ですが、女王のものをかすめ盗った当然の懲戒を、受けてしまったのでしょうか。この時ばかりは、恐ろしさに全筋肉がしびれ眼から火が出た、とRは告白しています。ひ弱なR氏は、その人間馬懲戒の次の日は一日中、寝込んでしまい、又、一週間も全身が痛み、無理にかまされたくつわのひもの為に唇がヒリヒリして、食事も満足に出来なかったそうで、そのリアルな状況は、手紙の終りの所からも推察できました。『……気がつく僕はバスルームに両手を後に緊縛され、冷たい黒光りのタイルにひっくりかえっており、女王は浴そうにジャージャー温水を入れているではないか。膝上迄の長靴をはいている。彼女はクレゾール石鹼液を少々微温湯に加え、長靴をはいた足で無造作

にかきまわすと私をバスに放り込む。答の生々しい傷口にクレゾールがピリピリしみ、思わず正気にかえる。途端、女王は冷やかに云った「お前は私の留守の間にアルバムからカラー写真も盗んだね。この癖馬奴」と叫ぶや否や、まだなえている僕の体にのしかかり、沈めようとするではないか。顔を無理に何回も水中につっ込まされ、いやと云う程クレゾール入りの湯を飲まされた時の苦しさ。この時は本当に死ぬかと思った……』

とショッキングにも書いています。この瞬間にR氏も、学生時代に見たジェンラッセルの「ならず者」での水虐めシーンを実感として、それ以上たっぷり味わったに違いありません。それでもRは、奴隷の運命、つまりアイリーンから百パーセント人権を剥奪され、無慈悲な調教と軽べつに苦しみつつも、尚M的人間としてこの生活からの脱出など、とても考えられないことのようにです。輝くばかりの美しいアイリーンのものになったR氏は、どんなに幸福な事でしょうか。アイリーンの乗る馬の蹄音が聞こえる様です。（以上）

※ 写真はハンプブルクに於て撮ったもの。乗り手はプロのフォトモデル。



……告白……

私

の

こ

と

藤村美香

読者通信に載せて戴き、全国の皆様方より、切々たる心情のこもったお便りに接し、唯、感激致しましたのを、ついこの間のことのように想うのですが、経てみますと早いもので、もう二年近くの歳月が流れているのでございます。

ロスアンゼルスから帰国した私の、どこか変ったところといえば、唯、肥ったということぐらいです。それ以外には何の変化もございません。半年間居住したハワイで、プレイにまつわる煩わしい利害関係の責も、すっかり忘れ去りました。私が異性より同性へと

移向したようにみえたのは、種々なる事情があつてのこととて、その点、よろしくご推察の程、お願い申し上げます。

奇クのある国、それはハッキリと私の母国と申せるかも知れませんが、帰国すれば、また一愛読者に戻るのも当然のように存じます。早々に自己嫌悪もコンプレックスもかなぐり捨てて、あたかも蝶が花の蜜を求めて飛び廻るように、心当りの書店を歩き廻ったものでございます。

東京は大森で生まれました私は三才で実母

に死別。四才の時に神戸に移り、父は再婚、私は以後、継母に厳格な教育をされました。高一の夏の家出の日まで――。

父の事業の関係で横浜へ移住したのは、私が小学校へ入学する五日前でございました。現在でもミナト・ヨコハマは一番印象に強く本当の私の故郷といえるかもしれません。

性のめざめと責めのめざめは、私にとってそれは確かに連鎖的な現れと申せましょう。叩かれた一尺差し。臀部に加えられた強烈なちようちやく。ギリギリと縛られた両手足。

その手足の指のつけ根に煙をあげる焦熱のお灸。それらのお仕置にうめきながら、辛抱は無理に我慢することではなく、喜んで耐えてゆくこと——と悟ったのは、たしか十才か十一才の頃と思います。

お行儀が悪い、と、後ろに縛られた両手首を柱につながれ、ハダカのまま半日近くも板の間に正座させられた中に、やはりそこへ氣持を委ねる以外にはなかったのでございましょう。でも、そんなお仕置を受けている最中に、誘いにきたお友達に窓からのぞかれた時の恥かしさ。全身上氣して氣が遠くなるほどであったことも今、懐しい思い出の一つとなっているのです。

継母は、今という教育ママでもありましたでしょう。日舞とお琴は満四才から、小学校へ入るとすぐ、お花、お茶、英語など、幼い私の日課は遊ぶ間もない程につまった、毎日のスケジュールでございました。

折檻が終ると膝の上に抱き上げて頬ずりする母。そして普断は優しく可愛がってくれる母。私が十六の夏まで、必ず一緒に入浴していた母。——それは今、思い返してみても異常な点が浮かんでくるのでございます。継母

のそんな異常性は何が原因であったのか。恐らく、週に一、二度しか帰宅されなかった父にあったのではないのか？ そんな氣が致すのでございます。

若く美しかった継母は、欲求不満からサジズムの狂いとなって現われたに違いない。確かに、フロイド学説に依るまでもない、と思うのでございます。

私の脳裡には、今、柱に両の手首を高く結えつけられ、両足首を柱の側面に結かれて、体をピッタリと柱にはりつけられたお尻に、ピシヤリピシヤリと容赦なく加えられる一尺指しの打撃。挙句、背髄の先端に据えられるお灸に、もだえながら齒をくいしばって耐える私の幼い姿があるのでございます。

あれは六つの時だったと記憶しておりますが、二日続けて、夜分お粗相をしてしまい、灸療院へ連れて行かれ、夜尿症として据えられたのでございます。他に腰と下腹部にもツボがあるそうでしたが、以後は、毎日、縛られた上で据えられたことを覚えております。それが効いたのか、恐怖に近い地獄責めに神経が縮み上ったのか、夜尿症はとにかく全治してしまいました。

お仕置をされる時には、決してタオルで猿グツワをされましたので、ご近所でも恐らく私の絶叫を耳にされた方はなかったこととございましょうね。もしこの厳しい折檻が世間様に知られていたら、もっと母は継子いじめなどと話題にされていたに違いないと思うのでございます。

お仕置はいつも一時間はかかったと思いますが、ヒリヒリするお尻に泣きじゃくりながらうつぶせる私に、「いいわね、これからこういうことをよくきくのよ……可哀想にこんなになって」などといいながら、メンタムをすり込んで抱き上げる母。愛しように唇を寄せる母。……そんな折檻といたわりの両極端の繰り返しは、私が女学校に入学しても続きました。

このいたわりが、苛酷なお仕置を受けていながら、私の心を憎悪に歪ますことなく、母のサジズムに従い、縛られながら、叩かれながら、何か甘美なマゾヒズムの世界へ導いたのかも知れません。とにかく何もわからない私が、幼い心で直感的に「辛抱は無理にするのではなく、喜んで耐えることだ」という意味のことを、直感的に悟るような、厳しい中

に説明し難い雰囲気の漂うお仕置であつたのでございました。

女学校二年の時、人の勧めで、ほんの一寸だけでしたが、映画にださせていただいたことがございました。思春期をテーマにした映画で、点景的に映ったにすぎないのでしたがその頃には私自身の心も体も、実際に成長期にあつた上に「責め」に対する「めざめ」も確かに感じていたようで、精神面の苦労は大変でございました。

その奇妙な愛情を注いでくれた継母も、私が大学二年の夏、他界してしまいました。その後、私は家出致しましたが、このことは改めて書かせて戴きます。

父のことを思い出しますと、唯、可愛がつて貰つたという以外にないほど、盲愛ともいえるほどの優しいだけの印象しか浮かんでこないような人でございました。

前にも少し書きましたように、苛酷ともいえるお仕置を絶えず受けながら、なぜ私が反抗的にもならず、ひねくれた不良性をおびなかつたかという、折檻は厳しいものでございましたが、普断の、両親の溺愛とでもいうような可愛がりようと、お仕置直後の母の抱

擁が大きな影響があつたと思いますが、その両極の繰返しと共に、私の心の奥底にあるものが、成長と同時にマゾ性を覚え、厳しい答と縄目に固定され、開眼されたといつても過言でないような気がするのでございます。交互にじかに肌に感じる優しさと厳しさ。いたわりの手と激しい答打。抱擁と縄目。これらが混然となつて、小学五、六年から女学校の高学年に至る頃の私の身体と心に大きなウェイトを占めていたのでございましょう。それでも、女学校三年の頃には、女らしく成長發育した私の肌に、厳しく喰ひ入つた縄目に疑問を感じたり、お仕置の後の狂おしいばかりの可愛がりように、割り切れない異常さを母の仕草の上に見出して、不審を覚えたことも記憶しているのでございます。でも漠然とながら、人間の本能的なものも理観し得る年頃でありながら嫌悪は覚え、縄目や母の手を甘受していたのは、無意識のうちにマゾヒズムの世界に、没入していたのでございましょう。

現在、静かに私の過去を振り返るとき、打算的な人にだまされ、留学という名目（お勉

強はしたかつたのですが）で、海外まで逃れて行き、適令期の女として考えました。そして幾度かマゾヒズムというものを否定し、嫌悪してみたのも事実でございます。でも、いくら自己嫌悪に強い悩みをもちましても、所詮、もつて生れた性と育てあげた過去から、この世界から足を洗う（いやな言葉ですけれど）ことは出来ないように思うのでございませう。幾度も考え悩んだ上、もうこの世界からの逃避は考えないことに致しました。ただ気持だけは、何時も明るく持つて生きて行きたいものと思つていたのでございます。

秋の陽を受けたミナト・ヨコハマのどこかで、無心に下手な絵筆を走らせている私をもしご覧になられましたら、そつと、だまつて見守つてやつて下さいませ。忘れ去つたというものの、まだ時としてうずく心の痛手が完全に消え去つてしまふまでは……

でも、でもそれは、果して消えてくれるものかどうか……。とにかく静かに見流してやつて戴きとうございます。

春太郎は舌打ちした。

「ふん。やる気がないならいいよ。私一人でこの奥様を調教するからね。そのかわり、褒美が出りゃ私が一人占めにするよ。文句は云わせないからね」

春太郎は、そう云って、夏次郎を睨みつけていた眼を、枕の上に乗っかけている夫人の量感のある尻に転じた。

「まあ、フッフ、何て可愛いんでしょ。これ」

春太郎は、羞らいを見せてびっちり締まっているような秘められた可憐な菊花にしばらく眼を注いでから、それをくすぐるようにつ……始めたのである。

薄く眼を閉ざしていた静子夫人の、繊細で柔美な頬の線に、みるみる上気の色が浮かび上る。

「——ああ、嫌」

静子夫人は、すぐ傍の椅子に坐る夏次郎の方へ、救いでも求めるように、涙を含めたしつとりと翳のある瞳を向け、そして、すぐにそれも切なげに閉じ合わせると、段々と露骨になって来た春太郎の指先の動きにつれ、枕の上に乗った双臀を、なよなよと動かせ始めた。

「ああ、ひ、ひどいわ。そんな——」

切なげな夫人の吐息を聞き、身悶えを眼にした夏次郎は、耐え切れない思いで椅子から腰を上げた時、いきなり襖が開いて、川田と鬼源が、いい気嫌に酔っぱらい、肩を組み合うようにして、フラフラしながら入って来たのである。

「よう、やってるね」

川田は、春太郎の露骨な攻撃を受けて狂おしげに皮紐につられた両肢を揺らせている夫人を見、声をあげて笑った。

「あら、ここは立入禁止地区よ」

気をそぞろになって夫人のそれをいたぶっていた春太郎は、突然の闖入者^{ちん}に不快な表情をして指をひき、

「千代夫人に頼まれてこの美人奥様の調教にかかっているのですからね。邪魔してほしくないわ」

と、怒った顔を見せたが、「ま、そうかたい事いうな」と川田は手を上げて笑い、鬼源と二人でその場に腰を据えると、持って来た一升瓶を互に突き出し合い、鼻唄まじりで酒を飲み出すのであった。

いよいよ関西の岩崎親分が今夜ここを出発する事となり、そのお別れパーティーがあっ

てこんなに酔っ払ったのだと川田と鬼源はシスターボーイに話して

「とにかく、こんな美人の揃ったすばらしいショーを見たのは始めてだと、親分は大変なお喜びだ。また来月、ここへ来るから、充分楽しませてほしいとおっしゃったぜ」

これで俺の責任は果たせたわけだと鬼源は顔中皺だらけにくずし、さもうまそうに茶碗酒を飲むのだった。

酔っ払い特有のデレデレした弥次馬根性と冷やかしか分かれ、ここへなだれこんで来たのだろうと春太郎と夏次郎は顔をしかめていたが、川田と鬼源は、「一寸、この美しい奥様に用があつて来たんだよ」と二、三杯冷酒をひっかけたところで、どっこいしょ、と腰を上げたのである。

心をそそり立てるばかりの優美な線を持つ二肢を高々と吊り上げられている夫人の傍へフラフラ近づいた鬼源と川田は、

「フッフ、中国の忍法を仕込まれるとは、とんだ目に合ったもんだな。お前さんはどう思っているか知らねえが、こいつは一寸やそつとでマスター出来るものじゃねえ。何しろ、密輸品を隠せるだけのものに仕上げるんだ。途中で猿のケツみてえに真っ赤に腫れ上る事

だつてある」

などと鬼源が云い出したので、春太郎は口をとがらせ

「駄目じゃない。いまからそんな事いっておどかしちゃ。こっちの調教がやり難くなるわよ」

と云つたが、急に鬼源は残忍な眼つきになつて、「うるせえな。手前は少し黙つてろ」とどなりつけた。その一喝に春太郎は縮み上つてしまふ。

次に川田が、静子夫人の赤味を帯びた美しい頬に口を寄せるようにして

「こんな調教を受けるのが嫌なら、俺から千代夫人に頼んで中止させてやってもいいんだぜ。もっともお前さんの心掛けによりけりだがね」

川田がニタニタ笑いながら、くすぐるように云うと、夫人は、翳の深い哀願的な眼差しを川田に向けた。

「お願いです、川田さん。こんな恐しい調教に、私、耐え抜く気力はありません。後生です。千代さんをお願いして。ね、川田さん」

静子夫人は、唇を慄わせながら云うと、顔をそむけて、シクシク嗚咽し始めた。

「その条件は簡単だ。ちつとばかり俺達の仕

事に協力してくれりゃいい」

川田は、そう云うと、チラと鬼源の方を向いて北叟^{ほくそ}笑む。

「な、奥さん。おめえ、千原美沙江というお嬢さんを知つてゐるだろう。そら、生花千原流の家元の娘だ」

千原美沙江は昔、静子夫人が師事した京都の家元、千原元康の娘で、東京に生花の会があり父親の代理として上京して来た時は、いつも遠山家を宿所にきめている程、静子夫人とは親しい間柄であつた。日本的な代表美人として、女性雑誌のグラビヤを飾つた事もあるが、本人はそうしたマスコミに乗るのを極度に嫌い、生花一途に打込む温良な京都娘である。

「そのお嬢さんが今、生花の会でな、この東京に女中二人をお伴に連れて、出て来ているんだ」

静子夫人が謎の失踪をとげてからというものは、美沙江は如何にも深窓の処女らしく何日も自室に閉じ籠つたまま泣きの涙で過ごした、と川田は、どうしてそんな事まで知つてゐるのか、見てきたような調子で、静子夫人に話して聞かせるのだ。

「明日、生花会館で、お嬢さんは自作の発表

会をやるそうだが、そこへ奥さんから一声電話をかけてもらいてえんだよ」

そう川田に云われた静子夫人は、何かぞつとしたものを覚えた。

「な、なんと電話すればいいのです」

静子夫人がふとおびえた眼になつて川田を見上げると、「なーに、簡単な事さ」と川田は舌で唇をしめしながら

「至急に逢いたいから、使いに來た者の車に乗って欲しい、ただこれだけでいいんだよ。奥さんの声を聞きゃあ、向こうじゃ懐しさに胸が慄える思いだろうさ。何の疑もなく俺達の車に乗り、まんまと罠にかかる。ま、こういう事さ」

静子夫人の顔は恐怖にひきつたようになつた。川田達の考えている事は、やっぱりそうだったのか、夫人は一瞬、キラリと眼に憤怒の色を浮かべ、固く瞼を閉じ合わせるのである。

「よッ、どうなんだよ。黙っていちゃわからねえ。電話をかけてくれるんだろうな。千原美沙江に——」

川田はそう云つて、夫人の数本の麻縄で緊めあげられている豊かな乳房を指先ではじくのである。

「——何のために家元のお嬢さんを誘拐するのです」

静子夫人は、かたく眼を閉ざしたまま、唇を慄わせた。

「つまりよ」

川田は煙草を口にして、ゆっくり火をつけながら云った。

「千原流の後を継ぐのは一人娘の美沙江だ。親父の方は何年か前から病気で、もう再起は不能だといわれている。もし、美沙江が今、この世から蒸発してしまったとすれば、自然に千原流は断絶も同然ってえわけさ。かわって^{たいとう}抬頭してくるのは、湖月流の大塚順子という事になる」

川田は、楽しそうにそう云ってから、

「はっきり云えば、俺は大塚順子にかなりの手数料を約束されて、この仕事を頼まれたってわけだ。千原美沙江をこの世から消してくれとな——」

つづいて鬼源が、酒臭い息を静子夫人に吐きかけつつ

「どうせ消すなら、こっちへ頂こうじゃねえかと俺が提案したのさ。何しろ、そのお嬢さんってのは凄え美人だ。俺はこれを見て驚いたよ」

鬼源は、懷から婦人雑誌を取り出して、ペラペラめくり、グラビヤ頁の一つを静子夫人の眼の前へ押しつけた。

それは、日本の美女と題された一頁で、海に見える松並木をバックに正月の晴れ着姿で立つ千原美沙江の写真であった。白地に緑色をぼかした紋綸子に大きく染めあげた若松、それに千羽鶴の袋帯をしめた晴れ着姿の美沙江は、ふと女優の三田佳子にも似て、水もしたたる美女という形容ぴったりだったが、静子夫人が、川田と鬼源の要求をはっきりと拒絶すると、「何だと」鬼源は急にむっとして眉を曇らせ、手にした雑誌で、夫人の横面を力一杯引張らした。

それでも静子夫人は、泣きながら頑強に拒否するのである。

「静子は、静子は、もうどうなってもかまいません。ですけど、お願い、家元のお嬢さんを誘拐するなんて、そんな、そんな恐い事はやめてっ」

静子夫人は、大恩のある千原元康の令嬢を悪魔達が、狙い出したと知って取乱し、「もうこれ以上、罪もない人を地獄に落とさないで。御生です」と、大粒の涙で頬を濡らしつつ哀願するのだった。

「どうしたの」

うしろで声がし、川田が振向くと、シスターボーイに静子夫人の事を任し、部屋を出て行った千代が、再び葉子と和枝を家来みたいに従えて顔をのぞかせているのである。

「千原美沙江に電話するというのは嫌だというのね」

千代は、川田や鬼源の計画にも一枚加わっているらしく、冷ややかに口元を歪めてそう云うと、「一寸、こっちへいらっしゃいよ」と、川田と鬼源を部屋の隅へ呼び寄せる。

「別に静子に電話させなくたって、千原美沙江をここへおびき出す事は出来るわよ。今、湖月流の大塚女史から電話があつてね。美沙子付き添いの女中二人をうまく買収したと云って来たわ」

千代は、台の上に固定され、すすり上げている夫人の耳に聞こえないように川田に小声で教えるのだった。

最初、湖月流の代表者、大塚順子から、美沙江という千草流家元の娘を何とかこの世から抹殺する方法はないものかと半分冗談まじりで相談を受けたのは千代であった。大塚順子は、元はといえば外人相手のオンリーをしていた事もあり——その頃、千代と知り合っ

たのだが——三十過ぎてから心機一転、前衛派の花道にいそむようになり、独立して現在の地位を築き上げたのである。

しかし時折り、発表会など企画するものややはり、テレビや週刊誌などに、大きく取上げられるようになった千原流の人氣には勝てず、弟子達も次から次に前衛花道を見限り、千原流の方へ走っていくようになった。千原流花道の人氣は何といっても美貌の美沙江であった。

それで、あの娘さえ突発事故でも起ってこの世から消えてしまえばあとは湖月流の天下なのだがと大塚順子は愚痴っぽく千代に語った事があり、千代はそれを川田にそれとなく話したところ、よし、俺に任せてみないか、その代り、手数料はたっぷり頂くぜ、と如何にも成算があるといった顔をしてこの仕事を請負ったのである。

女中を買収したとはどういう事だ、と川田が聞くと、美沙江に付き添って来た女中二人は関西地方の田舎の娘で、都会に強い憧れを持っている。深夜喫茶かゴーゴー酒場などで遊び呆けるだけの小遣を毎月保証してやれば主人を裏切る事ぐらい屁とも思っちゃいない現代的田舎娘で、明日の朝、静子夫人から電

話があったと彼女達は美沙江を騙し、生花会場へ出かける前の美沙江をここへ連れこむ手筈になっている、と千代は説明するのであった。

「そうか。そこまで段取りが出来ているとなりゃ楽なもんだ」

と川田は笑いかけ、それが台の上に乗っている静子夫人に聞こえはせぬかと、あわてて手で口を押さえるのだった。

鬼源も夫人の方に氣を使いながら、小声で千代に云う。

「すると、つまり、明日の朝は、すばらしい京美人が一人入荷するってわけですね」

今にも涎でも流しそうな鬼源と川田の顔を千代は面白そうに見ながら

「そう。私が女中をしていた頃、そのお嬢さん、何度か静子夫人を訪ねて遠山家に来た事があるわ。たしかに日本のお人形のように美しいお嬢さんよ。ところが生花の事しか世の中の事はわからないといった全くの箱入娘なの」

宝石商会の令嬢、村瀬小夜子が洋装の似合う近代的美人とするなれば、千原流の家元の令嬢、千原美沙江は和装の似合う古風で純日本的な美人だと千代は得意になって説明する

のだった。また、美沙江は自宅にある時は更紗小紋、紺、紬、外出する時は色大島という風に和服しか着ないので有名だったし、またそれが如何にも家元の娘らしく、彼女の美貌と人柄にもびったりマッチするのであった。

そんな風に生花に使う草花より重いものは持った事のない初心なお嬢さんだから、最初から手荒な事をする、氣を失ってしまうかも知れないわ、と千代は鬼源に微笑を見せて云う。

「今夜、湖月流の大塚さんがここへ来るからそのお嬢さんを誘拐した場合、どういう風に扱うか、田代社長をはさんでよく相談してみらるわ」

そして千代は、いたずらっぽい眼つきをして鬼源と川田を見て、
「そこでもし、家元の令嬢をこの屋敷にいる女達と同様、調教し、ショーのスターに仕上げるという事になれば、お二人に調教料としてたっぷり差し上げるわ。それだけの値打ちはあると思うのよ。何しろ相手は、世間知らずの初心な、二十になったばかりの御令嬢、勿論、処女、ものにするにや並大抵の事じゃないと思うからね。まず調教なんて無理な話よ」

そう云った千代は、ふと、視線を静子夫人の方に向け、再び、声を低めて、鬼源と川田に云った。

「この事は、静子には内緒よ。明日、美沙江がこっちの網にかかった時、どんな顔するかそれが楽しみだもの」

よし、わかった、と川田はニヤニヤして、「シスターボーイが中国の忍法をこれから静子に教えるらしいが、その前に一寸、鬼源と俺とで静子を楽しませてもらいてえんだ。何しろ、ここんところ、女の裸にゃ見なれていゝるが、そのものズバリはとんと御無沙汰してるんだよ。頭が重くてどうもいけねえ」

千代は、その意味がわかって、クスクス笑いながら

「ああ、いいとも。うんと楽しんだらいいじゃない。そのかわり、終ったら、すぐにシスターボーイに仕事させなきゃ困るよ。私しゃそれも楽しみにしてるんだから」

千代はそう云って、さっきから眼をパチパチさせて突っ立っている春太郎と夏次郎を手招きして自分の所へ呼んだ。

「これから、この二人が一寸静子夫人とお遊びになるそうなんだよ。それがすめばすぐあんな達に仕事をしてもらうからね。隣の部屋

でお茶でも飲んで待っていて頂戴よ」

何だかわけのわからないような顔つきで、春太郎と夏次郎が襖を開けて出て行き、「じゃごゆっくり」と千代が含み笑いしながら、川田の肩をたたいて和枝達と出て行くと、川田と鬼源は、何か小声でヒソヒソ話し合い、愉快そうに口を歪めて、ゆっくりと台上の静子夫人に近づいた。

「安心しな。千原美沙江誘拐計画は取り止める事にしたぜ」

川田が夫人の美しい頬を指でつつき、そう云うと、夫人は、軽く瞑目していた臉をふっと開き、涙で濡れた抒情的な瞳を川田に向けた。

「ほ、ほんとですか」

「ああ、ほんとだとも。これだけスターが揃っているのだ。今更、千原流家元の娘を誘拐してまで骨折る事はねえものな」

川田がそういうと鬼源も続いて

「それから今、千代夫人に頼んで中国の秘法をおめえに教えこむのは中止してもらったぜ。何もそこまでおめえを無茶苦茶にする事はねえものな」

それを聞くと静子夫人は切長の眼尻から一筋二筋、涙をしたたらせて、救われた悦びに

ふと胸がこみ上って来たのか、シクシクと顔を伏せて泣き出した。

「どうでい。これではっとしたろう」

川田が、ちらと鬼源の顔を見て片眼をつぶり、静子夫人に云うと

「——恩に、恩に着ますわ、川田さん」

夫人は、泣き濡れた顔に感謝の笑みを強いて浮かべ、川田を見上げるのだった。

「その恩返しを早速お願いしたいんだよ」

川田はニヤニヤしながら夫人に顔を押しつけるようにして

「美沙江嬢の誘拐は取消し、千代に頼んで恐ろしい調教から解放してやったんだ。それというのも自分はどうなってもかまわない、家元のお嬢さんを助けてと云う奥さんの氣持に鬼源と俺は打たれたからなんだぜ。だから、これから俺達二人が奥さんに何をしようと、そっちじゃ文句が云えない筈だ」

そうした陰險な云い方をする川田であったが、静子夫人は、それは元より覚悟の上だったのであらう。優雅な顔の眉のあたりにふと暗さを浮かべながらも、はっきりとうなずくのであった。

しかし、更に川田から、女の肉体を媒介として川田と鬼源が兄弟の契り結ぶのだと聞か

されると、夫人は、思わずはっとしたように川田の視線から眼をそらし、象牙色の美しい頬をみるみる内に朱に染めていく。

それだけではなく、川田と鬼源の夫人に対する要求は惨鼻なものであった。一人ずつではなく同時に二人を楽しませる——最初その意味がわからず、夫人は恐しさにただ身をかたくしているだけだったが、

「なーに、別にむつかしくはないさ。この可愛いらしい花のような唇とことを同時に使えばいいんだよ」

そう云って川田は楽しそうに鬼源相手にジヤンケンをやり始めた。

「よし決まった。じゃ、最初は俺が上、鬼源が下だ」

川田は、そういつて声を立てて笑った。

「どうしたい。いやに浮かぬ顔をしてるじゃないか」

川田は、冷たい台板に頬を押し当てようにし、アップに巻かれた黒髪と、珊瑚玉の簪を震わせて嗚咽しつづける夫人の顎に手をかけた。

「俺達に恩返しするのが嫌になったのかい」

急に川田が凄んで見せると、静子夫人は、

涙を滲ませた睫毛をしばたかせ、哀しげに首を横に振って見せるのだった。

「そんなら、いつまでもメソメソするんじゃないねえ」

鬼源は、ふと、宙へ高々と吊り上げられている夫人の優美な二肢を見て、「これじゃケツが振り難いだろう」と台の上へ乗って皮紐を解き、夫人の両肢だけ自由にさせ、再び、台を飛び降りると、隣の部屋から手頃な大きなバナナを二本持って戻って来た。

「どうもこういう事になると自分が楽しむって事より、調教って風に考えちまうんだ。困った性分だよ」

鬼源はそう云って笑いながら、

「二人を相手にしなきゃならねえ時は、これからいくらだってある。少し、そのコツを教えておかなきゃな」

鬼源と川田は、上下二手に分れて、柔かく

……しながら、まず夫人の緊張をときほぐしにかかった。パンツ一枚になった川田に胸のふくらみと、その上の……妙に愛撫され、赤禪一枚の鬼源に内腿から付根の周辺を執拗に……されている中、次第に情感を引き出された夫人は、もどかしげな身悶えを段々と露にし、半開きになった口から熱い吐息を吐き続

ける。

「——ねえ、川、川田さん」

静子夫人は、川田の左手を枕に頸を乗せ、柔かい耳たぶや咽喉首に川田の熱い接吻を雨あられと受けながら、上ずった声で

「千原家のお嬢さんだけは、ね、お願い、お願いですわ。私達と同じような運命にひきこまないで——後生よ、川田さん」

「ああ、わかったよ。すべて奥さんの心掛け一つさ。鬼源と俺とをたっぷり楽しませてくれりゃな」

「——それさえお約束して下さるのなら、静子、ああ、静子はもうどんな目に合ってもかまいませんわ」

静子夫人は、そう呻くように云うと、ぐつと体を川田へ押しつけるようにして行き、びったりと川田の唇に唇を押し当てると、そつと舌を川田の口中へ押し入れる。

濡絹のような甘い夫人の舌を吸いながら、川田がふと鬼源の方に眼を転じると、夫人は自分の覚悟の程をはっきり示すかのように、もはや、ためらいも羞ずかしもなく、鬼源の眼前に堂々と……、鬼源の手で黄色い……をゆっくりと……まされていくのであった。

それを見た川田はは、せせら笑うようにしながら、静かに夫人から唇を離し、果物の先端だけを喰いちぎって、それを夫人の口元へ近づけた。

「本番に入る前に少し練習しなきゃね。さ、これを僕のものだと思って深く呑み込むんだよ。そら、アーンとお口を開けて——」

川田に注ぎ、小さな笑窪を作って柔かい微笑を浮かべると、そっと眼を閉ざし、同時に、さも羞しげに小さく口を開けるのだった。

毎月確実に入手されるために 本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売!

一月分	1冊	三五〇円(送20円)
三月分	3冊	一〇五〇円(送共)
半年分	6冊	二一〇〇円(送共)
一年分	12冊	四二〇〇円(送共)

郵便番号
558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとか、かいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたたいという御希望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時に、お手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下さるのには大阪市住吉局私書箱第四十一号曉出版株式会社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何力月分と御指定下さい。

○三月分以上お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分二十円(切手可)の御負担を願います。

○本誌は十月号から定価三五〇円に値上げになりましたので、予約購読料は三月分三冊

一〇五〇円、半年分六冊二一〇〇円、一年分十二冊四二〇〇円になります。今後当分の間誌代の改訂はしない予定です。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊宛お申込み下さる方は、誌代送料三七〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何力月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細表を雑誌に添布致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に「本号にて前金切」の判を捺印致しますから継続お払込み願います。継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りに行きたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とをお知らせ下さい。当方では御指定の局留としてお送りいたしますから、数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間でその間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

夫人がそれを深く口に含んだと見た鬼源は枕の上にしっかりと夫人の双臀を乗せ上げて「そのままじっとしてたって駄目じゃないか。しっかり腰を使うんだ。の字でも描くように大きく尻を動かしてみろ」

夫人の双臀がゆるやかに枕の上で弧を描き始めると再び鬼源が叱咤した。

「腰にばかり気をとられて、口の方が留守じゃないか。舌と唇を上手に使って、タイミングを合わせるように工夫するんだ」

夫人は、得体の知れない魔風にまきこまれたよう唇を動かし、腰をくねらせ、やがて、鬼源と川田に命令され、強制されるまま、脂汗を浮かべた全身を大きく躍動させ始めた。

「よし、それ位でいいだろう。コツはわかったろうな」

鬼源と川田は、互いに責めの矛先を夫人から引抜くとほっとしたように額の汗を拭い、「さて、本番といくか」

鬼源は、上気して乳房に波打たせている静子夫人を頼もしげに眺めながら、クルクルと赤禪を解き始めた。

(未完)



上

「何？ 花姫様が城を脱出されたと？」

「そんなはずはない。お傍はわれわれ胡蝶隊の女子で固めていたはず……」

「いや、その護衛の者の中から裏切者が出たのかもしれない……」

「そうか……。それが誰かの見当も大体つきました、まだ遠くへはゆくまい。これから追

いかけ、姫様を奪い返すのじゃ」

「されど、姫様御自身のお考えが、和睦にあるのであらば……」

「いな、松平容保の妹姫様がそのような腰抜けであってはならぬはず。いなやと申せば、この非常時、姫様とて容赦はせぬ。優子、八重子、続けや！」

甲高い声で言い切ってサッと立ち上ったのは、会津藩士中野修理大夫の娘中野竹子。当

女武者決斗ストーリー

女 鶴 ケ 城

川 上 米 子

年とって二十二才。会津小町との噂にたがわぬ美女の上、剣を取っては男も及ばぬ無類の使い手。されば会津籠城ときまってから、若い女子のみで編成した胡蝶隊の隊長に推されていたのも当然と云える。優子というのは彼女の妹で、年はいまだ十七。花も蕾の風情ながら、心ばえは姉にも劣らぬ少女、八重子と云うのは隊の中でも腕利をもって知られた山本八重子という人妻。他にさらに二三人、腕

に覚えの女達が加って、闇の中に花姫の後を追って飛び出したのである。

時は明治元年八月二十一日の夜。既に会津藩に対する官軍の総攻撃は苛烈を極め、会津守備軍は諸所で破られて続々と城中に引き揚げつつあった。城主松平容保はあくまで籠城決戦の覚悟をきめていたが、しかし、城内には容保の姉熙姫はじめ、戦いの結果を見通して、この上はなるべく、無益の死傷者を出さず、あわよくば会津一藩の安泰を図ろうとする講和派の動きもあったのである。

熙姫もなかなかの女丈夫であって、胡蝶隊すなわち婦人部隊の名誉総裁であったが、内心には容保の身を案ずること一通りでなかった。胡蝶隊は隊長中野竹子はじめ主戦派で固めているので、姫自ら城を脱出することは不可能と見て、ひそかにしたためた講和の密書を妹花姫に与えて城を脱出させ、官軍の陣へ走らせたのである。それと知って竹子等が、それを阻む挙に出たのも無理はない。

彼等は、姫の駕庫が母成峠の官軍に向ったと察して、勝手知った夜の山道をひた走りに追った。深窓の花姫と違って、日頃山野を駆け廻って練武に励んでいた竹子はあちこちの間道に詳しい。必ず追いつけることに竹子は

確信を持っていた。その自信たっぷりな姉の足についてゆきながら、妹の優子の方は、かつてない大きな不安が刻々と胸の中に拡がってくるのを禁じ得なかった。それというのも姫の脱出を助けた裏切者というのは、自分の恋人の姉西郷やお子であることは間違いないと思われたからである。

「薩長奸賊討滅」の主戦論が湧き返る中で、ひとり恭順を主張してやまなかったのが、外ならぬ首席家老西郷頼母であり、やお子はその娘であることも言を俟たない。そして優子の恋人こそは、やお子の弟で頼母の末子である彦五郎その人であったのである。

頼母の他の子達四人は必ずしも父を支持しなかったが、末子の彦五郎のみは夙に勤王の志があり、脱藩して京や江戸で活躍し、この度の戦でも、会津出身者であることが重宝がられ、その先鋒に加っているということが専らの特権であって、それがまた頼母の立場を一層悪くさせていたのである。

やお子は頼母の一人娘だが、何と云ったのか、仲間の白眼をよそに、主戦派の胡蝶隊に入ってまめまめしく立ち働いていたのであるが、今にして思えば、中にあって熙姫や花姫との連絡を保っていたのかもしれない。この

やお子は、竹子とはまさにいづれがあやめかきつばた、容姿の上でも奸を競ったばかりでなく、武芸の上でもいづれが優るとも劣るともいえない女性であった。ただ違うところと云えば、竹子があくまで男まさりの勝気なのに比べ、やお子の方はいかにも控え目でしとやかであった。

さらにわるいことには、この両美女が会津藩の一人の若い武士に想いをかけたのだから事は無難に治まりそうもない。それは会津藩随一の剣士であり、役向きの上でも将来を囑望された、萱野鉄馬という若侍。二美女が争うにふさわしい男性であった。しかし勝負は簡単にきまった。鉄馬が竹子を選ばずやお子を求めたからである。華やかな一対の若夫婦が出来たのはつい去年の春のことであった。実は鉄馬の方ははじめからやお子に魅かれていたのであるが、竹子としては、おのれが敗れたのは身分の差のためときめつけて、鉄馬に対する愛は憎悪にかわった。やお子に対する嫉妬はもとよりそれ以上である。

(姉上はこの機会にやお子様を討って、宿怨をはらそうとしているのでは——)

不安は現実になりつつあった。

とつい口に出た。

「何!？」

前方を見つめたまま姉の声が返ってきた。

「姉上は今夜、やお子様を——」

もう言わざるを得ない優子であった。

「そなたは、何を——」

はじめてふり向いた竹子は鋭い目でじっと妹の顔を見つめたが、パイと目をそらすと、

「この非常際に、何をめめしいことを。大義親を滅す、じゃ」

烈しくいってまた走り出す。一瞬、その姉の背を刀で斬ってやりたい程の憎しみを覚えて、優子はまた身をふるわせた。

「おう、見えた。あの灯こそまさしく目ざす花姫の駕庫、追つきましたぞ。それッ!」

竹子はじめ八重子、きく子、寿美江の三名はさらに足を速めたが、優子がおくれ勝ちになるのはやむを得なかった。

夏の夜は浅く、黒く輝く小川のふちの草叢には、一瞬後に惨劇の起るのも知らず、無心に飛び交う螢の可憐な光りがあった。

「待てっ、その駕籠とまれ!」

竹子の鋭い声に、駕籠につき添っていた数人の影が足を止めたが、駕籠はさらに二、三人に守られて前よりも早く走ってゆく。

「ええい、待てというに」

立ち防がる影達をおし破って追おうとした竹子がギョツとして足をとめた。

「待てというから、待って居ります」

聞き覚えのある声と共に、正面に立つ人影——闇に浮ぶ白く美しい女人の顔は、紛れ

もない西郷やお子その人のそれであった。

「そ、そなた、や、やはりやお子じゃな」はずむ息に緊張が加って、竹子の声がつぶれた。

「そなたは竹子様。何をそのように血相を変えられて……」

「ええい、いうな。裏切者! あの駕籠の主は花姫様であろう」

「違いまする。あれに居られますは、お局の玉垣様——」

「なに、ち、違うと?——」

出鼻を折られて、竹子は絶句したが、

「も、問答無用。そのけ、早くあの駕籠を追うのじゃ」

と連れの者を促す。

「これは御無態な——」

言いつつ、やお子もすでに覚悟のこと、用意の刀の柄に手を掛ける。

よい、ここは妾がひきうける故、そなた達にかまわず、駕籠を追うのじゃ」

言いざまそこは手練の彼女、

「エーッ!」

と居合抜きに右端の一人を斬る。

「アーッ」

悲鳴とともにその女はザブと傍らの小川に落ち込む。狭い田圃道だが、一翼が崩れた隙に八重子、きく子の二人がかけ抜ける。

「やらぬ!」

とまた一人が立ちふさがったが、これも腕の立つ八重子の一刀を受けて、たちまち路上に打ち伏す。

その間に、やお子と竹子は既に互に刀を晴眼にかまえて相對していた。

「おのれ、裏切者めッ! 隊長の妾が成敗してくれる」

吼えつつも、相手の腕を知っている竹子は油断なく隙をうかがう。

「お相手致しまする」

言葉少くそういったが、やお子の全身からも一歩も引くまいという気迫が溢れていた。

美女と佳人、まさに宿命の対決が展開されたのだ。秒一秒、その時優子がかけてつけた。

「あ、やお子様!」

麻と乱れる胸に思わず、立ちすくんだが、もう今はどうしようもない。彼女の手にも自然に剣が抜かれて、

「お助太刀！ 寿美江様は早く駕籠を——」

と、今一人の女と相對している寿美江の横に並んだ。

「おう、優子様か——」

それに力を得たのか、寿美江は急に攻勢に出て、

「エイ、ヤッ——」

と打ち合つたかと思うと、ひるみ気味の相手の右肩へサッと一太刀入れた。

「ウ、ウーッ。むねん」

プツと飛ぶ血しぶきに、目くらんで逆上したのだろう、その女は優子目がけて刀を振り上げてきた。

「あっ！ 優子様！」

心配した寿美江が後方でそう叫んだが、優子はそういう点では、かえって落ちついていた。相手との間を見切っていたから、ためらわずにそのままスーッと刀を突き出す。踏み出した女はわれから、おのれの体をその刃先にぶつけた結果となった。

「ギャーッ！」

苦鳴とともに棒立ちになる。ズシリと重い

手応えを感じると同時にバラバラと血潮が優子のその手にかかる。ゆがんだその美しい顔が、光代という朋輩であることも優子ははっきり見た。

「……………」

思わず、グツと刀をひき抜くと、それにつれてバツタリ前にのめつたその朋輩は、あわれにももう動かなかった。

「お見事！」

そう讃めておいて、寿美江は今度は、

「お助太刀！」

とやお子の背後に迫っていった。

「卑怯な——」

危うく口に出かかったのを抑えて、優子は立ちすくんだ。実の姉と恋人の姉との一騎打など、とても見ていられないと思う一方、寿美江と二人がかりでやお子に向うとなると、逆にやお子に味方したい矛盾した気持ちに釘づけにされるのだった。

それまで竹子とやお子は相睨眼に對峙したまま、一太刀も合わせていなかった。お互いに腕は知りつくしているし、一寸の乱れが命取りになることを共に熟知しているからであった。しかし竹子には、やお子に対する私怨もさることながら、もうひとつ、花姫を追わ

ねばならないという使命に、心のあせりがあることもたしかであった。八重子ときく子が首尾よくやっていてはくれるであろうが、それとて自分の眼でたしかめねば安心は出来ない。ところが一方のやお子の方は、こうして睨み合っているだけで、花姫を逃す使命は達している。その落ちつき払った態度が、竹子にはたまらぬ程憎々しく、思わず肩に力が入るのを、流石に修練の賜で、辛うじてこらえて来ていたのであった。それだけに寿美江の助太刀は渡りに舟である。

「危い、退きや。そなたは姫を——」

という口とは反對に、身体は急に攻勢に転じ出した。

やお子も敵が二人になったと見て、スーッと体を引きざま、横目に寿美江に備える。その動きに乗じて、竹子ははじめて

「エイッ——」

烈しい気合と共に斬り込み、憂と刃がふれ合うと、今度はやお子が切り返して、両美女の闘いは動に移った。寿美江はやお子の後ろへ後ろへとまわりながら、隙あれば斬りつけようと大上段に構えている。これではもう一騎打ちではない。優子は今にもその寿美江の背に斬りつけてやりたい衝動に気付いては、

ハッと戦慄するのであった。

やお子はもはや寿美江の動きを勘定に入れる余裕はなかったし、また入れようともしなかった。女流随一の竹子との一騎打でさえ大へんなのに、その上に敵が加わっては、到底勝目はない。こうなってはせめて竹子を倒すのみと、全力を挙げて前に向う。肉を斬らせて骨を斬る。その覚悟のやお子の姿が、いかにも気高く、凛々しく優子の目に映った。

その気魄に押されてか、さしもの竹子が受太刀になって後へ後へと退る。もう一息、もうひとつ踏み込んだら、やお子の太刀先が竹子の身体の何所かに触れたであろうと思う一瞬、危うしと見たか、後ろより寿美江が

「とう——」

と小走りに、やお子の背を目がけて斬りつけていった。

（ああ、やお子様！）

こなたで思わず目をつぶる優子。しかし寿美江の斬り込みも無理な態勢であったから、一瞬体を交しざま、横に払ったやお子の一刀をもろに抱え込む恰好となって、腹をしたたか斬られた寿美江は、斬りつけたままの姿勢でつんのめると、頭からザンブと水田に倒れこんだまま動かなくなった。同時に無意識に

体を交したやお子も、足を滑らして左足を小川に踏み込み、しりえにどうと倒れたのである。その隙を、美剣士、竹子が見逃すはずはなかった。

「エイッ！」

真向かううちおろす烈剣が、あやまたず起き上ろうとするやお子の右肩を三四寸も袈裟に斬り下げたから、何でたまろう。

「アッ！」

と一声、再び仰向けに打ち倒れる。

「ひ、卑怯！」

思わず叫んで、優子が走り寄った時はもう遅かった。倒れたやお子の上にのしかかった竹子が、止めの第二刀をそのふくよかな胸のあたりに力一杯突き通していたのだ。

「ウッ、ウーン」

白玉五尺三寸もあろうやお子の優雅な女体が、しばし地上にのた打ったが、あわれ玉の緒がきれたのか、ブルンと大きくひとつ揺れると、ぐったり四肢をのばしてしまった。

「……………」

ここ数年ライバル視して来た宿敵を仕止めた興奮に、竹子もしばし、刀を相手の胸に刺し通したまま、放心したようにその死体を眺めていたが、まるでなじるように此方を見て

いる妹の視線に気付いて

「フーッ」

と大きく喘いで、片足でやお子の胸板をふみつけつつ、グイと刀をひき抜く。そのさし傷からドッと鮮血があふれて、ピクピクと手足が動くのを見ると、流石に顔をそむけた。

そしてまだ塑像のように立ちすくんでいる優子の方へ寄って来ながら、冷い眼差で、
「やお子はこの通り妾が成敗しました。裏切者の首、そなたが斬って提げて来や。姉のせめてもの思いやりじゃ」

言うやサツとまた花姫の方へ走り出した。姉の足音が遠ざかると、優子は倒れているやお子の身体にとびついて、

「やお子様！ やお子様！」

と、ゆすぶりつつ必死に呼んでみたが、仰向いたその美しい顔にはもはや生氣がない。

優子は、それでもなお、その耳元に口を寄せ、名を呼ばずにはおれなかった。姉竹子とは正反対である自分の心を、たとえ今、死にゆくとはいえ、この人だけにだけは知ってもらいたい女心の切なさであった。

と——その心が通じたか、やお子の両の眼がうっすらと開かれ、花唇かすかに動いて、
「優子様——彦五郎を……」

というなり、再びガクリと面を伏せてしまった。声にもならない程であったが、優子ははっきりと聞き取ったし、やお子が自分に抱かれているのを認めたことに言いしれぬうれしさを覚えたのである。

(もはやこうなつては詮方なし。せめてお首だけでも、私の手で葬って、逐一、彦五郎様に御報告せねば——)

雄々しさをとり戻した彼女は、懐剣を逆手にかまえると、やお子の匂うような白く長い頸すじにキッと目をやった。

下

しかし、やお子の死は無駄ではなかった。

竹子達の追った駕籠は何ぞ図らん、やお子の言った通り花姫ではなくて、奥女中の玉垣であった。彼女等は胡蝶隊の注意をわざとそちらにそらせ、その間にまんまと当の花姫を官軍の陣中に送りこんだのである。

もとより和平はすぐには成らず、むしろ竹子達の宿願通り会津決戦は起こったが、しかし花姫が官軍の陣中に入ったことによって、城内と官軍の間に交渉の橋が渡され、それが会津側の士気を鈍らせ、和平を速める力になったことは疑えない。むしろ白虎隊や娘子軍

のような純粋な戦士達は、会津首脳部からは見捨てられた形となった。

かくて八月二十四日、二十五日の両日、会津藩は最後の抵抗を試みたが、中でも目覚ましい働きを見せたのが、中野竹子を隊長とする、娘子軍の奮戦であった。もとより胡蝶隊が大部分だが、それ以外の婦女子も加って、総勢四、五十名。一団となって官軍の本営目がけて雪崩れ込んで来た。

「ややっ、あの敵は女ばかりだ」

「流石は会津藩、婦女子までも健気な——」

「いや、苦しまぎれに女子供まで狩り出しているのだ」

「女相手に斬り合いなど出来ん」

「お手並み拝見といこうではないか」

官軍側の将士もいささか驚いて、思い思いの思惑をしていたが、放っておくわけもいかず、おっとり囲んで討ちに出た。

出来るといってもそこは女人のこと、たちまち五人、十人と朱に染って倒れたが、流石に真先進む竹子等主力の強いこと。大の男達が逆にバツバツと斬り倒され、彼等は本営すぐ近くまで進んで来た。

「手剛いのがいるぞ」

「無益な損害を出すな。鉄砲で討ちとれ」

「ハッ」

数名の銃兵が前方に出て銃を構えた。

「アッ、待てっ」

その時そう言って制止したのは、外ならぬその陣営にあった西郷彦五郎であった。

彼は先程から竹子達の奮戦を眺めていたのだが、そして竹子こそ姉やお子の仇であることも知っていたが、何かしら走り出て竹子を斬ろうという気が起こらなかった。

私怨などこの際、という理性もあった。竹子はまた愛する優子の姉であるという引掛かりもあった。しかしそれ以上に彦五郎は幼い時から竹子自身に抱いていた思慕とか憧憬とかいうものを捨て切れなかったのである。

女らしい美しさという点からいうと、それは実姉の、やお子の方が上であったかもしれない。しかし、男が自分の肉親に感ずる美しさと、他人の女性を見る眼とは当然違う。まして竹子の、男を男とも思わぬ、冷い美しさが、姉のやお子とは対照的に、彦五郎には妙に魅力あるものに映ったのである。そして今ひとつ、竹子に対する強烈な思い出があったのだ。

もう数年も前のことだが、彦五郎の通っていた道場に、竹子が姿を現わしたことがあつ

た。いわゆる他流試合に來たのであろうが、
どういふわけか彦五郎も相手をさせられた。

当時既に定評のあった竹子の薙刀に対し、年少の彦五郎が敵するはずがない。散々あしらわれた挙句、木の薙刀でいやという程怪を払われて、仰向けに打ち倒された。その上彼女は、何と想像したか起き上がれないでいる彼の胸の上に、ムンズと馬乗りになってしまったのである。おどろいた彦五郎が刎ね返そうとするが、いかなる術かビクともしない。衆目の中で異性に組みしかれて動き得ぬ屈辱。彼も懸命に抗った。そのさまを見下しながら、竹子はチラと冷笑して、

「西郷頼母様の御息ともあろうものが、このようなひ弱なことまでどうされます。女性にうち負けたこと、すこしは口惜しいとおぼして修行されませい」

と揶揄した。その笑顔は——およそこの人がかつて見せたことのない、男子の鉄腸をもとろかすような、美しさであっただけに、彦五郎の目には、強くやきついた。女性に打ち負けた恥ずかしさよりは、はじめて異性の肌にじかにふれ、美女の体臭にむせた快い驚異が、彼の五体をしびれさせたのである。

その日以後、竹子に対する思慕が、その妹

優子に接触するようにさせたという方が正しかったかもしれない。優子とは気楽に語れても、竹子には、面と接しても口も利けなかった。その高嶺の花に対する憧れは会津を後にしてからでも忘れられなかったのである。

しかしその竹子——鉄砲で射たしては何にもならない。（どうせ散らす花なら、おれの手で——）そう思った時、もう無意識に彼は竹子の前に立ちはだかつていた。

「おお、そなたは——」

見覚えのある若者の顔を前にして、竹子も思わず、つぶらな瞳を見張って足をとめる。

「中野竹子殿とお見受け致す。私は——お覚えもあるう。西郷頼母が末子彦五郎。今は官軍に属している身。お相手致そう」

「官軍とな——。おのれ、揃いも揃って裏切者。殿に代って妾が成敗してくれる」

「笑止、時勢を見る目なき者は、犬死にするばかり」

「ええい、小賢しきこと、許しませぬ」

やお子を手に掛けた心のおくれもあって、竹子は逆上気味に無二無三に斬り込んでいった。しかし、その烈しい切尖を、さ！ さ！ とうけ流す、彦五郎のがっしりした足腰。

（おう、いつの間に——）

かつてない威圧を覚えて、竹子も相手がかつての少年でないことを知った。まさに男子三年会わざれば刮目して待つべし。

（これは油断ならぬ）

と気をひきしめる一方、相手が手剛いと思えると、ますます猛り立つ彼女の性格。

（たかが小童、この上は妾の奥の手で仕止めてくれん）

と氣力を絞って、再び挑みかかる。薙刀を水車の如く廻しての連続技は百戦練磨の竹子ならではの猛攻。あわや年少の彦五郎危しと見えたが、あわてるさまもなくヒラリヒラリと体を交す見事さに、官軍も会津側もしばしは戦う手を止めて、この一騎打に見とれる。

「しゃっ——」

その得意技も功を奏さぬと見て、自然あせる竹子。しかもこれまでの戦いの疲労が加って、さしもの勇婦も打物が重く感じられ、刃先も乱れて來た。額から流れる汗は鉢巻をぬらし、黒髪はベツトリと顔に乱れかかる。それを振りはらおうとした瞬間、どう隙をつかれたのか、彼女は左半身に言いしれぬ激痛を感じて、思わず両の手がしびれて、棒立ちになった。

（やられた！）

反射的にそう感じた途端、グルッと天地が一廻転して、次には大地に投げ出されているおのれの姿を意識したのである。

「アッ……、不覚！」

我に返って身体を起こそうとしたが、その胸の下辺りにはすでに彦五郎が馬のりになっていたばかりでなく、五体がバラバラになるような痛みは、そこに深い刀傷を受けていることを知覚すると、流石の竹子も急に全身の力が萎えてゆくのであった。

しかも何時の間にか彦五郎の手に持たれた脇差の切尖が、おのれの咽喉首に迫っていたのである。

「アレ！」

いまだかつて敗れた経験がないだけに、はじめて死の恐怖を感じて身を顫わせる竹子。

と——既に声変りした彦五郎の落着いた声が、その耳朵を打った。

「竹子殿、かつて、道場で御身がわたしを組みしいたのを忘れか。今日戦場でこう御身を組み敷いたのも、その折の恩返しと思われ。戦さのこと故、姉の仇などとは申しませぬが、鶴ヶ城の落ちるのも一兩日。とすれば主戦派である貴女が、生きる途はありますまい。御運の尽きとあきらめて、いさぎようお

首級お渡しあれ」

（妾が——妾ともあろうものが、この首をとられる——）

思いがけない現実、竹子程の女丈夫も、必死に暴れ出したのも無理はない。その憧れの美女の肉体の、生への執着を表わす躍動をいたく感じながら、

（惜しい——）

と鈍る心を抑えつつ

「戦さでござる。烈婦らしき最期を遂げられよ。申し残すことあらば承ろう」

と引導を渡す。そのビクともしない雄々しい構えに、竹子も遂に観念したのであろう。

「そなた、優子を——。せめて優子だけは助けてやって——」

と、喘ぎつつ言い、抵抗をやめて目を閉じる。

「よう申された。優子殿のことは、お引受申す。御安心あれ。さらば戦さのならい。みしるし頂戴仕る、お覚悟を！」

と口には言いながら、心の中では（姉上の霊も御照覧！ 仇竹子の首、この通り彦五郎が只今討ちとりまする）

念じつつ、右手の懐剣の刃先を形のよい曲線を見せている右頸部にあてがう。男の首さ

え斬ったことのない彦五郎は、女性の、それも高嶺の花と憧れた人のたおやかな首を斬るとあって、さすがに一時は、手先がふるえたが、思い直して、思い切ってグイと強く右に引く。

と豊満なその女体が、彦五郎に組み敷かれたままうごめいたが、それも一瞬、たちまちにして、音に聞えた烈婦竹子の首は、もろくも胴を離れて地上に転がった。

会津随一の美女勇婦と謳われたその人の、あまりにもあえない最期に、彦五郎もしばしは感無量で、眺めていたが、やがて黒髪を掴んで生首の方を提げて立ち上ると、

「会津女軍の中野竹子の首は、宮方の西郷彦五郎が討ち取ったり」

と呼ばわる。それを聞いてどちらからともなく上る、異様な喚声の中に、既に山本八重子、北沢きく子といった、力と頼む勇婦達をも失っていた娘子軍は、潮の引くように退却していった。

と——その中から、ただ一人うら若い乙女が薙刀をかざすようにして彦五郎目がけて進んできた。

「おう、優子殿！」

思わず立ちすくむ彦五郎。その姿目がけて

「彦五郎様！」

叫びつつ斬りつけて来た優子のつぶらな瞳には万感のおもいがこもっていた。

「いかん、優子殿。うろたえめさるな。引け引け！ 逃げられい。わしもすぐあとから行く」

自分の方が当惑しながらも、相手の薙刀を払いながら、おしつけるように、

「逃げるのだ、横手の道へ。そう、あの持仏堂に。——話がある」

味方にも敵にも聞かれてはまずい、無表情に刃を合わせながら、小声で強く言う。その心が優子にも分ったのか、

「——」

急にクルリと背を向けると、薙刀を引き摺るようにして逃げ出した。

「逃げるか、待て！」

わざと大声を挙げて追う彦五郎。迫られたと見ると、急に横にそれて雑木林にとび込んだ優子は、そのまま雑草を分けて小高い山に登ってゆく。彦五郎が続くと、もう二人の姿は官軍からも会津側からも見えなくなった。

登りつめた木蔭にある持仏堂、そこまで来ると、張りつめていた気が一時に弛んだか、へたへたと地面に崩れ折れながら、

「彦五郎様！」

と恋しい人の顔を仰ぎみる。

「おう、優子殿！」

彦五郎も思わず、膝ついて、相手のかぼそい肩をだきしめる。

「お会いしようございました」

「会いたかった！」

若い男女は、しばらくはすべてを忘れて抱き合った。それは涙の出る余地などない昂ぶった感情であったのだが、やがて、それも鎮まって来て、フト彦五郎の膝元に投げ出されている女の生首に目をとめて、ギョツとして身を引いた。

「あつ、姉上様！」

とびつくようにしてそれを取り上げたが、一目見るなり、あまりにも変り果てた容相にたまりかねたか、だきしめるようにしたままヨヨと泣き伏す。彦五郎もその心中を察して黙念と、優子の肩のふるえを見守るばかり。と——暫く泣いて、思い出したように、涙に濡れた顔をふり向けた彼女は、

「彦五郎様、あなたのお姉様のお首は——」

といいさすのを抑えて、

「この持仏堂にあるのであろう」

「どうしてそれを——」

「昨夜、そなたが曝しの場所からひそかに盗み出して、此所へ隠したことを、私は見て知っていた」

「そうでございましたか。それである時、ここへこいと——」

急に落着いた態度になった優子は、立ち上って、持仏堂へ入っていった。

そして小袖に包んだものをかかえて来て、堂の縁に置くと、その前へ、姉竹子の首級を供えて合掌し、

「やお子様、これにて御無念をお晴しなさいまし」

と口誦んでから、そのままの姿勢で、なおも呆然としている彦五郎の方をふり返り、

「彦五郎様、まだあなた様の仇討は、終って居りませぬ。お願いでござりまする。仇の片割れのこのお優の首、この場で、姉と同様に打ち落として下さいませ」

「優子殿、な、なんと云われる……」

仰天してつめ寄る彦五郎。その顔を見つめながら、

「あの夜、妾も、やお子様の討手に向ったのでございます。妾は——やお子様を討つ気はございませんでしたが、姉の刃を止められなかった罪は同じこと。今ここで彦五郎様の御

手にかかることができれば本望でござりまする」

「何を滅相な。戦さの中でなんの私情ぞ。強いて仇呼ばわりするなら私こそ、あなたの姉君を手を掛けた。あなたに討たれたいぐらいだ」

「いいえ、姉を討たれたのは当然のこと。姉が、やお子様を討った時、私どもの縁もこれまででございました。もはや生きる望みのないわたくし。一目あなた様にお目にかかりたいばかりに、恥をしのんで来ましたが、これで心も晴れました。さあ、早くお手に掛けて——」

と、坐り直して、細い首をのばして手を合わせる。

「いや、あなたが、私が竹子様を討ったことを許してくれるなら、わたしは貴女を妻にしたい」

「そのお言葉、なによりもわたくしにとりまして、うれしうござりまする」

再び涙の瞳で彦五郎の顔を仰いだが、何と思ったか、帯に挟んであった懐剣を抜くが早いか、グサリとおのれの滑かな咽喉に突き立てたのである。

「な、なにを召さる。優子殿！ 逆上された

か！」

あわててとびついて止めようとしたが、時既におそく、力まかせに突き立てた刃は、食道、氣道を貫いて項に抜けんばかり。

「な、なんという早まったことを——」

あとは大きく息を引いて、あとはあえかな優子の両肩を抱き締めるばかり。優子は一旦目を開いて彦五郎の顔をマジマジと見上げながら、苦しい息の下から喘ぎ喘ぎ、

「す、すみませぬ。彦五郎様のお心はうれしいが、朝敵の女を妻にしては、あなたの出世の妨げになります。そうでなくとも互いに肉親を討ち合った悪縁は如何ともすることが出来ません。私は死ぬ方が好いのです。あなたは生きて、御出世を——、そしてお国のためにつくして下さい」

と言いつつ、もう刀を抜く力もないか、ガックリと顔を彦五郎の胸に埋めた。

「優子殿！ 優子殿！」

大声で呼んで、懸命にゆさぶって見たが、「は、早く、わ、妾の首、首を打って……」

とつぶやくばかりで、顔には既に死相があらわれている。

今となっては、やむなしと彦五郎も心を決め、優子の身体を支えたまま、左手でその黒

髪をつかみ、右手に抜いた脇差の切尖を、細そりとした頤にあてがい、

「御免！」

と言いざま、ズバリと水もたまらず細首を斬り落し、サッと立ち上ると、優子の身体は俯伏に倒れて、その切口からは、どっと血潮が噴出する。彦五郎の左手に提げられた生首からも血がしたたり落ちる。

つい一瞬前まで、言葉を交していた美しい乙女が、たちまち身首所を異にしたはかなさに、彦五郎もしばしは呆然と立ちつくすだけであった。そこには先刻竹子の豊艶な女体を組みしいて首掻いたあの戦場の興奮はなかったし、その白臘のような死首には水のような淋しい冷たさしか感じとれなかった。

彦五郎は改めて、竹子の生首を見てハッと見た。それは優子の首とは対照的に、何と生き生きと輝いていたことか。後れ毛を朱唇に噛んだ首は、討たれてもなお、如何にも女丈夫らしい矜持を見せ、男心をかき立てるなまめかしさがあった。

その時、彦五郎は改めて覚った。自分が恋していたのは、十七才の美女優子ではなくて二十才の勇婦竹子であったことを……。

あ

ぶ

らぶす

こんと

登 沢 水



三重にも分裂するのは悲しい。その証拠に深夜八あぶ・らぶす・こんとVを書き続けるのである。

○

口は災いの門

あるレストランで

客「今日の料理はずいぶんまずいじゃないか。ご自慢の腕のいいアメリカの料理人はどうしたんだい」

主人「まことに申し訳ありません。それが、そのう、うっかり『料理人』と、呼ぶのを、『蛇口野郎』とってしまったもんで、怒って出て行ってしまったんですよ」

○

せい地

観光案内人「皆さん。この丘が、花笑い、歌い、愛の女神にも賞でられた緑深く、蜜と神酒の流れたといわれる聖地であります」

○

候補者気質

市長改選を直前に控えて、開園して間もない市立公園を見廻っている現市長。木立の枝にひるがえっているものがあるので、側に寄って見ると、何と誰がかけたかピンクのうす

客席の客数は少なかった。浮き出たスクリーンに、とうとう身が入らなく、隣席の彼女の手をそっと戻した。楽しかったからではなく、悔恨の情からだ。何故なら、彼女との、この日のデートは、十年來の恋人にサヨナラを告げた跡の、わびしさをまぎらわすためであることを、私の超自我はよく承知しているからであった。恋人との最後の別れをした時、色白で細面の恋人のほほに涙が一筋弧を画いて流れ落ちていった。訴える眼を忘却の彼方に追いやることは到底できそうにもない。帰途の車の中での煙草は苦く、脚元へ次から次へと、吸殻が散っていった。めぐり逢

い、離れていった女性の中で、やさしく心使いの深い女性らしい女性は、この恋人だけだったかも知れない。私の置かれている立場では、嫁して行く彼女を掠奪することは不可能であるし、よくそのことを承知していたが故に、軽率な行動は、抑圧されねばならなかった。今にして思えば、誰にも深い傷を負わさなかったことが唯一の慰めではある。……

コントを書くにあたって、不必要なことに

は違いないが、筆を把った途端、こうなってしまった。ゲーテの言うように、人間の心の一方は天に昇り、他方は地に潜ろうとするのだというが、自分の人格が時に従い二重に

いレース・パンティ。側近があわてて取り払おうとすると、市長少しもあわてず、「かまわん、かまわん。わしがつくった公園で、市民がいかに青春をエンジョイしているかがよくわかった。わしは市民の憩いの場所をつくった。市民はそれを十二分に活用しておる。市民はわたしに感謝しているに違いない。さすれば次期も当選は確実じゃよ」

○

女心

新婚旅行三日目の夜、新妻が夫に

「浴衣の帯なんかで縛っちゃいやよ。いいこと？ おっぱいや、縦に縛るなんていや」

「目かくしもいや、猿轡なんかしないでね。」

息がつまっちゃうもの」

「パンティやストッキング、お床の下に隠してあるけど、そのままにしておいて。汚れているから」……………

帰宅後、友達に

「彼には、全然失望よ。私がいくら要求しても、ちっともその通りにしてくれないんですもの」

○

隠すより現わる

両手両脚を、ベッドの四隅につながれた若

妻に、責めの限りをつくした夫。

唾液でベトベトになつた猿轡を外してからとげとげしくののしった。

「見る。このパンティのししゅうを。SMはお前の名前の頭文字じゃないか。こいつは奴のアパートで見つけてきたんだ。これでもあいつとなんでもないといいはるのか」

縛られたままの若妻、苦しい責めに堪えかねて

「私、ぜったいに浮気なんかしてないわ。誓ってもいいわ。私のじゃないわ。それは彼だよ。彼の頭文字もSMなのよ。あの人、下着全部につけてるわ。ムチにまでよ。私のじゃない。だから許して」

○

病こうもう

レジデントに住む美しい未亡人を訪れたプレイボーイ。持参した中央部に西洋梨型の塊のついている黒革尾錠付のベルトを見て

「今日はこの箝口具をはめて、思い切り責めてあげるつもりですよ」と言うのに

「マア、それ猿轡ですよ。私これは変った拘束具だと思って期待していましたのに。残念ですわ」

○

最新型

温泉プール附属の専門店で水着を買いにきた娘。並んでいる水着が皆、トップレスなので、どぎまぎしているのを見た店員。

「はじめてではお驚きになるのはあたりまえです。当店では、そのようなお嬢さん方にはセパレーツをおすすめすることにしております。お好みに応じて、後でどちらかを脱いでいただければ、いずれ、最新型の水着になりますので。ハイ」。

○

暴力行為

「それで、僕と彼女だけの二人になると暴力沙汰になったんだ。着てたものはたちまち引き裂かれる。下着までももぎとられる。押えつけられて、胸の上下に縄目が、くびれこんで息苦しくなるのに、そのうえ、まだ猿轡、鞭、吊り。いやまったく落花狼藉とはあのことだよ。ようやく終わったあとでグッタリさ」

「まあすごい。優男のあんたにそんなことできるなんて思ってもみなかったわ。私にもやって」

「それは無理というものだよ。されたのは、僕なんだもの」



ゴム衣と被虐に憑かれた娘

女の城

菅原敏夫

「HARA服飾美術研究所赤沼寮」は、都心を離れた郊外にあり、そのモダンな建物は、大小さまざまな沼と木立に囲まれた小高い丘の上にそびえ建っている。

寮内には、寄宿生の個室から図書室、娯楽室、裁縫室、浴室、食堂、炊事場等の諸設備が整っていて、日常の生活は、三十人の寄宿生達によって、五人一組の当番制で寮内の掃除から朝夕の炊事その他一切を自主的に管理している。

新入生

今、玄間のロビーでは、各室のルームキャプテンによって新入生の紹介、室割等ガイダンスが始められている。

「花岡真弓」には、この寄宿舎に入る一つの理由があった。

やがて、ガイダンスも終り、新入生達は各自割当られた室に散って行く。真弓もA組のルームキャプテンである「高田清子」について、二階に通じる階段を登って行き、同室の三人に紹介された。

ペチャクチャと、雑談にふけり始めた清子達。仲間はずれにされたように、ポツンと冷

雨にけぶる窓外を見つめている真弓を、横眼で見る清子。

「花岡さん、そのコート素敵ネ。それに……そのロングブーツ、とてもお似合いよ」

と思ひ出したように、真弓の着ているエナメルコートを見つめる清子。その声に、三人の視線が一斉に、真弓に集中する。

黒いダブルのレザーコートをベルトできちんと締め、膝上二十センチもあるエナメルのレインブーツをはいている真弓を、改めて皆がなめるように見つめている。

「ああ、そうそう忘れるところだったワ。花

岡さん、あなたに小荷物が来てるのよ」

とテーブルの隅を指さす清子。

「ズイブン重いけど、何が入ってるの？」

一瞬、戸惑いの表情をしたが、急に大急ぎで荷物を抱え上げる真弓。

ゴム衣着用

今日から一週間の予定で始まる当番の受持ちを決めている清子。

「文枝と由理子は買い出し。私と道子で炊事するワ」

「良かった」という表情で、含み笑いしながら真弓を見つめる三人。

「私、何んでもしますから、どんなことでもいいつけて下さい」

と、新入生らしく真弓が申し出る。

「それじゃあ、早くこのことをおぼえてもらうために、床磨きとお便所の掃除をしてもらおうかしら。それに炊事当番もネ」

清子は、どういうつもりか、寄宿生の一番嫌がることを押しつけた。

「これで決ったワネ。さあ当番、当番」

真弓と清子を残して出て行く文枝達。

やがて、トレーニングスーツに着換えて出て来る真弓と清子。

「はい。これを着て」

用具置場の中から掃除用具を取り出し、真弓に手渡す清子。

その用具というのは、油で所々うす汚れた白色の羽二重ゴムの胸当ズボンと、上衣のゴム作業衣。腰迄スッポリ入りそうなゴム長靴と、肩までもあるゴム手袋。それに魚屋等で着用するような黒い大きな総ゴムの胸当前掛などであった。

真弓は、これ等のゴム作業衣を見て、戸惑い動揺する。

清子は、躊躇している真弓の心中をのぞき見たかのように、意地悪く笑っている。

「さあ、さあ。早く着なさい」

「これを着るんですか？」

真弓はポカンと突立ち、手渡されたまま抱えているゴム作業衣を見つめていた。

「そうヨ。このゴム衣装を着なければ、油でズルズルに汚れるでしょう？」

「油って、何んですか？」

「マアあきれた。あなた知らないの？ 床を磨く時には油を引くでしょう？」

清子は、さもあきれたという表情で、物置の中から油の入った缶とバケツ、それに長い柄のついた油引きを取り出してきた。

「先ず最初にホウキでゴミをきれいにはき取り。それから、これで油を引いて。最後にボロぎれで空拭きするのヨ。わかったあ？」

「ずいぶんむづかしそうですね？」

「別に、むづかしいことなんかないワヨ。但し相当な重労働ネ。でも皆やって来たのよ。さ、早く用意しなさいヨ」

と清子は邪慳に急がす。

真弓は内心、胸をときめかせているのだが清子に自分の本心を感じかれまいと、嫌々しているようにゴム作業衣を着始めた。

清子は、そんな真弓に、寄り添って着換えを手伝っている。

まるで、新入りの真弓にこの特異なゴム作業衣を無理矢理着用させるのを楽しんでいるかのように……。

「それじゃあ、頼むわよ。きれいにしてネ？ 今、二時ですから四時迄には終るようにして頂戴。それから買い出しの手伝いに行ってもらいますからネ」

清子は腕時計を見ながら、そう言い残し、そそくさと炊事場の方に駆けて行く。

その場に一人残された真弓は、化粧台の鏡の前に立ち、ゴム衣装に覆まれた自分の姿を写し、ひとり言をつぶやいている。

「私って、なんて幸福なんでしょう。こんなにゴムに包まれて……」

羽二重ゴムの胸当ズボンをはき、その上に上衣を着て、その胴に付いているベルトを締め上げ、腰迄スッポリとゴム長をはき、そのはき口に付いているゴムヒモを上衣の上から締めているゴムベルトに通し、ゴム長がズリ落ちないように縛りつけてあり、手には油で黒く光っているゴム手袋が脱げないように、肩のところできっかりと留めてある。そしてその上に油でズルズルに汚れ、異様な光沢をはなつ総ゴムの胸当前掛を着け、鏡の前に立って陶醉感に浸っている。

「この何んともいえないグロテスクな恰好で重労働に打ちのめされているなんて、最高だわア……。誰かにこの気持、わかってもらいたいなア。そして出来たら、このゴムホースで私の可愛いお尻をひっぱたいたり、ツネリ上げたりしてもらいたいなア……。その上、後手に縛り上げて宙吊りにでもして、思う存分にいじめてくれたら最高に素敵なんだけだなア……」

真弓はそんなことを思いながら、壁に無造作に掛けてあるゴムホースを取り、黒く光っている胸当前掛の上から、お腹の辺りを軽く

たたいてみた。

「さっきは、清子さんの前で、嫌がるゼスチャーをしたけど、本当はこのゴム衣装を着させられたいばかりに、この寄宿舎に入ったんですもの……」

真弓は心の中で、こう呟いていた。

やがて真弓は、両手に油の入ったバケツと油引き、それにホウキとボロぎれを提げ、心のときめきとは逆に重い足取りでロビーの方に歩いて行く。歩を運ぶたびに、胸当前掛がはためき「ガバガバ、ギューギュー」と、ゴムの触れ合う音がした。

トレーニングスーツを通して、肌にピッチリとまつわり付くゴム特有の感触。特異なゴム作業衣を着用した自分の姿を他人の前にさらし、なぶり者にされるマゾヒスティックな陶醉感に浸りながら、床を丁寧に掃き清め、油を引いている真弓。

その特異なゴム作業衣に包まれた真弓を、嘲笑うかのように横目でにらみ、雑談しながら真弓の脇を通り抜けて行く寄宿生達。

油まみれになり、犬のように四つん這いになって床を空拭きしている真弓。そのお尻を突然後から「ボン」とたたく者があった。

「どう？ 調子は。だいぶ慣れたようネ」

頭を持ち上げ後を振り向くと、この不恰好な姿を嘲笑うかのように、意地の悪い冷笑を浮かべて見下している文枝と由理子。

「あなたひとりにこんな重労働させて、ごめんなさいネ」

「私達、これから下まで買い出しに行くの」といいながら文枝と由理子は、陰険な目付きで真弓の仕事振りを観察している。

「油まみれになって、ご苦労さんネ」

「精々転ばないように頑張っテネ。慣れないと、よくスッテンコロリンと転ぶものヨ」

二人は口先きだけで同情的にいい、クスクス笑いながら玄関を出て行く。

「何ヨ、あの二人。私の気持も知らないくせに……。いじめられるのが楽しいから、わざとなぶり者になってるのよ。からかうつもりでしょうがお相憎サマ」

と内心では物足りなさを感じながら、重々しい足取りで、ともすれば胸当前掛の裾を踏みつけ、つまずきそうになりながら階段を登る。

スチーム暖房のきいた室内での重労働にあえぐ真弓の顔は、吹き出る汗と、ホコリや油にまみれているが、油でズルズルに汚れたゴム手袋をはめているため、顔を拭くことも、

乱れて顔に振り掛かる髪を、直すことも出来ず、ただひたすらに床を磨き続けている。頬をつたわり、胸当前掛の上にしずくとなり流れ落ちる汗と、油で汚れた胸当前掛は更に異様な光沢を増し、テラリテラリと光り輝いている。

突然、四つん這いで床を磨いている真弓の前に立つ清子。

「アラ、あきれた。まだやってるの？ もう四時ヨ」

といいながら、わざとあきれた表情を作り真弓の顔をのぞき込む清子。

「あなた怠けてたのネ。そうでしょう？ 正直にいいなさいヨ」

と真弓の仕事振りをなじる清子。それでも床の一点を凝視して、一言の弁解もせず、じっと横座りになっている真弓。

彼女自身でもわからないのだが、このスロ—モーな仕事振りは、無意識のうちに、清子の怒りを呼び起こすための動作であり、なじられる口実にしたいとしていたことは、たしかであった。自然に真弓の態度は、ふてぶてしくなって、返事もしないでそっぽを向く。

そんな真弓の態度に腹を立て、怒りをおぼえた清子であるが、ルームキャプテンの立場

を考えて急におだやかにいった。

「もう、いいわ。床掃除は大変だったでしょう。ハイご苦労さまでした」

明らかに反感を買ったとばかり思っていた真弓は、清子の意外な言葉に失望し、横座りのまま顔を上げ、不敵な表情でじっと清子を見つめる。

その挑むような、真弓の態度に、益々怒りを覚える清子だが、じっと押えて静かにいった。

「下の商店街迄、買い出しの手伝いに行って頂だい。急いでるから着換えしないで。どうせ雨も降っていることだし、その上から雨合羽を着て行けばいいわ」

買 い 出 し

炊事場から裏木戸に通じる小道を、黒いフードの付いた大きな男物の雨合羽を着込み、リヤカーを引いて出て行く真弓。その後姿を炊事場の窓越しに見ながら、陰険な冷笑を浮かべている清子。

「フン！ いいザマネ。これで少しはクスリになるでしょう」

寒々とした冷雨の中、雨でズルズルと滑る赤土に足を取られ、冷雨に濡れそびれリヤカ

ーを引く真弓。

頭からスッポリと包まれたダブルボタンの総ゴム雨合羽は、男物だけに真弓には大き過ぎ、全体的にガバガバとゆったりして、ゴム手袋をはめた指先が袖口からわずかに見え隠れする程で、雨合羽の裾は、下に着ている胸当前掛を完全に覆い隠し、ゴム長の爪先が歩くとたびにわずかにのぞく程で、歩くとたびにその裾がバタバタとはためいて足元にまつわり付き、そのたびに裾を踏みつけ、足を取られて前のめりにつまずき、倒れそうになるのを必死にこらえる。

先程迄のムシ風呂のような、床掃除とは違い、ゴムフードをつたわり、汗とホコリと油にまみれた顔にかかる冷雨のしずくが、何んともいえない心地よさであった。

ピッチリとウエストを締め上げたゴムベルト、雨合羽を容赦なく打つ冷雨。雨合羽の下に着込んでいるゴム衣装。それ等ゴム衣装の奥深く、誰知らず隠されている真弓の孤独な秘密。男物の総ゴム雨合羽を着た若い娘の特異な姿を、他人の前にさらすみじめさ、せつなさ、恥かしさ、楽しさ……。

そんなことを思い浮かべ、子供のようにしゃぎ、わざとジャブジャブ音をたて泥水を

はね上げる真弓。

ガバガバ、ギューギューとゴムの触れ合う音を響かせ、商店街を通り抜けて行くその特異な姿は、道行く人々に、ひどく汚いものに写り、買物客や商店の女店員達に、見世物的な、好奇の目で見られ、さらし者になっっている。誰一人として顔見知りがある訳でもないのだが、うつ向き、重い足取りで逃げるように、リヤカーを引く真弓。

その背中に、痛い程の罵声を感じとり、孤独な喜びを噛みしめながら呟くのがあった。

「だってエ……好きなんですもの」

寮を出るとき、教えられたのを頼りに、文枝と由理子がいる筈の肉屋を探しているのだが、その店はなかなか見当らない。もう三十分以上も、この商店街を行ったり来たりしている。誰かに聞けばいいのだが、真弓の心境としては、いつまでもこうしていたい気持ちがあった。

やっこの思いで肉屋を探し当てたが、店内には、文枝と由理子の姿は見えなかった。

「研究所の方ですか？」

と、胡散臭い目でジロジロ見ながらたずねる店員に、わずかにうなづく真弓。

「伝言を残して先に帰りましたヨ」

と店員から手渡された紙片には、買い出しのリストが書かれてあった。

外灯もなく、真暗闇に包まれた山道を、買い出し物で満載となったリヤカーをあえぎながら引いて行く真弓。

なだらかな坂道とはいえ、雨水を充分に含みズルズル滑る赤土の路面に足を取られ、雨合羽の裾を踏みつけ、何回となく泥濘の中に転んだ。そのたびにリヤカーからこぼれ落ちる食糧を、手探りで拾い集めねばならない。何回も転ぶうちに、タマゴが潰れ、ミソ樽が勢いよく坂道を転がり落ち、音をたてて、しようにピンが割れた。

水責め

重ったるい足取りで、ようやくたどり着いた裏木戸を身体で押し開け、精根使い果した表情で、炊事場の入口にぐったりと坐り込む真弓。

その物音を聞きつけ、ドヤドヤと炊事場から出て来る清子達。泥にまみれ、哀れな恰好でぶっ倒れている真弓を冷ややかに見下す。「ずいぶん遅かったワネ。どこで油を売ったの？」

「今、何時だと思ってるのヨ。もう六時過ぎ

てるのヨ」

「本当に困った人ネ」

そして、リヤカーから食糧を取り出す清子と道子。

「あら！ おしょうゆがないワ？ それにタマゴも」

「お米も、おミソも泥だらけじゃない！ これ、どういふことなの？」

「……」

弁解する気力もなく、うつ向き、肩で大きく息をはずませている真弓。

横坐りになった真弓の髪の毛をゴムフードの上からつかみ、泥だらけの顔をグイッと引き起こす清子。

「あなたが早く帰らないから、夕食の支度が出来ないのヨ。他の人達が迷惑するということぐらい、わからないのッ！」

何があんでも、この責任を真弓一人に押しつけようとする清子。グッタリしながら胸ときめかす真弓。

「私が悪いのですから打つなりけるなり勝手にして下さい」

四人の圧力に負けて諦め切ったという表情で、皆んなの顔を見回す真弓。

「何をボヤボヤしてるの？ はやく私の身体

を思う存分好きなだけ痛めつけてよ。……さつきからの様子で、清子さんも文枝さんも、私をいじめ抜くことが楽しいらしいのがよくわかってよ。遠慮はいらないワ。私はそれがお目当てでここへ入ったんだから……。縛って吊してムチ打てばいいワ。背中でも、お尻でも。気の済むまでやってちょうだい」

真弓の謝るところか、挑みかかるような態度に驚き、あっけにとられた四人は、真弓を取り巻いてポカンと突立ったままだ。

「やはり、私達を、バカにしてるのよ、この子。さつきもそうだったのよ。いまましいわね、まったく。いいわ、そんな態度とるんなら、プールでタップリ可愛がってあげるから覚悟しておくのネッ！」

清子がヒステリックに叫んで、文枝と由理子に何か耳打ちして道子を促し、そそくさりヤカーの食糧を運び込むのであった。

文枝と由理子はぐったり坐り込んでいる真弓の両腕を取り、プールサイドの方に引き立てて行く。そして、プールサイドにあるシャワー室に引きずり込まれる真弓。

やっとの思いでシャワーの下に立っている真弓。水道の蛇口にゴムホースを差し込む由理子。長い竹の柄がついたタワシを握りしめ

身構える文枝。

「さあ！ 始めるわヨ。覚悟は出来てるんでしょネ？」

由理子の手につつまゴムホースから勢いよく吹き出る水が、しぶきを上げて雨合羽を打ち始めた。ゴムフードの上からシャワーの水が降りそそぎ、文枝の手にしたタワシが雨合羽の上に襲いかかっている。

「ホッホホ。面白いわネ。これじゃあ、まるで冷水摩擦だわ」

と、由理子は面白そうに笑い、ところ構わずホースを向け、水をぶちかけている。文枝も負けずに「これでもかー」とばかりにタワシで手当たり次第にこするのだった。さすがの真弓も、水とタワシの洗礼から逃がれんとして、両手で顔を覆いその場に坐り込んでしまふのであった。

「どうしたの！ しょうがないわネエ。立ちなさいヨ。泥を洗ったげてるだけよ。お立ちったら」

と由理子はスノコの上にうずくまっている真弓の髪の毛をゴムフードの上からつかみ、グイッと引きずり立たせ、その頬に文枝の平手打ちが飛んだ。

「いう通りしないとプールに放り込むわヨ」

と二人は脅すようにして無理矢理立たせ、また、洗いに掛かるが、真弓はすぐにガックリと膝をつき坐り込んでしまうのであった。

とうとう業を煮やした二人は、互に目くばせして室の隅にたばねてあったゴムホースを取ると、真弓の両手首を縛り上げ、シャワーの口金から吊り下げた。そして真弓の顔を引き上げ、雨合羽から抜き取ったゴムベルトでギューギューと、猿グツワを噛ましてしまった。

「これならもう逃げられないワネ？」
「それに声もだせないし。いい恰好だワ」
「ジタバタしても無駄な抵抗ネ。さあ、かけるワヨ」

両手の自由を奪われ、高々と吊るされている無抵抗の真弓に、またもや情容赦もなく冷水とタワシが乱れ飛び、見る間に洗い落とされる泥のかたまり。

強くゴムグツワを噛まされた口元から、言葉にならないうめき声を発し、羞恥と苦痛に歪む真弓の顔。

由理子は、意地悪くもその顔面めがけてゴムホースの口先を向け、文枝はわざと、もうキレイに泥の落ちている胸元ばかりを狙い、集中的にタワシで痛めつけている。

口といわず鼻といわず、勢いよく叩きつけられ流れ込む噴水。総ゴム雨合羽を通し全身にしみ込む冷水に打ちひしがれ、のた打ち廻っている真弓。退寮した友達から聞いて、その新入生いじめを期待し、苛められたいばかりに入寮した真弓とはいえ、余りにも残酷な仕打ちに疲れ果て、もう声を出す気力もなく段々と意識がかすれて行くのが感じられる。

……突然顔に熱いものを感じ、目を見開く真弓であった。目の前に文枝の手が大きく映り、次の瞬間、左右の頬に猛烈な往復ビンタがとんできた。

ダラリと膝を折り曲げ、ゴムホースに吊り下がっている真弓に「バチンバチン」とゴムをたたく音をたて、文枝の平手打ちが容赦なく飛んでいる。

「もうノビタの？ だらしないわネ。なによさっきまでの図太い態度に、似合わないじゃないのよッ！」

と、なおも執拗に、ゴムベルトの喰い込んだ頬をひっぱたき、弓なりにブラ下っている体を、ゴム長で力いっぱい、けり上げている文枝であった。

「まだ序の口じゃない。洗濯はこれからヨ」と今度は後向きにされる真弓。

そして、ダラリと吊り下げられたその背中に文枝のタワシが唸り、お尻めがけて由理子のゴム長がけり上げている。そのたびに真弓の身体を吊っているゴムホースが、反動で伸び縮みし、真弓の身体は上下にユラユラと揺れ動いている。

やがて、ゴムグツワがはずされ、両手首からゴムホースが解かれ、ぐったりとスノコの上にくずれ落ちる真弓は、下衣迄びっしょり濡れそびれ、寒さと疲労のため歯の根も合わずガタガタと震えた。

「やっと終わったワネ？」

「ずいぶん汚れていたもん！」

と、二人は気分爽快といった表情で、哀れな姿をさらしている真弓を見下ろしていた。

「大変大変！ 風邪でもひかれちゃあ困るわよ。私達の責任になるもんネ」

「サ、早く行きましょう。あなたには、まだやって貰う仕事があるんだから」

と二人は勝手なことをいいながら、真弓を立て、両脇からはがいじめにするようにして、引き立てて行く。

真弓は、よろめきながら歩いた。きれいに洗い上り元の光沢に戻り、光り輝く総ゴム雨合羽を打ち震わせ「ガバゴボ、ガバゴボ」と

異様な音を響かせながら……。

装備する真弓

ムンムンする生温かい炊事場の空気が、冷えきった身体を包み、気持よさそうに壁に寄り掛かっている真弓。

「ずいぶんこっぴどく痛めつけたのネ？ こんなにはれ上って。お多福みたいヨ」

と道子は意地悪く、烈しいビンタに打ちのめされ、赤くはれ上った真弓の顔をのぞき込みながら、自分に出来なかった二人の行為をうらやんでいる。

「二階でひと休みしてきなさい。それからお便所のお掃除してもらいますからネ。但し八時迄に終わらせてネ」

と清子は腕時計を見ながら命令するのであった。

真弓は寒さと疲労に打ちのめされた身体を引きずるように階段を登って行く。誰もいない室に入り、ホッとひと息ついて、ズブ濡れになったゴム衣装と下衣を脱ぎ捨て、素裸のまま自分のベッドにもぐり込むのであった。

過酷な重労働と残酷な仕打ちにクタクタになった体はたちまち眠りに落ちた。ハッと気付いて、あわてて起きあがり置時計を見た

きは、すでに時計の針は七時三十分を指しているのであった。清子に命令された便所掃除は、八時までに終らせなければならぬ。

だが真弓は、ゆっくりと寝まきを引っ掛け冷えきったお茶を、たて続けに飲み乾すのであった。そして何を思ったか入口のドアに鍵をかけ、窓のカーテンを引き、洋服ダンスの中から送られて来ていたダンボール箱を持ち出し、注意深くテーブルの上で開き始めた。

中から出て来た物は、あざやかなオレンジ色総ゴム製のウェットスーツと、養魚場などで着用するような黒色の胸迄スッポリ入る、見るからに大きなゴム長であった。

真弓は寝まきを脱ぎ捨てて、先刻の懲戒で打たれた痕の赤くはれ上った素肌の上に、手慣れた手つきで『キユウキユウ』とゴムの擦れ合う音をたてながら、素早くウェットスーツを着込み、その上から胸迄あるゴム長をはき、肩からゴムヒモで吊るし、胴に付いているゴムベルトを締め上げ、肩迄のゴム手袋をつけ、全身ゴムズクメの異様な姿となった。

小柄な真弓を大きなゴム長が首から下を完全に覆い隠し、ボテボテと不自然に盛り上っている。ゴムベルトで締め上げた胴を境に、下半身は乗馬ズボンをはいたようにゆったり

とふくらみ、胴から首にかけての上半身はポツテリと異様なふくらみを見せ、肩口からわずかにはみ出しているウェットスーツが、あざやかにゴム長とゴム手袋を引き立たせ、奇妙なゴム衣装のコントラストを浮き立たせている。

その異様な姿を鏡に映して見入っている真弓の眼差は、陶酔感に打ちのめされてウツトリと輝き、ゴム手袋をはめた両手でゴム長靴をなぞっている。

ピッタリと素肌にまつわりつくウェットスーツ。ボテボテと重ったるいゴム長……。

「これだけゴムに包まれていれば、どんなひどい目にあわされても平気だし、寒さも感じないワ」

胸のうちに独り言をいいながら、更にゴム上衣とゴムズボンを着込み、その上から胸当前掛を着けている真弓であった。

片手に雨合羽をさげ、何喰い顔で階段を降りて行く足どりは、足カセでもはめられているように重々しく、全身からギユウギユウとゴムのキシム音を響かせている。

ロビーの時計を見上げる真弓。時計の針は八時五分前を指している。その時、食事を終えて出て来た数人の寄宿生と出逢ってしまった。

一瞬その場に立上り、戸惑う真弓であった。皆んなの前にこの異様なゴムづくめの姿をさらしたくないという気持が先にたち、逃げだしたい衝動に駆られたがすでに遅く、好奇の視線が真弓をとらえた。

羞恥とみじめさに全身を震わせ、逃げるようにバタバタとゴム衣をはためかせて駆け抜けていく。その滑稽な姿に皆んなの嘲笑が追いついていく。重ったるいゴム衣装を着ているため思うように走れず、胸当前掛の裾に足を取られ、勢い余って床の上にいやというほどたたきつけられ、不恰好な姿で四つん這いになり、うめき声をあげてしまう真弓であった。

この物音を聞きつけ炊事場から出て来た清子達四人は、真弓を認めると舌打ちして取り囲んだ。

「あなたそんな所で何してるの？」

「もう少し、静かに歩いたらどうなの。なにさ、バタバタ走り廻って！」

「お掃除は終わったのオ？」

床にたたきつけられた苦痛より、恥ずかしさが先にたち、その場に坐り込んだまま、うつ向いている真弓であった。

「どうしたのサア！ 何んとかいったらどう

なの？」

「さてはあんた、またサボったのネ。そうでしょう？」

と、なおも追い打ちをかける四人だが、頑強に口を閉じている真弓の態度に、腹を立てた清子は、「まだ私たちをバカにしてるのネッ！」と、真弓の背中をけり上げた。

それを合図のように、這いつくばった真弓の両腕をグイッと後手にねじ上げ、便所の中に引きずり込む四人であった。

「今度こそ承知しないワヨッ」

「あなたが、どうしてそんな態度をとるのか正直に説明しない限り許さないわヨ」

「どうなの？ いわないなら思いきり痛めつけて、あなたの身体に聞いてもいいのヨ」

と四人に、代る代るおどされる真弓だが、いつかこうなることを望んでいた真弓としては、心の中で絶好のチャンスとばかりに歓喜にむせんでいた。その心の喜びが自然と顔に表われ、微笑するかのように清子達を見回している。

清子は、開き直ったような真弓の態度に興奮し、震える手つきでドアの外に「清掃中のため使用禁止」と書かれた札を掛け、中から鍵をかけるのであった。

やがて真弓は、由理子と道子の手にした二本のロープで、バンザイの恰好に天井のハリから吊るされた。そして二人は、ロープの縄尻を握り、いつでも真弓を宙吊りに出来る態勢で身構えるのであった。

両手の自由を奪われ、不様な恰好で吊られた真弓の両足を、更にロープで縛り合わせている文枝。かたわらに投げ出している雨合羽から、抜きとられたゴムベルトが、真弓の口に噛まされている。

「そろそろ始めましょうか」

と清子は、意地悪く、真弓の顔をのぞき込み、文枝に合図するのであった。そして二つ折りにしたゴムホースが、前後から真弓をムチ打ち始めたのである。

「バチーン、ブターン」

「これでもか！」

「しぶといワネ」

「バチーン、ブターン」

「ウウッ！」

とゴムホースが唸り、ゴム衣の上を打ったびに異様なゴムの接触音を発し、ゴム白衣の背中と胸当前掛の上に赤とグリーンのゴムホースの色を附着させている。まるで肌が破れ血がにじみ出ているかのように……。

何んとかこの太々しい娘に謝らそうと打ち続ける二人だが、真弓にしてみれば、ゴムグツワを噛まされているため、声をだすことも出来ないのを幸いに、願望の実現に酔っているのだった。

力一杯尻をムチ打つ文枝。そのたびに両足の自由を奪われた真弓は、バランスをくずし、前のめりに反り返り、大きく突き出した胸の辺りをめがけて清子のゴムホースが待つてましたとばかりに非情にも乱れ飛ぶのであった。そして反り返る身体の反動を利用してはロープを引き絞り、宙吊りにしてしまった道子と由理子であった。

両手首に走る激痛に、思わずうめき声を発し、両足をバタつかせてもがいている真弓。そして更に、文枝の振り下すフィニッシュの一撃に調子を合わせて、思い切りロープを引き絞る、道子と由理子。真弓の身体は否応なしにズルズルと引きずり上げられ、床から一メートル程も上った頃合を見計り、意地悪く合図して急に手を離すのであった。

もんどりうってタイルの上にくずれ落ちる真弓。まるでゴムで包まれ、荒縄で縛られた一個の荷物のように放り出された真弓の姿はピンク色のきれいなタイルとは対照的で、ボ

ロクズのように、余りにも惨めな恰好であった。

そのゴムの固りに無情にもバケツの水を浴びせかける清子。そしてまた、道子と由理子によって引きずり上げられる真弓であった。

頭から水をかぶり、全身テラリテラリと光るゴム衣装、頭を上げる気力もなくだらりと顔にまつわりつく髪の毛、その髪の毛を無造作につかみ、引き起こす文枝。

「何んとかいったらどうなの？ でも無理な相談ネ、その口じゃあ」

とからかいなぶっている文枝だが、逆に真弓の哀れみの眼差しとも受けとれる瞳に見つめられ、ヒステリックに、ゴムグツワを噛まされた頬を平手打つのであった。

両手足の自由を奪われ、天井からダラリと吊られた無抵抗の真弓は、髪の毛をつかまれて顔を引き起こされ、文枝の平手打ちから逃げることも出来ず、打ちのめされている。口の中が切れ、ゴムベルトの間からにじみ出る血。だが、文枝はなおも狂ったように打ち続けるのであった。

真弓は堅く目を閉じ、打たれるたびに顔を大きく左右にのけぞらせて、連続してとんでくる平手打ちを耐えている。いや、味わって

いるのだ。その表情は、苦痛を望む者の陶醉の境地に遊ぶようであった。

「しぶといわネエ。まだ逆らう気なの？」

と清子は、文枝にムチ打ちを催促するのであった。

「いよいよ、第二ラウンドの開始ネ」

と由理子はふざけて、真弓のお尻をロープの縄尻でひっぱたく。

そして再び、ゴムホースのムチ打ちが始ったのであるが、この苛責にじっと耐えている真弓に不審を感じた文枝は、急に打つ手を止めると何か思いつめるように考えこんだ。

「おかしいわネエ。これだけブチたたいでもウンともスンともいわないし……。それにさっきの手応えと違うようじゃない？ どうも変だワァ？」

と腕組をして、ゴム衣に包まれた真弓を改めて頭のとっぺんから足の爪先までじろじろと鋭い目付きで見廻している文枝。

それもその筈で、ゴム白衣の下に着けているウェットスーツとゴム長のために、いくら打たれてもそれ程の苦痛は感じないのだが、真弓は、この秘密の一部をカモフラージュするため、適当に痛そうな、ゼスチャーを示し、その被虐のムードに陶醉していたのであ

る。

「さっきから見てるんだけど、どうもお尻の辺りがボテボテして変だと思わない？ 下に何か着込んでるんじゃないかしらね」

といいながら、縄目の喰い込んだ背中からお尻の辺りを検査する由理子。縄目が喰い込みポツテリとふくらんだゴム衣を掴んでみたり、引張ってみたり、はては拳で小突いてみたりして俄かに検査を始める清子と文枝であった。二人は、手首と足首だけを残し、全身ガンジガラメに縛ってあるロープをほどき、胸当前掛を荒々しくひっぱがした。

自分だけの心の秘密を暴露されかけた真弓は、こんどは真剣に身をよじり抵抗しようとした。だが、アツという間に文枝の手で髪の毛をつかまれてネジ上げられ、すかさず清子の平手打ちが来た。続いて宙吊り……。

「お願い、それだけは許してエ」

声を出せない真弓は呻き続ける。

「なるほど。これだけしぶとく抵抗するからには、やっぱり何か訳があるのネ」

と真弓の羞恥に歪んだ顔をのぞき込み、意地悪く観察しながらゆっくりと、ゴム白衣のボタンに手をかける清子であった。

(贗作「平家物語」・第四回)



入

道

逝

去

黒 淵 嬰 一

焼け残った般若寺に軍兵が充満している。

重衡・通盛の本営もこの寺にあるようだ。

瓦礫の山と化した南都には余烬燼り、人の焼ける異臭が立ち籠めている。炭化した木材の推積を貫いて巨大な金属の熔塊が聳え立っているのが見える。

焦土の奈良から、三笠山から、市周辺の林野から、多数の僧徒が縄を打たれて般若寺へ曳かれて来る。残党狩りが厳しく行われているらしい。

般若寺の裏手から武者の気合が聞える。竹藪を伐り払った広場で僧兵の斬刑が行なわれ

ているようだ。

縛られた法師が引き据えられる。観念した顔。怯えた顔。泣きそうな顔。怒った顔。

武者が太刀を振り上げて頭上に構える。怒号、叫喚、念仏、そして気合の交錯。空気を裂く唸り。叩きつけるような音。

噴血の霧が飛ぶ。首が大地に転げる。

大きな穴が幾つも掘ってあり、縄を掛けられたままの首なし死体は二十、三十と重ねて投げ込まれて行く。

般若寺の門には額に釘を打たれた名ある悪僧の首が次第に増えて行った。

中庭には縛られた一団が雑然と群り、不安そうな眼で周囲の事件を見守っている。

二十世紀に未だ戻れない信乃と賀集子の二人が、その中に混っていた。背に廻った両手は荒縄で首に高く吊られている。若草山を下り、伊東に行こうとして木津街道に出た処を哨兵線にかかって捕えられたのだ。

「お姉様。あたし達も、あんなふうにして斬られるのかしら?」

賀集子が心配そうに肩を寄せた。

「真逆とは思いますが、万一、ということも考えねばなりませんわね。あなたのその袋に

は、もう縄を切るような道具は何も残っていませんか？」

例の手提袋は賀集子の腰に結ばれている。悪夢のような一夜が明けた治承四年十二月二十九日の朝だった。

× × ×

清盛は西八条館の広廂で凱旋軍を迎えた。彼の顔色が勝れない。呼吸も苦しそうだ。思いがけぬ南都炎上の精神的負担だけではないらしい。熱でもあるのか。

庭上には重衡、通盛以下の将士が整列していた。どの顔にも自責の色が見える。興福寺や東大寺の焼討は明らかに命令違反だった。「皆よく戦った。この平家存亡の重大時機に当り、多年の敵対勢力を、唯一撃で再起不能とした功績は高く評価されようぞ。では首を見せい」

清盛は重衡等の過失を責めなかった。四十九級の首が並び、首目錄が読まれる。「そのくらいでよかろう。梟すには及ばぬ。首は捨て置け」

実検は僅か数級で終わった。それ以上の臨席に耐えられる健康状態にはなかったらしい。

× × ×

珠数繋ぎの列が奈良から京に向っている。

信乃と賀集子も後ろ手に縛られて中程に並んでいた。寒風は裂けた衣を透して膚を刺す。鞭を持った騎馬武者がむやみに威猛高に追い立て、責め立てる。日が暮れて来た。多難だった治承四年という年も暮れようとしている。

× × ×

治承五年正月元旦。

東国の動乱と東大寺の火災によって内裏では安徳天皇の出御もなく、四方拜の儀も停止された。氏寺興福寺焼失を悼んで藤原氏の公卿は一人も参内せず引き籠っている。

× × ×

僧も稚児も、信乃も賀集子も、雑然と六波羅の獄に繋がれた。

牢舎が不足なのか、囚人が多過ぎるのか、信乃と賀集子が投ぜられたのは、一番奥にある厩改造の仮牢で格子も完全ではない。後ろ手の縄目も解かれず、馬の如く柱に縄尻を縛りつけられた。

× × ×

一月二日。吉野郡の国栖が参朝して奏する舞楽の習慣も廃された。

× × ×

彼方を慌しく軍兵が往来する。

何か、異状事が起こっているようだ。しかし、この牢舎の近くを通る者はいない。

一度の取調べもない。縄は解かれず縛られたまま。食物も水も与えられず、見廻りにかかる番卒もないようだ。

何事かに紛れて忘れられたのだろうか。

北風が格子を吹き抜ける。後ろ手の感覚はなくなった。身体は汚れるばかり。

空腹。そして眩暈。

× × ×

一月五日。南都の僧綱は所職を奪われ、朝廷の法会、講論に召請される資格を失い、諸寺の寺領は没収された。興福寺別当、花林院の僧正永円は精神的ショックで急死し、御病中の高倉上皇は御危篤に陥られた。

× × ×

「重衡の殿！」

賀集子は覚えていた。後ろ手の縄尻を一杯に曳きながら、格子の彼方を偶然、通りかかった人物に救いを求める。

「何者だ」

重衡は立ち止まった。年末以来、忙しい日が続いている。今日も鎧を解いていない。かくも厳重な警戒を必要とする事態は何か。

「私たちは、一ノ谷でお見逃し戴いた二人の

巫女です」

信乃も共々、必死で叫び、牢格子に身体を打ち当てた。

重衡は不審そうな顔。

無理もない。鉄拐山麓の出会いは一瞬の間で、距離も遠かった。信乃と賀集子は、この牢に放置されて五日。見分けもつかないほどに汚れている。

「とうとう大仏殿を燃いってしまったわね。あたし達の予言を信じないの」

「ここから出して下さらないと、平家全体の上に仏罰が下りますよ」

重衡は愕然とした。

「其方達は禅門の御発病を知っているのか」

× × ×

清盛は西八条館で病床に呻吟している。

発熱四十度。意識混濁。呼吸困難。

館には医師、薬師、陰陽師、祈祷師、僧侶が満ちているが手当の方策も立たない。

枕頭の二位殿、時忠、経盛、教盛、宗盛、

維盛等も困惑するばかり。

知盛、知教等は兵を率いて館の内外を固め重衡、教経等は京の市中を警備している。

清盛発病の事実は厳秘に附され、未だ外部に漏洩した気配はない。

しかし、偉大な独裁者清盛は後継者を決定していなかった。この非常時に清盛が倒れたら、平家の全行政組織が麻痺するのだ。

清盛の病状は悪化するばかりだった。

× × ×

後ろ手に縛られた信乃と賀集子は西八条館の庭先に引き据えられた。

「汝等、真の巫女ならば入道相国殿の御病を治し奉れ」

広縁の上から大理卿時忠が言った。

「心得ました」

信乃は丁寧に頭を下げた。

「縄を解け。衣服を改めい」

館中の医師や祈祷師が不快な顔をした。

「太政入道殿御本復の時は重き恩賞を与えよう。しかし、万が一にも御逝去の折は、汝等の首はないと思え」

時忠は追い被せるように言った。

× × ×

東部戦線は平穏だった。

忠清は木曾川防衛線を固く守っている。

厳冬積雪期に入って義仲は信濃を動かず、頼朝は鎌倉を出ようとしなない。

新宮十郎行家だけが西方進出の野望を燃やしていたが、地方政權の維持しか念頭にない

頼朝は、時機尚早と称して従わなかった。行家が僅少な手兵のみを率い、独力西進の途についたのは丁度、この頃だった。

× × ×

「お姉様。本当に清盛公の病気を治せるの」

「医者でもないのに、治せるわけがないでしょう」

「それなら何故、引き受けたの」

「引き受けないと解いて貰えないからです」

「どうするつもり？」

「大丈夫。今日は一月五日。清盛公が亡くなられるのは閏二月四日だから未だ二カ月近くもあります。何とかありますよ」

「本当かしら。死んだ後に替玉を立てて二カ月間、喪を隠したのかも知れないわよ」

「その時は諦めましょう」

× × ×

京都市中に不穏な流言が乱れ飛んでいる。

「末世とは雖も大仏を焼いた平家に罰の当らぬ筈がない。悪入道清盛は必ず生きながら地獄に堕ちようぞ」

南都を遁れた僧徒が洛中に潜入しているらしい。重衡、通盛等は追捕に余念もない。

× × ×

「酷い熱だわ。三日熱マラリヤにそっくり」

「今の季節にマラリヤにはならないと思えますよ。インフルエンザ菌が原因で肺炎を起したのでしょう」

信乃は病氣のことに詳しいようだ。

「雷光だ。雷が鳴りだした。悪源太が怒っている。義平よ、許せ。其方の首を斬ったのは余ではないぞ」

清盛は、高熱のために正気を失って譫語^{うわごと}を言い続ける。夢の中に、亡霊が見えるのだろうか。

「お姉様。看護婦の経験があるの？」

「K誌でわたしの作品を御覧になったでしょう。病氣と名がつくものは殆んど経験しますよ。してないのはSEXの病氣だけ」

傍では時忠や時子が心配そうに覗き込む。

「大相国の御生命は助かるのか」

「夫の病氣は治るであろうか」

信乃は清盛の胸に耳を当てて呼吸音を窺っている。

「気管支に濁音があります。ただの解熱剤では効きませんね、賀集子さん。手提袋の中に風邪薬が残っていますか」

「ええ。カプセルが一つだけ」

「主成分は何ですか」

「サルファダイアジン」

「丁度いい。肺炎の特効薬ですよ。それを使いましょう」

× × ×

一月十四日。六波羅池殿において新院高倉上皇崩御。死因は恐らく肺結核だった。宝算二十一才。高德の君主として聞え高く、十二年の御宇は善政を以て綴られている。若し平家全盛と時世を同じうしなかったら延喜、天曆の帝と御名を並べ給うたかもしれない。不幸にして清盛の権威に屈し、若くして御位を退かれ、御妃の建礼門院と起居を共にされる事も少なく遂には前途ある身を亡し給うた。後白川法皇の御悲歎は申すまでもなく、庶民の端に至るまで新院の死を悼んだ。

× × ×

西八条の館に灯火輝き、賑やかな声や音曲が漏れてくる。清盛入道病氣全快の祝宴が開かれているとのことだった。

天下諒闇中にも拘らず管絃が催された。

忠度、知度が笙を吹いた。

教盛、業盛の父子は箏篋を奏する。

経盛、経正、経俊、敦盛の一家四人は笛。

知盛、知章、知忠父子は鼓を打つ。

頼盛、為盛父子は琵琶。

建礼門院徳子だけは夫たる高倉上皇の喪に

服して、この席にいないが、盛子を始め藤御方等平家一門の女性が挙って琴を弾いた。

貴族で文化人の平家人は、いずれも軍人、政治家であると同時に、学者、詩人、歌人、芸能家の資格を兼備しているようだ。

入道相国清盛が自ら立って舞う。

次は若き貴公子、維盛の青海波の舞。

主賓は信乃と賀集子である。

宴席には山海の珍味が並べられた。

尺余の伊勢蝦。二尺の明石鯛。三尺の鯉。

大飽。栄螺。蛤。牡蠣。雲丹。蟹。鮓。

雉。鴨。雁。鶴。猪。鹿。兎。軍鶏の肉。

野菜。果実。木の実。蜂蜜で練った菓子。

「それは豆腐と言ってな、最近、宋国より伝来したばかりの食物じゃ。珍しかろうが」

清盛が自慢そうに奨めた。

「木綿豆腐よりも固いわね。安物の大豆を使ったからよ」

どうも賀集子とは調子が合わない。

「これは南方遥かな常世国から垂仁天皇の御代に田道間守^{たじまもり}が持ち帰ったと伝えられる橘じや。非時香水実とも言って甘露の味がする」
「皮ばかり厚くて酸っぱい蜜柑ね。鐘詰用にもならないわ。肥料が足りないのよ」

傍の信乃が眼で制止した。

「この橘が、福建省の蜜柑と交配して何百年の間に温州蜜柑へと、品種改良されて行くのですよ」

清盛は僧形をしても生臭物をよく食べ、且よく飲む。健康が回復した証拠だ。

「信乃と申したな。其方は大きな身体をしている割に少食だな。遠慮するな」

信乃は酒と同様に魚貝類にもアレルギーだった。

× × ×

一月十五日。伊予の海賊大将河野四郎通信が百余人の配下を率いて備後鞆の津を襲撃した。父の仇、額入道西寂が遊女を集めて酒盛中との情報を得たからだった。

西寂は西国有数の豪族で無二の平家方だった。嘗て清盛の命を受け、平家に従わない通信の父通清を伊予高直城に攻めて討ち取っている。常備兵力三千。今日も親衛隊三百人を供に連れていた。しかし主将に油断があれば家来も酔い痴れている。残党を集め、機を窺っていた通信の百余人は、いずれも決死の猛兵。西寂方は忽ち斬り立てられ、通信は西寂を生捕って高直城へ曳き帰り、鋸で首を切つて父の墓前にそなえた。

× × ×

「大相国様は雷がお嫌いでしょう」

賀集子が悪戯っぽい微笑を浮べて言った。

「雷が好きなのかなどいるものか」

諧語を聞かれたと察して清盛は苦い顔。

「雷恐怖症ですよ。御家来の難波兼房殿が雷に打たれて亡くなられてからの事でしょう」

信乃が畳みかける。

「何処で聞いたのだ。よく存じているな」

清盛の顔色が変わり、額に脂汗が浮かんだ。

「平治の乱で捕えられた源義平殿が正に斬られようとする時、太刀取りの兼房殿に向い、今に雷となって蹴殺すぞと言ったとか」

「流石は巫女だ。その通りだった」

「そして熊野詣での折、野天で雷に遭い、兼房殿は悪源太の亡霊に襲われたと思った……」

「兼房は勇士だ。曳かれ者の妄言など恐れはしなかった」

「内心では矢張り恐ろしかったのです」

「いったい、何が言いたいのだ」

「恐ろしかったから雷に向って刀を抜いたのでしょう」

「武士が危険に際して身を守るために刀を抜くのは当然だ」

「それがいけないのです。雷は神異でも怨霊でもありません。電気と言って、自然現象の

一つです。刀のような、金属製の道具があると、そこへ向って落ちてきます。決して特定の人を目標に落ちるものではありません」

「すると余が助かって隣の兼房が死んだのは余が刀を持たず、経巻だけを奉持していたからなのか」

「雷は同時に二カ所には落ちません。兼房殿が亡くなられたのは怨霊を恐れて頭上で刀を振廻したからです」

「それを聞いたお蔭で、雷が恐しくはなくなつたぞ」

「雷に打たれた鋼鉄は、もろくなって刃物としては使えなくなる筈です。兼房殿の刀は、どうなりましたか」

「寺を建てる釘の材に寄進したよ。其方達は全く大した智者者だな」

× × ×

後白川法皇は悲歎の底に沈んでおられた。

第一皇子二条院は既に永万年間に崩御。

安元二年七月には嫡孫六条院も御逝去。

御妃の建春門院にも先立たれ給うた。

昨年の治承四年五月には第二皇子以仁王が源頼政に擁せられて宇治川の合戦に討死。

そして今、新院高倉上皇も亡くなられた。院政再開の好機会を前にして政治への執心

も失せかけている。

しかし現在は情勢が変化していた。かつて法皇を幽閉し、院政を停止せしめた清盛が院宣を必要としている。

法皇の御心境を察した清盛は自分の娘を側室に差し出した。当年十七才。厳島神宮の内侍に生ませた第七女である。

好色の法皇は絶世の美女に計画通り乗ぜられた。

× × ×

「今の平家にとって余は大切な身体だ。そこで、もう一つ教えて貰いたいのだが……」

清盛が深刻な顔で言い出した。

「夜、眠れないのでしょうか。怪奇な恐しい夢

◎分譲品総目録◎

多数の方々から御予約を頂いておりますが作成が大変おくれていて申し訳ありません。完成次第必ずお送りいたしますから、今しばらくお待ち願います。尚予約お申込みの方は切手五十円同封の上、大阪市阿倍野郵便局私書箱第十四号天星社箕田京二宛へお便りして下さい。分譲品満載の豪華なカタログを出来次第お送りいたします。尚、分譲写真のお申込みも箕田京二宛にお願いいたします。

ばかり見る。昼は幻を見たり、他人には聞えない音や人声を聞いたりする」

「恐しい奴だ。何でも見透しだな」

「壁一杯に人の顔が現われる。じっと見てみると消えてしまう」

「そういうこともある」

「夜半に大木の倒れるような音が聞える。天の一角で大勢の笑う声がする。しかし誰も聞こえないと言う」

「その通りだ」

「庭一面に骸骨の山が出来て、転げ合い、重なり合って、音を立てている。その中の一つが突然大きくなり、火のような目玉が現われて、こちらを見る。睨み返すと霧のように消えてしまう」

「原因は何だ。其方に怨霊を払えるか」

「怨霊などというものはありません。過労と心配による典型的なノイローゼですよ」

「ノイローゼだと？」

「良い薬をあげましょう」

賀集子が手提袋から精神安定剤^{トランキライザー}を出して与えた。

× × ×

今日も院宣使が諸国へと飛ぶ。

源氏の追討。軍糧の徴発。夫役の割当て。

新しい後室の入興以来、清盛の要請する院宣は一度も拒否されたことがない。

かつての院宣は勅より權威があった。しかし、かくもインフレ的に濫発されると、次第に価値の低下を起し始めている。

× × ×

「あなたは、いつも精神安定剤^{トランキライザー}を持っているのですか」

信乃は寧ろ呆れ顔で聞いた。

「唯一の常備薬なの。わたしって、とても神経質だから」

「賀集子さんの作品ではナポレオンみたいにとんな場所でも眠れる方だと書いてありましたが……」

「世間並みの恐しいことには平気なのに、不思議と仕事の上で少しでも失敗すると、忽ち不眠症になるのよ。だから、いつもこの薬を持っているの」

× × ×

二月一日。越後の豪族、城太郎助長に対する除目が行なわれて越後守に任ぜられた。信濃の木曾義仲を背後から襲わせる前褒美だと言われた。

× × ×

清盛は上機嫌である。

「よく眠れた。夢も見ないし幻も現れない。矢張り気の迷いだっただな。お蔭で存分に政治、軍事の指揮がとれるようになったぞ」

信乃が丁寧に制した。

「恐れながら大相国の御身体は未だ本復とは言えません。今暫くの安静が必要でしょう」

「今は平家浮沈の非常時だ。寝てはおれん」

「それでは南の方角を御用心下さい」

「何だと。東の鎌倉でなくて南が危いのか。」

南都は既に焼き亡した。すると河内だ。石川城の謀叛か。よし、早速討伐しよう。誰かある。時忠を呼べ」

× × ×

二月九日。河内国石川城に向って源太夫判官季貞、摂津判官盛澄の率いる討伐軍が進発した。諜報に依り武蔵権守入道義基、石川判官代義兼父子の野心が判明したためだった。

二月十日は終日に亘る石川城攻防戦。

義基、義兼父子は東国に奔って頼朝に合流する計画であり、城の防備施設は不充分。且謀叛の発覚を未だ察していなかった。しかも城兵は僅か百余。攻撃側は三千。半箇中隊と一箇聯隊では勝負にならない。脱出の道を断たれたために抵抗は必死を極めたが夜に入つて遂に落城。義基入道は討死し、義兼は捕虜

になった。

× × ×

「賀集子さん。いつまでもここにはおられませんよ」

信乃が人のいない隙を見て言った。

「何故なの。清盛公の病氣は治したし、予言は当るし、待遇はこんなに上々で、とても良い居心地よ」

「平家物語が正しければ清盛公が亡くなるのは閏二月四日。あと一と月もないですよ」

「今度、発病したら薬がないわね」

「わたし達は無能者として棄てられるか、もっと悪ければ討首でしょう」

「早く口実を設けて逃げ出さなければならないわね」

「伊東へ行って二十世紀への出口を探しましょうよ」

× × ×

二月十一日。義基法師の首が京に入つて大路を渡された。

× × ×

検非違使別当時忠が、秘かに信乃と賀集子を六波羅の私邸へ招いた。

「諸国に源氏へ心を寄せる者共現れ出で形勢詢に重大と見ゆるが平家の天下は容易に傾く

ものではない。なれど只一つ、心に懸るは禅門の御健康だ。今の平家は大相国御一人に支えられている。其方達、真に神通の巫女ならば太政入道殿の御寿命を占い、凶兆あらば未萌に彼い奉れ」

信乃と賀集子は思わず顔を見合わせた。

× × ×

二月十二日。九州の宇佐大宮司公通より飛脚到来。緒方三郎維義の謀叛を報じ、臼杵、戸次、松浦党がこれに応じたことを告げた。平家はいよいよ多事多端である。

「鎮西の征討は石川城の如く輕易には行かない。水軍の用意。兵糧、馬糧の集積。武具、弓箭の準備。大兵力の編成と行軍序列決定。すべて充分な計画と大胆な実行が必要だ。慎重に、そして大規模に行なえ。富士川は二度と繰返すな」

清盛の頭脳は依然健在。一度作戦に没頭するや、その指導は冴えていた。

× × ×

信乃と賀集子が時忠に願い出た。

「昨夜、星を占いましたところ、大相国の上には容易ならぬ凶運が現れております」

「兵革か、病氣か、それとも他の災変か」

「先日同様の熱病と思われます」

「ならば前回同様其方達で治せるであろう」
 「あの妙薬は一包しか用意して来ませんでした。調査には伊豆国天城山の麓で採れる薬草が入用です」

「すると其方達を伊豆へ遣さなければならぬな。伊豆は敵地。さて何としたものか」

× × ×

二月十六日。今度は伊予国より飛脚到来。去る一月十五日、河野通信が頼に額入道西寂を襲って亡し、高直城に拠って反平家の兵を起こした事を告げた。四国の地侍続々これに応じ、水陸に威を振って瀬戸内海の航運が危険に瀕しているとのことである。

紀伊国では重代平家の恩を蒙った熊野別当湛増が同盟条約の批准を拒否し、無気味な武装中立を示しているとも聞えてきた。

× × ×

京では信乃と賀集子が妬まれていた。

典薬寮の医師は「入道殿の全快は巫女の所為に非ず。我等の薬効が漸く顕われんとする時にあの二人が入ってきたに過ぎない」と称した。

高僧や修験者達は「大相国に憑いた悪霊を退散せしめたは我等が法力の致す処」と号した。

いずれも恩賞が目当てである。

× × ×

二月二十三日。殿中で最高政策を評定する公卿僉議が行われた。

東国征討が先か。西海安定を急ぐべきか。

結果は関東源氏の撃滅が万事に優先すると決議され、総司令官には首相代理の宗盛が自ら望んで任命された。平家一門の軍事適任者は挙げてこの遠征に参加し、治下の兵役適齢人口は悉く動員されることになった。

× × ×

時忠が信乃と賀集子を呼んだ。

「この度、内府宗盛公総大将となり、前代未聞の大軍を催して坂東を討つこととなった。途中、伊豆をも通るであろう。其方達も同行するがよいぞ」

× × ×

二月二十七日。明日の出陣を控えて西八条と六波羅の間を夥しい軍馬が往復する。公達も武将も兵も出動準備に忙しい。

しかるにその準備は突然中断された。名状し難い恐慌が洛中を襲い、西八条の一角に起こった混乱は見る間に京都全市へと拡った。清盛が突然の熱病で倒れ、重態と噂された。

× × ×

「其方達の神通力はどうしたのだ」

時忠が信乃と賀集子に強請した。

「あの妙薬がなければ駄目です」

抗弁は通らない。

「入用な薬種は平家の力で何でも揃えよう。ここにいて必ず大相国の御寿命を延し奉れ。この度も快癒したら荘園十箇所を与えよう。万一御逝去の折は其方達の生命もないぞ」

× × ×

二月二十八日。清盛は既に危篤と聞えた。

元来、平家の言論統制は不完全で、今回は特に防諜手配に油断があった。清盛発病は一夜の内に京都全市民の知る処となった。過労と寒気のため肺炎が再発したらしい。「大仏殿を焼いた罰だ」と、言う者が多くあり「態を見る」と嘲る声も各所に聞かれた。

× × ×

「お姉様。どうなの？」

「困りましたね。サルファ剤が少しあれば助かるのですが」

清盛は高熱に喘ぎ、悪寒に慄えている。

「平家物語には暑がって近くの者まで熱気を感じたと書いてあったけれど反対ね」

「頭の熱は冷却しなければなりませんよ」

庭が騒がしい。軍隊が動員され、比叡山の

千手井に貯蔵された雪水を汲み下している。

「其方達、何か手当の方法はないのか」

時忠も狼狽するばかり。

「恐れながら御運が尽きました。あと四日の御寿命です」

信乃がこう言い切るには大変な勇気が必要だった。

× × ×

閏二月一日。医師も祈禱師も手段なし。

二位殿は諸社寺に金銀七宝、馬、鞍、鎧、兜、弓箭、太刀、短刀を散じて平癒を祈願したが清盛の病状は悪化するばかりだった。

× × ×

「お姉様。とうとう巫女、失業ね」

「それどころか首も危いのですよ」

信乃と賀集子は西八条館の一室に監禁された。巫女の服装をしたまま荒縄で後ろ手に縛られ、縄尻は柱に繋がれている。

「でも平家物語には、あたし達が討首になったとは書いてなかったでしょう」

「冗談言っている場合ではありません。四日までに逃げ出さなければおしまいです」

清盛の看病に気をとられてか信乃と賀集子を監視する者は誰もいない。しかし縄目は固く緩む気配は少しもなかった。

× × ×

閏二月二日。清盛の熱が分離し意識も回復した。しかし肺炎は熱の下降期こそ最も危険な時期である。

「言い残したい事がある。時子よ、これへ」

清盛は二位殿を枕頭へ呼んだ。

「平家は地下の武士より興って皇室の外戚となり全盛を極めた。この世に思い残すことは何もない。只一つ……」

清盛には最期の自覚があったのだろう。

「只一つ心に懸るは鎌倉の頼朝だ。数年の後我が一門を害する者ありとすれば、それは頼朝だろう。これ以上、強大にならぬ内に必ず討ち取って首を我が墓前に具えよ」

× × ×

信乃と賀集子が西八条館に縛られている。

「賀集子さん。解けそうにありませんか」

「寒くて指が動かないのよ。手首も痺れてしまったわ」

寒気に凍えた膚に荒縄は愈々緊しく無慈悲に喰い込んで来る。

「手提袋は、どうしました？」

「あそこに転っているけれど……」

奥の部屋なので見廻りにくる者もない。「何か縄を切る道具は残っていませんか？」

「刃物はないわ」

× × ×

閏二月三日。清盛の昏睡が続いている。体温は低下し、脈膊は弱くなり、最期が近いようだ。

× × ×

「寒いわ。この調子だと、あたし達が肺炎になりそうよ」

「このままでは餓死か凍死しかありません。

火が欲しいですね」

滲み出した汗が縄に凍りついたようだ。

「そうだわ。火があればいいんだわね。縄が焼き切れる……」

× × ×

閏二月四日。偉大な独裁者は僅か六日間の発病で急逝した。今年六十四才だった。

× × ×

賀集子が足を伸ばして手提袋を搔き寄せようとしている。

「何が入っているのですか？」

「ガスライターよ」

「ガスが残っていますか？」

「さあ。でも、煙草がなくなってから、一度も使っていないわ」

× × ×

閏二月七日。愛宕で清盛の遺骸が火葬にされた。戦時下、且、寺院嫌いな故人の遺志もあって、日本国独裁者の葬儀としては寂しい祭儀だった。

× × ×

「あつい！」

「手首に火をつけないで下さいよ」

賀集子がガスライターを落とした。

「火傷しちゃったわ」

「もう一度やって下さい。縄も半分ぐらい焼けていますよ」

再び、焰が後ろ手の縄目に近寄った。

「よく見て頂戴。これでいい？」

「もっと右。少し下げて……」

「どうかしら。あ、又やった」

「右と言ったのに。反対ですよ」

☆誌上読者コンテスト☆美人モデル募集

賞金

一、第一席	五万円	若干名
一、第二席	参万円	若干名
一、第三席	貳万円	若干名
一、第四席	壹万円	若干名
一、第五席	五千元	若干名

要項

一、参加者は、本誌を愛読しておられる女

性の方でしたら、学歴、年齢、未婚既婚の別は問いません。奮て御応募下さい。

一、写真選衡にパスした応募者の方全員に、対して一名につき金壹万円の賞を呈し、更にその際撮影した写真と誌上に発表し、読者コンテストの投票の結果、第一席より第五席まで標記の賞金を進呈いたします。

一、応募者は、略歴に身長、体重、胸囲の概略を記載の上、手札型写真を同封してお申込み下さい。選外の際は一件書類は、返却いたします。

一、写真並に書類にて選衡にパスした方には賞金壹万円を贈呈の上、コンテストに発表の写真と撮影し、コンテストの結果は追って御通知いたします。

一、写真撮影のための旅費などの費用一切は本誌にて負担いたします。

一、モデル・コンテストに対する読者の投票については、いずれ誌上に発表します。

「手が後ろに廻っていると方向感覚が逆になるのね」

× × ×

故太政入道浄海の遺灰は円実法眼が首に掛けて摂津へ下った。故人が殊に愛した福原の経島に埋めるためだった。

× × ×

「やっと自由になりましたね」

「あ、火が……」

緋の袴が燃えだした。

「早く消して」

今度は落ちた縄の火が円座から建具に燃え移った。

「もう駄目です」

餓え凍えた信乃と賀集子には火を消す体力が残っていなかった。

「煙に巻かれない内に早く外へ」

「あたし達、余っ程、火事に縁があるのね」

× × ×

古典平家物語は記している。

——葬送の夜、不思議の事ありけり。玉を延べ金銀を鑢めて造られたりける西八条殿、その夜俄に焼けにけり。何者のしわざにやありけん、放火とぞ聞えし。——



(1)

それは、異妖ともいうべきテストだった。異妖というより、あまりにも人権を無視した、非常識な振舞いというのが、当たっているかもしれない。

結構すぐめの好条件を揃えた、就職口とはいえ、こんな非道が許されてよいものか。しかし、テストを受ける本人は平気だった。

『念のため、テストだけは、うけといてちょうだい。あとでゴタゴタは、いやだから』

読切・Fストーリー

フルーツカクテル

香川 泳 三

と、『おくさま』が云い、インターフォンでキッチンを呼びだして、送話口に『あれを、もっておいで』と命じた。

あれとは、いったい何だろう。信平は、少々不安になってきた。おくさまは、ニッコリと、

『ホホホ、しんぱいしないでもいいの。べつに毒薬なんかじゃないのよ』

と、やさしくわらった。おくさまは、映画スターにしても、りっぱに通用しそうな美人だった。

ドアがあき、これもグラマーな美人の、とても女中さんにはみえない、二十才くらいの女性が、大きな銀盆を手にはいつてくると、信平の前にピタリとそれを据えた。

とたんに異臭が、たちこめた。まるで汚れた放題によごされた、共同便所かゴミ箱みたいな、いやな不潔な悪臭が鼻にくる。

『ささ、これを喰べてごらん。これが、テスト。いやなら、採用できないことになるかもよ』

おくさまが、うながす。
盆の上には、うずたかくリンゴ、メロン、

バナナ、ブドウ、イチゴ、ナシなどが積まれている。

異臭は、そこから匂ってくるのである。

かなり上等のくだものだが、みんな完全に腐敗しており、とても食べたものではなかった。

しかし信平は、異臭など全然、気にするふうもなく、いきなりバナナをとりあげ、皮をむくのもどかしく、パクリと口のなかへ放りこんだ。

一年中、腹の空きっぱなし、ドン底生活の信平にとって、くさったバナナなどは、ふつうの食べ物。町の果実店の、ごみ箱のなかのバナナなどは、もっとドロドロにくさっている。

それにくらべたら、目の前に積まれたそれらは、はるかに上等だ。

『うまい!』

すききった胃ぶくろに、半分くさりかけたメロンの、なんともいえないうまい汁が、しみわたる。

『よしよし、よく食べられたわ。第一問はパスよ。じゃ、こんどはいっそ、これが吞めるかどうか、試してみよう。みごとに、のどを通ったら、正式採用よ』

おくさまの眼が、異様に妖しく光ったことに、信平は気がつかない。

おくさまは、みずからサイド・ボードをあけて、高価らしいキリコのガラス瓶と、これも肉の厚いキリコのコップをとりだす。

目の前で、なみなみとコップにつがれたその『飲み物』を、一とくち含んで、信平はふしぎそうな、こわばった表情をした。

それは金茶いろに美しく澄み、ケイ光灯の光線でキラキラ輝き、コップの底でユラユラと小さきみに、ゆれうごく。生命をもつ、生き物の感じがした。尊い飲み物とも、不潔な毒酒とも思える。その香りは、たしかどこかで嗅いだ記憶があった。しかし、思いだせない。甘くはなかった。からくもなかった。

むしろ、無味といったほうが正しいのかもしれない。なかった。

『神の酒よ。だけど、絶対に酔わないから、安心して吞み。これが飲めたら、そのときからあんたは、ウチのにんげんになるのよ』おくさまのことばには、そむけない、あるちからが感ぜられた。つがれておそるおそるもういちど、吞んだ。

味が無いのが、救いだった。

うす気味わるいけど、就職したい一心で信

平は思いきって、ぐっと吞んだ。

かすかな異臭が、のどから鼻のおくに拡がった。

『ヨオシ、感心。よく吞めたわ。じゃ、採用にきめます』

おくさまは、きげんよくいう。

『ウチへきたら、そうやって、なんでも命令にしたがうんですよ。おまえは、なんにも考えないでいいの。たとえ、どんなつらいことがあってもよ。あたしや、お嬢さまの命令にすこしでもそむいたら、その場でクビよ。平さん、そうになったら、あんたも出入り差止めよ』

と、おくさまは、かたわらに、へいつくばる平さんにも念をおした。

.....

腐ったくだものを喰わされることくらい、なんでもないけど、あの『おさけ』ってのは一体なになんだろう。きつと、舶来の高貴な飲料にちがいないのだろうが、どうも、あの色や香りは、ふつうでない。

しかしボードの奥に、たいせつにしまわれているんだから、よほど、すばらしいものにちがいない。——信平は、かすかに舌先にのこるその味を、もういちどたしかめながら、

深々と、おくさまに頭をさげた。

『ついでに紹介しとくわ。これ、メイドさんのキヨ。あんたの先輩だから、やはり尊敬するのよ。キヨの命令は、あたしの命令だと思つてね』

おくさまは、そういうながら、かたわらにひかえる、キヨに、

『あんたの子分ができたよ。よろしく仕込んでやってね』

といった。

キヨは、おくさまより、もっともっと美人だった。背もたかく、ちからがありそうだった。

(2)

『しごとのやりかたは、キヨに指図してもらいなさい。よくはたらくんですよ』

と、おくさまに念を押され、ここだなど、ていねいに、

『ハイ』

と、答えながら、信平は、もういちど、深々と頭を下げた。

おやしきでは、おくさまにもお嬢さまにも出来るだけ礼儀正しく、用を命ぜられたら、かならず

『ハイ』

と、頭をヘソの下まで下げてお辞儀しなくてはいけないと、ここにくる道々で、やしき出入りの植木職の、紹介者の平さんに、くどく念を押されている。

おかげで、だから、はじめておくさまにお目通りする信平の態度は、まことに従順そのものだ。

『おや、おまえ、いいお辞儀ができるじゃない。いい子だわ、万事その調子よ!』

おくさまは、きげんよく、

『あんた、いい子、探してくれたわ。これなら、モノになりそうじゃない』

と、床に土下座せんばかりにかしこまる、平さんを見おろして、ニッコリした。

『じゃね、キヨ、信平を室につれてってやりなさい。平さん、これ少ないけど、お駄賃』

おくさまは、キビキビと先輩女中のキヨに命じ、平さんには、白い洋封筒を渡した。

いくらはいってるのかはわからないけど、かなり厚ぼったいところを見ると、お駄賃というより、相当の金がいってるらしい。

信平は、おくさまの手から白封筒が平さんに手わたされるところを目にして、ふと、これでじぶんが品物のように、このやしきに売

り渡されたような心持がした。

(3)

『おやしきの、お嬢さまの家庭教師にならないか。家庭教師といっても、お嬢さまは病身なんで、学校は休学中だから、勉強の必要はないそうだ。スポーツのお相手役、つまりお遊びのお相手で、住込み三食つき、月給二万円。室もくれるそうだ』

時々、バイトの庭仕事に使ってくれる平さんの話に、信平は飛びついた。

定時制の商業高校に通っているが、小さい時、捨て児同様にして両親とわかれ、野良犬同然に育ってきた信平は、二十二才でようやく二年生。三度のめしも食うや食わずで、スーパーマーケットの特売の、五コー〇〇円のインスタントラーメンを生でかじり、水を呑んでごまかすようなドン底ぐらしには、勿体ないような条件であった。

早くきてほしい、というおやしきからの連絡で、平さんにとっては、最上のおとくいさまである大八木家の、すぐく豪華な門をくぐり、いまここで、はじめて、おくさまにお目通り。そのとたん、いきなり、おかしなテス

トに出合つたのである。

小柄な信平からみるとキヨは、十センチも背が高く、歩くと尻の肉が小山のように揺れた。

『あんた、おくさまの言つたこと忘れちゃ駄目よ。きょうから、あたしの子分になつたんだからね。そう、子分というより、おまえは愛犬のジョンというところだわ。でも、しんぱいしないでいいの。あたしは、子分は、かわいがるほうだから』

キヨは、上きげんで、よくしゃべつた。

『あんた、さつき、おさけ吞めつていわれたる。アレ、なんだか知ってる？ フッフまだタネあかしはしないけどさ。そうねえ、ちょっとシブいところなんぞ、白ブドー酒といえるかも、ね』

と、美しい顔で笑う。美しいけれど、ちょっと残忍そうな印象もある。

『ああ、痒くなった。あたしは、水虫もちでねえ、時々痒しくてたまらなくなるの。あんた、わるいけど、ちょっと搔いて』

と信平の目のまえに、ヌツと足をつきだした。

すばらしく、きれいな足だった。

足のうらまでピンクに輝くようで、手をふれるのが、おそれ多いみたい。

土ふまは深く、指の形もすばらしい。全体に彫りがふかい。おおきいからだのわりには小さく、手のなかに握りしめられるみたいな足だ。

丸みをもったカカトは、とてもやわらかくソフトクリームのようなだった。五つの、さくら貝のようなツメが輝き、真珠みたいなクルブシを支える足くびは、鹿のように細く、しなやかで、むかしの高貴な女人のそれを見るようであった。

信平は、命ぜられるままに、おそろおそろ彫りのふかい指の股に、かるく手をあてて、撫でた。

『そんな、生ぬるいやりかたじゃダメ。もっとちからをいれて、ボリボリやるのよ』

キヨは、じれつたそうにいった。

指先に、思いきりちからをこめ、患部を引っ搔いた。足首がピクリとうごく。

『そうそう、その調子をわすれないで』

キヨは目を細めて、足をふるわせた。やがて、足指の股のあいだから、透明な水のようなものが、ジワジワと噴きだし、ポロポロと

甘皮がむけた。

うつくしい、ヤニみたいな水は、あとからあとから湧いて、信平の指をぬらす。

甘皮は、おもしろいようにむけ落ちて、下に敷いた新聞紙に黒くたまつた。

『あんた、くさつたくだものでも、平気で食べたわね、じゃ、こんどは、おいしいくだもの皮を食べさせてやろう』

いきなり、新聞紙にたまつた甘皮を集め、手のひらにのせると、

『口をあけてごらん』

と命じ、パラパラと、のこらず、それをこぼし込んだ。

こぼし込まれても、においも、味も感じない。相手が美人なのが救いだ。

足のゆびの皮と知っていても、わるいきもちがしないのはなぜだろう。

いいえ、甘皮だけでなく、にんげんの肌の表皮にたまる。得体のしれない垢や脂や、そして塩っぱさや、おまけにニチャニチャに噴きだす黄色っぽい分泌物まで、ごちゃごちゃにミックスされた、いうなれば、にんげんの分泌物のカクテル。

そうだったら、当るだろう。

信平は、舌にザラザラの甘皮を感じたが、

顔をそむけない。

命令にそむくことは即日解雇を意味する。

キヨの命令は絶対にそむいてはいけない、と
たったいま、厳命されたばかりではないか。

信平は、とにかく息を詰め、目をつぶって
つばきといっしょに呑みこんだ。

のどに、とまって、仲々、落ちてゆかない
のを、必死にこらえた。

『あんた、水が欲しいんだろ。指の水をしゃ
ぶってもいいわ』

乱暴な、許可というより、命令であった。

しかし、信平は耐えた。

キヨの、形のよい五本の指が、信平の、く
ちびるをおどけて、なでた。

必死になって、その指を追った。

『痒ゆい、痒ゆい。モット、搔いて』

キヨは、だした足を引っこめるどころか、
さらに信平の顔のまんまに、形のよい足を
近づける。

一点のシミもない、上等な化粧クリームの
かたまりのようなあるいはマシユマロのよう
な、ピチピチと弾むキヨの足を抱いて搔く。
おしいただく。あがめ尊び、拝跪する。

そんなことを繰り返すうちに、じぶんは
さきほど、おくさまから一言されたようにキ

ヨの子分、というより奴隷、いや、奴隷とい
うより、じぶん自身がキヨのからだの一部分
になったみたいな気持がしてきた。

できれば、このキヨの足のかわりに、じぶ
んが、なってみたい。

うつくしいキヨのからだをのせて、町をあ
るき、トイレや浴室へも、ピツタリくつつい
て、はなれず、寝るときも、そのままのかた
ちでいたい。

やわらかい、土ふまずに、そっと、くちを
よせて、信平は足をおがむ。

足のうらは、ひんやりと冷めたく、リズム
カルに信平のほったを叩く。

指のツメのあいだに、黒ゴマのようなアカ
がたまつて、かわいらしい。

かれは、それが欲してたまらなくなり、な
んとか、取りだしたいと焦った。

『さ、もういいだろ』

キヨの声が、ずっとむこうからきこえて来
るけど、かれは子ネコみたいに足にじゃれつ
き甘えて、かるく歯をそこへあてた。

『バカだねえ。いいかげんにおし』

本気で、けとばされて信平はのけぞった。

(5)

『いままでに、学生を六人世話したが、みん
な、どうしても続かねえんだ。早いのは、三
日、続いて、二ヶ月で、どうにもダメだとい
ってやめてゆく。俺もこれにやホトホト手を
焼いてるんだ』

植木職の平さんが、前にいったのを思いだ
す。

『男手がなくて不用心だし、お嬢さまの、勉
強相手に、どうしても、優秀な学生さんに、
きてほしい。待遇については、できるだけの
ことはするから』

と、やしきのおくさまは、平さんに、わざ
わざ電話でいってくる。

平さんにとって、おやしきは、最高のおと
くいさまなので、その頼みを断るわけにゆか
ず、あらゆる手段を使って、よさそうな青年
を紹介するのだが、それらの連中も、はじめ
はハリ切つて住み込むのだが、たちまち、
『おじさん、とてもあのおやしきはダメだ。
かんべんして』

と、泣かんばかりに帰ってくる。

『家族は美人ばかり三人。室がひとつもらえ
て、うまいものは食べ放題。給料だって悪く
ないし、しごと慣れたら、学校へゆくこと
は自由。こんなうめえ話はねえのに、いまだ

きのわけえもんは、ゼイタクばかりぬかす』

と、平さんは、よくこぼした。

なぜダメなのか、なぜかんべんしてほしいのか、と、つつ込んで問いつめても、みな、申し合わせたように、それも、恥ずかしそうに、

『ふつうの神経もってちゃ、つとまんねえんだ。まあ、よほどのバカか気狂いか、きたないことにも平気という人間でなくてはねえ』と、口をそろえていうだけ。

『俺も、なにかよくよくのことがあるにちげえねえと、にらんじゃいるが』

と、平さんはいった。

なんでも、あの美人のおくさんが、顔に似合わず残酷で、雇い人なんか、人間とも思わす、気にいらないうことがあると、ガッチリ手錠をかけて、ムチで思いきりひっぱたく。床に、横になれと命令されて、いうなりになったら、理由もないのに、素足で踏んずけておいて、あげくにや、ナイフで、手の甲に、三センチくらいの切りキズを二本。

『まあ、キズだったって、カスリキズでいど。

皮をちよいと切ったくらいだそうだが』

血を流されたそうだと、平さんはマユを、ひそめた。

ドイツ製の、すぐく切れ味のよいナイフで痛みはあまりなかったけど、グサツと切りつけられたときは、びっくりした、と逃げ帰った一人はいったという。血の流れは、ひどかったらしい。

『おくさまも、さすがに行きすぎだったと思っただけ、医者にいったと五千円、呉れたそう。ちょっと痛い思いをして、血をだせば金がもらえる。これはアルバイトにしちゃ、悪くない、とは思ったそうだがねえ』

と平さんは、いった。

おくさまは、入浴のときも、トイレの用のときも、かならず、その世話をして、雇いれた学生に命じたらしい。

『そりゃね、高い月給くれるんだから、お世なかを流したり、トイレのお世話なんか、あたりまえだろうけど、ほんらいなら、風呂はともかくとして、他人にトイレのなかまでお供させるのは、どんなものかねえ』

と、平さんのおかみさんまで、口を出す。

(6)

雇われて、毎日、コキつかわれてみて、はじめて、このしごとのひどさが、身にこたえるようになった。

今更のように、くどいほど、平さんに念をおされ、そのときは、まさか、そんなバカなことが、と腹のなかで、あざわらったものだった。が、つとめだしたその日から、じぶんそんな運命が待ちうけていようとは、思わなかった。

でもいまさら、逃げるわけにもゆかない。じゅうぶん、念をおされていたし、じつはときにはひどい目に合わされることに、このごろでは、何か痛快な思いがし、もっともつと、いじめられて、じぶんの忍耐力の限界をつきとめてみよう、というきもちがないでもない。

それから、もうひとつ、お嬢さまの身のまわりの雑用を命ぜられることが、楽しいのだった。

.....

『お嬢さまが病人でえことは、はじめに知らされてることだ。月にいっぺん、発作がおきて、パッタリたおれると、失神が一週間もつづく。人形同様になって、身のまわりのこと、あ、使用人まかせ。その看病も、条件なんだから、トイレのご用だって、雇われた学生がしなけりゃいけねえことは判るが』

と、平さんはいった。

『だからってさあ、ピンピンしてるおくさまは、まあまあとして、女中のキヨさんまでが病床のお嬢さまのマネをして、気にいらないことがあると、ベッドにねたきりで、何から何まで、雇い人の、それも、女の人ならともかく、男の学生に、平気で始末させるとは、いくら約束とはいえ、ひどいんじゃないかねえ。そんなことを、他人にやらせるおんななんてあるもんか……』

ベッドで、キヨに命令されてるさい中に、就職まえに、平さんのおかみさんがいった言葉を思いだす。

おやしき、つまり、信平が雇われて住み込んだ、大八木邸は、山の手の高台にある。鉄筋コンクリート建ての、池とプールと芝生と木立にかこまれ、個人の住宅というより、デラックスなホテルか、マンションというほうがピッタリくる。

建設会社の創立者で、長者番付には、やや下のほうだが、名をつらねる主人の大八木豪三氏は、先年病死した。

あとには、以前二号で、それより前に、正妻が死ぬと同時に、正妻として乗りこんでいたおくさま——三谷とみ子と、その連れ子のマリコ。

それから、これも連れてきた、お氣にいらのメイドのキヨ。

と、おんなばかり三人が、この家の住人となったことは、面接のとき教えられている。いくらゼイタクしても、使いきれない莫大な遺産と、三人が住むには広すぎる邸宅が、そこにはあった。

おくさまは、とても美しい人だ。

趣味は、ゴルフとドライブ。

そして、高価な買い物。

しかし、主人が死ぬと、なにか満たされな

(7)

おくさまは、まだ、からだも心も若い。

再婚しようと思えば、きょうにも、わけなくできるのに、あまりにも莫大な、使っても使いきれない財産が、その実行をはばんだ。

重荷は、もうひとつある。

平さんから聞かされて知っている、一人娘のマリコの奇妙な病氣。それは、永久に結婚などできそうにもないからだである。かりに財産にモノをいわせてよいムコをさがし、金で買って結婚を強行させても、おそらくは短時日で、悲劇のうちに破婚で終ることは目に

みえている。

主治医の意見では結婚によって生活環境が変わったら、病状が激変して重大な事態を招くと、警告されている。

仕方ないわ。とにかく、しばらくはわたしの再婚もマリコの結婚もあきらめて、このままくらすのだから——と、とみ子は心にきめて

いる。

さいわいメイドのキヨが、よくやってくれる。

からだが大きく、ちからがつよく、性格も荒っぽい。そして、とても忠実なキヨのなかに、ときに男性を感じることもある。

げんに、ある雨ふりの夜、なにか淋しさに耐えられず、話相手にと、キヨをベッドまで来させたことがある。

察しのよいキヨは、敏感にも、おくさまの心のなかまで読んで、ほんとうに男性のように、荒々しい言葉をつかい、そのくせ、かゆいところに手のとどく、すぐれた愛情ぶかいパートナーの役をやってくれた。

キヨの、幅のひろい厚い胸。ちからづよいうでは、絶好の憩いの場所だった。

やさしく、子守唄をうたってもらい、ミルクのような、こころよいにおいの、キヨの吐

息を嗅ぎながら、ねむるのは、とてもうれしい日課だった。

キヨさえいてくれたら、ほかにはなんにもいらない——心から、そう思った。

十才も年下のキヨが、まるで、じぶんのママみたいに思えるが、おかしかった。

でも、さながら有能な執事のように、家の内外の雑務をテキパキと、片づけるキヨなしには、この大八木の家は、やってゆけない。

キヨのきげんをとるために、キヨが、こんど雇い入れた信平をいじめることが大好きなことを読みとった、おくさまは、キヨが、信平を苛酷に扱うことを、ゆるしたのだった。

そうすることで、キヨの心をつなぎとめれば、安いものだわと、判断した。

キヨの目のまえで、信平に、上下座させ、
“奴隷の屈従”を命じたのは、その必要からである。

いつのまにか、大八木邸の内部には、信平は人間でなく家畜だ、という考え方がひろがりはじめ、そして、又信平自身も、そんな立場を、ふしぎに思わなくなっていた。

(8)

それまでの信平は、いくら雇われ先でも女

のひとに横つらををはたかれたり、足でけられたり、水虫を搔かされたり、おんなの人の足の下に這いつくばることに、身を灼かれるような、妙なよろこびを感じるような、よわい青年ではなかった。

うまれおちて、物心つくころから、じぶんのちからで生きてただけに、むしろ強い性格を内に秘める青年の筈だった。

それが、生活のためとはいえ、このやしきへやつてきてからというものは、ガラリと性格がかわってしまった。先輩とはいえ、二つも年下のキヨにまで、おもちゃ同然の扱いをうけても、反撥するどころか、それが当然。まして、おくさまや、お嬢さまの、身のみわりのご用に、イヌかブタみたいに追いまわされることに、喜びびを感じるようになったのはなぜだろう。

信平の毎日は、屈従と奉仕のあけくれだった。

.....

でも、三人のおんなのご主人さま——いつしかメイドのキヨまでが、信平にたいしては主人の姿勢をとりだしていたし、さまさまの命令に、

『ハイ、ハイ』

と、服しておれば、ほかに気をつかうことがなく、安らかなその日その日が送れるのはわるくない。

信平の全身からは、男くささや、人間くさがが脱けおち、ほんとうに動物みたいな心境になる。

でも、それでいい。

許されるなら、一生このまま、飼いごろしに使われていたい。

おくさまや、キヨの脚の下に身を伸ばすとき、ふしぎに心のやすらぎをおぼえる。

お嬢さまの、汚れた下着を洗たくしていると、その、したたりおちる石けん水までが、とおとくなってしまう、ついそっと舌にのせる。ピリリと刺戟する石けんと、お嬢さまの分泌した汗やアカまでが、大切な飲み物におもえた。

(9)

マリコお嬢さまは、ずっと子供のころから奇妙な持病に、なやまされてきた。

その病気は毎月一回、定期的におそってくるのであった。

夜明け方、胸に、しめつけられるような痛みが感ぜられる。それが、発作の前ぶれでつ

づいてキリをもみ込むような痛さが、全身を貫く。

痛みは、脳のなかにまでひろがり、ベッドの上でおそってくる七転八倒の苦しみに、胸をかきむしり、やがて失神がくる。

以後、最低一週間は完全に失神状態が継続するが、ときがくるとケロリと回復し、ふだんと交りのない健康体になる。

これを繰り返すのだから、本人の苦しみもはたの者の心配も一と通りでない。

いままで、あらゆる医者に診断を乞い、金にあかせて手術、服薬をくり返したが、これは先天的なものらしく、さっぱり好転のきざしが見えない。

失神中の看病は、メイドのキヨと、信平に一任されていた。

生ける人形、といたいような美しい表情で、無心に二十四時間をベッドでスヤスヤと寝息をたてるお嬢さまを、ふだんと同じ状態で、食餌をすすめ、美容体操やマッサージを繰り返して、体力の低下をふせぐ。

お嬢さまは、失神中でも、ふしぎに食欲がおとろえず、口のなかに入れてあげると、おいしそうに、なんでもよく食べた。

時々、わずかの間だが、失神から醒めると

きがある。でも、口はきけない。二人は、お嬢さまの眼のうごきで、何をしてあげたら、よいかを判断する。視線が、足のほうに走れば、下のほうの用事ということがわかるのである。

はじめのころは、食事は、ふだんと同じものをあげたけど、万一胃腸に、よけいな消化的負担を与えて、そのため下痢でもおこしてはいけないと、主治医から嚴重に止められ、それから失神中は、果物だけを三度三度あげることに改められた。

いまにしておもえば、信平が、はじめて、やしきへ参上して、テストの意味で、大量のくさった果物を食べさせられたのは、このお嬢さまの、あまりもの、つまり大型の業務用冷蔵庫に、山のようにストックされたそれらの材料が、電気回路の故障で、停電をし、庫内温度が異常に上がって、くさってしまったのを、捨てるのもめんどごと、ゴミ箱代りに利用されたものであったらしい。べつに、くさったものや、きたないものでも、平気で口にできるかどうかを試す目的もあったらしいけれど。

お嬢さまは、そんなときでも、消化機能は完全であった。果物ばかり摂るので、どうし

ても水分が貯溜され、トイレが近くなる。

そうかといっても、眠り人形のありさまだから、じぶんから、立ってゆくなどということは、できるわけがない。どうしてもこれは看病にあたる二人が、気をつかって、時間を見計っては、そのご用にあたるしかない。そのため、赤ちゃんみたいに、おしめを使用したこともあったが、つめたい思いをさせてはお嬢さまがかわそう、と、おくさまがいい、おしめの使用は、いっさい禁止された。

しかし、なにしろ、赤ちゃんと同じなことから、放っておくことはできない。

この用事には、キヨの大力がモノを云ったのだった。

.....

まるで、赤ちゃんが、えん側で、ママにシイシイをさせてもらってるみたいだった。

ただちがうのは、場所が庭でなく、室内であることと、本もののイヌは、いないかわりにイヌよりは、よくはたらいでききわけもよく、べんりな信平という動物が、お嬢さまの正面にうずくまって、庭石のかわりをつとめることだけだ。赤ちゃんは、よくねむっていた。

キヨが、おもしろがって、ネライをつける

と、庭石のあたまでは濡れた。キヨのいたずらだ。

キヨは、そんな、ひとのわるいイタズラをおくさまの前でも平気でやる。

災難なのは、信平だ。

おくさまは、キヨなしでは、いられないから、もちろん、キヨの、こんなイタズラをとがめない。

かわいそうなマリコ一人に、苦勞させるより、こうして信平をいじめると、すこしは気がやすまり、そのためマリコの苦痛が、信平に肩がわりさせられるような気持になる。

まったくキヨは、すもう取りかレスラーのように大力の持主で、信平などは到底かなわなかった。

『よいしょ、さあ、さあ……』

と、軽くかけ声をかけると、お嬢さまのからだなどは、さっと持ち上がってしまう。

あとは、赤ちゃんと同じスタイルをとらせてあげればよいのだから、まことに能率的でだから、この役は、いつもキヨの専売であった。

ちからまかせに抱っこして、うながすと、反射的に機能がはたらき、ベッドを汚すことがなく、まことに都合がよかった。

(10)

とくに失神の期間中は、キヨも信平も一日二十四時間、お嬢さまのベッドから離れることは、ゆるされなかった。

二人は食事も交代で、お嬢さまの足もとに小さなテーブルをおき、近所から取りよせたどんぶりや、幕の内弁当を、そそくさと、開く。

お嬢さまは、失神中でも、ときたま半分、無意識に、

『アアア』

とか、

『チッチッ』

と、意味のない声をあげ、すこし調子のよいつきは舌を鳴らして、用事を訴える。

呼ばれたら、スグに口もとに耳を近づけてきこえるか、きこえないかくらいの小さな声を聞きつけ、迅速に、用を足してあげなければならぬのである。

それがものの一、二分もおくれようものなら、たいへんだ。

お嬢さまの頭の真上に、性能のよいマイクロホンがあり、そのコードは、おくさまの居室につながっている。

おくさまが、居室からでて、どこかへゆくときは、ボタンを押すと、テープレコーダーに切りかえられ、お嬢さまが声をたてると、スイッチが入って、自動的にテープがまわります。

つまり、お嬢さまのねどこの物音は、二十四時間ぶっ通しで、おくさまの監視を受けているわけだった。

万一、お嬢さまが、いら立って、異様な声でも立てようものなら、即刻、

『信平！ 何をボヤボヤしてるの？ サボったら減給よ』

と、するどい叱声が、インターフォンからとびだし、事実、お気にいりのキヨはともかくとして、信平には容赦なく、お仕置きの罰がくだされるのだった。

……………

いまでも、そうであった。

つききり、と命ぜられていても、キヨも信平も、人間だから、最低限度、トイレの用や雑用で一回五分以内、一日五度、つまり二十五分間というものは、室外へ出ることは許されていた。

キヨが、

『ちよっとお手洗い』

と、室から出ていったそのあとで、ベッドから、お嬢さまが、

『チッチッチ』

と、舌をならした。

三十分ほど前に、くだものをたくさん召し上ったのだから、そろそろ、ご用のかかる時刻だ。

信平は、あわてた。

いつもなら、おくさまのおいつけもあり慣れているキヨが手ぎわよく、お世話をしてあげ、信平は、せいぜい助手になって、あと始末をするていどのもので済んだのだが、いまは、自分たった一人だから、キヨのかわりまでしなければならぬ。

『チッチッチ！』

お嬢さまは、待ち遠しそうに、もういちど舌をならす。だんだん意識が回復しかけてるのだ。

信平は、困りはてた。

でも、ぐずぐずしてはいられなかった。

おそろおそろ足のほうへまわる。

どうしたらよいのか、大体のことは知っているが、そんなことをしてよいのか、それともキヨが帰ってくるのを待つべきか。羞恥とためらいが先に立って、困ってマゴマゴする

ばかりなのだ。

三度、お嬢さまの舌が鳴る。事態は、刻々さしせまっている。

さいわい、おくさまも留守らしい。

信平は決心して、お嬢さまに一足二足、近づいた。

キヨのマネをしようと思った。

けれど、もう間に合わない。

相手は、からだを寝返りもできない人形である。容赦なくシーツに、あざやかな流れの波がひろがり、あまいフルーツに似た香気がちこめた。

信平の記憶のなかに、そのフルーツの香気を前にも、どこかで嗅いだことがのこっている。

いつもだと、時が経ってから信平に下げ渡されるそれは、もう香気は完全に蒸発して、わからなかったのが、きょうは、新鮮な香気がおそったのであった。

……………

『おやおや、ダメねえ、信平は！』

キヨの声だ。信平の間ぬけぶりを非難する語調だ。

信平はギョツとして、ふりむいた。じぶんのミスでキヨに迷惑がかかるのが、つらいの

である。シーツを濡らさせたのは重大なミスだった。

そのくせキヨだって勤務をサボって一時間も、ひる寝したことを、非難する気にはなれなかった。わけはじゅうぶん知っていても、キヨの怒りをおそれた。

(11)

でもキヨは、すばやく要領よく、あと始末をしてくれた。

お嬢さまの、濡れそぼったネグリジェを着せかえ、シーツを、あたらしいのかえ、

『フフフ……』

と意味ありげに、信平の顔に、わらいかけた。

おくさまのおでかけのあと、一時間もサボるのに、れいのテープにとられて、あとで叱られるのもつまらないと、こっそり電源を切っておいた。

キヨにやさしいおくさまも、お嬢さまのこととなると、厳格だった。

つまり、家じゅうを停電の状態にしてしまったので、じぶんのひる寝も信平のミスも、証拠がのこっていない。

『だいじょうぶ。お人形さんは口がきけない

し、バレっこないわ。そのかわり、ねえ、信平』

ずるそうに、いう。お人形さん二人だけに通ずる、お嬢さまのあだ名であることは言うまでもあるまい。

キヨは、眠り人形のお嬢さまの、ご用のお世話など、あまり好きでない。好きでないどころか、そんな不潔なこと、たくさんという気持だ。できれば、他の者と代ってほしかった。

それにしても、お嬢さまのように、ゆめうつつで睡ったまま、風呂にいれてもらったりトイレの用までさせたら、どんなだろう、とずっと前から考えていたのである。

あの、すべてに寛大なおくさまも、キヨのお嬢さまのお世話というしごとにだけは、きびしかった。

どんなわがままも大目にみるけど、万一お嬢さまのお世話に手ぬかりがあることがわかると、そのときだけは、すぐキヨを叱る。

またキヨが、お嬢さまへの奉仕と同じことを、信平にさせることも禁ぜられていた。おくさまは、信平の屈従のところが、お嬢さまからキヨに移ることを恐れていた。

おくさまの留守をさいわいに、信平のミス

を、かばってやるかわり、こんどは、じぶんがお嬢さまみたいな人形になり、じぶんの役を信平にさせてみよう。いつか、水虫の手当を、思うぞんぶんやらせたことがあったけれど、あのときの抵抗力のない、虫ケラ同然の信平を思いきりコキつけたあげく、床に横たえさせてギューとからだを踏んずけた、あのイモ虫を、かかとで踏みしめて青汁を流させたみたいなの、すばらしいきもちが忘れられない。

思うぞんぶん痛めつけてやったら、すこしは、きもちが晴れるだろうーと、思うのであった。

『いやなら、いやでいいのよ。あんたのミスを、おくさまにいいつけて、おやしきから追いだしてやるから』

残忍な笑みを浮かべて、そういう。

追いだされたら、ゆくところもなく、その日から飢えるしかない信平の、生活力のないことを計算にいれてのおどかしである。

屈伏するしかなかった。

承知なら、いまここで床に顔をこすりつけること。断わるのなら、即刻この部屋から出てゆくこと。どちらを取ろうと、おまえの自由よ、といわれた。

信平は決心して、いきなり床に身を投げ、毛足のながいカーペットに、顔面をおしつけた。

カーペットは妙に、ほこりくさく、毛足が眼にささって痛い。

.....

『じゃあ、いいんだね』

声といっしょに、後頭部にするどい痛みが走った。

なにか固いものが、ガツシリと頭の上に据えられ、ギューと力がかけられ、もういちどカーペットの毛足のなかに、いやというほど顔を埋めた。眼の前はまっくらだ。

『ヨシ、許してやるわ』

キヨが勝ち誇ったように、頭から室内穿きのままの足をおろしたので、やっと自由になった。

『いい子、いい子。心配しないでいいよ。おとなしく、あたしの言うこときいてりゃ、なんにもしやしない』

キヨは、上きげんだった。

そのとき、お嬢さまがベッドで、うーんとかわいい声をあげた。

失神から醒めるときの、前ぶれだった。

(12)

お嬢さまは、やっと平静をとりもどした。

失神から醒めると、回復が急速にくる。

一時間ごとに、紙をはがすように元気になり、若く美しくハツラツとした女性にうまかわる。

気のせい、失神をくり返えすたびに、よけい美しくなるようであった。

医師は、こんなめずらしい病人は、あまり例がないので、研究材料にしたがった。

どうも、排泄機能に異常があり、排泄物の分泌がおくれて、そのなかに含まれた毒素が一定量、体内に蓄積されると、爆発現象がおこり、失神を繰り返すのではないか、という所見がくだされていた。

したがって健康をとりもどしても、日々の排泄の状態だけは、くわしくしらべ、そのデータを、まとめて主治医に報告することを求められていた。

しぜん、そのデータしらべの役は、信平に負わされる。一日じゅうの全量を集め、その内容を観察するのも信平の大切な役目の一つだった。

.....

顔いろが平常にもどり、自分の用が自分でできるようになる。主治医が入念に、全身の健康状態を調べ、これでやっとベッドからおりることを許されるお嬢さま。

むこう一カ月は、なんの異常もないのは、いつもの例であった。

二、三日、東京をはなれて、伊豆の別荘にゆき、新鮮な空気を吸い、うまいさかなを食べるのが、この奇病には、きき目がある。

おくさまは、主治医の許可がおりると、かならず、いそいそと、お嬢さまを連れて、伊豆へお出でになる。

そのあいだ、キヨと信平は、二人で、おやしきの留守をあずかるのである。

信平は、やっと久しく休んだ学校へ通いはじめ、キヨはキヨで美容院へゆき、デパートで買い物を楽しみ、一日中ブラブラと休暇を楽しんで過ごす。しかし、ちからをもてあますキヨは、たいくつでならない。そのたいくつさを消すために、思うぞんぶん信平を、おもちゃにしてやろうと思った。

おくさまと、お嬢さま、そしてじぶん。三人のおんなが快適にくらしてゆくためには家のなかに忠実な、どんな恥ずかしい用事でも気がねなく命ぜられる、下男がいたほうがよ

いことは、いうまでもない。

つまり、むかしの奴隷のような人間を一人なんとか、このやしきに飼っておきたい。

いつだったか、冗談まじりに、おくさまにそんなはなしをしてみたら、

『おもしろいじゃない。信平なら役に立ちそうだわ。あんた、教育してみて』

と、いわれた。さいわい今度は、お二人は十日ばかり伊豆へ行ってくると、おたちになった。このあいだに、大いそぎで信平を訓練し、お二人がおかえりになったら、役に立つところを実際に見せてあげよう。

これに成功したら、じぶんの仕事のうえの負担が、とても軽くなるし、弱虫をいじめるのはじぶんの趣味なんだから、と考えた。さっそく、実地訓練にとりかからなくちゃ、と三畳の書生部屋で、おくれた勉強に、いっしょうけんめいに取り組む信平を、じぶんの室によびつけた。

カーペットの長い毛足に顔を埋めて、屈従を誓わせた、あの日の思い出が、快よく思いだされる。

あれいらい二人は主従のきもちを、お互いにますます深めている。

二人の間ではキヨが主人で、信平が下僕。

そして、おくさまや、お嬢さまは、雲のうへの、とおとい存在で、近づきたい。

じぶんは、ただキヨのいいなりにうごく道具であればよいのだ。

やしきのなかでは、一人前のあつかいをされず、せいぜい番犬くらいの立場しか与えられてない信平は、だから、キヨに呼びつけられ、いきなりカーペットに深々と顔を埋めさせられ、理由もないのに頭の上に、よごれた室内穿きをのせられても、抵抗を感じなかった。

抵抗どころか、いつぞや、お嬢さまの病中に、じぶんのミスから、お嬢さまのお召しものからベッドまで、不快に汚させたミスを、すくってくれたキヨは恩人ですらあった。

恩がえしに、それでキヨさまの気が晴れるなら、ぞんぶんになぶられても耐えられる。

いまなら、それこそ、キヨの足のあぶらでベトベトによごれたソックスを洗ったあとのドス黒く濁った石けん水でも、口にせよと命ぜられたなら、躊躇せずに従うだろう。そんなことで、ご主人さまが、晴れ晴れされるなら、いとたやすいこと。おまけに、その汚れた石けん水が、じぶんのいのちをやしなう、スタミナドリンクのように感ぜられるのだから、われながら、ふしぎだった。

信平は、頭のうえを圧迫するキヨの室内穿きの重たさをかみしめながら、そんなことを考えつづけた。

(13)

このごろの信平ときたら、まったく人間が変ったみたいだ。

それには、理由がある。

おくさまは、いままでに、めまぐるしく、学生を、とつかえひきかえ使ってみたが、信平ほど、おとなしく屈従に耐える人間は、ほかにない。

浴室はおろか、トイレをつかってるときだって、信平のまえに美しい肌をさらして平気だった。

ゆっくりと陶器にかけたあとの、あとしまつだって、全然、手をくだす必要のないことが、きもちよかった。

そんな下品なしごとは、高貴な人間のやることでない、と、みずからきめている。

じつは、このあいだ、マリコの失神中、ひそかに、いままで使ってみたこともないしごとくに、信平を使ってみた。

そのことは、キヨにも、ないしょにしてあ

る。

それは、マリコが失神しはじめて早々、『こんど回復したらスグ別荘へゆこう』とじぶんだけで、スケジュールをたてた。そのときである。

一週間も、やしきをあけてキヨ、信平の二人だけにすることに、いささか、不安があった。

るす中に、あの、迫力のありあまるキヨのことだから、おもうさま自由奔放に信平をおもちやし、独占し、その魅力のまえに信平をくくりつけてしまうおそれがある。

帰ってみたら、信平はキヨの独占支配下におかれて、じぶんの命令などきかなくなってしまう心配は、じゅうぶんある。

(いやだわ、そんなこと)

ある意味では、それは、キヨも信平も、二人ともども失う結果につながる。

だからこのさい、信平の身も心も完全にたなぎとめて、安心して伊豆へたちたかったのだった。

.....

おくさまは、その日、おなかの調子をくるわしていた。

おととい、あるパーティーに出席のため、

都心のホテルへ出むいた。そこで、立ち食いで供された、江戸前のにぎり寿司が、ひどくうまかった。

職人も、上品なおくさまの美しさに打たれたのだろうか、取っときの、高価なえびやかに、生うになどを、特別に気前よく握ってよこした。

つい、そのうまさにさそわれて、三人前も平げてしまい、ビールを飲み、あげくには、フルーツまで、たくさん食べてしまった。

やしきにかえってから、念のため下痢どめの、クレオソートを、のんでおいたが、昨夜から下腹が鳴り、何度も、トイレにかよう始末なのだ。

正常の便だったら、信平に見せても平気だが、水のようにくだる下痢を見られるのは、なぜか、ためらわれた。

何回もトイレのドアを開き、ひとりで用をたした。

個室いっぱいに広がるクレオソートの特有の匂いを嗅ぐと、ゲーツと吐きたくなる。

吐き気がありながらどうしても吐けず、下のほうでは、くだりそうで、そのくせ、トイレへゆけば水みたいなものしかでない不快な下痢。

なにか、名のつく伝染病にかかったのではなければいいがと思う。

パーティーに出張して、店をだした寿司屋は銀座でも一流のしにせだった。

この有名店が、わるいネタをつかうわけがなく、だから伝染病ではないだろう。

やはり、食あたりだろう。

でも、吐き気は去らない。

もういちど、トイレへはいり、ゲーツと、のどをならした。

その時、すばらしいアイデアが浮かんた。

この下痢と吐き気を利用して、信平を苦しめたら、効き目は大きいかもしれない。

——じぶんだけが、下痢、腹痛、嘔吐にくるしむことが腹立たしかった。

このくるしみを、信平にも、分けてやろう——。

じぶんながら、すばらしいアイデアに思えいっしゅん、下痢の不快感を忘れた。

陶器に腰をおろしたまま、信平の部屋に通じるブザーを押した。

.....

信平のあたまの上で、ブザーが鳴る。

おくさまの、お呼びだ——。

そう思っただけで、稲妻のような緊張が全

身をつらぬく。

開いていた、学校の参考書を放りだして、トイレに参上する。

ムツと胸をつく特有の匂い。けだものの体臭のような悪臭が鼻に来、アムモニアが目刺激さって痛い。

おくさまは無言だが、そのお顔を仰ぎ見ただけで、ご用の内容がわかる——。

かれは、あわてて、タイルにひざまずき、瞑目して、首をさしのべた。

つよいクレオソートの刺戟臭が、かれの面上をよぎる。

神聖なひととき。

ピリツとした、クレオソートの香りさえ、おくさまのご命令と感じれば、いやでなく、かれは座像のような姿勢のまま、身うごきもしない。

(ゲーツ)

おくさまは、のどのおくから、苦しそうな吐息を吐いた。

なにやら得体のしれない、泡のような山がそこに盛りあがる。

.....

つよいちからで、うしろから、あたまをけられて、信平はカエルのように、うつぶせに

倒れた。

ウンもスウもなく、床のうえの山に、顔をのめらせた。

腐ったフルーツジュースのような、甘ずっぱいにおいが鼻をつき、口中に侵入して来て息苦しい。

『信平、おたべ！ たべるんだ！ おのみ！ 呑むんだ！ あたしの、フルーツカクテルを！』

おくさまの声を、神さまのみ声と聞いて、命ぜられるままに、その正体のわからないタイルの上の小山に、口をよせた。

『おいしいかい？ 信平。うまかったら、たととおたべ！ 神様のおめぐみだよ！』

おくさまの声とも、神のみ声ともきこえる命令のもとに、信平は、むちゅうで、むさぼりくらい、完全に、平らげて、腹のなかに送り込み、まだ物足りないように、舌なめずりする。

誰にも、むさぼることのゆるされない、神のめぐみを、じぶんは腹いっぱいむさぼりくらった。

このときから信平は、いっそう、おくさまをとおとく、あがめるようになった。

たとえば、それがクレオソートの悪臭をと

なう、みにくい食べ物であっても、おくさまが“フルーツカクテル”と名づけた以上、そのときから信平には、すばらしい食物にみえてくる。

信平は、ゲーツとくる吐き気をおさえて、ただひたすら神をおがむ。その吐き気は、おくさまのカクテルのためとは思ってもみなかった。

(14)

ドアをあけ放した浴室から、キヨが信平を呼ぶ。おくさまと、お嬢さまを伊豆へ送りだしたので、この広壮なやしきにいるのは、信平と、キヨのただ二人だけ。いままで、お嬢さまの病中は二人でよく風呂をつかわせてあげた。

しかし、おくさまの命令で、お嬢さまの肌に、じかに手をふれるのは、キヨに限られていた。信平は、せいぜい湯加減をみたり、バスタブへ、足のほうを抱えて、そっとお入れするていどで、人形のからだを凝視するなど許されてないどころか、途中からは意識をとりもどしたあと、お嬢さまが

『信平にみられるのは、いや』

と言いだしたので、浴室にいるあいだは、

濃いサングラスをかけさせられることに改められた。

だから、いつも浴室では、手さぐりでノロノロうごき、尊いおすがたを、目に見るなどということは、絶対になかった。かれは、ただ手や足だけをうごかせばよかったのだ。そして、キヨの命令に従がっていれば。それでも、いまはちがう。

キヨは、呼びつけた信平が習慣的にサングラスをかけてきたのを見ると、それを取りあげた。

『そんなもの、かけないでいいよ』と、いわれたとたん、かれの目に、まぶしいものが飛びこんできた。

はじめてみるキヨのからだは、金色の彫刻をみるようにうつくしかった。美しいというより尊く感ぜられて、凝視することが、できないのだった。

『あたしは、お嬢さまとはちがうから、目をあけていいよ』

と、キヨがわらった。

モウモウと立つ湯けむりと、上等な外国製の石けんの香りと、そして、キヨの肌から放たれる体臭。そのミックスされたもののなかに、かれはおぼれた。

命ぜられるままに、スポンジに石けんをぬりたくり、おそろおそろうしろにまわる。おそろおそろ手をのばして、そっとスポンジを上下させる。

タイルのうえに正座する信平を尻目に、ゆうゆうと浴槽に身を浮かべたキヨは、この従順な動物を、つぎはどうやって困らせてやるうかと思案するふうであった。

ザブリ、と湯の滝を全身から流しながら、浴槽のふちをまたいで、タイルのうえに立ちはだかる。

信平の目のまえに、うつくしく、白く輝くばかりの太い円柱がそびえたった。

かれは、いつぞや、水虫の指を搔かせられた日のことを思いだした。

不潔と思うところを、必死におさえながら水みたいなものが吹きだし、ニチャニチャと脂のしみでる水虫の患部を、屈辱に耐えながら、搔いていた。そのうちに、いやなにおいが鼻をおそったけど、だんだんと屈辱を屈辱と思えなくなったところか、逆に、とてもそれが楽しくなり、しまいには、猛烈に搔くことを命令されるのが待遠しくなり、あるときは、ポロリとおちた黒い垢を、こっそり紙に集めて、人しれず舌の上にくろがせてみた、

あのと時のスリル。

けっきょくそのあとで、紙に集めていることをキヨに知られ、

『あたしのアカを集めたがるなんて、ナマイキよ』

と、こっぴどく蹴とばされた。その痛ささえ、とても嬉しかったけれど。

『なにを、ボンヤリ考えてんの。あたしが、お嬢さまを清めてあげたように、きょうは信平があたしの役をするのよ』

あたまのうえから、キヨの声が、降ってくる。

円柱が、ちょっと揺れる。

信平は、その円柱に顔をくっつけんばかりに、スポンジを上下させる。

『その辺は、いちばん皮が、うすいんだから、そおとして』

ほんの少しではあるが、羞恥の感情のこもった声でキヨは言った。

サングラスで、おそろおそろのぞいたのちがって、太陽が、明るく窓に輝く白昼の浴室。そのまんなかにヴィナスの像のように立ちはだかるキヨの裸身は、見れば見るほど神々しく、眼にまぶしく映る。

『そうだ、これからは、おくさまや、お嬢さ

まのときも、サングラスなんか掛けないでいいように、お願いしてやろう』
キヨは立ったまま、ささやく。

(15)

トイレのブザーが鳴る。

おくさまの、用意周到な設計で、やしきには、いたるところに、ブザーのボタンがとりつけられていた。

『使用人を呼ぶのに、べんりだから』

という理由だった。

ブザーだけではない。

このやしきの設計は、すべて住む、ご主人さま本位につくられているのだ。

なにげなく、壁にかけられた、皮のムチだつて来客の目には、装飾とみえるかもしれないけれど、ほんとうは、そうでなく、ご主人が、ふと気まぐれに、そのムチを使用人に振ってみたくなるための、と、じょうだんまじりに、取りつけられたのだった。

ひとつには、死んだご主人さま、大八木豪三氏に、そんな好みがあり、かれは、湯上りのほてった自分の肌を、おくさまやキヨに軽く、ムチをあてさせるのが、大すきだったのだ、そのためか、十いくつもある部屋や応接

室、廊下と、いたるところに、わざわざ外国から取りよせまでしてコレクションした、さまざまなムチが、壁を飾っていた。

奇妙なことに、そのムチは、せまいトイレの個室にまで掛けられているのである。

.....

ゆったりと便器に腰をおろしながら、キヨは、ここで、いっそ思いきったやりかたで信平を徹底的に仕込んでやろうと決心した。

じぶんの、よごれた水虫のあとにできた、くろい垢の塊を喜んで集めたり、いつぞやは、ふざけ半分に、じぶんのシリにできた、ちいさな腫れ物のかさぶたが、ポロリと剥がれたのを、

『はい、あたまのよくなるクスリ』

と、与えたら、本気で真剣な目のいろでありがたがっていた信平である。

『美味しかった？』

と、からかったら、

『ポテト・チップよりもっとすばらしい、ミート・パイみたい』

と、おかわりをせがまれて閉口したことがあったつけ。

キヨは、いまこそチャンスと、そのままの恰好でブザーを鳴らしたのだった。

ふと見れば、まったく偶然のように、トイレット・ペーパーが切れていた。

いつもは、そんなことはなく、きちょうめんな信平は、気をくばってペーパーを補充しておくのに、おくさまの留守で、つい油断をしちまった。

キヨは、これを利用したら、と、とっさに決心した。

相手を、垢や、かさぶたに、のどをならすブタだと思えば、恥ずかしさや、かわいそうなどという、人間に対するような、えんりよは無用になる。

——ドアのかけから、おずおずと顔をだした信平に、

『だめじゃない、紙を入れとかなきゃ』

と、叩きつけるように云った。

『おまえの手落ちよ、どうしてくれるの。だらしない』

叱責というより、ネコが、つかまえたネズミを、ガブリと噛みころす、その寸前に、じやれ、首根っ子をくわえて左右に振りまわすそのような言葉のひびきだった。

かれは、あわてて、じぶんのハンカチを、ポケットからとりだした。

『だめ、だめ、そんなきたないハンカチ』

ネコは、なおも追いかけて追いかけて、あわれないネズミに、歯をたてる。

『そんな汚れた、バイキンの巣みたいハンカチを出すなんて、失礼とは思わない？』
それなら、どうしろというのだろうか。

信平には、さっぱり、よいチエが浮かばない。

『なにを、ボヤボヤしてるの。ほかに、あるじゃない！ 方法が。もっと、あたまを使うのよ、頭を！』

ネコはじれて、タイルを踏んだ。

そのために、腰が宙に浮いた。

『そうか！』

信平は、やっとキヨの心のうちがとけたような気がする。

気がついたら、床にひざをついていた。眼の前はまっくらだった。

信平は、半ば意識を失いかけていた。

.....

でも、こんなことがあってから、よけいキヨのくだす、汚辱を伴ったさまざまな命令に抵抗なく、人間としての尊厳をすてて、ついてゆけるようになったのは、いっそ幸福だった。キヨの命令の下に顔をさしのべるのは、たまらなく楽しいことであった。

そのしごとと、まったくおなじことを、おくさまが伊豆へお発ちになる前にもさせられたけど、あのときより、もっともっと強烈な印象であった。

夢を見ているような気持ではいつくばり、命ぜられもしないことを、一生けんめいやった。キヨは、

『フフフ』

と、満足そうにわらい声を立て、身を引くうともしなかった。

(16)

カーペットのうえに、長々と伸びる信平のからだの上に、キヨの、うつくしい脚があった。

ほんとうなら、体重をぜんぶかけてやってもよいのだけれど、そんなことをしたら、踏みつぶすおそれがある。で、イスにかけて、かるく踏みつけるのである。

おくさまと、お嬢さまがおかえりになるまでの、この一週間に、信平をつくり変えておかねばならない。

したがって、教育は猛烈に、苛酷に、ハイピッチで与えておく必要があった。

かたちのよい、かかとが信平の口をふさい

だ。

かれは、けん命に鼻でいきをしながらかのフランスパンのような物体を味わう。

ザラザラした感触。

しかし、踏まれながら、蹴られながら、とても幸福だった。

重たい足を、頭上に感じるとき、母のうでに抱かれるような、ふしぎな安心感がある。

キヨも、思いは同じだった。

上等なカーペットを踏むように、信平に足をあずけていると、父に抱かれて散歩した、こどものころの、楽しい思い出がよみがえってくる。

脚の下の信平も、脚の上のキヨも、それぞれ、幸福感にひたっていた。

.....

キヨは、イスから身をおろして、こんどは信平をイスのかわりにした。

何をしようというのだろうか。

信平の、細いのどくびが、グイと太いうでで持ち上げられ、目をつぶったままの、その顔が、カーペットから二十センチほど持ち上げられた。

そのままの恰好で、しばらく静止する。しずかな部屋のなかに、ゴクンという信平

の、のどの鳴る音が、五回も、六回もきこえた。すべては終わった。

そこでつき放された信平の首が、まるで生命を失ったように、ふたたびカーペットのうにドスンと落ちる。

信平の顔が、ひどく光っているのは玉の汗なのであろうか。

(17)

おくさまと、お嬢さまが、伊豆から帰京してきて、信平は、また忙しい日を送るようになった。

もう、大学進学希望などはすっかり忘れてはている。

三人の女神に、コキつかわれるその日その日がただたのしくて、ユメのような日が過ぎてゆく。

なんとしてでも、大学を出て将来は公務員に進み、人なみにスイートホームを持ちたいなんて小さなぞみは、なくなっていた。

このまま飼いごろしにされて、このやしきで一生を終っても後悔はない。

気のせいかな、おくさまは、いつか、おなかをこわしたあと、信平に『神様のくださった食物』を与えていらい、とてもやさしくなっ

たのは、奇妙なことだった。

あまりに、ひどい命令をくだしたことで、信平にわるかったと、あやまるきもちが、すこしばかり、うまれたのかもしれない。

しかし、信平は信平で、もういちど、あのすばらしいカクテルに、身を沈めてみたいと思っている。

言語に絶する醜怪なものを、言語に絶する苛酷な方法で思い知らされた、あのスリルは、いまでは楽しい思いでしかなかった。

.....
お嬢さま——マリコは、このごろママとキ

☆奇クサロン ☆原稿募集

一、大好評の『奇クサロン』の掲載に適した短文、写真、絵画を求めます。

一、内容は本誌の編集方針にふさわしいもので、寄稿家編集者執筆者に対する呼びかけ、読後感、感想、批評、映画鑑賞、短信往来、SM時評、図書雑誌紹介、見聞記、詩、歌、川柳、漫画、諷刺、などなど。

一、投稿には必ず「奇クサロン原稿」と明記して下さい。誌上の匿名は御自由ですからペンネーム（筆名）を添記して下さい。

一、採用の可否に拘らず応募下さった方全員に対して編集部作成のフォトを贈呈いたします。

ヨが、すごく仲よしなのが気になってならなかった。夜おそくママの部屋から、ママとキ

ヨの二人が、ウキウキした甘い声で、ふざけたりするようすを耳に感ずると、発作がおこりそうで心配だ。

伊豆の別荘で、外国から購入した優秀な馬にまたがって、乗馬の散歩をしたことを思いだす。スポーツのために、馬に乗っていると気持ちがスカッとした。

それで、やしきに帰ってから、あの乗馬の楽しさが忘れられず、なんとか、やしきでも馬を乗りまわしてみたいと思った。

す。贈呈フォトの枚数は作品の出来に従って増減いたします故御承知下さい。

一、誌上に掲載しました作品に対しては枚数に応じて稿料又は謝礼を呈します。

一、奇クサロンに掲載可能な絵画、写真、映画スチール、イラスト、漫画などに対しては、でも応募者全員に編集部作成のフォトを贈呈いたします。優秀な作品は誌上に発表の上、画料をお支払い致します。

一、編集参考資料の提供に對しましては、出来るだけ高価に購入したいと思しますので、お手放し可能の方は内容の詳細に希望価格を附してお申込み下されば、折返しお返事差し上げます。

考えたすえ、スポーツの相手役の信平を、馬にすることを思いついた。

本ものの馬とちがい、脚が短く、乗心地はあまりよくないけど、この馬は、人の言葉がわかるし、室内用には、むしろ好適だった。

乗馬のあとは、汗ばんだ肌を、馬の舌で清めさせる。これも、本ものの馬にはできない芸当だった。

マリコは、すっかり室内馬が気に入って、浴室へもトイレへも信平の四つん這いの背にまたがって乗りつける。

馬は、忠実にご用がすむまでタイルに坐って、ご主人のおでましを待っている。

いっぺん、ふと気がむいて、じぶんの不用物を、ゴホウビに与えたら、馬はうれしそうに、それに口をよせた。

気せいか、そのあとはすぐスタミナがつくらしく、馬は目立ってハッスルする。

マリコは、失神中の習慣が尾をひいて、三度々々の食事は、ごはんや肉やパンはやめ、フルーツだけしか摂らない。

だから、馬の大すきな、フルーツ・カクテルは豊富であった。

信平は、しだいにフルーツ・カクテルが好きになり、マリコがめぐんでくれるのを待遠

しがる。

馬は、世のなかに、このフルーツ・カクテルほどおいしいものは、ほかにない、と思っている。

フルーツ・カクテルを貰ってから、もう、おくさまがいつかくださった、神様のたべものなぞ、ちっともほしくなくなったのは、ふしぎだった。

.....

信平はある日、大失敗をやってしまった。マリコにちからいっぱいかけられた拍車が、まともに下腹部につよくあたり、はげしく痛さを感じた。

信平は『ウワーツ』とよろめき、思わず棒立ちになって、ご主人さまを、せなかから振りおとしてしまったのである。

不運なことにマリコは、落馬のはずみにサイド・ボードのガラス扉にいやというほど顔を打ちつけた。ガラスは音をたてて割れた。右の眼の下に、三針も縫う大ケガをさせてしまった。おんなのキズは致命傷になる。

五十万円かけて、美容整形の手術を受けたので、どうやらキズはのこらなかったけれどマリコは、この失敗に、ひどく腹をたてた。信平をクビにすべきか、あるいは、やしき

に引きつづき置いてやるかわりに、もっともっとひどい使いかた——終身重労働に処するか、おくさまはキヨとマリコを集めて、相談した。

しかし、失敗は失敗として、やしきから追放するのは、いっぺんに下男と、奴隷と馬とトイレ係を失うことになり、得るところがない、というキヨの主張が通って、信平は引きつづき、やしきで働くことだけは許された。

でも、マリコの大切な美ぼうにキズをつけた責任だけは取らせなければ、しめしがつかない、というおくさまの処刑論も、同時に実行されることになったのは、致し方のないことであつた。

.....

どんな処刑がよいか、議論がくり返えされた。そのあげく、被害者のマリコの主張が通り本物の馬と同様に、馬のシリに『大八木マリコ』の『マ』の字の焼印をあてて生涯、肌に、その痛さをのこしてやろうという判決が確定した。

——冷えた浴室のタイルに、丸出しにした信平のシリが見える。

直径三センチはあろう『マ』の丸ゴジックを刻まれた、別あつらえの烙印は、ガスの火

炎で、真赤に焼けている。

あわれな馬が、苦痛で、あばれださないように、おくさまとキヨの二人が、そのからだに馬のりになり、マリコは、烙印をむぞうさに、手に取った。

特有のにおいが、浴室いっぱい立ちこめ、信平は失神した。

しかし、その肌には赤々と烙印のあとがのこる。丸の中に『マ』の字なりに、黒いあとが残るのは、そのあとへブルーブラックのインクをぬり込んだためであろう。

.....

マリコのフルーツカクテルを、顔面いっぱいに浴びて、信平は失神から醒めた。

ツルリと、手で濡れた顔面を撫でおろし、ほほえんだ。

苦痛のなかの、苦しい笑いであつた。

『おしりを、カガミにうつしてごらん。これでおまえは、希み通り、このやしきで、一生飼いの殺しの人生を送るのよ』

おくさまの、いいえ神さまの御声が、頭上から降ってくる。

サーッと、かるく、もういちどフルーツ・カクテルのきれいな驟雨が、通りすぎた。

——完——



暑い暑いと言っていたのも束の間、メキシコオリンピックが益々佳境の昨今、夜ともなれば冷気がそこはかとなく窓辺に寄ってきて何となく物の哀れと人恋しさを思わせます。本誌はまだ読みはじめにしている、一年生の私をこれ程にまで熱狂的にさせてくれる編集部の皆様には頭が下がります。

先日、渋谷のC座ではじめて谷ナオミを見ました。看板には奇譚クラブ連載「花と蛇」よりとあり題名はヤマベプロ作『人妻地獄』です。脚本は団先生。ヒロインは勿論谷ナオミ。彼女は人妻静江に扮しております。

谷ナオミの夫役はピンク映画の助演としてよく出ている鈴木通人（この名前は始めて知りました）それから静江をたぶらかす男の役は南弘二。その情婦には竹原あこというキャストでした。この種の

実演は今まで度々見ていますが、出来の具合はまあ似たり寄ったりで、結局問題は出演者によってきまるんじゃないでしょうか。

矢張り自分の好きな女優であるとか、好きなタイプであるとかいうことで満足するのだと思うのです。この意味で私は大好きな谷ナオミの熱演がじかに見られたのですから大変結構でした。大抵、芸能人というテレビや映画で見るより実物は落ちるものですが、谷ナオミや林美樹は映画で見ると殆ど同じで、むしろ実物の方が良く見える位でした。

さて舞台の方は全部で三景に分れていました。第二景の夫から責められる場面は、着物を脱ぎ腰の物一つになった静江が太いロープ

で豊満なオッパイを挟んで後手に緊縛され椅子に括りつけられています。そこで鞭で打たれ、まだ白状しないので、それではもう男に会えないようにしてやると、短刀をつきつけて腰の物をはぎ取ろうとします。

第三景は男とその情婦の二人から責められる場面で、矢張り腰の物一つで後手に緊縛され水を入れた洗面器に顔を無理矢理押し込まれて殺されようとしています。谷ナオミの豊満な裸身が息づいて、とても迫力がありました。なんといても女を縛るなら美女に限ると、つくづく思ったことでした。

実演が終ると四人とも舞台上に立って紹介があり、鈴木通人が一寸した映画界の時評をやりファンの拍手を浴びていました。五社何にするものぞという意気込みが感じられ、こういう役者やこういうファンがいる限りピンク映画は健在なりとの感を深くしました。併映の『鞭と淫獣』は時間の関係で半分しか見られませんでした。谷ナオミの緊縛シーンが見られず至

極残念でした。

その後待望の「肉体手形」Vを見ましたが、正直言って期待はずれでした。前作の「赤い拷問」の方が良かったと思います。収穫は谷ナオミの緊縛シーンと、佐々木の情婦富子をやっている浜夏子。この人の顔と目がとてもS的で、女のS役には打ってつけだと思いました。

裸にむかれ後手に緊縛された静江が二人の男になぶられるシーンでは谷ナオミの表情がよかったです。最後に団鬼六先生にお願いを一つ申し上げます。最近の先生の作品には林美樹と辰巳のり子が出ていませうが、これからはこの二人もどしどし出して下さい。

それから辻村隆先生にお願いですが、SMカメラハントに、谷ナオミと辰巳のり子を再登場させて下さい。第一回のハントにも増して、第二回目には迫力が出ると思っています。

それからこれは箕田さんにお願ひします。おそらく一〇〇%不可能でしょうが、谷ナオミの緊縛フォトを分譲して下さい。これは私の心からの希望です。

ああ、谷ナオミの緊縛フォト。思っただけでも溜息が出ます。

秋の夜の繰り言 美津木 守



(第五十五回)

辻 村 隆

かねて東映で映画化の決定している『伊藤晴雨物語』を読んで、鬼六氏の気魄の籠る作品に圧倒されてしまった。失礼ない方だが最近の『花と蛇』やピンク映画の一連のシナリオとは、まるで別人の感がある。その作風は、彼が、本名で書いていた頃の『親子丼』『浪花に死す』『お化けの街』『女の業』『宿命の壁』などの珠玉の短篇と同じ書き振りで、彼がこの一作に、作家としての生命を賭けて書いたのが、ありありと窺われて嬉しかった。それにくらべると、私のSMカメラ・ハントなど、如何にもその場凌ぎの雑文で恥ずかしいことおびただしい。徳川女刑罰史秘銘々伝を、活字になって改めて読み返したら、ケツタイな誤植があって、読んでいて苦笑が止まらず往生する。読まれた方は多分お気付きだろうと思うが

賀川雪絵扮する尼僧玲宝(れいほう)の名が、珍宝(ちんぼう)になっっているのである。それも一度ならず二度、三度、すべて、れいほうがちんぼうで、常識で考えても、尼僧の名前に、ちんぼうなんて名は、余りにも幾ら何でもつけられそうにもないのに、そこは活字のイタズラで、かく変化してしまった次第。賀川雪絵さんが何かの折にこのハントを読んだら、どんなにか顔を赤らめるだろうと、想像しただけでもオカしくなる。

× × ×

もう一つ、秘銘々伝について御諒承していただきたいのは、タイトルの中のすぐ上のフォトである。うしろ向きの私が、緑丈なす黒髪の女性の髪を手にとってみとれているところ。これは、このハントとは全然関係のないフォトであって実は同好者のK氏が、ハントに如

何がと、わざわざ自宅まで連れてきたS枝という娘さんである。私とK氏二人掛りの口説きにもかかわらず、脱ぐのはどうしてもイヤだと頑張られて遂に断念。折角来たのだからと、スナップ数枚、私のカメラでK氏に撮ってもらったその一枚である。秘銘々伝のフォトのためにネガフィルム全部を編集部に送ったのであるが、刑罰史のフィルム末尾数枚に撮ってあったのを、あわててそのまま送ったため、事情を知らない編集部では、これも女優さんの一人ぐらいに考えて、何の気なしにのせた次第。一旦、こうとメッコを入れたら、獲物を逃さない執拗さで、K氏今もS枝さんを口説いているそうだが、うまくゆけば、いつの日にか彼女もハントに登場するかも知れない。当てには出来ないのだが……。

× × ×

大阪梅田の東映会館に、徳川女刑罰史を見にいった午後のひととき、数年振りに梨花悠起子と会った。彼女と一緒に観るつもりであったのに、11PMで私の緊縛指導を知っていて、封切と同時に女の友人と見にいったとのことであった。懐かしさ一入、久し振りのめ

ぐりあい、時間の経つのも忘れて喋べった。音沙汰のなかったのも道理、彼女は既に一児(男子)の母になっていて、K化粧品のチャームガールとしてデパートにいた頃、激しい恋愛しての結婚の結晶であった。その以前、一時は結納まで交した男性に、彼女の心ない悪友が、嫉妬半分に奇クを見せたため、赤裸々な緊縛フォトの秘密がすっかり相手に知られてしまった破談の憂き目を見ている。それからの彼女は、奇クからは勿論、私の前から杳として姿をくらましてしまった。その破局の時の心情は察するに余りある。

もし、あわよくば、今ひとたび悠起子の麗姿をと、淡い一抹の望みを抱いて、バッグに一条の縄とカメラ、ストロボを忍ばせていったが、その願望を口にすると機会もないままに別れ際、思い余って恐る恐る切り出したら、時計をみて思案していたが、じゃあ一時間くらいならいいという。正に、天にも昇る思いで、匆々にキタの近くのホテルに飛び込み、構図もそこそこに一本撮る。子供を母親に預けて脱け出して来たし、彼女も今は人妻の身で、夕方には夫君も戻るので、気もそぞろであったが、

愛知葉子



妊婦資料に関する苦言

ード写真や緊縛等を希望しているのか、見聞記や体験記（緊縛の）が掲載されているが、書誌上には文献的に参考資料を記されていないのは何故だろう。

トだけは発表しないで欲しいと、くれぐれも頼まれた。その意志を尊重して、発表したい気持ちをぐっと我慢して、一葉すら載せないことにした。それが、せめてもの彼女に対する私の思いやりであろうか。既に二十五才——。普段は髪をアップにしているのが、この日のために思い出のヘアスタイルにセットしてきたのが、一入嬉しく思われた。

表紙に赤色で D・D・D・と

「産科婦人科 臨床余録」

昭和二十九年七月刊

本田書店

A5版 二〇七頁

他に「岡山県下妊娠出産育児に関する民俗資料」というのも出ている。

まだまだ探せば出ている筈であるが、浅学のためにはつきりと判らない。探求中である。

「風俗資料」として掲載されることは、既刊掲載のリアルな記事、写真と併せて、より充実するのではないだろうか。御配慮を乞う。

現状では、余りにもマンネリ化してしまっている感がないでもない。私もバックナンバーを求めるかたわら、二、三、求めてみた。

「古代医術と分娩考」

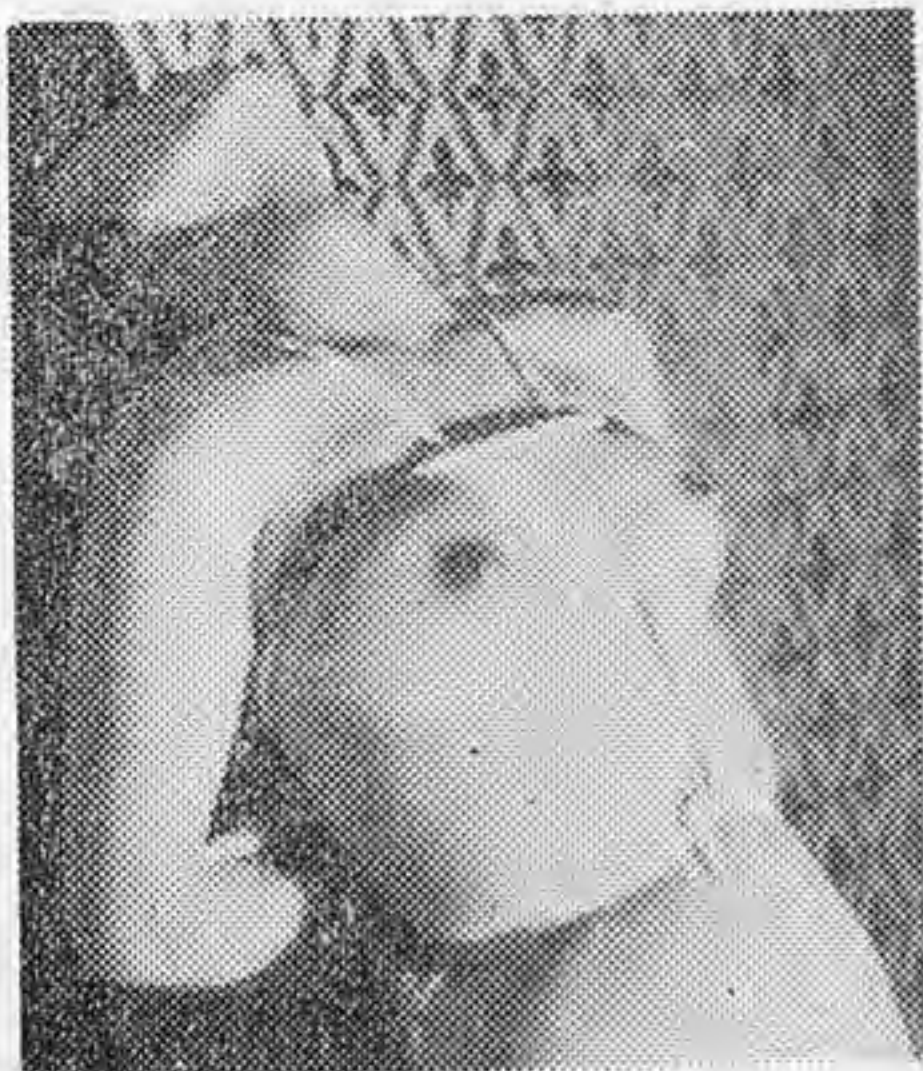
訳著者 巴陵宣祐

昭和六年四月 武俠社刊

私のカメラ・ハント

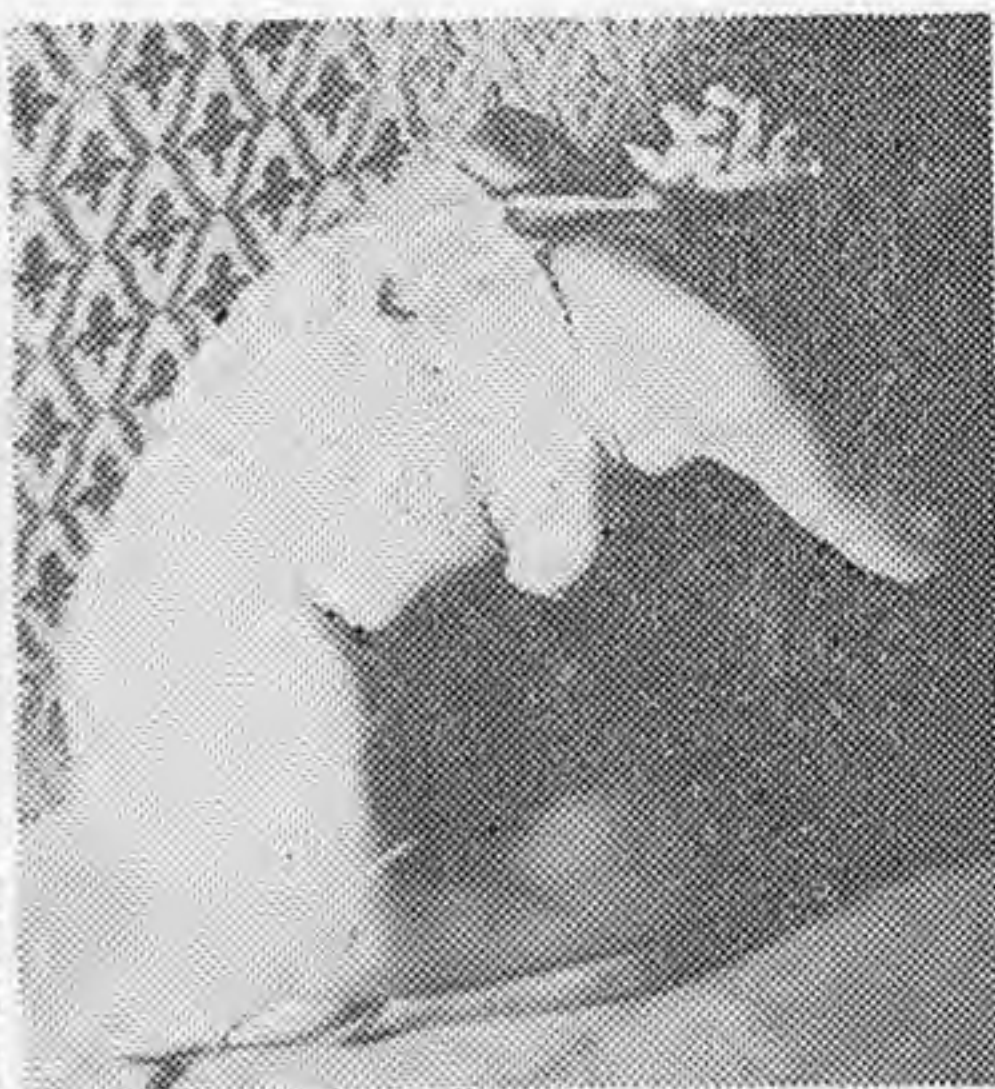
幻想の実現

天草二郎



私がミツコと交際し始めたのは最近のことといえます。そして、私のやむにやまれぬ願いを、いぶかしげに聞いていたが、にっこり

と笑って承諾してくれたのは、更に最近のことでした。応じてくれたときの、私の心のはずみ。



余り簡単な応諾に何か感違いしているのではなにかと思っただけで、たが、ミツコは知っていたのです。彼女自身がMであるかどうか、どういふことで知ったのかもまだ聞いていないのですが、女を縛ることに興味を持つ男がいることは知っていて、好奇心を寄せていたことだけはハッキリとわかったのです。



「血紅袋テスト？」

新井伸治

テープの声

桃井賢三

- 「ねえ、たのむよ」
- △「そんな度々じゃ無理よ」
- 「どうしても欲しいんだ」
- △「だって出したばかりで、たまたまないもん」
- 「意地わるいわないで、たのむよ。ないと困るんだ」
- △「あなたこそ意地わるよ。無理ばかり言ってサ。あんまり、度々なんだから。そう思うままにならないわよ」
- 「ごめんごめん。でも、ゼッタイ欲しいんだ。すこしでもいいから出してくれよ」
- △「出してあげたいけど、無理だなあ」
- 「そこを頼んでるんだよ。そのうちボクも返すから」
- △「じょうだんいわないで、あんなもの返されちゃ、かえって迷惑よ」
- 「迷惑？ きみ、なにかカンチ



イメージ画『腰掛け』

東京
赤ちゃん

私が天にもものぼる気持で、早速にカメラ・ハントを気取ったのはいうまでもありません。同封の写真が、その時のものです。

その白い体を縛られるにまかせていたミツコの表情や、状態を紹介したい気持はありますが、私のペンではとても書けそうにありませんし、第一、初めての感激でただ夢中で縛っていた私では、とて

も自信はありません。実はその模様を書くには書いたのですが、とても活字には無理だと思えます。ただ写真のように後手縛りや、鉄砲縛りにしたミツコの姿態に、幻想の世界に踏み込んだような夢見心地であったことだけを書いておきます。ミツコのことはいずれまた書くこともあるでしょう。もっと素晴らしい写真とともに……。

がいしてないのかい？』

△『いつものものが欲しいんでしょ』

○『ハハハ。とんでもない。ボクは、キミのヘソクリ貯金がほしいんだぜ』

△『ナーンだ』

○『お小使いがなくなっちゃった……』

美女パレード

に思う

吞気放亭

秋晴れのギンザ通りを、世界の美女四十何名かのパレードがつづいた。

10月8日(日)の午後のこと。

ミスユニバースの審査が、ことしは、東京を舞台に開かれ、きょうは、そのデモンストレーション。

ギンザ八丁の自動車をとめ、千二百人の警官を動員しての大パレードは、黒山の人だかり。パレード

というから、おそらくオーブンカーで行進と思いきや、美女は、う

ば車を大きくしたような台車の上に立ち、その車を押すのは、日本

人の若い人、二人。

衆人環視のなかを、うやうやし

んだ』

△『それなら余計に駄目！ 貸したら返してくれないんだから、信用ゼロよ』

若い二人の会話をテープにとったら、こんな会話でした。「いつもの」って何のこと？

く美女をのせ、みずからの脚のちからで押し進むのは、妙にマゾヒスティックな風景だった。

おまけに、台車の高さのカンケイで、美女のヒップと等しい高さの位置に、押すほうの顔面がちょうどあたるのだから、まことにもの。美女だって、人間だから人しれず、生理ガスをひそかに放つかもしれない。そうなれば、いやでも、そのにおいを吸い込まされる位置に、顔がある。

半日を、美女のヒップに顔を接近させてくらせるとは、なんという幸福者だろう。

美女は、それぞれお国柄の衣装だから、南国のおとめは文字どおり、しゃれたパンツいちまいの脚線美まる出しというスタイルもあった。

『ああ、オレも、あの車、押してみたい』見物していた私は、つくづくそう思った。

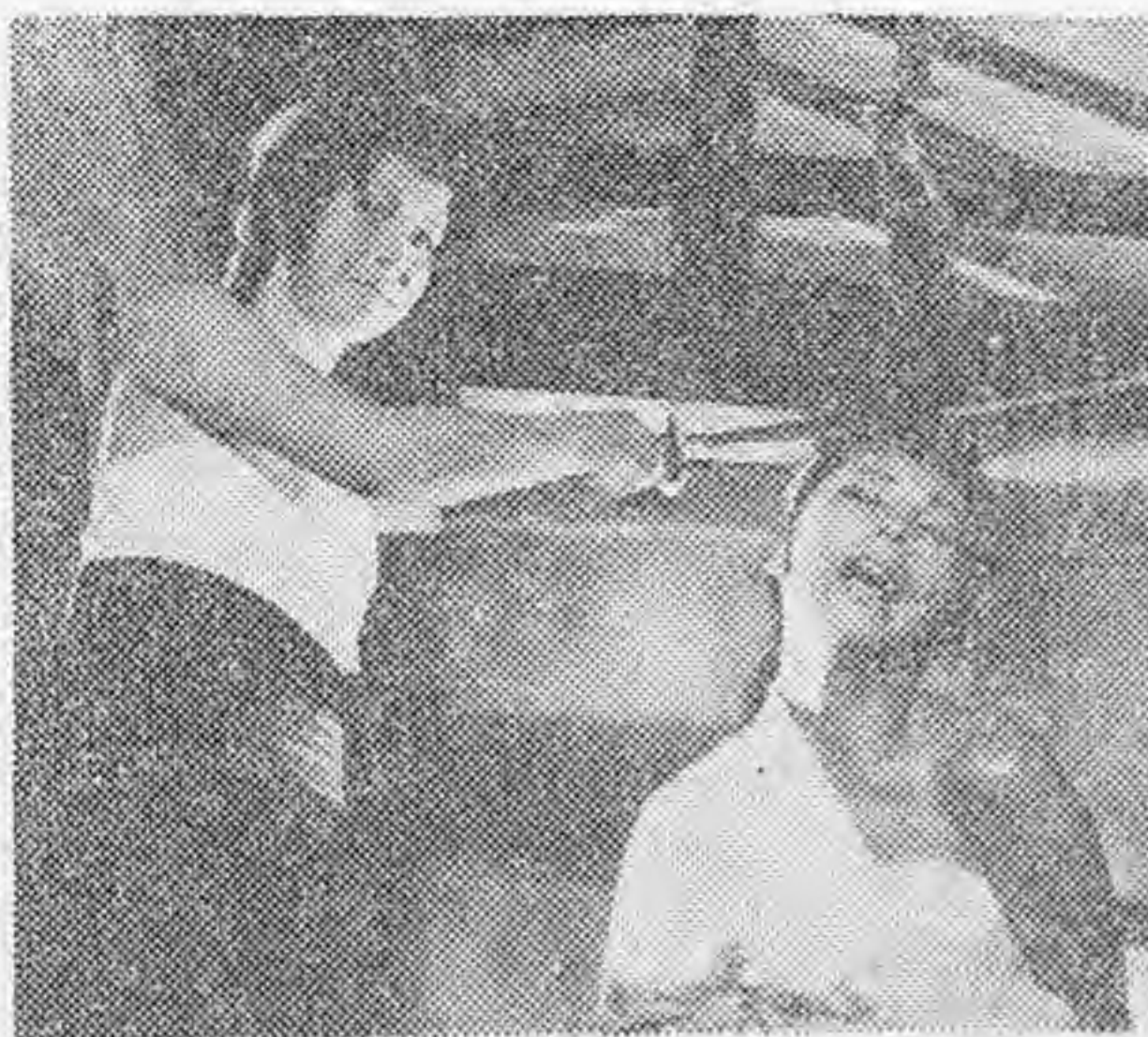


最近の緊縛拷問シーン

東 山 映 史

東映の「徳川女刑罰史」は、さすがに辻村隆氏の緊縛指導だけに全巻すさまじい迫力、鬼気の迫るものがあり、満員という盛況。これにつぐ「妖艶毒婦伝・般若のお百」が毛髪吊し責めなど、宮園純子の第一回主演作品だけに意

欲的な毒婦ぶりを見せてくれた。巻中、物すごいのは、後半に緊縛され毛髪吊し責めにあい、足を熱い鉄板であぶられる。自分が吊しあげられると、その縄につながる大斧で恋人の新九郎の首が落ちる。そのお百の苦痛と苦悩ぶりを熱演していた。首を斬られた新九郎の仇を討つために、佐渡が島の島抜けをしたお百は、



東映「妖艶毒婦伝・般若のお百」

自分の味わった同じ苦痛を味あわすために、勘定奉行の、仙石伊織（南原宏治）と妻の雪を寝所におそい、お雪を毛髪吊りにあわす。「徳川女刑罰史」でも尼でハリツケになった小島恵子が長襦袢一枚にむかれ、縛られて毛吊り責めにあうが、なかなかの熱演ぶりだった。今後、東映の毒婦ものが楽しみだ。



「鴨川おどり」舞踊 おさん茂右衛門、

日活、大映作品にも緊縛シーンに目をみはらすものがある。日活の「浮世風呂」で二本柳寛の娘の敏恵が、敵の家に腰元として住み込むが、身分がバレて両手両足を緊縛され、逆さ吊しにあい名和宏にムチ打ちされるが、とてもすさまじかった。また「鮮血の賭場」でも内田高子が逃亡女郎で長襦袢一枚、両手吊りにあう。又「浮世草紙」も楽しそうである。独立プロ作品では「獵色の罌」で、一星ケミが緊縛され風呂場の中で殺されたり、「鞭と陰獣」で

谷ナオミが全裸にむかれ緊縛されて、メクラの親分に足につけた鈴をたよりに追い廻されたり、あの手この手の責めにあう。珍しかったのは、花街舞踊の先斗町の「鴨川おどり」の「おさん茂右衛門」で、おさんと茂右衛門が不義密通のかどで捕えられて引き廻しにあう。黒板ベイの向うをハダカ馬に背中あわせに縛りつけられる、おさんと茂右衛門。思いがけなかっただけに、一寸どきっとさせられた。

サロンの展望台

色は匂えど

目出鯛三

久しく筆を折り、黙々と毎日を
送迎し無為無策を認じて来た鯛三
が、再びあえて駄文をお届けする
無礼をお許し願いたい。名月を仰
ぎ、灯火に親しむ候となり、鯛三
ひとり満悦している。かく申すは
ほかでもない。大方の読者諸兄す

でに先刻ご存知であろうが、ある
ルポに接したからである。講談社
発行の雑誌「現代」十一月号二八
八頁。タイトルに曰く「横行する
エッチな紳士の新手口」……誠に
以て泣かせる読物。こと鯛三自身
の興趣に合致とあって、再読四見

ほんに「事実が小説よりも奇也」
の諸行秘録に驚嘆。

「昨年一年間に東京都内で捕った
痴漢が八百九十人。変態は、ざっ
と千五百人。変態とは謂る、覗き
または露出癖のたぐいと考えるら
れ」とはライター氏の親切なる

解説。実例ルポは、アパート住い
のパーホステスA子嬢の御難から
報じているが、それによると大要
「深い眠りに入っていたのが、余
りのまぶしさに目覚めて大慌て。
確かに消した蛍光灯が明か明かと

灯され、着ていた筈のピンクのネ
グリジェが、パンティと共に消え
ていた」というのである。「調査
の結果はマカ不思議、彼女の体に
触れた気配はなく、被害はネグリ
ジェとパンティだけとあって、お
巡りさんも呆然自失の一幕」であ
ったそうで、なんとも形容しがた
い特技の持主やらと鯛三、妙なと
ころで感心したり、ちょっぴり羨
望の念を覚えたりで落着かぬこと
しきり。先に進もう。上には上が
いるもので、痴漢氏も、ここまで
くれば「アップレ」な「神業」と

鯛三の酔眼を覚させたは「眠って
いる女性の部屋に忍び込み、パン
ティの一部を切り取って行く」と
いう新手。しかも狙いは外さず、
直径十センチぐらいを丸く切り抜
くというに至っては、正に超ウル
トラ級。この「熟達の業師」が現
実に出沒しているというのだから
オドロ木モモの木である。

ハサミを使う以上、なんらかの
物理作用は避け得ぬであろうに、
被害者の夢路の枕を外させない絶
妙さはまさに横綱ものである。恐
らくは、その憧れのナイロン布入
手のために耐えた、血涙の特訓で
あったことであろう。

がしかし、その気持は痛いほど
わかる鯛三ではあるが、羨望は胸
に押えて良識ある社会人として、
また、同じマニアとしてその「神
業」の行使は、非難するものでは
ある。若い女性の使用せるナイロン
布は、いかに「業師」といえど、
そういう手段で入手すべきではな
い。活字の上では悦にも浸れよう
が、現実には、わが党の人間とし
て拍手を送るわけにはいかない。
法に触れる、犯行となれば、この
「業師」の上に一日も早く裁きの
日の訪れを願うは、鯛三ひとりでは
なからうと思う次第。



僕のイメージ画集

「蛇」

室井亜砂路

菱 縄 の こ と

早 木 夢 二



私の一番好きな言葉「菱縄」。
この言葉はどの辞書にもないだろう。なくてもいいのだ。現実にも私たちの間では、もう二十年近くも具体的に形を示して存在しているし、私だけの辞書には「愛情」をはじめ幾つかの意味を持って第一項にランクされているから。
初めて彼女に、この菱縄をかけた時の驚喜と、恥じらい。それは今も忘れ得ないなつかしい思い出となつて二人の間にある。そして今は、誇張というなら、毎日でもかけたいような、なじみ深いものになっている。
映画や小説などで、菱縄をあさった昔もなつかしい。
うれしげに菱縄を受けて坐っている彼女を眼の前にするとき、私の胸に迫る「愛情」と「生きてい

るよろこび」の強烈で鮮かな思いは、他にくらべ得るものがない。
私は、昔、彼女以外の二、三の女性に縛りを行ったことはある。が、考えてみると、これほど昔から好きであつた菱縄を、その女たちにかけて記憶はない。ずっと簡単な縛りだけだつた。そしてそれすらも、承知の上でハダカになりながらいざとなつて、激しく拒否された思い出もある。その女たちとは、真からの心の通い合いがなかつたからだろう。
私自身が縛ってもらつたことも何回かあるが、菱縄をかけてくれとは、何かためらいがあつていえなかつた。
機会があつて、あるプロの女と会つたとき、お金さえくれるならどんなことでも、というので縄を

手にしたが、やはり菱縄をかけるのはためらい、代つて私を縛らせた時も、ただグルグル巻きだけで終つてしまつた。同じ金を出しながら、どうしても憧れの菱縄をい出せなかつたことを、後になつて後悔したことだつたが、考えてみると、菱縄だけは最愛の女に、というような気持が心のどこかにあつたのではないかと思う。

お体裁やだから——と慶子は簡単にいうのだが、そんな気持もなく、慶子にはテレクサクといえなけれど、キツチリとした入念な菱縄縛りというものは、私にとつては本当の意味での愛情がなくては出来ないことだと思えるのである。あの女たちには、これほど心に秘め温めていた菱縄を、そう安売り出来るものかという気持が働いていたのかも知れないと思う。

今、何のためらいもなく、思うままに菱縄をかけられる彼女を前に出来る私は本当に幸福だと思ふのだが、キツチリとした菱縄縛りの彼女を眼前にしてニヤニヤしている私を、そんな私の辿つてきた半生や気持を知らぬ人が見たら、いったい何と思うだろうか、などと、ふと気おくれしないでもない時があるこの頃である。

編集部だより

○十月号より連載中の黒淵嬰一氏作「贗作平家物語」は引続いて執筆して頂く予定であつたが、筆者の御都合に依り今月号掲載の「入道逝去」を以て一応お休みを頂くことになった。いずれ執筆可能となれば掲載する予定である。

○懸賞応募原稿をはじめ一般読者原稿の投稿も次第に数を増し、本誌内容の充実に一役も二役もかつて貰っているが、今後更に異色ある作品の寄稿をお待ちする。

○団鬼六先生の力作「伊藤晴雨物語」は、今月号の「後篇」を以て完結したが映画化の方は今年中に脚本及びキャストが決定し、来年早々東映京都作品としてクランクインの予定である。乞御期待。

○美人コンテストの応募や夫婦プレイの申込みが踵を接してある中で、漸次誌上に紹介したい。可能なものは辻村隆氏を煩してハントして貰う考えである。読者の方々に紹介したものはとかく音沙汰なしになつてしまふケースが多い。多数の読者の方々の目を楽しませるためには、やはりカメラ・ハン

感 雑

「責め地獄」の波紋

和田 平 助

先月11PMに辻村隆氏が出演。TVを通じてだが初めて接し、その物腰の柔らかさに非常なる親近

感を抱き「奇ク誌万才、辻村氏万才」を呼ぶ。一緒に観ていた妻がタイトルをみて「辻村隆という人は写真家でしよう」云い

終って、シマッタという表情をする。これで妻が小生に内緒で「奇ク誌」を愛読していることが、ハッキリしたのである。

（小生は十数年からの愛読者であり結婚後も妻には内緒で購入、愛読していた）夫婦プレイがスムーズに行なえるようになったのは、ここに原因があったのかも知れない。

11月号にて、辻村隆氏の緊急ルポを読む。SMカメラハントとは又別の違った味があり一気に読みほす。思い切ったスペースを提供した編集部の方々に拍手を送りお礼を申します。

「徳川女刑罰史」出演で縛られるのを待つ外人女性たち



「女性セブン」に、『徳川女刑罰史』全裸の拷

問シーンに出演した女性たちの気持」という、特集記事が載っている。女性向きの週刊誌でありながら、写真入りで堂々と記事にしたことは、ヒョットしたら全国女性のマゾヒズムを呼び起こそうとしているのかも……などと都合よく解釈してみる。

日本人の母と、アメリカ人の父を持つというハニー・レイヌさんの、撮影うちあけ話などが掲載されているが、「両手足を後で縛られているうちに、気持よくなっちゃった」そんな彼女を、責め抜いて悦びを与えてあげることのできる人は、辻村氏以外にはないと思う。「……それで監督さんにいったんです。どうせここまで脱ぐなら全部とってしまいたい……」と語ったという彼女を、その言葉通りにして「可愛がって」やって欲しいと願うのは、小生のみであろうか？「奇ク誌」のカメラ・ハントに登場を祈る。

小生の親友である東映のN監督が「徳川女刑罰史」に匹敵するドキュメント映画を撮るといふ。今度こそ、小生もカメラを持って参加したいと、手ぐすねひいて首を長くしている。

トで誌上を飾るのが良いと思う。○嘗て十数年前の本誌上を「美しい暴君」「牛乳風呂の妖婦」「祭壇に君臨する脚」等にて飾った馬族保氏から最近執筆意欲がとみに旺盛になったという便りを貰ったので「男性虐待快楽術」というシリーズ物（第一話——第十話）でマゾ物の力作が載せられるかもしれない。マゾ物といえば昭和二十八、九年頃の本誌上で活躍された鬼山絢策氏からも、創作意欲しきりに動くという通信を貰った。マゾ作品の傑作が望まれている折柄ベテラン作家の再登場を読者と共に大いに期待するところである。○常連作家の作品ばかりを重要するという声もあるが、編集部としては努めて一般読者の投稿を採用したいと心掛けています。しかし中には、わざわざ横書きしたものや句読点なし改行なしといったベタ書きのものなどがあって、少しは原稿の書き方を勉強してほしいと思わざるを得ないのは残念だ。○このところ縛りづいてる東映路線では、「徳川女刑罰史」に引続いて「元禄女刑罰史」。それに「伊藤晴雨」と矢つぎ早やの企画で緊縛指導の辻村隆氏は中々忙しくなってきたことである。

若い女性の

服装に思う



葛西 六郎

若い女性の服装は、男性にとって誠に楽しくも、目のやり場に困るものが多いのは周知の通りである。ミニスカート、スラックス、いずれも男性を挑発することおび

ただしい。

ツンツルテンのスカートからにょっきり出た足、かと思うと、私のお尻の原形は、こうよとばかりのピタリ吸いついたようなズボ

ショート落語

「醜婦の友」

エス・ケイ

われわれM族が、なけなしの金をはたいてトルコ風呂へ通うのはマッサージや、スチームバスが目

的ではない。そんなものは、街の風呂屋へゆけばある。ズバリいって、叩いてもらった

が、しゃくのタネ。

そこで、狙うのが、その店一番のブス（醜女）を、ということになる。

フロントにたのめば、仲々指名がつかなくて、ボサツとしているのが、どこの店にも一人や二人はいるもの。

それをたのむことだ。ブスにはくそぢからの持主が多く、相手としては絶好。どんなたのみもきいてくれるのは、ブスでも指名客がほしいから。だから、顔のまずいのさえガマンすれば、楽しめま

ン。おまけに男のもののようにボタンまでついている。如何なる必要があるかの詮索は別として、歩く姿の悩ましさ。左右に尻の揺れ動く様が歴然と見てとれて、思わず目が吸い寄せられる。痴漢ならずとも思わず手でふれて見たくなろうというもの。

女性というものは、全く以って意地の悪い動物である。男は目から性欲を感じる動物であるから、女性がそのような刺激的な服装をするということは、女性がさわられるのと同じ位いの刺激を男性に与えているわけだ。男が下手に女性のお尻や胸に手を出そうものなら、これはたちまち法律にふれて罰せられる。何んとも奇妙な話ではないか。

とは云ってもミニスカート、スラックス大いに結構。結婚する場合には、後になってこんな大根足とは知らなかったとか、鞭をふるには物足りない臀だなど後悔しないですむ。

余談はその位にして、まだSMの存在を知らなかった頃は、世間の一般並みの目で女性を見ていた私も、此の頃ではまるで見方が変わって、ついついスラックス姿の女性のお尻を見ると、これは好い音？

がするぞとか、縄を食い込ませたから見事だろうなどという妄想を働かせてしまう。

胸の方はインチキが多いから、左程ではないが臀部はどうもいけない。若い女性のはちきれそうなので、これは、私を男性的に昂揚せしめて、こちらの手が疲れるまで鞭を振ってみたいという欲望を起こさせる。好いか悪いかは別として最近の私は、女性を見る時、必ずといってよい程、鞭と縄による責めを連想するのである。

或いは又、M女性はどうな共通性を持っているだろうかなどとも思う。性については唇がどうの、鼻がどうのといろいろな見方があ

＜短歌＞

「屈服」

高村初子

羞かしき便器おかれぬ更にまた
足開かれぬ堪えきれぬとき

開きたる足きりきりと括られて
尚開かれぬ指曲るまで

堪えきれぬ尿意にもだえ腰あげ
ばフラッシュ光る足の間に

足首に喰い込み入りし縄目見て
足指曲げぬ痛みこらえて

見られるということのみでこれ
ほどに昂まりくるか縄目の肌を

人々の視線を浴びてこらえつつ
排尿のとき今迫りくる

いまは早や恥もてらいも振りす
てて迸り出るものこらえ切れず

わつと湧く嘲笑の中頬染めて敗
残の身を横たえていぬ

置かれたる便器の外に飛び散り
て湯気のぼりゆくゆばりの匂い



「私のお願い」

城山ほずみ

私にお便りを下さった方達にお
礼を申し上げます。ありがとうございます。
ございました。ほずみ、本当に嬉し
うございませう。何かいい方法で
連絡がとれましたら、早速に参じ
たいと存じます。十一月号の通信
欄を読んだだけでも私が責めても
らっている情景が眼の前に浮かび
上ってくるようで、切ないような
楽しいような、なんとも云えない
気持ちになりました。すぐにお逢い
出来ないいらだたしさから、私ひ
とりで、私のからだを縛ったので
すが、やはりうまくゆきません。
セルフタイマーで撮った写真を
同封します。うまく縛れないので
縛られているのではなく、両ひじ

で縄をはっているようにしないと
いけなかったのとおかしいかもし
れませんが、笑わないで下さい。
本当にプレイが出来て、こんな
形だけのことでではなく、キツチリ
と苦しいぐらいに縛られて、責め
てもらえるなら、どんなに楽しい
ことかと思えます。セックス以外
なら、どんな恥かしいプレイでも
出来そうに思いますが、まだ本当
のプレイをしりませんから、いざ
となるとどうでしょうかしら。で
も、たいていのことは耐えられるつ
もりです。

ただ、私はこうして裸の姿まで
見ていただいているのですが、お
便り下さるかたのお顔も、事前に
知ることが出来ないのがちょっと
不安です。こんなことを願うのは
プレイであってもマゾ女としてぜ
いたくかも知れませんか。
でもやっぱり、ほずみも人間で
すから、プレイとして責められる
人はどんな人でもという気持ちには
なれません。やっぱり知らず知ら
ずの間に、理想の男性像をつくり
あげてしまっています。ただ、具
体的にどういうタイプかとゆっく
り考えなおしているうちに、ポー
ツとかすんでしまうのですが、こ
れも特定の人居ないからでしょ
うか。

近頃、とくにマゾの血が騒ぎは
じめるのを強く感じるようになって
たほずみですので、今度もよろし
くお願い致します。

この間、徳川女刑罰史をみてき
ましたが、あの中ので股裂きの刑や
三角の木馬責めにはショックを受
けました。どなたか、三角木馬を
お持ちの方はいらっしゃいませんか。
かしら。ありましたら、その写真
真など、奇クにでも発表してい
ただけないでしょうか。そして、も
しよかったら、私をその木馬で責
めてみて下さいませんか。その他
にも、責具などお持ちの方、教え
て下さい。



久しぶりの休日を待ちかねて、愛用のレフを片手に映画館にとびこむ。何となくうしろめたい感じもなくはなかったが、それでも胸を張って？ 座席を占領し、堂々と腰を据えた。

いよいよお目当の映画上映。後方からパラパラと拍手が起る。私も胸のうちで歓迎の手を叩いたのはいうまでもない。ひそかにカメラを持ち直す。十一月号によってストーリーは総べて承知なのだから、楽にシャッターは切れると安心してはいたが、これはとんでもないことだった。

「徳川女刑罰史」のタイトルに改

映画に想う

「拷問」と「S M」

橘 雅美

めてワクワクするうち、第一話での主演女優（橘ますみ）の責め場に魅きこまれる。私と同姓だからというわけではないが、もっとも私の好みに合った責めで、全巻を通じて一番印象深かった。

第二話では、あちこちから「フウ」とか「オウ」とかの声が挙ったが、私の好みとはテンデ場違いのシーン。濡れ場や同性愛の場面である。この映画とはほど遠いところの世界を無理に割りこませた感じのものへのうすら笑いではないかと思う。首をチョン切ったりする場では私はグロを感じ、周囲からはゲラゲラ笑いが聞こえた。

責めそのものが強烈だっただけに惜しい気がした。

第三話にはマイッタ。白人娘を思いきった拷問にかけられるあたり、第一、二話に於てくばった日本女優に対する気遣いを、ここに於て一気にウサ晴したようなすごさであった。耳がガンガンするような悲鳴。画面から飛び出しそうな白人娘のポリウム。私のほうが怖ろしくなった。

終——の字に周囲からため息が洩れ、何かとても疲れた感じの私は押されるままに外へ出た。しまったと気付いたときには商店街を歩いていて。すっかり擱んだままのレフは、フィルムカウントのままである。第一話では美しい責めにうっとり。第二話ではやや疎外されて内心ブツブツ。第三話では圧倒されて、シャッターどころのさわぎでなかったということになる。

苦笑するやら腹がたつやらだったが、当り散らす相手もないままにムシャクシャする気持押えがたく、時間を無理にこしらえて、三日後に再度の挑戦を試みた。

真面目で正直者の私は、二度続けてこの映画を観に行くことにも気がとがめ、モギリ嬢の前で自然



とヒヤ汗をかく。覚えてるはずはないと思いつながら、視線が合ったとたんに背中がゾクツとした。

同封の印画はその時のもので、再度の攻撃はどうやら成功？ したが、暗室で処理しながら考えこんでしまった。重要問題を抱えこんだ総理大臣のように……。

今度のこの映画と、ピンク映画を比較してみると、私はどうしてもピンク映画に軍配を上げたい。辻村先生には申し訳ないが、カラ

「わがいとおしきペット」

柿 淳五郎



「いいセツトといい、すべて大掛かりなこの映画ではあるが同じような『女責め特集』でも、以前のピンク『日本拷問刑罰史』のほうが、私はよかったと思う。

ひと口では言い表わし難いが、見慣れているせい、私はピンク映画の女責めには、安心してみていられる美しさを感じる。自分が女優を責めているような楽しさを覚えることが出来るのだ。映画自体の価値はどうかしらないが、途中でふき出したり、重苦しい気分になるようなものより、金を出し

て観る以上は、楽しい気分になるほうが効果的だと思うのだ。

ピンク映画に不満がないわけではないが、ことさら乳房をかくす必要もなくなりつつあると聞く現在、もう少ししっかりと女優さんをつ縛り上げてもらえば、私は無条件でピンク映画を選ぶ。

「徳川女刑罰史」の第一話程度のタッチが、やはり「責められるべき女優が、責められるべくして責められた」部類に入るのではなからうかと思う。後の第二、第三に至って、この点の疑問を感じたの

☆ 私のイメージ画 ☆

「柔と硬と鋭と痛」

K・ハギノ



は私だけだろうか。拷問の恐しさに圧倒された後味の悪さ。

しかし、元来、拷問というものの正体はそうしたものである。「責める」という意味は「苦痛」を感じせしめることで、「拷問」とは「その苦痛に耐えきれずに、自白せしめる」苛酷なものであることが、改めてよく知らしめられた感じである。映画というキレイごとと世界に於てすら、この「拷問の恐しさ」は私を慄えあがらせた。もしこれが本物であつたら、責められる女性がどんなに美人であつても、グラマーであつても、私程度のSであれば、その恐しさに被虐美観なんてものは、スツとんでしまふだろう。

漠然とした妄想のもとに責めるという事を都合よく解釈していたほうがどうかしていたのだろうかと思うが、いずれにしても、私の想念にある「S・Mの世界」とは全然別のものだ、改めて知らしめられたようである。

とかなんとか、くどくどいいながら、やっぱり観に行きたい自分をさらけ出した。スンマセン。

わたしたちの記録

当時の感激

太田 憲子

わたしたちの四年前の体験をもとに、二人で協力してあの時の感激を、うたに作ってみました。当時、わたしは二十七才、良夫は十八才でした。

——のり子のうたえる——

しあわせは手をさしのばし捉えよと学びしままに今ぞ男子を。

うとましと蔑まれつつ貯えし、わが身の力、男子に勝れり。

蹴くとも逃るることは叶うまじ
汝の胸はわが身に圧されて。

喘えぎつつ物言わんとするその口を、押し塞ぎやり降伏を待つ。

苦しげに歪む男子のその顔は、
哀れにつぶれてわが重圧の下。

唇つけてあらわせよ、わが手に
おちて逃れ得ぬ想いを。

見降せば息荒くして弱き者、許
し乞うさまいと愛し。

大波の高まるごとく上りくる、
わが悦びは、汝の苦痛か。

生きて来し甲斐今ぞ知る悦びを
われに捧げし犬の息荒し。

絶え絶えに仰ぐ眼差し哀れなり
男子の頬は赤く染りて。

——よし夫のうたえる——

迫りくるおみな顔は鬼に似て
わが膝ふるえ、逃れ得もせず。

巨いなるおみな尻わが胸に、
打ち跨りて苦しかりけり。

抗いて突き上ぐる手を捉えられ
右と左の膝に敷かれぬ。

罵れど重き圧力わが口を
押し塞ぎきり、声を封じぬ。

くやしきも、わが力もて返し得
ぬ、柔きながらも強き怪物。

股間下着

江川 乱 走

股間下着とは私のつけた名称で
猿又、パンツ、ブリーフ、サポー
ター、褌など、股間を隠蔽する下
着の総称です。誠に適切な名称
だと自認しています。

久しく愛用していた第一のものは、

米国製ジョッキ印のスキヤン
ト・ブリーフです。これは女性用
のスキヤンターではなく、同社の
登録商名です。白、赤、黒の三種
あり、前割れのない、ウーリーナ
イロン製の、ビキニ・ブリーフで
す。ピッタリと緊着する心地良さは
快適です。縫製、ゴムは最高級
で、糸切れもなく、ゴムも伸びつ
きりということはありません。日
本製の、それらの欠点を知る者には、
まことに驚異です。しかし、
布地が良質のウーリーナイロン製
なので、古くなると直ぐに表面に
上に着用した繊維が、小さな糸玉
となつてからまりつくのが欠点で
す。又、夏場の常用はむれて不快
です。その点、同社の別種のヒッ
プ・ブリーフは、綿メリヤス製な
ので夏場には快適です。巾広のゴ
ムバンドを使用しているので、股

間の緊縛感は良好です。前割れは
なく、ゴム縫製も最高です。しか
し何回となく洗濯すると、良質ペ
ルー綿が縮むので腰廻りの緊着感
が一層強まり、日中着用していると
気になります。

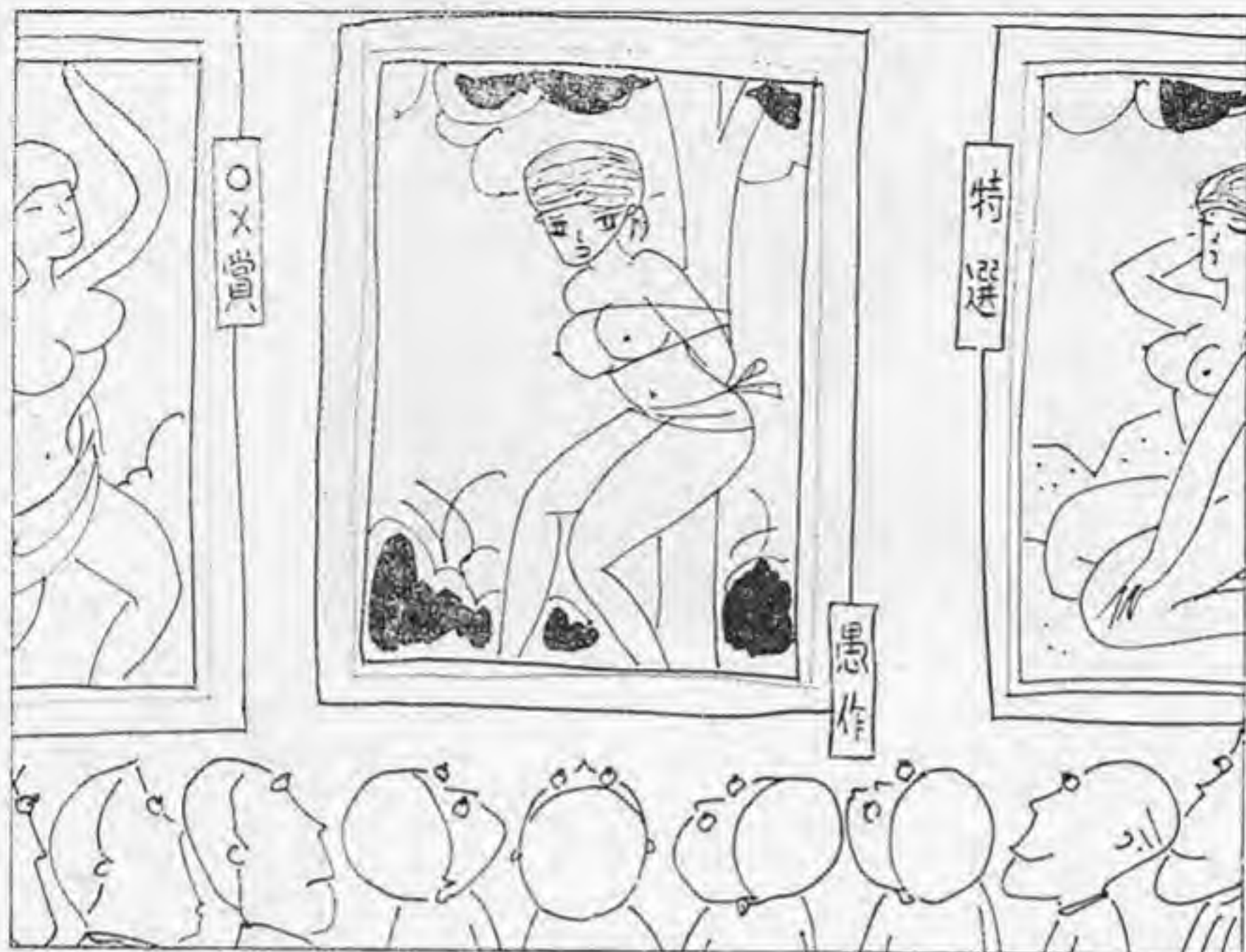
大阪製の「バンドシ」というの
があるのとこととで、東京中のデパ
ートを捜しましたが見当りません
でした。女店員に聞きたくないの
で専らショーケースを覗き廻りま
した。その節、上野松坂屋でビニ
ールの袋にたたまれた「クラシッ
ク・パンツ」というのを発見して
安いので十枚、買いました。帰宅
後、それを開くと、何のことはない
越中褌でした。布地が悪く、し
かもひどく節約してありました。
後日、新宿小田急にも同名にて
テンジク晒製の、あることを知
りました。せっかく購入したこと
とて、夏場はもっぱら常用しまし
た。なれるとむれないし、腰廻り
の開放感があり快適でした。しか
し股間の緊縛感がなく、前が直ぐ
ゆるむのが欠点です。しかし、前
ダレをV型にはさんで緊着すると

SMマンガ
シリーズ

展 観 会

九 美 淳

審査員「嘆かわしや」会場側「今度は『愚作展』をやろう」



○ 根かぎり抗がいし気力も涸れ果
てし、わが身の上の重さいや増す

○ 恥しらぬおみな心の憎みつつ、
いつしか待ちぬ次の責め手を。

その難も解消しました。毎朝とりかえて一週間に一度まとめて洗濯して吊し並べると、その眺めは壮観でした。けれど、愛用者には清潔な爽快な眺めも、若い女性には嫌悪されることを知りました。それで、洗濯機の絞り器で十分ぐらい回転させて水気をとり、電気アイロンで仕上げました。毎朝、大鏡の前で素裸になって、良くプレスのきいたものを着用する時の気分は、愛用者でないとわからない楽しみです。

一度、トルコ風呂に入ったとき若い可愛い子ちゃんに「まあ、今でもこんなのあるのね」と、脱ぎ捨てたそれを、ピンクの美しいマニキュアした指先につまんで、顔を近づけてしげしげと鑑賞されたときには、驚きました。

六尺褌は映画やテレビ、又、分譲写真の女性褌美で見るのには、緊縛感があり結構ですが、実際に毎日、常用するには不便です。その他、鴨居洋子の男性用ブリーフも、カタログを選んで三点ほど直送されたのを着用しましたが、ゴムと縫製の悪さで、前記の米国製に較べて問題外でした。新宿、伊勢丹にあった東レ・パンロン製のダディ印のビキニ・ブリーフは、

スキャント・ブリーフに較べて、糸玉にならないのは良いが、緊着感は少し減退します。トランクスの型のパンツは股間の緊迫感がないので不快です。水泳用のサポーターは尻の開放感がありすぎるので両者を併用して常用しました。しかし良質のサポーターを着用しないと、股間がすりむけて常用できません。また生ゴム製サポーターを着用しましたが、メーカーが良心的でなかったため、目新しい異質感があるだけでした。もっと生ゴムの薄い高級品があれば購入したいと思います。米国ではゲイボーイ用に専門店があり、良質のそれを売っているとのことでした。

明治百年の懐古趣味で、男性は大いに越中褌を愛用し、女性は緋の腰巻を着用していただきたいのですが、ミニばやりの昨今、若い女性には無理なようです。女性の和服が日常生活からはなれ、特殊の職業の人々のみ愛用される現在では、緋の腰巻も六尺褌同様、過去の存在となったようです。しかし越中褌が「クラシック・パンツ」として再現されたことは、愛用者として、その素朴さと肌ざわりの良い快適さを、大いに奨励普及したいと思います。

私のひとり思うこと

大川 恵子

M女性を捜しておられる男の方がかなり多くおられるように思い

ます。でも女性のほうがMって何かわからなければ、いくらM女性を捜しても無理だ

と思います。

女の人って、総体に何か「縛られること」に偏見があるのではないかしら。縛られるというところが恐ろしいような気がして、男の方から言われただけでもびっくりして、すぐに「嫌」と単純に反応してしまうのが、大多数なのではないでしょうか。

私は、誌上に登場なさるモデルさん達は、Mの気持よりも、自分の美しさを見せたいような気持で、縛られるのも案外平気

なのではないかしらと思います。全部がそんな気持ではなくても、心のどこかにそんな気持があるのではないのでしょうか。

「縛られること」が恥ずかしいと感じるよりも、始めから、異常なことに変態的だと思ってしまうので、嫌がるのだと思います。普通の女性は、SMについては漠然としか知らないのが当然ではないでしょうか。漠然とした知識、誤まった想像から、SMを嫌という偏見に通じるのがほとんどだろうと思います。何もM女性、M女性って、最初から特別に存在するもののように決めてかかって捜されても、なかなか見つからないのが当りまえだと思います。

私、浣腸マニアなんですけど、浣腸プレイを、楽しむためだったら、縛られてみてもかまわないような気がするのです。けれど、それはあくまで楽しい縛りで、本当にいじめるための縛りだったら、また気持が変わるかも知れません。こんな私も、M女性と言えるでしょうかしら。私にも、M女性って漠然としていて、本当はどんなのかわかりません。何となくM的だと思っただけです。

私、浣腸される恥ずかしさと、

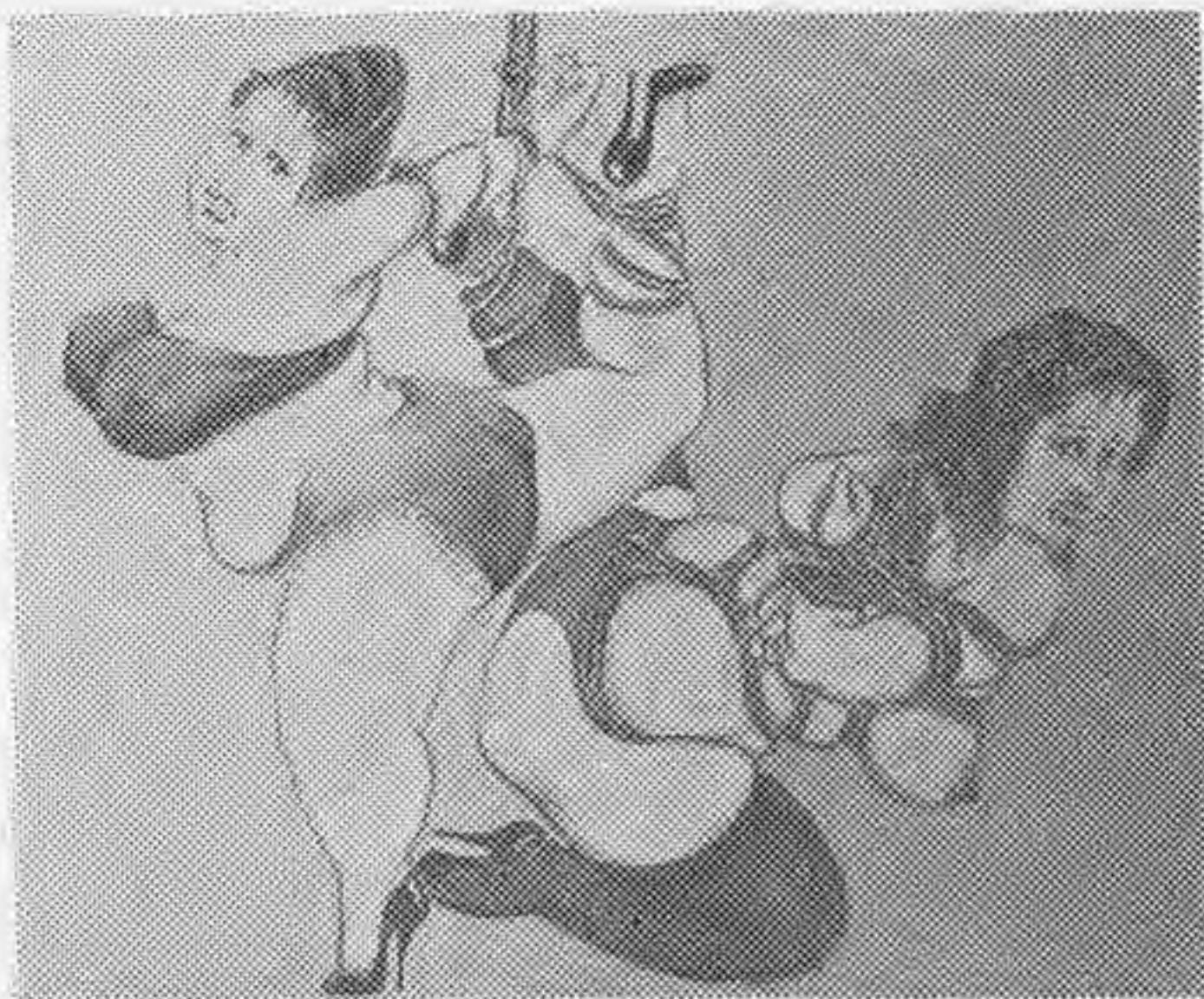
浣腸の苦しみに関心するという意味で、Mなのかもしれません。そのために、あえて同性の前で何回か恥ずかしい姿態を見せなければなりませんでした。

お友達に「便秘していること」をお話して「浣腸して下さい」と言わずにはいられない私でした。お友達がやはり便秘がちで浣腸にも慣れていられた方なら、恥ずかしさは和らぎましたけど、そうではない方の時は、消えてしまいたい程の恥ずかしさでした。

お医者様に浣腸されるよりも、恥ずかしいのですがお友達にされたほうが、私のM性（こう言っているかしら）を満足させることが出来ました。

親しいお友達に浣腸をお願いする時にも、私のM的と思われる気が持がくすぐられることもおわかり下さると思います。

恥ずかしいことをお願いして、何回か浣腸をしてもらううちに、逆にお友達を浣腸する機会がめぐってまいりましたことも数回ございました。乏しい私の体験ですけど、私のこんな気持から案外身近に、M女性はいらるものではないのかしら？ と思いつき、ちょっと書いてみました。



「操り人形セット」 小妻 容子

〔最近作緊縛傑作フォト〕

開股竹棒羞恥責め

大手札三枚一組 略号「ねろ」
中河 恵子

逆エビ責め手足縛り

大手札三枚一組 略号「ねき」
中河 恵子

竹棒開股強烈繋り

大手札三枚一組 略号「ねく」
中河 恵子

鼻責めと鼻孔大寫し

大手札三枚一組 略号「ねけ」
中河 恵子

首縄後手強烈縛り

大手札三枚一組 略号「ねこ」
中河 恵子

全裸開股膝頭縛り

大手札三枚一組 略号「ねさ」
中河 恵子

菱縄縛り竹棒責め

大手札三枚一組 略号「ねし」
中河 恵子

柔肌に喰込む縄目

大手札三枚一組 略号「ねす」
大島 照代

豊満な全裸を弄る

大手札三枚一組 略号「ねせ」
大島 照代

逆エビに痛める魔手

大手札三枚一組 略号「ねそ」
大島 照代

黒髪をいたぶる手

大手札四枚一組 略号「そや」
大島 照代

菱縄縛りにあえぐ

大手札四枚一組 略号「そゆ」
大島 照代

強烈後手縛りの狂態

大手札四枚一組 略号「そき」
大島 照代

牝犬奴隷の醜態

大手札四枚一組 略号「そよ」
大島 照代

全裸二つ折り縛り

大手札四枚一組 略号「そむ」
中河 恵子

菱縄しばりの表情

大手札四枚一組 略号「その」
中河 恵子

八の字開股羞恥責め

大手札四枚一組 略号「そか」
中河 恵子

菱縄縛りの全裸を晒す

大手札四枚一組 略号「そえ」
中河 恵子

奴隷捨札開股縛り

大手札三枚一組 略号「きむ」
木村 洋子

菱縄強烈開股縛り

大手札三枚一組 略号「きま」
木村 洋子

竹柱立縛り晒し者

大手札三枚一組 略号「きみ」
木村 洋子

柱宙縛り苦痛表情

大手札三枚一組 略号「きめ」
木村 洋子

猿轡股間縛り歩き

大手札三枚一組 略号「きも」
木村 洋子

浣腸にむせび泣く女

大手札四枚一組 略号「つゆ」
大島 照代

身動き出来ぬ強制浣腸

大手札四枚一組 略号「つえ」
大島 照代

竹棒開股苦打ち縛り

大手札三枚一組 略号「つひ」
関谷富佐子

後手吊りにもかく女体

大手札四枚一組 略号「くて」
川越美佐子

逆エビ縛りの色々

大手札四枚一組 略号「つか」
愛知 葉子

逆さ吊りと足吊り

大手札四枚一組 略号「つよ」
愛知 葉子

片足吊り上げ縛り

大手札四枚一組 略号「つお」
愛知 葉子

美しき臀部を晒す

大手札四枚一組 略号「つや」
左近麻里子

階段に晒す全裸身

大手札四枚一組 略号「つく」
左近麻里子

花瓶を太股で挟む裸身

大手札四枚一組 略号「つの」
左近麻里子

麻里子の裸身をあばく

大手札四枚一組 略号「つね」
左近麻里子

柱に立縛りの全裸身

大手札四枚一組 略号「つな」
左近麻里子

絶妙の鞭打ちポーズ

大手札四枚一組 略号「つに」
左近麻里子

悶える白肌を俯瞰する

大手札四枚一組 略号「つぬ」
左近麻里子

両膝頭開股宙吊り

大手札四枚一組 略号「くち」
中河 恵子

片足挙げ吊り責め

大手札四枚一組 略号「くも」
中河 恵子

両手吊りに悶える女

大手札四枚一組 略号「くい」
中河 恵子

開股責めを悦ぶ女

大手札四枚一組 略号「くあ」
中河 恵子

両手万歳吊りにもかく

大手札四枚一組 略号「くむ」
中河 恵子

静子夫人への羞恥責め

大手札四枚一組 略号「くめ」
中河 恵子

雁字搦目縛りにうめく

大手札四枚一組 略号「くと」
川越美佐子

八力月の妊婦に革具責め

大手札四枚一組 略号「へね」
増田みゆき

九力月の妊婦に首枷責め

大手札四枚一組 略号「への」
増田みゆき

激痛に耐える鞭打ち表情

大手札四枚一組 略号「わつ」
関谷富佐子

印画紙焼付極鮮明写真

〔美人モデル緊縛フォト〕

鞭打ちによる感溺の表情

大手札四枚一組 略号 (めち) 五〇〇円

股裂縛りて痛打する

大手札四枚一組 略号 (めの) 五〇〇円

海老縛りの鞭打地獄

大手札四枚一組 略号 (めぬ) 五〇〇円

尻立縛りて強打に泣く

大手札四枚一組 略号 (めし) 五〇〇円

ムチは臀部の双丘に炸裂

大手札四枚一組 略号 (めけ) 五〇〇円

鞭に悶える鉄砲責め女体

大手札四枚一組 略号 (めま) 五〇〇円

逆手吊りて晒す臀部

大手札四枚一組 略号 (めむ) 五〇〇円

鞭の縛りに夢心地表情

大手札四枚一組 略号 (めり) 五〇〇円

鞭は美体にからみつく

大手札四枚一組 略号 (めも) 五〇〇円

狂う鞭に狂い泣く女体

大手札四枚一組 略号 (める) 五〇〇円

両手吊りの女体に強打

大手札四枚一組 略号 (めさ) 五〇〇円

鉄砲縛りに鞭打の雨

大手札四枚一組 略号 (めせ) 五〇〇円

鞭打ちに示す感泣の極致

大手札四枚一組 略号 (めて) 五〇〇円

逆海老開股縛りに鞭打ち

大手札四枚一組 略号 (めひ) 五〇〇円

ムチに悶絶した美夫人

大手札四枚一組 略号 (めへ) 五〇〇円

のけぞる悦虐表情の露呈

大手札四枚一組 略号 (めふ) 五〇〇円

責めによる美的法悦表情

大手札四枚一組 略号 (めら) 五〇〇円

妊婦開股縛り哀歎

大手札四枚一組 略号 (わう) 五〇〇円

八カ月の妊婦開股責め

大手札四枚一組 略号 (わの) 五〇〇円

妊婦太鼓腹開股縛り

大手札四枚一組 略号 (わえ) 五〇〇円

妊孕美人媚態の立像

大手札四枚一組 略号 (わお) 五〇〇円

妊孕美人媚態坐像

大手札四枚一組 略号 (わき) 五〇〇円

両手吊り片足挙げ妊婦

大手札四枚一組 略号 (わく) 五〇〇円

八カ月の妊婦両手吊り

大手札四枚一組 略号 (わさ) 五〇〇円

突き出した腹部の妊孕美

大手札四枚一組 略号 (わし) 五〇〇円

両手吊りの妊婦正面

大手札四枚一組 略号 (わす) 五〇〇円

縛られた妊婦の艶姿

大手札四枚一組 略号 (わせ) 五〇〇円

両手一本吊りの妊婦

大手札四枚一組 略号 (わち) 五〇〇円

恵子の妊孕美緊縛

大手札四枚一組 略号 (おに) 五〇〇円

初妊娠の太鼓腹の美

大手札四枚一組 略号 (おぬ) 五〇〇円

裸身縛りの妊孕美

大手札四枚一組 略号 (おす) 五〇〇円

身籠った裸身責め

大手札四枚一組 略号 (おも) 五〇〇円

麗わしの妊婦縛り

大手札四枚一組 略号 (おひ) 五〇〇円

膨満の腹部緊縛美

大手札四枚一組 略号 (おみ) 五〇〇円

立縛り髪責め引回し

大手札四枚一組 略号 (おけ) 五〇〇円

猿轡の裸身を晒す

大手札四枚一組 略号 (おふ) 五〇〇円

後手縛りて引回す

大手札四枚一組 略号 (おく) 五〇〇円

片足吊り上げ責め

大手札四枚一組 略号 (おて) 五〇〇円

憂愁夫人の菱縄縛り

大手札四枚一組 略号 (おや) 五〇〇円

柱対向立ち縛りの夫人

大手札四枚一組 略号 (おあ) 五〇〇円

片足吊り股裂き責め

大手札四枚一組 略号 (およ) 五〇〇円

逆エビ責めに泣く女

大手札四枚一組 略号 (おわ) 五〇〇円

柱正面立ち縛り媚態

大手札四枚一組 略号 (おの) 五〇〇円

股間縛りにもかく女体

大手札四枚一組 略号 (おう) 五〇〇円

豊満の女体をくびる

大手札四枚一組 略号 (おれ) 五〇〇円

開股前屈愛撫責め

大手札三枚一組 略号 (おね) 四〇〇円

逆エビ縛りの愛撫

大手札三枚一組 略号 (おな) 四〇〇円

印画紙焼付極鮮明写真
〔新しいモデル強烈縛り〕

Y字型宙ハリツケ

大手札四枚一組 略号ハちねV
左近麻里子

開股逆さ吊り姿態

大手札三枚一組 略号ハちてV
左近麻里子

強烈菱縄柔肌縛り

大手札四枚一組 略号ハちやV
左近麻里子

豊満な臀部への責め

大手札四枚一組 略号ハちみV
左近麻里子

猪吊りの滑車責め

大手札四枚一組 略号ハちつV
左近麻里子

悶々たる尻立て縛り

大手札四枚一組 略号ハちなV
左近麻里子

股間立縛りの表情

大手札四枚一組 略号ハちすV
左近麻里子

全裸立縛りの表情

大手札四枚一組 略号ハちさV
左近麻里子

豊満な体緊縛のあえぎ

大手札四枚一組 略号ハちにV
左近麻里子

緊縛と柔肌の交錯

大手札四枚一組 略号ハちこV
左近麻里子

投げ出された裸女

大手札四枚一組 略号ハちくV
左近麻里子

輝美表と裏の二態

大手札二枚一組 略号ハちけV
左近麻里子

美女の鼻をもてあそぶ

大手札四枚一組 略号ハちるV
左近麻里子

美女の鼻孔を鑑賞する

大手札四枚一組 略号ハちれV
左近麻里子

開孔器で美女の鼻腔検査

大手札四枚一組 略号ハちきV
左近麻里子

開股拷問椅子正面縛り

大手札四枚一組 略号ハなたV
中河 恵子

甘美な椅子縛りプレイ

大手札四枚一組 略号ハなあV
中河 恵子

のけぞる痛打の果て

大手札四枚一組 略号ハなちV
関谷富佐子

臀部に炸烈するムチ

大手札四枚一組 略号ハなつV
関谷富佐子

痛打による絶妙表情

大手札四枚一組 略号ハなてV
関谷富佐子

絶妙なるバック姿態

大手札四枚一組 略号ハせきV
左近麻里子

強烈猿ぐつわ哀歎

大手札四枚一組 略号ハせかV
左近麻里子

息づくボリウムを縛る

大手札四枚一組 略号ハせもV
左近麻里子

左右に開股を縛る

大手札四枚一組 略号ハせみV
左近麻里子

ゴムカバーの猿ぐつわ

大手札三枚一組 略号ハせなV
左近麻里子

羞恥椅子開股縛り

大手札四枚一組 略号ハせけV
左近麻里子

黒布の猿ぐつわと緊縛

大手札四枚一組 略号ハせこV
左近麻里子

甘美なる開股椅子プレイ

大手札四枚一組 略号ハせまV
木村 洋子

開股吊り縛りの極致

大手札四枚一組 略号ハせむV
木村 洋子

菱縄雁字搦目縛り

大手札四枚一組 略号ハせえV
木村 洋子

私を虐めて下さい

大手札四枚一組 略号ハせろV
中河 恵子

豆絞りの猿轡縛り

大手札四枚一組 略号ハせれV
中河 恵子

悶える全裸の表情

大手札四枚一組 略号ハせりV
中河 恵子

麗身の裏と表の表情

大手札四枚一組 略号ハせとV
中河 恵子

竹棒と猿轡と縄と

大手札四枚一組 略号ハせてV
中河 恵子

豊満な緊縛全裸を晒す

大手札四枚一組 略号ハせゆV
左近麻里子

陽光に映える亀甲裸身

大手札四枚一組 略号ハせいV
左近麻里子

縄で弄ぶ豊満緊縛女体

大手札四枚一組 略号ハせたV
大島 照代

後手縛りに狂い泣く

大手札四枚一組 略号ハせのV
大島 照代

逞ましき臀部責め

大手札四枚一組 略号ハせねV
大島 照代

強烈縛りに喘ぐ裸身

大手札四枚一組 略号ハせにV
大島 照代

大の字笞打ちの悶え

大手札四枚一組 略号ハわりV
関谷富佐子

絶妙の尻立て鞭打姿態

大手札四枚一組 略号ハわもV
関谷富佐子

鞭打ちの女王昇天す

大手札四枚一組 略号ハわめV
関谷富佐子

狂い咲く鞭打の妖花

大手札四枚一組 略号ハわみV
関谷富佐子

大の字ハリツケで鞭打

大手札四枚一組 略号ハわまV
関谷富佐子

蒲団に狂いまわる女王

大手札四枚一組 略号ハわとV
関谷富佐子

読者通信



○ 安井喜久子様、前に一度アイデアをお送りいたしました、試してみてもう頂きましたでしょうか。沢山の応募者があつたでしょうか。どれがだれのか、直ぐにはお分りにならないかとも思います。私のアイデアは、貴女の下着を御主人の暴力によって破られ、引きちぎられる……晒しによる浣腸……などです。貴女は責めのパンティをお持ちのようですが、プレイの時は如何でしょうか。平常お使用になつては如何でしょうか。お出かけの時あるいは来客のとき、ノーパンまたは縄をなさつては如何。前者は縄はありませんが、万一を考え

たとき、羞恥心が快く、責めてくれるでしょう。後者は貴女の大好きな股間縄です。首からかけず、ウエストを思いきり締め上げるのです。そして要所にはコブを作つておくのです。貴女の一挙手一投足にもコブは貴女を責めつけます。もしも、お客様が同好の士であつたら大喜びでしょう。しかも時には、興にのつた旦那様の命令でそれを披露せねばならないかもしれません。しかし外出の時は、股にあたる部分は少しゆるめておかないといけません。それでも、コブは折にふれて貴女を快く刺戟してくれることでしょう。時としてコブの代りにオシボリを強く巻き（勿論水気を含ませ）袋に入れてそう入しておくのも、又別な味？があると思います。次にアヌス責めも、少し研究してみても下さい。前回も一寸申し上げましたが、ビールびん等を使っての責めです。貴女は一度の失敗にこりて、浣腸はお嫌いのようですが、この責めは浣腸はしない方が効果が強いのですが、最初の中は浣腸をしてからの方が安全です。股間縄や複数プレイ、交換プレイ等を好まれる貴女でも、やはりご主人には見られたくないものもあるでしょうか

ら……。これは緊縛され、ご主人にやっていたのです。貴女はあられもない姿でもだえ続けねばなりません。その苦しみは汗となり、喜びと交つて、動けない貴女の身体をのけぞらせるでしょう。女性である貴女はとも角、男性である私等は、はじめでした。その現象がはつきり現われ、後始末までしてもらつたのですから……。責められる貴女、吊りにムチ打ちに堪え苦痛の中に欲びを感じる貴女にとって、このアヌス責めも忘れられないものとなるはずで。私のまぶたの奥には、責められ泣きわめき悶える貴女の姿が、ありありと浮かんで参ります。ぜひとも実行なさつてみて下さい。そして、おさしつかえない範囲で奇ク誌上に感想をおのせ下さい。最後に貴女は、ムチ打ちプレイが済んだ後、どうなさいます？ 縄をとかれてもグツタリして、しばしは起きあがられないのではないでしようか。もちろん心の中、肉体には満足感がただよっているはずですが、このとき今一歩、求めて下さい。ムチ打たれ傷ついた箇所には涙を落としてもらうのです。疲れきつた貴女の最後の力が再び貴女を悶えさせ、素晴らしい桃源

郷へと誘つてくれます。では際限がありませんので今回は、このぐらゐにしておきます。

（松本幸男）

○ 大阪東区の女王様、貴女は私の理想の女性ではないかと思つております。前にも申し上げたように私は体力十分で弱々しいMではありませんが、口頭で命令しても決して奴隷にはなりません。腕力でねじ伏せられ女王様に馬乗って組み敷かれ征服されたいのです。男性が女性に負けて組敷かれていく姿は、甚だ恥辱的なスタイルだと思います。私は数百万円の機械を販売し、時には英語を使って機械の説明をしたりして、同年代の人に比べて、かなりの地位にあると自負しております。その私が女王様に馬乗りに組み敷かれ、抵抗した罰として色々になぶられ、男性として最大の恥かしめを与えられたら、どんなにすばらしいでしよう。

（東京・青木雄三郎）

○ 城山ほずみ様、いつか貴女がい穴場を探しておられましたので先頃、私の友達が行つてとてもよかったと話していた場所をお知らせします。それは温泉野天風呂で

和歌山県の勝浦温泉（ホテル、浦島）新宮からバスで二時間十分ぐらいいで海岸洞窟（忘帰洞）へつきます。ここは無限の夢の世界を誘うそうです。また、川湯温泉、これも新宮からバスで二時間ぐらいいです。熊野川の支流にのぞみ、湯は河原の砂の間から湧きでているそうです。風景はよく、余り人もこないで、野外でもプレイができると思います。ここに昔は動物園があったそうですが、今は檻だけが残っています。この檻をつかつてのプレイも、一見交っていて面白いと思います。

（和歌山県・小島祥公）

愛読者の皆様、お元気ですか。久しぶりに、この欄にS女性の方のお便りを拝見し、M男として非常にうれしく思いました。女王様のどれいとして、実際に奉仕できない事情にありますので、せめて空想を描くことをお許し下さい。女王様は仲々のグラマーとおっしゃっています。力づくでも小生は到底、抗し得ず、ねじ伏せられ、仰向けに押し倒された小生の胸の上に、どっかと馬のりに跨られた貴女は「さあ、どうだ、参ったか！」と、ばかり小生を見下ろされ

ます。反対に哀れな小生は、たぐましい豊満なお尻の重みに押えこまれて、息苦しくもがくばかりです。「お前の一番好きなことをしてやろう」貴女はこう言われるとお尻を持ち上げ、じりじりと前にならずにされます。そして、お尻がちょうど小生の顔の真上にきた時、そのまま小生の顔は、まともに貴女の巨大なるお尻の下に完全に敷かれました。目も鼻も口も完全に下じきにされ、もちろん息もできません。小生は必死に逃れようともがきますが、貴女のお尻は大盤石の重みをもつてのしかかっています。いよいよ限界がきたと思われる時、女王様は特別のあわれみをもって、お尻を少し浮かせて下さいます。やっと重圧から解放された小生は一息、吸い込みます。ああ、その時、小生の鼻にしみ通る強烈な臭気。余りの臭さに小生は一瞬、気が遠くなるほどでした。「どうだ、臭いか。お前を喜ばせてやるために、特別の温情で、できるだけパンティを汚しておいてやったんだよ。さあ、ありがたく、もっと嗅ぐがよい」貴女は、こう言って、お尻を前後左右にゆすりながら、いやっというほど嗅がして下さいました。さて、これ

がすむと次は、いよいよ最高のお恵みである御神水が与えられるのです。浴室に続いて神酒授与のための特製のトイレが用意されています。普通の和式トイレの便器の下のところ、約三十センチのところに人間一人、仰向けにねられる台がとりつけられ、小生はその台の上に仰向けにねかされ、手足をしばりつけられます。やがて貴女は、便器をまたいでしゃがまれます。「口を開け」おごそかなお声。思わず口をあけた瞬間、温い

滝がすさまじい勢いで、小生の口に注がれます。若きグラマーであられる女王様の恵みの聖水。それは、たたきつけるように激しく小生の口に注がれ、溢れて顔に浴びせかけます。ああ、女王様の聖水を頂く光栄。しかも直接に拝受するありがたさに、小生は涙ながらにむせび、いただきます。

（京都・田部真哉）

奇ク愛読者のみなさん、初めてお便りします。私は二十一才にな

木戸悦子妊婦写真

本誌十月号のSMカメラハント「胎児の喘ぐとき」八妊娠九カ月の妊婦を縛るVでその便々たる太鼓腹をカメラの前に晒した木戸悦子夫人のフォトを特に同好者の方に左記の通り分譲します。

九カ月妊婦全裸立像正面

大手札三枚一組 略号「のま」 四〇〇円

羞らう妊婦の裸身前向立像

大手札三枚一組 略号「のめ」 四〇〇円

九カ月の妊婦腹を晒す

大手札三枚一組 略号「のや」 四〇〇円

九カ月の妊婦腹を縛る

大手札三枚一組 略号「のこ」 四〇〇円

木戸悦子

木戸悦子

木戸悦子

便々たる太鼓腹に縄掛け

大手札三枚一組 略号「のし」 四〇〇円

膨満腹も露わな両手挙げ縛り

大手札三枚一組 略号「のろ」 四〇〇円

竹棒責めに喘ぐ九カ月妊婦

大手札三枚一組 略号「のは」 四〇〇円

十文字縛りの妊婦腹

大手札三枚一組 略号「のに」 四〇〇円

柱縛りに苦しむ九カ月の妊婦

大手札三枚一組 略号「のほ」 四〇〇円

開股責めと椅子縛りの妊婦

大手札三枚一組 略号「のへ」 四〇〇円

木戸悦子

木戸悦子

木戸悦子

木戸悦子

木戸悦子

木戸悦子

る名古屋のサラリーマンというより店員です。私は今までSMのことは、いろいろ考えてきましたが何か勇氣がなく、又手紙を出すことができなかったのです。M女性の方、又S女性の方、私と交際していただいけませんか。できれば名古屋近郊の方、地方の方でも私とSMについて研究したいと思いませんか。私は、どんなプレイでもかまいません。二人の秘密にして楽しくプレイしませんか。お便り待ちます。

(名古屋・SMファン)

○
ありがとうございます、ぼくは先ずお礼を述べる。何故ならば、柳瀬慶子さんこそ、我々S党男子に合理的な希望と満足を与えてくれる、貴重な存在だからです。きっと貴女は、あの「花と蛇」に出てくる静子、京子、小夜子みたいに、すばらしい女性であると思います。お住まいが川崎ですが、ぼくは勤務先が川崎です。身近かに貴女の存在を知ったときの、ぼくの胸のときめき。筆では書きあらわせません。お会いしたとき、直接に貴女の身体に対して解答いたしましょう。ぼくは本年二十五才の青年です。奇くは三年ぐらい前から、知

っております。男性とのプレイを希望する女性の投稿も数多くありましたが、地理的に皆遠く、一人残念がっていた次第です。ここに愛すべき女奴隷を発見し、天に登る気持です。ぜひ、お会いしたく存じます。
(横浜・森矢)

○
横浜の片野初枝さん、貴女を心ゆくまで、みっちり調教させるのは、私をおいて他にないでしょう。私は十二分に自信を持って、恥かしめ責めて、嬉し涙の流れるまで責めてあげましょう。しかし体に傷をつけるようなことは一切しません。二つ三つ、書きましよう。貴女は私の前にくると、私が黙っていても「あなたにおまかせしたこの体、存分に調教して早く一人前にして下さい」とお願いして私の目の前で着ている物を一枚宛、脱いでゆく。勿論、パンティも許されない。そして検査を受けるのです。調教に耐え得るかどうかを見てもらう。先ず身体検査をする。両手を左右にあげ、大きく股を開いて何も持っていないことも認めてもらう。次に、足を投げ出し坐り、両手で両足首を持ち上げ、充分に恥かしい部分の検査を受ける。検査がすめば、首輪、手

安井・中河・金原緊縛写真

大手札印画紙極鮮明焼付フォト

開股羞恥責めの姿態

大手札四枚一組 略号△しう▽ 五〇〇円

安井喜久子

髪吊りて強烈ムチ打ち

大手札四枚一組 略号△した▽ 五〇〇円

安井喜久子

片足首引きつけ縛り

大手札四枚一組 略号△しち▽ 五〇〇円

安井喜久子

尻立て鞭打ち艶姿

大手札四枚一組 略号△しつ▽ 五〇〇円

安井喜久子

柔肌に炸裂するムチ

大手札四枚一組 略号△して▽ 五〇〇円

安井喜久子

エビ縛りの鞭打ち

大手札四枚一組 略号△しと▽ 五〇〇円

安井喜久子

貞操帯着用鞭打ち

大手札四枚一組 略号△しや▽ 五〇〇円

安井喜久子

痛打にもかく美女体

大手札四枚一組 略号△しゆ▽ 五〇〇円

安井喜久子

あぐら縛りの羞恥責

大手札四枚一組 略号△しよ▽ 五〇〇円

安井喜久子

片脚挙げて晒す裸身

大手札三枚一組 略号△とは▽ 四〇〇円

中河 恵子

強烈エビ縛りで苦悶

大手札三枚一組 略号△とに▽ 四〇〇円

中河 恵子

膝頭縛り開股竹棒責め

大手札三枚一組 略号△とほ▽ 四〇〇円

中河 恵子

竹棒開股足首縛り

大手札三枚一組 略号△とへ▽ 四〇〇円

中河 恵子

股間縛りの裸身表情

大手札三枚一組 略号△とち▽ 四〇〇円

中河 恵子

菱縄縛り猿ぐつわの表情

大手札三枚一組 略号△とり▽ 四〇〇円

中河 恵子

乱痴戯騒ぎの結末

大手札三枚一組 略号△とぬ▽ 四〇〇円

中河 恵子

菱縄縛りて床に喘ぐ

大手札三枚一組 略号△とる▽ 四〇〇円

中河 恵子

浣腸責めの甘い恐怖

大手札三枚一組 略号△とか▽ 四〇〇円

中河 恵子

浣腸液の注入直後

大手札三枚一組 略号△とま▽ 四〇〇円

中河 恵子

強制浣腸の各姿態

大手札三枚一組 略号△とみ▽ 四〇〇円

中河 恵子

浣腸責め的美態開陳

大手札三枚一組 略号△とめ▽ 四〇〇円

中河 恵子

浣腸を待つポーズ

大手札三枚一組 略号△とも▽ 四〇〇円

中河 恵子

錠、足錠をつけ、くさりにつながられる。これで初枝は、私の奴隷としての生活が始まるのだ。顔には私の汚れたパンツをかぶせ流腸も勿論する。これは序の口でその他色々の調教をしたいと思っっているが、遠い横浜に住んでおられるので直ぐ会えないのが残念です。しかし、手紙で充分、指示し報告させることができます。と思います。

(大阪市北区・帝王)

○ 小生、二十九才の典型的なM男であります。仕事面においては一流商社の営業課長の職にあり、社会的にも経済的にも何不自由なく毎日を送っております。かねがね金銭や暴力等によって、高慢な女王様に征服され、絶対服従の奴隷男として足下にひれ伏し、好むと好まざるにかかわらず、徹底的に責めぬかれない欲望が日頃、私を苦しめております。ところが十一月号で、小生の理想の女王様が勇敢にもご出現、小生は高鳴る胸を押さえつつ、何度も何度も女王様の記事を読みかえし、感動にひたしていただきました。もし許されるなら、女王様よりの奴隷命令を受ける光栄にあずかりたく、ご崇拜の一念をもちまして、おね

がい申し上げます。どんなきつい責めをうけても、又いかに恥かしめられようと途中で逃げだすようなことは絶対にいたしません。涙を流して女王様の足下に土下座し、喜ぶであります。忠実なる犬として全裸でご奉仕させていただきます。ただくことは勿論、顔が真赤にはれ、血がでるほどビンタされたり首輪をはめられ汚れたパンティを頭からかぶされ、くさりをつけて外へ引きずり回されたり、犬の芸をしこまれ神水をあびせられ、顔中を靴で踏みつけられ、唾、痰をひっかけられ、手足をくさりで身動きできないほど拘束され、ムチ打ちされ、人間馬、人間座ぶとんとなつて飼育されたいのです。青木様と同様、何とか女王様のおめぐみをたまわりたく、小生に心の灯を、お与え下さい。ご寛大なるご命令を日夜、お待ち申し上げます。

(東京都・田村英夫)

○ 最近、このコーナーで肥満女性に関する文が少なくなり毎号一読してガツクリです。「テレビでやせよう」が周期的にデモンストレーションしているが、私から見ればナンセンスです。天から与えられた、フクヨカな肉体を、何も難

可憐表情の全裸縛り	大手札四枚一組	略号	五〇〇円
金原奈加子	略号	八ゆめ	五〇〇円
立縛り正面裸晒し	大手札四枚一組	略号	五〇〇円
金原奈加子	略号	八ゆえ	五〇〇円
両手吊り全裸晒し	大手札四枚一組	略号	五〇〇円
金原奈加子	略号	八ゆひ	五〇〇円
雁字搦目後手縛り	大手札四枚一組	略号	五〇〇円
金原奈加子	略号	八ゆあ	五〇〇円
股間縛り柔肌責め	大手札四枚一組	略号	五〇〇円
金原奈加子	略号	八ゆも	五〇〇円
猿ぐつわ開股責め	大手札四枚一組	略号	五〇〇円
金原奈加子	略号	八ゆに	五〇〇円
豊満な臀部強烈責め	大手札四枚一組	略号	五〇〇円
金原奈加子	略号	八ゆほ	五〇〇円
強制全裸開股責め	大手札四枚一組	略号	五〇〇円
金原奈加子	略号	八ゆみ	五〇〇円
股間縛りで悶える	大手札四枚一組	略号	五〇〇円
金原奈加子	略号	八ゆろ	五〇〇円
全裸縛りに羞らう	大手札四枚一組	略号	五〇〇円
金原奈加子	略号	八ゆへ	五〇〇円
私の妊娠腹を見てね	大手札四枚一組	略号	五〇〇円
中河恵子	略号	八ゆわ	五〇〇円
縛られた妊婦横臥す	大手札四枚一組	略号	五〇〇円
中河恵子	略号	八ゆよ	五〇〇円
被虐に燃える全裸妊婦	大手札四枚一組	略号	五〇〇円
中河恵子	略号	八ゆぬ	五〇〇円
尚も見せたい妊婦腹	大手札四枚一組	略号	五〇〇円
中河恵子	略号	八ゆる	五〇〇円
股間縛り首縄正面	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
長井葉津子	略号	八よれ	四〇〇円
両手吊り正面晒し	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
長井葉津子	略号	八よそ	四〇〇円
全裸高小手の麗身	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
長井葉津子	略号	八よの	四〇〇円
全裸股間縛りの媚態	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
長井葉津子	略号	八よや	四〇〇円
強烈な変型エビ縛り	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
長井葉津子	略号	八よい	四〇〇円
正座猿ぐつわの仕置	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
長井葉津子	略号	八よふ	四〇〇円
凄絶海老責め地獄	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
長井葉津子	略号	八よえ	四〇〇円
女体二つ折り縛り	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
長井葉津子	略号	八よぬ	四〇〇円
あぐら縛り全裸晒し	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
長井葉津子	略号	八よあ	四〇〇円
イルリの流腸責め	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
長井葉津子	略号	八よた	四〇〇円

行苦行してまで、やせることはないでしょう。瘠身女性の良い面も数々ありましようが。お蔭でテレビ、週刊誌で我が愛好する肉体美女性の艶姿を拝見することができよう。こばしい次第です。どこかの出版社が芸能人などの中年肉体女性のヌード集を発刊すれば、小生のようなファンがいるから、確実な売行になると思います。貴社の別冊などでは、どうでしょうか。小生の妻は、今まで八十キロでしたが、最近は一エツに減っています。小生は一人エツに減っています。京都の美恵子様、その後、投稿がありませんが、お元気ですか。また、このコーナーでお話して下さい。「芸術生活」四十四年六月号にアメリカのロスアンジェルスでミユリエル・ランダーズさんという大女が、押しも押されぬ一番売れっ子一流モデルとして、写真入りで紹介されています。彼女の人氣の秘密は、実情を無視して外觀のよさだけに精をだしているファッション界の盲点をついた。云々肥満女性、肉体女性万才、万才、万才！誰です、ファンで三唱しないのは。（滋賀・赤畑修造）

早速に名乗りをあげてくれまし

たね。頼もしいわ。大阪の加藤さん、東京の加藤さん、横浜のマゾさん、南区の犬さん、大阪の山本さん、五匹もいると、迷うわ。私一人で五匹も飼育できないもの。残念だわ。一度、試験してみなくてはいいわね。ほんとうに犬として生活奉仕できるかを見たいためにね。五匹とも、どんな恥かしめ責めを受けても、いいのね。喜んで受けられるわね。私と、一ときでも一緒になれた人は、次の要領です。からね。先ず部屋に入って全裸になるのよ。そして首輪、手錠、足錠をはめる。腰にさりを巻きつけて、その端を柱に結ぶ。その後、風呂場の流しで身体を清めさすのよ。そして奴隷の誓いをやらせるの。誓いがすむと奴隷としての資格をあげるわ。そして、それから手錠、足錠、首輪にくさりをつけたまま、私に奉仕するのよ。直接、神水を口で受け、舌で後始末をし、部屋ではいつも私の汚れたストッキングを口の中に入れられて、その上から汚れたパンティを首にかけたまま、サルグツワをはめて生活するの。五匹の犬は、察するところ皆、小柄らしいわね。色の白い、かわいい犬かもしれないね。小さい可愛

「緊縛女体美のシリーズ」

大手札印画紙焼付

大手札三枚一組 略号△もえ▽

両手吊りに悶える女体

大手札三枚一組 略号△もゆ▽

強烈なる甘いムチの洗礼

大手札三枚一組 略号△もよ▽

ムチに狂い哭く美貌の夫人

大手札三枚一組 略号△もす▽

半吊りでムチ打つ

大手札三枚一組 略号△もせ▽

逆エビの味に感泣する

大手札三枚一組 略号△もれ▽

関谷夫人の女体陳列

大手札三枚一組 略号△もる▽

尻立ての鞭達ポーズ

大手札三枚一組 略号△もて▽

片足吊り挙げて喘ぐ

大手札三枚一組 略号△もな▽

私をムチ打って頂戴ネ

大手札三枚一組 略号△もね▽

脂ぎった女体を縛る

大手札三枚一組 略号△もむ▽

鞭は柔肌に炸裂する

大手札三枚一組 略号△もう▽

滑車吊りに甘い鞭

大手札三枚一組 略号△もき▽

両手万才吊りに鞭打ち

大手札三枚一組 略号△もこ▽

狂う鞭に哀切表情の夫人

大手札三枚一組 略号△もみ▽

浴後の剃玉子縛り

大手札三枚一組 略号△はゆ▽

投げだす白い緊縛裸身

大手札三枚一組 略号△はよ▽

待望の脚挙げ緊縛姿態

大手札三枚一組 略号△はて▽

二つ折り女体エビ責め

大手札三枚一組 略号△はお▽

柱の前に緊縛された全裸

大手札三枚一組 略号△はの▽

神妙なブレイ寸前の女身

大手札三枚一組 略号△はひ▽

いいものぶら下げているかも知れないと思うのよ。間違ったら御免ね。私は犬の顔の上にお尻をのせて、犬の口、鼻へ押しつけてこすってやるのよ。小柄な犬だったらムチは使わないわ。犬が希望するときは別だけど、手で叩くか足で蹴ってやるわ。身体にきずがつかない程度にしてあげる。色々と恥かしめるのが私の趣味だから、恥かしい目に合わせてあげる。きつと忠実な奴隷に飼育されるでしょうね。(一)御神水を喜んで直接、口でお受けし、後始末をさせていただきます。(二)私自身、全裸で御奉仕申します。(三)首輪、手錠、足錠を使っただきます。(四)如何なる形に縛られても、かまいません。思いのままに責めて下さいませ。(五)女王様のパンティは洗わせていただきます。(六)私の顔を腰かけにして下さい。お願いします。(七)男性自身の嚴重な検査をしていただき、病気の無いことを女王様の目で確かめて下さい。(八)その他のかなる恥かしめ、責め、仕置を受けても、女王様の指示通り従います。この八条は奴隷の誓いよ。早く犬や馬になって私にいいじめてもらいたいでしょう。決心がついたら名乗りを上げてよ。待っているわ。

わ。

(東区の女王より)

初めてお便りします。私は、これといった友達もなく、毎日の生活がうんざりしてしまっています。どちらかというとコドクの方です。ある日、書店で貴誌を読み、なかなかおもしろい本だと、感じました。今、ここにも数冊あります。今は余り買えない。さて私は友達がいないので、ここにペンを走らせています。そして、誰かが読んでくれることを願っています。そう、私は、みなさんからの手紙がほしいのです。どんな人でもいいから、私に便りを下さい。

(京都・ヨネカワ)

大正末から昭和初期及び、戦後の風俗文献誌を、懐の許せる範囲内で探しておりますが、忌避に触れたり散逸し、消滅してゆくべき運命にあるのか、或は秘蔵されて陽の目を見ないのか、なかなか入手が困難な時、斎藤夜居氏の「性風俗資料入門」「探奇考料」「珍書探訪記」等は、読物としても書誌的に見ても、今までこういう記事が少なかつたせいか、大変面白い。今後資料物、文献ものに偏することなく、広範囲に亘って掲

開股縛りに喜悅する女

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八はわ

全裸の女体立ち縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八はふ

黒縄は白肌を酷に彩る

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八はほ

悦虐に身もだえる美女

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八はあ

菱縄は白肌をくびる

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八はう

柱に立縛りでさらす

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八はさ

卓上の開股羞恥責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八はめ

無防備の女体を開陳

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八はし

遠山静子夫人の立縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八はも

若妻の魅力を発散する

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八はむ

後手縛り全裸身の魅力

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八はめ

悶える猿轡の裸身

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八はも

ムチ打ちの陶酔境

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八はさ

両手吊りで痛める女身

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
大島 照代 略号 八はし

後手縛りの竹棒責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
大島 照代 略号 八はす

強烈開股強制縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
大島 照代 略号 八はせ

両手吊りであえぐ女体

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
大島 照代 略号 八はゆ

竹棒強烈開股責め

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
大島 照代 略号 八はた

厳しき緊縛の正坐責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
大島 照代 略号 八はち

責めの魔手に屈伏する

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
大島 照代 略号 八はつ

竹棒の胸絞め責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
大島 照代 略号 八はて

竹棒開股胸絞め縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
大島 照代 略号 八はと

載下されば、読む雑誌としての面目躍如のことと存じます。奇巧も発行以来二十数年、通巻二百数十号を数えたことは、風俗誌としては稀有な事柄と思われまますので、ダイジェストでもいいから歴史がわかるようなものを別冊形式で出せば、読者にとっては有難いと思われまますか？

(東京・中西昌夫)

本年十月号より愛読の三十二才の会社員です。書店で本誌を手にして以来、すっかり魅せられてしまい、毎号発売を楽しみに待っています。とりわけ「花と蛇」には特に、身も心も参ってしまいました。早速に前篇、続篇、合併の増刊を手にしたく申し込み、自分の手元に四日目に送られてきたときには全く早くついたことを心から感謝しています。四百数十頁を、むさぼるように読みました。全く感動の数日でした。しかし残念ながら四十二年以降が読めなくて残念でなりません。できましたら、増刊をお願いいたします。毎号の中で辻村隆氏のカメラハントも楽しみの一つです。特に十一月号はすばらしく拝見いたしました。また、テレビのイレブンPMで、生

の声も聞きました。「徳川女刑罰史」の紹介もあり、辻村氏の陰の努力により、すばらしい映画であると感じています。ぜひとも見たい映画の一つです。今後の活躍を期待しています。小生、まだまだこれから女性の緊縛を勉強しなければと思っています。「花と蛇」の、川田や鬼源のような調教が、一日も早くできればと考えています。誌上で紹介の夫婦プレイが早く楽しめることを願っているのです。小生、先日始めて妻を手だけ縛って見たのですが、全くはじめてのこと故、どのようにして良いもののやらわからず、また妻もびっくりして失敗しましたが、次の日に縛る真似だけしたところ、素直になりこれにはこちらの方がビックリしました。これから本誌の分譲写真で勉強したいと思っています。これから先の人生に、新しい光がさしてくるようです。書店で本誌を手にしたことが、私の人生に幸せを教えてくださいました。今後とも、よろしく。本誌の発展に心から期待しています。

(鳥取県・泉健吉)

秋もいよいよ深まり、先輩諸兄姉におかれては、益々ご活躍のこ

最新撮影総天然色
カラー・プリント写真

両手吊りに悶える女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
大塚 啓子 略号八てき

後手裸身柱縛り

大手札四枚一組 略号一二〇〇円
大塚 啓子 略号八てか

縄目にあえぐ裸女

大手札四枚一組 略号一二〇〇円
大塚 啓子 略号八てく

豊麗な裸身をくびる縄目

大手札四枚一組 略号一二〇〇円
大塚 啓子 略号八てこ

後手高手小手縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
大塚 啓子 略号八てま

長襦袢の緊縛色模様

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦 ひとる 略号八てみ

緋の腰巻緊縛色模様

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦 ひとる 略号八てむ

猿ぐつわに呻く女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦 ひとる 略号八てめ

柱宙吊り強烈縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦 ひとる 略号八ても

ポリウムを縛りあげる

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦 ひとる 略号八てん

縄に苦悶する裸女を狙う

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦 ひとる 略号八てる

真紅の腰巻着用姿態

大手札二枚一組 略号八〇〇円
大塚 啓子 略号八うお

縄に悶える緊縛色模様

大手札二枚一組 略号八〇〇円
東浦・大塚 略号八うて

真紅の腰巻着用縛り

大手札四枚一組 略号一二〇〇円
大塚 啓子 略号八うこ

華麗なる緊縛裸身

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るむ

みだらな開股縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るの

責めに疲れた諦観

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るお

真紅の腰巻姿で緊縛

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るま

羞らしいの真正面縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るけ

若肌に喰い込む縄目

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るふ

高手小手後手縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るや

股間縛りの開股姿態

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
中河 恵子 略号八れよ

羞らしいの股間縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
中河 恵子 略号八れに

とと察せられます。さて小生、始めての寄稿なれば、何から書くべきか思案にくれたのですが、結局は小生の浣腸歴を書き、以って先輩諸兄のご批判を仰ぎたく存じます。小生は現在三十二才、家内と三つになる女児の三人住いず。小生の浣腸に対する意識のあらわれは、約六才ぐらいの時、押入れにいられた箱に入った十コぐらゐのイチジク浣腸を肛門に挿入したことを覚えています。しかし先端の孔をあけることを知らなかったため、それだけで終わってしまいました。小学校二年ぐらいの頃ゴムまり（テニス用のやわらかいもの）に孔をあけ、習字の筆をさしこみ、スポイトのような型にして、腸内や尿道に空気を送ったものです。そして、学校で新聞に、石けん水に油を混ぜたものを塗り他の紙に写す実験があり、ふと、その液をこのゴムマリに入れて浣腸したのが始まりでした。それからというものは、浣腸のとりこになつてしまひ、昔の自転車やバイクについている、ゴム球つきのホーンのゴム球の部分抜きとてきて、毎日のように水や石けん水でやったものです。中学二年の頃ガラス製の浣腸器、エネマシリン

ジの存在を知り、小づかいをためて薬局へ行ったのですが、どうしても買う勇気がなく、何回か引きあげてきたのですが、高一の時、遂にエネマシリンジを入手しました。オンリーワンとタイヨウの二種類でした。それをビニールの袋に入れて、縁の下にかくして使っていたのです。しかし、これにも飽きがきて、どうしても高圧浣腸をやってみたくなり、水道の栓にホースを利用して注入しました。急激だったため胃が圧迫され、むかつくほどでした。もうこうなったら、浣腸から抜け出すことはできません。二十三才の時、中垂炎にかかり、手術の当日、排尿が困難であることを看護婦に訴えると直ちに導尿をすると言いました。「少し痛いけれど、我慢してね」と看護婦は優しく言い、ガラスの器にピンセットが当りカチカチ言う中に、急に下腹部が楽になりました。次の日、大便が出たのだから腹に力が入らないと言ったら、別の看護婦が「浣腸してあげる」と言いました。「体を横にして」と言われるままに、約五十CCのグリセリンをガラス製の浣腸器で注入して「このまま我慢してね」と言つて、室を出て行きました。

双胎臨月蛙腹鮮烈写真

大手札六枚一組 略号二〇〇〇円
増田みゆき 略号八れや

双胎臨月腹強烈縛り

大手札六枚一組 略号二〇〇〇円
増田みゆき 略号八れゆ

臨月腹裸身の媚態

大手札六枚一組 略号二〇〇〇円
増田みゆき 略号八れえ

黒縄縛りの媚態

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
中河恵子 略号八れぬ

立縛りにあうの裸女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
木村洋子 略号八れね

開股された股間縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
木村洋子 略号八れの

豆絞りの猿ぐつわ縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
木村洋子 略号八れむ

柱宙縛りに喘ぐ刺青女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原清子 略号八やか

高手小手に悶える全裸

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原清子 略号八やき

緊縛に映える入墨の肌

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原清子 略号八やく

脱がされた緊縛刺青女体

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原清子 略号八やも

縄にのたうつ入墨裸身

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原清子 略号八やし

腰巻一つで縛られる刺青女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原清子 略号八やみ

女相撲迫力投業連続動作

大手札十二枚一組 略号五〇〇〇円
大塚・東浦 略号八なる

恵子の妊孕美観賞

大手札四枚一組 略号一〇〇〇円
中河恵子 略号八ぬめ

孕み若妻の差らい

大手札四枚一組 略号一〇〇〇円
中河恵子 略号八ぬね

八の字の開股責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しい

足枷強制開股責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しみ

全裸強烈逆エビ責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しけ

両手吊り足枷責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しこ

両腕逆手吊り責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しら

豊満なる臀部責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しれ

大の字縛りと足挙げ責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しわ

お申込みは大阪阿倍野局私書箱第14号箕田京二宛へ願います。

この看護婦が今の私の家内です。現在、バケツガートル? と、ガラス製シリンドラー、エネマシンリンジを使用しています。夏は水道栓の方が手っとり早いのですが、冬はそうは行きません。それから三号のネラトン管を使って導尿を行っています。度々やると傷がつくので、月に一度くらいです。洗腸には十号の大腸カテーテルを使っています。家内が、浣腸や導尿、それに腔洗滌に理解があるので、とても助かります。

(高井健一)

初めて通信欄に投稿します。二十八才の青年、大阪生れの大阪育ち、東京在住七年になります。奇クは十八、九の頃から手にしています。身長百六十四、体重六十キロ、胸囲八十九、日本男子平均体格の持ち主。小生が奇クファンの方々に自慢できるものが一つあります。小生のフンドシ・スタイルです。よく引きしまった体に、がっしりと廻したフンドシ姿は、まづ他の人々に負けないものと自負しています。さて、全国のSの女性の皆様、小生はM性の男子ですが、どなたか飼育して下さる方はいないでしょうか。ただし、小生

は犬でいえば闘犬の方です。よほどの飼育力のある人でないと、なつきません。そのかわり一度飼いなされると、主人様には、忠実な闘犬になるようです。過去に一度、経験があります。ご一報下さい。ただし条件があります。東京近在の方であること。秘密を守って下さる方であること。最後に一番大切なことです。ムチ打ちによる飼育だけは絶対いやです。恥ずかしめによる飼育が最大の希望。主人様の汚れたパンティを口に入れたり、小生の体の一部分を恥ずかしめたりされるのが希望です。

(東京・無田口一郎)

奇クファンの皆様、今日は。私は現在二十一才になる弱電メーカに勤めている一青年です。今年の三月に就職のため、大阪に出てきました。九州にいる頃は良きSMの理解者に囲まれて、ほんとうに良き日々でした。しかし大阪は堺にきて、まだ同好の士とは、一人も会っていません。古本屋で奇クを買って来ては、一人でこっそり楽しんでます。ぼくは自分自身SでもありMでもあると思っています。自分が一人の女性を縛って楽しむのは自分もそうされること

全裸後手柔肌縛り	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
乳房強烈膨隆責め	佐々木真弓	略号	四〇〇円
海老責めに苦悶する	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
全裸の緊縛全身晒し	佐々木真弓	略号	四〇〇円
煙草責めに喘ぐ女	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
緊縛麗姿に映えるライト	佐々木真弓	略号	三〇〇円
腎部強調後手縛り	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
羞恥に悶える全裸緊縛	佐々木真弓	略号	四〇〇円
ホステスの緊縛姿態	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
二つ折りで責める女体	佐々木真弓	略号	四〇〇円
大手札三枚一組	略号	四〇〇円	
脈打つ全裸の臨月腹	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
臨月腹の革紐股間縛り	中河恵子	略号	四〇〇円
猿轡の臨月妊婦腹縛り	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
卓上の股間縛り狂態	中河恵子	略号	四〇〇円
羞恥の足挙げ責め	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
悦虐責めの女体終着駅	長井葉津子	略号	四〇〇円
片足挙げる鞭打ち責め	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
柔肌に弾ける惨酷な答	関谷富佐子	略号	四〇〇円
あぐら縛りの女体鑑賞	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
対談用に縛られた女	佐近麻里子	略号	四〇〇円
左近麻里子	大手札三枚一組	略号	四〇〇円

(堺・宇田幸一)

大阪東区の女王様、十一月号で東京の青木様に呼びかけられ、青木様以外の者でも良いとのことですので、恐る恐る名乗りをあげさせて頂きます。小生、奇譚クラブを愛読して十余年になりますが、私のMは、夢と空想の世界にのみ存在していました。厚顔を省りみず、女王様の犬として名乗りをあげましたが、プレイの経験が全然ありません。女王様のきびしい調教に途中で逃げだすかも知れません。ただ手前勝手でございますが、くせのない犬を調教、飼育して女王様の思い通りの奴隷に仕立てあげるのも、楽しみなものだと推察申し上げます。幸いにも神戸に住んでいますので、お呼び出しがありましたら、喜んで参上させていただきます。女王様のお声がかかりますのを心に念じ筆をおきます。(神戸市・秋山一郎)

則子さん！ 貴女の七月号での告白、我が意を得たりの感です。今まで度々女性のMの方の投書を読みましたが、何か我々の世界とは無縁のものでした。しかし貴女が九州の直方にお住いとのこと、何か見近かに感じます。小生、四年間、学生生活を小倉で送りまし

た。同じ北九州に少しでも暮していた関係からか、親しみの情がわいてきます。貴女は狭い四帖半の何の飾りもない、ただあるのは六十Wの裸電球だけの部屋で、身につけるものは何もなく、後手でうずくまっている。今に襲ってくるであろう手錠、足枷、首枷などを望んだとはいえ、女らしいはずかしさからか、くちびるをかみしめ期待に胸をときめかせている則子は、もう数日間も、この部屋で厳しい責めを受けているのである。にも、かわらず、その豊かな乳房、すばらしく伸びた両足は、少しも若さを失っていない。則子の身体も心も、羞恥をおおいかくすものは何も残っていない。今はただ自分の選んだ道を、ただひたすら、まっしぐらに進んでゆく外はなかった。しかし、このような則子にも、奥深くかすかに光を放ちはじめた宝石のようなものを感じはじめたのである。小生、このような夢を、つい描きました。現実には、こんな素晴らしい生活ができたらと、思っている次第。

(佐藤二郎)

奇く愛読の女性の皆様、私は二十五才の自衛官です。それ故にS

Mの世界に入ってしまった私としては苦しい毎日です。でも、この世界を忘れることはできません。この苦しみから助けて下さる女性からののお便りを待っています。思い切り足を開いての流腸や急所責めなど、貴女の希望する責めをしたいと思っていますが、その反面女性からいじめてもらいたいと思っています。自分ではSが六、Mが四ぐらいと思っています。どうか女性の方、一人なやまず一度お便り下さい。

(愛知県・吉村 篤)

私は十一月号に、告白「ゴムに魅せられて」の拙文を掲載して頂くことができました。KK誌ファンになって早や二年、その間、ゴムファンの勇気ある発言に刺激を受けまして、私も何とか日頃、頭の中にモヤモヤしているゴムに対しての気持ちを、素直に告白してみたいと想っていました。そして、KK誌の末尾にある編集部という言葉として、自らの性癖や性向について、これだけはどうしても人に話したい、書いて残しておきたいという名言に誘われ、とうとうこの六月、ようやく脱稿したのですが、今度はなかなか投函の決

意がつかかねるまま、約一カ月過ぎてしまいました。掲載して頂ける頂けないは別にして、折角がんばって書き上げたのだからと、勇気を出して投函しました。ストンという音を聞いた瞬間、やはり郵送するのではなかったと後悔がはじまりました。というのも、現在チップケな業界ですが、新進の者として学歴、教養等のない私ですが、意見を求められる機会等ふえている今日、何か馬鹿なことをしたのではないかと、そのように自分で自分を責める日が続いたのです。が、KK誌の発売日が近づくにつれて、どうぞ掲載してくれていただきますようにと、何か祈るような期待する気持ちになった事は不思議な心理です。しかし、いつもの本屋さんで十月号を手にして目次を開いたが、掲載されていないので何かホッとすると同時に、ガッカリとしたことは、いかならないことでした。そして又、次の発売日が出て、もしかしたら……と、かすかな期待をもって十一月号の目次に目を通した瞬間、アッタ。まぎれもなく私の文がのっている。早速、家に持ちかえり一気に読み通した。何と美しい文に仕上げてくれているのか、全く私の書いて

次号(二月号)は十二月二十五日に発売いたします

いた支離滅裂の文章がキチンとな
って、しかも私の気持を素直に語
りあげてくれております。ほと
うに、ありがとうございました。
お蔭様にて、私の人生の上にこれ
で良かったと言う、何か安堵にも
似た時が持てました。ゴムファン
の皆様は、もうすでに実行に移し
ておられる方も多いと思いますが
ぜひ〇・二ミリの極く薄いゴム生
地で、ご自分の好みに合ったデザ
インや色で、身体にピッタリ合っ
たゴム衣を作って下さい。そして
ゴムのあの素晴らしい醍醐味を味わ
ってみては如何でしょうか。また
お互いにゴムについて語り合えれ
ば、どのように楽しくうれしいこ
とでしょう。できましたら、皆様
の読後感、またゴムに対するお話
し等、おきかせいただければ、こ
の上ない喜びです。

(神戸・弾 六夫)

女王様のお呼びかけ、うれしく
読ませていただきました。文面の
内容を読んだ私は、体がふるえ興
奮しました。奴隷にされ素裸にさ
れて、あらゆる恥かしめを受ける

ことを希望いたします。そして男
性自身にリングをはめこまれ、美
しい女王様のおみ足でふんずけて
いただきたいのです。私は女王様
のご命令には、ぜったい服従いた
します。もし女王様のたつてのご
命令でしたら私めの鼻に穴をあけ
金のリングをとりつけられましょ
うとも、奴隷である私には不満は
ございません。どうか女王様のお
ごいません。どうか女王様のお
下の奴隷に飼育して下さいませ。
文面も下手ですが、女王様にたい
しての忠誠心では、だれにも負け
ないつもりです。どうか女王様の
お気に召すかどうか、お試し下さ
い。
(大阪市旭区・奴隷犬)

美川芙美子様、十二月号でご元

気な近況を読ませて貰いました。
太った女性にあこがれる我々男性
にとっては、ほんとうに貴重な存
在のあなたです。今後ともご自愛
の上、益々大きなお腹について聞
かせて下さい。七月号にありまし
た尼崎の池尻満六様のおっしゃる
ように、SでもMでも豊満な中年
女性、特に四十才前後という豊か

な人生経験からくる豊麗さは、も
っと強調されてよいのではないで
しょうか。その後、池尻様のご意
見に同調される方がないのは残念
です。若い女性ばかりが女性では
ありません。中年以上の女性こそ
真の女性だと思います。その点で
四月号に載った福岡の久能守様の
投稿内容には敬服しております。
私にも、そういった傾向があるだ
けにショックで、今までペンをと
りませんでした。よくよくのご
決心だと思ひ、同好の者として賛
意を表明します。最近の奇ク誌は
ノーマルな面を少々強調しすぎる
のではないのでしょうか。真の「特
殊な風俗文献を研究する」という
態度でしたら、やはりこういった
少数派の意見も採り上げてほしい
ものです。それが十二月号に見ら
れる「花と蛇」の批判となってい
たのではないのでしょうか。

(埼玉県・安達宜孝)

年輩者の、それもHOMO関係
の通信が少ないように見うけられ
るのが淋しいように思います。年
輩者も年令に関係なく、それぞれ
の傾向に対する関心は、若い人と
変らないのではないのでしょうか。
かくいう私も、もはや五十路に近

い年代ですが、若い時に父を亡く
したせいか、父の年代に対する親
愛感が深いようです。年輩者の肥
満体の人で、明治、大正時代に深
い郷愁を感じておられる人、揮フ
ァンの人。旅行、ハイキング、釣
に趣味を持っておられる人で誠実
な方、末長くおつき合いたいと思
います。私は一六五センチ、五
五キロ。ひげは濃い方です。

(神奈川・佐藤生)

小生、貴誌を四年前より愛読し
ています。特に最近では従来のもの
と比べ充実してきたことは、とて
も良い傾向であると思ひよろこん
でおります。貴誌が口絵、グラビ
ヤ写真の廃止、挿絵の削減を断行
されたことに對し色々な意見が
ありますが私はこう思います。売
れない底辺の俗悪誌ほど先を競っ
て多くの口絵グラビヤ写真等を載
せ読者に対して、これでもかこれ
でもか主義をとり肝心の内容が薄
くなり通り一遍で味気のないもの
です。この意味でも貴誌が根本的
に内容を改め看板だけでなく積極
的立場へと転換されたことは読者
に一層潤いを与えてくれるものと
思ひ有難く思っています。これを
契機に大いに貴誌が躍進すること

☆編集後記☆

○発売は十一月だが、ナンバーは早くも新年号。だからと改ったわけでもないが、少し表紙の感じを変えてもらった。とり敢えず今年度一年はこれで通したいと思うが、如何。

○懸賞募集に応募されるのは歓迎するが、創作、告白に拘らず、どうせ投稿するのだから懸賞にしておこう式のものには苦笑せざるを得ない。とり立てて名文を求めるつもりはないのだが、懸賞応募と一般投稿とは、自ずと見方の変るの当然。掲載出来そうなものでも「懸賞」の明記があるがために眠っている原稿もあって、扱いをスタッフと相談中である。

○イメージ画の投稿も相次いで感謝しているのだが、ただ縛り絵でさえあればよいのだからう式のもの、ズバリそのものの羞恥責め図などが少くない。絵としての巧拙は、別にしても、何の意味もなく、かといってさしたるアイディアも感じとれぬ、全くの個人コレクション以外のものではない、と思われる労作には、なんとも複雑な気持ちにさせられる。

○自分はこの思いこつた、等の告白は大いにお寄せ戴きたいのであるが、中に指導テキストの積りで書かれたとしか思えないようなものもしばしばある。又、ただいたずらに「奇なるが故に真の人間性」なりとばかりに自己中心的な主張を繰り返してられるものもある。共に頭をかしげざるを得ない。

○今月は特に「徳川女刑罰史」観賞記がどつと寄せられた。事細かなストーリー再録の多い中から、数篇だけを選ばせてもらった。

も結構です。皆さまの平常抱かれていた夢を文章に托してお寄せ下さい。形式も敢えて問いません。但しすべて未発表のものでも自作に限ります。若し引用する部分がありましたら、必ず出処の明記をお願いします。採用原稿に対しては賞金十万円迄贈呈します。

△感想、論評、批判▽

本誌に掲載された内容についてでも結構ですし、又関連したもので結構です。とにかく本誌を読まれて感じられたことを忌憚なく皆さまのペンのためて下さい。採用篇には賞金二千円以上を贈呈いたします。

△(映画、雑誌)通信▽

映画、雑誌、演劇、新聞、週刊誌、或はその他見聞などで特に興味をお持ちになった事項の通信をお待ちします。出処は出来るだけ詳しく記載下されれば幸いです。採用篇には本誌三カ月贈呈致します。

◎尚、以上の採用篇に対する希望の方には、代理部分護品の中から御指定下されれば、贈呈いたします。

◎懸賞原稿募集

△体験、告白、手記▽

皆さまが自分で直接体験されたことや、自らの性癖や性向について訴えたいこと、或はこれだけは、どうしても人に話したい、書いて残しておきたいといった事柄を、どうか腹藏なくお寄せ下さい。皆さまの真実の叫びや思い出などの寄稿を心からお待ちしております。採用篇には賞金三千円以上贈呈いたします。

△創作、小説、物語▽

本誌の内容に適したものでしたら如何なる傾向のもので

☆本誌御購読の榮☆

予約に限り

一月分(1冊)三五〇円△送20円▽
三月分(3冊)一〇五〇円△送共▽
半年分(6冊)二一〇〇円△送共▽

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下さい。重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価 三五〇円

一月号

〔第二十三巻第一号〕
〔通刊第二四八号〕

昭和四十三年十二月二十日 印刷
昭和四十四年一月一日 発行

編集人 杉原虹児
発行人 北村俊夫
印刷人 村俊夫

郵便番号558 大阪市住吉郵便局私書函第四十一号

発行所 暁出版株式会社

△振替口座大阪四二七八三番▽
(昭和四十二年四月二〇日第三種郵便物認可)
(昭和四十二年四月二一日 国鉄大局特別取扱承認雑誌第二一〇号)

☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビア写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等にとり、青少年の健全なる育成に努める各条例に指定されたいが、本来成人向けとして編集いたしましたり、下す関係上、十八才未満の方には絶対販売し上げます。特にくれぐれもお願